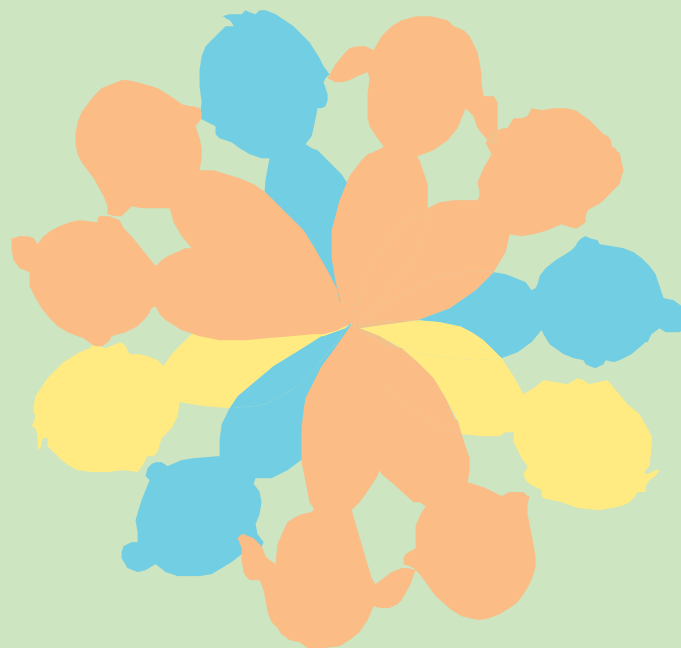


平成 21 年度文部科学省 大学教育推進プログラム
大学教育・学生支援推進事業

隣接学校園との連携を核とした 教育モデル

—多様な教育課題に対応できる教員養成を目指して—

平成 21 年度
報告書



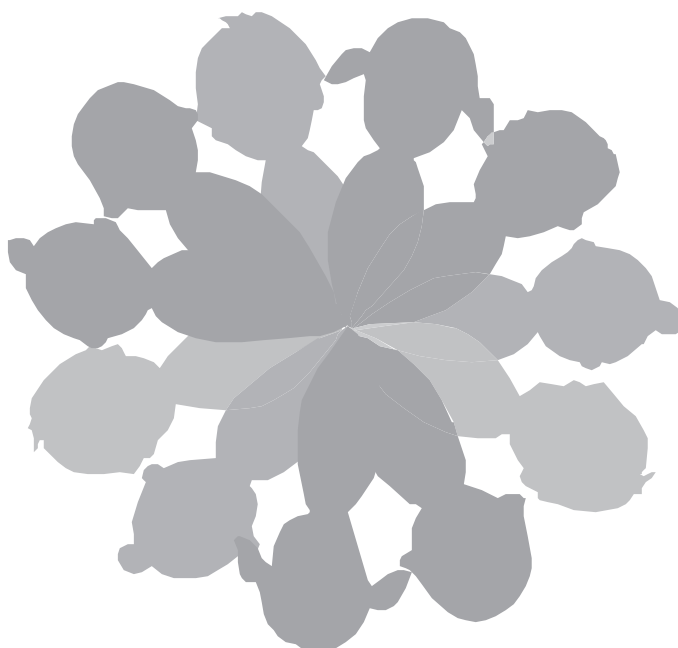
三重大学 教育学部

平成 21 年度文部科学省 大学教育推進プログラム
大学教育・学生支援推進事業

隣接学校園との連携を核とした 教育モデル

—多様な教育課題に対応できる教員養成を目指して—

平成 21 年度
報告書



三重大学 教育学部

はじめに

中央教育審議会より教職課程の質的水準の向上が答申された平成 18 年に、三重大学教育学部では実践的指導力向上のためのカリキュラム改革が急速に進みました。学生が学校現場と関わるのが 3 年生の教育実習からであった従来のカリキュラム構造に、1 年次より教育実地研究基礎という授業科目で学校現場や児童・生徒との関わりをもつ機会を設けることを提唱しました。さらに、2 年次以降も教科教育法等の授業科目で学校現場と関わる機会を取り入れることで、3、4 年生の教育実習を含めて教育実地研究 I から IV までの体系だったカリキュラム構造が策定されました。また、学生自身による体験活動記録の作成や、それを基にした討論を行うなど、省察的な活動を通して、質の高い学習の必要性を提唱し続けました。

カリキュラム改革と並行して（というよりも、それ以上に・・・）重視したのが、隣接学校園との連携です。本学に隣接する一身田中学校区の 5 校園を連携協力のもとに学生の教育実践力育成の場とすること、そして、大学が学校園における教育的諸問題を支援する役割となることは、最も実現可能であり、最も難しい課題でした。その平成 18 年度に、果敢にもその難題に挑戦し、現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代 GP）に採択されたことにより、平成 20 年度までの 3 年間で学校園との連携協力体制が構築されました。学校現場との関わりは教員養成を目的とする学部にとって欠かせないものであり、基本的なことでありながら、これまでにどの大学もなし得なかったことです。

このような流れは年を追うごとにさらに勢いが増し、年々大学に隣接する学校園との連携協力体制を拡大する必要性が高まってきました。幸いにも大学と隣接する学校区として橋北校区があることから、平成 21 年度当初からは連携を拡大し、橋北中学校区との連携活動を開始しました。学生が学校現場と関わりは、学校や地域の深い理解がなくてはなし得ませんが、連携の拡大は一身田中学校区との 3 年にわたる無理のない連携協力が基盤となって、新しく連携を開始した学校園とも自然に連携が進んでいきました。これらの連携を核として、平成 21 年度大学教育・学生支援推進事業 大学教育推進プログラムに応募したところ、幸いにして平成 23 年までの 3 年間の事業として採択されました。すべての連携校が自転車で 20 分ほどの範囲内にあり、通常の授業内にも行くことができるメリットがあります。11 学校園（2 中学校、6 小学校、3 幼稚園）と多様な校種に関わることができることも、学生にとっては貴重な体験となります。

現代 GP で連携校と関わった学生数は、年間に延べ 300 名で、大学教員は 24 名でした。これは学部教員の約 4 分の 1 であり、教科教育の教員のみならず、教科専門の教員も多数関わり、現場とのつながりを重視した教育改善を進めていることを示すものです。さらに、この報告書にも

ありますように、連携校の拡大とともに、本年度新しい事業のもとに連携校とかかわった学生は延べ 1000 名で教員数は 30 名と増加しました。2 月に開催した報告会には 200 名近い参加者があり、連携校の先生方をはじめ多数の学生や大学関係者が参加してくださいました。過去にも増して質の高い報告会が開催されたことを嬉しく思っております。

教員を目指す学生が、大学での学習と教育現場での体験を往還しながら実践力を高める活動は他大学の教員養成でも行われていますが、隣接する 11 もの学校園と連携体制を築き、この関係を継続している例は他にみあたりません。教員を目指して入学した学生が、教育に深い関心を持ち続けるためには、現場を見る機会を重ね、その延長として教育実習に入るシステムの構築と省察的な活動の推進が重要であると考えています。4 年間で教職に対して高い意識をもった学生を育てる基盤作りが着々と進んでいます。この報告書により本事業に対しまして一層のご理解をいただければ幸いです。

最後になりましたが、本報告書の作成にあたり、連携活動に関わっていただきました隣接校学校園、津市教育委員会、および教育学部の諸氏に御礼申し上げます。特に、過去 3 年間の現代 GP を支えていただいた皆様にこの場をお借りして感謝申し上げます。取組責任者であった上垣渉先生が率いた現代 GP の成果の“たすき”を引き継ぎ、さらなる発展のために微力ながら努力する所存です。今後とも、宜しくお願い申し上げます。

三重大学教育学部 大学教育推進プログラム取組責任者 後藤太一郎

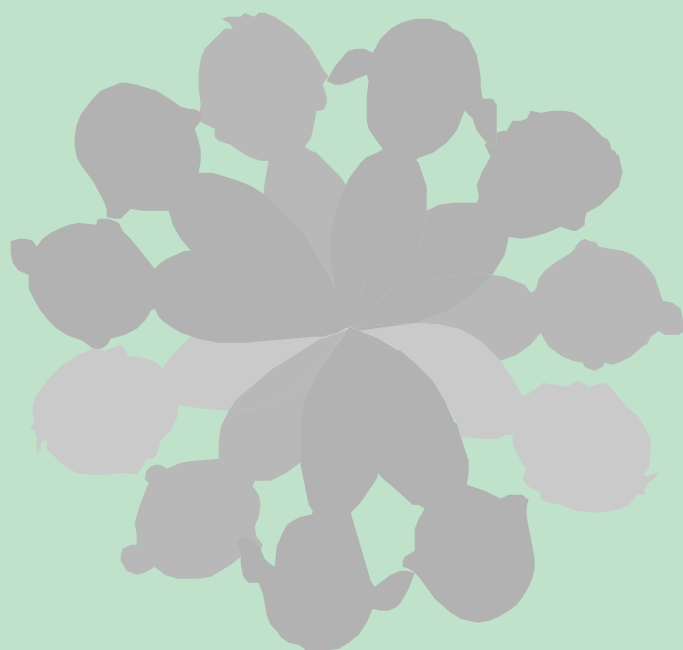
目 次

はじめに

I 取組の概要	1
II 平成21年度の取組	
活動一覧および活動日誌	11
1. 国語教育	23
2. 数学教育	29
3. 理科教育	33
4. 音楽教育	46
5. 保健体育教育	49
6. 家政科教育	115
7. 英語教育	117
8. 幼児教育	119
9. 教育実践センター	136
10. その他の取組	140
電子黒板の活用	
III 隣接学校園からみた連携活動	
1. 白塚幼稚園	147
2. 北立誠幼稚園	151
3. 南立誠幼稚園	155
4. 栗真小学校	158
5. 白塚小学校	162
6. 一身田小学校	164
7. 北立誠小学校	168
8. 南立誠小学校	170
9. 西が丘小学校	179
10. 一身田中学校	183
11. 橋北中学校	187
IV 成果報告会	
隣接学校園との連携に基づく教育フォーラム	191
V 資料	
1. 大学教育推進プログラム申請書	269
2. 採択理由	284
3. 平成21年度大学改革推進等補助金調書	285
4. 取組紹介パンフレット	288

あとがき

I 取組の概要



○取組の背景

教員養成では、生徒指導力や教科力は言うまでもなく、学校における様々な教育課題を、解決・改革する「課題探求能力」が求められている。このためには、学生が入学段階から卒業までの間に多様な多彩な学校現場を参観し、実践的な活動を企画・実践する経験を保証することが欠かせない。すでに述べたように、本学では教育実践力育成をコアとしたカリキュラム構造を策定しているが、この実施には学校現場と強固な連携を築くことは教員養成学部にとって必須事項となる。本学部では平成18年より現代GPの支援を受けて、隣接する一身田中学校区（1中学校、3小学校、1幼稚園）との連携を開始した。大学と近隣の学校園でありながら、学生教育を含めた連携が学部全体としての取り組みに至っていなかったが、GPに採択された事業であるという高い社会的評価も後押しし、これを契機に幼小中大の連携が飛躍的に進展した。これは連携協力校の活性化にもつながり、県内の学校園の中でも注目される中学校区になり、現在では学校現場に学生を受け入れてもらうだけではなく、児童・生徒が大学での活動に参加するなど、双方向の連携が成立している。

年度毎に人事異動がある教育現場にとって大学が安定した知の拠点となりつつあり、大学も中学校区のコミュニティとして機能している。これからの教員養成系においては、近隣に学生が関わることのできる学校現場があることがいかに重要であるかを教員一同が共通に認識し、実践的活動の場として連携協力関係を深めている。それらは、教員の協働数の変化からも読み取ることができる。

平成20年7月の中央教育審議会答申に基づく教育職員免許法施行規則改正にともない、「教職実践演習」の導入や教育実習の円滑な実施に努めることが急務となっている。現状では、教育実習は附属学校以外にも公立の協力校で実施されているが、特別練習授業に参観するものの実習校任せの教育実習である場合が多い。今後は、隣接校区の学校園との間で、連携協力体制をさらに拡大・強化し、大学と協力した綿密な指導体制に基づいた教育実習を実施することが課題となっている。本学部ではそれに先立ち、平成20年度に教職の到達目標としての「三重大学教員養成スタンダード」を策定した。ここにあげた学習項目は、学校現場における多様な体験的学習なしには達成し得ない。

● 教職課程の質的水準の向上

大学における組織的指導体制の整備（平成18年中教審答申）
教職課程の改善・充実を図るための5つの方策

- 教職実践演習の新設・必修化
- 教育実習の改善・充実
- 教職指導の充実
- 教員養成カリキュラム委員会の機能の充実・強化
- 教職課程に係わる事後評価機能や認定審査の充実

● 本学と隣接する一身田中学校区との連携

平成18年より現代GPの支援を受けて、学生教育を含めた幼小中大の連携の取り組みが学部全体として飛躍的に進展

● 実践的指導力育成をコアとしたカリキュラム構造を策定

学生の継続的な現場体験を通して、現場や地域の活性化にも寄与しつつ実践的指導力を育成

図1. 取組の背景.

○人材養成目的

本学部目標は「教育に関する学識と専門的素養を身につけるための幅広いカリキュラムを通じ、深い専門性と豊かな人間性を備えた教員および職業人を養成することによって、地域社会・国際社会の教育・文化の発展に貢献すること」である。教員養成学部における総合的な学識力ともいえるべき「全学齢期の発達理解と教科の専門性」を重視し、質の高い教員養成のため、小・中二校種の免許取得を卒業要件としている。

具体的には、『「感じる力」「考える力」「生きる力」とその基盤となる「コミュニケーション力」を、各学部専門領域の学識を通して育成する』という本学の教育目標を受け、初年次より教育に対する興味・関心を深め、自らの教職観を培うことを目的とした「教員養成コア科目群」を中心としたカリキュラムを設けている（図2）。そして、コア科目群、教職専門科目、教科教育・教科専門科目が有機的連携を図る構造となっている。

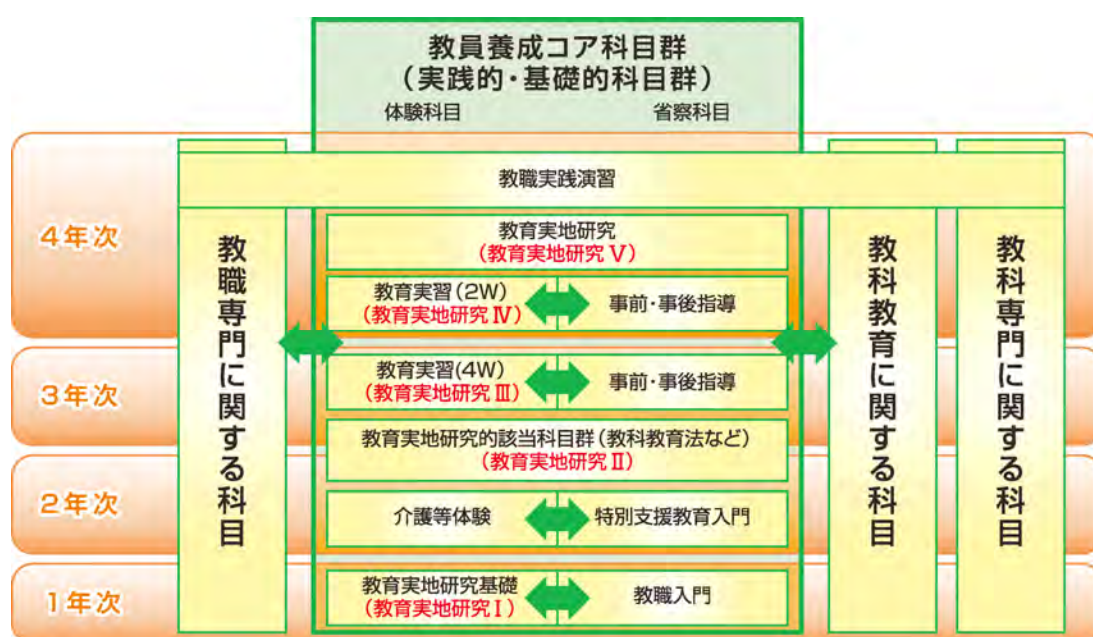


図2. カリキュラム構造図.

平成19年度より「教育実地研究基礎（1年次）」を必修科目とし、2・3年次での教科教育法や教科教材研究の授業においても実践的な内容を取り入れ、さらに4年次においては、「教育実地研究」を選択科目として履修することができるようにし、これらに加えて、既存の教育実習を含め、「教育実地研究Ⅰ-Ⅴ」と位置づけ、体系的で幅広い学びを保証している。

本学部のアドミッションポリシーでは、「地域の教育力を強めることに貢献し、専門分野を通して地域に根ざした知の支援活動を進める」という学部の理念・目的のもとに、「様々な教育問題、教育環境の変化に適切に対応できる創造性と問題解決能力を培い、力強くリーダーシップの取れる人材をPBL（問題／課題解決型学習）教育を通じて養成する」と掲げている。このカリキュラムの独自性は、学生自身が学舎の隣接地区のコミュニティにおける継続的な現場体験を通して、現場や地域の活性化にも寄与しつつ実践的指導力を培う教育モデルが基盤となっている点にもある。

○大学と隣接する中学校区

本取組は、「教職実践演習」の内容を網羅するものであり、教職担当教員だけではなく、教科専門・教科教育の教員同士の協働によって大学教員も専門分野を活かしつつ、学校現場と深く関わりながら学生指導にあたる点ができる点で先駆的な取り組みといえる。今後は、大学に隣接する学校園との連携活動をカリキュラムの中核

とし、最大限に活用できるモデルを構築することが課題である。そのためには、協力校との連携を量的にも質的にも拡大することが必要であるが、幸いにも本学にはもう一つ隣接する学校区として橋北中学校区（1 中学校、3 小学校、2 幼稚園）があり、本年度より連携も進んでいる。学生にとって、通常の授業の中や授業の空いている時間に学校現場に行くためには、大学の近くに協力連携校があることが欠かせない。この取り組みの連携先となる各学校園までの距離は、大学から 5 km ほど（自転車で 20 分）の範囲にあることから、大学教員にとっても移動が容易であるため、設定している教育実践関連科目の実施を円滑に行うことができる。つまり、教科教育・教科専門・教職担当のすべての教員が関わることができる理想的な教育モデルといえる。

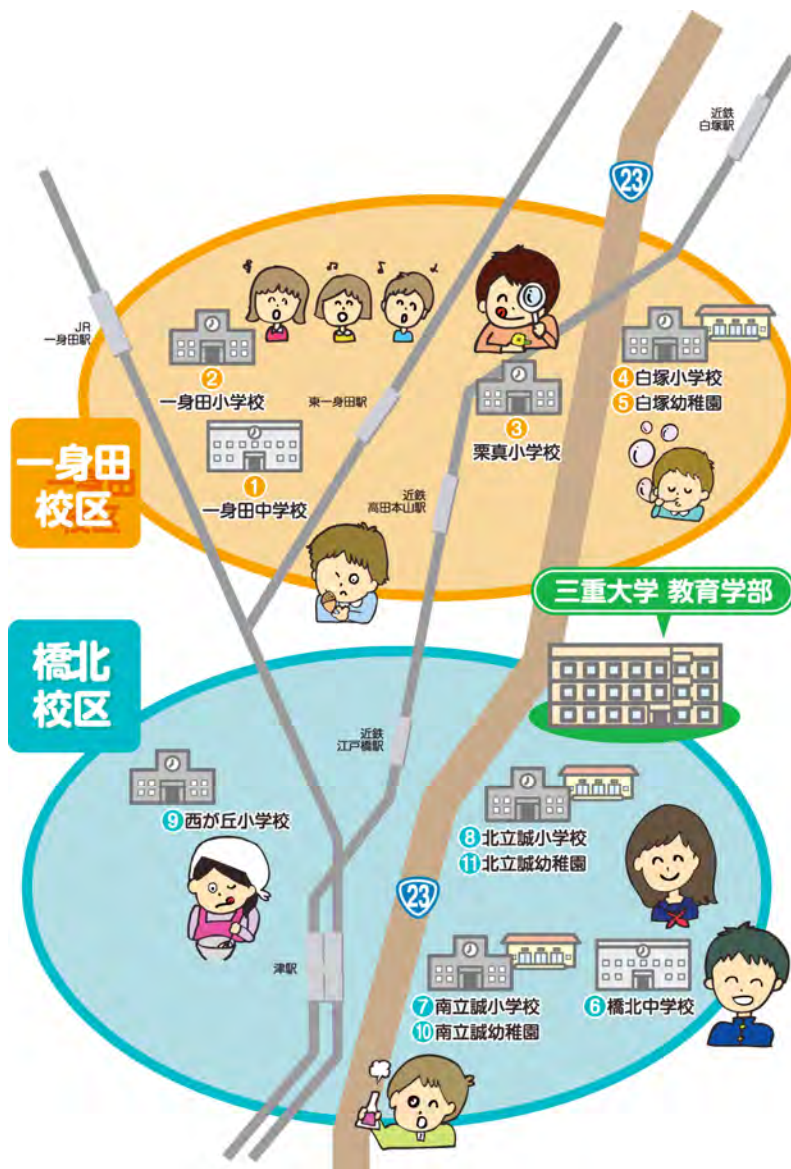


図3. 隣接する2学校区.

○取組の目的

本取組は、隣接学校区との連携協力による実践的な教育活動を整備し、これらを教育課程の中で最大限に活用する教育モデルを構築しようとするもので、多様な教育活動と複数の校種の学校現場での活動を経験し、子どもの発達段階を教育現場で知ること、学生に幅広く高い教育意識をもつことのできる教員養成を行うものである。そして、これを支えるために、本学と同一地区に並立する2つの学校区（2中学校、6小学校、3幼稚園）および教育委員会との連携協力を深化させ、教育現場における諸問題に対して学生教育を伴った支援活動や、子どもを中心とした地域連携を進めるプログラムを作成して授業の中に位置づける。また、学生にとって教育実践意識を高める最大の授業科目である教育実習についても連携校との協力体制を構築することで、円滑な運営を図ることを目指す。

- 隣接校区の学校園（2中学校、6小学校、3幼稚園）との間で、連携協力体制をさらに拡大・強化し、これらの学校園における学生の現場体験を核とした教育モデルを構築
- 体系的で幅広い学びを通して課題探究能力を培い、多様な教育課題に対応できる教員を養成（学士力）

- ①教育現場の諸問題に対する学生教育を伴った支援活動
- ②授業の中で子どもを中心とした地域連携を進めるプログラムを作成
- ③連携校との協力体制による教育実習の実施

図4. 取組の目的.

当該学校園は、現代の教育課題（小規模校、多文化教育、人権教育、学力問題等）を抱えていることから、協働を通して学生だけではなく現場教員の課題探究能力も高まることが期待される。教職に就く前にこのような質の異なる多様な教育現場での課題や問題解決方法について十分に考える機会をもつことは、幅広い学びの保証につながり、どのような教育現場にも対応できる教職としての学士力保証を達成することができる。また、学校現場で必要な実務などに触れることにより、連携の必要性や校務分掌などの教員としてのトータルな教育実践力を身につけることを大きな目的としている。さらに、地域の学校や子どもへの支援を行うことで、地域における教育活動の活性化を促進させ、それを学生の幅広い学びにつなげようとするものである。

教育実地研究関連科目は学年進行にしたがい、教育実地研究I-Vまで設定しているが、連携する学校園での実践的な取組は、1年次における「教育実地研究基礎」から始まる。2・3年次では教科教育法をはじめとする教科専門科目の中に、通常の授業で学んだことを学校で実践する機会を含める。また、4年次では、卒業研究や卒業ゼミナールと関連して、より実践的な教育実地研究の指導にあたる。将来的には平成21年度以降の入学生を対象とした4年次の「教職実践演習」にも対応させる。

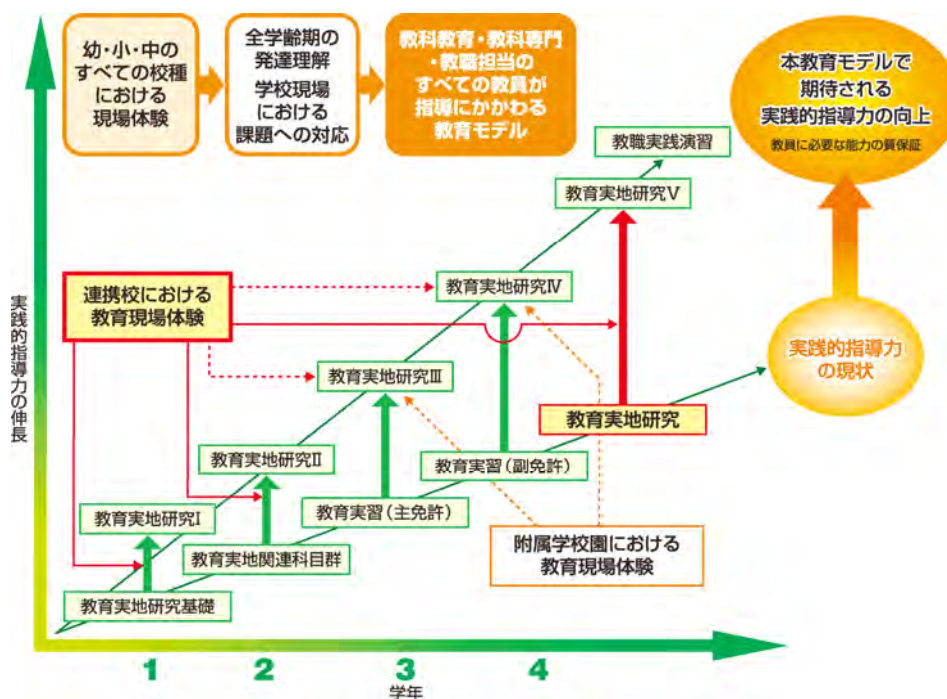


図5. 教育実践プラン.

○取組の具体的内容

実施にあたっては、本学部にて平成 17 年度から設置している一身田校区連携推進委員会を母体とした地域連携推進委員会が中心となり、各学校園と教育委員会からなる地域連携連絡協議会を設置して、以下の取り組みを進めていく。取組みは大きく以下の 4 つに分けられる。①学校園の教育的支援を主とする学生の実地研究、②学校園の教員からの指導が主となる学生の実地研究、③主に大学教員による学校園に対する教育支援活動、および④大学を活用した地域活動である。具体的内容については以下の通りである。なお、平成 20 年度に行われた校舎の耐震改修に伴い、地域連携室や PBL 教室を設置するなど、地域・社会連携を推進するためのハード面での整備を進めた。

① 学生が各学校園で教育的支援を行う実地研究

- A. 各学校園における授業支援を通じた学校現場体験：学校園において必要となる授業支援を整理し、これらを 1 年次における教育実地研究基礎、および 2・3 年次における教材研究や教科教育法の授業の中で取り上げて、学生が学校現場で指導を受けながら授業支援に関わる。
- B. 各学校園の学校活動における支援：学校行事や PTA 活動に関して、1 年次における教育実地研究基礎、および 2・3 年次における教材研究や教科教育法の授業の中で取り上げて、学生が補助または企画や実践に関わる。
- C. 臨床的な卒業研究の拡大：自らの教材開発や授業実践分析を課題とする卒業研究を学生が行う場合、連携学校園は協力校となる。また、特別な支援を必要とする児童に対する活動の開発と実践も行い、臨床的な研究としてまとめる。

② 学校園の教員からの指導が主となる学生の実地研究

- A. 教育実習協力校としての連携：大学と協働した教育実習を連携学校園に引き受けてもらうことで、実践的指導力を高めることを目指すとともに、特練授業の日程を実習生に周知することで授業参観することを可能とする。
- B. 連携校の教員による授業：4 年次の教育実地研究の授業の中で、生徒指導に関する教員の取組を実体験に基づいて紹介してもらう。

③ 主に大学教員による学校園に対する教育支援活動

- A. 教科力アップ研究会：各教科で、現場教員が不得手とする内容について研修を進める。これは連携校からも強く要望されていることであり、ここに学生が関わることで、学校現場に必要な教科力や課題解決の方法を知る機会とする。
- B. 公開授業・公開研究会への支援：大学教員が現職教員の授業づくりに支援を行うとともに、4 年次の教育実地研究の受講生も参加することで、授業づくりのプロセスを学ぶ機会とする。
- C. 各学校園の特色ある授業づくりの支援：各学校園で特色となる授業づくりの支援を大学として行い、これについて、2・3 年次における教材研究や教科教育法の中で学生が関わることで、新たな視点から授業を立案するポイントを学ぶ機会とする。

④ 大学を活用した地域活動

- A. 大学を活用した選択授業：中学校の選択授業などで、夏期休暇に大学を利用した体験的活動を行い、学生が補助に関わることで、生徒が大学に来て学ぶことの教育的意義を学ぶ機会とする。例えば、理科などでは SPP（サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト）に相当するものを行い、教育の中で大学を活用する意識を育てる。

B. 子どもを対象とした地域活動：児童が大学に来て体験する「フレンドシップ事業」の実施や、三重大を会場として開催している「青少年のための科学の祭典」でのブース出展など、学生が大学を活用した教育活動の企画・運営を行う。

以上の活動について学生、連携学校教員、および大学教員との関わりを示すと図6のようになる。連携学校教員の支援を受けながら、より実践的な学生指導体制を組むことになる。

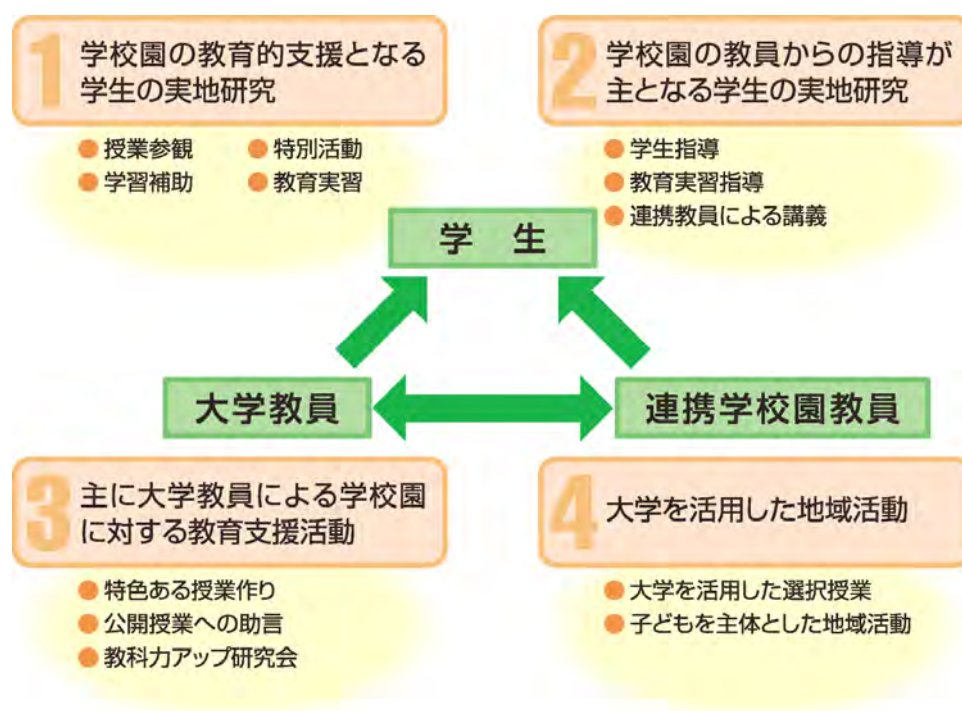


図6. 取組の具体的な内容。

○取組の達成目標

取組の達成目標として、①教育現場での教育実地活動時間の増大、②教員になるための資質に関する学生の意識向上、および③学校現場からの本学部生に対する信頼度の向上を掲げる。隣接校区の学校園での実質的な活動は学生一人当たり年間10時間程度であったが、全学部生が年間に幼小中で20時間行うことを目標とする。そして、学校現場理解と教員になるための意識向上についてアンケート調査するとともに、教員になるための力量についての自己評価を指標とし、卒業時には十分に身についたと評価することを目指す。また、本学部生の教員になるための意識や態度について連携協力校の教員による評価を実施し、これを指標に全教員からの信頼度が100%になることを目指すとともに、さらに改善点を明確にする。これにより、隣接校区の学校園と一層密接な連携が進み、附属学校と隣接校区の学校園のみで教育実習の実施が可能となることが期待される。このことは、学生にとっても様々な教育実地活動を通して学校と関わる中で、指導案作成だけに追われるだけの教育実習から脱却し、授業構想に取り組むことができる体制作りにつながる。また、卒業生に対する事業所評価についても引き続き実施し、本取組の成果の指標とする。

- **教育現場での教育実地活動時間の増大**
 - 初年次から全学年にわたって、年間20日で20時間以上（教育実習を除く）
- **教員になるための資質に関する学生の意識向上**
 - 「学びの履歴」を軸とした教職支援
- **本学部生に対する学校現場からの信頼度の向上**
 - 連携協力校の全教員からの信頼度100％達成
- **附属学校と隣接校区の学校園のみで教育実習体制の構築**
 - 大学教員と実習校の教員が連携して指導

図7. 取組の達成目標.

○実施体制

実施にあたっては、三重大学教育学部内に一身田校区連携推進委員会を母体とした常設の「地域連携推進委員会」を設置し、この委員会を中核として事業を推進する。

この委員会は学部内の教務委員会、FD委員会、カリキュラム改革委員会、および教育実習実施委員会とも意見調整をしながら事業内容の検討を行う。また、大学内の高等教育創造開発センターとも連携しながら、他学部も含めた学内の教育実習の支援体制や、地域連携活動について意見交換する。連携協力校からの地域連携担当者、津市教育委員会の教育研究支援課内の担当者、および地域連携推進委員会委員を構成員とする「地域連携推進協議会」を立ち上げ、内容や実施方法等は連携連絡協議会における協議に基づいて決定し、活動の実施は大学教員を中心として行う。

平成20年度における本学部の耐震改修工事に伴い、地域連携室を3室設けた。このうちの1室は地域連携のための事務室とし、活動を集積できるよう準備は整っている。

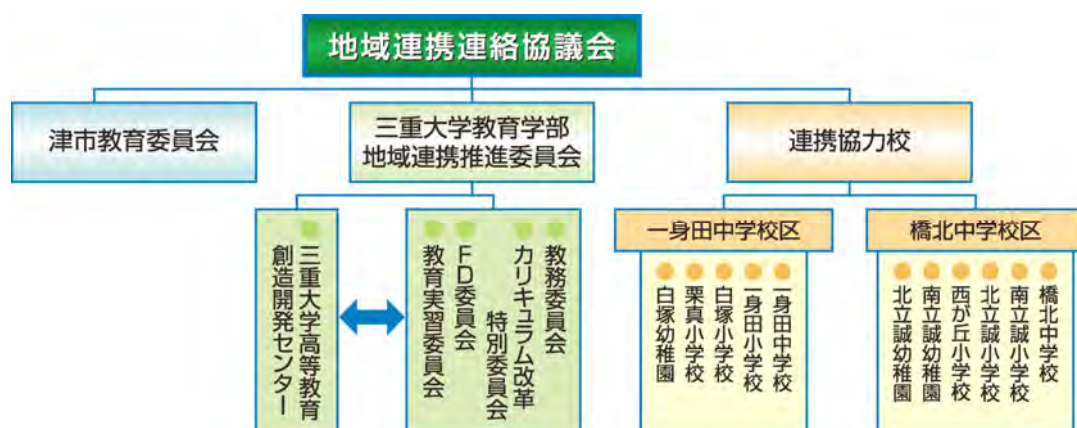


図8. 取組の実施体制.

○全体計画

本補助事業の全体の目的は、教員養成における総合的な実践的指導力を育成するための実地研究の改善を図るものである。特に、本学部教育の目的である「教育に関する学識と専門的素養を身につけるための幅広いカリキュラムを通じ、深い専門性と豊かな人間性を備えた教員養成」に資するため、全学齢期の発達理解と教科の専門性を視野に入れた「小・中二校種の免許取得」という卒業要件のさらなる質的充実を展望している。

本学部では、初年次教育として入学段階から学校現場での授業参観や課外活動の補助などを含めた実地研究基礎に参加し、徐々に授業や様々な学年・学校行事の補助、そして授業実践へと実践への参与形態を深化させるという順次性を重視した体系的な教育課程となっているが、教育実践力としての「教職実践演習」の授業内容および方法の整備、大学と協力の綿密な指導体制に基づいた「教育実習」の実施、および多様な教育問題に対応できる力量を育成することが急務となっている。本学部が教育現場と一層強固な連携を築き、協働することにより、これらの現実的・現代的な課題を解決することが可能である。

継続的な実地研究の実施や学修時間の確保、また安全面の確保を考慮すると、教育現場に行くためには、大学の近くに協力連携校があることが欠かせない。本取組の連携先となる各学校園までの距離は、大学から5kmほど（自転車で20分）の範囲にあることから、大学教員や現場の教職員にとっても移動が容易であるため、設定している教育実践関連科目の実施を円滑に行うことができる。つまり、本取組の最大の特徴は、教科教育・教科専門・教職担当のすべての教員が関わることができる理想的なフィールドで教育モデルを構築することである。これらの取組について、学生によるポスターセッションや教員と学生が語る会など対話型のFD活動を通して質的向上を図る。

平成22年度より、教育学部の学生全員による連携先のフィールドでの実地研究の実現のために、平成21年度は学部における取組の充実・発展を図り、本取組を全学的取組として拡充することにより、本学の教育目標に標榜している「感じる力」「考える力」「生きる力」とその基盤となる「コミュニケーション力」に対応した教員養成機能の強化を図ることが本事業の目的である。これらの4つの力に関する自己評価をeポートフォリオに蓄積し、学生自身がフィードバックするシステムを開発し、平成22年度より実施する予定である。また、個別のファイルを閲覧できるようなポートフォリオの活用もしており、これらは、学部内に設けた地域連携室に保管されている。

現在、GPA導入の準備を進めており、ポートフォリオと併せて評価体制を整備する。取組の評価については、教員の自己評価項目および外部評価項目を整備し、成果と問題点を明確にすることで取組の改善を図る。

○平成21年度の計画

本補助事業の本年度の目的は、上記の目的を達成するために隣接校区の学校園との各種連携活動を実施する基盤を整備し、学生が教育現場で活動する時間を増加させる。また、新しい教具・教材を導入した授業づくり（例えば、電子黒板、ラート、理科実験 ICT 等）を大学教員が提案・指導し、学生と連携学校園の教員が協働することで、連携学校園にとって現代的な特色のある授業を発信し、授業開発の意識を高める。さらに、連携学校園の教育活動の中で大学の施設を活用した活動を企画し、これに学生が関わることで、学校園における学外での活動の在り方を学ぶ機会を提供する。したがって大学教員は、学生の指導だけではなく、現場の教員との協働を通して、自らの授業改善を行うことに


なる。

今年度は、本事業のコーディネート・ファシリテーターの役割を担う非常勤事務員を配置し、学生が常時ポートフォリオを閲覧し、省察できる学習環境を保证するために地域連携室の整備に着手する。また、これまでの外部評価とカリキュラムポリシーとの照合・点検を行う。




21年度の活動

- 21年度は4月から開始
 - 91の連携活動
 - 30名の大学教員が関与
 - 20の授業科目と関連
- 学生の実地活動
 - 授業参観
 - 学習補助
 - 特別活動
- 大学教員による教育支援
 - 教員研修
 - 出前授業
- 大学を活用した活動
 - 学校行事
 - 選択授業

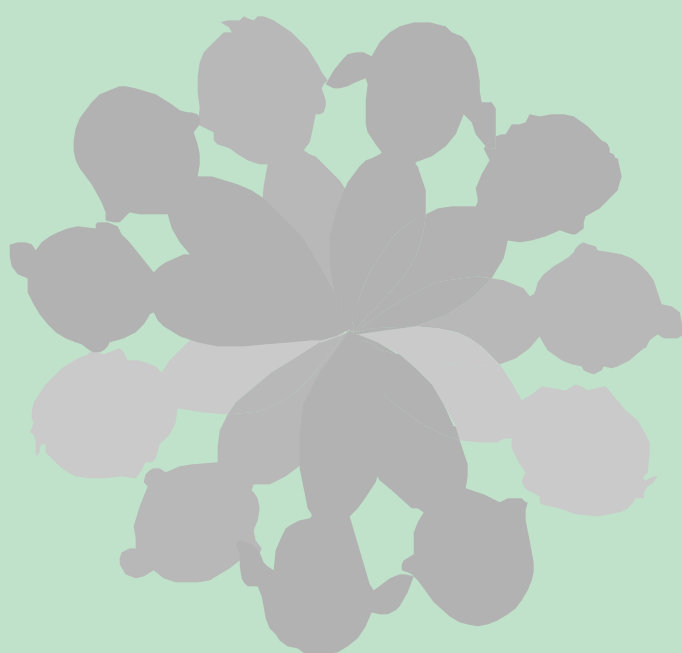


地域連携室の充実

- 教育学部1号館2階
 - 地域連携室A
- 資料作成、授業記録用機器
 - 大型プリンタ
 - 貸出し用ビデオカメラ
 - DVD複製機
- 授業ICT機器
 - 電子黒板
- 連携担当事務
 - 連携校と大学の連絡
 - 資料作成や機器使用の支援



Ⅱ 平成21年度の取組



活動一覧および活動日誌

平成 21 年度に行われた活動を連携校ごとに分けて一覧にしたものを次ページにあげる。各連携校との間での活動計画をたて、それをまとめたものである。また、それに続き、コース別の活動日誌を掲載した。各コースでの取組とそれに関わった学生数等を容易に示すものである。

学生に関わった活動は約 120 であり、学生 1 名当たりが連携校に行った時間の総数が 780 時間であったことから、一人当たりが連携校に行った時間は 6.5 時間ほどとなる。関わった学生は延べで 1000 名ほどであるが、平均して一人当たり 5 回以上は連携校に行っているために 200 名ほどの学生が関わっていると見積もられる。

各コースの活動報告については、活動日誌の後に掲載してある。

2009年度・連携教育活動

	担当教員	連携校	学年・クラス	連携校担当教員	活動名	活動内容	関連授業	学生数	実施日
1	弓場徹 森川孝太郎 高瀬瑛子 兼重直文 根津知佳子	一身田中学校	全学年	西本和史	コラボ音楽祭	大学講堂を利用した合唱コンクール	声楽ゼミナール他	30名	10月16日
2	根津知佳子	一身田中学校	全クラス	西本和史	合唱支援	4年目の今年は、大学院生がチャーターとなり、自主的な運営が行われた。		10名	9月～11月
3	根津知佳子	一身田中学校	1年生	西本和史	実践公開発表会における授業補助	音楽専科の教諭2名と授業内の重唱するなど、新しい授業スタイルの構築に学生も参画した。	音楽科教育特論演習Ⅱ	2名	9月～12月
4	中西正治	一身田中学校	全学年	青木利斉	数学授業アシスタント		数学教育法	29	週に1回
5	荻原彰 平賀伸夫	一身田中学校	1年生 2年生 全クラス	中川克己 寺本之人 米村清香	理科実験指導	1,2年生の理科授業支援	理科教育法	26名	5月25日～ 7月10日
6	後藤太一郎 磯部由香	一身田中学校	2年生全クラス	中川克己	解剖・調理	2年生理科	教育実地研究(一部学生) 食物学特論演習Ⅱ	家政7名 消費3名 理科10名	11月2,4,6,18日
7	後藤太一郎	一身田中学校	2年生希望者	中川克己 林敬一郎	科学の祭典への出展				11月
8	後藤太一郎 新居淳二 牧原義一 伊藤信成 平山天輔	一身田中学校	3年生10名	中川克己 林敬一郎	理科特別講座	5つの実験グループに分かれて理科実験を行う		物理3名 7名	8月4日
9	後藤洋子	一身田中学校	保健体育科教員	清長隆司	ラート運動実技研修会	テーマは、「ラート運動のチェックポイントと応用～3年生の授業で何を教えるか～」で、単元における内容構成の理解を深める実技研修。講師は檜波貴子氏(東京芸術大学)。	体操	3名	7月27日
10	後藤洋子 岡野昇	一身田中学校	保健体育科教員	清長隆司	教科研修会(保健体育科学 習指導案検討会)	11月12日の授業公開研究会に向けたラート運動の学習指導案検討。	体操 保健体育学ゼミナール	0名 1名 0名 2名 3名	5月28日 8月24日 9月29日 10月22日 11月6日
11	永田成文	一身田中学校			トレーディングゲーム	一身田中1年学年全体での貿易ゲームの支援	社会総合演習	12名	7月8日
12	後藤洋子 岡野昇	一身田中学校	保健体育科教員	清長隆司	公開授業研究会	第2学年4組保健体育科授業研究会および研究協議。単元は「体づくり運動(ラート運動)」。研究協議のテーマは「中学校保健体育科授業にラート運動を導入することの意義—中学校体育カリキュラムにおける体づくり運動のあり方めぐって」。講師は長谷川聖修氏(筑波大学)。なお、公開授業の前に世界ラート選手権入賞者2名による公開演技を全校生徒を対象に開催。三重県中学校保健体育研究会共催。	体操 保健体育学ゼミナール	14名	11月12日
13	岡野昇	一身田中学校	全教員	笠原哲	教育実践発表会	パネルディスカッションにパネリストとして参加。テーマは「未来に夢や希望を持ち、郷土を愛する子どもを育てる」。		0名	11月18日
14	後藤洋子 岡野昇	一身田中学校	保健体育科教員	清長隆司	教育実践発表会	第2学年5組・第3学年1組保健体育科公開授業。単元は「体づくり運動(ラート運動)」。	体操 保健体育学ゼミナール	0名	11月18日

2009年度・連携教育活動

15	山根栄次	一身中学校	保健体育科教員4名	寺本之人	キャリア教育支援	起業家教育	保健体育学ゼミナール		10月19日
16	岡野昇 後藤洋子	一身中学校	保健体育科教員4名	保健体育科教員4名	教科研修会(学習指導案検討会)	11月12日の授業公開研究会に向けたラート運動の学習指導案検討。	保健体育学ゼミナール 体操	1～3名	5月28日8月24日 9月29日10月22日 11月6日
17	後藤洋子 岡野昇	一身中学校	2年4組	保健体育科教員4名	授業公開研究会	授業参観および授業研究会	保健体育学ゼミナール	8名	11月12日
18	中西正治	一身小学校		大口亜耶	教育アシスタント		教育実地研究基礎	10名	週に1回
19	牧原義一	一身小学校	4年生	樋口早苗	4年生学級活動	磁石を使ったおもしろ実験			7月2日
20	岡野昇	一身小学校	5年担任	加藤真由子	学年研修会(運動会ダンス指導)	運動会における表現運動の振付けを提示。学生が振付けを考え、ビデオと紙媒体にて提示し、実際に振付けを実施。	保健体育学ゼミナール	1名	8月4日
21	岡野昇	一身小学校	全教員	川本伸也	校内研修会(講演)	7月31日打合せ(大学にて。教員3名、研究員1名、岡野)。内容は、「学び合い」とは何か。	保健体育学ゼミナール	4名	8月4日
22	岡野昇 山本俊彦	一身小学校	6年担任	齊藤隆彦	学年研修会(体育科学習指導案検討会)	第6学年4組体育科学習指導案の検討。三重県小学校体育研究会共催。	保健体育学ゼミナール 体育教材研究演習	2名 10名	8月4日 10月27日
23	岡野昇 山本俊彦	一身小学校	6年担任	齊藤隆彦	学年研修会(体育科授業研究会)	第6学年4組体育科授業研究会および研究協議。単元は「ボール運動(コーン型)」。三重県小学校体育研究会共催。	体育教材研究演習	6名	11月17日
24	岡野昇	一身小学校	全教員	川本伸也	校内研修会(国語科授業研究会)	第2学年3組国語科授業研究会および研究協議。単元は「せいひのび」。「学び合い」に関する研究協議。		0名	11月25日
25	岡野昇	一身小学校	全教員	川本伸也	校内研修会(国語科授業研究会)	第1学年1組国語科授業研究会および研究協議。単元は「ずつつと、ずつつとだいたきたよ」。「学び合い」に関する研究協議。	保健体育学ゼミナール	1名	12月2日
26	岡野昇	一身小学校	全教員	川本伸也	校内研修会(社会科授業研究会)	第4学年1組社会科授業研究会および研究協議。単元は「高田だん調査隊」。学び合いに関する研究協議。津市教育研究会中ブロック社会科部会共催。	保健体育学ゼミナール	3名	2月2日
27	岡野昇 山本俊彦	一身小学校	2年・4組	今鷹佐貴子 川口恵子	PTA学級活動	体ほぐしの運動を中心とした親子活動	体育教材研究演習	7名	2月9日
28	平山大輔	一身小学校	4年生	片山有梨世 川合敬子	4年生学級活動	野外での自然観察。校庭および高田本山専修寺境内での樹木の果実の観察。植物の生きていくための仕組みを学ぶ活動。		1名	10月9日・23日
29	荻原彰	一身小学校	5年生	永合本幸	5年生学級活動				10月23日
30	林朝子 別府直苗 養川恵理子	一身小学校	4～6年生	富田幸代 秋澤摩耶 シルビアデボラ 藤ノ原マリノバベル	「多文化クラブ」でのクラブ活動支援	世界を知らうクラブ		13名	月に1回 5月～2月 (年8回)
31	磯部由香	一身小学校	2年生	川口恵子	さつまいもの蒸しパン作り	調理実習補助	食物学特論・食物学特論 演習(監)	10名	11月17・18・19日
32	永田成文	栗真小学校			大学院生による授業実践M2	中国の概要や経済格差について栗真小学校5～6年生向けに2H実践(中国の留学生	社会科学特論演習	大学院生10名	6月12日
33	中西正治	栗真小学校		吉田隆子	教育アシスタント	M2)	教育実地研究基礎	7名	週に1回
34	磯部由香	栗真小学校	6年生1クラス	日下瑠子	弁当作り		食物学特論・食物学特論 演習(監)	3名	12月11日
35	根津知佳子	栗真小学校	6年生	日下瑠子	6年生連合音楽祭	教育アシスタント・教育実地研究基礎・クラブの学生が協力して支援を行った。	学生による自主的活動	6名	9月～11月

2009年度・連携教育活動

36	根津知佳子	栗真小学校	全学年	日下瑠子	6年生を送る会における演奏	学部学生・留学生・大学教員が栗真小学校教諭と競演した。	栗真小学		3名	2月25日
37	磯部由香	栗真小学校	1,2年生	紀平みどり 川辺健治	さつまいもの蒸しパン作り	調理実習補助	教育実地研究(一部学生)	5名	11月4日	
38	磯部由香	栗真小学校	6年生1クラス	日下瑠子	弁当作り	調理実習補助		3名	12月11日	
39	下村勉	栗真小学校	3年生	岡山均	総合的な学習「パソコンによる名刺(名札)づくり」	児童がパソコンを用いて写真入りの名刺(名札)を作成する。大学生がその支援を行う。	教育工学		1名	1月21日
40	中西正治	白塚小学校		永井幸良	教育アシスタント		教育実地研究基礎		7名	週に1回
41	中西智子	白塚小学校		高須昌子 田中秀幸	なかよし学級	リズム運動・リズム奏				1月15日
42	河崎道夫	白塚幼稚園		浅田美知子 足立深雪	夏祭りへの参加	暗闇部屋の製作・探検の実施	教育実地研究基礎	11名		6月に3回 7月4日
43	滝口圭子	白塚幼稚園	未就園児と保護者	浅田美知子 足立深雪	びよんちゃんクラブの企画実施	未就園児とその保護者を対象とする保育支援	教育実地研究	幼児教育 コース 4年生5名		毎週火曜日 09年4月～10年2月
44	河崎道夫	白塚幼稚園	全クラス	浅田 美知子 足立 深幸 山出 佳澄	生きもの環境づくりの実践研究	畑作り イモリ4匹・カエルの卵・メダカ・アゲハ蝶の幼虫持参する	教育実地研究	7名		4/9・16・21・23・28・30 5/7・26・28
45	岡野 昇	白塚幼稚園	全園児	浅田美知子	PTA園活動	体ほぐしの運動を中心とした親子活動	総合演習	5名		6月13日
46	根津知佳子	白塚幼稚園	全クラス	浅田美知子	敬老会における演奏支援	人間発達科学課程4年生と音楽科学生の協同学習を行った。	音楽療法概説・演習	11名		10月
47	根津知佳子	白塚幼稚園	全クラス	浅田美知子	「うさぎのうーちゃんのうた」のアレンジ	継続的な園児との交流を基盤としてアレンジに取り組んだ。	音楽療法概説・演習	1名		2月
48	根津知佳子	白塚幼稚園	全クラス	浅田美知子	うさぎのうーちゃんの誕生会			2名		3月4日
49	磯部由香	白塚幼稚園	保護者	浅田美知子	朝食レシピ集の作成および講演会	食育講演会および調理実習				2月26日
50	後藤太一郎	橘北中学校	1-2年希望者	中尾幸一郎	土曜補習授業		理科ゼミナール	17名		6月に4日間 11月-2月
51	富樫健二 弓場徹	橘北中学校	全学年	保健体育科教員	生徒の健康度評価に対する支援		卒業研究、健康管理学	9名		8月4日 9月3・4・7・8日
52	森川孝太郎 高瀬英子 兼重直文 根津知佳子	橘北中学校	全学年	墨香里	コロボ音楽祭	音楽祭に向けて、授業外の日程を調節し、30名の学生が自主的に練習を行った。	声楽ゼミナール他	30名		10月19日
53	兼重直文 根津知佳子	橘北中学校	全学年	墨香里	コロボ音楽祭	インフルエンザのため、コロボ音楽祭は延期となったが、演奏の準備のため、審査員補助として参加し、コメントを配布した。	音楽科特別研究・音楽科教育特論演習Ⅱ	2名		10月26日
54	磯部由香	橘北中学校	2年生	田中かおり	調理実習	調理実習補助	教育実地研究 (一部学生) 食物学特論演習Ⅱ 体操 保健体育学ゼミナール	2名		11月20日
55	後藤洋子 岡野 昇	橘北中学校	保健体育科教員	上島久明	ラート運動実技研修会	ラートの概要説明および基礎実技。講師は後藤洋子氏(三重大学)。		1名		12月24日
56	永田成文	北立誠小学校	5年		日本(北立誠小6年36名)とオーストラリア(Ooogee public school5年30名)の小学校的ビデオ会議運営	日本とオーストラリアの文化(言語、祭り、衣服、食事、住居、学校生活)をお互いにプレゼンテーションし質問し合う。(小学校の英語活動と異文化理解学習の合体)	社会教材研究	24名		7月5日
57	平島円	北立誠小学校	5年	中野久美 西村学	食に関する学習の模擬授業	食に関するテーマにより6つのグループに分け、それぞれの発表を小学生に対して行う	小学校専門家庭C	48名		7月13日
58	中西良文	北立誠小学校		中林哲博	わくわくコミュニケーションクラブ	月約2回、土曜日の午前中にコミュニケーション力育成活動				

2009年度・連携教育活動

59	荒尾浩子	北立誠小学校	5年2クラス 6年1クラス	中野久美 出口明	英語活動	英語によるコミュニケーション	英語科教育特講 I	15名 15名	11月19日 11月26日
60	後藤太一郎 新居淳二 牧原義一 伊藤信成	南立誠小学校	4年	福島チヨ子 田中徹	理科体験授業	物理：磁石を使った実験 化学：結晶の実験 生物：ザリガニの観察 地学：太陽の観察		8名	4月12日
61	根津知佳子	南立誠小学校	2年	松本靖子 若林俊子	音楽 楽器演奏	ハンドベルとトーンチャイムの演奏とワーク セッション形式の活動を行った。	音楽教育ゼミナール	4名	12月17日
62	岡野昇	南立誠小学校	教員	駒田秀樹	校内研修会(体育実技)	・仲間づくりのゲーム ・運動会前の体力づくりや徒競走の走るこつなど ・運動会での表現活動	保健体育学ゼミナール	3名	7月31日
63	牧原義一	南立誠小学校	教員(16名)	駒田秀樹	理科(教職員研修会)	豆電球や電池、磁石を使ったおもちゃ作り			7月24日
64	橋本博孝	南立誠小学校	教員	駒田秀樹	国語(教職員研修会)	つながりを大切にした授業づくり			7月23日 9月10日
65	橋本博孝	南立誠小学校	教員	駒田秀樹	国語(授業参観・検討会)				10月26日
66	岡野 昇	南立誠小学校	全教員	駒田秀樹	教職員研修会 (体育実技)	・仲間づくりのゲーム ・運動会前の体力づくりや徒競走の走るこつなど ・運動会での表現活動	保健体育学ゼミナール	3名	7月31日
67	岡野 昇	南立誠小学校	3年	駒田秀樹 慶田悦子	PTA学年活動	体ほぐしの運動を中心とした親子活動	保健体育学ゼミナール	6名	10月6日
68	平山大輔	南立誠小学校	1年	萩恵子 田中由美子	生活 あそぼうかざろう	植物を利用した遊びや工作の制作活動に 向けた木の美の観察と採集。		3名	10月27日
69	荻原彰	南立誠小学校	5年	石川昭子 若林秀幸	伊勢湾の生物	県の事業「みえのうみ」と共同で伊勢湾の 生物について授業			2学期
70	平島円	南立誠小学校	6年	小柴文香	家庭の実習 学童保育参加児童に対する 運動支援	調理実習の支援	調理科学	6名	11/26・12/3
71	富樫健二	南立誠小学校	4-6年	廣田尚美	運動支援		保健体育コース4年	2名	8月6日
72	荻原彰	南立誠小学校	6年	山本朝香 東出賢一	理科 地層	実習の入った授業			2学期末
73	富樫健二	南立誠小学校	全学年	廣田 尚美	児童の喘息・アレルギー・身 体活動量に関する実態調査			10名	12月7・8・9・14・15・ 16日
74	荻原彰 平賀伸夫 後藤太一郎	西が丘小学校	5年	保護者	5年生学年活動	おもしろ理科実験	理科教育法	26名	12月2日
75	荒尾浩子	西が丘小学校	5年生4クラス	藤田しおり	Let's enjoy communication	これまでに学習したスキルを大學生に使う ことでコミュニケーションをとるモチベー ションをあげる	総合演習	15名	10月30日
76	平島円	西が丘小学校	6年生2クラス	中川弘子	お弁当作り	お弁当のおかずを作るポイント	食物学特論演習II	1名(授業に 関係ないもの を含めると計4名)	11/9・11/13 11/27・11/30
77	磯部由香	西が丘小学校	3年生4クラス	岡本恵子 小山史巳	豆腐作り	総合学習における大豆の学習の一環	教育実地研究(一部学生)	10名	11月9、19、30日
78	牧原義一	西が丘小学校	3年生4クラス	小山史巳	磁石や豆電球を使ったおも しろ実験	磁石を使ったおもしろ実験		3名	2月26日
79	桂直美 根津知佳子	西が丘小学校	5年	山路淳子	日本音楽に関する授業実践	現職大学院生として日本音楽の実践をめぐり、 新たな視座の授業を組み立て実践 した。これらを修士論文にまとめた。	課題研究III	1名	2009年4月 ～2010年2月
80	滝口圭子	北立誠幼稚園	未就園児と保護者	小菅なぎさ	たんぽぽ会の企画実施	未就園児とその保護者を対象とする保育 支援		幼児教育 コース 4年生2名 3年生8名	10/19・11/2・11/16・ 11/26・12/7・12/16・ 1/13・1/20・2/1

2009年度・連携教育活動

81	魚住 明生	北立誠幼稚園	年少・年長	小菅なぎさ 堀内由香里 岡山まゆみ	ジェラシックパークで遊ぼう	簡単なロボットの製作とそれを用いた遊び		10名	11月10日 12月2日
82	魚住 明生	北立誠幼稚園	年少・年長	小菅なぎさ 堀内由香里 岡山まゆみ	吹き矢で遊ぼう	紙を用いた吹き矢の製作とそれを用いた遊び		9名	2月中旬実施予定
83	林朝子	北立誠幼稚園	年少・年長	小菅なぎさ 堀内由香里 岡山まゆみ	国際交流				11月2日 2月3日
84	林朝子	北立誠幼稚園	年少・年長	小菅なぎさ 堀内由香里 岡山まゆみ	書道	墨と筆で書いてみよう！		28～30名	11月5日 1月28日
85	岡野 昇	南立誠幼稚園	全教員	丹羽立子 森 朋子	公開保育実践研究会	公開保育、研究協議および講話と実技。 津市グループ別公開保育実践研究会共催。	体育教材研究演習	1名	1月21日
86	後藤太一郎	南立誠幼稚園	4歳児	丹羽立子 森 朋子	生きものを調べよう ザリガニ	ザリガニの学習		1名	7月17日
87	平山大輔	南立誠幼稚園	4歳児・5歳児	丹羽立子 森 朋子	きのみをさがそう	大学構内での木の実の観察と遠足		4名	10月15日
88	雷 健二	橋北中学校 南立誠小学校 北立誠小学校 西が丘小学校	各学校養護教諭		養護教諭の研究活動に関する支援			0	7月13日 8月21日
89	岡野 昇	南立誠幼稚園 北立誠幼稚園 白塚幼稚園	全教員	丹羽立子 森 朋子	合同園内研修会 (講和と実技)	主としてモノとのかかわりから生まれる運動遊びの講義と実技	保健体育学ゼミナール	4名 6名	10月7日 10月21日
90	岡野 昇 山本俊彦	南立誠幼稚園 北立誠幼稚園 白塚幼稚園	全教員	丹羽立子 森 朋子	合同園内研修会	運動遊びの教材づくり	体育教材研究演習	10名	12月15日
91	雷 健二	南立誠小学校	3-6年		学童児童に対する運動指導、健康教育		卒業研究	2名	9月7日 (～11月30日)
92	雷 健二	南立誠小学校	3-6年		学童保育児童の体力測定		卒業研究	5名	9月1日・2日 12月1日・2日
93	雷 健二	橋北中学校 南立誠小学校 北立誠小学校 西が丘小学校	各学校養護教諭		保健室における情報の視覚化に関する研修				1月6日

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
日付	活動名	連携校	学年・クラス	連携校の担当教員	実施内容	参加大学教員	参加学生数	参加学生の所属と学年	学生が学校現場にいた時間	学生の役割	大学における該当授業科目名	備考
(国語教育)												
7月23日	国語(教職員研修会)	南立誠小学校		駒田 秀樹	6.教員研修	橋本博孝						
9月10日	国語(教職員研修会)	南立誠小学校		駒田 秀樹	6.教員研修	橋本博孝						
10月26日	国語(授業参観・検討会)	南立誠小学校		駒田 秀樹	2.授業研究	橋本博孝						
5月-2月	世界を知ろうクラブ	一身田小学校	4-6年	富田先生 シルビア先生 デボラ先生	1.学習支援	林朝子 別府直苗 袁川恵理子	13	日本語教育 コース1年	8	1.参観 2.補助	人間発達実 地研究Ⅴ	
11月5日	墨と筆でかいてみよう!	北立誠幼稚園	年少 年長		1.学習支援 5.出前授業	林朝子	30	全コース	4	2.補助	書道Ⅲ	
1月28日	墨と筆でかいてみよう!	北立誠幼稚園	年少 年長		1.学習支援 5.出前授業	林朝子	30	全コース	4	2.補助	書道Ⅲ	
(社会科教育)												
10月19日	起業家教育	一身田中学校	1学年	寺本教諭	1.学習支援	山根栄次						
(数学教育)												
4月-3月	授業アシスタント	一身田中学校	全学年	青木利斉	1.学習支援	中西正治	29	情報3年4年 数学3年	10	2.補助	数学科教育 法	毎週1回
4月-3月	授業アシスタント	一身田小学校		大口亜耶	1.学習支援	中西正治	10	数学1年 情報1年 学校教育1年	20	2.補助	教育実地研 究基礎	毎週1回
4月-3月	授業アシスタント	栗真小学校		吉田隆子	1.学習支援	中西正治	7	数学1年	20	2.補助	教育実地研 究基礎	毎週1回
4月-3月	授業アシスタント	白塚小学校		永井幸良	1.学習支援	中西正治	7	数学1年2年	20	2.補助	教育実地研 究基礎	毎週1回
5月28日	授業アシスタント 打ち合せ	一身田小学校		大口亜耶	7.その他	中西正治	10	数学1年 情報1年 学校教育1年	1	4.その他	教育実地研 究基礎	
5月22日	授業アシスタント 打ち合せ	栗真小学校		吉田隆子	7.その他	中西正治	7	数学1年	1	4.その他	教育実地研 究基礎	
5月21日	授業アシスタント 打ち合せ	白塚小学校		永井幸良	7.その他	中西正治	7	数学1年2年	1	4.その他	教育実地研 究基礎	
7月7日	授業アシスタント 視察	一身田中学校	全学年	青木	1.学習支援	中西正治	5	情報3年4年 数学3年	1	2.補助	数学科教育 法	
7月3日	授業アシスタント 視察	一身田小学校		大口亜耶	1.学習支援	中西正治	2	数学1年 情報1年 学校教育1年	1	2.補助	教育実地研 究基礎	
7月7日	授業アシスタント 視察	一身田小学校		大口亜耶	1.学習支援	中西正治	3	数学1年 情報1年 学校教育1年	1	2.補助	教育実地研 究基礎	
7月16日	授業アシスタント 視察	栗真小学校		吉田隆子	1.学習支援	中西正治	4	数学1年	1	2.補助	教育実地研 究基礎	
6月17日	授業アシスタント 視察	白塚小学校		永井幸良	1.学習支援	中西正治	5	数学1年2年	1	2.補助	教育実地研 究基礎	
(理科教育)												
7月2日	磁石を使ったおもしろ実験	一身田小学校	4年4組	樋口早苗	3.学校行事	牧原義一				3.授業		学級活動の一環として出 前授業を行った。参加 者:児童35名、保護者30 名
7月24日	理科(教職員研修会)	南立誠小学校	教職員	駒田秀樹	6.教員研修	牧原義一						参加教職員数16名
2月26日	磁石を使ったおもしろ実験	西が丘小学校	3年 4クラス	小山史己	5.出前授業	牧原義一	3	理科教育講 座3年	6	3.授業		3年4クラスの実験授業を 担当。2限目の授業時 に、ケーブルテレビZTV の取材を受けた。
11月2日	解剖・調理	一身田中学校	2年 全クラス	中川克己	1.学習支援 2.授業研究	後藤太一郎 磯部由香	20	家政、消費4 年 家政大学 院1年、理科4 年	3	2.補助		中日新聞(11月19日)
11月4日	解剖・調理	一身田中学校	2年 全クラス	中川克己	1.学習支援 2.授業研究	後藤太一郎 磯部由香	20	家政、消費4 年 家政大学 院1年、理科4 年	3	2.補助		
11月6日	解剖・調理	一身田中学校	2年 全クラス	中川克己	1.学習支援 2.授業研究	後藤太一郎 磯部由香	20	家政、消費4 年 家政大学 院1年、理科4 年	3	2.補助		
11月18日	解剖・調理	一身田中学校	2年 全クラス	中川克己	1.学習支援 2.授業研究	後藤太一郎 磯部由香	20	家政、消費4 年 家政大学 院1年、理科4 年	3	2.補助		
11月28日	科学の祭典への 出展	一身田中学校	2年 希望者	中川克己 林敬一郎	4.課外活動	後藤太一郎						
11月29日	科学の祭典への 出展	一身田中学校	2年 希望者	中川克己 林敬一郎	4.課外活動	後藤太一郎						
8月4日	理科特別講座	一身田中学校	3年生 10名	中川克己 林敬一郎	1.学習支援 2.授業研究 4.課外活動 5.出前授業	後藤太一郎 新居淳二 伊藤信成	7	理科4年	6	3.授業		地学(7/22)部分日食観 察
4月12日	理科体験授業	南立誠小学校	4年	福島チヨ子 田中徹	3.学校行事 4.課外活動 5.出前授業	後藤太一郎 新居淳二 牧原義一 伊藤信成	8	理科4年		2.補助		物理: 磁石を使った実 験 化学: 結晶の実験 生物: ゼリガニの観察 地学: 望遠鏡での観察
12月2日	5年生学年活動	西が丘小学校	5年	保護者	1.学習支援 2.授業研究 3.学校行事 5.出前授業	荻原彰 平賀伸夫 後藤太一郎	26	理科3年	3	1.参観 2.補助 3.授業 4.その他	理科教育法	

7月17日	生きものを調べよう ザリガニ	南立誠幼稚園	4歳児	丹羽立子 森 朋子	1.学習支援 2.授業研究 3.学校行事 4.課外活動 5.出前授業	後藤太一郎	1	幼児教育4年	2	2.補助		
6月 11月-2月	土曜補習授業	橋北中学校	1-2年 希望者	中野仁	1.学習支援	後藤太一郎	17	理科1年	15	1.参観 2.補助 3.授業 4.その他	理科ゼミナール	
10月15日	大学キャンパスを活用した自然観察授業「きのみをさがそう」	南立誠幼稚園	4歳児 5歳児	丹羽立子 森 朋子	3.学校行事 4.課外活動	平山大輔 後藤太一郎 河崎道夫	4	理科教育4年・2人、3年1人、幼児教育4年1人	2.5	2.補助		大学キャンパスでの木の実の観察・採集と遠足
10月9日	4年生学級活動「木の実のふし」	一身田小学校	4年3組	片山有梨世	5.出前授業	平山大輔	1	理科教育4年	2	2.補助		野外での自然観察
10月23日	4年生学級活動「木の実のふし」	一身田小学校	4年2組	川合敬子	5.出前授業	平山大輔	1	理科教育4年	2	2.補助		野外での自然観察
10月27日	生活科 秋を見つけよう	南立誠小学校	1年	萩 恵子 田中由美子	3.学校行事 4.課外活動	平山大輔	3	理科教育4年・2人、理科専修2年・1人	1.5	2.補助		津市信楽公園での木の実の観察・採集(南立誠幼稚園も参加)
(音楽教育)												
9月-10月	合唱支援	一身田中学校	全クラス	西本和史	1.学習支援 2.授業研究 3.学校行事 4.課外活動	根津知佳子	10	1年～大学院2年	50	1.参観 2.補助		4年目の今年は、大学院生がチューターとなり、自主的な運営が行われた。
10月16日	コラボ音楽祭	一身田中学校	全学年	西本和史	3.学校行事	弓場徹 森川孝太郎 高瀬瑛子 兼重直文 根津知佳子	30	1年～大学院2年	15	4.その他	声楽ゼミナール他	音楽祭に向けて、授業外の日程を調節し、練習を行った。
10月19日	コラボ音楽祭	橋北中学校	全学年	墨香里	3.学校行事	弓場徹 森川孝太郎 高瀬瑛子 兼重直文 根津知佳子	30	1年～大学院2年	15	4.その他	声楽ゼミナール他	音楽祭に向けて、授業外の日程を調節し、30名の学生が自主的に練習を行った。
10月26日	コラボ音楽祭	橋北中学校	全学年	墨香里	3.学校行事 7.その他	兼重直文 根津知佳子	2	大学院1年		1.参観 2.補助 4.その他	音楽科特別研究・音楽科教育特論演習Ⅱ	インフルエンザのため、コラボ音楽祭は延期となったが、演奏の準備のため、審査員補助として参加し、コメントを配布した。
10月	敬老会における演奏支援	白塚幼稚園	全クラス	浅田美知子	1.学習支援 3.学校行事	根津知佳子	11	2・4年・大学院2年		1.参観 5.2.補助 4.その他	音楽療法概説・演習	人間発達科学課程4年生と音楽科学生の協同学習を行った。
9月-11月	6年生連合音楽祭	栗真小学校	6年生	日下瑠子	1.学習支援	学生による自主的活動(窓口は根津)	6	音楽科4年2名・数学科1名・吹奏楽団3名	10	2.補助		教育アシスタント・教育実地研究基礎・クラブの学生が協力して支援を行った。
9月-11月	実践公開発表会における授業補助	一身田中学校	1年生	西本和史	1.学習支援 3.学校行事 4.課外活動	根津知佳子	2	大学院1～2年	10	1.参観 2.補助 3.授業	音楽科教育特論演習Ⅱ	音楽専科の教諭2名と授業内で重唱するなど、新しい授業スタイルの構築に学生も参画した。
12月17日	音楽 楽器演奏	南立誠小学校	2年	松本靖子 若林俊子	5.出前授業	根津知佳子	4	3年・大学院1～2年生	3	4.その他	音楽教育ゼミナール	ハンドベルとトーンチャイムの演奏とワークシッブ形式の活動を行った。
2月25日	6年生を送る会における演奏	栗真小学校	全学年	日下瑠子	3.学校行事 7.その他	根津知佳子	3	大学院2年・天津師範大学留学生2名	2	4.その他		学部学生・留学生・大学教員が栗真小学校教諭と競演した。
2月	「うさぎのうーちゃん」のアレンジ	白塚幼稚園	全クラス	浅田美知子	7.その他	根津知佳子	12	2年		3.4.その他	音楽療法概説・演習	継続的な園児との交流を基盤としてアレンジに取り組んだ。
3月4日	うさぎのうーちゃんの誕生会	白塚幼稚園	全クラス	浅田美知子	3.学校行事	根津知佳子	2	大学院2年	1	1.参観 4.その他		
4月-2月	日本音楽に関する授業実践	西が丘小学校	5年	山路淳子	2.授業研究 6.教員研修	桂直美(非常勤) 根津知佳子	1	大学院2年		3.授業 4.その他	課題研究Ⅲ	現職大学院生として日本音楽の実践をめぐり、新たな視座の授業を組み立て実践した。これらを修士論文にまとめた。
9月-12月	* パッパについて * ベートーヴェンについて	栗真小学校	6年生	日下瑠子 吉田先生	授業	高瀬瑛子	1	内地留学生(一般)	9	授業		教員教育内地留学生としてクラシック音楽紹介を扱う授業実践について研究を報告書にまとめた。
(保健体育)												
5月28日	教科研修会(第1回保健体育科学習指導案検討)	一身田中学校	保健体育科教員	清長隆司	6. 教員研修	後藤洋子 岡野 昇	0		3			11月12日の授業公開研究会に向けたラート運動の学習指導案検討。
6月13日	PTA園活動	白塚幼稚園	全園児	浅田美智代	3. 学校行事	岡野 昇	5	保健体育コース3年、スポーツ健康科学コース3年	3.3	3. 授業	総合演習	4月7日打合せ(大学にて。園長1名、保健体育コース4年1名、岡野)、6月3日打合せ(園にて。園長1名、保健体育コース3年4名、スポーツ健康科学コース3年1名、岡野)。内容は、体ほぐしの運動を中心とした親子活動。
7月27日	ラート運動実技研修会	一身田中学校	保健体育科教員	清長隆司	6. 教員研修	後藤洋子	3	保健体育コース3・4年、保健体育専修2年	2.5	4. その他(参加)	体操	平成19年度から数え、4回目のラート研修会。講師は檜皮貴子氏(東京芸術大学)。テーマは、「ラート運動のチェックポイントと応用～3年生の授業で何を教えるか～」。
7月31日	校内研修会(体育実技)	南立誠小学校	全教員	駒田秀樹	6. 教員研修	岡野 昇	3	保健体育コース4年、保健体育専修2年		2. 補助 2.4. その他(参加)	保健体育学ゼミナール	内容は、仲間づくりのゲーム、体力づくり、走り方のコツ、運動会における表現運動など。

8月4日	学年研修会(第1回体育科学学習指導案検討会)	一身田小学校	6年担任	齋藤隆彦	6. 教員研修	岡野 昇	2	保健体育専修2年	2.5	4. その他(参加)	保健体育学ゼミナール	内容は、6年生の体育学習指導案検討会。三重県小学校体育研究会との共催(4名参加)。
8月4日	学年研修会(運動会ダンス指導)	一身田小学校	5年担任	加藤真由子	6. 教員研修	岡野 昇	1	保健体育コース3年	1	3. 授業	保健体育学ゼミナール	内容は、運動会における5年生の表現運動の振付けを提示。保健体育コース3年3名が振付けを考え、ビデオと紙媒体にて提示し、実際に振付指導を実施。
8月4日	校内研修会(講演)	一身田小学校	全教員	川本伸也	6. 教員研修	岡野 昇	4	保健体育コース3・4年、保健体育専修2年	2.5	4. その他(参加)	保健体育学ゼミナール	7月31日打合せ(大学にて、教員3名、研究員1名、岡野)。内容は、「学び合い」とは何か。
8月24日	教科研修会(第2回保健体育科学学習指導案検討)	一身田中学校	保健体育科教員	清長隆司	6. 教員研修	後藤洋子 岡野 昇	1	保健体育コース3年	3.5	4. その他(参加)	体操 保健体育学ゼミナール	11月12日の授業公開研究会に向けたラート運動の学習指導案検討。
9月29日	教科研修会(第3回保健体育科学学習指導案検討)	一身田中学校	保健体育科教員	清長隆司	6. 教員研修	後藤洋子 岡野 昇			3			11月12日の授業公開研究会に向けたラート運動の学習指導案検討。
10月6日	PTA学年活動	南立誠小学校	第3学年	駒田秀樹	3. 学校行事	岡野 昇	6	保健体育コース3・4年、保健体育専修2年	2	2. 補助 2.4. その他(参加)	保健体育学ゼミナール	PTA学年活動として実施。内容は、親子が一緒に楽しみながら行う運動。
10月7日	合同園内研修会	南立誠幼稚園 北立誠幼稚園 白塚幼稚園	各園全教員	丹羽立子 森 朋子	6. 教員研修	岡野 昇	4	保健体育コース4年、保健体育専修2年	2	2. 補助 2.4. その他(参加)	保健体育学ゼミナール	8月26日打合せ(大学にて、教員2名、岡野)。子どもたちが体を動かしたくなる活動の指導について①(仲間づくりの観点から)。
10月21日	合同園内研修会	南立誠幼稚園 北立誠幼稚園 白塚幼稚園	各園全教員	丹羽立子 森 朋子	6. 教員研修	岡野 昇	6	保健体育コース3・4年、スポーツ健康科学コース3年	2	2. 補助 2.4. その他(参加)	体育教材研究演習	8月26日打合せ(大学にて、教員2名、岡野)。子どもたちが体を動かしたくなる活動の指導について②(モノとのかかわりの観点から)。
10月22日	教科研修会(第4回保健体育科学学習指導案検討)	一身田中学校	保健体育科教員	清長隆司	6. 教員研修	後藤洋子 岡野 昇	2	保健体育コース3年	3	4. その他(参加)	体操 保健体育学ゼミナール	11月12日の授業公開研究会に向けたラート運動の学習指導案検討。
10月27日	学年研修会(第2回体育科学学習指導案検討会)	一身田小学校	6年担任	齋藤隆彦	6. 教員研修	岡野 昇 山本俊彦	10	保健体育コース3・4年、スポーツ健康科学コース3年、保健体育専修2年	2	4. その他(参加)	体育教材研究演習	内容は、6年生の体育学習指導案検討会。三重県小学校体育研究会との共催。体育教材研究演習の内容として実施。
11月6日	教科研修会(第5回保健体育科学学習指導案検討会)	一身田中学校	保健体育科教員	清長隆司	6. 教員研修	後藤洋子 岡野 昇	3	保健体育コース3年、スポーツ健康科学コース3	3	4. その他(参加)	体操 保健体育学ゼミナール	11月12日の授業公開研究会に向けたラート運動の学習指導案検討。
11月12日	公開授業研究会	一身田中学校	保健体育科教員	清長隆司	2. 授業研究	後藤洋子 岡野 昇	14	保健体育コース3・4年、スポーツ健康科学コース3・4年、保健体育専修2年	1	1. 参観 5.4. その他(運営)	体操 保健体育学ゼミナール	第2学年4組保健体育科授業研究会および研究協議。単元は「体づくり運動(ラート運動)」。
11月17日	学年研修会(体育科授業研究会)	一身田小学校	6年担任	齋藤隆彦	6. 教員研修	岡野 昇 山本俊彦	6	保健体育コース3・4年、保健体育専修2年	4	1. 参観	体育教材研究演習	第6学年4組体育科授業研究会および研究協議。単元は「ボール運動(ゴール型)」。
11月18日	教育実践発表会	一身田中学校	保健体育科教員	清長隆司	2. 授業研究	後藤洋子 岡野 昇			2			第2学年5組、第3学年1組保健体育科公開授業。単元は「体づくり運動(ラート運動)」。
11月18日	教育実践発表会	一身田中学校	全教員	笠原 哲	7. その他	岡野 昇			3			パネルディスカッションにパネリストとして参加。テーマは「未来に夢や希望を持ち、郷土を愛する子どもを育てる」。
11月25日	校内研修会(国語科授業研究会)	一身田小学校	全教員	川本伸也	6. 教員研修	岡野 昇			2			第2学年3組国語科授業研究会および研究協議。単元は「せいひ」。
12月2日	校内研修会(国語科授業研究会)	一身田小学校	全教員	川本伸也	6. 教員研修	岡野 昇	1	スポーツ健康科学コース3年	4	1. 参観	保健体育学ゼミナール	第1学年1組国語科授業研究会および研究協議。単元は「ずうと、ずうとだいきだよ」。
12月15日	合同園内研修会	南立誠幼稚園 北立誠幼稚園 白塚幼稚園	各園全教員	丹羽立子 森 朋子	6. 教員研修	岡野 昇 山本俊彦	10	保健体育コース3・4年、スポーツ健康科学コース3年、保健体育専修2年	2	4. その他(参加)	体育教材研究演習	運動遊びの教材づくり。体育教材研究演習として実施。

12月24日	ラート運動実技 研修会	橋北中学校	保健体 育科教 員	上島久明	6. 教員研修	後藤洋子 岡野 昇	1	保健体育 コース3年	2. 補助 24. その他 (参加)	体操 保健体育学 ゼミナール	ラートの概要説明および 基礎実技。講師は後藤 洋子氏(三重大学)。
1月21日	公開保育実践研 究会	南立誠幼稚園	全教員	丹羽立子 森 朋子	2. 授業研究	岡野 昇	1	保健体育 コース3年	4. 1. 参観	体育教材研 究演習	公開保育、研究協議およ び講話と実技。津市グ ループ別公開保育実践 研究会共催。
2月2日	校内研修会(社 会科授業研究 会)	一身田小学校	全教員	川本伸也	6. 教員研修	岡野 昇		保健体育 コース3・4 3年、スポーツ 健康科学 コース3年	4. 1. 参観	保健体育学 ゼミナール	第4学年1組社会科授業 研究会および研究協議。 単元は「高田仏だん調査 隊」。学び合いIIに 関する研究協議。津市教育研 究会中ブロック社会科部 会共催。
2月9日	PTA学級活動	一身田小学校	2年 2・4組	今鷹佐貴子 川口恵子	3. 学校行事	岡野 昇 山本俊彦	7	保健体育 コース3・4 年、スポーツ 健康科学	2. 3. 授業	体育教材研 究演習	内容は、体ほぐしの運動 を中心とした親子活動。
7月13日	養護教諭の研究 活動に関する支 援	橋北中学校 南立誠小学校 北立誠小学校 西が丘小学校		各学校養護 教諭	6. 教員研修	富樫健二	0				於：南立誠小学校
8月4日	生徒の健康度評 価に対する支援 児童保育参加児 童に対する運動 支援	橋北中学校	全学年	保健体育科 教員	7. その他	富樫健二	2	保健体育 コース4年	1. 2. 補助	卒業研究	於：橋北中学校
8月6日	生徒の健康度評 価に対する支援	南立誠小学校	4-6年	保護者	7. その他	富樫健二	2	保健体育 コース4年	1. 2. 補助	卒業研究	於：南立誠小学校
8月21日	養護教諭の研究 活動に関する支 援	橋北中学校 南立誠小学校 北立誠小学校 西が丘小学校		各学校養護 教諭	6. 教員研修	富樫健二	0				於：三重大学
9月1日	児童保育児童の 体力測定	南立誠小学校 北立誠小学校	3-6年		7. その他		5	保健体育 コース3、4年	3	卒業研究	於：南立誠小学校、北立 誠小学校
9月2日	児童保育児童の 体力測定	南立誠小学校 北立誠小学校	3-6年		7. その他		5	保健体育 コース3、4年	3	卒業研究	於：南立誠小学校、北立 誠小学校
9月3日	生徒の健康度評 価に対する支援	橋北中学校	全学年	保健体育科 教員	7. その他	富樫健二	7	保健体育 コース3、4年	5. 2. 補助	卒業研究、 健康管理学	於：橋北中学校
9月4日	生徒の健康度評 価に対する支援	橋北中学校	全学年	保健体育科 教員	7. その他	富樫健二	7	保健体育 コース3、4年	6. 2. 補助	卒業研究、 健康管理学	於：橋北中学校
9月7日	生徒の健康度評 価に対する支援	橋北中学校	全学年	保健体育科 教員	7. その他		7	保健体育 コース3、4年	4. 2. 補助	卒業研究、 健康管理学	於：橋北中学校
9月7-11 月30日	児童児童に対する 運動指導、健 康教育	南立誠小学校 北立誠小学校	3-6年		7. その他		2	保健体育 コース4年生	3	卒業研究	於：南立誠小学校、北立 誠小学校
9月8日	生徒の健康度評 価に対する支援	橋北中学校	全学年	保健体育科 教員	7. その他		7	保健体育 コース3、4年	3. 2. 補助	卒業研究、 健康管理学	於：橋北中学校
12月1日	児童保育児童の 体力測定	南立誠小学校 北立誠小学校	3-6年		7. その他		5	保健体育 コース3、4年	3	卒業研究	於：南立誠小学校、北立 誠小学校
12月2日	児童保育児童の 体力測定	南立誠小学校 北立誠小学校	3-6年		7. その他		5	保健体育 コース3、4年	3	卒業研究	於：南立誠小学校、北立 誠小学校
12月7日	児童の喘息・アレ ルギー・身体活 動量に関する実 態調査	南立誠小学校	4、5年	廣田 尚美	7. その他	富樫健二	10	保健体育 コース3、4年	1. 5. 2. 補助	卒業研究	於：南立誠小学校
12月8日	児童の喘息・アレ ルギー・身体活 動量に関する実 態調査	南立誠小学校	2、3年	廣田 尚美	7. その他		10	保健体育 コース3、4年	1. 5. 2. 補助	卒業研究	於：南立誠小学校
12月9日	児童の喘息・アレ ルギー・身体活 動量に関する実 態調査	南立誠小学校	6年	廣田 尚美	7. その他	富樫健二	10	保健体育 コース3、4年	1. 5. 2. 補助	卒業研究	於：南立誠小学校
12月14日	児童の喘息・アレ ルギー・身体活 動量に関する実 態調査	南立誠小学校	2年	廣田 尚美	7. その他	富樫健二	10	保健体育 コース3、4年	1. 5. 2. 補助	卒業研究	於：南立誠小学校
12月15日	児童の喘息・アレ ルギー・身体活 動量に関する実 態調査	南立誠小学校	1年	廣田 尚美	7. その他		10	保健体育 コース3、4年	1. 5. 2. 補助	卒業研究	於：南立誠小学校
12月16日	児童の喘息・アレ ルギー・身体活 動量に関する実 態調査	南立誠小学校	5、6年	廣田 尚美	7. その他	富樫健二	10	保健体育 コース3、4年	2. 2. 補助	卒業研究	於：南立誠小学校
1月6日	保健室における 情報の視覚化に 関する研修	橋北中学校 南立誠小学校 北立誠小学校 西が丘小学校 南立誠小学校		各学校養護 教諭	6. 教員研修	富樫健二					於：三重大学
(技術教育)											
11月10日	ジェラシックパー クで遊ぼう	北立誠幼稚園	年少 年長	小菅なぎさ 堀内由香里 岡山まゆみ	3. 学校行事 7. その他	魚住明生	10	技術教育 コース、2~4 年	4. 3. 授業		
12月2日	ジェラシックパー クで遊ぼう	北立誠幼稚園	年少 年長	小菅なぎさ 堀内由香里 岡山まゆみ	3. 学校行事 7. その他	魚住明生	10	技術教育 コース、2~4 年	4. 3. 授業		
2月22日	吹き矢で遊ぼう	北立誠幼稚園	年少 年長	小菅なぎさ 堀内由香里 岡山まゆみ	3. 学校行事 7. その他	魚住明生	9	技術教育 コース、2~4 年	4. 3. 授業		
(家政教育)											
11月17日	さつまいもの蒸し パン作り	一身田小学校	2年生	川口恵子	1. 学習支援	磯部由香	10	家政3、4年 消費4年	1. 2. 補助	教育実地研 究(一部学 生)	
11月18日	さつまいもの蒸し パン作り	一身田小学校	2年生	川口恵子	1. 学習支援	磯部由香	10	家政3、4年 消費4年	1. 2. 補助	教育実地研 究(一部学 生)	

11月19日	さつまいもの蒸しパン作り	一身田小学校	2年生	川口恵子	1.学習支援	磯部由香	10	家政3、4年消費4年	1	2.補助	教育実地研究(一部学生)	
11月4日	さつまいもの蒸しパン作り	栗真小学校	1、2年生	紀平みどり 川辺健治	1.学習支援	磯部由香	5	家政4年消費2、4年	1	2.補助	教育実地研究(一部学生)	
12月11日	弁当作り	栗真小学校	6年生 1クラス	日下瑶子	1.学習支援	磯部由香	3	家政1、4年消費1年	2	2.補助	教育実地研究(一部学生)	
11月20日	調理実習	橋北中学校	2年生	田中かおり	1.学習支援	磯部由香	2	家政4年大学院1年	1	2.補助	教育実地研究(一部学生) 食物学特論演習Ⅱ	
11月9日	豆腐作り	西が丘小学校	3年生 4クラス	小山 他	1.学習支援	磯部由香	10	家政1～4年消費1、4年	1	2.補助	教育実地研究(一部学生)	
11月19日	豆腐作り	西が丘小学校	3年生 4クラス	小山 他	1.学習支援	磯部由香	10	家政1～4年消費1、4年	1	2.補助	教育実地研究(一部学生)	
11月30日	豆腐作り	西が丘小学校	3年生 4クラス	小山 他	1.学習支援	磯部由香	10	家政1～4年消費1、4年	1	2.補助	教育実地研究(一部学生)	
2月26日	朝食レシピ集の作成および講演	白塚幼稚園	保護者	浅田美知子	7.その他	磯部由香						
7月13日	食に関する学習の模擬授業	北立誠小学校	5年	中野先生 西村先生	5.出前授業	平島円 磯部由香	48	教育学部2～4年	1.5	3.授業	小学校専門家庭C	
11月9日	調理実習の補助	西が丘小学校	6年 1、2組	中川先生	1.学習支援	平島円	4	教育学部4年 教育学研究科1年	8	2.補助	食物学特論演習	
11月13日	調理実習の補助	西が丘小学校	6年 1、2組	中川先生	1.学習支援	平島円	4	教育学部4年 教育学研究科1年	8	2.補助	食物学特論演習	
11月27日	調理実習の補助	西が丘小学校	6年 1、2組	中川先生	1.学習支援	平島円	4	教育学部4年 教育学研究科1年	8	2.補助	食物学特論演習	
11月30日	調理実習の補助	西が丘小学校	6年 1、2組	中川先生	1.学習支援	平島円	4	教育学部4年 教育学研究科1年	8	2.補助	食物学特論演習	
11月26日	調理実習の補助	南律誠小学校	6年・1組	小柴先生	1.学習支援	平島円	6	教育学部3年	3	3.補助	調理科学	
12月3日	調理実習の補助	南律誠小学校	6年・1組	小柴先生	1.学習支援	平島円	6	教育学部3年	3	3.補助	調理科学	
(英語教育)												
10月30日	Let's enjoy communication	西が丘小学校	5年 1,2,3,4	藤田先生	1.学習支援	荒尾浩子	15	英語教育コース2年	1	2.補助	総合演習	
11月19日	英語活動	北立誠小学校	5年1,2組	中野先生	1.学習支援	荒尾浩子	10	英語教育コース2年	1	2.補助	英語科教育特講Ⅰ	
11月19日	英語活動	北立誠小学校	6年1組	出口先生	1.学習支援	荒尾浩子	5	英語教育コース2年	1	2.補助	英語科教育特講Ⅰ	
11月26日	英語活動	北立誠小学校	6年1組	出口先生	1.学習支援	荒尾浩子	15	英語教育コース2年	1	2.補助	英語科教育特講Ⅰ	
(幼児教育)												
1月15日	発表会へ向けて	白塚小学校	なかよし学級	高須昌子 田中秀幸	1.学習支援	中西智子						小学校の希望時間が授業枠でない為、学生希望無し
4月9日	畑作り	白塚幼稚園		浅田 美知子 足立 深幸 山出 佳澄	4.課外活動	河崎 道夫	5	幼児教育4年生	3	4.その他	教育実地研究	
4月16日	畑作り	白塚幼稚園		浅田 美知子 足立 深幸 山出 佳澄	4.課外活動	河崎 道夫	5	幼児教育4年生	3	4.その他	教育実地研究	
4月21日	畑作り	白塚幼稚園		浅田 美知子 足立 深幸 山出 佳澄	4.課外活動	河崎 道夫	5	幼児教育4年生	3	4.その他	教育実地研究	
4月23日	畑作り	白塚幼稚園		浅田 美知子 足立 深幸 山出 佳澄	4.課外活動	河崎 道夫	6	幼児教育4年生	3	4.その他	教育実地研究	
4月28日	畑作り	白塚幼稚園		浅田 美知子 足立 深幸 山出 佳澄	課外活動	河崎 道夫	6	幼児教育4年生	3	4.その他	教育実地研究	
4月30日	畑作り	白塚幼稚園		浅田 美知子 足立 深幸 山出 佳澄	4.課外活動	河崎 道夫	6	幼児教育4年生	3	4.その他	教育実地研究	
5月7日	イモリ4匹カエルの卵持参する	白塚幼稚園		浅田 美知子 足立 深幸 山出 佳澄	4.課外活動	河崎 道夫	1	幼児教育4年生	2	4.その他	教育実地研究	
5月21日	メダカ捕り	白塚幼稚園			4.課外活動	河崎 道夫	3	幼児教育4年生	3	4.その他	教育実地研究	
5月26日	メダカ持参する	白塚幼稚園		浅田 美知子 足立 深幸 山出 佳澄	4.課外活動	河崎 道夫	1	幼児教育4年生	2	4.その他	教育実地研究	
5月28日	アゲハ蝶の幼虫持参する	白塚幼稚園		浅田 美知子 足立 深幸 山出 佳澄	4.課外活動	学生による自主的活動(窓口は河)	1	幼児教育4年生	2	4.その他	教育実地研究	
4月～2月	ぴよんちゃんクラブの企画運営	白塚幼稚園	未就園児とその保護者	浅田美知子 足立深雪	7.その他(地域連携活動支援)	滝口圭子	5	幼児教育コース 4年生5名	90	4.その他(企画・運営)	教育実地研究	毎週火曜日 09年4月～10年2月

10月19日	たんぽぽ会の企画運営	北立誠幼稚園	未就園児とその保護者	小菅なぎさ	7.その他 (地域連携活動支援)	滝口圭子	10	幼児教育コース 4年生2名 3年生8名	23	4.その他 (企画・運営)		
11月2日	たんぽぽ会の企画運営	北立誠幼稚園	未就園児とその保護者	小菅なぎさ	7.その他 (地域連携活動支援)	滝口圭子	10	幼児教育コース 4年生2名 3年生8名	23	4.その他 (企画・運営)		
11月16日	たんぽぽ会の企画運営	北立誠幼稚園	未就園児とその保護者	小菅なぎさ	7.その他 (地域連携活動支援)	滝口圭子	10	幼児教育コース 4年生2名 3年生8名	23	4.その他 (企画・運営)		
11月26日	たんぽぽ会の企画運営	北立誠幼稚園	未就園児とその保護者	小菅なぎさ	7.その他 (地域連携活動支援)	滝口圭子	10	幼児教育コース 4年生2名 3年生8名	23	4.その他 (企画・運営)		
12月7日	たんぽぽ会の企画運営	北立誠幼稚園	未就園児とその保護者	小菅なぎさ	7.その他 (地域連携活動支援)	滝口圭子	10	幼児教育コース 4年生2名 3年生8名	23	4.その他 (企画・運営)		
12月16日	たんぽぽ会の企画運営	北立誠幼稚園	未就園児とその保護者	小菅なぎさ	7.その他 (地域連携活動支援)	滝口圭子	10	幼児教育コース 4年生2名 3年生8名	23	4.その他 (企画・運営)		
1月13日	たんぽぽ会の企画運営	北立誠幼稚園	未就園児とその保護者	小菅なぎさ	7.その他 (地域連携活動支援)	滝口圭子	10	幼児教育コース 4年生2名 3年生8名	23	4.その他 (企画・運営)		
1月20日	たんぽぽ会の企画運営	北立誠幼稚園	未就園児とその保護者	小菅なぎさ	7.その他 (地域連携活動支援)	滝口圭子	10	幼児教育コース 4年生2名 3年生8名	23	4.その他 (企画・運営)		
2月1日	たんぽぽ会の企画運営	北立誠幼稚園	未就園児とその保護者	小菅なぎさ	7.その他 (地域連携活動支援)	滝口圭子	10	幼児教育コース 4年生2名 3年生8名	23	4.その他 (企画・運営)		
(教育実践センター)												
1月21日	パソコンを用いた名刺づくり支援	栗真小学校	3年	岡山 均	1.学習支援	下村 勉	28	教育学部A類 2年—4年	2	2.補助	教育工学(下村)	事前の打合せ2回約4時間(パソコン環境や手順のチェックを含む)

1. 国語教育

国語教育講座（書道Ⅲ）の取り組み

国語教育講座 林朝子

◎活動の概要

テーマ：幼稚園で子どもと一緒に毛筆体験

活動場所：北立誠幼稚園

活動日時：1回目）2009年11月5日（木）12：30～14：30

2回目）2010年1月28日（木）12：30～14：30

参加者：北立誠幼稚園園児27名（年長9名、年少18名）

書道Ⅲ履修生28～30名

活動目的：子どもたちの「墨を使って筆で書く」という初めての体験の場への参加を通して、

- 1) 1人の子どもと接することで、子どもの気持ちの変化を感じ、
- 2) 子どもたちにとって「墨を使って筆で書く」ことの意義を考え、子どもを対象とした有効的な毛筆活動につなげる

支援方法：子ども1人に対し、学生1～2名が支援を行う

活動内容：

1回目）テーマ：筆に慣れよう（年長年少共通）

15分 全体活動：用具などについて説明（林）

30分 個別活動：紙（条幅1/3）に図形や絵をかいて、筆に慣れる

※条幅：70cm×135cm

15分 グループ活動：園児3人グループ

2回目）テーマ：名前を書こう（年長）・筆で楽しもう（年少）

10分 全体活動：用具などについて復習（林）

【年長】

30分 紙（書き初め紙）に名前をひらがなで書く

20分 紙（○）の紙に一文字ずつひらがなを書く

※「きたりっせいようちえん
しゅうりょうしき」を1人
2文字担当

10分 後片付け

【年少】

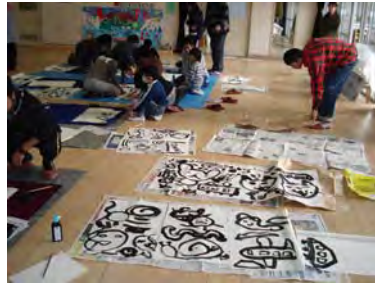
30分 紙（条幅1/3）に図形や絵をかく

15分 紙（条幅）に3人グループで絵を書く

10分 後片付け

活動後：活動終了後には、授業で振り返りを行うと共に、各自が活動を通じて感じたことや考えたことについてレポート提出を行った。

◎支援の様子



◎活動後の学生の感想（2回目レポートより抜粋）

学生のレポートは、書道と子ども、書道を通して見た子ども、子どもを通して見た書道、そして、子どもへの指導、など様々な視点から書かれている。以下に挙げるのは、2回目レポートの抜粋である。2回目の支援では、子どもと書道をどのように結び付けるのか、子どもは何を感じて書道を行っているのか、など、1回目に比べ学生自身の工夫しようとする態度や子どもを観察する意識が非常に高まっている。

- ・文字を書いている子どもたちは目を輝かせて書き続け、紙全体が真っ黒になると「新しい紙に換えて」と言い、とても積極的な様子が見て取れた。また、時に「楽しい」と言うなど、純粋に楽しんでいるようであった。
- ・筆に慣れることで子どもたちの中に「書く」という表現が根付いてくることがわかった。書道は子どもが字の練習のために行うもの、大人がたしなむものという見方をしてしまいがちだが、固定されたものではなく、自由で広がりのある存在だと気付いた。
- ・筆は鉛筆やマジックとは違い、墨をたくさんつければ、力強い太い線になる。また、筆にどのくらい力を入れるかによって、墨の付き具合が変わってくる。子どもたちは2回の活動で筆を使ってみて、このような筆のおもしろさに気付くことができたのではないだろうか。
- ・2回の書道体験活動を通して、私はその子どもの発達段階に見合った指導というものについて考えさせられた。たとえば平仮名が書けるといっても、書き順や字形にまで言及していい段階にあるのかななどを考えなければならないと思う。
- ・書道を通して子どものいろいろな面を見ることができた。
- ・幼稚園の子どもたちは泥遊びなどを好きなイメージがあったので、墨がついても気にしないのかと思っていたが、そうではない子もいるのだと知り、新鮮だった。様々な子どもに対処できることが必要だと感じた。
- ・教材との出会いの演出について注目して活動に参加した。小中学校で子どもたちは書写の授業で道具に触れていきますが、以外にその素材や歴史などについては知らないままのように思います。常に新鮮な気持ちで道具に向き合っていくには、「既知」に加えて「未知」の部分について徐々に触れていくことが大切だと感じた。
- ・1回目の体験から時間が空いていたのに、2回目のときに書道具の名前もよく覚えていた。毎日使うわけではないが楽しかったことなどは記憶に残りやすいのだと感じた。
- ・子どもは常に向上心や疑問を持ち、活動の際には私たちが予想していること以上に多くのことを感じ取っているのだと強く実感した。



- ・子どもたち自身が書道体験をどのように考えているかはわかりません。
単に遊びと考えているかもしれません。しかし、ただ単に楽しいと思うことが書道を始めるきっかけになるのではないのでしょうか。
- ・書道の持つ力についてなのですが、私の担当した男の子は字を書くことが苦手だったということだったのですが、字を書くことが嫌いという漢字はなく、むしろ楽しんで字を書いていたように思います。それは、その子が元々そういう性格だったのか、筆を使って字を書くということの新しさや楽しさから来たものであったかは、その子のことを深く知らない自分には判断できませんでした。しかし、もしそれが、筆を使って字を書くということの新しさや楽しさから来たものであるなら、幼児への書道教育には確かな意味が存在することになるのではないかと思います。
- ・活動中、子どもたちは硯に墨がなくなると「墨入れて」とすぐに行っていました。しかし、硯に墨がなくなっても、筆にまだ墨を含んでいます。そのことを説明してもやはり墨を入れてほしかったようです。しかし、このこととは反対に、名前を書いている途中で私が「もう一回墨付ける？」と言うと、「まだ大丈夫」という言葉が返ってきました。ここから、筆に墨がたくさん含んでいるということ、子どもは理解しているということがわかりました。
- ・子どもたちの興味についてなのですが、私が担当した子たちは自分の名前を書くよりも、自分の知っているキャラクターの名前を書くほうが生き生きとしていたように思います。実際にそのキャラクターの名前を書いているとき、「書きたい」という言葉や「次はこれ！」などの言葉が頻繁に飛び出しました。この言葉は、自分の名前を書いているときには見られなかったように思います。これは、自分の好きなものを文字にするということが、子どもたちにとって楽しいことであるという証明のように思います。また、「筆で書くとなんか面白い」などの発言もあったので、自分の好きなものを書くというきっかけから、書道そのものへの興味を持ってくれる可能性も見えたように思います。
- ・今回の活動は片付けもするということがだったので、準備の段階でも〇〇ちゃん自身にやってもらいました。ぶんちゃんは何のために使うのか？それは風で飛ばないようにするためといい、実際に息を吹きかけてぶんちゃんがある場合とない場合で実験して、どこに置くかを考えてもらいました。また、墨汁を硯に出すことも自分でしてもらいました。年少さんということもあり、小さなキャップを取ることに苦労して閉める方向を迷っていました。書道は書くということだけという認識を壊し、書道の一連の流れも経験してもらうことができたと思います。

◎まとめと今後の課題

学生への教育面としては、書道Ⅲという授業の中に位置付けられ、履修生全員が参加できた点が非常に意義がある。30名前後の学生が子どもと1対1で同時に支援に関われる経験をいただいた幼稚園の先生方に感謝をしたい。子どもたちの「墨を使って筆で書く」という初めての体験の場への入り込みによって、子どもたちが未知のものにどんな気持ちで出会い、どのような反応をするのかを学生自身が体験できるという貴重な機会となった。各学生が1人の子どもを担当した点も責任のある指導を促す機会にもなった。また、子どもが楽しんで取り組める書道の実践方法についても考えるきっかけとしても有意義だった。

今後の課題としては、事前指導の充実が挙げられる。1回目のときには、事前指導が十分ではなく、何を目的とした活動なのかを十分把握させることができなかった。来年度もこの取組を継続していく予定であるが、幼稚園の先生方との連携を密にし、学生に対する事前指導・事後省察をしっかりと行っていき、双方にとってより意義のある取組内容にしていきたいと思う。

日本語教育コースの取り組み

国語教育講座 林朝子

◎一身田小学校クラブ「世界を結ぼう」と人間発達実地研究Ⅴ（日本語教育コース1年13名が履修）

外国につながる子どもたちが多く在籍する一身田小学校において、平成20年4月からスタートした4年生以上が対象のクラブ活動。担当は富田先生・シルビア先生・デボラ先生。三重大学教育学部日本語教育コースの学生が中心となってクラブ活動に参加している。このクラブは、日本の子どもたち、外国につながる子どもたちなどと区別することなく、以下の3点を活動の目的として設立された。

- ①世界には様々な国や文化があることを知ること
- ②母国の文化や習慣を知り、アイデンティティの確立の一助となること
- ③わかったことや知ったことを皆に発信すること

学校現場の多文化が進む現在、学生にはクラブへの参加を通じて、以下の2点について感じ、考える契機を作ることを目的とした。

1) 学校現場を体験する：

教師と子ども、子ども同士の様子を観察したり、子どもと共に活動をすることで、子どもとの関係作りについて考える。

2) 多文化共生について考える：

教員を目指す学生自身が多文化共生とは何かを考え、多文化共生を進める活動についても考えを深める。

2年目の今年は、学生がDVD作成や活動実施などを通し、より子どもたちに関われる機会を設けた。子どもたちと一緒に活動に参加し、多文化や活動内容について考える契機となるように工夫した。

クラブ活動の翌週には、毎回、レポート提出と振り返り授業を行った。小学校で子どもたちとの活動や多文化共生に関わる点で、各自が感じた内容について言葉で発表し、全員で共有することで、お互いに考えを深めることができた。

◎クラブの活動内容と学生の参加方法（活動期間：2009年5月～2010年2月）

回	月	活動タイトル	活動内容	学生の参加方法
1	5	ブラジルってどんな国？	ブラジルに関する様々な写真を見て、同じブラジルであっても北と南で全く風景や文化が違うことを知る。	支援型
2	6	DVDを作ろう！①	ブラジルの友達に日本の小学校のクラブ活動を紹介するDVD作成の1回目。紹介するクラブを決めて、紹介のための文を考える。	
3	7	DVDを作ろう！②	3つのクラブに分かれて、実際にビデオカメラで撮影する。	支援型
4	10	日本とブラジル	日本とブラジルの学校文化を比較する。	協働参加型
5	11	ブラジルの遊び	Batata quente(バタタ・ケンチ、じゃやいもは熱いよ)というブラジルの遊びを皆で行う。	協働参加型
6	12	Pave(パヴェ)を作ろう！	ブラジルのクリスマスデザートを作って食べる。	協働参加型
7	1	日本の中の世界！？	日本語の中の外来語の由来について皆で考える。	協働参加型

8	2	世界〇×クイズに挑戦！	世界中のいろいろな国に関するクイズについて〇×で答える。	活動指導型
---	---	-------------	------------------------------	-------

◎活動後の学生の感想（レポートより抜粋）

【子どもたちとの関係作りについての内容】

- ・やる気を持続させることの難しさを感じた。
- ・自分たちから子どもたちに声をかけていくことが大切だと思う。
- ・先生の配慮で子どもたちとの間に入ることができた。しかし、もっと自分たちから積極的に子どもたちと触れ合っていかなければならないと思った。
- ・子どもたちと交互に並んだので、話す機会がとても多かった。今まで小学生の子とどんな会話をすればいいのかなと思っていたけれど、実際隣に座ってみると、どんどん話かけてくれた。緊張したり変に気を使ったりしているのは、私たち大学生のほうなのかなと思った。
- ・子どもたちより自分のほうが人見知りになっていたように思う。
- ・子供達が騒がしくなった時に手をパンパン叩いて声だけではない違った音で注意を促したり、時間が余ってしまった時にブラジルの動物の鳴き声の問題を出したり伝言ゲームを提示するなどのデボラ先生の対応を見ていて、授業は臨機応変に進めていくことも大切なのだと思いました。
- ・教師が笑顔で楽しそうに教えていれば、子どもも自然と笑顔になる。
- ・今回の授業を通して、児童達の興味をひくことや45分間の授業の組み立てを考えることの大変さ、児童達と触れ合うことの楽しさなど、沢山のことを学ぶことができました。
- ・私は児童の行動やニーズに対して正しい知識を持ちあわせていないし、適切な対応をとることもできない。だから、自分がその場その場で考えた最良とおもわれる行動をただ必死に行っていた。その中には咄嗟にとってしまったものや、思わしくないものも含まれていたのかもしれないが、あれが私の今の全てである。来年のこの授業など、これからは多くの授業やクラブなどを通し積極的に現場に触れて自分の力を上げ、正しく確かでなものにしていきたい。

【多文化共生についての内容】

- ・学校の職員室や給食室の入口には、英語・ポルトガル語・ハングル語・日本語と4ヶ国語でその場所の名前が表記されていた。
- ・小学校には、日本語教室と書かれた教室があったことに驚いた。自分たちの周りにも日本語教育を必要としている子どもたちが居るのだと実感した。
- ・ブラジルのデザートを作って、食べるという活動を通して、「五感」を使ってブラジルの文化を感じることができた。
- ・名前といっても、日本とブラジルでは長さも並べる順も全く違って、驚いた。本当に身近なものが国によって全く異なるんだと改めて感じた。
- ・言葉というのは、自分たちの身の回りにいつも存在していて、生活には欠かせないものである。よって、外来語もいつも自分たちの身近にあると言える。すなわち、外来語は自分たちがいつも触れている異文化なのである。
- ・外来語という子どもたちにとっても身近な言葉を通し、「いろいろな国」と「日本」、「世界」と「日本」のつながりを学べたと思う。
- ・「12月でもブラジルは暑いからクリスマスケーキは食べないよ」という先生の発言に対し、子どもたちは

「なるほど～」などと口々に行っており、ブラジルが南半球にあることなどしっかり覚えているんだと感じた。

- ・お菓子を通して、ブラジルの食文化の一端を知るということは些細なことのように思えるが、子どもたちが異文化に興味を持つための入口、または、きっかけとなる可能性は非常に大きい。このようなきっかけから、子どもたちの異文化への関心・興味を多いに広げていけるのではないかと思う。
- ・食べるときに必ず言う「bom appetite!」という言葉を教えてもらったが、お菓子作りの活動は言葉と文化が関係していて、とてもよいと思った。
- ・子どもの内から様々な文化を学ぶことによって、狭い範囲の常識にとらわれない柔軟な考え方が身に付くのではないかと。自分から見て異質なものを排除するのではなく、理解してお互いを尊重するような精神を持ってほしい。
- ・(○×クイズは) 日本とブラジル、お互いに異なる文化の者の考え方を共有できるだろう。それはたとえ単純なクイズであっても相互理解へつながる大きなヒントであるのではないかと考える。

◎学生への教育効果

小学校の現場や多文化共生についてほとんど知識のない状態でのクラブ参加であったが、各自が子どもたちとの関わり方、教師としての役割、多文化共生について少しずつではあるが気づきが得られた。子どもと話すこと自体緊張してしまう学生もいたが、5回の活動の中で子どもへの声かけができるようになっていた。先生方のクラブでの的確な指導方法の背景には、子どもの様子を敏感に察知することが非常に重要であることも気付けたようである。さらに、今後の学校現場では大きな問題になっていくであろう多文化共生についても考える契機となった。

この取組を通して、学生が子どもとの触れ合いを通し、様々なことに悩んだり、気が付いたりできたことは、日々の学習に向かう意欲的な姿勢へとつながったと強く感じている。今回感じた疑問や課題を今後の学習の中でも更に自分なりに考えていってほしいと思う。疑問や課題を持つことが、意欲的な学習態度にもつながるであろう。

◎今後の課題

参加学生が1年生ということもあり、子どもたちとの接し方に戸惑いを感じるが多かった。クラブの回数も決して多いものではないので、貴重なクラブ参加体験をより有意義にするためにも、前もって子どもたちと学生が触れ合う場を持つことも必要に感じた。子どもたちへの支援の程度や内容もより具体的に指導を事前に行うよう改善していきたい。

現場の先生方と子どもたちには、1年生の段階から現場に入り込むことで多くのご迷惑をおかけしてしまったと思う。この支援参加の中で「何を学ぶのか」を学生に何度も明確に提示しておく必要性を感じた。常に目的意識を持って参加し、観察していく態度作りを徹底し行っていきたい。今後は現場の先生方との連携をより密にし、双方にとって意義のある取組にしていきたいと思う。



2. 数学教育講座

数学教育講座の取り組み

中西 正治

1) 一身田小学校・白塚小学校・栗真小学校における「教育実地研究基礎」の取り組み

授業科目「教育実地研究基礎」（1年生対象）は、数学教育コース学生19名（内2年生1人）、情報教育課程学生3名、学校教育コース学生2名が履修し、一身田校区の3小学校（一身田・白塚・栗真）で行った。

「教育実地研究基礎」の趣旨は「学生が教育現場に入って、子どもの学習支援や教員のアシスタント活動をすることによって、子ども理解、学校理解を深めつつ、教職への意欲を高める」というものである。児童・生徒に直接接する機会を与え、教育について考えさせる最初の機会である。この「教育実地研究基礎」（中西担当）では、学生のカリキュラムの合間を利用して、週に1回（45分）現場に行っている。子どもの様子はもちろんのこと、現場の教師の仕事についてもできる限り学ぼう言っている。授業中（各教科）の子どもへのサポートだけでなく、日常のテストの丸付け、問題作り（特別支援学級）、休憩時間での子どもとの遊び、授業の準備の手伝い、授業の補欠など教師が実際に会うであろう様々な仕事を体験してほしいのである。その活動を通して、一見して普通に行われているように見える学校の教育活動には、目には見えない教師の子どもに対する日常的働きかけがあることを悟って欲しい。一見教育とは関係ないようなどんな些細な仕事でもすべて教師の重要な仕事であり、それができているからこそ正常な学校運営ができるのである。

毎週1回行くことにより素晴らしい経験をしてきている。前期・後期を通して、のべ430回実施された。その活動の中で学生にとって最も良かった点は、何といたっても子どもたちや担任の先生と人間関係ができてくることである。そのことによって、子どもたちの人間関係が見えてきたり、自分自身の子どもに対する働きかけについての問いや悩みが様々な生まれたり、それに対して先生方から直接アドバイスをいただいたりしている。

下記の表は、取り組みの外郭である。

小学校	世話係りの先生	初回打ち合わせ	3校打ち合わせ	学生オリエンテーション	学生人数	期 間
一身田	大口亜耶先生	4月10日	5月12日	5月28日	10人	6月1日～7月17日（前期） 10月～1月26日（後期）
白塚	永井幸良先生	4月10日		5月21日	7人	5月27日～7月17日（前期） 10月～1月26日（後期）
栗真	吉田隆子先生	4月13日		5月22日	7人	5月28日～7月17日（前期） 10月～1月26日（後期）

「教育実地研究基礎」の実地にあたって、下記のような記録ノートを作成するように指示した。ノートは月に一度の提出を義務づけ、学生の得たこと、反省、感想などに対してコメントを書き入れ、それを指導とした。

「記録ノート」について

1. A4版のノートを使用
2. 表紙（右枠）

2009年度
教育実地研究基礎
記録ノート

数学教育コース
学籍番号
氏名

「記録ノート」に記録する事項

1. 実地研究を行った小学校名
2. 実地研究を行った月日、時間帯
3. 実地研究を行った学年・組・児童人数・担任教師の氏名
4. 実施した活動内容
5. 上記の4. について、自分の得たこと、反省、感想など
6. その他

以下、各小学校における感想の例を挙げる。ただし、写真と文章は関係ない。

一身田小学校

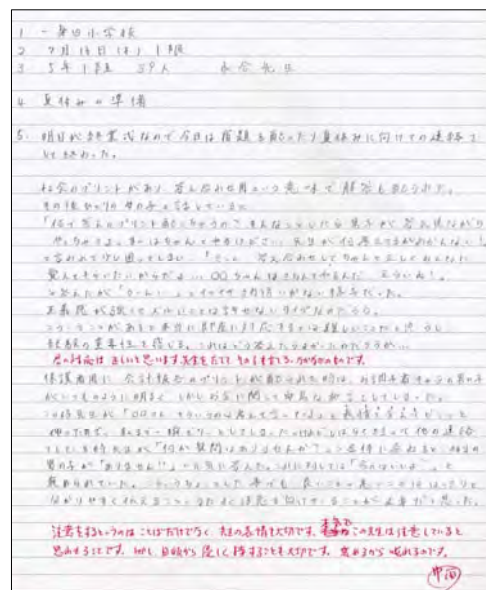
特別支援学級では、一人一人に合ったカリキュラムがあり、その子の進度によって学ぶことを随時考えていかなければなりません。また、指導する際にも通常学級とは違ったアプローチが必要で、言葉ではわからないことは視覚的にわかるようにするなどの工夫が多くなされていました。特別支援学級の子どもは、言葉をストレートに受け止めるため、自信をつけさせるような言葉のかけ方も重要で、担当の先生のそういった表現の一つ一つがとても印象的でした。

白塚小学校

ある晴れた日のことです。白塚小学校では運動会が行われました。私は体育の授業に参加していたので、運動会の練習の風景を1番間近で見ることができました。練習では縁起のミスも多く、友達といさかいを起こすこともありましたが、迎えた本番で彼らは本当に素晴らしい演技をみんなに魅せてくれました。

栗真小学校

子どもたちとは休憩時間にドッジボールや鬼ごっこなどをして遊びました。先生方は「子どもたちと遊んでいただいて、子どもたちは嬉しがっていました。子どもたちと遊ぶ先生が必要だ。」と声をかけてくれました。子どもたちも楽しいし、一緒に遊んでいる私たち学生も楽しい時間を過ごせました。ケーキ作りをするお楽しみ会をした学年では、子どもたちは、普段の授業とは別の顔つきで一生懸命になってケーキを作っていました。小学校に行くたびに子どもたちとより親しくなっていくのが感じられました。



下記のポスターは、2月19日に行われた「隣接学校園との連携に基づく教育フォーラム—平成21年度大学教育・学生支援推進事業の報告会—」で使用されたものである。



小学校において学習支援を行う学生たち

2) 一身田中学校における学習支援・教育アシスタント活動

授業科目「数学科教育法」の受講生（数学教育コース学生：15名、情報教育課程学生：12名、理科教育コース学生：2名、計29人）が、一身田中学校において、生徒の学習支援・教師のアシスタント活動を行った。前期・後期を通して、学生の空き時間を利用し、週に1度（50分）一身田中学校の数学の授業のアシスタントとして実地研究に取り組んだ。

一身田中学校の係りの先生（青木利斉先生）と本年度の取組みの打ち合わせを4月9日に行った。学生の中学校でのオリエンテーションは5月27日、5月29日、6月1日の3回に分けて行われ、この日に数学科の教員が紹介され、学生が支援に入る学級が決定された。

実地研究は、前期は6月3日～7月17日、後期は10月7日～1月27日で行われた。期間中には、教育実習や新型インフルエンザの流行などもあり、実質的回数は、前期は平均3回くらい、後期は平均6回くらいであった。

昨年度は記録ノートを作っていたが、2009年度は、授業者と学生のコミュニケーションをはかるため、ノートの代わりに、「数学科 指導アシスタント フィードバックシート」を利用することとなった。シートの上段には、「※この記録は、本校数学科の授業改善（指導力の向上）と指導アシスタントのより効果的な活用、生徒の学力向上のために使用しますので、

数学科 指導アシスタント フィードバックシート		
※この記録は、本校数学科の授業改善（指導力の向上）と指導アシスタントのより効果的な活用、生徒の学力向上のために使用しますので、率直な感想、意見を書いてください。		
名前 堀江 泰輔	指導日時 1月27日・第2時間	指導クラス 1年/組
今日の授業内容、支援したことについて記入してください。 正多面体 立体作り。		
今日の授業内容についての感想、生徒を支援したことについての感想を記入してください。 今日は、初対面の生徒と打ち合わせ、授業内容を確認した。 前回は、多面体の作り方を教わった。今回は、多面体の作り方を教わった。生徒は、多面体の作り方を教わった。生徒は、多面体の作り方を教わった。		
今日の授業について参考になったところや自分ならこうしてみたいと思ったこと、生徒を支援する中で今後にいかしたいと思ったことを記入してください。 正多面体の作り方を教わった。生徒は、多面体の作り方を教わった。生徒は、多面体の作り方を教わった。生徒は、多面体の作り方を教わった。		

素直な感想、意見をかいてください。」とその目的が書かれている。内容は、「今日の授業内容、支援したことについて記入してください。」「今日の授業内容についての感想、生徒を支援したことについての感想を記入してください。」「今日の授業について参考になったところや自分ならこうしてみたいと思ったこと、生徒へ支援する中で今後にいかしたいと思ったことを記入してください。」の3点である。シートへの記入は授業中またはその後とし、必ず授業を行った担当の先生に渡し、授業者の先生からコメントをいただき、次回学生に返却することとした。返却されたシートは、大学教員に提出し、大学教員も一言コメントを書き入れ学生に返却した。

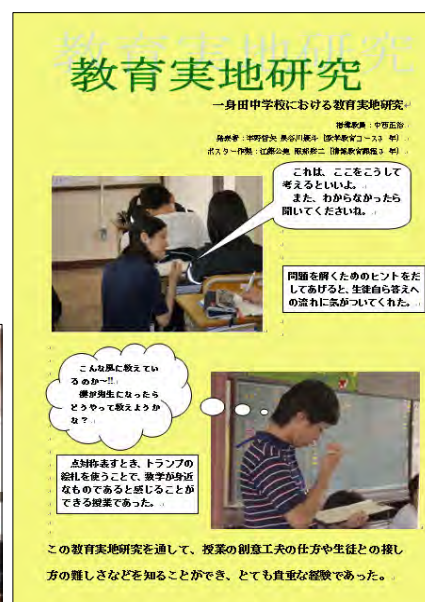
ただ、授業が終わるとすぐに大学に戻らなければならないことや授業者も次の仕事があり学生と授業について話し合う時間がないこと（現場のあわただしさ）が重なり、シートがうまく返却されず、その役割が円滑になされにくい状況もあった。シートののべ返却枚数は254枚であった。

また、大学教員も学生の様子を一度しか見に行くことができなく、現場の先生方に任せ過ぎていた点は反省しなければならない。

学生は、アシスタントを通して、授業者の授業の進め方（内容論・方法論）だけではなく、学習意欲をなくしている生徒への配慮や対応、しゃべっている生徒への注意の仕方など学習内容とは直接関わらないが、授業づくりに関わってくる大切な指導についても勉強している。教授法をはじめ、教室の状況について学生なりに考え、さまざまな思いをシートにかいている。



中学校において学習支援を行う学生たち



右のポスターは、2月19日に行われた「隣接学校園との連携に基づく教育フォーラム—平成21年度大学教育・学生支援推進事業の報告会—」で使用されたものである。

3) 一身体中学校における授業研究

11月18日（水）の教育実践発表会（数学の授業公開）に向けて、大学教員（数学教育講座中西正治准教授）が支援を行った。

8月21日（金）に指導案検討会がもたれ、1年生は「記録検査も数学！？」、2年生は「不思議な三角形！？」、3年生は「長方形の秘密」を題材とし、それぞれについてその指導法が話し合われた。

また、当日の授業のアシスタントとして、数学教育コースの4年生の有志が1限目・2限目の授業の支援を行った。

3. 理科教育

本年度、理科教育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

- ① 一身田中学校および一身田小学校における理科と家庭科のクロスカリキュラム（解剖&調理実習）の実施
- ② 一身田中学校における教育学部理科教育コースによる理科実験指導の実施
- ③ 一身田中学校2年生希望者による「青少年のための科学の祭典」への出展
- ④ 一身田中学校3年生を対象とした理科の体験学習
- ⑤ 一身田小学校における理科の出前授業
- ⑥ 西が丘小学校における学年活動の支援
- ⑦ 西が丘小学校における学級活動における出前授業
- ⑧ 南立誠小学校における大学を活用した活動
- ⑨ 南立誠小学校における教員研修
- ⑩ 南立誠幼稚園における出前授業
- ⑪ 橋北中学校における土曜日学習支援

以下に担当した大学教員による活動報告を示す。

（1）一身田中学校における理科と家庭科のクロスカリキュラム（解剖実習と調理実習）の実施

（後藤太一郎）

目的： 中学2年理科で学習する「動物の体のつくりと働き」の単元の中で、食材となる生きた魚の解剖実習を行うことで脊椎動物の基本構造を学ぶとともに、解剖後に調理して食べることで「命をいただいている」という食育の基本を学ぶ。

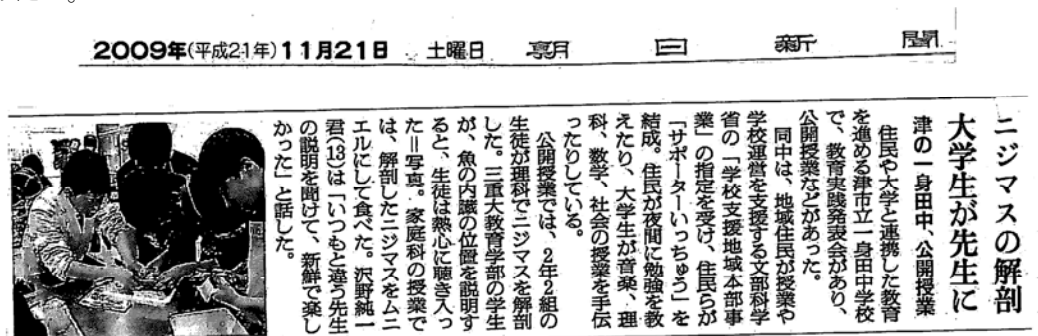
概要： 生きたニジマスを使った「解剖&調理」実習を平成18年度より一身田中学校で実施している。本年度は一身田中学校理科担当の中川教諭と家庭科担当の中村教諭により11月に実施された。すでに基本的な授業プランは確立しており、調理室で解剖と調理を1時間ずつ行った。理科教育コースおよび家政科教育コースの3、4年生4～5名が授業補助にあたった。具体的には以下の表の通りである。

実施日	時限	クラス	授業者	補助
11月2日	3,4	2年4組	中川、中村	後藤、学生5名
11月4日	1,2	2年1組	中川、中村	後藤、磯部、学生4名
11月6日	1-4	2年5,3組	中川、中村	後藤、学生5名
11月18日	2,3	2年2組	中川、中村	後藤、学生5名

解剖の補助にあたった学生はすでにニジマスの解剖の経験をしており、1名が2つ班を担当する形で説明を行い、生徒の理解を確認しながら進めていた。調理についてははじめて参加した学生も多かったが、補助内容をよく理解して参加した学生が多かった一方で、単に参観するだけと聞いて来た学生もいるなど、この活動の目的が十分に伝わっていなかった。今後、参加する理科と家政科の学生に対して合同の事前指導を行う必要がある。

一身田中学校では、2年生になると「解剖&調理」実習実習があることを生徒は楽しみにしているよ

うになっている。また、保護者からも、家庭の食卓の中で魚を丁寧に食べるようになったり、親子の会話も増えたという声も聞かれた。生活に密着した活動と言えるだろう。このようなことを学生に十分伝えることで、この活動の意義を理解させるとともに、この活動への取組について考えるように指導を進めたい。



(2) 一身田中学校3年生を対象とした理科の体験学習

(後藤太一郎)

目的： 理科好きの生徒を対象として、中学で学んだ理科実験の内容をさらに確認する実験講座を実施し、生徒の興味や関心を高めるとともに、補助にあたる大学生が生徒指導を行う機会とする。

概要：夏休み期間中の開催として、次の5つのテーマの実験を企画した。

実験テーマ	担当教員	開催日	参加生徒数
物質の変化とエネルギー	新居	8月4日	3
磁石と電流	牧原	8月10日	0
日食を観察しよう	伊藤	7月22日	5
身近な植物観察とパソコンを使ったデータ解析	平山	8月4日	0
顕微鏡の使い方と細胞の観察	後藤	8月3日	1

理系を志望している生徒に限定したこともあるせいか、参加希望生徒は少なかった。しかし、参加生徒は熱心であり、大学で実験することを楽しんでた。日食の観察については、一般市民を対象とした観察会と同時に行った。顕微鏡の使い方と細胞の観察については、指導にあたった3年生が9月に行う4週間教育実習で指導する単元であることから、予備実験を兼ねたものとした。これにより、指導のポイントをつかむことができたようだ。

今回、初めて企画した活動であるが、来年度は橋北中学校の生徒も対象として実施する計画である。



図1. 物質の変化とエネルギーに関する実験の様子。

（３）一身田中学校２年生希望者による「青少年のための科学の祭典」への出展

（後藤太一郎）

目的： 一身田中学校の２年生が、三重大学で開催する「青少年のための科学の祭典」に実験ブースを出展し、理科を楽しく教える立場となる体験をしてもらう。

概要： 本年度の「青少年のための科学の祭典」三重大学大会は11月28、29日に開催された。例年、2日間で約2500名が参加する規模の大会である。中学生による出展は、児童に人気の高い「スライムづくり」であり、一身田中学校の中川教諭と林教諭が参加を希望する生徒に指導した。開催日には1日に20名近い生徒が指導にあたり、2日間で約800名の児童がこのブースを訪れた。大勢の児童を相手にする中学生は説明も上達し、中学校での学習成果を示す機会となった。また、大会終了後の片付けに多大な協力をしてくれ、中学生がこのような大会を支える立場として活躍する可能性を示してくれた。



図1. スライムづくりを指導する様子。

（４）理科教育法受講生による隣接校区との授業連携

（荻原彰，平賀伸夫）

1 はじめに

理科教育法では、学生が隣接校区の学校（一身田中学校・西が丘小学校）の理科授業の観察・補助を行い、また学生による実験講座を行っている。以下はその活動及び連携による学生教育の効果の概要である。

2 活動概要

（1）授業科目名

理科教育法Ⅰ（前期，指導教員：平賀伸夫，荻原彰），同Ⅱ（後期，指導教員：荻原彰，平賀伸夫）。

（2）受講者数及び学年

理科教育コース3年生20名，4年生3名，大学院生1名，技術教育コース4年生2名，計26名。

3 時期，学生の担当時間数

（1）一身田中学校

前期：5月上旬～7月上旬（全30日間，学生1人あたり4時間担当し，1回の授業に3～4人の学生が参加した）。

後期：12月上旬～1月下旬（全20日間，学生1人あたり3時間担当し，1回の授業に3～4人の学生が参加した）。

(2) 西が丘小学校

後期：12月2日（3つのグループに分かれ、それぞれで15分程度の理科実験講座を担当した）。

4 活動の対象となったクラス

一身田中学校1年生理科5クラス、西が丘小学校5年生4クラス。

5 活動の内容

(1) 一身田中学校

前期に扱った単元は、一身田中学校1年生が理科第1分野「身近で起こる不思議な現象」であり、生徒が学習課題の解決に困っているときにアドバイスを与えるなど、ティーチング・アシスタントとしての役割を担当した。

後期の活動においては、実習生自身による授業を行った。単元は「水溶液の性質」であり、授業の内容は、指示薬による呈色や金属との反応を使った物質の性質についての実験である。

(2) 西が丘小学校

音、ルミノール反応、植物の葉脈をテーマとした実験講座を行った。

6 連携の効果

連携の効果を検証するため、活動前、前期終了後、教育実習後、後期終了直前のそれぞれの時期に、活動を振り返るアンケートを行って学生の意識変化を追跡した。また後期終了直前に、1年間の振り返りを行った。アンケートは「理科の教師に必要な力」を記述式で回答するという形式で行った。

以下はアンケートを資料とした振り返りの中で行われた分析をまとめたものである

- ・ 教科についての知識の重要性は活動前から意識されている。しかし活動前には、知識のとらえかたが、理科の知識というやや一般的・抽象的なものだったが、その後は、より授業に即した形で知識の必要性を捉え直す傾向が見られる。
- ・ 「面白く、ひきつける授業作り」は一貫して重要なものだと考えられている。前期終了時には、そのための工夫として身近なものとの関連づけや教師の説明力・表現力が意識されるようになった。実習修了後には、これらに加えて、考えさせる時間作りやメリハリのある授業の必要性も指摘されている。
- ・ 前期には、安全管理の面から、予備実験の大切さが意識されている。実習後は、予備実験の意味をより広くとらえ、教材研究のための予備実験というとらえに変化している。
- ・ 教育実習終了後は新たなカテゴリーの「理科の教師に必要な力」は出現しない。

全体的な傾向は以上の通りであるが、ふりかえりの中で分かったことは、学生が考える「理科の教師に必要な力」の構造には、違いが見られることである。大きく言うと2つの傾向がある。

一つは信頼関係が授業の基盤であって、信頼関係が作れば、授業もスムーズに運営することができるという考え方である。この考え方の学生は、授業の外でも、教師ができるだけ児童生徒と関わって、児童生徒と親しくなることが大切だと考えている。知識の必要性は認識しているが、あまり重視はされない。

もう一つの考え方は、信頼関係が作られるためには、まず教師が理科の知識をしっかり持ち、児童

生徒の質問にもきちんと対応できることが大切だというものである。しっかりした知識があれば、それが授業の構成力を支える基盤となり、信頼関係もできていくとする立場である。

良い授業の基盤となるのは、信頼関係なのか知識なのかという重点の違いであり、折り合えない訳ではないと思われるが、短い振り返りの時間の中では、十分に詰めることができなかった事は課題として残されている。

(5) 一身田小学校における学級活動での理科授業

(牧原義一)

4 年 4 組 学級活動「磁石を使ったおもしろ実験」

日時：2009 年 7 月 2 日（木）13：50～15：20

教室：一身田小学校 理科教室，児童数 35 名，保護者数約 30 名

補助：樋口早苗先生（4 年 4 組担任）

〔目的〕

4 年生の学級活動として、磁石を使った 3 つの実験を児童と保護者が一緒に行った。磁石に関する興味深い現象を観察し、磁石の不思議な性質を体験し感動させることにより、理科の授業(実験)に対する興味を喚起することを目的とした。また、保護者の方にも、子供たちと一緒に理科(磁石)の実験を行うことにより、家庭での児童の学習の参考にしていただければと思って指導を行った。

〔概要〕

クラス全員を 6 班に分け（1 実験台に児童 5～6 名＋保護者 4～5 名）、以下の 3 つの実験を行った。

(磁石の重要な性質について)

実験 1：いろいろな磁石の N 極，S 極の観察

○「メモレ BR」（パイロット製・磁気メモボード）を使用，各班に 2 個ずつ配る，使い方を説明

- ・ U 型磁石，棒磁石の N 極と S 極の観察法についての演示
- ・ リング磁石，丸磁石，板磁石，タイマー磁石の観察
- ・ 切れる磁石の切る前後の磁極の観察（ハサミ使用）
- ・ 磁石の性質のまとめ

(強力なネオジウム磁石を使ったおもしろい実験)

実験 2：パイプ中のネオジウム磁石球の落下実験

○アクリル，アルミ，銅パイプとネオジウム磁石球を使用，各班にパイプ各 1 本を配る。

ネオジウム磁石 2 個は説明後に配る。

・ 演示実験（ネオジウム磁石の強さ説明：ネオジウム磁石 2 個を手の表と裏につけても磁石が落ちない！）

- ・ 各班で磁石球をパイプの中に入れて落とす実験，それぞれのパイプでの磁石球の速さの比較など
- ・ アルミチャンネルの中を落とす（演示実験）

実験 3：ガウス加速器／ガウスライフル

○レール（1 本），鉄球（5 個）を各班に配る

・ 演示実験

・ 各班で同じ実験（交替しながら），標的に当てる，2 段加速 などを行う

- 子供たちと保護者が一緒になって実験・観察を行い，磁石を使ったおもしろい現象（強力なネオジウム磁石を使った実験）に（とくに子供たちは）びっくりし，身近にある磁石についての不思議を再認識したようだった。1 つの実験台に子供と保護者を合わせると 10 人程度になり，実験には少し窮屈な状況だった。

（6）南立誠小学校・理科教職員研修会

（牧原義一）

南立誠小学校・理科教職員研修会「電池，豆電球，磁石を使った楽しい理科実験」

日時：2009 年 7 月 24 日（金）14：00～16：00

教室：三重大学教育学部物理第 1 実験室，教諭 16 名

補助：なし

〔概要〕

平成 21 年 7 月 24 日（金），三重大学・物理学実験室において，南立誠小学校の先生方（17 名）を対象とした約 3 時間の理科教職員研修会を実施しました。研修内容のご希望としては，理科の中の「豆電球や電池，磁石を使ったおもちゃ作り」ということでしたが，実際は以下に示すような「電池，豆電球，磁石を使ったまじめな理科実験」になってしまいました。その中で，簡単でおもしろい手作りのおもちゃについても何件か紹介しました。理科の実験や器具の取扱いに不慣れな先生方にとっては，初めての作業や少し細かい工作等もあって少々難しいものになったかも知れず，希望通りの研修会となったかどうか心配です。やはり，実験は楽しいものであることは先生にとっても重要なことであると思います。

〔研修内容〕

研修では，2～3 名 1 組でいくつかの実験を行いました。次のページに，研修の際に配布した実験内容と実験方法のメモを示しますので参考にしてください。

〔研修を終わって〕

電気や磁石に関する学習内容は小学校でも数多く取り上げられ，子供達も電気や磁気に関するいろいろな現象に非常に興味を示します。教育学部の教員として経験の少ない私の場合は，「こんなおもしろい実験がありますよ」とか，「こんな工夫の仕方もありますよ」などといったことは紹介できます。しかし，実際の小学校の現場で同じように実験を行うには，時間，費用，技術的な困難さなどの点で難しいことがあるかもしれません。



図 1. 細かい作業に「難しいなあ～」とつぶやきながら・・・

先生方の方でも、研修内容を実際の授業で利用できるようにぜひ改良を加えていただきたいと思います（これは、現場の先生方にしかできないことです）。理科の実験では、細かい作業を行うことや、うまくやらないと正しい（期待すべき？）結果が出なかったりするものがたくさんあります。また、期待した結果が出ないと「実験はおもしろくない」と感じる場合も少なくありません。しかし、うまくいかないことを「なぜ？」と考えることはとても重要なことです。今回、先生方にそのような経験をしていただけたとしたら幸いです。

後日、南立誠小学校の担当の先生から今回の研修に対する先生方の感想を送っていただきました。その中のいくつかを原文のまま紹介させていただきます。

- ・磁石や電気の実験は難しいところもありましたが、楽しく実験できました。また、説明を聞こうとしていても、聞こえないときの子どもの気持ちが少しわかりました。
- ・楽しく実験ができました。小学校の子どもたちを思い浮かべながら実験していたのですが、つく・つかない、回る・回らない、できた・できない、のあたりがドキドキで楽しいだろうなと思います。ただ少し実験においては用具が要るので、その準備物があるかどうか、そろっていないとできないものがあつたので身近な物でということができれば・・・と思いました。
- ・ゆったりと実験できる余裕がほしいですね。 ・実験準備が大変そう。準備が教師の大きな負担にならないような工夫や手だてが必要だと感じた。
- ・理科実験の楽しさが分かってよかった。ペットボトルと割り箸の利用で机上で配線するよりもわかりやすく工夫のよさが楽しさにつながることがよく分かった。

南立誠小学校・理科教職員研修メモ

実験 1：いろいろな磁石の N 極，S 極の観察

- 「メモレ BR」（パイロット製）を使用
- ① 棒磁石，リング磁石，丸磁石，板磁石，タイマー
- 磁石の観察
- ② 切れる磁石（ゴム磁石）の切る前・後の磁極の観察
- ③ 磁石を利用したおもちゃの紹介



実験 2：電磁石をつくろう

（電流と磁石の相互作用）

図 2．ペットボトルスタンドと実験で使った器具

- ① 実験器具の作製
ペットボトルスタンド，コイル（25 回巻き，ブランコ型），豆電球
- ② 乾電池で豆電球にあかりをつけよう。
- ③ 導線の近く（上と下）に方位磁針を置いて，豆電球にあかりをつけてみよう。
⇒ 「電流が流れると，磁針（磁石）は振れる。」

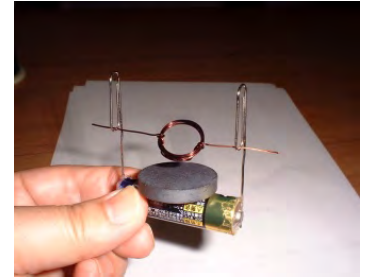
⇒ 「電流のまわりには磁気が発生する！」(1820 年, エルステッド)

・方位磁針を導線で巻いて電流を流すと・・・。

④ コイルに電流を流して, 磁石を近づけてみよう。(電磁石)

・豆電球, コイル, 電池を直列につなぎ, コイルにN極 (S 極) を近づけてスイッチ ON, OFF。

・コイルにゼムクリップ (鉄) を近づけてスイッチ ON, OFF。



〈以下の実験では, 電池の発熱に注意!〉

図 3. コイルモーター

・電池をコイルに直接つなぎ, ゼムクリップを近づけてスイッチ ON, OFF。

・コイルの中心にボルト・ナット (鉄芯) を入れ, ゼムクリップを近づけてスイッチ ON, OFF。(クリップをもちあげてみよう)。

⑤ 電池でモーターを回そう。

モーターの中には, コイルと磁石が入っています。コイルに電流を流すとコイルは磁石になって, モーターに固定されている磁石から力を受けて回転します。

●あと, 「⑥モーターを回して電気を作ろう。(発電機)」と, 「実験 3: 金属パイプの中でネオジム磁石を落下させてみよう」という実験を行いましたが, 紙数の都合で省略します。

(7) 西が丘小学校・出前授業

(牧原義一)

西が丘小学校・3 年生 4 クラス「磁石を使ったおもしろ実験」

日時: 2010 年 2 月 26 日 (金) 8:30~14:30

教室: 西が丘小学校理科室, 2 限目 (1 組), 3 限目 (4 組), 4 限目 (2 組), 5 限目 (3 組)

1 クラス児童数約 36 名

補助: 理科教育講座 3 年生, 3 名

〔概要〕

西が丘小からの連携授業の申し出に対して, 小学校の小川先生および理科教育講座の 3 年生 3 名と実験内容を打合せた。3 年生が興味を示すような, 新たな磁石を使った 3 種類の実験を, 学生 1 名がそれぞれ 1 つずつ考案し, 予備実験と改良を加えて 4 クラスの授業に臨んだ。

授業では, それぞれの学生が考案した実験について指導を行って, 児童に 3 つの実験を体験させた (それぞれの実験時間は 10 分程度)。そして最後に, 4 つめの実験としてガウス加速器の実験を行った。そして, 授業後に今回の授業の感想を, 子供たちを書いてもらった。また, 当日の 2 限目の授業では, 津ケーブルテレビ ZTV の取材があり, 実験の様子が収録された。後日「スクールジャック」という番組で放映される予定である。実験の内容は, 次のとおりである。

実験 1. 「磁石にくっつくクーピーは?」

・いろいろなものは, 磁石に付くものと付かないものに分けられること。釘は磁石に付き, 消しゴムは付かないことを演示して見せ, 「では, クーピーは磁石に付くのでしょうか?」と言って, 実際に実験を行わせた。

- ・ 60色のクーピーと、ネオジウム磁石を用いて実験を行った。実験前に、5色のクーピーが付くこと、
そして、その色を予想させたうえで実験を行った。
- ・ 子供たちは、「クーピーが磁石に付く」ことに一様に驚き、磁石に付くクーピーの中には、鉄の成分が入っているという説明に納得していた。



図1．クーピーを使った実験



図2．ZTVの取材の様子

実験2．「磁石のまわりの様子を見てみよう！」

- ・ ペットボトルの中にサラダ油を入れ、その中に油が漏れないようにゴム栓を通して、試験管を挿入する。油の中には、細かくすりつぶした鉄粉を入れる。
- ・ サラダ油がこぼれないようにペットボトルを静かに振り、油の中に鉄粉を一様に分散させる。その直後に、試験管の中にネオジウム製の棒磁石を入れ、鉄粉の動きや磁石のまわりの鉄粉の模様を観察し、ワークシートにその模様をスケッチする。
- ・ 子供たちは鉄粉がつくる立体的な模様に驚き、「ユニみたいだ」、「すごーい！」と言って驚きながらスケッチしていた。「磁石の場所により、鉄粉の量や、つながり方（向き）が違う」ことに注意して観察するように指導した。



図3．磁石のまわりはどうなってる？



図4．磁石のまわりの鉄粉模様の観察

実験3．「うごくスライム」

- ・ ホウ砂と洗濯のりを使ってスライムを作り、その中に細かくすりつぶした鉄粉を加えて黒いスライムを作り、プラスチックのシャーレに入れて子供たちに配った。

- ・子供たちにネオジウム磁石を渡し、スライムの近くに磁石を置いたとき、スライムがどのように動くか、実験させた。スライムが、磁石めがけて針状に形を変えることに驚き、楽しそうだった。
- ・さらに、ネオジウム磁石球をスライムの近くやスライムの上に置かせた。スライムは、ネオジウム磁石球を包み込むように動き、その様子に「磁石がスライムに食べられた！」と歓声が上がった。



図5. スライムの中に鉄粉を入れると・・・



図6. 磁石がスライムに食べられる！

実験4.「ガウス加速器」

- ・塩ビレール上に、鉄球とネオジウム磁石球を並べただけの簡単なセッティングで、磁石の強力な引力を使って、1個の鉄球を急激に加速する（はじき出す）実験である。
- ・この実験にもほとんどの子供たちが歓声をあげて興味を示し、交代で実験したり、鉄球と磁石の配列をいろいろな形に変えて実験したりと、大好評であった。



図7. 磁石と鉄球をレール上にならべて・・・



図8. 先生も興奮！みんな興味津々・・・

- 後日、各クラスの子供達から実験の感想を書いたものをいただいた。4つの実験のどれもが、おもしろかったようであり、「自分でもネオジウム磁石を買って家で実験してみたい」、「理科の実験が好きになりました」、「とてもおもしろい実験でした。また、西が丘小に来てください」など、好評な反応であった。

また、実験を考案し予備実験を繰り返して工夫を重ねた学生たちにとっても、子供たちのいろいろな反応を体験することのできた有意義な授業となった。

（８） 南立誠幼稚園との連携授業

大学キャンパスを活用した自然観察授業 ―きのみをさがそう―

（平山大輔）

【目的】

自然に親しむ機会の減少にともない、学校園での自然体験学習の重要性は益々大きくなっている。今回の取り組みでは、身近な自然に対する園児の興味の惹起を目的とし、自然豊かな三重大学のキャンパスを活用した自然観察授業を考案・実践した。

【概要】

2009年10月15日に、南立誠幼稚園の園児を対象に、大学構内で樹木の果実の観察と採集を行った。授業に際し、南立誠幼稚園の先生方のほか、三重大学教育学部から河崎道夫教授（幼児教育）のご協力を頂いた。また、補助として学生4名（幼児教育1名、理科教育3名）が参加した。

午前10時に集合し、事前に選定しておいた場所（3カ所）で、説明を交えながら観察と採集を行った（図1）。その後、11時30分に教育学部の中庭に移動して全員で昼食をとり、活動を終えた。なお、採集した果実は、各自ビニール袋などに入れて持ち帰った。

園児による1時間半足らずの採集であったが、アラカシ、シラカシ、ウバメガシ、マテバシイ（ブナ科）などの堅果（ドングリ）をはじめ、クスノキ（クスノキ科）の液果、センダン（センダン科）の核果、ナンキンハゼ（トウダイグサ科）、ツルウメモドキ（ニシキギ科）のさく果、イロハモミジ（カエデ科）の翼果、スズカケノキ（スズカケノキ科）のそう果など、様々な形態をもつ17種の果実が得られた。また、園児たちは非常に楽しんで取り組んでいる様子であった。

現在、教育学部の授業では、理科実験（生物）や生物学実験のなかで、大学キャンパスに生育する身近な植物の形態の観察や生活史の学習などを取り入れている。教師を志望する学生が、そうした授業で学んだことを実践し、自然誌の面白さを体験によって伝える能力を養う場として、また、近隣の学校園の身近な自然観察の場として、三重大学キャンパスの積極的な活用が進むようにこれからも取り組みを推進していきたいと考えている。

（９） 一身田小学校における理科の出前授業

身近な樹木の観察 ―木の実のふしぎ―

（平山大輔）

【目的】

校庭、道端、神社の森など、私たちの身近な場所には驚くほど多様な植物が生育している。今回の取り組みでは、学校とその周辺で樹木の果実を観察し、植物に備わる「生きていくための仕組み」を学ぶことを目的とした。

【概要】

10月9日に4年3組、10月23日に4年2組の生徒を対象に授業を行った。PTAの学級活動（親子活動）における連携として行い、生徒だけでなく保護者の方々にもご参加頂いた。

教室で樹木の果実に備わる仕組みについて説明した後、校庭の樹木の観察を行った。その後、一身田小学校そばの高田本山専修寺の境内に移動し、果実の観察・採集を行った。

校庭では、アラカシ、スダジイ（ブナ科）、センダン（センダン科）、クロガネモチ（モチノキ科）、

カリン（バラ科）などの樹木を観察し、高田本山では、イロハモミジ（カエデ科）、フジ（マメ科）、ウメモドキ（モチノキ科）、トベラ（トベラ科）などの樹木の果実を採集することができた。カエデ類の翼果を空中に投げ上げてプロペラを回転させる遊びの際には、多くの生徒が夢中になって取り組む様子が見られた。

果実・種子には、普段動くことのできない植物が「動く」ための多様な仕組みが備わっており、果実の形態には植物の生存戦略が如実に反映されている（図 2）。そのため、植物の生活（生存戦略）と関連付けた観察を行うことにより、形態のもつ意味の理解や興味の惹起につながることを期待できる。これからも、身近な自然の観察授業を継続していきたい。

（１０）南立誠小学校との連携授業

生活科 ―秋をみつけよう―

（平山大輔）

【目的】

この取り組みでは、南立誠小学校 1 年生と南立誠幼稚園児を対象に、津市偕楽公園での様々な果実の観察と採集を通じ、身近な自然の多様性に触れることを目的とした。また、後日の生活科の工作に用いるため、堅果（ドングリ）を中心に多くの果実を採集した。

【概要】

10 月 27 日 10 時に偕楽公園に集合した。大学からは理科教育コースの学生 2 名と理科教育専修の大学院生 1 名が補助として参加した。最初に、南立誠小学校・幼稚園の先生方から採集に際しての注意事項等の説明があり、その後、観察と採集を実施した。観察・採集に際しては、適宜、平山が果実の特徴等の説明を行った。ちょうどブナ科の堅果が多数落下している時期でもあり、コジイ（ツブラジイ）、アラカシ、コナラ、クヌギなどの堅果を多数採集することができた。小学生、幼稚園児ともに、非常に楽しんで取り組んでいる様子が見られた。

この活動の 10 日ほど前に大学での果実採集を経験した南立誠幼稚園の園児のなかには、大学でも採集したアラカシやコナラの形態や名前をよく覚えており、教員からの説明がなくともこれらの種を見分けられる園児もいた。また、前回採集した堅果の種名をみずから調べ、それを今回の活動の際に教員に確認に来た園児もいた。身近な自然観察の体験により子どもたちの自然への興味・関心を高めることに努めている教員の立場として嬉しく感じるとともに、このような自然観察授業の重要性を改めて強く感じた。



図 1. 大学での自然観察の様子。



図 2. 採集した果実の一部。

（１１）南立誠幼稚園における出前授業

（後藤太一郎）

目的： 子どもが好きな小動物の代表であるザリガニの体の特徴や飼育のポイントを説明することで、生き物の観察と飼育の関心を高める。

概要： 内容は、①ザリガニの体と動き方、②オスとメスの区別、③餌と与え方、④体の色、⑤飼いかたとした。ザリガニをビデオカメラで拡大してテレビ画面に映す他、自作の透明模型を用いながら、体の各部分について園児と対話しながら解説した。また、体色が白や青のザリガニも見せることで、おなじザリガニでも違いもあることを示した。さらに、ザリガニの呼吸について解説した子ども向けのテレビ番組を見せ、呼吸ができるように飼育することを強調した。当日は幼児教育の４年生１名が補助をしてくれた。園児のみならず、参加していた保護者もザリガニに興味をもったようで、終了後に質問があり、親子で学ぶ機会にもなったようだ。

（１２）橋北中学校における土曜日学習支援

（後藤太一郎）

目的： 橋北中学校では土曜日に数学と英語の学習支援（Saturday Step-up School, 略してＳＳＳ）を実施している。その補助スタッフとして大学生が関わることで、生徒一人ひとりの学習進度に応じた指導する体験を重ねる。

概要： ＳＳＳは土曜の８時半から１２時半までであり、理科教育コース１年生が学校現場にはじめて関わる機会として、ＳＳＳが適当であると考え、１７名の学生が毎回６～８名が関わった。期間は、６月６日から２７日までの４回と、１１月１４日から２月２７日までの１０回であり、一人当たり６回ほど参加した。生徒との関わり方や、助言の仕方に戸惑いながらも経験を重ね、多様な生徒を知る機会となったようだ。次年度以降も理科教育コース１年生にはこの活動への参加を指導する計画である。



図１．授業開始の挨拶。



図２．指導の様子。

4. 音楽教育

音楽教育講座におけるコア科目群と授業の往還

根津知佳子

一身田中学校区との連携が本格的に始まって4年になる。中学校の合唱コンクールとのジョイントに参加した学生も卒業を迎え、音楽科の連携活動も多様・多彩になっている。

今年度採択された事業で重要なことは、単なる地域連携ではなく大学教育・学生支援推進を標榜していることである。連携は「教育実践プラン」に基づいた「教育モデル」を確立するための核であることは言うまでもないことだが、連携活動を通して、学生がどのような実践的指導力を培っているのかを省察することが、それぞれの活動の質向上に資することにもなる。それによってお世話になっている現場や地域への貢献にもつながっていく。

	コラボ音楽祭	合唱支援	合奏支援	授業研究	出前授業・演奏など
大学院2年	3年次より4回参加	チューター	チューター	課題研究 音楽科教育特論	チューター
大学院1年	2年次より4回参加	チューター	チューター	音楽科教育特論	チューター
58期生(4年)	1年次より4回参加	2年次より自主参加	自主参加	3年次: 音楽教育ゼミナール	自主参加
59期生(3年)	1年次より3回参加	1年次は 教育実地研究基礎	自主参加	音楽教育ゼミナール	自主参加
60期生(2年)	1年次より2回参加	自主参加	自主参加	1年次: 教育実地研究基礎	2年次: 音楽療法概説・演習
61期生(1年)	初参加	自主参加			

【表1. 学生の参加状況と省察科目】

隣接学校園における活動は、この4年で量的にも質的にも深化・拡大しているが、ほとんどの活動は学生の自主性にまかせている。これまでも、実践の企画・省察を丁寧に実施するための時間の確保が困難であることが課題としてあげられてきたが、加えて各学年には学生が10名前後しかいないため、連携校のニーズに丁寧に応えることが難しくなっていることも事実である。

しかし、これらのすべてがマイナスに作用しているわけではない。人数が少ないからこそ、上級生が下級性とチームを組んで現場にできることもできる。短時間でも face to face でミーティングを行うこともできる。多くの課題をかかえながらも、4年にわたる連携活動の成果と言えることは、学年をこえた「学びあいの文化の萌芽」が見られることであるといっても過言ではない。

さて、4 年目に入った連携活動については、「授業で理論的に学び、授業で省察できる往還」を目指した。前述したとおり、多くの活動がボランティアなものである以上、教員による指導や省察よりも学生通しの学びあいを大切にしなければならないが、この取り組みが地域連携だけにとどまらず大学教育・学習支援の推進事業を標榜する以上は、学生の「学びの履歴」を常に意識する必要があるだろう。そこで、本稿においては、各活動で学生が何を学んでいるのかの可視化を試みる（表 2）。

連携日誌を整理すると、音楽教育講座の連携活動は、次のように分類することができる。

A 行事における表現活動	一身田中学校：コラボ音楽祭参加 栗真小学校：6 年生を送る会 白塚小学校：うさぎのうーちゃんのお誕生会
B 音楽活動・授業の支援	一身田中学校：合唱支援 栗真小学校：合奏支援
C 表現活動の協働	白塚幼稚園：トーンチャイム・セッション 南立誠小学校：トーンチャイムコンサート
D 創造的活動の協働	白塚幼稚園：はらぺこあおむしの共演 白塚幼稚園：うーちゃんのうたのアレンジ
E 授業・活動補助	一身田中学校：音楽の授業補助 橋北中学校：合唱コンクールのコメント
F アクションリサーチ	西が丘小学校：授業実践の創出

ところで、実践的指導力を培うためにフィールドに出ることは重要であるが、その順序性・系統性についてはこの数年難題であった。そこで 60 期生（2 年生）については、次のような順序でフィールドと関わるようにし、教育実習前の体験を構造化した。

- ① 文化祭におけるプログラムを作り（ミニコンサート）と演奏（1 年次後期）
- ② 授業の参与観察とワークショップ型授業への参加（1 年次後期）
- ③ 特別な支援が必要な子どもの活動の企画（2 年次前期）
- ④ 幼稚園児と高齢者のふれあい音楽会での競演（2 年次後期）

これらによって、以前に比べて教育実践現場をミクロ的にもマクロ的にも把握できるようになったのではないかと考える。

表 2 は、それぞれの活動で主として何を学んでいるかを示したものである。一つの活動ではすべての項目を網羅することはできないが、他の学年や他コースの学生の活動を参観することにより、間接的に広い領域の学びが展開できる可能性を示唆するものである。むしろそういった学生同士の学びあいや気づきあいが深まることを望んでいる。

特に今年度は、本事業の特徴である「全学齢期の発達理解」を促すことができただけでなく、地域や家族との関わりや教師の同僚性についての意識化が深まった点で、成果があったと考えている。

領域	学習項目	I	II	III
使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項	教育の役割	教育の意義 E	教育現場の多様性 A B D E	学校の社会的役割 A
	倫理感	教員の資質 A B C D E	職業的アイデンティティ C D B E	教職の適性 E F
社会性や対人関係能力に関する事項	他者との関わり	応答的な態度 A B C D E	他者に影響を与える発信力 A B C D E	リーダーシップ、指導力 A B C D E
	実践の省察	記録の必要性 B E	視点に基づいた省察 A B D	反省的实践 A B C D F
幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項	環境 発達	現代の教育問題（学力） B	特別支援の必要な子ども B E	多様な子ども 地域の課題 A B C D E
	活動の企画・実践	自発的な活動への参加 A B C D	活動の企画 A C D	活動目的の明確化と責任 A C D E
	学校組織	組織性 A E	学校を軸とした多様な関係性 A B	同僚性と学校づくり A
	学級経営	教師と子どもの関係 A B C D E F	教師と学級の関係 A B C D E F	学級づくり A B C D E F
	家庭・地域社会との連携	地域と学校 A	地域社会との連携 A	保護者との連携 A
	教育の法制度			
教科・保育内容等の指導力に関する事項	授業づくり	授業の構造 B E F	単元の展開と授業づくり E F	教育目標との関連 E F
	教育内容の理解	専門的知識・技術の習得 A B C D E	教材研究 A C D F	教材開発 C D F
	指導方法と技術	授業参観 A B D E	授業案作成と実践 F	多様な教育方法 A B C E F
	評価	評価の重要性 E	評価方法 E F	実践への活用 F

【表2. 三重大学教員養成スタンダード 2009 と今年度の取り組み】

※ 本教員養成スタンダードは、平成22年度入学生よりカリキュラムに導入される「教職実践演習」開設のために策定したものである。連携活動で何を学んでいるのか、主となるものを網掛けで示している。

2009年度 津市立一身田中学校

文 化 祭

一身田中学校 & 三重大学教育学部音楽科コラボ音楽祭

真 一 中 魂 響 け ひびけ 友 情 の ゆうじょうの 旋 律 う た

♪ 開会式 8:40 ~ 8:45

♪ 合唱コンクール

1年生 8:45 ~ 9:20

2年生 9:20 ~ 10:00

3年生 10:00 ~ 10:40

♪ 三重大学教育学部音楽科 10:40 ~ 11:00

♪ 文化部(吹奏楽部)の演奏 11:15 ~ 11:50

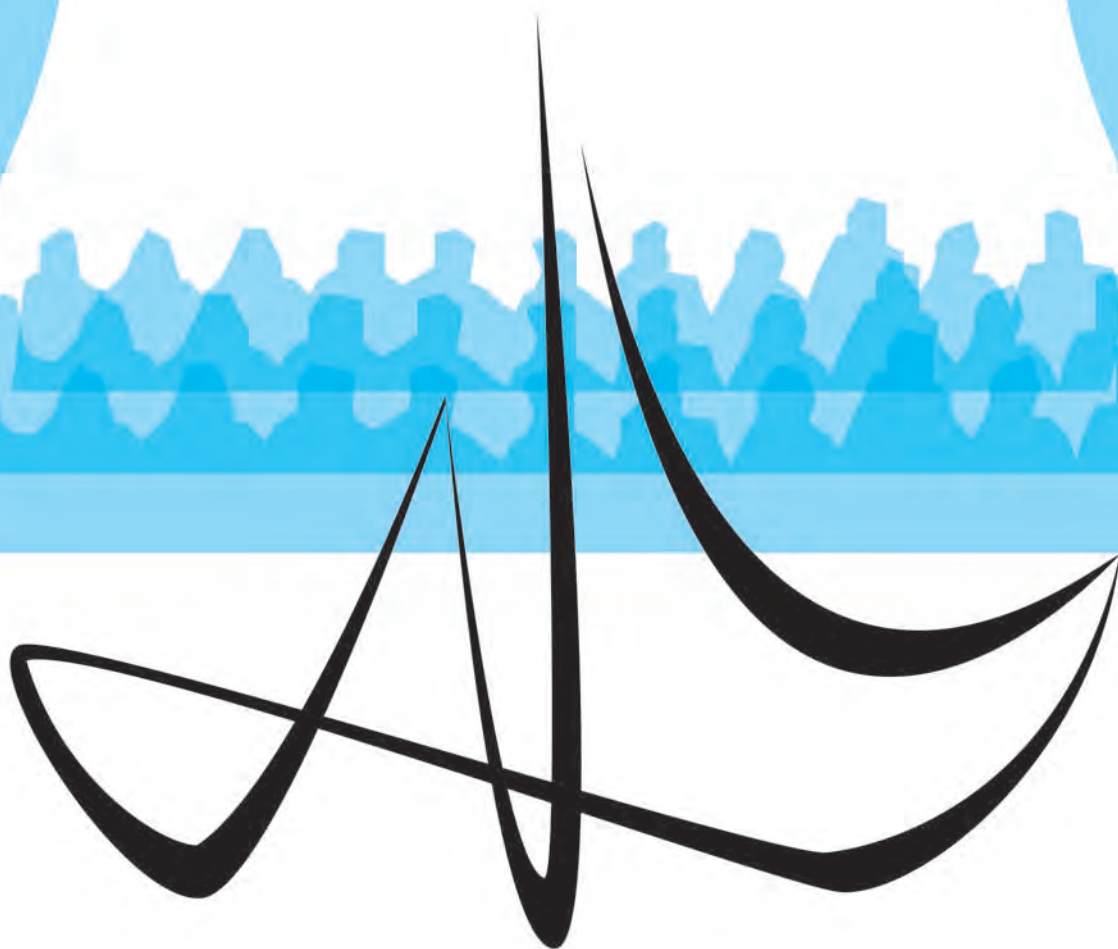
♪ 審査結果発表 11:50 ~ 12:15

♪ 閉会式 12:15 ~ 12:20

10月16日(金) 8:40~12:20

会場:三重大学三翠ホール(大ホール)

団結と絆を胸に限界突破



10月26日(月)
8:40~12:30

会場 三重大学三翠ホール(大ホール)

開会セレモニー	8:40~ 8:50
1年生	8:50~ 9:30
2年生	9:30~10:00
3年生	10:10~10:50
三重大学 教育学部音楽科	10:50~11:10
吹奏楽	11:25~11:55
結果発表	11:55~12:25
閉会式	12:25~

5. 保健体育教育

岡野 昇

■はじめに／今年度の保健体育講座としての取組数は合計 46 本、参加学生数はのべ 207 名であった。取組はおおよそ次の 5 つに整理することができる。

1. 一身田中学校における保健体育科公開授業研究会(体づくり運動—ラート運動—)の開催

11 月 12 日の一身田中学校における保健体育科公開授業研究会(体づくり運動—ラート運動—)の開催に至るまでの取組は下表の通りである。当日に至るまでの取組資料や当日の内容等については【実践報告 I】を参照されたい。

① 日付	② 活動名	③ 連携校	④ 学年・クラス	⑤ 連携校の担当教員	⑥ 実施内容	⑦ 参加大学教員	⑧ 参加学生数	⑨ 参加学生の所属と学年	⑩ 学生が学校現場にいた時間	⑪ 学生の役割	⑫ 大学における該当授業科目名	⑬ 備考
5月28日	教科研修会(第1回保健体育科学習指導案検討会)	一身田中学校	保健体育科教員	清長隆司	6. 教員研修	後藤洋子 岡野 昇	0名		3時間			11月12日の授業公開研究会に向けたラート運動の学習指導案検討。
7月27日	ラート運動実技研修会	一身田中学校	保健体育科教員	清長隆司	6. 教員研修	後藤洋子	3名	保健体育コース3・4年、保健体育専修2年	2.5時間	4. その他(参加)	体操	平成19年度から数え、4回目のラート研修会。講師は横皮貴子氏(東京芸術大学)。テーマは、ラート運動のチェックポイントと応用～3年生の授業で何を教えるか～。
8月24日	教科研修会(第2回保健体育科学習指導案検討会)	一身田中学校	保健体育科教員	清長隆司	6. 教員研修	後藤洋子 岡野 昇	1名	保健体育コース3年	3.5時間	4. その他(参加)	体操 保健体育学ゼミナール	11月12日の授業公開研究会に向けたラート運動の学習指導案検討。
9月29日	教科研修会(第3回保健体育科学習指導案検討会)	一身田中学校	保健体育科教員	清長隆司	6. 教員研修	後藤洋子 岡野 昇	0名		3時間			11月12日の授業公開研究会に向けたラート運動の学習指導案検討。
10月22日	教科研修会(第4回保健体育科学習指導案検討会)	一身田中学校	保健体育科教員	清長隆司	6. 教員研修	後藤洋子 岡野 昇	2名	保健体育コース3年	3時間	4. その他(参加)	体操 保健体育学ゼミナール	11月12日の授業公開研究会に向けたラート運動の学習指導案検討。
11月6日	教科研修会(第5回保健体育科学習指導案検討会)	一身田中学校	保健体育科教員	清長隆司	6. 教員研修	後藤洋子 岡野 昇	3名	保健体育コース3年、スポーツ健康科学コース3年	3時間	4. その他(参加)	体操 保健体育学ゼミナール	11月12日の授業公開研究会に向けたラート運動の学習指導案検討。
11月12日	公開授業研究会	一身田中学校	保健体育科教員	清長隆司	2. 授業研究	後藤洋子 岡野 昇	14名	保健体育コース3・4年、スポーツ健康科学コース3・4年、保健体育専修2年	5時間	1. 参観 4. その他(運営)	体操 保健体育学ゼミナール	第2学年4組保健体育科授業研究会および研究協議。単元は「体づくり運動(ラート運動)」。研究協議会のテーマは「中学校保健体育科授業にラート運動を導入することの意味—中学校体育カリキュラムにおける体づくり運動のあり方をめぐって」。講師は長谷川聖修氏(筑波大学)。なお、公開授業の前に世界ラート選手権入賞者2名による公開演技を全校生徒を対象に開催。三重県中学校保健体育研究会共催。
11月18日	教育実践発表会	一身田中学校	保健体育科教員	清長隆司	2. 授業研究	後藤洋子 岡野 昇	0名		2時間			第2学年5組・第3学年1組保健体育科公開授業。単元は「体づくり運動(ラート運動)」。

2. 学生によるPTA活動の企画実践—体ほぐしの運動を中心とした親子活動—

体ほぐしの運動を中心としたPTA活動(親子活動)の取組は下表の通りである。そのうち学生による企画実践は6月13日の白塚幼稚園で行ったものと2月9日の一身田小学校で行ったものの2本である。詳細については、前者は【実践報告Ⅱ】を、また後者はポスターの頁を参照されたい。

① 日付	② 活動名	③ 連携校	④ 学年・クラス	⑤ 連携校の担当教員	⑥ 実施内容	⑦ 参加大学教員	⑧ 参加学生数	⑨ 参加学生の所属と学年	⑩ 学生が学校現場にいた時間	⑪ 学生の役割	⑫ 大学における該当授業科目名	⑬ 備考
6月13日	PTA園活動	白塚幼稚園	全園児	浅田美智代	3. 学校行事	岡野 昇	5名	保健体育コース3年、スポーツ健康科学コース3年	3時間	3. 授業	総合演習	4月7日打合せ(大学にて。園長1名、保健体育コース4年1名、岡野)。6月3日打合せ(園にて。園長1名、保健体育コース3年4名、スポーツ健康科学コース3年1名、岡野)。内容は、体ほぐしの運動を中心とした親子活動。
10月6日	PTA学年活動	南立誠小学校	第3学年	駒田秀樹	3. 学校行事	岡野 昇	6名	保健体育コース3・4年、保健体育専修2年	2時間	2. 補助 4. その他(参加)	保健体育学ゼミナール	PTA学年活動として実施。内容は、親子が一緒に楽しみながら体ほぐしの運動。
2月9日	PTA学級活動	一身田小学校	2年2・4組	今藤佐貴子 川口恵子	3. 学校行事	岡野 昇 山本俊彦	7名	保健体育コース3・4年、スポーツ健康科学コース3年	2時間	3. 授業	体育教材研究演習	内容は、体ほぐしの運動を中心とした親子活動。

3. 大学と教育現場によるコラボレーションポスターの作成—おうちの 人と遊ぼう!!—

大学(体育科教材研究演習の受講生)と教育現場(南立誠幼稚園・北立誠幼稚園・白塚幼稚園)によるコラボレーションポスター(おうちの人と遊ぼう!!・右写真)の作成の取組は下表の通りである。詳細については、ポスターの頁を参照されたい。



	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	
	日付	活動名	連携校	学年・クラス	連携校の担当教員	実施内容	参加大学教員	参加学生数	参加学生の所属と学年	学生が学校現場にいた時間	学生の役割	大学における該当授業科目名	備考
	10月7日	合同園内研修会	南立誠幼稚園 北立誠幼稚園 白塚幼稚園	南立誠幼稚園・北立誠幼稚園・白塚幼稚園全教員	丹羽立子 森 朋子	6. 教員研修	岡野 昇	4名	保健体育コース4年、保健体育専修2年	2時間	2. 補助 4. その他(参加)	保健体育学ゼミナール	8月26日打合せ(大学にて。教員2名、岡野)。子どもたちが体を動かしたくなる活動の指導について①(仲間づくりの観点から)。
	10月21日	合同園内研修会	南立誠幼稚園 北立誠幼稚園 白塚幼稚園	南立誠幼稚園・北立誠幼稚園・白塚幼稚園全教員	丹羽立子 森 朋子	6. 教員研修	岡野 昇	6名	保健体育コース3・4年、スポーツ健康科学コース3年	2時間	2. 補助 4. その他(参加)	体育教材研究演習	8月26日打合せ(大学にて。教員2名、岡野)。子どもたちが体を動かしたくなる活動の指導について②(モノとかかわりの観点から)。
	12月15日	合同園内研修会	南立誠幼稚園 北立誠幼稚園 白塚幼稚園	南立誠幼稚園・北立誠幼稚園・白塚幼稚園全教員	丹羽立子 森 朋子	6. 教員研修	岡野 昇 山本俊彦	10名	保健体育コース3・4年、スポーツ健康科学コース3年、保健体育専修2年	2時間	4. その他(参加)	体育教材研究演習	運動遊びの教材づくり。体育教材研究演習として実施。
	1月21日	公開保育実践研究会	南立誠幼稚園	全教員	丹羽立子 森 朋子	2. 授業研究	岡野 昇	1名	保健体育コース3年	4時間	1. 参観	体育教材研究演習	公開保育、研究協議および講話と実施。津市グループ別公開保育実践研究会共催。

4. 主として授業研究を中心とした校内研修

主として授業研究を中心とした校内研修の取組は下表の通りである。今年度は、校内研修テーマ(一身田小学校の場合は「学び合い」)に基づき学習指導案検討を行い、授業を公開し、批評し合うという一連の授業研究へのかかわりが増えてきた。

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	
日付	活動名	連携校	学年・クラス	連携校の担当教員	実施内容	参加大学教員	参加学生数	参加学生の所属と学年	学生が学校現場にいた時間	学生の役割	大学における該当授業科目名	備考
7月31日	校内研修会(体育実技)	南立誠小学校	全教員	駒田秀樹	6. 教員研修	岡野 昇	3名	保健体育コース4年、保健体育専修2年	2時間	2. 補助 4. その他(参加)	保健体育学ゼミナール	内容は、仲間づくりのゲーム、体力づくり、走り方のコツ、運動会における表現運動など。
8月4日	学年研修会(第1回体育科学習指導案検討会)	一身田小学校	6年担任	斎藤隆彦	6. 教員研修	岡野 昇	2名	保健体育専修2年	2.5時間	4. その他(参加)	保健体育学ゼミナール	内容は、6年生の体育学習指導案検討会。三重県小学校体育研究会との共催(4名参加)。
8月4日	学年研修会(運動会ダンス指導)	一身田小学校	5年担任	加藤真由子	6. 教員研修	岡野 昇	1名	保健体育コース3年	1時間	3. 授業	保健体育学ゼミナール	内容は、運動会における5年生の表現運動の振付けを提示。保健体育コース3年3名が振付けを考え、ビデオと紙媒体にて提示し、実際に振付け指導を実施。
8月4日	校内研修会(講演)	一身田小学校	全教員	川本伸也	6. 教員研修	岡野 昇	4名	保健体育コース3・4年、保健体育専修2年	2.5時間	4. その他(参加)	保健体育学ゼミナール	7月31日打合せ(大学にて。教員3名、研究員1名、岡野)。内容は、「学び合い」とは何か。
10月27日	学年研修会(第2回体育科学習指導案検討会)	一身田小学校	6年担任	斎藤隆彦	6. 教員研修	岡野 昇 山本俊彦	10名	保健体育コース3・4年、スポーツ健康科学コース3年、保健体育専修2年	2時間	4. その他(参加)	体育教材研究演習	内容は、6年生の体育学習指導案検討会。三重県小学校体育研究会との共催。体育教材研究演習の内容として実施。
11月17日	学年研修会(体育科授業研究会)	一身田小学校	6年担任	斎藤隆彦	2. 授業研究	岡野 昇 山本俊彦	6名	保健体育コース3・4年、保健体育専修2年	4時間	1. 参観	体育教材研究演習	第6学年4組体育科授業研究会および研究協議。単元は「ボール運動(ゴール型)」。三重県小学校体育研究会共催。
11月18日	教育実践発表会	一身田中学校	全教員	笠原 晋	7. その他	岡野 昇	0名		3時間			パネルディスカッションにパネリストとして参加。テーマは「未来に夢や希望を持ち、郷土を愛する子どもを育てる」。
11月25日	校内研修会(国語科授業研究会)	一身田小学校	全教員	川本伸也	2. 授業研究	岡野 昇	0名		2時間			第2学年3組国語科授業研究会および研究協議。単元は「せいひのび」。「学び合い」に関する研究協議。
12月2日	校内研修会(国語科授業研究会)	一身田小学校	全教員	川本伸也	2. 授業研究	岡野 昇	1名	スポーツ健康科学コース3年	4時間	1. 参観	保健体育学ゼミナール	第1学年1組国語科授業研究会および研究協議。単元は「ずうっと、ずうっとだいきだよ」。「学び合い」に関する研究協議。
12月24日	ラート運動実技研修会	横北中学校	保健体育科教員	上島久明	6. 教員研修	後藤洋子 岡野 昇	1名	保健体育コース3年	2時間	2. 補助 4. その他(参加)	保健体育学ゼミナール	ラートの概要説明および基礎実技。講師は後藤洋子氏(三重大学)。
2月2日	校内研修会(社会科授業研究会)	一身田小学校	全教員	川本伸也	2. 授業研究	岡野 昇	3名	保健体育コース3・4年、スポーツ健康科学コース3年	4時間	1. 参観	保健体育学ゼミナール	第4学年1組社会科授業研究会および研究協議。単元は「高田仏だん調査隊」。「学び合い」に関する研究協議。津市教育研究会中ブロック社会科部会共催。

5. 学生と現場教師の協働による子どもの生活・健康実態調査に基づいた健康教育実践能力向上

学生と現場教師（保健体育科教員，養護教諭等）の協働により児童・生徒の生活や健康実態調査を実際に行い，その情報を卒業研究としてまとめて行く過程の中で，将来教師としての健康教育実践能力向上をめざすための取組は下表の通りである。詳細は【実践報告Ⅲ】を参照されたい。

日付	活動名	連携校	学年・クラス	連携校の担当教員	実施内容	参加学生数	参加学生の所属と学年	学生が学校現場にいた時間	学生の役割	該当科目名
7月13日	養護教諭の研究活動に関する支援	橋北中学校 南が丘小学校 北立誠小学校 西が丘小学校		各学校養護教諭	6教員研修	0				
8月4日	生徒の健康度評価に対する支援	橋北中学校	全学年	保健体育科教員	7.その他	2	保健体育コース4年	1	2.補助	卒業研究
8月6日	学童保育参加児童に対する運動支援	南立誠小学校	4～6	保護者	7.その他	2	保健体育コース4年	1	2.補助	卒業研究
8月21日	養護教諭の研究活動に関する支援	橋北中学校 南立誠小学校 北立誠小学校 西が丘小学校		各学校養護教諭	6教員研修	0				
9月1日	学童保育児童の体力測定	南立誠小学校 北立誠小学校	3～6		7.その他	5	保健体育コース3、4年生	3		卒業研究
9月2日	学童保育児童の体力測定	南立誠小学校 北立誠小学校	3～6		7.その他	5	保健体育コース3、4年生	3		卒業研究
9月3日	生徒の健康度評価に対する支援	橋北中学校	全学年	保健体育科教員	7.その他	7	保健体育コース3、4年	5	2.補助	卒業研究 健康管理学
9月4日	生徒の健康度評価に対する支援	橋北中学校	全学年	保健体育科教員	7.その他	7	保健体育コース3、4年	6	2.補助	卒業研究 健康管理学
9月7日	生徒の健康度評価に対する支援	橋北中学校	全学年	保健体育科教員	7.その他	7	保健体育コース3、4年	4	2.補助	卒業研究 健康管理学
9月7日～11月30日	学童児童に対する運動指導、健康教育	南立誠小学校 北立誠小学校	3～6		7.その他	2	保健体育コース4年生	3		卒業研究
9月8日	生徒の健康度評価に対する支援	橋北中学校	全学年	保健体育科教員	7.その他	7	保健体育コース3、4年	3	2.補助	卒業研究 健康管理学
12月1日	学童保育児童の体力測定	南立誠小学校 北立誠小学校	3～6		7.その他	5	保健体育コース3、4年生	3		卒業研究
12月2日	学童保育児童の体力測定	南立誠小学校 北立誠小学校	3～6		7.その他	5	保健体育コース3、4年生	3		卒業研究
12月7日	児童の喘息・アレルギー・身体活動量に関する実態調査	南立誠小学校	4、5年	養護教諭	7.その他	10	保健体育コース3、4年	1.5	2.補助	卒業研究
12月8日	児童の喘息・アレルギー・身体活動量に関する実態調査	南立誠小学校	2、3年	養護教諭	7.その他	10	保健体育コース3、4年	1.5	2.補助	卒業研究
12月9日	児童の喘息・アレルギー・身体活動量に関する実態調査	南立誠小学校	6年	養護教諭	7.その他	10	保健体育コース3、4年	1.5	2.補助	卒業研究
12月14日	児童の喘息・アレルギー・身体活動量に関する実態調査	南立誠小学校	2年	養護教諭	7.その他	10	保健体育コース3、4年	1.5	2.補助	卒業研究
12月15日	児童の喘息・アレルギー・身体活動量に関する実態調査	南立誠小学校	1年	養護教諭	7.その他	10	保健体育コース3、4年	1.5	2.補助	卒業研究
12月16日	児童の喘息・アレルギー・身体活動量に関する実態調査	南立誠小学校	5、6年	養護教諭	7.その他	10	保健体育コース3、4年	2	2.補助	卒業研究
1月6日	保健室における情報の視覚化に関する研修	橋北中学校 南立誠小学校 北立誠小学校 西が丘小学校 南立誠小学校		各学校養護教諭	6教員研修	0				

■おわりに／連携事業では，「打ち合わせ時間の確保」が度々課題としてあげられる。私たちは以上のような 46 本の取組を通じ，「打ち合わせ時間」は「単なる連絡事項のやり取りの時間」ではなく，「教材研究の時間」であり「自らの専門性を高める時間」になっていたことを感じている。（文責：岡野 昇）

津市立一身田中学校保健体育科授業研究会

中学校保健体育科授業にラート運動を導入することの意味
—中学校体育カリキュラムにおける体づくり運動のあり方をめぐって—

(報告書)

三重大大学教育学部・津市立一身田中学校

目 次

三重県津市立一身田中学校保健体育科授業研究会開催要項	54
三重県津市立一身田中学校保健体育科学習指導案	56
三重県津市立一身田中学校保健体育科授業研究会協議会記録	61
中学校体育授業の教材として導入したラート運動について	72
これまでの主な取組	75
2007 年度／実践報告(資料 1)	76
2008 年度／実践報告(資料 2)	80
2008 年度／新聞記事(資料 3)	85
2008 年度／卒業論文抄録(資料 4)	88
2009 年度／第 4 回ラート運動実技研修会事後報告(資料 5-1)	90
2009 年度／第 4 回ラート運動実技研修会事後報告(資料 5-2)	91
2009 年度／第 4 回ラート運動実技研修会事後報告(資料 5-3)	92
2009 年度／第 2 回ラート運動学習指導案検討会事後報告(資料 6)	93
2009 年度／第 4 回ラート運動学習指導案検討会事後報告(資料 7)	96
2009 年度／第 5 回ラート運動学習指導案検討会事後報告(資料 8)	98

三重県津市立一身田中学校保健体育科授業研究会開催要項

三重大学教育学部は、平成18～20年度に現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）で「教育実践力の育成と学校・地域の活性化」が選定され、隣接する津市立一身田中学校区（1中学校，3小学校，1幼稚園）と連携協力しながら取組を進めてきました。本年度からは、文部科学省の「大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム」に採択され、連携協力を津市立橋北中学校区（1中学校，3小学校，2幼稚園）に拡大し、これまでの取組を継続しています。本研究会も、本学部と一身田中学校との地域連携事業として下記の通り、公開授業，研究協議を開催いたします。

つきましては、皆様方のご参加をいただき、私たちと共にテーマについて探求していただけますようご案内申し上げます。

記

1. テーマ及び概要

〔テーマ〕 中学校保健体育科授業にラート運動を導入することの意味

—中学校体育カリキュラムにおける体づくり運動のあり方をめぐって—

ラートは1925年にドイツで酒樽の外枠をヒントにして子どもの遊具として考案された器具です。誰でも簡単に転がれる特性を持ち、後に競技種目として発展していきました。現在、ヨーロッパを中心に生涯スポーツとして、また高度な技術を追求する競技スポーツとして実施されています。日本では第二次世界大戦時に「フープ（操転器）」として航空操縦士養成の訓練活動に用いられていましたが、大戦後は「軍事訓練」に繋がる活動と見なされ一切姿を消しました。1989年、当時東海大学の長谷川聖修氏（現筑波大教授）が留学先のドイツから日本に持ち帰り、ニュー・スポーツとして再び普及活動が開始されました。

私たちはこれまでラート運動の特性である「非日常的な身体感覚」，「器具に身を任せる感覚」，「身体認知」に着目し、中学校の保健体育科授業の教材として導入するために準備を進めてきました。我が国ではヨーロッパの国々と比較してラートの普及度があまり高くないため、中学生を対象にラートの授業を実践した例が見られないこと、授業担当教員にラートの経験が皆無であったこと等の解決すべき課題があり、教員の実技研修を始めとして入念な準備が必要でした。また、ラートは直径が約200cm，重量が約50kgの大きくて重い器具であるため、安全管理の面から保管方法の検討も不可欠でした。平成18年度，19年度の2年間で概ねこれらの課題が解決されて準備が整ったので，平成20年度には正課体育の授業（中学2・3年生を対象）として実施することができ，今年度は2年目の取組となります。

今回は，こうした我が国では前例のないラート運動の授業を公開することを通して，中学校保健体育科授業にラート運動を導入することの意味について，中学校体育カリキュラムにおける体づくり運動のあり方と関連させながら参観者と協議することを目的としています。

2. 主 催 三重大学教育学部，三重県津市立一身田中学校
3. 共 催 三重県中学校保健体育研究会
4. 期 日 平成21年11月12日（木）
5. 場 所 三重県津市立一身田中学校体育館（授業公開）
三重大学教育学部専門校舎1号館（研究協議会）
6. 日 程 12：30～13：00 受付・スクールバスにて中学校まで移動（駐車場は三重大学）
13：00～13：15 公開演技（一身田中学校体育館）
演技／世界ラート選手権入賞者／深瀬友香子氏（目白大学）・檜皮貴子氏（東京芸術大学）
13：30～14：20 2年4組公開授業（一身田中学校体育館）
14：30～15：30 スクールバスにて大学まで移動
15：30～17：30 研究協議会（三重大学教育学部）
15：30～15：35 開会挨拶（三重大学教授・日本体操学会副会長 後藤洋子），授業者・講師紹介
15：35～15：45 取組経過とテーマ説明，授業の意図説明
15：45～16：05 講師の先生からの初発のコメント，全体質疑応答
16：05～17：05 グループワーク，各グループプレゼンテーション
17：05～17：30 講師の先生からの総括的コメント，閉会挨拶（三重大学教授・学長補佐 山本俊彦）
18：00～20：00 懇親会（三重大学パセオ）
7. 講 師 ~~細江 文利 氏（東京学芸大学教授・日本体育科教育学会会長）~~
長谷川聖修 氏（筑波大学教授・日本体操学会副会長）
8. 対象者 津市立一身田・橋北校区教員，三重県中学校保健体育研究会会員，三重大学教育学部生
ほか，最大50名まで。
9. 事務局 三重大学教育学部運動方法学研究室（後藤洋子）
三重大学教育学部保健体育科教育学研究室（岡野 昇）
10. 参加申込 できるだけ学校や関係機関で参加者の申込を取りまとめて，別紙「参加申込書」にて，
FAXまたはメールでお申込みください。
*参加申込は10月21日（水）までとなります。なお，会場等の関係で先着50名
までとさせていただきますのでご了承ください。
*自家用車で参加予定の方は，一身田中学校には駐車できません。三重大学工学部隣
接駐車場に駐車していただき，スクールバス（無料）で移動していただくことにな
ります。
*スクールバスをご利用の場合は，12時20分までに教育学部専門校舎1号館前の
ロータリーにお集まりください。
- 申込先：三重大学教育学部 岡野 昇 〒514-8507 三重県津市栗真町屋町 1577
TEL・FAX 059-231-9285, E-mail okano@edu.mie-u.ac.jp

保健体育科学習指導案

日時 平成 21 年 11 月 12 日 (木) 5 限
場所 津市立一身田中学校 体育館
指導者 杉崎 隆典, 小方 順治
(清長 隆司, 堤 あい)

1 指導学級 2 年 4 組 (男子 17 人, 女子 15 人, 合計 32 人)

2 単元名 体づくり運動 (ラート運動)

3 目 標

- ① ラート運動の特性を理解し、ラートに働きかけたり、ラートから働きかけられたりする身体操作を習得したり、身体感覚を享受する。
- ② 自分や仲間の「回れる」・「回れない」感じを察知し、その感じを仲間に工夫して伝え合い、教え合うことができる。
- ③ グループで互いの安全を確かめ補助をし合いながら、周囲の状況にも目を向けラート運動を行うことができる。

4 教材について

ラートは、直径約 2 m の鉄製の輪を 2 本平行につなげた運動器具で、一身田中学校では、三重大学（教育学部保健体育科 後藤洋子先生、岡野昇先生）との連携事業のひとつとして、ラート運動の中学校での教材としての導入の準備を進めてきた。この教材の導入にあたって、授業を担当する教員自身もラートを経験したことが無いため、まずは教員自身が 2 年間（平成 18 年度～19 年度）の実技研修を行い、昨年度（平成 20 年度）より 2・3 年生を対象に授業を実施している。

ラート運動には、「非日常的な身体感覚」、「器具に身を任せる感覚」、「身体の認知」という特性があり、今までの運動にない感覚を味わうことができる。ラート運動では、ラートを操ろうとする力だけでなく、力を抜きラートに操られる瞬間があると考えられる。このラートの特性を味わわせながら、中学生の体を育てたいと考え、新学習指導要領において各学年で必修となる「体づくり運動」としての導入を考えた。

5 生徒について

全体としては、体が小さい生徒が多く、体力もやや劣っている。男子は体を動かすことが好きな生徒が多い。しかし、落ち着いて話を聞くことは苦手である。女子は、興味があっても一歩引くような生徒が多く、積極的に動く生徒は少ない。運動部へ加入している生徒も少ない。中学校 2 年生としては幼い感じの雰囲気のある学級である。4 組の運動部の加入率は約 60% で、2 年生平均（66%）よりやや低い。

6 指導について

ラートを体育館の隅に保管するようになった頃、「これ、何？」と興味を示す生徒が多くいた。昨年度のように、生徒たちの日常の会話からも「やってみたい。」という気持ちの生徒も多いと思われる。（昨年度の授業の様子では、興味を示す生徒が多く、授業後の感想でもかなりの生徒がもう一度やりたいという感想を持った。）

ラート運動を「体づくり運動」として扱うので、技の難易度よりも、ラート運動の特性である「操る－操られる」「乗る－乗せられる」という身体感覚の享受と身体操作の習得を目指したい。また、グループの活動では、初歩段階（5 級程度）の技を練習し、グループの全員ができるようになることを目標とさせ、回ることができる生徒は、その回れる感じを仲間に伝えたり、逆に回れない生徒はその回れない感じを相手に伝えたりして、互いにその感じを察知しようとして、仲間を観察したり、自分の動きを確かめ、自分の感覚や動きなどを伝えながら、仲間同士で教え合い協力し合って共に上達していくことを重視したい。

グループ編成では、ラートの直径に適した身長があるため、身長を基準（ラートの直径＝身長＋35～45 cm）としたグループ編成とする。

2年生の生徒達にとって、ラート運動は初めて経験するスポーツである。そのため、スタートラインが同じという状態ででき、「できる。」「できない。」といった先入観がない状態で学習に入ることができる。しかし、途中からは、「できる。」「できない。」という差が出てくることが予想されるが、「できた」生徒が「できない」生徒に無理に回転を要求することのないように配慮する。また、できるようになった生徒には、さらにゆっくり回転させたり、反動をつけないで回転させたり、途中で止めさせたりすることを課題として活動させたい。

また、安全に活動するために、空き時間の体育科教員ができる限り授業に入り、TTで指導していく。

7 指導計画

第1時 ラートに慣れよう！

第2時 いろいろな回り方をしてみよう！①（側方回転）

第3時 いろいろな回り方をしてみよう！②…《本時》

（シュピンドル前方回転、シュピンドル後方回転、前方回転、後方回転）

第4時 連続回転をしてみよう！①（2回転）

第5時 連続回転をしてみよう！②（2回転＋2回転）

第6時 演技会

8 本時の指導について（第3時）

① 目標 いろいろな回り方をしてみよう！②

（シュピンドル前方回転、シュピンドル後方回転、前方回転、後方回転）

② 準備物 ラート 7台、学習カード

③ 展開

	生徒の活動	時間	指導上の留意点
はじめ	1 整列、体操をする 2 先生の話聞き、本時の目標を知る。	10分	1 自分達で早く集合整列できるようにさせる。 2 目標をはっきりと認識させる。 ○グループ全員ができることを目標とさせ、グループ内で教え合って練習させる。 ○みんなが上達するには、お互いが「できる」「できない」感じを伝え合うことが大事だということを理解させる。 ○安全に活動するためには、補助が大切であることを知らせ、補助する方法を教える。（かかとを押し込み、はずれないようにする。）
なか	3 いろいろな回り方をしてみよう！ ① シュピンドル前方回転、シュピンドル後方回転	15分	○教師は、各グループを回って、「操る－操られる」という感じを味わっているかを視点として指導する。 〈実技のポイント〉 ・ グリップは逆手である。 ・ 腕の曲げ伸ばしが正しく行われている。 ・ 足先を同じ方向に向け、つま先を伸ばしてベルトに足を固定させている。

	② 前方回転，後方回転	15分	<ul style="list-style-type: none"> ・ 顔は正面の逆を向いており，頭がリンググリップの位置にある。 ・ 両膝が伸びている。 ・ 腰が前後左右に突き出しておらず，胴体がまっすぐである。 ・ ラートが止まらず，スムーズに回っている。 <p>○誰からのどんな声かけで回れるようになったかを発表させる。</p> <p>○技ができるようになったら，発展課題としてゆっくり等速で回転したり，途中で止まったり，反動をつけないで回転することに挑戦させる。</p> <p>○教師は，各グループを回って，「操る一操られる」という感じを味わっているかを視点として指導する。</p> <p>〈実技のポイント〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ グリップは逆手である。 ・ 両腕が伸びている。 ・ 足先を同じ方向に向け，つま先を伸ばしてベルトに足を固定させている。 ・ 頭がリンググリップの位置にあり，顎があがっていない。 ・ 両膝が伸びている。 ・ 腰が前後左右に突き出しておらず，胴体がまっすぐである。 ・ ラートが止まらず，スムーズに回っている。 <p>○誰からのどんな声かけで回れるようになったかを発表させる。</p> <p>○技ができるようになったら，発展課題としてゆっくり等速で回転したり，途中で止まったり，反動をつけないで回転することに挑戦させる。</p> <p>○側方回転やシュピンドル前方回転，シュピンドル後方回転からの組み合わせも練習させてみる。</p>
まとめ	<p>4 反省を書く</p> <p>5 片付ける</p>	10分	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学習カードの本時の反省を書かせる。 ・ 協力し合って片付けさせる。

☆ 目標

- 1 ラートに働きかけたり、働きかけられたりする身体の使い方を学ぼう。
- 2 自分や仲間の「回れる」・「回れない」感じを互いに伝え合い、教え合おう。
- 3 互いの安全を確認し合ったり、補助をし合ったりして、安全に活動しよう。

☆ 今日の授業の反省

◎よくできた ○できた △少しできなかった ×できなかった

自己評価項目	月/日	/	/	/	/	/	/
ラート運動で気持ちよく回れたか。							
ラートと一体化できたか。							
目標を達成できるように積極的に活動できたか。							
グループの人たちと教えあって活動できたか。							
準備や片付けをすすんでしたか。							
事故が起こらないように、自分や周囲の安全に気をつけたか。							

☆ できた日付を書こう。

技の名前	回り方	回れた	ゆっくり回れた	反動なしで回れた	途中停止再始動
側方回転		/	/	/	/
シュピンドル前方回転		/	/	/	/
シュピンドル後方回転		/	/	/	/
前方回転		/	/	/	/
後方回転		/	/	/	/
		/	/	/	/
		/	/	/	/
		/	/	/	

* 下の空欄にはオリジナルな回りかたなどを書こう。

※ 裏面につづく

☆ 今日の活動を振り返ってみよう。

	日/付	今日の活動を振り返って（効果のあった友だちのアドバイス等も書く）		先生より
1				
		次時の めあて		
2				
		次時の めあて		
3				
		次時の めあて		
4				
		次時の めあて		
5				
		次時の めあて		
6				

津市立一身田中学校保健体育科授業研究会協議会記録

中学校保健体育科授業にラート運動を導入することの意味 ー中学校体育カリキュラムにおける体づくり運動のあり方をめぐってー

2009.11.12 三重大学教育学部大会議室

1. はじめに

岡野(三重大学) それでは協議会の方に移らせていただきたいと思います。初めに、後藤先生の方から、開会のご挨拶をよろしくお願いいたします。

後藤(三重大学) こんにちは。今日はどうもお忙しい中ありがとうございました。講師の先生ありがとうございました。授業者の先生お疲れ様でした。後ほど、岡野先生の方からこの経緯を説明させていただきますけれども、とにかく中学校でラートの授業を正課体育の中に入れるということで、私たちは、日本ラート協会の方に問い合わせたら「世界で初めてだ」というふうなうかがいがありました。そのことに強く感動して、このような授業研究会を開催することになりました。今日は、授業を見ての感想と、ラートだけに限らず、これは体づくり運動の一環としてやっておりますので、広く視点を広げて、ご議論いただければと思います。よろしくお願いします。

岡野 ありがとうございます。それでは、本日の授業者の先生方の御紹介をさせていただきたいと思います。小方先生、自己紹介でよろしいでしょうか。それではよろしくお願いします。

小方(一身田中学校) こんにちは。一身田中学校の小方です。また後で授業のことについては話させていただきます。

杉崎(一身田中学校) こんにちは。一身田中学校体育科の杉崎です。今日はどうもありがとうございました。この後もよろしくお願いします。

清長(一身田中学校) こんにちは。一身田中学校の清長と言います。本校1年目になります。本当に少し前から取り組み始めたところで、この後様々な形で、様々な人にご意見をいただければと思います。よろしくお願いします。

堤(一身田中学校) こんにちは。一身田中学校2年目の堤と申します。まだ初任から2年目で、分からないことがいっぱいありますので、よろしくお願いします。

岡野 ありがとうございます。それでは続きまして、講師の先生のご紹介ですが、これも自己紹介の方がよろしいということですので、長谷川先生よろしくお願いいたします。

長谷川(筑波大学) こんにちは。筑波大学の長谷川と申します。ラートを日本に持ち込んだ人という紹介が多くありますが、あれ程の物は重たくて持ち込めません。船便で送って参りました。それが、1989年で、かれこれ20年前です。この様に体育の授業で取り上げていただけるなど、夢にも思っていない夢が現実になってちょっと興奮しています。よろしくお願いします。

2. 中学校体育にラートを導入することの意味と授業構想

2-1. これまでの取り組みの経過とテーマの説明

岡野 ありがとうございます。もうお一方、細江先生を講師としてご紹介させていただきたかったのですが、一身上の都合により、昨日急に電話が入りまして、大変皆様には申し訳ないのですが、キャンセルさせていただきたいというご連絡がありましたので、残念ですが、ご了承願います。

それでは、資料の2ページをご覧ください。今からの協議会の流れですが、終了時刻は5時半を予定しております。大体1時間半ということになりますけれども、グループワークを中心に進めて行きたいと考えておりますので、よろしくご協力のほどお願いしたいと思います。その前後に、長谷川先生の方からコメントをいただくという時間をとっております。後半のコメントの方は少し体を動かしながら、お話をいただけるということになっておりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、3ページの方をご覧くださいまして、これまでの私たちの取り組みの経過と今回のテーマ説明を、簡単に私の方からご紹介させていただきたいと思います。大体11の流れがありますが、ラートを体育の授業に取り入れて、今日まで3年かかっております。大きく1番、2番、3番というのは、これは2007年度の取り組みになります。ラートを導入しようという検討会を始めて、先生方が実際に実技研修を行ったのが1年目の取り組みです。それから、2008年度につきましては、実技研修をもう一度先生方の方で取り組んでいただいて、はじめて中学校の2年生と3年生の正課の体育授業にラート運動を導入したというのが、主な流れになっております。それから、今年度

の2009年度は、本日の授業研究があったわけなのですが、それに至るまでに、ラートの実技研修を4人の先生方が取り組まれ、更に、具体的にどのような形で学習指導におおしていったらよいのかという検討会を、5回ほど重ねて本日に至っているという流れです。そのような取り組みの資料がその後にございますので、またそれも参考にさせていただきながら、本日のグループワークで活発なご討議をいただければと思います。

なお、テーマは「中学校保健体育科授業にラート運動を導入することの意味」ということを、大きなテーマとして掲げさせていただいております。ラート運動を導入すれば、それで体育の授業、中学校の体育の授業が変わるということではなく、ラート運動を導入することの意味が、一体どこにあるのかということテーマにできたらと考えております。なお、昨年度は、器械運動の一環として、「器械運動としてのラート運動」というような取り上げ方をしました。今年度は、体づくり運動、旧の体操領域にあたりますが、「体づくり運動としてのラート運動」というような取り上げ方をしております。したがって、中学校体育カリキュラムにおける体づくり運動、これは小学校1年生から必修となりましたが、そのような体づくり運動のあり方、これからのあり方をめぐって、ご議論いただくことができればということで、このようなテーマを設定させていただいております。簡単ではございますけれども、これで私の方からのご説明を終わらせていただきます。

続きまして、本日の授業の意図やねらいとしていたことを小方先生の方からご紹介いただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

2-2. ラート運動の授業内容と授業の展開

小方 まず、ラートをやっていく中で、先ほども岡野先生から話がありましたが、器械運動でやっていくのか、それとも体づくり運動でやっていくのかということで、ラート運動の特徴である、非日常的な感覚、それから、ちょっと浮くような感覚を味わいながら、最初は少しラートに自分から力を加えてやる、働きかけていくけれども、そのあと後半部分は逆にラートに身を任せるところもあって、いわゆる身体操作とか身体感覚みたいな部分を、自分自身で味わうことができる。その内容をやはり強調していくと、体づくり運動の方が、よいのではないかとということで、今年度、一身田中学校では体づくり運動の領域としてラート運動を取り上げてきました。

先ほども話がありましたように、4年前からこのように取り組んでおります。それで、実技研修をいろいろさせていただきました。有名な選手の方々に来ていただいて、自分達が練習した

のですが、中学校というところは、放課後は部活があって、なかなか体育館が使えない。それから夏休みもほとんど丸一日体育館で体育館の部活がやっている。その中で、教えてもらったことを何とか練習したいのですが、なかなか練習ができないという部分があり、せっかく素晴らしい人達に教えていただきながら、それをなかなか引き続いて練習出来ないという部分がありました。それから2年ぐらい経ちまして、いつまでも研修ばかりで終わっていただけないということで、これを子どもたちに返していかなければならないということで、昨年の平成20年度から2・3年生を対象に授業を行っています。

2年生は、まずラートで、検定の級でいくと5級に当たる、その5級程度の基本的な技を経験しながら、自分の色んな体の動かし方とかそういったものを経験していくことを、やっていくという形で実施しています。そして、3年生の方は、一通り、5級の技、側方回転、シュビンデルの前方回転、後方回転、それから前方回転、後方回転、中にはぶらさがりの回転をちょっとしている子もいます。そのようなことを、できるようになって、3年生では今、技をつなげてやったりとか、それから、違う直系のリングの人とチームになって、団体演技というか、そのような感じの事をしたりとかして、楽しんでいます。2年生の方は、さっきも言ったように、基本的な技を経験していくという形で、授業計画の所にも書いてありますように、まずは、スイングをして、スイングから側方回転にはいっていく。それから、シュビンデルの前方回転、後方回転、そして前方回転、後方回転。これらの技を2年生のうちに、できたらできるようになってほしい。一人で回れるようになってほしいなどと考えて指導しています。

今日は、その3時間目にあたります。1時間目はラートに慣れる運動という事で、ラートの上に乗った後、横に倒してその上に乗ってバランスをとってみたり、上を歩いてみたり、あとは二人でシーソーをしてみたりとか。このシーソーは楽しいみたいで、例えば今日も、5限目始まるまでの時間があつたので、本当は回転もしたいのだけれども、子どもたちは早くしたかったのですけれども、回転は危ないのでシーソーならやってもいいということで、あのよう的一生懸命シーソーやっていました。それから、授業の始めに、ラートのその感覚を思い出すために、最初数分間ラートで色々やってみなと言うと、シーソーをやっている子は多いです。そのようなことをしながら、だんだんその日の授業の目指す技や回り方について練習するようにしています。今日は、最初、側方回転を前の時間にやっていますので、それを復習という事でさせました。やっているうちに、グループの皆ができたところがあるので、そのようなところに関しては、次のシュビンデルの前方回転、後方回転を教えていく

という形を取りました。

授業のスタンスとしては、できるだけ教え合いをさせたい。ラートの場合、かかとが外れると危ないので、子どもたちもその辺はよくわかっているもので、補助のし合いというのをよくしてくれます。だから、グループで活動するにはすごくいい教材と考えて、それでグループで練習して、そしてグループでお互いができたら、できた子が、こうやってするとうまくいくよとか、それからできない子が、うまくいかないのだけれどもどうしたらいいのだろうか、そのグループの中で話し合う、お互いが相談し合うという感じの事をしながら、全員がマスターしてほしいなと思っています。そして、今日も最初授業の始めに言ったのですが、グループの皆でできるようになったら、次の技を教えるというような形で進めています。そのような関係で、一斉授業というよりは所々で、もう、このグループシュピンデル入っていったなとか、このグループ前方回転入っていったなとか、そのようなところがあって、ちょっとまとまりがなかったかなという感じを受けられたかもわからないのですけれども、こちらの意図としてはそのような、皆で教え合って上達していこうということでやってきました。それで、ただそれだけじゃなかなか難しい部分があるので、途中、ある程度、例えば今日であればシュピンデルの回転がだいたいほとんどのところでそれに入ってきたので、途中で一斉に集めて、杉崎先生に手本を示してもらって、回転してもらいました。足首の使い方とか、そのようなところを確認することをしてきました。予定としては、前方回転、後方回転もある程度もうちょっとこのグループが練習するようになったら、また集めてというような、ポイントを確認しようかなと思ったのですが、ちょっと今回の授業では、前方回転や後方回転に入るのをちょっと恐がった子が多かったように思います。それで、ここまでの時間がなかったということが現状だったかなと思います。そのような形で今日は終わりました。

なかなか、こちらの意図としては教え合っということで、多分教え合っているのだけれども、全体の中で集めると、どんなアドバイスがうまくいったかとか、うまくいった子がどんなことをしたらうまくいったというようなことで聞いてみたのですが、なかなか返ってこなくて今日も声や意見がなくて寂しかったのですけれども。そのあたりの所ももうちょっと子ども達の意見を聞きだせる発問とか、そういったものを自分自身がもうちょっと考えなければいけないなと思っています。授業としては以上です。

岡野 どうもありがとうございました。それではグループワークに入る前に、長谷川先生の方から初発のコメントをよろしくお願ひしたいと思います。

3. ラート運動の特性

3-1. 眩暈(イリンクス)としてのおもしろさとからだ気づき

長谷川 小方先生の話で、おおよそ今までの取り組みと今日の授業のねらいもとりあえずわかりましたので、私の方からは、大きくまず2つの点を話したいと思います。1つは今日の本時の授業においてラートの授業を振り返った話と、それからもう1つは、単元全体としてラートという教材が意味するところについて簡単に私が考えるところをお伝えしたいと思います。まず、今日の授業で私が一番恐れていたのは中学生がラートとどう関わることができるのかということです。先ほど小方先生がおっしゃっていたように、まず休み時間から動き始めていたということが、何より大事だと感じます。「教えるー教わる」という授業の関係性を越えて、彼らがまず主体的に動いているという現実を生んだことは、ラートと言う教材の魅力と言えるでしょう。このことが何より私の中で嬉しかったことです。これは多分、指導された先生達が上手にラートの魅力を伝え、もちろん先生方ご自身も本当に努力されて、ここまできたのだと思うと本当に涙がこぼれ落ちるような感じで子どもたちの活動を嬉しく見させてもらいました。

それから、昨今の教材の教育的意味づけでいうと、ほぐしも含めて体づくり運動では特に、ラートの魅力とは、言い方はかなり語弊があるかもしれませんが、やはり「危ない」ということが生み出す他者へのいたわりが自然に生まれてくることです。楽しいことと危ないことは、見事に表裏一体していて、安全だと少しも楽しくないですし、危険だからこそ楽しいという、かなりすれすれのところがあります。しかし逆に言うとそれも仲間たちが支えることで、そのすれすれのところを相手が危険な状態にならないようにするというその一種の緊張感が、この教材が持つ魅力だと改めて特に今日感じました。ただ、2人3人は落ちていましたが、中学生の子たちは体が柔らかいし、大丈夫かなと思いつながり見ていました。また先生方がおおらかに見ているのも、僕もあんなふうにおおらかに見なくてとは勉強になりました。ありがとうございます。それは多分、あの子どもたちの付き合い方がとても素晴らしいのだと思います。

一方であの指導の姿を見ながら、今まで研修会をされていた中で伝わっていた話かもしれませんが、子どもたちに「自分たちの命が危ないぞ」ということが体に全部表われていて足首が背屈していました。あれは、非常にノーマルな反応なのです。逆に脳幹のほうは「守れ」と言うのですが、前頭葉のほうは「ラートは伸ばしたほうがよくグリップがしまつて安全だよ」と考えます。理屈ではわかっているけど、体は危ないので、わが身を守っ

ているということです。理屈で考えても体はこわばります。その葛藤にこそまた、この教材の意味するところがあります。思いのままにならない体ということの意味をもう少し話してみましょう。

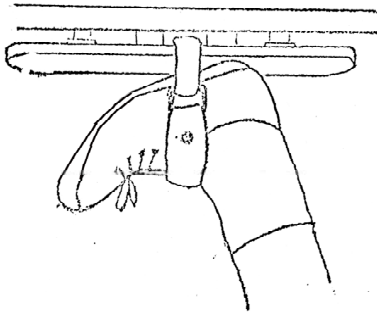


図1 足首を曲げる

「足首を曲げる」(図1)ということは、体は自分の身を守ろうとしているので普通なのですが、それをみんなの意識で、あるいは友達が声をかけたり、また背屈した足首を叩いて感覚を呼び覚ますようなことをすると、もう少し本来持っている本能的な反射が抑えられて、「足首を伸ばす」ことが意識の上のってくるような気がします。そして、そういう体というのは実は自分の思うようにならないという体験について少し話してあげてほしいと思います。そのことで、子どもたちはうまく乗りこなせられたときには一種の怖さからも乗り越えることができたと思うのだと思います。心が感じる怖さが障害となってしまう。怖いけど、少し心を奮い立たせるための意味づけをさせてあげると、いくらかコツがわかってくるような気がします。要するに意のままにならない現実が現実で、だからこそ「みんなは自分の意識で自分の体をコントロールしてごらん」というようなことが大切かもしれません。

それから、最後のあの話し合いで子どもたちから反応がないのは、これも普通です。というのは、常に、意識にのるような状態であればラートは楽しくないのです。自分がどうしてどうなってしまったのかという、わけのわからないというところが、たぶん今の現実なのだと思います。逆に、何か反応がなかったという半面、動いているときには本当に歓声を上げながら回っていました。それを「どうだったか」と聞かれてもたぶん説明はつかないので、もう少し授業を進めていくうちに、「こうしたらよいのではないか、ああしたらいいんじゃないか」という反応が出てくると思います。逆に反応がないことは、パニックになりながらおもしろがっているのだなというぐらいに理解してよいような気がします。だんだん逆さになることに慣れてくれば、くり返して日常になってきたその時に、「あ、ここはこうだ」ということがあつ

て、言葉に初めてなると思います。三回目の授業で子どもたちが冷めて物を言えるようなことになると逆にちょっと怖いというふうにもさえますので、僕は全く心配することないと思います。

3-2. 運動領域を越えたラート運動の可能性

長谷川 2 点目は、教科教育として、このラートという教材を導入することの意味はどこにあるのかといった問いです。当然教科教育ですから、領域設定から、これが器械運動なのか体づくり運動なのかという議論もしなければいけない問題なのですが、僕はあえて、ラートは器械運動にもなり体づくり運動にもなり、体ほぐしにもなると考えています。そのように細かく教科教育のどの領域に当てはめるのかというような議論は、避けておきたいと思います。そろそろそのような囚われから私たちは解き放たれ、今いる中学生たちが一体どのような身体感覚を身につけ、怖さにも一種の快感を覚え、その怖さを仲間とともに共有し、そして何か新しい世界が垣間見ていくという営みに、この教科教育としてのラートという教材の意味があると信じます。意味するところは今ある体育の教材に対する一種のアンチテーゼとなります。今までのマットや跳び箱も含め、子どもは放っておいても動くのかという議論から入っていけば、そろそろそのような器械運動の領域だとか、体づくりの領域だという、御上から言われるような観点から体育の教材も解放され、放っておいても子どもがどんどん運動に親しんで、入っていく内容とは何かを問う意味でラートは意義のあるものだと思います。根源的に言うと、カイヨワは『遊びと人間』という著書で、人間は賭け事が大好き、競争大好き、それから物まね大好き、そしてこのめまいが大好きだと言っています。ラートの本質はイリンクスといって、人間の4つの遊びの本質で言う「目を回す」倒錯ということです。私もお酒が大好きで、お酒を飲むことも大好きです。ほとんど同じです。だから、本質的に言うとラートは、人間が持っている遊びの要素のかなり根源的なところをよく表している教材の1つです。そのような教科教育の枠で「この能力をつけなくちゃ」という枠でラートをおさえる考え方ももちろん当たり前のことなのですが、それは後付けでよくて、様々な魅力的な道具や教材の、何を教えるのか、要するに how to ではなくて what の部分が問われる必要があると思います。そのシンボルとして、僕は世界で初の体育科教育の授業におけるラートの登場というのは、大変大きな意味を持っていると思います。例えば、土手すべり体育授業というような、放っておいても子どもたちがどんどん動いていく新たな発想の教材を、全国一律ではなく、それぞれの町やそれぞれの中学校やそれぞれ

の地域でもっと創造的に創り上げていかねばなりません。そうではなくてはニンテンドーのようなあの仕組みれた、超楽ちんでわけわからない仮想の遊びの世界に絶対対抗できません。もう、全部飲みこまれてしまいます。ウィーフィットでいいじゃないかっていう体育関連の識者もいますが、私としてはどうしちゃったのという感じでもあります。最近、コピーで no music no life と言われていますが、僕らは人間が人間として存在するために no movement no life だと思います。動くということこそが人間の基本で、動くというために体育という教科があったとすれば、what は自由で、文科省はこれをやらねばならないと言っているわけではなく参考資料のはずなので、この授業はもっと様々な魅力的な用具が教科教育に入るための、かなりインパクトのある素晴らしい試みだったのではないかと思います。ですから、この授業を見てラートが普及されるということも、ラート協会の一員としてはちょっと夢見ていますが、ラートを作る能力は沢山ありませんので、少しずつ色々なことが色々なところで新しい動きとして生まれてくれば嬉しいかなと思います。ありがとうございました。

岡野 長谷川先生どうもありがとうございました。それでは、グループワークに入りたいと思います。全体で少し確認しておきたいことや、質問等ありましたら受け付けたいと思いますが、いかがでしょうか。ないようなので 4 つのグループで、大体 30 分から 40 分ぐらいの時間で、思うところをご自由にご議論いただければと思います。では、先生方ありがとうございました。グループの方にご着席ください。グループワークの記録は学生にさせていただければと思います。あとでプレゼンも学生でさせてもらいたいと思いますので、司会進行は先生方の方でお願いできればと思います。

(グループワーク省略)

4. 各グループのプレゼンテーション

4-1. 運動者とラートの相互主体関係から生まれるおもしろさ

内田(三重大学 4 年) 1 グループでは、ラートの魅力に関して、授業を通して感じたことをそれぞれ話し合っていました。まず、ラートは見ただけでやりたくなる、わくわくするものだなということと、コツというのはあまり明確ではなくて、わからなくても何となくできてしまうものである。しかしそのわけのわからなさ、すぐ子どもにとっては楽しくて、さらに、器械運動のように「できるーできない」というのが明確ではない分、取り組みやすいという側面を持っているという話が出てきました。また、体力の話

も出たのですが、体を鍛えようと思ってやるのが大事なのではなくて、何がしたいかということ、このラートに触れて、楽しみたいという気持ちを持って、そのうえで自然と体力がついてくる、そういう教材であるということが言われました。またその教師というのはどうしても学習指導要領にある領域というものにすぐとらわれがちだという話にも発展し、体づくり運動だったら、どうしても、「体を鍛えなきゃ」みたいな、体力というところにすぐ頭が向いてしまうことが多いけれど、実際はあまり領域にとらわれるのではなく、そのおもしろさというものに、注目していくべきなんじゃないかということが言われました。そして、「操るー操られる」というおもしろさがラートにはあって、これが同時的に起こる、ラートを操っていると思っていなくても、ラートに操られているというような、そういう同時的に起こる間主観的相互主体がすぐ子どもたちの経験を深めたり、そして、学びを深めたりすることとても大切な要素だということが話し合われました。また、かなり危険であるという、側面もありますが、この危険があるからこそ、子どもと子どもが自然とつながったり、子どもと教師がつながったりすることができるというような、関係が多く生まれる教材でもあるということもありました。逆さ感覚があるということ、それがおもしろさにあるのですが、他の運動にもこの感覚があって、普通に器械運動で側転ができない子も、このラートでこの感覚を感じることによって、自分の体だけでする側転への意欲、その次のほかの運動に対する意欲も、この教材は生んでくれるだろうということがあげられました。最後に、ラートがすごく楽しそうで、今日見ていた子どもたちもすごく楽しんでやっていたのですが、中には、逆さ感覚というのが怖いという子がいかもしれない。そういうときに、授業だからといって、その子に無理やりやらせるのかという話になり、教師の定めた、「それおもしろいでしょ」という、こっちの決めた価値に無理やり、引き込むことはしなくてもいいということになりました。できるだけ運動世界に近づけることは、その楽しさを感じてほしいというのは大事だけれども、決して、押し付けず、その子の楽しめる範囲で、やっていったらいいのではないかということが出ました。以上です。

4-2. ラート運動が生み出す他者とのかかわり合い

竹島(三重大学 4 年) 2 グループの発表を行いたいと思います。私たち 2 グループは、初めに「授業を見て感じたラート」ということで、一人ずつラートに関してどのような意見を持っているのかということを挙げていきながら、最終的に、ラートというのを授業に組み込むというのは、どういう意味があるのかということを考えてみました。そして他者とのかかわり、これは教師と生

徒のかかわり、また、男女間のかかわりも増やせるような教材なのではないか。さらに、体に関心が持てる、自然と教え合いの場が増えていく、ということもあるのではないかという意見が出ました。また、教えずぎという考えなのですが、先生が、「危険だよ、危険だよ」と言ってしまうことで、子どもたちの動きや活動っていうのが縮こまってしまうといった、危険ということが認識されすぎで、本来味わうべき特有の危険というドキドキだったり、その、表裏一体になる楽しさっていうものを味わえなくさせてしまったりするのではないかということで、教えずぎという教師側の考えも感じていただくと言っていました。次に先ほども長谷川先生がおっしゃられたように、危険と楽しいは表裏一体という中で、どうやって体育授業の中でラートを組み込んでいけばいいのかということに立ち返りました。その授業としてのラート、授業外でのラート、ということで、扱うラート、自然に授業外で、わいわい子どもたちが「これ何だろう、これ何だろう」というふうに、ラートに向かっていく子どもたちの姿というのやはり大事なのではないか、そういった興味からも、授業に取り入れるということを考えていけないといけないかなと思います。最終的には、このラートを通して他者との関わり、教師、生徒、ラート、教え合いだったり補助だったりというふうに、お互いに関わったり触れ合ったりする機会が多く与えてくれるような教材であり、自分が行って感じたことを相手に伝えるというような身体感覚を言葉にする教材ということも大切な学び合いなのではないかと考えます。またグループの中の意見で、逆さ感覚やジェットコースター気分という非日常ということを取り上げ、乗り物にのっているような感じというのを味わえるような教材にもなるのではないかと考えました。

ラートの授業における1番の要素として、上手にできる子だけが突出するという形、つまり、できる子だけ先へ、先へ、という形でなく、自然とできる子ができない子に対して言葉がけができるような状況、「こうしたらいいのでは？」と教え合える環境というのができていくのがラートではないのかと考えました。そのグループ活動の意味として、グループ活動という状況が自然に出来てくるという事が大切なのではないかと考えました。その中で課題として挙げられたのが、「危険、楽しい」を味わわせたいがケガをさせてはいけないということです。これはおもしろさと危険が表裏とありますが、味わわせたいがどこまでやらせてよいのかということであり、あれもダメ、これもダメとしてしまうとおもしろさが味わえなかったりするのではないだろうかと考えます。そのような言葉の抑止というか、どういった言葉がけをすればいいのかという教師側の問題もあるのではないかなと思います。また、全員回れるようにすることの重要性ということ

で、やはり、回るという体験を通して、感じること感じられないことがいろいろあると思いますが、やはりそういった感覚というのを全員で共有することというのが、この授業、ラートということを学ぶ意味としてあるのではないかなというふうに考えました。以上です。

岡野 ありがとうございます。何かご質問等ありますか。

石黒(河原田小学校) 紙面の真ん中にある、上手にできる子だけが突出せずに、自然と教え合える環境ができるのではないかというのは、それはラートをすれば、ラートの運動を通して自然にということなのか。その間の何かメカニズムがちょっとよく分からないのですが。

竹島 書き方も少しわかりにくいのですが、うまい子だけがどんどん先へいってしまうという形でなく、5級程度の技ということで、少ない技でも感じる違うと思います。できる子だけが先へいってしまうという形ではなく、学べない子に対しても、自然と自分の体と向き合うことができるので、言葉がけがスムーズにできるのではないかなと思いました。

後藤 昨年、器械運動という領域でやっていただきました。ラートとしてのスタートラインはみんな初めてなので一緒ですが、毎時間やっていくうちに、「できた・できない」の差が子どもたちにもできてしまいました。できる子はどんどん次の技、次の技とやっていきたいけれど、器械運動と同じような技の関係では、できる子はどんどんできて、できない子は落ちこぼれていってしまうといった状況になってしまうので、今回はそういう視点ではなく、岡野先生からの提案でグループに分かれた時には、そのグループ全員が技をできるようにしよう、同じ技をできるようにすることを課題としました。そして早くできた子は、できない子を、何とかできるようにさせないと次にいけないというような線を引いたので、できない子も「できないよ」と言うし、できた子は「じゃあ、ああしてみな、こうしてみな」ということで、お互いかかわり合いができて、技としてはあまり進まないかもしれないが、教えることによって、その技の本質を更に理解することができるようになりますのでお互いに、自分の感覚を伝え合い、言葉にすることで回ることに本質に触れさせよう、そういう発想でやっていただいて、今日はこういう授業をしていただいた、ということなのです。

石黒 器械運動の場合の場合、スタートラインが違いますよね。だから、ラートの場合は、少なくともスタートは同じ。だから、例えばレベル3の子とレベル5の子がおった場合、レベル5の子も必ず1から3は体験して5になっているわけだから、3の子に、4や5に行くところの道筋を示しやすいうという意味なんかなと思ったのですが。そういうことではなかったのですね。

後藤 そうですね。

4-3. 自己の動きの発見と技の広がり

松岡(三重大学 4 年) 3 グループの発表をさせていただきます。最初に体づくり運動としてのラートということで、はじめは一身田中学校の方も去年は器械運動の分野でやっていたということもあり、器械運動の領域からまだまだ抜け出せない、そして子どもの実態としても技を増やしたいという現実が挙げられました。そして体づくり運動としてはいったい何がどういうふうに考えられるかというテーマで話し合ってみました。その中で、360 度楽しめているか。自分が側転をしているときに 360 度どのように楽しめているか。子どもたちにとって、早くスタートラインに戻りたい。まだまだ怖さというものが前面に出てしまい、早くスタートラインに立ちたいという一心でショートカットをしてしまう。そういう部分があるのではないかと感じます。その 360 度の中に回るプロセス、スピードを緩める、スピードを感じるってこういうところが味わえていないのではないかと。それは自己というのを見る場所や感覚というものが無いのではと考えます。そこで感覚というものをとらえるため、今の自分を見る手立てとして、外からの指針を与えること、つまり、鏡や友だちと一緒に回る。鏡を前にしたところでラートを使って回ってみると自分と向き合えることが出来ます。そして、友だちと一緒に回ることを通して、あわせてやろうという回りに発展して、外に自分を感じる装置や人をおいてみてはどうかということが話し合われました。そして、体づくり運動として扱っていても技を求めないわけではないということも意見として出されました。

また、技として横の広がり縦の広がりというのが挙げられました。縦の広がりというのは技の難易度で、A から D までであるが、それがどんどん高くなっていく。ただ横の広がりとして回り方や今出来る技での自分は一体どういった回り方ができるのかといった深まりというのを感じることができるのではということも話し合われました。あと難しくする方法として、難しさという視点をどこにおくかという点で出ました。バランスなのか姿勢なのか。教師側が感覚につながる道筋をそこに見出すきっかけになるのではということがあげられました。器械運動の側転とラートの側転は同じかということがあったが、器械運動は自分で回ろうとするが、ラートはラートに任せる部分もあるので、器械運動では味わえない回る感覚が味わえると考えられます。

あと、操ろうという姿勢というのはどこまでいっても自分が技を追求している姿ではないかということも話し合われました。また、力を入れる、抜くということなのですが、子どもたちにとっては、抜くというのはすごく難しいことであって、抜いてしまうと落

ちてしまうのかというところになってしまうので、その言い方というのも、スピードに乗るとか、ラートと一体になるというような感覚を働かせる言葉がけによってもう少し違ったようななかかわり方が生まれてくるのではないかと話し合われました。これで第 3 グループの発表を終わります。

4-4. ラート運動の不自由さから育て

大原(三重大学 4 年) 4 グループでは大きく分けてこの 2 つについて話し合いをしました。1 つ目は今日の授業の内容について、2 つ目は不自由さと補助具もかわってくるのですが、運動の不自由さというものがあるのかという 2 つのことについて話し合いました。1 つ目の今日の授業に関してですが、手前の子どもが足をつっていたと思います。足がつっていたところから、子どもの発言を見ていると、ラートは重力とか体重移動、中心感覚というものを使って行う競技であるが、足がつっていたということはある意味力が入っていたととらえることができるのではないかと思います。なので、ラートのどういう状態が失敗なのかというのを話し合いました。ラートから落ちたら失敗なのではということで、どうしたら落ちないのかということから、足をつま先立ちにするというようなことがあったが、つま先立ちにする足というのが足に力はいっていくということにもつながるのではないかと話になりました。また、運動の不自由さというところで、不自由な状況、不自由な運動をさせることがその子どもの感覚というものを育てていくことになるのではないかとということになりました。かかと補助具、ラートの補助具にもなるのですが、不自由さということで、この補助具が必要なのかどうかということから、今回落ちる子が女の子に 2、3 人いたと思いますが、落ちるってことが怖いと思っている子どもに対して、恐怖心をなくす運動に積極的に取り組めるという意味ではいいのではないかとということもありましたし、その補助をすることにより、不自由、感覚を育てることがなくなり、不自由さをなくすことが本当はいいのではないかと意見がでました。そして、後半はやったことない人ばかりだったので、ラートとはどういう運動なのかという話になったが、どうしたらうまく体をつかえているかというふうな 1 つの見方として、ゆっくり回れている人というのはやはりうまく体を使えているのではないかと、速く回っているのは意図的に速く回ることでもあるが、遠心力であったり、重さであったり、くるくる速く回ってしまうと捉えることもできると思います。その中でコツは何かということもあるのですが、それは感覚の方であり、それを言葉にしてうまく表現するというのは難しいのではという意見もありました。感覚でうまくラートをするということで、ラートは感覚を使うということであ

れば、私からの質問なのですが、このように前を向いてやる
きに、感覚で・・(笑い声)・・足が落ちてしまう子が何人かいま
したが、足が落ちてしまうことはどういう原因が考えられるので
すか？

檜皮(東京藝術大学) 明らかに足が背屈しています。ラート
には押さえる技術が必要です。回ることに精一杯になり、自分
がさかさまになって、あごが上がり、おなかが出てしまうと足が
背屈し、べろ～んとした状態になります。そこで、今日は大体
の人がうまくベルトに引っかけていましたが、少し体が前後に
ゆれしまうとぽつと抜けてしまい、また足が左右でなく同じ方向
を向いているときは非常に落ちやすいですね。体重が支えら
れなくなってしまいます。なので、この技術があれば落ちない
ということではなく、回り急いで持ちそこなうとか、曲げなくていい
ところを曲げてしまっただけで対応ができなかったとかがあると思いま
す。

大原 足先は強く突っ張ったほうがいいのですか？

檜皮 それは最低限の安全に行えるためのお守りみたいなも
のだと思います。できなくても今日は落ちてなかったの、今
日の側転だとかシュピンデルは大丈夫だと思います。

西井(日本ラート協会) 今まで数えきれない指導をしてきたの
ですが足がつる人はたくさんいます。でも、足がつるのはい
い反応で、それは足がつるくらいしっかり押さえられているとい
うことであり、まだそれが習得できていないのではないでしょ
うか。判断基準になるくらい、普段はそこまで足を伸ばさず
にそういった動きをさせていることだと思うので、足に力が入
っているほうがいいのではないのでしょうか。私も久しぶりにやるとつ
ります。ハイヒールを履いている状態より、さらにかかとがあ
がる動きというか、なんと言ったらいいか。

大原 ありがとうございます。

5. 運動のおもしろさを探求するカリキュラムへの転換

岡野 よろしいでしょうか、ありがとうございます。さっきこのグ
ループでも出たのですが、少しだけ時間をいただければと思
います。先生方と一緒にラート運動に取り組み始めて一番ぶ
つかったのが、体育観へのしぼりということが浮き上がってき
て、先生方と整理していたらこんな図が見えてきました。易しいも
のから難しいものへという矢印があり、できないものからできる
、そして子どもたちをここにもっていく(図2)。

そういう図式があったのですが、ラート運動をどう学習内容と
して構成していくかといった話をしていた時に、この図式が
どうも邪魔でしうがなかった。どう考えたらいいのか、これは

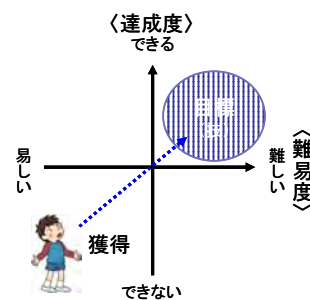


図2 <目標—達成—獲得>様式のカリキュラム

全然まだわかっていないことなのですが、どういうことなのだろ
うという話の中で、今操るとか操られるとか、働きかけるとか働
きかけられる、自由・不自由とかいう言葉が出ましたけれども、
自分がラートにどう「働きかける」かで、ラートからの情報をどう
もらうかという「働きかけられる」といったような、操ったり操られ
たりというのが止まった瞬間もう駄目だという話の中で、こっち
いくことも大事だしこっちいくことも大事だしという意味で、いつ
たりきたりしているという話が出てきた。もう1つはできないから
できるという図式が本当なのかということで、1回回れたらそれで
いいのかと言ったときに、回れたら次の技にいく、じゃあ2回回
ってみようやうやりがちだったのですが、いろいろ出てきていま
すが、ゆっくり回ってみようとか、4分の3で止まってみようって
言った瞬間にできなくなるわけで、つまり、さっきまでやっていた
ことができたからゴールではなく、どうできなくしてあげるかとい
う視点が今までなかったのではないかということです。実はでき
ていると思う子に対してできなくしてあげ、またできなくなり、
またできていくという、こういう行き来の中でその体の中で味わ
っているものというのが、子どもたちの中で学ばれているので
はないかというあたりで、従来右肩上がりのそういった価値観
があったが、全体で何が学ばれているのかということ、今日
の授業にかけてみたというところもあります。今日皆さん
のご意見を聞いておりますとそのあたりのところが、また新しく
見えてきたところかなと感じました(図3)。

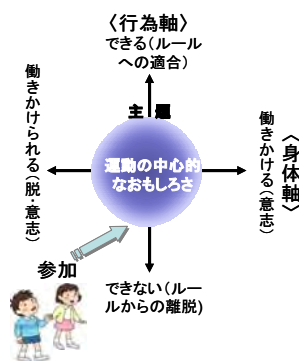


図3 <主題—探求—参加>様式のカリキュラム

そうしましたら、後半あと 15 分から 20 分程で長谷川先生からコメントをいただきたく思います。よろしくお願いいたします。

6. 生の根源としての運動

長谷川 三重大の学生さんは素晴らしい。すごいですね。感動しました。もう適当に喋った話がこんなに立派にまとまるなんて。うちの学生も勉強させなくてはと思いました。ありがとうございます。私から一点だけ。教えすぎない、それはその通りで、究極の理想は何も教えないで勝手にやって勝手に落ちて、自ら痛い思いをして、這い上がってこいというのは理想です。しかし、これは学校教育では許されません。だからこそ、ミニマムの危険を教える。だから、檜皮さんが言っていたことのポイントで言うと、ここだけです、落ちるところは(図4)。落ちるのは、前回りしていけば最後の局面、かかところが下向く瞬間です。後ろまわりで言うと、最初にあがった局面だけです。

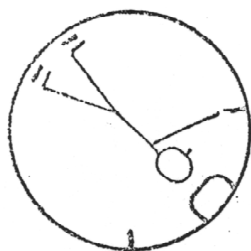


図4 危険な局面

これ以外はもう落ちません。そこさえ、ミニマムに教えて、やるほうもそこだけ足を伸ばすとか、支えるほうもそこだけ抑えてやるとか。かかかつきのベルトは、絶対いらないです。人間がベルトとかかかをつまんであげればいい(図5)。

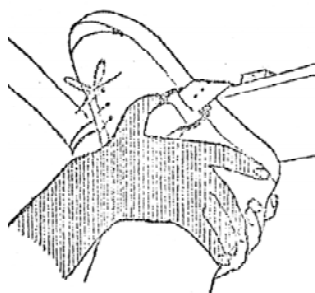


図5 サポートの仕方

ちょっとつまむと、それでも大丈夫です。しかも、2 つある足の上の足だけ、ちょっとだけです。片足がずれてもそんなに握力も必要ありませんので、そのミニマムを教えてあげたらと思います。

(図3について)ごめんなさい。まったく、ノーサンキュー。要するに、「できる・できない」にとらわれている私たち体育教師の本質的な課題です。教科教育の方とは口論になってしまうんですよ。今問題となっているのは、うまくさせるとか、させないとかというレベルではないです。動くってことは生きること、できなくたってたいした問題ではない。逆さになんかならなくていい。「できる・できない」にとらわれている私たちのがもうすでに、どこかに縛られていて、子どもたちの生きる姿を奪っているようにも感じます。あなたはできるひと・できないひとと区別せず、できないひとでもいい、だけど、動くって事は楽しい、生きる、うれしいってことが学ぶことさえできれば体育はよいのではないか。結果的にできようとできまいと、そこに大きな価値を置きすぎではないかと感じています。教師の陥り易い危険は、常に何かを学ばせて、できるようにさせるというところがあって、それが子どもたちを逆にどんどん追い込んでいるようにも感じます。できなくていい。運動は、できないひとほど、まさにうまくなる可能性があって、これはかなり論理矛盾ですけど。要するにそんなことを気にする必要なんか全然ありません。ラートが楽しめれば、落ちてしまった、「あつはつは」と笑っている彼らの生き生きとした姿を大切にしたい。僕はそのラートというものの教材も含めて、そろそろ体育の教材は「できる・できない」の呪縛から外れてもよいのではないかと思います。できなくて OK。下手でもいいのです。だけど、動くことは喜びだということさえ身につけさせられれば。体育は体育として意味があるのではないかと感じています。

現在、NHK でも子ども向けに動きをテーマにした放映されています。人間の運動は 37 種類あって、歩く運動・走る運動・投げる運動など。具体的に言うと投げる動作の評価。第一段階、第二段階、第三段階、第四段階、第五段階と今の子どもたちの評価をしていきます。

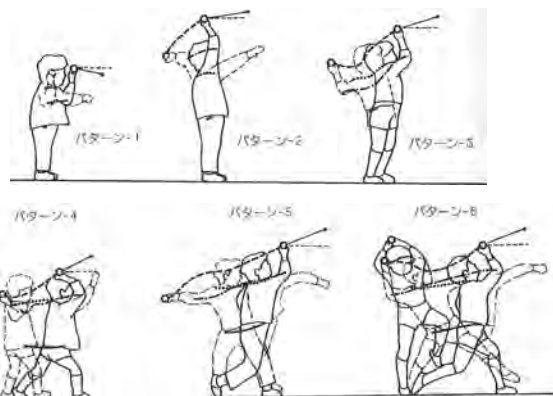


図6 投動作の発達段階

www.kri.sfc.keio.ac.jp/report/gakujutsu/2008/3-8/SB_11.pdf

より引用

対面型からだんだん大きな動作になっていきます。これは僕にしてみたら、体力測定の遠投能力を高めるための評価とも言えるでしょう。しかし、私にしてみたらそんなことはどうでもいいのです。なぜならダーツはこう投げます。だから、色々な多様な動きを遊ぶことに価値があるのです。それで、遊ぶ動きの最も根源的なものを掘り下げていく必要があると思います。人間が人間として学ばなきゃいけない可能性は無限大です。走ればチーターにかなわない、泳げばイルカにはかなわない。人間は動きの可能性が沢山あるってことだけが特徴だとすれば、その多様な可能性の体験をすることの根は、まず自ら動き出すってことではないでしょうか。誰かにやらねばと教え込まれるのではなく、自ら動き出すってことになると、動物の脳幹のレベルで最も快なる感覚で言う弾むことです。皆さん、軽く音楽に合わせて弾んでみましょう。音楽の効果で言えば、「弾むな」と言われても、つい弾んでしまう状況を作ってくれます。

それから、私は(靴で滑る)このようにずっと道をヒーリーズで滑ってきました。地下鉄でも滑ってきました。しかも面する方もいれば笑う人もいます。だけど夜の公園で、ひたすらスケートボードをしている少年たちは必ずいます。それは何を求めて滑っているのでしょうか。あるいは、みなさんは高いお金を払って山でスキーを滑るのでしょうか。山の上から下りて、滑って降りて。でも本能的に私たちは滑るってことに、なにか生きることの喜びを見出している。

最後の3つめは今日行ったラートです。僕らはこう回って、これから酒を飲みますが、実はそのめまいを味わうことも楽しみながら生きているのです。子どもたちにも、そろそろそういう根源的な生の、生きるの根っこさえ身につけさせれば、「できた・できない」なんてどうでもよくて、自然に動きの世界はどんどん広がっていくはずなんです。その広がりが、広がっていくのを止めてしまう力こそが、「できる・できない」という意識なのです。「できる・できない」っていうことを考えた途端に動きの世界は、ぐんと狭まってしまう。俺はこれができないから、できないからやらないとなります。できなくていいよって言ったらどんどん広がっていくのに、必ず「できる・できない」、「うまい・へた」っていう、どこかで私たちの意識が「できる・できない」に縛られていて、本当はできなくたっていいと、おれたちは生きるということがからだを動かすということで、できなくたって、大きな問題ではないというおおらかさが足りない。ラートもそうです。ラートは別に、誰かが回らないといいました。回らなくてもいいのです。回りたくない人は回らなくていいのです。だけど回りたくって喜び子がいるから回るので、やりたくない子を無理して回す必要は全くないし、もっとおおらかに、動くということは生きるっ

てことだということをラートは象徴しているように思います。そろそろそういう呪縛から解放されたて、体育はできなくていい・へたでいい。だけど元気な人生をみんな歩もうよ。知的なものだけが人生を幸せにしない。体を動かすことが基本で、示された図は見事に、僕にしてみたら、できないにとらわれたこの体育の教材が、ラートも自己とラートの関係は行き来することは全くないので、円環で動いていますから、これを考え始めるとちっとも運動が楽しくなくなってしまう。だから、私たちは現実を現実のあるがまま受け入れる。ただし、とらわれないことが大切です。現代社会で自殺者が3万人を越え、10年立てば原爆一個分という社会を変えるためには、勉強できる人はいいい人、勉強できない人は駄目な人。体育できて運動できる人すごい人、オリンピックはすごい。こうした考えを変えねばなりません。できないとだめというこの価値観をもう一回全部バサッと、一切関係ないと考えなおさねばなりません。そんなことどうでもいいじゃないかっていうことにしないと、ますますこの世の中の閉塞感は変わりません。運動は、回りから見えてしまうものだから、できないということ、お前できない、だから最高だよって言うようなぐらいの価値観があってもいいと思います。そのできないからこそ生きる意味があって、うまいやつなんてちっとも楽しくない。

まとまらない最後の締めで、すみません。論点がどんどんそられて。反論いただいても結構でございます。

岡野 いえいえ。その教科教育とは、某大学の教科教育のことを言っていられちゃうのではないかと。恐らく、三重大学教科教育は反対極にあるかと思います。最後に総括的にご挨拶を、山本先生お願いします。

7. 遊びとしての教育(運動文化の伝承と創造)

山本(三重大学) 常々体育で思っていることは、体育という教育は、スポーツ文化とか身体文化の伝承と創造だろうと思うのです。しかし、今までの、特に中学以降はあるスポーツを子どもに教えるという伝承だけに力を入れてきて、創造するという、今先生がおっしゃったような、「俺ってすごい、素晴らしい、人間って素敵だ」ということを含めた創造にはあまり力を注いでいない気がします。それはなぜかというと、難しいからだだと思います。教師にとって大変だからだと思います。それからもう1つは、今日お話を聞かせてもらって遊びの世界はカオスの世界、創造の世界で、わけのわからなさをいっぱい抱えている、だからおもしろいのだと思うのです。教育はコスモスの世界なので、それを理路整然として、単元をつくって、教えようとする。アン

チの世界になっていて、やっぱり教えなくてはいけないというときにカオスに寄りかかる。カオスをそのまま引き受けるのは怖いので、自分なりのコスモスをつくる。そのコスモスも勝手な自分に都合のいいコスモスをつくって、それを授業として提供しようとする。そこに遊びだったらおもしろかったのに、授業だったら本当につまらなくなるという、その質的な転換を生み出してしまっているのではないかなと思います。そのところを、どうこれからの体育、教育は引き受けるかではないでしょうか。学校が相対化してきている今、子どもたちがスキップして学校に来て、授業を喜べるようにしていくためには、そのところを我々は真剣に考えなくてはいけないし、このラートで挑戦されている一中の先生は、世界、誰もやっていない道を開拓されているわけだから、難しいと思うのですが、だからこそ授業づくりはおもしろいということです。授業づくりをもう1つ2つ変えて、授業づくりを遊ぶという、そういう精神で立ち向かっていただければいいな、というふうに思いながら、今日はちょっと門外漢ですが参加させてもらいました。ありがとうございました。

8. おわりに

岡野 ありがとうございました。それでは時間になりましたので今日はこれで終りにしたいと思います。今日このような会ができましたのも、一中の先生方、4人の授業の先生方、それから長谷川先生が喧嘩をうっていただいたということ、それから素敵な公開演技をご披露いただいたラート協会の皆様方、それから参加していただいた先生方がいらっしゃってはじめて、この会が成立したということに感謝を申し上げたいと思います。本日は誠にありがとうございました。これをもって終わりにしたいと思います。

記録・記述：伊藤茂子・中西毅徳・林 直哉・廣智恵里（三重大学3年）

編集：岡野 昇（三重大学）、伊藤暢浩・加納岳拓（三重大学大学院 2年）、内田めぐみ・大原康裕・竹島 章・松岡弘高（三重大学 4年）

中学校体育授業の教材として導入したラート運動について

—単元終了後に実施した内省調査の結果を中心に—

1. はじめに

昨年度、一身田中学校において保健体育の授業の教材としてラート運動を導入した。本年度は2年目の取り組みとして10月～11月に単元を組み、その一部を公開し、授業研究会を実施した。研究会については別に報告しているので、ここでは単元終了後に生徒に対して実施した、内省調査の結果について概略を報告する。

2. 調査方法

一身田中学校でラート運動の授業に参加した生徒全員を対象に、授業で6回のラート運動を実施してみてどのように感じたか調査した。人数は2年生139名、3年生133名、合計272名であった。設問の内容、回答方法は表1.の通りである。

得られた回答について「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を合わせて肯定群、「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」を合わせて否定群、「どちらとも言えない」を言えない群とし、各設問毎に各々の群の割合の平均値を算出した。

同時に高橋らが標準化した4次元9項目からなる体育授業における形成的授業評価（高橋ら2003）を実施し、診断基準に基づいて5段階の評定に換算した。

表1, ラート運動に対する内省調査項目

次の1～7について、あなたはどう思いましたか。当てはまるものを1つ選んで番号に○をお書きください。					
	そう 思う	どちらか といえばそう 思う	どちらと も言えな い	どちらか といえばそう 思わない	そう 思 わ ない
1 ラート運動は、怖かった。	5	4	3	2	1
2 ラート運動は、疲れた。	5	4	3	2	1
3 ラート運動は、気持ち良かった。	5	4	3	2	1
4 ラート運動は、目が回った。	5	4	3	2	1
5 ラート運動は、浮遊感を味わえた。（体がふわっと浮かぶような感覚）	5	4	3	2	1
6 ラート運動は、おもしろかった。	5	4	3	2	1
7 またラート運動をやりたい。	5	4	3	2	1

3. 結果と考察

内省調査の各設問に対する回答の結果は図. 1～7の通りである。また、形成的授業評価の各クラス毎の平均得点に対する5段階評定の結果を表2.に示した。

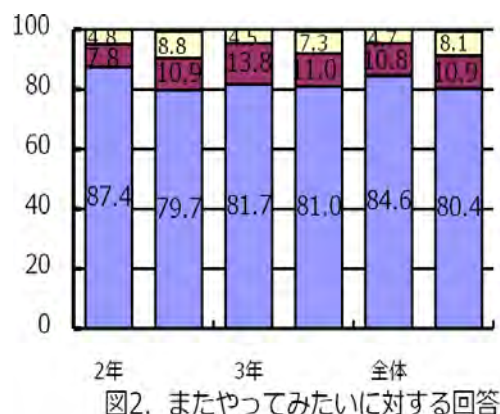
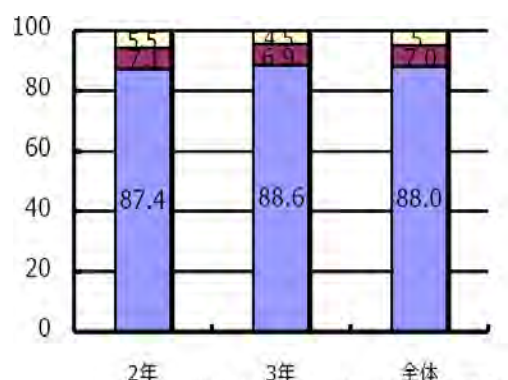
おもしろかったと感じた生徒は全体の約88%, またやりたいと感じた生徒は約80%であり、ラート運動は生徒から高い支持を得ている教材と考えることができる。昨年度と比較すると、僅かではあるが肯定群の割合が高くなる傾向を示しており、ラート運動に対する興味関心は依然として高いと思われる。更に気持ち良かった、浮遊感を味わえたと感じた生徒の割合も増加傾向を示し、逆に怖かった、疲れたに対しては減少傾向を示していた。これらのことから、より多くの生徒がラート運動に対する恐怖心が減少し、ラート運動の特性に触れることができたのではないかと考えられる。

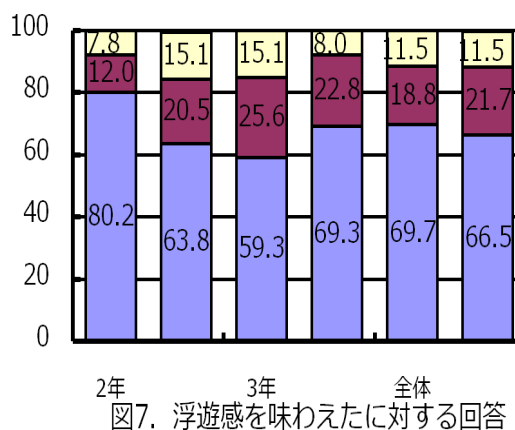
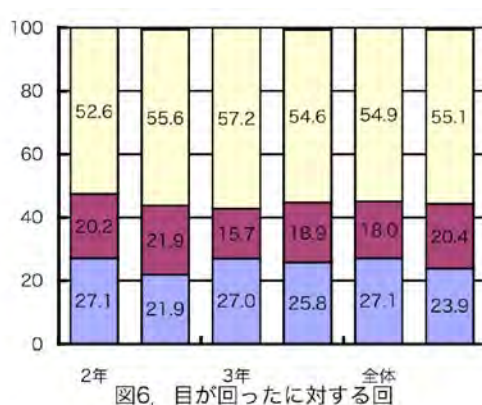
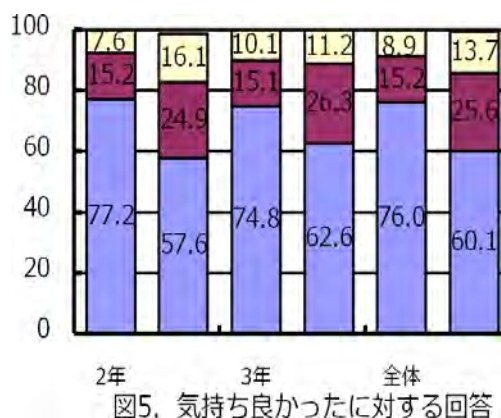
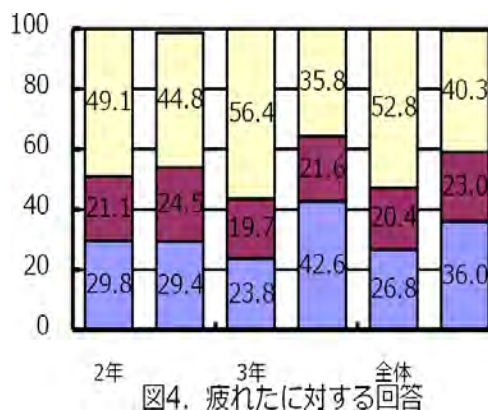
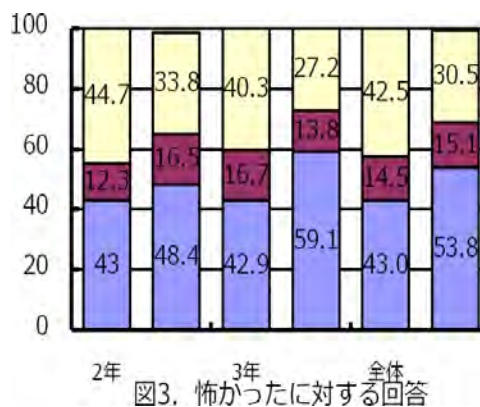
一方、疲れたと感じた生徒の割合は約 30%程度で、同時に実施した授業評価においても「精一杯、全力をつくして運動した」に対する評定が低かった。ラートで回転する運動においては、従来から言われていることであるが、器具に慣れたり技能が高まったりしてくると、あまり筋力を必要としなくなり、同じ運動を実施しても運動強度や運動量が減少するようになる。もともとラート運動は長時間走ったり跳んだりという高強度の運動を含んでいないことに加えて、授業ではラート 1 台に対して数人のグループで取り組むため、補助をしたり付き添ったりする時間がある。体育の授業である以上、生徒に精一杯の運動を保証することは不可欠なことである。従って、ラートの使用方法を工夫したり、他の教材と組み合わせるなどして、運動欲求の充足を図る工夫が必要であると考ええる。

形成的授業評価の診断結果では、いずれの項目も評価得点が 3 以上であり、高い評価を得られた授業であったと言える。特に、感動の体験、自主的な学習、仲良く学習、協力して学習の診断結果が非常に高かった。授業は「体づくり運動」の単元で実施されたが、そのねらいの一つである「仲間との交流」について、十分に充たしていたと考えられる。仲良く協力して学習することは友だちとの人間関係を反映するものであり、体育の授業においては学習の状態に大きな影響を及ぼすと言われている。ラート運動を通して培われた良好な人間関係が、学校生活全般にわたる一つの契機になればと思っている。

表2. 形成的授業評価の各得点に対する5段階評定

次元	項目	2年1組	2年2組	2年3組	2年4組	2年5組	3年1組	3年2組	3年3組	3年4組	3年5組
成果	感動の体験	4	4	5	4	5	5	4	3	5	5
	技能の伸び	4	4	4	4	5	3	4	4	4	4
	新しい発見	3	3	4	4	5	5	3	3	3	4
	次元の評価	4	4	5	4	5	5	3	3	4	5
意欲 関心	精一杯の運動	3	2	4	4	4	4	3	3	4	4
	楽しさの体験	3	3	5	3	3	4	3	3	3	4
	次元の評価	3	3	4	4	4	4	3	3	3	4
学び方	自主的な学習	5	4	5	4	5	4	4	4	4	4
	めあてをもった学習	3	3	4	4	4	3	3	3	4	4
	次元の評価	4	3	5	4	5	4	4	4	4	4
協力	なかよく学習	3	3	5	4	4	5	4	4	4	5
	協力的学習	4	4	5	4	5	5	4	5	4	5
	次元の評価	4	4	5	4	4	5	4	5	4	5
総合評価(総平均)		4	4	5	4	5	5	4	4	4	5





否定群
言えない群
肯定群

* 各学年の左側は平成 21 年度、右側は平成 20 年度の回答結果を示す。また、数字は割合 (%) を示す。

〈引用・参考文献〉

高橋健夫・長谷川悦示・浦井孝雄（2003）体育授業を形成的に評価する．高橋健夫編著 体育授業を観察評価する－授業改善のためのオーセンティック・アセスメント，明和出版：pp. 12-15.

（文責：後藤洋子・岡野 昇）

■これまでの主な取組

取組番号	日時	活動名称	場所	主な活動内容
1	2007.8.6 14:00-16:00	ラート運動導入をめぐる検討会	一身田中学校	保健体育科の授業にラート運動を導入することの可能性と課題について議論した。
2 (資料1)	2007.10.18 16:00-18:00	第1回ラート運動実技研修会	三重大学	ラートの概要説明及び基礎実技、「ラート検定級ビデオ(日本ラート協会編)」の視聴した。講師は後藤洋子教員(三重大学・日本体操学会副会長)。
3 (資料1)	2007.12.27 13:00-17:00	第2回ラート運動実技研修会	一身田中学校	ラート検定5級の技を中心に実習し、ラート運動の授業の導入的な内容について学んだ。講師は西井英理子氏(日本ラート協会総務部長)、アシスタントは中京大学部生1名。
4	2008.8.4 13:00-17:00	第3回ラート運動実技研修会	一身田中学校	ラート検定5級の技を中心に実習し、ラート運動の授業づくりについて学んだ。講師は深瀬友香子氏(目白大学)。
5 (資料2) (資料3) (資料4)	2008.9.3-10.4 全60時間	単元「ラート運動」の実施 授業参与観察及び指導補助	一身田中学校	2年生(5クラス)と3年生(5クラス)を対象に「ラート運動」の単元学習を行った。 学生(1名)は10クラス、60時間の授業に参加し、授業参与観察記録、質問紙調査等に基づきながら分析・考察を行い、卒業論文(中学校体育のカリキュラム改善に関する一考察)としてまとめた。
6	2009.5.28 13:00-17:00	第1回ラート運動学習指導案検討会	三重大学	内容は、11月12日の授業公開研究会に向けたラート運動の学習指導案の検討を行った。
7 (資料5)	2009.7.27 13:00-17:00	第4回ラート運動実技研修会	一身田中学校	テーマは、ラート運動のチェックポイントと応用～3年生の授業で何を教えるか～で、単元における内容構成にかかわる研修を行った。講師は檜皮貴子氏(東京芸術大学)。
8 (資料6)	2009.8.24 15:00-17:00	第2回ラート運動学習指導案検討会	三重大学	11月12日の授業公開研究会に向けたラート運動の学習指導案検討を行った。主な論点は、①カリキュラムレベルにおけるラート運動の位置づけ、②ラート運動の特性と身体観、③学び合い学習のあり方があげられる。
9	2009.9.29 16:00-19:00	第3回ラート運動学習指導案検討会	三重大学	11月12日の授業公開研究会に向けたラート運動の学習指導案検討を行った。主な討議は、「体づくり運動(体操)としてのラート運動」と「器械運動としてのラート運動」のそれぞれの背景にある体育学習観について議論した。
10 (資料7)	2009.10.22 16:00-19:00	第4回ラート運動学習指導案検討会	三重大学	11月12日の授業公開研究会に向けたラート運動の学習指導案検討を行った。主な討議は、「体づくり運動(体操)としてのラート運動」の単元構成における学習過程であり、何を、どのように学ばせるについて議論した。
11 (資料8)	2009.11.6 15:00-17:30	第5回ラート運動学習指導案検討会	三重大学	11月12日の授業公開研究会に向けたラート運動の学習指導案検討を行った。主な討議は、単元目標の再確認、授業の目標と学習カードの一体化について議論した。

2007 年度 / 実践報告

保健体育科授業にラート運動を導入するという取り組み

1. ラートとは

「ラート」は 1925 年にドイツで酒樽の外枠をヒントにして子どもの遊具として考案された器具である。誰でも簡単に転がれる特性を持ち、後に競技種目として発展していった。現在、ヨーロッパを中心に生涯スポーツとして、また高度な技術を追求する競技スポーツとして実施されている。

日本では第二次世界大戦時に「フープ（操転器）」として航空操縦士養成の訓練活動に用いられていたが、大戦後は「軍事訓練」に繋がる活動と見なされ一切姿を消した。1989 年、当時東海大学の長谷川聖修氏（現筑波大准教授）が留学先のドイツから日本に持ち帰り、ニュー・スポーツとして再び普及活動が開始された。

2. ラート運動の特性

2. 1 ラートに合わせることで、情報を受信すること

ラート運動の特性は、見かけは器械運動や体操競技と類似しているが、ラートの運動に合わせて自分の身体を操作する必要があるという点が異なっている。つまりラートを操作するためには、ラートから積極的に情報を受信することが重要である。運動者が主体的にラートを操作するとともに、ある程度ラートに身を任せることが必要であり「自由に操ろう」という意識が強過ぎると上手くいかない。この「合わせる」ことと「積極的に情報を受信する」ことが不可欠な点がラート運動の特性の一つである。

2. 2 仲間の協力が不可欠

ラートは鉄製の大きな器具である。直径が概ね運動者の身長+30cm、重量が約 50kg あるため、操作には慎重を期す必要がある。誤った使い方や緊張感を欠いた態度は大きな事故に繋がる危険性を持っている。一方、ラート運動はスポーツ種目としては、まだマイナーな存在であるため、技術習得や練習用の補助器具が殆ど発達していない。従って、安全性の確保や練習の際の補助は専ら仲間（補助者）の協力に頼るしかない。

3. 期待される効果

3. 1 身体面に対して

ラートの中で回転する運動は、様々に変化する体勢で、腹筋や背筋などを締めて正しい姿勢を保つことが大切なポイントとなるので、姿勢の劣化が問題となっている子供たちに推奨できると考えられる。また、ぶらさがり健康法と同様の、血行促進、肩凝り・腰痛の予防、背骨の矯正などの効果が期待されるので、生涯スポーツとしても位置付けられる。さらに身体の平衡感覚や空間に対する位置感覚が重要であり、運動の慣性、遠心力、重力などをうまく利用することで、逆さまになったり転がったりする感覚を始めとする、非日常的で新しい運動感覚を味わうことで身体感覚の向上が期待できる。

3. 2 精神面に関して

大きくて重いラートを操作するので危険が伴うため、集中して取り組む必要がある。運動中にお互いに補助したり協力したりして技術を習得していくという活動を通して、コミュニケーション力や信頼関係を築くことが期待される。また、逆さまになることでの開放感はストレスの解消になるようである。さらに、勇気を出して回転した時の喜びと達成感は、自閉的傾向を持つ人や精神障がいを持つ人の自信にも繋がると報告されている。

4. これまでの取り組み

一身田中学校の体育授業にラートを導入するにあたって、授業担当者および関係者にラート運動の概要、特性を理解してもらうために、研修会を 2 回開催した。

4. 1 第 1 回ラート研修会

平成 19 年 10 月 18 日（木）16 時から 18 時まで、三重大学屋内運動場にてラートのオリエンテーションを兼ねた研修会を開催した。参加者は一身田中学校保健体育教員 4 名と三重大学教員 1 名であった。研修内容は以下の通りであった。

(1) 説明：ラートの概要（器具の名称、ベルト装着方法、諸注意）など

(2) 実技研修（基礎）

- ・ ラートを押し回して止める、回っているラートを止める。
- ・ リングの中を歩く。
- ・ ラートで回転する。
- ・ 二人組でシーソーをする。

(3) VTR 視聴

日本ラート協会編のビデオ「ラート検定級ビデオ」を視聴した。



写真 1

4. 2 第 2 回ラート研修会

平成 19 年 12 月 27 日（木）11 時から昼食を挟んで 17 時まで、一身田中学校体育館で技術習得を中心とした研修会を開催した（写真 1）。参加者は一身田中学校保健体育教員 4 名、三重大学教員 2 名、三重大学学生（保健体育科 4 年生）2 名で、講師として日本ラート協会総務部長の西井英理子氏を、アシスタントとして中京大学 4 年生 1 名を招き、ラート検定 5 級の技を中心に実習した。また、本研修が「中学生の体育授業」に繋がるという趣旨から、ラート運動の技術だけでなく（写真 2）、導入的な扱い（写真 3）、体づくりや動きづくりに関連する内容も併せて紹介してもらった（写真 4・5）。



写真 2



写真 3



写真 4



写真 5

5. 今後の展望

ラート運動がもたらす利点は理解できるが、学校体育に実際に導入するに当たって、様々な問題点が存在することも事実である。例えば以下のような点である。

①安全性の確保

運動中の安全確保が必要である。不適切な扱いで大きな事故に繋がるため、慣れるまでは安全管理に非常に手が掛かる。

②保管場所の問題

器具そのものが大きいため、保管場所にそれなりのスペースが必要である。さらにラートが転がったり倒れたりしないよう、固定する必要があるため、適切な場所が必要である。

③高価な器具

実施者の身長によって使用するラートのサイズが異なるため、生徒の身長に対応するラートが必要である。1 台約 20 万円は手軽に購入できるものではない。

④指導者の不足

安全性の確保、学習の成果という面からも、複数の指導者あるいはティーチング・アシスタントの参加が望ましいが、ラート指導ができる指導者は決して多くはない。

以上のような障害が存在するため、これまで学校体育にラートを導入しているケースは大学体育での選択種目として、あるいは課外活動の体験として取り入れられた例が僅かに見られるが、中学生の体育の授業として取り入れられた実践は見られない。

今回、上記の問題点①～③については解決されている。問題点④について今後、三重大学で実施される関連授業科目の中で学生のラート運動に対する経験と習熟を積み、学生がティーチング・アシスタントとして授業に関わるという仕組みを構築しようとしている。

(文責:後藤洋子)

6. 参加者の感想

下記の感想(抜粋)は、研修会に参加した一身田中学校保健体育科教員と保健体育科学生(4年)によるものである。感想からは、「誰もがゼロからのスタート」「危険であるがゆえに生起する自然な助け合い」「本物性(演技・道具)に触発される学習動機」「道具や人に身をまかせるという身体体験」などを読み取ることができる。こうしたラート運動が拓く世界は、今日の学校教育が喪失した「学習」世界に通じるものがあるように思われる。学校教育における「学び(=真似び=マネび)」と「習い(=倣い=ナラひ)」の復権は、子どもたちの真似てみたい人やなりたいたい人への憧れ、やってみたいことや倣ってみたいことへの挑戦を生成し、何かのために「学習しておく」というより、いま取り組んでいることがおもしろい(自分にとって意味がある)から「学習する」という状況をつくりだすものと思われる。

来年度は、単に新しい「教材」としてラート運動を子どもたちに提示するのではなく、先人たちが大切にしてきた「学び方」や「習い方」を包括した「学習財」としてのカリキュラム開発に臨みたい。

○ 最後には、模範演技を見せていただきました。「ええっ! あんな事まで出来るの。」という技もあり感動しました。後で、今回の講習会のビデオや写真を見ると、私の実技の時には西井さんを始め多くの方々が心配そうにフォローしてくださっていました。ありがとうございました。

今回の講習会を体験してみて、ラートは楽しく学習できる教材だと思います。ただ、乱暴な活動になってしまうと危険なこ

ともあるので十分に安全に配慮して活動させたいと思います。始めのうちは、少人数で教師の目が届く状態で指導していくのがよいと思います。さらに、練習をして、一身田中学校保健体育科教員が話し合い、研修を深め、近い将来ラートを授業に取り入れていきたいと考えています。(一身田中学校教員)

- こども達にとってはラートという競技をみたことがないと思うので興味はあると思います。始めはこの講習会でもやっていたラートになれることや、ラートの基本知識からやっていこうと思います。それができるようになれば実際に5級の技の練習に入り、少しでも多くの技を教えていきたいと思います。でもそのためには自分自身がまず技を習得したり、指導できるようにならなければなりません。そのためにもこのような講習会を何回もやってもらい授業でできた問題を解決していきたいと思います。(一身田中学校教員)

- 本校の生徒に体育の授業でラートを導入するには、教員が今後も講習会に参加しながら自ら生徒の手本となれるレベルまで技術を習得することや、授業の体系(生徒人数や活動の流れ)の綿密な打ち合わせが必要です。まだまだ課題はありますが、ぜひこの楽しく、不思議なラートを生徒に体験させてあげたいと思うので勉強を進めていきたいなと思います。(一身田中学校教員)

- 体操競技に自信のあった自分は「側転や、斜転なんか簡単だろう」と調子に乗っていました。直転をするのでも側転の感覚で簡単にできるだろうと思っていましたが、手を突っ張って側転を行う感じで直転に臨んだら回転が途中で止まってしまう元に戻ってしまったのを覚えています。足をピンと伸ばして手は突っ張らずグリップを引っばるようにして、肘の曲げ伸ばしで進行方向を決める体重移動を教えてもらってからは簡単に回転することができました。自分の中にはない全く新しい感覚でした。器械体操にはない新しい感覚が今でも残っています。(一身田中学校教員)

- ラートを中学校の授業に取り入れていくということにあたり感じたことは、私自身にとってもラートは初めての活動であり、好奇心が湧き、心が躍ったように、子どもたちにとっても初めての活動であり、魅力を感じ、好奇心を駆り立てられるものであるだろうということである。授業を行っていく上で大切なことは、毎回の授業に“！”や“？”をつけることであると私は思う。今日、学校授業で取り入れられている種目がいけないとは決して思わないが、中学生にとって授業で行われる球技などの種目は日常的になりつつあり、授業中に驚きや疑問を感じる場面は少なくなってきたのではないだろうか。

そこで、ラートを導入することで、授業に「新鮮さ」を加えることができると考えられる。多くの子どもたちが初めて見て、初めて触れるラートを扱うことで、まず「どのように使うのか？」など、子どもたちに“？”をつけることができるだろう。次に実際に演技を見せることで私自身も感じた“！”を子どもたちにつけることができ、授業開始の時点で子どもたちの心を掴むことができるだろう。興味を持ったものへの取り組みとそうでないものへの取り組みでは、大きな差が見られるため、授業の導入段階ではラートは有効な活動であると考えられる。その後の授業展開でも、初めて挑戦する技ができたときの感激や、思うように操作できない箇がゆさやその解決法を考えることなど、常に“！”と“？”つけた授業を行うことができると考えられる。また、研修会でも言われていた内容であるが、ラートは身長別に分かれて活動を行う必要があるため、男女関係なくグループを作ることができ、たくさんのコミュニケーションをとる機会を作ることにもつながっていくだろう。

もう一つ大切なことは、安全面への配慮である。ラートは楽しく新鮮な活動の反面、危険もたくさん潜んでいる。例えば、ラートの保管方法をしっかり実践する、眼の届かない場所で実践させない、ラートの重みを感じさせる活動を取り入れる、初めて行う技には補助をつけるなどラートに潜む危険を理解させ、事故のない活動が行えるよう十分に配慮していかなければならない。

これまでに見られない新しい授業を考えていく上で、授業に新鮮さを加え、多くの驚きと疑問を感じることでラートを取り入れた実践は1つの有効な手段であると思う。(保健体育科学生)

(文責:岡野 昇)

2008 年度／実践報告

保健体育科授業の教材として導入したラート運動について

1. これまでの経緯

私たちはこれまでラート運動の特性である「非日常的な身体感覚」，「器具に身を任せる感覚」，「身体認知」に着目し，中学校の保健体育科授業の教材として導入するために準備を進めてきた。我が国ではヨーロッパの国々と比較してラートの普及度があまり高くないため，中学生を対象にラートの授業を实践した例が見られないこと，授業担当教員にラートの経験が皆無であったこと等の解決すべき課題があり，教員の実技研修を始めとして入念な準備が必要であった。また，ラートは直径が約 200cm，重量が約 50kg の大きくて重い器具であるため，安全管理の面から保管方法の検討も不可欠であった。

平成 18 年度，19 年度の 2 年間で概ねこれらの課題が解決されて準備が整ったので，本年度正課体育の授業として実施することができた。繰り返しになるが，我が国では前例のない取り組みなので，授業中の生徒の様子と今後の課題について報告する。

2. 実施した授業の概要

対象としたクラスは 2 年生全 5 クラス，3 学年全 5 クラス，合計 10 クラスであった。器械運動の新しい種目として位置付け，平成 20 年 9 月から 10 月にかけて各クラス 6 時間，合計 60 時間の授業が実施された。

授業実施に際しては，何よりもまず安全管理に配慮し，原則として複数教員が関わる TT とした。さらに本学教育学部保健体育コースの学生 1 名が授業記録として全 60 時間の VTR 撮影を担当し，時間の許す限り本学教育学部保健体育科教員 2 名（後藤・岡野）も参加した。

3. 授業中に観察された生徒達の様子

3. 1 新しい教材であったこと

本授業実践でラート運動は器械運動の教材として取り扱われた。単元計画を作成した一身田中学校の体育教員，がラート運動の特性は器械運動と類似した構造を持つと考えたことによるものと思われる。もちろん伝統的な器械であるマット，跳び箱，鉄棒などを使った運動も工夫次第で十分楽しむことができるが，これらは何れも生徒に学習経験があり固定したイメージがある。苦手意識を持つ生徒にそれを克服させ，面白さを理解させることは困難な場合が多い。その点ラートは誰もが初めての体験であり，少なくとも苦手という先入観は持たれていない。さらに新しいことに挑戦するという期待感を持つことができる。

生徒達はまず，ラートという大きくて存在感のある新しい器具に引きつけられたようであった。これから何が始まるのかという緊張感と自分に出来るのかという不安感が漂っていた。

授業はラートに慣れることから開始された。特別な技能を必要としない，誰にでも出来る運動から徐々にラートの特性を利用した運動へと展開された。

2 時間目からは実際にラートの輪の中に入り、側転に挑戦することになった。1 台のラートに数人でグループをつくり、お互いに補助をし合って回った。中学生の身長は様々であるため、ラートの直径も各種用意し、自分の身長に適したラートが選択できるようにした。従って男女混合で身長別グループとなることが技の習得に適している。しかし実際には男女別で仲の良い生徒同士のグループが出来上がっていた。仲が良い生徒同士のグループは技の習得には効率的ではないが、友達という意識からかお互いに補助し合う場面が多く観察された。ラートのサイズによって運動感が異なるが、例えば「シーソー」や「跳び越し」等、サイズに関係なく取り組める運動もある。初心者の段階ではあまりラートの適正サイズにこだわらなくても良いのかもしれない。課題をどこに設定するかということとも深く関わってくるので、グループをどう分けるかについて今後の検討課題となるだろう。

3. 2 多様な生徒のニーズ

生徒達は誰もラート運動の体験が無く、授業を開始した時点では全員が同じスタートラインに立っていたが、実施時間数の増加に伴い技術の達成度や取組方にバラツキが現れていった。生徒一人一人の運動能力、身体能力が異なっている以上、当然のことではあるが、教師の簡単な説明と運動全体をイメージさせる師範で、難なく新しい技を習得していく生徒がいる一方で、中々最初の一步が踏み出せず、最初の側転を実施するまでに随分と時間がかかった生徒も見られた。また、生徒がラートで回転する運動に取り組む姿勢にも様々な場面が見られた。例えば次々と新しい技を要求してくる者、専ら補助する側になる者、自分ばかり回してもらっては悪いから順番に補助しようとする者、自分ができるようになった技を友達に教えようとする者、友達とペースが合わなくて自分一人で回っている者などである。

ラート運動の一つの利点は、必ずしも高度な技を追求する必要がないことである。例えば二人組で実施する「シーソー」は倒立姿勢を経過しないため、比較的恐怖感が少ないが、パートナーと協力して重力加速度を感じたり、体が高く持ち上げられる感覚を体験することができる。導入段階で用いられた運動であるが、毎時間生徒達自ら実践している姿が見られ、6 時間目になっても喜々として行われていた。しかし 6 時間目のシーソーは、もはや 1 時間目の恐る恐る揺れているものではなく、ダイナミックに緩急の振幅が増加し、ラートへの乗り降りを切り替えるタイミングもスムーズに移行しており、そこには明らかに技能の向上が見受けられた。

私たちはとにかく技術を難易度順に一直線に並べてしまいがちである。一つの運動ができれば次の運動を与えたい。しかし気に入った運動を何度も納得するまで繰り返し、それが習熟していく過程を待つことや、同じ難度で少し形を変えたバリエーションを数多く経験することも、身体感覚を高めるために十分価値があると考ええる。

3. 3 踵つきベルトの功罪

ラートの中に入って最初に回転する技は側転と呼ばれている。両足をステップにベルトで固定して、グリップを両手で持ち、側方に回転するものである。また、それができるようになると持ち方を変えたり、回転の方向を変えたりして様々な回転技に挑戦することができる。しかし足のベルト固定が確実でなかったり、倒立姿勢になった時点で恐怖から手を離してしまったりすることでラートから落下するリスクが生じてくる。これを回避するために踵つきベルトがある。踵つきベルトは足をステップに 2 方向から固定するため、殆ど外れることはない。指導者の数が足りないときに、取りあえずの安全管理をす

る上で非常に便利である。

一方、ラートの特性を活かして一つ一つの技を正しく習得していくためには、自分が実施した運動が理にかなったものであったかどうか判断する必要がある。通常のベルトを使用していれば、ベルトの装着が甘かったり、重心を移動させるための身体操作を誤ったりした場合、ラートから落下したり、途中で停止してしまう等のアクシデントが発生し「今実施した運動は正しくなかった」ことが自覚される。

踵つきベルトを装着すると、落下防止という安全性は確保されるが、正しい身体操作で技を遂行しなくても、不都合が生じない。従って導入段階を過ぎたら、なるべく早く踵つきベルトから通常のベルトに移行することが望まれる。ところが生徒達は一度踵つきベルトの安心感を体験してしまうと、中々通常のベルトに移行しようとしなくなってしまった。生徒達に最初の段階で踵つきベルトのメリット、デメリットをしっかりと説明する必要があると思われた。

3. 4 自分から「回る」と言うまで待つ

最初はこわごわ回っていた生徒達も、ラートに触った時間数にほぼ比例して慣れていき、楽々と回れるようになってくる。しかし回れるようになるために必要な時間は個人によって様々であり、決して一律ではない。この時、補助者は決して焦らず、生徒が自分から「回る」と言わない限り補助者はラートを回さない、ということを大前提としたい。鉄の輪の中に入って逆さまになって回ることが高いハードルになっている生徒もいる。気持ちがネガティブなうちはポジティブになるまでひたすら待つことを徹底したい。

友達が一人、また一人と回っていくと自分も回ってみたいという気持ちは膨らんでいく。また、自分と同じような友達が何度も回っているのを見ている内に徐々に自分にもできそうだという見通しを持つことができるようになる。実際に回るのはそれからでも遅くはない。

生徒の中には、自分が回れるようになると、友達を回したくなる者がいて、誘うのは良いのだが、それが高じて無理矢理回してしまう場面が見受けられた。たまたま事故には繋がらなかったが、気持ちが後ろ向きになっているときに無理をすると大きな事故に繋がりがかねない。生徒一人一人の意志を尊重すると同時に、常に危険と背中合わせであるという緊張感や運動に集中するという意識を持ち続ける必要がある。

4. 今後の課題

ラート運動は個人的な運動であるが、安全確保のためにも補助者が不可欠である。そのため生徒同士がお互いに協力し合う関係が生まれるが、同時に TT が非常に有効であることも想像に難くない。本年度の一身田中学校での実践では、原則として複数の指導者の下で授業が実施された。ここに本学学生が介入する余地があるように思われる。

つまり、本学における体育実技の授業でラート運動を取り入れ、ある程度の経験を積んだ学生が一身田中学校の TA として参加するという関係である。学生は体育の授業現場に参加することができるし、学校では TA を確保することができる。この協力関係を今後構築していきたいと考えている。

我が国におけるラート運動は徐々に広まりつつあるが、未だ普及度が高いとは言えない。一身田中学校の体育教員および生徒もラート運動の経験は皆無であった。本プロジェクトでラート運動の研修を受けた体育教員の異動により、新しく一身田中学校に着任した教員がラート運動の経験を持つ可能性は殆

ど無い。体育授業にラート運動を定着させるためには、体育教員を対象とした実技研修会を定期的開催する必要があるだろう。

(文責: 後藤洋子)

5. 授業実践を行った教員の感想

授業を始める時は、まずけがをしないか、授業はうまくいくかなど不安がたくさんありました。しかし、6 時間分の授業計画を立て実際に授業をしていくと子どもたちの力もありましたが不安はすぐに消えました。まずラートの授業の良かったところの 1 つ目は、子どもたちが全員、初めてだということでスタートラインが一緒だったこと。そのことによって全員ラートに興味を持ちまわってみたいと思ってくれたこと。2 つ目は、グループ学習がやりやすかったこと。ラートの数は 7 つありそれぞれ大きさが違うので自分にあったラートを選びその中でグループを作り、補助をしあったり励まし合ったりしてグループ活動を行っていました。3 つ目は、達成感が味わえること。跳び箱やマット運動、鉄棒は、怖かったら自分でやめてしまうことができるが、ラートは一度まわってしまうとやめることができないのでどうしてもできてしまうというところがあり、一度できる達成感を味わうと子どもたちはどんどん成長していきました。しかし中には途中で怖くなり自分でベルトを外してしまいラートから落ちた生徒もいましたがそれでも何回も挑戦してまわれるようになりました。このようにラートの授業を終えていいところをたくさん知りました。また、多くの子どもたちの感想にも、もう一度やってみたいとか楽しかったなどの感想をもらいやってよかったと思いました。

しかし、その反面これからの課題としては、指導者の技術面である。何回か講習を受けましたが子どもたちは思っていた以上に成長が早く、自分たちが用意していた技を 3 時間ぐらいですべてできるようになった生徒もいました。また、今年は 2 年生が 6 時間分授業をやったので来年度、新しい技を教えないといけないので自分たちがはたして指導できるのだろうかという課題がある。それと、グループ学習の見直しなどももう少し工夫が必要である。どうしても怖がらずにやる生徒はどんどんうまくなり技術に差が生じてくる。そのあたりを考えていかなければならない。

その中で技術を早く習得した生徒に、ラートの種類に斜転という競技がある。その技をやらしてみたらこの技は難しく中々習得するには時間がかかる。これをやるにしても 6 時間程度では習得するには無理だろう。これを選択体育などを利用して 1 年間やってみるといいかもしれない。

(一身田中学校教員: 下地啓一)

生徒の様子で明らかに他の運動と違う点は、ラートという種目に興味を持って、意欲的に活動へ入っていくことができたということである。器械運動＝マット・跳び箱・鉄棒と、小学校からやってきているものでよく知っていて、苦手な子にとっては「楽しくない」「嫌い」というイメージが強い。しかしラートは皆初めてで、しかも見た感じ楽しそうな雰囲気がある。やったことがないので興味がある。はやくやりたい！といった風だった。

導入ではリングの上にのぼったり、バランスをとりながら歩いたり、ハムスターの様にリングの中を歩いたり、シーソーをしたり。活動量としては少なく簡単な動きだけだったが、初めて触れるラートの触・感覚を楽しんでいた。

2 時間目以降は、安全確保や技術の基本的な所から入っていき、徐々にたくさんの技を紹介して取り組んでいった。意欲的で飲み込みの速い生徒は、どんどん難易度の高い技を習得していき、4 時間目ごろに

は技をいくつか組み合わせた連続技も難なくこなしていた。逆に、恐怖心の強い子や消極的な生徒は、後半になっても側転をするのが精一杯だった。

2 年生の授業を終えて良かった点は、全体を通して意欲的に活動できたことである。初めての取り組みで興味が強かったということが大きい。他にも危険が伴う競技なので細かい説明等を真剣に聞こうとする態度があったり、友達とお互いに補助したり声をかけ合いながら活動できたように思える。ラートの授業を終えた時の感想にも、「練習をする時は、同じラートを使っていた子に手伝ってもらったりアドバイスをしてもらったりしたので、ラートは協力し合うことが上達のコツだと思いました。」「今まであまり話さなかった子とも協力ができていいと思いました。」「皆に手伝ってもらって出来るようになった時は、達成感があって嬉しかった。」など、生徒同士の横の繋がりをつくるのにも役立ったと思う。

逆に今後の課題としては、特に 2 年生は来年どうしていくかである。側転が精一杯だった生徒はそこから次の技へと進んでいけるが、かなり高い技能を習得できた生徒には次にどういった指導をしていったらよいのか。教師側も引き出しが少なく、持っているものは全て今年の授業で出してしまったので、3 年生になった時に次はさらに難易度の高い技をするのか、それとも……。また教師側の研修をして授業の展開を考えていく必要があると思う。

(一身田中学校教員:堤あい)

今回、ラートの授業で怪我無く無事に終了できて一安心しています。先生方のサポートもあり、ほぼ各グループに補助者がつけて、とても安全に活動できたと思います。

器械体操という領域の中では、得意不得意の差がはっきりしていて、やはり得意な生徒はどんどん練習も行いますが、不得意な生徒はなかなか練習に参加するのが難しいと思いますが、この『ラート』では、まずほとんどの生徒が授業に入る前から「これなんなん?」「どうやってするの?」と、興味津々ですぐにラートに触っていました。今まで見たことも、触ったことも無い器具(ラート)を使った授業に対してとても意欲的でした。

基本的には、こちら(教師側)からの補助で練習していたが、慣れてくると自分たちで補助をし合い積極的に練習に励んでいる生徒を見るのはとても嬉しかったです。

ラートの個人個人のスキル上達以外に、生徒同士の助け合いや仲間作りといった内面的な成長が見られラートに取り組んだことは大成功だったといえます。ありがとうございました。

今回のラートの授業では、主に 3 年生の TT (Team Taching) で入りましたが、生徒たちの技術の吸収が早くとても驚きました。自分たちが教えてもらった 1 回目、2 回目のラート講習会の内容をすいすいとこなしていく様子は嬉しい反面、次はどのような技を練習させるのか、自分の引き出しの少なさにショックを覚えました。来年度の新 2 年生の中にも今年度の内容をすいすいとこなす生徒がいなくても限らないし、新 3 年生のカリキュラムをどう組んでいくかも考えさせれます。

やはり、教師側のスキルアップが必要不可欠だと強く感じました。定期的に自分たちで練習会を持つことや、専門家の講師、先生方を招き講習会を開いて、知識をつけ、ラートに親しんでいくことが生徒たちにも還元できることなのかなと考えました。これからも自分たちの研修を重ねていくことが必要だと思っています。

(一身田中学校教員:杉崎隆典)

(資料 3)

2008 年度 / 新聞記事

伊勢新聞, 毎日新聞, 中日新聞, 朝日新聞

伊勢新聞 20/9/12

くるくる回って楽しんで

【津】ドイツ生まれの「ラート」を取り入れた体育の授業が、津市一身田中野の一身田中学校（笠原哲校長）で始まる。同中と三重大学が連携する文部科学省の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム事業」の一環。中学校での導入は全国初という。

ラートは、巨大な車輪を思わせる直径約二メートルの鉄製の輪を二本平行につなげた運動器具。中に入り、遠心力を生かして回転する競技。ドイツ発祥で、国内では二十年ほど前から生涯スポーツとして普及している。

器械運動が苦手な生徒の対策として企画。同大教育学部の後藤洋子教授らの指導のもと教員が研修を重ね、二学期から二、三年生の授業で試行している。

十一日は三年生のクラスが三度目の授業。七台使い、四―五人一組で交代して挑戦。革の留め具で足を固定し、教諭や友人に支えてもらいながら遠心力でゆっくり回転。体が床と平行になったり、逆さまになったりして、悲鳴を上げる生徒もいた。

島川将樹君（一）は「最初怖かったけど慣れたら楽しい。宙に浮いたりさかさまになったり、違う世界に来た気がする」と笑顔。

同中体育科の下地啓一教諭は「誰もが初めてなので苦手意識を持たずに済むし、グループで支え合うことで信頼関係も生まれる。生徒もとても意欲的です」と効果を話した。

後藤教授によると、グループ補助が必要で器具の保管の課題もあるが、小中学校の体育に適した競技で「今後ほかの学校にも広げていけるといい」と意欲を見せていた。

ドイツ生まれの「ラート」に挑戦する生徒ら。津市一身田中野の一身田中学校で。

津・一身田中 体育に「ラート」全国初導入

(伊勢新聞/2008.9.12)



(毎日新聞/2008.9.18)



(中日新聞/2008.9.21)

斤

屋

第3種郵便物認可

無重力体験 ラートの授業

すぐに回れて達成感

同中学の体育館には、直径2.5メートルほどの二重の鉄の輪7台が並ぶ。体育の器械運動の時間、生徒はその輪に入り両足を固定。右足を踏み込むと、体ごと右へ回り、ゆっくり、手を離さないで。補助役の生徒は手をさしのべながら、転がる輪を追いかける。体育館に広がるこの不思議な光景は、ラートというスポーツだ。同校は06年、器械運動が苦手な生徒が多いことから、教師の1人がテレビで見たことがあったラートを授業に取り入れることを決めた。だが、経験者はゼロで、器具もない。そこで、教員派遣やカリキュラムなどで連携している三重大学に相談したところ、ラートを持つていることが分かり、無償で7台借りたという。同大教育学部の後藤洋子教授や同協会の指導員を招いて、体育教師が練習を続

ける。体育館で無重力体験——。鉄の輪に入り体ごと回転するドイツ生まれのスポーツ「ラート」を、津市立一身田中学校が体育の授業に取り入れている。体育が苦手な生徒も楽しめるだけでなく、生徒が自然に補助役を務めて助け合ったりする効果もあったという。日本ラート協会によると、中学の授業でラートを取り入れているのは同校だけだという。

(伊沢健司)

津の一身田中

る。日本ラート協会によると、日本では第2次世界大戦中、「フープ」として航空操縦士を養成するために使われていたという記録があるという。現在の国内の競技人口は約500人。

重

13版 ◎

2008年(平成20年)10月7日

火曜日

享月

日

業



器械体操が苦手でも

けてきた。今年9月から器械運動でラートを採用し、2、3年の生徒が挑戦した。体育を担当する下地啓一教諭は「ラートは、経験者がいないのでスタートラインは同じ。最初は恐怖心があるが、器具に身を任せると、誰でもすぐに回れて達成感がある」。全6時間の授業で、回っている最中に手を組み替えられるようになる生徒もいたという。

3年の山岡恭輔さん(15)は「回っているときは宙に浮いているみたい。最初は怖かったが、今は新しい技に挑むのが楽しみ」と話す。「マット運動が苦手な回る感覚が分からなかったが、回る感覚が楽しめた」という生徒もいたという。

下地教諭は「何も言わなくても生徒同士が自然に補助役にまわってお互いを助け合う場面もあった」と話した。

ラートに挑戦する生徒たち＝津市
一身田中野の市立一身田中学校

ラートは1925年にドイツで生まれた。競技は側転のように回る「直転」、

キーワード

二重の輪の片方だけを地面につけて回る「斜転」、転がるラートを跳び越える「跳躍」の3種目がある。

(朝日新聞/2008.10.7)

中学校体育のカリキュラム改善に関する一考察

保健体育コース 57 期 205121 番 山本洋也

指導教員 岡野 昇

問題の所在及び目的

筆者は公立中学校の教育実習を経験し、中学校の体育授業(カリキュラム)は、課題解決型、能動的志向、一人でもできる運動、自主的、主体的ということが大切にされ授業が展開されているように感じた。それは、他者、モノ、記録、課題などに対して意志的に自分を向かわせる、すなわち「働きかける」という志向性である。このような体育授業(カリキュラム)では、積極的受動性、すなわち他者やモノなどからの情報を受動し、それに合わせて自らが動かされる、「働きかけられる」という志向性にはあまり着目されていないのではないかと考えた。

よって本研究では「働きかけられる」ということに着目するために、運動者が主体的に操作するとともに、ある程度身を任せることが必要であり、「自由に操ろう」という意識が強すぎると上手くいかない(後藤, 2008)といわれる、ラート運動の中学校の体育授業への導入を手がかりに、中学校体育のカリキュラム改善の視点を明らかにすることを目的とする。

研究の進め方

- (1) 第Ⅰ章では、岡野(2003)の論を手掛かりに、これまでの体育カリキュラムの問題点を提示し、これまでと本研究でのカリキュラム改善に関わる考え方や立場を明確にする。
- (2) 第Ⅱ章では、全国で初めて中学校でラート運動の導入を試みた体育授業を取り上げ、生徒への質問紙調査の結果をまとめる。
- (3) 第Ⅲ章では、第Ⅱ章での質問紙調査の結果を考察し、明らかになったことから、カリキュラム改善の視点を提示する。

第Ⅰ章 カリキュラム改善と中学校の体育カリキュラム

カリキュラムについて、佐藤(1996)の文献から「カリキュラム＝プラン(計画)」という従来の捉え方ではなく、「カリキュラム＝学びの経験(履歴)」と捉えることで、カリキュラムは「教え・学びのレベル」＝[カリキュラム①]、「学校の計画のレベル」＝[カリキュラム②]、「国の政策レベル」＝[カリキュラム③]の3つに整理され(駒林, 1987)、学習指導要領など[カリキュラム③]や[カリキュラム②]を

そつなくこなし、カリキュラムをよりよく変えようという姿勢を持たない、カリキュラム・ユーザーではなく、実際の子どもの姿からカリキュラムを考え、子どもと共に生成していく、カリキュラム・メーカーとして位置づかななくてはならないということを検討した。その上で、筆者は3つのレベルのうち[カリキュラム①]つまり「教え・学びのレベル」での改善に目を向け、自分自身の実習などから現在の中学校の体育カリキュラムをみなおした。

現在の中学校体育は機能的特性を背景としており、学習指導要領で取り上げられる種目は、欲求充足として「競争・克服・達成」の要素を含む競技スポーツが多くを占めている。つまり、現在の中学校の体育カリキュラムの問題点に、岡野の「働きかける－働きかけられる」という視点から、カリキュラムが「働きかける」というほうに傾斜しているという問題が明らかになった。よって「働きかける」と共に「働きかけられる」にも着目することが大切であるということを考えた。

そこで今回は、ラート運動を取り上げていくことにする。これまでの中学校体育と本研究での筆者の立場をまとめたのが表1である。

表1 これまでと本研究の立場

	これまで	本研究
教師の立場	カリキュラム・ユーザー	カリキュラム・メーカー
中学校体育において大切にされる視点	働きかける 主体性	働きかける－働きかけられる 主体とともに客体
運動種目	スポーツ(競争・克服・達成) 中心	ラート運動

第Ⅱ章 中学校体育におけるラート運動の導入の試み

本章では前章をうけ、M県T市立I中学校の体育授業におけるラート運動の導入の試みを取り上げた。そこでは全60時間の参与観察と、単元終了後に質問紙調査を行った。質問紙調査の内容は、「体育授業についての形成的授業評価」(調査項目Ⅰ)、「ラート運動の特性について」(調査項目Ⅱ)、「ラート運動と中学校体育の他領域との関係」(調

査項目Ⅲ)、「自由記述」(調査項目Ⅳ)の 4 種類で、これらを 1 つにまとめ、シートを作成した。また、それぞれを集計し、その結果をまとめた。

調査項目Ⅰでは、「成果」「意欲関心」「学び方」「協力」の 4 つの次元と「総合評価」があり、2 年生は全体的に「協力」次元が高く、3 年生は全体的に「成果」「学び方」の 2 つの次元と「総合評価」が高い評定であるという結果が得られた。

また、調査項目Ⅱでは、ラートの特性についての質問項目が 5 つあり、「気持ちよかった」「浮遊感を味わえた」という質問に対しては「そう思う群」に回答した生徒が全クラスの平均で 6 割、「どちらともいえない」と合わせると 8 割を超えるという結果が得られた。また、「怖かった」「目が回った」「疲れた」という質問に対しては、ほとんどのクラスで「そう思う群」と「そう思わない群」が同じ比率であるという結果が得られた。

調査項目Ⅲでは、カリキュラムについての質問項目が 8 つあり、その中の「またラート運動をやってみたいか」という質問には、「そう思う群」に回答した生徒が全クラスの平均で 8 割を超えているという結果が得られた。また、球技以外の領域と比べるとラート運動の方が楽しかったと回答する生徒が半数を超えていた。

調査項目Ⅳでは、自由記述を KJ 法にかけた。ここでは、3 年生は回転場面など「働きかけられる」という局面に関するコメントの件数が多くあった。一方、2 年生は「競争・克服・達成」といった、より意志的な「働きかける」という局面に関するコメントの件数が多かった。

第Ⅲ章 中学校体育のカリキュラム改善の視点

第Ⅱ章の結果について考察すると、調査項目Ⅲから、ラート運動はおおむねの中学生に受け入れられているということが明らかになった。その理由としては調査項目Ⅱから、「気持ちがよい」「浮遊感を味わえる」や、多少の怖さ「ハラハラ・ドキドキ」や遊園地のコーヒーカップに乗って感じられるような多少の「眩暈」を感じられるからではないかと推測される。また「疲れるけど疲れない」、つまり「働きかける」局面と「働きかけられる」局面のどちらも生徒は感じられているということが推測できる。授業としてしてみると、調査項目Ⅰより、ラート運動の授業としては、クラス、学年によって受け入れられ方が違い、2 年生よりも、3 年生に多く受け入れられ、調査項目Ⅳからは、3 年生はラート運動の「働

きかけられる」という側面に楽しさの多くを感じており、一方 2 年生は「競争・克服・達成」など「働きかける」という意志的なところに楽しさの多くを感じていたということが明らかになった。

以上のことから、ラート運動はおおむねの中学生に受け入れられていること、つまり、ラート運動が特性としてもつ「働きかけるー働きかけられる」、特に「働きかけられる」という視点は中学生に受け入れられるということが分かった。また、発達段階や、クラスの実態に応じて、人、物的障害、記録などに向かい、それを超えていこうとする「達成・超越志向」と、人やモノに融けこみ、感じようとする「共感志向」の取り上げ方、ラートであれば前者は「技ができるようにしよう」、後者は「ラートに合わせて回ってみよう」など、同じ運動を取り上げるにしても、どのようなことを大切にしてカリキュラムを構成していくか、授業の進め方を考えていくかという、カリキュラム改善の視点が必要だということが明らかになった。

まとめと今後の課題

本研究では、以下の 2 点がカリキュラム改善の視点として明らかになった。

1 つは、「働きかける」と共に「働きかけられる」にも着目していかなければならないということ。2 つは、他領域でも、発達段階やクラスの実態に合わせて「達成・超越志向」「共感志向」の取り上げ方を考えていくことである。つまり、今回のようにラート運動を取り上げれば、「働きかけられる」という側面に着目できるという事ではなく、取り上げる種目で、「達成・超越志向」と「共感志向」のどちらを中心としてカリキュラムを考えていくかということが必要であるということである。

今後の課題として挙げられるのは、本稿では、この実践について教師はどう感じているのか、また実際の運動場面での検討がなされていないというところである。今後、検討が必要である。

【引用・参考文献】

- 後藤洋子(2008)「保健体育科授業にラート運動を導入するという取り組み」、三重大学教育学部・一身田校区連携推進協議会編、p.55
- 駒林邦男(1987)「子どもは授業で何を学ぶか」、『岩手大学教育学部研究年報』第 46 巻第 2 号、pp.79-80
- 岡野昇(2003)『「かかわり合い」の成り立ちを基軸とした授業構想の視座』、『学校教育研』、No.18
- 佐藤学(1996)「序論 カリキュラムの言語と実践」、『カリキュラムの批判 公共性の再構築へ』、世織書房

学びを深めるラート運動の授業展開の視点

教科教育専攻保健体育専修 208M030 加納岳拓

KW: 関係を「崩す」「加える」から生まれる「気づき」、運動リズム

1. はじめに

三重県津市立一身中学校(以下、一身田中学校)では、体育の学習内容として新たにラート運動を導入するために、平成 19 年度から教員がラート運動の研修(2 回)を行っている。昨年にも 1 回教員対象の研修が行われ、ラート運動の授業が全国で初めて中学校で行われた(器械運動領域)。

本年度も、4 回目のラート研修会が行われた。講師に檜皮貴子氏(東京芸術大学)を招き、教員の技の習熟とともに、昨年に引き続き、ラート運動を行う中学 3 年生対象の授業を見据えて、「ラート運動のチェックポイントと応用～3 年生の授業で何を教えるか～」をテーマとし研修会が行われた。この研修をもとに、ラート運動の体育授業での展開を検討していく。

2. 一身田中学校ラート運動研修会実施概要

- ①実施日時:平成 21 年 7 月 27 日(13:30～16:00)
- ②実施場所:一身田中学校体育館
- ③参加者 :三重大学教授(1 名)、一身田中学校教員(4 名)、三重大学学生(3 名)

3. 一身田中学校ラート運動研修会活動概要

ラート運動研修会の内容は、直転 5 級の技を中心として以下のように行われた。

- ①ラートを使った準備体操
- ②側方回転
- ③シュビンデル前方回転
- ④シュビンデル後方回転
- ⑤側方回転(逆さで停止)
- ⑥前方回転
- ⑦後方回転
- ⑧斜転の導入
- ⑨ぶらさがり側方回転

運動者が技(②～⑨)を行う、又は補助や運動観察を行う際には、技を美しく行うために運動中の爪先の方向・膝の曲げ伸ばし・視線の方向に意識を向けることが大切であることが伝えられた。加えて、ラート運動は運動者が主体的に操作するだけではなく、ラートに身をまかせ、ラートの動きにからだを合わせていくことを意識することが不可欠であると指導を受けた。

また、技の難易度を高めていくことによって、ラート運動の世界をより味わうだけではなく、1 つの技を行うにしても、2 人で合わせたり、音楽に合わせて回転したりすることも新しい技として位置づけてもよいとされた。

4. 考察

ラート運動研修会を基に、ラート運動の学びを深める「単元展開」の視点から考察する。

ラート運動は、主体的に働きかけることだけではなく、ラートの動きに合わせる事が大切なため、「(ラートを)操るー(ラートに)操られる」が運動のおもしろさと言える。一方で、生徒は、技を習得したい、綺麗に回りたいという志向性を持ち運動に参加すると考えられる。1 つの動きや技に憧れ、運動に参加しても、技を習得し、安定した演技ができ、さらには運動が自動化されていく。この習得・定着への道筋だけでは、ラートの動きに敏感であった生徒も徐々に、ラートへの意識も薄くなり、運動が飽和してしまう危険性がある。

そこで、子どもたちを常に「操るー操られる」世界に参加させるためには、安定した世界にいる生徒とラートの関係を「崩す」、又は関係を「加える」ことで、再び他者やモノ、自己のからだに目を向けるような手立てが必要となってくる。今回の研修会で「新しい技・動きへの挑戦」として提示された①側方倒立回転の途中で止まる、②ラートの動きだけではなく他の運動リズム(相手、音楽)に合わせるといった手立ては、単に「1 人で回る」生徒よりも難易度が高く、次の段階にあると捉えるのではなく、生徒全員が「ラート(ラート以外の他者)に合わせて回る」というおもしろさを共有するための指導として位置づける必要があるだろう。この「崩し」「加える」によって、ラート運動のおもしろさが広がり、加えて身体的な新たな「気づき」や、ラートの器具の特性への「気づき」も深まっていくと考えられる。

5. おわりに

一身田中学校ラート運動研修会から、以下の 2 点が考察された。

- ①習得・定着のための手立てだけではなく、よりおもしろさを味わうために、生徒とラートとの関係を「崩す」「加える」こと。
- ②「崩す」「加える」視点として、他者(仲間、音楽)の運動リズムに合わせること。

中学校体育のカリキュラムの視点

保健体育コース 4 年 竹島 章

KW: 積極的受動性

1. はじめに

三重県津市立一身中学校（以下、一身田中学校）では、体育の学習内容として新たにラート運動を導入するために、平成 19 年度から教員がラート運動の研修（2 回）を行っている。昨年にも 1 回教員対象の研修が行われ、ラート運動の授業が全国で初めて中学校で行われた（器械運動領域）。

本年度も、4 回目のラート研修会が行われた。講師に檜皮貴子氏（東京芸術大学）を招き、教員の技の習熟とともに、昨年に引き続き、ラート運動を行う中学 3 年生対象の授業を見据えて、「ラート運動のチェックポイントと応用～3 年生の授業で何を教えるか～」をテーマとし研修会が行われた。この研修をもとに、ラート運動の体育授業での展開を検討していく。

2. 一身田中学校ラート運動研修会実施概要

- ①実施日時:平成 21 年 7 月 27 日(13:30～16:00)
- ②実施場所:一身田中学校体育館
- ③参加者:一身田中学校教員(4 名)
三重大学学生(3 名)
三重大学教授(1 名)

3. 一身田中学校ラート運動研修会活動概要

ラート運動研修会の内容は、直転 5 級の技を中心として以下のように行われた。

- | |
|--------------|
| ①ラートを使った準備体操 |
| ②側方回転 |
| ③シュピンドル前方回転 |
| ④シュピンドル後方回転 |
| ⑤側方回転（逆さで停止） |
| ⑥前方回転 |
| ⑦後方回転 |
| ⑧斜転の導入 |
| ⑨ぶらさがり側方回転 |

運動者が技（②～⑨）を行う、又は補助や運動観察を行う際には、美しく見せるために運動中の爪先の方向・膝の曲げ伸ばし・視線の方向に意識を向けることが大切であることが伝えられた。加え

て、ラート運動は運動者が主体的に操作するだけではなく、ラートに身をまかせ、ラートの動きにからだを合わせていくことを意識することが不可欠であると指導を受けた。

また、技の難易度を高めていくことによって、ラート運動の世界をより味わうだけではなく、1 つの技を行うにしても、2 人で合わせたり、音楽に合わせて回転したりすることも新しい技として位置づけてもよいとされた。

4. 考察

ラート研修会を基に、中学校体育のカリキュラムの視点から考察する。

ラート運動は、運動者が主体的に働きかけることのみでは成り立たず、ラートの動きに合わせる事が大切なため、「(ラートを) 操る－(ラートに) 操られる」ことが運動のおもしろさといえる。言い換えれば、運動者が操ろうとすればするほど思い通りに操ることができなくなる事でおもしろさが味わいにくなる。現在の体育の授業では子どもたちの「自主性」「主体性」「能動的志向」など運動者自身から「働きかける」という志向性が重視されている。このような体育授業では他者やモノなどからの情報を受動し、それらに合わせて自らが動かされる「働きかけられる」といった積極的受動性という志向性を身に付けられる体育授業を展開していくことが難しくなる。ラート運動は「働きかける－働きかけられる」の往還によっておもしろさが生み出されていることから、運動者は主体的に操作することと運動に身を任せることが必要になるので、積極的受動性を高める運動として位置づけることができるだろう。

5. おわりに

一身田中学校ラート運動研修会から、以下のことが考察された。

- ①「働きかける」と共に「働きかけられる」ことに着目しなければならないこと。
- ②積極的受動性を高めるという視点から、中学校体育にラート運動を取り上げることができること。

体とラートの動きを感じる

保健体育コース 3 年 伊藤茂子

KW: 思い通りに動かない, 体とラートへの感じ

1. はじめに

三重県津市立一身田中学校(以下, 一身田中学校)では, 体育の学習内容としてのラート運動導入のため平成 19 年度から教員がラート運動の研修を行っている。

本年度は, 講師に檜皮貴子氏(東京芸術大学)を招いて研修を行った。ラート運動の技の習得とともに, 「ラート運動のチェックポイントと応用〜3 年生の授業で何を教えるか〜」というテーマで行われた。この研修から, ラート運動のおもしろさ, 「操るー操られる」について考察する。

2. 一身田中学校ラート運動研修会実施概要

- ①実施日時: 平成 21 年 7 月 27 日 (13:30~16:00)
- ②実施場所: 一身田中学校体育館
- ③参加者 : 一身田中学校教員 (4 名)
三重大学学生 (3 名)

3. 一身田中学校ラート運動研修会活動概要

ラート運動研修会の内容は, 以下の通りである(表 1)。

表 1 ラート運動研修会

①ラートを使った準備体操
②側方回転
③シュビングル前方回転
④シュビングル後方回転
⑤側方回転 (逆さで停止)
⑥前方回転
⑦後方回転
⑧斜転の導入
⑨ぶらさがり側方回転

ラート運動を行う前の器具の付け方, ラート運動を行う際の注意点について指導をうけた。運動観察の時も実際に行うのと同様に, 爪先の方向・膝・頭の位置・視線の意識に注意することが大切である。また, 自分の動きだけでなく, ラートの動きも感じる事が重要であると言われた。

中学生の時期は筋力にも差が出やすく, ラート運動の技の高まりに個人差は顕著になる。そのため指導していく際には, 技の高まりだけでなく, 音楽や人と合わせるなどの, 技の深まりの指導も大切であるとされた。

4. 考察

一身田中学校のラート研修会を基に, ラート運動のおもしろさ, 「(ラートを) 操るー(ラートに) 操られる」について考察する。

ラート運動は, 主体的にラートを動かそうとすることだけでなく, ラートの動きに合わせることが大切だとされる。そのため「(ラートを) 操るー(ラートに) 操られる」ということが, おもしろさだと言える。ラートを行う際の, 体とラートの動きの感じを感じることがおもしろさにつながるのではないだろうか。

講習会において, 思い通りにラートが動かない場面がみられた。受講者は体を動かしてみて, ラートの動きを確かめるという行動をとった。この行為は, ラートを動かそうとする自分の思いだけでなく, ラートと体の動きの感じを感じようとしていたといえるのではないだろうか。また, スムーズに回る受講者には体を動かそうとする行為よりも, 動き出しに体を動かし, ラートの動きを感じてから, ラートに体を預け・任せるといった様子が見受けられた。動かそうとする時ラートを操り, ラートの感じに体が操られる。体を動かしながらラートの動きを感じて, それに合わせて体とラートが動いてゆくのを感じようとする。つまり, 体とラートへの感じを双方向に感じる事ができたとき, 「(ラートを) 操るー(ラートに) 操られる」につながっているといえるのではないだろうか。

自分の体だけでなく, ラートの動きを感じようとする事が, ラートのおもしろさにつながると考えられる。

5. おわりに

一身田中学校ラート研修会より, 体だけでなく, ラートの動きの感じを感じながら行うことが, ラート運動のおもしろさ「操るー操られる」につながる事が考察された。

第 2 回ラート運動学習指導案検討会事後報告

保健体育コース 3 年 伊藤茂子

平成 21 年 8 月 24 日に、津市立一身田中学校保健体育科教員 4 名・三重大学教員 2 名・学生 1 名で、11 月 12 日の授業公開研究会に向けたラート運動の学習指導案検討が行われた。

指導案では、ラートを鉄棒（器械運動）の代わりとして取り扱うことが明記されていた。カリキュラムレベルでラートをどう扱うかによって、目標や指導全てが変わってしまうことが再確認された。「器械運動」として、ラートを位置づけた場合、克服・達成という欲求を充足させるための運動として扱うことになり、技の習得が主となる。つまりは、いかに思い通りにラートを動かすかに焦点が当てられる。しかし、副題として提示されている「体づくり」の視点でいうと欲求充足ではなく、必要充足の機能となる。ラートの技の習得に際してのラートを「操る」という思い通りにする体だけでなく、ラートのおもしろさであるラートに「操られる」という思い通りにならない体にも気づくことが必要となってくる。

以下は、検討会終了後に筆者が作成してみた指導案である。

Ⅰ. 単 元 体づくり運動(ラート)

Ⅱ. 目 標

1. グループで互いの安全を確かめ補助し合いながら、周囲の状況にも目をむけラート運動を行うことができる。
2. 自分や仲間の回れる・回れない感じを察知し、その感じを仲間に工夫して伝えることができる。
3. ラート運動の特性を理解し、ラートを操ったりラートに操られたりする身体操作を習得することができる。

Ⅲ. 指導上の考察

1. 教材について

ラートは、直径約 2m の鉄製の輪を平行につなげた運動器具である。ラート運動には、「非日常的な身体感覚」、「器具に身を任せる感覚」、「身体の認知」という特性があり、今までの運動にない感覚を味わうことが出来る。

私たちは小さい頃ブランコや木馬・一輪車といった乗り物に乗っていた。この種の乗り物は、自分の力を加えるだけでは動かない。乗り物を操ろうと力を出すだけでなく、力を抜き操られている瞬間が存在していると考えられる。しかし、中学生・高校生となるとそういった乗り物に乗る機会はほとんどない。自分の力だけでは乗れない、つまりは「器具に身を任せ」て「乗せてもらう」経験が中学生・高校生では抜けてしまっているのではないだろうか。

そこで、ラートを乗り物として捉え、「(ラートを) 操る－(ラートに) 操られる」言い換えれば「乗る－乗せられる」というラートのおもしろさを伝え、中学生の体を育てたい。

2. 指導について

ラートを「器械運動」として扱うのではなく、「体づくり」として扱うので、技の習得に終始してはいけない。「器械運動」として扱う場合、ラートの 5 級の技全てが出来たら、成績がよくなり、難易度レベルも評価には必ず伴ってくる。しかし今回は「体づくり」として扱うので、技の難易度だけで判断してはいけない。ラートの特性である「操る－操られる」・「乗る－乗せられる」という身体感覚の享受と身体操作の習得が求められる。つまりは、この技が出来ているかどうかで評価するのではなく、ラートの本質を理解し楽しめているかが重要である。側転が出来ている子が本当に「操る－操られる」体になっているのかを見極めなければならない。簡単な回り方であろうとラートの楽しさを享受していれば、「操る－操られる」体になっているといえるのかもしれない。ラートの何を楽しんでいるのかが重要である。

指導形態は異質の 4 人 1 組のグループ学習を取り入れる。この学習は出来たか・出来ていないかのいずれかとなり、より深い学びが生まれると考える。

例えば、グループの 3 人が出来て残る 1 人が出来ていないとき、このグループは（出来た 3 人も）出来ていないと判断する。そのため、上手く回れる子は「なぜ、回れないのか」・「この子の体はどうなっているのか」・「自分とどう違うのだろう」等、仲間の回れなさを察知しようとして仲間を観察したり、自分の動きを確かめ、自分の感覚や動きなどを伝えたりしようとする。

また、回れない子は自分の回れない感を伝える（言う）ことができるかが大切となる。この双方のやりとりで、出来ていない子は出来ている子の感じを取り入れながら、そして回れた子も回れない子を通して、自分の感じを確かめることができ、それが深い学びへとつながっていくのである。回れる子が教え、回れない子が教えられるという教師対生徒の関係を持ち込むのではなく、双方が感じ、伝えながら学びあっていくのである。

グループ学習にすることで、「がんばれ」という声かけはなくなり、「ここがこうなっているよ」という助言に変わって行く。子どもたちの関係を指導し、どうかかわらせるかによって価値の転換を図りたい。回れない子がいたら回れない子が悪いのではなく、回れるようにできない方が悪い（本当に回れていない）という考えへの転換でもある。ラート運動にグループ学習を取り入れることによって、深い学びが期待される。

学習内容を提示した後は、出来るようにする指導と出来た子（グループ）に対して出来なくする指導、新たな課題を準備しておくことが必要である。

IV. 指導計画

<2 年生 計 32 名>

指導計画を 3 段階ほどに分け、2 時間で 1 つもしくは 2 つの技をグループで取り組ませる。回れるようになったら、回れなくさせるような新たな課題提示が必要となる。単技だけでなく、連続技にも挑戦させていく。

時	内容	指導上の留意点
1・2 時間	・ ラートに慣れる 学習課題：シーソー・側転	グループ全員ができなければ、例え自分が回れていても本当にできたことにならないことを伝えておく。側転ができた場合は、途中で止まったりできるのか等、新たな課題を提示する。 誰のどんな声かけで回れるようになったかを聞き、発表させる（全時間）。
3・4 時間	・ ラートを感じる シュピンドル前方回転・シュピンドル後方回転	感じを伝え合いながらするように伝える。1・2 時間目に行った側転との組み合わせも提案してみる。
5・6 時間	・ ラートで仲間を感じる ・ 連続技にも挑戦してみよう 後方回転・前方回転	自分や仲間の体がどうなっているのかに着目させ、回れる感じ・回れない感じを察知し、伝えられるようにする。 今まで学習してきた技で連続技に挑戦してみる。

<3 年生 計 33 名>

指導計画を前半と後半にわけて行う。2 年次でラート運動を経験しているので、自分の持ち技をベースにした学びを求める。前半は、昨年の感じを振り返りながら、グループで確認・感じを伝え合っていく。

後半は自分の技や感じの追求だけでなく、仲間と技を合わせるという新たな視点を持つことで深い学びになってくると考える。

前半	指導上の留意点
昨年の振り返り・確認 (技の一通りを確認する)	目標となる 3 つの観点と、グループでできたか・できてないかを判断することを伝える。 出来たと思っている技も、新たな課題を提示し、出来なくさせることで、考え・感じながらより深い学びになる。
後半	指導上の留意点
持ち技をベースに演技構成を考えていく。 技を合わせていく。 (発表)	自分の技が上手く行くかどうかというレベルから、仲間と合わすことを大切にする。 それぞれの持つ技を生かし、演技を考えるようにする。

広がるからだを育てるラート運動

保健体育コース3年 ○伊藤茂子
保健体育コース4年 竹島 章

KW: 体づくり領域, 回り方の追求, 広がるからだ

1. はじめに

三重県津市立一身田中学校(以下、一身田中学校)では、体育の学習内容としてラート運動を導入するために、平成 19 年度から教員がラート運動の研修を行っている。

本年度も講師を招いてラートの実技研修を実施した。これまでの研修を基に、11月12日の公開授業に向けてラート学習指導案検討会、三重大学教員2名と一身田中学の教員4名で2回行ってきた。今回は指導案検討会の3回目である。

この検討会をもとに、体づくり運動領域におけるラート運動の授業がどのような可能性を持つのかを検討していく。

2. 一身田中学校ラート指導案検討会実施概要

- ①実施日時: 平成 21 年 10 月 22 日(16:00~18:30)
- ②実施場所: 三重大学
- ③参加者 : 一身田中学校教員 (4 名), 三重大学教員(2 名), 三重大学学生 (2 名)

3. 一身田中学校ラート指導案検討会実施概要

検討会の初めに、技の習得が目的ではないことが確認された。授業後に生徒が振り返るカードの目標記入箇所が、単元を通して変化できない形式であった。そのような形でなく、目標が変化することで、学習してきた足跡(プロセス)を残せる形が提案される。

指導案の目標と対応した振り返りカードを作成する必要性が話にあがる。目標という枠組みのあるカードを作ることで、生徒が何を振り返るのかが明確になり、目標を意識して授業に参加できるようになることが話し合われた。しかし、指導案の目標をこどもに分かりやすく説明する言葉は見つからなかった。

学生から「技によって感覚は違うのか」という質問が出る。ここから、運動課題の提示に話が変わる。「技に挑戦」という運動課題を提示すると、技の完成度に焦点が当たる。もちろん、技ができることは何らかの感覚を味わっているはずだが、技という器械運動的追求ではなく、どのように回るのかという「回り方」の追求が、体づくりにおいて重要である。(別紙表 1. 参照)

演技発表においても、どの技で回れるかというよりも、連続 4 回転を技と回り方の組み合わせでどのよ

うに回れるかが評価の対象となる。

検討会の最後に単元構成の編成がなされた。技の追求が目的ではないので、難易度による技の順番もなく、一つの技で広げていくことが可能であることが確認された。

4. 考察

検討会で話し合われたことを基に、体づくり運動領域におけるラート運動の授業が持つ可能性について考察する。

ラート運動には基本となる技が5つある。器械運動領域でラート運動を扱う場合、技の難易度と呼ばれるものが、評価の大きな要素となる。より完成した技を追求し、出来栄が評価の対象となる。つまり、生徒はより難易度の高い技を習得することが求められ、完成形へ「向かうからだ」を要求されるのである。

一方、体づくり運動領域として扱うならば、難易度は評価の対象にならないだろう。この領域では完成された技を求めるのではない。しかし、この領域でラート運動を扱うことは、技の習得をしなくて良いというわけではない。

技の難易度ではなく、その技をどのように回るのかという多様な解釈をいれることで、連続 4 回転という組み合わせの方法も増えてくるものと思われる。

体づくり運動では、多様な経験・運動が大切とされる。その中でラート運動を行う事により、完成形へ「向かうからだ」ではなく、多様な回り方を広げていく「広がるからだ」が要求されるのではないだろうか。連続した回転は、技の難易度の追及だけではうまくいかない。技の追求だけでなく、反動をつけずに回ることができるのかなどの、「回り方」の追求も余儀なくされるのである。

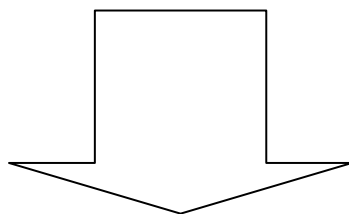
体づくり運動領域におけるラート運動の授業は、技・回り方の組み合わせを評価の対象と考えることで、一つの技の可能性を広げるとともに、子どもの「広がるからだ」が育つ可能性が考えられる。

5. おわりに

以上のことから、体づくり運動領域におけるラート運動の授業は、技の獲得に「向かうからだ」ではなく、技と回り方の組み合わせにより、こどもの「広がるからだ」を育てる可能性があることが考察された。

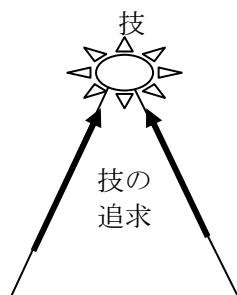
(別紙表 1) 振り返りカード

技 \ 回り方	回れた	ゆっくり回れた	反動なしで回れた	途中停止再始動
側方回転				
シュピンドル前方回転				
シュピンドル後方回転				
前方回転				
後方回転				

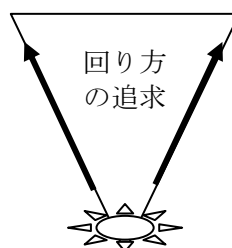


(表 1. の説明)

	「回り方」＝どのように、どんな風に回ろうとしたか（方法）
技の名前 何の技を回ろうとしたか（内容）	



技の獲得に「向かうからだ」



技と回り方を組み合わせる→「広がるからだ」

「働き－働きかけられる」子どもとラートとの関係をつくる

保健体育コース 3 年

○伊藤茂子

保健体育コース 3 年

廣智恵里

スポーツ健康科学コース 3 年

林 直哉

KW: ラートとの一体感, 「働き－働きかけられる」子ども

1. はじめに

三重県津市立一身田中学校(以下、一身田中学校)では、体育の学習内容としてラート運動を導入するために、平成 19 年度から教員がラート運動の研修を行っている。

これまでの研修を基に、11 月 12 日の公開授業に向けて学習指導案の検討を、三重大学教員と一身田中学の教員で 3 回行った。今回は最終の指導案検討会であった。この検討会を基に、体づくり運動領域におけるラート運動の視点を考察していく。

2. 一身田中学校ラート指導案検討会実施概要

- ①実施日時:平成 21 年 11 月 6 日(15:00～17:30)
- ②実施場所:三重大学
- ③参加者 :一身田中学校教員 (4 名), 三重大学教員(2 名) 三重大学学生 (3 名)

3. 一身田中学校ラート指導案検討会実施概要

検討会の始め、クラスで違いはあるが、側方回転が回れると授業へ積極的に参加できる傾向のあった授業の様子が報告された。その中で、技にチャレンジする器械運動的思考から、多様な回り方を探求する体づくり運動の思考への切替えが、教師・子ども共に難しいという問題が挙げられた。

そこで、授業の目標を学習カードにわかりやすくのせることで、「何のためにラート運動をするのか」を明確にする方法が出された。目標の 1 番目を子どもにわかりやすく伝えることが前回同様課題となったが、「ラートと一体化(同化)する」といった、「ラートと自分の境界線がなくなるような溶け込む感覚」、いわゆる「共感規準」が体づくり運動では重要なことが確認された。

加えて、カリキュラム構成や楽しい体育について考える中で、ラート運動だから体づくり運動(または、器械運動)であるとは言い切れないことが説明された。

4. 考察

検討会を基に、体づくり運動領域におけるラート運動の指導の視点を考察していく。

ラートと一体化となる感覚を、技を通して味わうのが、今回ラート運動を行う価値となるであろう。同じラート運動でも、「自分の力を伸ばしていくため」、「将来役に立つから」といった価値になる場合もあるだろう。

ラート運動を器械運動領域に位置づけた場合、ラートは技を獲得する道具に過ぎないと考える。その場合、自分の思う通りに動かすため、ラートへ働きかけることばかりに意識が向くことが予想される。

しかし、体づくり運動においてはラートに自分が溶け込むといった感覚、いわゆる「(ラートに)働き－(ラートから)働きかけられる」という同時的なおもしろさを味わうことが目標とされる。つまり、子どもがラートに働きかけるという関係ばかりでなく、働きかけられる(ラートに身を任す)子どもとラートとの関係づくりが重要になると思われる。

その関係がつくれ、ラートと一体となり気持ちよく回れたという感覚を子どもが味わえたとき、結果的にスキルは身についていると考えられる。

このことから、体づくり運動領域におけるラート運動は、技を獲得する道具としてラートを認識するのではなく、「働き－働きかけられる」子どもとラートとの関係をつくるという視点の重要性が考察される。

5. おわりに

一身田中学校ラート運動指導案検討会について、以下のことが考察された。

体づくり運動領域におけるラート運動の指導は、ラートを単なる技獲得の道具として認識せずに、「働き－働きかけられる」子どもとラートとの関係をつくるという視点の重要性が考察された。

ちゃんと「子ども」するということ

— 津市立白塚幼稚園における親子活動の実践から —

伊藤 茂子 三重大学教育学部保健体育コース3年

廣 智恵里 三重大学教育学部保健体育コース3年

藤村 麗佳 三重大学教育学部保健体育コース3年

平成21年6月13日に、津市立白塚幼稚園児とその親を対象に親子活動を行った。小規模な白塚幼稚園は、父親の参加率が非常に高いことから、子どもたちを育てていきたいという積極的な想いを感じ取ることができた。

現代は、危険なこと怪我をしそうなことを子どもから過剰に取り上げていると感じる。それは子どもが「子ども」としていることができる、スリル・チャレンジのような感性や身体性に通じるハラハラ・ドキドキする時間や空間を奪ってきたのではないか。チャレンジやスリルは信頼やかかわりを生み出すと考えるので、それらを奪うということはちゃんと「子ども」することだけでなく、信頼やかかわりをも奪ってしまうことになる。

そこで私たちは、一般的な親子活動で行われるふれあい活動をあえて行わず、スリルを味わえる場を提供することで、ちゃんと「子ども」しようというねらいを達成しようとした。今回の親子活動は、親をおもちゃに遊ぶことで親子単位にとどまらない「つながり」が生れることが明らかになった。子どもに挑戦させたいという親の想いや、子どもの思いに共感する姿を感じることができた。活動に参加する姿がみられなかった子もいたが、それはちゃんと「子ども」していなかったのではなく、「挑戦」の世界に誘っていたからこそその姿だったように思う。また、親の感想から今後の要望は多くみられたが、親子のこれからにつながるものを見出すことはできなかった。ちゃんと「子ども」するためには、やみくもに危険な場を用意するのではなく、身体性をベースとして、「挑戦」と「共感」を「つながり」がつなぐというサイクルが必要となることが明らかとなった。場の工夫だけでなく、いかにこのサイクルをつくり出すかが今後の私たちの課題となる。

キーワード: チャレンジ・スリル, 親がおもちゃ, 挑戦, つながり, 共感

1. はじめに

現代の社会は危険に敏感である。事故が起きれば、即座に遊具の撤去・場所の埋め立てが求められる。それに応じて、“親子関係”の中の危険のセンサーも過剰に反応するようになってきているように感じる。社会の動きとともに、遊び場や仲間の減少、危険や怪我をしそうなことを子どもから取り上げ、子どもはテレビゲームという安全で危険のない遊びをせざるを得なくなっている。このような状況から体全部を使って、スリルを味わったりすることが出来ていないのではないか。スリルを味わうときに、初めて挑戦や信頼が芽生えてくるはずが、それを経験していない。リ

理性や知性に支配された大人の世界ではなく、感性や身体性が研ぎ澄まされるスリルある場に子どもたちをおいてやるのが、ちゃんと「子ども」することであり、今の子どもたちはスリルを取り上げられているという点で、ちゃんと「子ども」していないのかという問題点があがった。

津市立白塚幼稚園(以下、白塚幼)は4歳児8名、5歳児10名保育のみの小規模な幼稚園であり、親は積極的に行事に参加している。今回は、危険や怪我をしそうなことを子どもから取り上げ、それがかわりや信頼をも奪っていることが問題としてとらえ、ちゃんと「子ども」しようというねらいを設定した。チャレ

ンジやスリルは信頼がなければ成り立たず、それはかわりを生み出すと考えた。そこで、あえて危険な要素を持ち合わせたスリルを味わえる場を提供することでねらいが達成すると考え、親子活動に臨んだ。

以上のようなことから、親子活動を創り上げるまでの過程や当日の活動に参加した親の感想に焦点を当て、分析することでちゃんと「子ども」するとは何かを明らかにすることを目的とする。

2. 親子活動の実施概要

親子活動の実施概要は、以下の通りである。

- ① 実施日時: 2009 年 6 月 13 日(土) 9 時 30～11 時
- ② 実施場所: 白塚小学校(体育館)
- ③ 参加者

・白塚幼: 4 歳児 8 名, 5 歳児 10 名

保護者 23 名 職員 5 名

・三重大(以下、三重大)教育学部 3 年 5 名

- ④ 活動のねらい

危険な要素を持ち合わせたチャレンジやスリルを味わえる活動を取り入れることで、信頼を確認しかかわりが生まれ、ちゃんと「子ども」することを達成することをねらいとした。

3. 打ち合わせ

事前に園から頂いた資料は「他の親や子どもかかわりを持てる幼稚園を目指している。自分たち親子だけでなく、他の親子とも触れ合い、いつの間にかみんなで取り組んでいた」という活動にしたいとの事だった。そのことから、スリル・チャレンジの場を提供することで、信頼が芽生え、親をおもちゃに遊ぶことでかわりが生まれると考えスリル・チャレンジの場に合う活動案を出し合った。

6 月 3 日に白塚幼に訪問し、三重大が持参した資料と白塚幼からの実態についての資料を元に三重大の学生 5 名と教員、園長先生と打ち合わせを行った。三重大から持参した資料はテーマ・ねらいをまとめたもの、ねらいに即した活動例の資料である。園

側の資料は、学級編成や家族状況、園児や保護者の実態についてであった。学生が資料の説明を行い、質問やご意見をいただいた。園長先生から遊びに付き合うことが苦手な親や子どもたちも体全体を使って遊ぶことが少ない現状が多く見受けられ、課題としているということを聞いた。これらの白塚幼の想いも、設定したねらいを外すことなく親をおもちゃに遊ぶことが出来れば、達成されることを確認した。

訪問する前に、三重大側が想像していた親子の関係像と園からみた実態とのズレは少なく、企画は事前に計画していたねらい通り進めていくことに決定した。その後、担当の学生 3 名を中心に 5 名で打ち合わせを重ね、活動案を出し合い、流れを作り直して 6 月 13 日の本番を迎えた。

4. 親子活動の活動概要及び活動の様子

当日の親子活動について報告する(表 1)。また活動(下線部)についての具体的取り組みについては以下の通りである。

表 1 当日の親子活動内容

時	6 月 13 日(土)
8:00	大学出発
8:20	白塚幼到着
9:25	参加者が体育館に集合、名札貼り <u>親子活動開始</u>
9:30	<u>準備運動</u>
9:50	<u>丸太 (ステージ1)</u>
10:00	<u>グラグラ橋 (ステージ2)</u>
10:15	<u>がけのり (ステージ3)</u>
10:25	<u>がけジャンプ (ステージ4)</u>
10:35	<u>ぼにょボール</u>
11:00	<u>親子活動終了</u>

4.1 準備運動

宝探しに行くというコンセプトに沿い、体ほぐしの運動を行った。まず子どもがうつ伏せになり、親が全身を手でパタパタ叩く活動(後ほど親子交代)を行い、叩く側は相手の体を感じて強さや叩き方を調節してやることを、叩かれる側はリラックスして相手に体を

委ね、気持ちよさを感じることを目的とした。「木のぼり」「さる」「飛行機」は、互いに力を加えたり支えたりして、親子で協力することで成り立つ活動であった。「転がし・転がされる」活動は、次の活動に繋がるものでもあり、上に乗る、転がしあう、手をつないで転がるなどして互いの重みや手触りを感じあった。

4.2 丸太ころがし（ステージ1）

ここからは、ステージをクリアすれば呪文を手に入れ、4つのステージを全てクリアすれば宝物を手に入れることができるという設定をとった。

ステージ1という設定で、親に丸太になって転がってもらい子どもを1名1名運んで行く活動をした。子どもは普段できない活動を行うことで、親子の関係だけでなく他の親ともつながりを持つことをねらいとする。また、親子の関係だけではできない活動で、親同士のつながりも深めることをねらいとした。

初めは5名1組で親たちに丸太になってもらうようにしていたが、5名では最後まで運びきることができないと思い、急遽7～8名に変更した。子どもたちのほとんどは怖がる様子は見られなかったのだが、中には他の親たちの上に乗ることを嫌がる子どもの姿も見られた。親たちは進んで丸太になり、「せーの」という声かけや、くっつくことを促す声かけや行動が見られた。こちらが何も指示なくても親たちが自ら遊びを生み出し活動している姿から、親たちも楽しんでいる様子うかがえ、親同士の会話が多く見られた。



写真1「丸太ころがし」

4.3 グラグラ橋（ステージ2）

ステージ2は、親に四つん這いになってもらい、その上を子どもたちがバランスをとりながら渡って行き、ぐらぐらをねらいとした活動を行った。

子どもたちには、怖かったら立って渡らなくても、這いで渡ってもよいということを伝え、遊びとして楽しみながらかつ安全に配慮して行った。親たちには四つん這いになってくださいという指示以外は出さなかったのだが、学生が最初取り入れようとしていた高低差のあるぐらぐら橋を親たちが自然と作り出していて、よりおもしろみが増加した。



写真2「グラグラ橋」

4.4 がけのり（ステージ3）

ステージ3の活動は、スリルが味わえる「浮遊感」をねらいとした。これは、次の活動のステップとしても取り入れた。親2名が子ども1名をステージ(以下、がけ)の上に投げ入れ、それを親5名がキャッチする危険を伴う活動である。

学生が考えていた投げ方(子どもを仰向けに寝かせ、親が子どもの手首と足首をもち左右に振って投げる)があったのだが、数名を投げてから親のほうの提案により、縦投げ(子どもの手を前に伸ばしうつ伏せにさせ、がけに対し垂直の状態にして投げ入れる)、いわゆる「スーパーマン」投げが生まれた。園児が自分で投げ方を選ぶ、または親が子どもに聞くというやりとりが生まれた。大半の子どもは投げられることに関心があったが、数名はこの活動に難色を示し参加できなかった。



写真3「がけのり」

4.5 がけジャンプ（ステージ4）

ステージ4は、がけの下で親6名が待ち構えており、子どもががけの上から後ろ（又は前）を向いて倒れこむという、スリル要素の強い活動を行う予定であった。しかし、これまでの子どもの様子から、この活動は無理があると判断し、がけの上から転がり、がけの下のマットに落ちるといった活動に変更した。

怖い子は親に受け止めてもらうことになっていたが、大半は躊躇なく転がっていた。変更したことでスリル要素は少なくなってしまったものの、前回の活動に参加できていなかった子も参加することができた。

がけの上に残る子どもが2名になったところで、園児の帽子をかぶった親3名ががけの上に上がった。2名のお父さんは抱き合いながら転がり、もう1名のお母さんは子どもと同じ活動を行ったことで、場は盛り上がりを見せた。そこで、当初行う予定だった活動を、学生1名が見本となり行った。そのあと親2名も同様に後ろ向きで倒れこむのを、学生と他の親で受け止める活動が生まれた。

ステージ4のクリアにより最後の呪文を貼り付け、呪文が何なのか問いかけた。子どもと親が口々に呪文（おっぱっぴー）を言うなか、学生の1名がおっぱっぴー星名に変装して登場。呪文を大きな声で言うことで、おっぱっぴー星人を倒せるという設定を取った。この呪文は子どもだけでなく、親にも言わせるようにした。子どもの中には泣き出す子もいたが、おっぱっぴー星人を倒して、宝物（Gボール）が出てくる

と、子どもたちは自然に駆け出していった。



写真4「がけジャンプ」

4.6 ぼによボール

宝物、ぼによボール（以下、Gボール）で遊ぶという設定で行った。初めて見たり触れたりするGボールを用いて、親子で新たな感覚や遊びを体験した。

まずは大学生の見本や声かけに合わせてGボールに触れて慣れるため「合体Gボール」「キャッチボール」を導入として取り入れた。「キャッチボール」の際には、学生の声かけがなくても、様々な投げ方が編み出された。学生は危険な使用法について注意を呼び掛けたり、面白い投げ方をピックアップして広めたりした。「飛行機」（親が支えるGボール上に、腹ばいになって手足を伸ばしてバランスをとる活動）では、活動に慣れた頃に「近くの子と手をつないでやってみよう」と提案したところ、2名から3名、3名から4名と増えていくように、親が自然と子どもにはたらかかけている様子がうかがえた。最後には全員で輪になって「飛行機」をした。その後、大学生がGボールの栓を抜き、親子は各々の方法でたたんだ。たたみ終えた子から本日の親子活動が始まる前の隊形に座りなおし、活動終了の挨拶をした。

5. 考察

親子活動後、参加した親（14名）、園長先生の計15名から感想をいただいた。今回の親子活動を、親がどう受け止めたのかを分析することでちゃんと「子ども」というのが何であったのか浮き上がらせ

たい。そのために、15名の感想から「思った」・「感じた」・「考えた」等でくくられている、参加者の主観であると思われるキーセンテンスを53件抜き出し、KJ法に基づいて処理し、グループ編成をした。そのあと互いの関連を求めると、「挑戦」・「つながり」・「共感」の大きな3点が浮き彫りになった。これらに基づき、読み取り文章化してゆく。

① 「挑戦」

「挑戦」のカテゴリーは、活動を行う際の「ハラハラ・ドキドキ」と、それを超えた「恐怖」の2つのグループ世界に分けられる。キーセンテンスの件数は、「ハラハラ・ドキドキ」11件、「恐怖」5件という結果になった。「ハラハラ・ドキドキ」の世界は、「普段家で出来ないことをした」や「親がダメと言っているようなこと、怪我しないかと思うこと」を活動してみて、「ハラハラしたけど、楽しそうだった」と子どもは楽しそうだったという感想が多く、子どもの挑戦する姿を望むものもあった。

子どもが新しいものを見て駆け寄る姿は「ハラハラ・ドキドキ」の世界に誘われ、子どもが子どもである瞬間であろう。今回の活動は、初めてのこと・普段していないこと(スリルある活動)だと考える。楽しんでいた子どもにとっては、その活動は「ハラハラ・ドキドキ」の世界だった。

一方、「恐怖」の世界は、「ハラハラ・ドキドキ」を超えてしまったところにあると考える。ある子どもにとって、知らないひとが大勢いる中で普段したことのない活動は「恐怖」の世界だったのではないだろうか。「いまいちのるきでないわが子をみてがっかりした」という感想が物語るように、緊張したり普段の雰囲気ではなかったりして参加できなかったその子は、「恐怖」の世界に誘われていたのだろう。

しかし、活動に参加していなかったから、ちゃんと「子ども」していなかったと言い切ることはできない。その子の目には「恐怖」の世界が広がっていたものの、その世界に入れたということが、その子どもにとっての大きな「挑戦」であったと思う。その子にとっての「ハラハラ・ドキドキ」の世界は少し遠かったに過ぎ

ない。「恐怖」の世界で尻込みし、目に見える形では参加していなかった子も、その世界に入れたということが、「ハラハラ・ドキドキ」しながら参加していた子と同じように「挑戦」の世界に浸っていたと言えるのではないだろうか。

私たちの考えていた、目に見える形で活動に参加し、遊んでいるからちゃんと「子ども」しているというのは異なる部分に、参加していないようにみえても、それも立派に「子ども」する姿であるように感じた。

② 「つながり」

「つながり」のカテゴリーは、「親子」のみのつながりと、チャレンジやスリルの場を提供することで生まれると考えた「みんな」、「他の親子」のつながりという3つのグループに分けられる。キーセンテンスの件数は「みんな」6件・「他の親子」5件・「親子」2件で「つながり」のカテゴリーでは「みんな」が一番多い結果となった。また、親子関係単位を超えた「みんな」と「他の親子」を足すと10件になる。

今回の活動で道具を使ったのはGボールだけで、それ以外は親が子どものおもちゃになり、子どもと大人が一斉に行うダンスのような活動はしていない。なぜ「親子で一緒に遊べて楽しかった」という感想以上に「みんなと体を動かして楽しかった」や「他の子どもと遊べてよかった」という感想の方が多かったのだろうか。ダンスや触れ合い活動をしなくても、親がおもちゃになることで他の子を支える、他の親に支えられるという体と体が触れ合う、身体性の要素が必要であった。つまり、子ども同士・親子という日常的なつながりから、他の親子に支え・支えられるという非日常的な「つながり」が生まれたことから、「親子」だけでなく「他の親子」・「みんな」の存在を感じることを生み出したのではないだろうか。

スリル・チャレンジの場である「挑戦」の中の「ハラハラ・ドキドキ」と「恐怖」の世界が、「親子」の「つながり」だけでなく「みんな」や「他の親子」を必要とし、「つながり」が広がっていったように思う。

③ 「共感」

「共感」は子どもが活動しているなかで、見ている親が感じる「楽しい」や「ハラハラ・ドキドキ」・「一緒」にしたいといった想いを3つのグループに分ける。キーセンテンスの件数は、「楽しい」5件・「ハラハラ・ドキドキ」1件・「一緒」1件で、「共感」は「楽しい」が一番多い結果となった。そのなかでも、「子どもの笑顔を見て、親まで楽しくなった」ということが中心であった。

場を経験(渡ったり、投げられたり)しているのは、子どもだけのように思う。しかし、子どもと同じように親も「ハラハラ・ドキドキ」したり、子どもたちをみて「楽しい」と思ったり、子どもたちの思いに「共感」している。つまり、親は子どもたちと「挑戦」の世界で「つながり」、笑顔を見て「楽しい」と思い、活動を「一緒」にしたいと思ったのではないだろうか。「共感」することで、今回の親子活動は、子どもだけでなく親も一緒にちゃんと「子ども」させたのだと思う。「共感」することが、危険や怪我をしそうなことを取り上げる一方的な思いを見直すきっかけになると考える。

以上、3点のカテゴリー以外に、「発見」にくられる3件の感想があった。大人にとってはただの片づけが、子どもにとっては遊びになること・ボールひとつであれほど遊べることを「発見」したようであった。

また、「今後の要望」8件で、またやってほしい・こういう機会を増やしてほしいという感想があった。しかし、親のもっと私が子どもと遊びたいという感想はなかった。

「挑戦」の世界で親も子も互いに「つながり」、活動するなかで「共感」する。しかし、親の「私が、したい」につながるものを見出すことはできなかった。それは、親子活動というその場だけが、「挑戦」の場とされているからではないだろうか。その場自体のみが「挑戦」の世界ではなく、その子とその場の関係によって世界は変わるのだ。ただ、危険な場所を用意すれば、ちゃんと「子ども」することが達成されるわけではない。場の工夫だけでなく、いかに「挑戦」の世界で「共感」を生み出すのか。この関係を生み出すに

は「つながり」がなければならない。「挑戦」と「共感」をつなぐ「つながり」というサイクル、それこそがちゃんと「子ども」することではないだろうか。

6. おわりに

本稿では、ねらいであるちゃんと「子ども」するとは何かを明らかにすることを目的として、親子活動はどう感じていたかを、親と園長先生の感想を分析してきた。

その結果、親には親子活動のねらいを伝えていないにもかかわらず、私たちの考え通り「挑戦」や親子以外の「つながり」が広がってゆくことは確認できた。この点で、親子活動に参加した子はちゃんと「子ども」していたといえる。

また、私たちの考えとは異なる部分にちゃんと「子ども」する姿を発見した。それは「ハラハラ・ドキドキ」の世界にいる子どもだけでなく、例え「恐怖」の世界であったとしても、「挑戦」の世界に浸ることがちゃんと「子ども」する姿ではないかということである。理性や知性など、大人になれば身についてゆくところの活動ではなく、感性や身体性に訴えた活動であったように思う。

さらに非日常的な「つながり」が生まれる活動を取り入れることで、「みんな」という存在を感じ「共感」が生まれた。しかし、活動を終えてみて、園側・三重大側への要望はあったものの、「私が、これからはしたい」にはつながらなかった。

ちゃんと「子ども」するには、やみくもに危険な場を用意すれば成り立つものではない。また、「つながり」や「共感」さえあればいいのではない。体で感じる身体性をベースとした「挑戦」の世界があり、そこで「つながり」が広がることで、「共感」が生まれる。今回の活動においてはそのサイクルこそが、ちゃんと「子ども」するということが明らかとなった。

しかし、ただ単にスリルを味わえる場を工夫するだけでなく、いかにこのサイクルをつくりあげていくのが私たちの課題となる。

❖ 若い世代 ❖

「子どもする」大人でありたい

大学生 廣 智恵里

(三重県松阪市 21)

大人はどうも素直ではない。愛想笑いを
する。嫌なことでも、いい顔して引き受け
る。危険なことには、最初から手を出さな
い。それらは社会を生きていく上で必要不
可欠なことであり、いつの間にか私自身も
身につけている術である。それに引き換え
子どもは素直だ。楽しい時には笑う。気が
乗らなければ、はっきり「NO」と言う。

私たちは授業の一貫として地域の幼稚園

や小学校で「親も子も、ちゃんと子どもし
よう」というテーマのもと、親子活動を行
った。そこには子どもに負けないキラキラ
して笑顔を見せる親がいた。親たちが楽し
そうに活動しているのを見てうれしくなっ
た。が、普段、どれくらいの人がめいっば
いに笑い、体を動かしているだろうか。

人は年をとるほど多くの人と縦へ横へと
つながりを広げてゆく。その時、付き合い
方や建前は必ず必要になる。そんななかで
もいつまでも「子どもする」ことが出来る
大人でいたい。そんな機会が多々ある環境
であってほしい。

(朝日新聞朝刊 2009/10/11)

白塚幼稚園親子活動

2009. 6. 13

子どもの遊びの場において、「危ないから」「ケガをするから」といった理由で、子どものスリルに挑戦したい気持ちが満たされないことが多々ある。しかし、親が危険だと思うようなことが、実は子どもにとってはたまたま楽しかったりするようだ。今回の親子活動は、大人も子どももちょうど「子ども」しようということを狙いとして、自分たち親子だけでなく他の親子とも十分に触れあって楽しめる活動を行った。

(編集・文責：伊藤茂子、廣智恵里、藤村麗佳)



よいしょ、よいしょ



宝探しに行くんだって！



3人でも転がれるかな



優し〜くパタパタ叩いてあげよう



向こう岸まであと少し



協力してバランスとれるかな



お父さんお母さんしっかり「橋」してね



いくよっ！せ～の！！



シール全部集めたよ！



この投げ方の方がいいんじゃない？



しっかり支えてね♪



落ちる～！！ハラハラ



みんなで手を繋いでできるかな



お父さん同士も仲良くダイブ



どうやったら速く空気抜けるかなあ

子どもの生活・健康実態調査に基づいた健康教育実践能力向上

1. 目的

時代の変化に伴い、食習慣や運動習慣など児童・生徒の生活習慣も大きく変化している。その結果、子どもの低体力化や肥満傾向児・痩身傾向児、喘息・アレルギーを有する児童、近視児童の増加など過去には少なかった健康問題が多様な教育課題の一つとして顕在化してきている。幼・小学校期や中学校期は生涯にわたる健康の基礎を築く時期であるため、客観的な情報に基づいた健康教育が適切に行われることが望ましい。また、その健康教育は座学としてのものだけではなく、実際にからだを動かしたり、食物（給食）を食べたり、休んだりする中で自分のからだの反応を感じさせながら行っていくことがより効果的である（KYB教育）。一方、学校における健康教育は主に養護教諭を中心として行われるが、中・高で保健の授業を担当する保健体育科教員、もしくは小学校教員を目指している保健体育科学生もその専門性から重要な役割を担うと考えられる。

そこで本取り組みでは現場の保健体育科教員、養護教諭等との協働により児童・生徒の生活や健康実態調査を実際に行い、その情報を卒業研究としてまとめていく過程の中で子どもたちの健康に関わる現状を深く考える機会を持ち、将来の健康教育実践能力の向上を図ることを目的とする。

2. 取組の概要

平成21年度は女性のやせ志向が若年化し、将来の骨粗鬆症化が懸念されている現状において、中学校期における体型認識の現状や運動習慣と骨密度・体力値との関連について明らかにすること（課題1）、また、子どもの低体力化が進んでいる中で、実際に子どもたちに対して体力向上を目指した実践を行い、その効果と課題について検討すること（課題2）を目的として取り組んだ。詳しくは学生の抄録を参照されたい。

3. まとめ

教員は学生達のテーマ選定前から勉強会を通して現代の子どもたちにおける健康課題について情報を提供し、学生も自ら文献検索・文献抄読を行う中で自分のテーマに関わる基礎的・専門的知識を身につけていった。課題1に関しては学生が現場教員と協働できるよう打ち合わせの場を設け、子どもたちの健康に関わる現状を聞く中でより問題意識を高めていった。調査・測定に関しては生活習慣に関わる調査紙の作成、骨密度計といった測定機器の操作方法の修得、測定スケジュールの作成などを通して、客観的で正確な情報を得るために必要な事柄を学んでいった。測定時には実際に子どもたちと会話をしたり、顔色を見たり、体格を見たりする中で、文献を読んだり現場教員からの話だけからでは得られない現状を自ら感じ取っていた。測定終了後、情報の整理・統計処理方法を学ぶ中で、目には見えない健康課題を視覚化し、子どもたちに対する健康教育の中で提示できるような能力を身につけていった。

課題2に関してもほぼ同等であるが、課題1が横断的な取り組みであるのに対し、課題2は指導を行いながら、その結果を評価するものであった。学生達は週に2回程度学校へ足を運び、子どもたちと活動する中で体力の現状を感じ取り、その向上のために自分たちは何ができるのかを考えていった。

今年度は子どもたちを対象とした生活や健康に関わる調査を実際に行い、その情報をもとに健康教育を行うための資料を作成するところまではできた（課題1）。次年度以降はこれらの資料を用いて実際に学生が現場において健康教育を行うことで、実践的指導力を向上していくことが課題である。

（文責：富樫健二）

中学生の生活習慣・体型認識と体組成・骨密度との関連(課題 1)

保健体育コース 58 期 206039 番 加藤拓史

1. 緒言

近年、肥満や生活習慣病を有する成人が増え、肥満傾向を示す子どもも増えている。しかし、その一方で 20, 30 歳代女性を中心に低体重女性の増加も問題となっており、その低年齢化も危惧されている。若年女性の極端な低体重や無理な減量行動は、月経異常や骨粗鬆症、摂食障害といった健康障害の要因となるばかりでなく、将来の成人病発症が懸念される低出生体重児を出産するリスクが高くなることも報告されている(成人病胎児期発症説)。

このように、低体重者自身の将来の健康だけでなく次世代の健康が損なわれる危険が増すにもかかわらず、20, 30 歳代の女性では低体重や標準と判定されながらもさらに体重を減らそうとしている現状がある。やせ志向の増加の背景には自身の体型についての認識のずれや理想の体型の痩身化がある。

この傾向は小・中学生のころから現れており、不健康やせの増加が危ぶまれている。中学生期は急激な成長がみられる時期であり、特に骨密度においては一般的に 20 歳くらいをピークに減少していくとされている。よって、中学生期でのより多くの骨量獲得は将来における骨粗鬆症の予防に大きく関わってくる。

そこで本研究は、中学 1~3 年生の男女を対象として「やせ志向」や体型認識の傾向を検討し、それらと生活習慣(運動習慣・食習慣を含む)や体組成・骨密度との関連を明らかにすることを目的とした。

2. 対象者及び方法

今回の調査は、学校長の許可を得て、対象校の体育科教員の指導のもと保健体育の授業時間に行った。

1) 対象：中学校生徒 465 名(男子 244 名, 女子 221 名)を対象とした。

2) 方法：マルチ周波数体組成計を用いて体組成(体重, 体脂肪率, 除脂肪量)を、超音波踵骨測定装置を用いて右足踵骨の骨密度(スティフネス値)を測定し、自記式質問紙を用いて生活習慣, 食習慣, 体型, 運動習慣を、簡易型自記式食事歴法質問表の中高校生用を用いて栄養摂取状況を調査した。

本研究においては、体格の判定指標として体型指数を算出し、体型指数-15%未満を「やせ」、-15%以上 20%未満を「標準」、20%以上を「肥満」とした。「やせ志向」については、実際に測定された結果と質問紙の回答を用い、やせ体型を望む生徒を「やせ志向あり」とした。

3. 結果及び考察

1) 形態・やせ志向について

学年間の差について性別にみると、男子では身長、体重、除脂肪量は学年が上がるにつれて有意に増加し、一方、肥満度は 3 年生が 1, 2 年生に比べ有意に低値を示した。女子では身長、体重、除脂肪量は学年が上がるごとに増加傾向を示し、すべての項目で 1, 2 年生と 3 年生の間で有意差が認められ、体脂肪率は学年が上がるごとに有意に増加した。このことから、男子では筋肉質な体型に、女子では脂肪がつき女性的な体型に変化しつつあることがうかがえる。

しかし、客観的体型評価で「やせ」に判定される生徒の割合は女子(14.9%)が男子(5.3%)に比べ高い値を示し(表 1)、理想体型に「やせている」を選択した生徒の割合(女子 50.0%, 男子 18.5%)、「やせ志向あり」の生徒の割合(女子 69.9%, 男子 27.0%)でも女子が高い値を示した。また、体型認識のずれについては、標準体型に判定された生徒で自分を「太っている」と認識している生徒の割合は、女子(30.1%)が男子(11.7%)に比べ高い値を示し、女子では学年が上がるにつれて自分を「太っている」と認識している生徒の割合が増加し(15.0%→45.6%)、一方で自分の体型を「ふつう」と正しく

認識している生徒の割合が減少(75.0%→47.1%)傾向がみられた。

このように、中学生女子の間で痩身志向が広まっており、やせた体型に強い憧れを持っていることがうかがえる。よって、中学校のできるだけ早い段階で「やせ志向」や体型認識についての指導を行うことが重要だと考えられる。

表1. 各体型の割合における性差

	n (%)		
	やせ 肥満度<-15%	標準 -15%≤肥満度<20%	肥満 20%≤肥満度
男子(n=244)	13 (5.3)	206 (84.4)	25 (10.2)
女子(n=221)	33 (14.9)	177 (80.1)	11 (5.0)

男女間(p<0.05), $\chi^2=15.2$

2) スティフネス値について

肥満度判定ごとにスティフネス値の平均値を比較してみると、女子においては「やせ」が「標準」「肥満」に比べ有意に低い値を示し(表2)、痩身志向を持ち、減量行動を行うことで体重や体脂肪を落とすことはスティフネス値の低下につながることを示唆された。一方、「やせ志向」やダイエット経験の有無については、

表2. 性別ごとの肥満度判定別におけるスティフネス値

	男子			女子		
	n	スティフネス値		n	スティフネス値	
やせ	13	93.6 ± 15.8		33	84.8 ± 12.8	a
標準	206	96.7 ± 15.7		177	96.0 ± 15.4	b
肥満	25	93.6 ± 13.6		11	105.6 ± 16.0	

a: やせ vs 標準, b: やせ vs 肥満, p<0.05

事前に予想された「やせ志向」やダイエット経験のある生徒ほど骨密度が低いという結果にはならず、「やせ志向」やダイエット経験のある生徒ほど骨密度は高かったが、これはやせたいという意識はあるものの、実際にやせるまでに至っていないためと推測される。

3) 栄養摂取量について

主な栄養素の摂取量とスティフネス値との間には、男女ともに明らかな関連はみられなかったものの、やせ志向別の栄養摂取量については、女子で「やせ志向あり」の生徒の方が摂取量は低い値を示した。これは、やせ志向によって食事を減らすなどの減量行動が背景にあると考えられ、将来の健康障害を引き起こす可能性も考えられる。よって、中学生期においては「やせ志向」や体型認識同様、女子を中心とした食に関する教育の重要性が示唆された。

4. まとめ

今回の調査では、「やせ志向」のような意識面と骨密度との間には直接的な関連はみられなかったため、体型や身体活動量など骨密度に影響する因子によって対象者をグループ分けしての検討が必要と考えられた。しかし、女子においては「やせ志向」を持ったり、自身の体型を実際よりも太って認識している生徒が多く、「やせ志向」を持つ生徒の栄養摂取量が低い傾向があったため、中学生期には女子を中心に「やせ志向」や体型認識、食に関する教育を行うことが、将来における健康障害を予防するために重要であることが示唆された。

5. 今回の研究を通じて

本研究では、対象中学校に協力していただくことでたくさんのデータを収集することができ、中学生の実態について深く知ることができた。また、文部科学省などが発表している統計調査結果ではなく、自分自身の手でデータを収集したこともあり、これまで以上に身近な問題としてとらえることができ、中学生の実態とその改善の重要性について問題意識が高まった。

今後の課題として、本研究では実態調査にとどまってしまったため、今回の調査でわかったやせ志向や骨密度の低下について、改善するための教育内容や方法を考えるとともに、介入による効果を検討することが必要だと考えられた。

中学生男女の運動習慣と体組成・骨密度・体力値の関連について(課題 1)

保健体育コース 58 期 206038 加藤貴章

1. 緒言

これまでの先行研究によって、骨量は 10 代後半に成人と同レベルに到達することが報告されているように、思春期は二次性徴を迎え、形態的、機能的な変化が著しく、骨の量、質ともに急速な変化をとげる時期である。成人以降は骨吸収と骨形成の平衡が保たれ、骨量は一定を維持し、40～50 歳頃からは人体における総カルシウム量は低下し始める。したがって、成人期の最大骨量 (peak bone mass) をできるだけ高くするために、10 代前半期から骨量を増加させ、骨密度を高めておくことが重要であると言える。

骨密度や骨量と関連する因子についての研究は多くされており、運動習慣と骨密度の関連についても様々な研究がされている。しかしながら、これまでの研究では女子学生のみを対象としたものや、対象者数が少ないものなどが多く、骨形成において重要な二次性徴を迎える中学生の男女を多数対象とし、運動習慣と体組成・体力値・骨密度との関係を総合的に検討した研究はされていない。

そこで本研究は中学生を対象とし、体組成・踵骨骨密度測定、運動習慣について運動に対する意識や身体活動量などの質問紙調査を実施し、新体力テストの結果も含めて、運動習慣と体組成・骨密度・体力値との関連を明らかにすることを目的とし、検討をした。

2. 方法

1) 対象と測定内容

中学生の男女 465 名 (男子 244 名、女子 221 名) を対象とし、保健体育の授業時間に体組成・骨密度の測定、運動習慣の質問紙調査を行った。

2) 解析方法

統計処理には SPSS 社製 PASW Statistics ver. 18 を用い、数値は平均値±標準偏差で表した。クロス集計に関する処理には χ^2 検定を用いた。2 群間の平均値の比較には対応のない t 検定を用い、3 群間以上の場合は一元配置分散分析を行った。2 変量の関連性の処理には Pearson の相関係数を用い相関分析を行った。いずれの検定においても危険率 5%未満をもって有意とみなした。

3. 結果および考察

1) 身体的特性とスティフネス値について

男子では体脂肪率とスティフネス値との間には有意な関係を確認できなかったが、女子では体脂肪率とスティフネス値との間に有意な正の相関 ($p < 0.05$) を認めた。女子で体脂肪率とスティフネス値との間に関連が認められた要因は、脂肪細胞においてテストステロンが芳香化されることにより、骨吸収作用を抑制する (骨密度を高くする) エストロゲン (女性ホルモン) が、生合成されることなどが考えられる。

2) 運動習慣、体力測定値と体組成、スティフネス値の関連

運動やスポーツなどからだを動かすことは好きですか」の問いに対し、「好き」群と「嫌い」群とで比較すると、男女ともに運動系の部活動や習い事への加入率も有意に高く、加入している生徒を対象に平日・休日・1 週間の身体活動時間をみたときも「好き」群が「嫌い」群に対して男女ともに有意に高い値を示した。また、「運動系の部活動やスポーツの習い事をしていますか」の問いに対し、「加入」群と「未加入」群とで体脂肪率・スティフネス値・新体力テスト合計得点を比較したところ、男子において体脂肪率の比較は「加入」群 ($13.1 \pm 5.7\%$) が「未加入」群 ($18.7 \pm 8.5\%$) よりも有意に低値 ($p < 0.001$) を示し、体力テスト合計得点の比較は「加入」群 (39.0 ± 12.2 点) が「未加入」群 (31.6 ± 12.7 点)

よりも有意に高値 ($p<0.01$) を示したが、スティフネス値の比較は「加入」群 (96.9 ± 15.7) と「未加入」群 (92.9 ± 14.3) との間に有意差はみられなかった。女子において体脂肪率の比較は「加入」群 ($21.2\pm5.8\%$) が「未加入」群 ($24.0\pm6.2\%$) よりも有意に低値 ($p<0.01$) を示し、スティフネス値の比較は「加入」群 (99.0 ± 15.8) が「未加入」群 (88.3 ± 13.4) よりも有意に高値 ($p<0.001$) を示し、体力テスト合計得点の比較は「加入」群 (30.1 ± 7.5 点) が「未加入」群 (24.5 ± 6.5 点) よりも有意に高値 ($p<0.001$) を示した (図1)。以上の結果も踏まえて、運動意識を持つ者ほど放課後や昼休みに外遊びをすることや、運動系の部活動や習い事へ加入し、身体活動量も多いということが、「好き」群は低い体脂肪率や高いスティフネス値・体力値を示したと考えられる。

「新体力テスト」の各項目の結果・合計得点と体脂肪率との関連について表1に示した。全体として男女とも多くの項目で有意な負の相関関係を示し、またスティフネス値との関連については、男女とも多くの項目で有意な正の相関関係を示した。どちらの関連においても特に「20mシャトルラン」や「50m走」、「反復横とび」のような下半身の筋力や筋持久力を必要とする種目とは、強い相関がみられたが、「長座体前屈」には男女ともに有意な相関は得られなかった。

質問紙の結果や、新体力測定値の結果とスティフネス値の関連をみると、男子よりも女子に強い関連があることが明らかとなった。

4. まとめ

以上の結果から、運動系の部活動や習い事に加入している生徒ほど体脂肪率は低く、スティフネス値・体力値は高いこと、さらにその関連は男子よりも女子の方が強いことが明らかになった。また、運動やスポーツなどからだを動かすことが好きという「意識」が、外遊びを行うことや運動系の部活動、スポーツの習い事に加入し多くの身体活動を行うという「行動」を生じさせ、その結果、高い体力値や骨密度、健康的な体組成を獲得するという一連の繋がりを持っている可能性も考えられる結果となった。よって学校体育など中学生に運動指導を行う場では、まず「運動やからだを動かすことが好き」という生徒を1人でも多く増やすような健康教育や運動指導、また体育授業を実施していくことが、身体活動量の増加や、体力値・骨密度の向上、健康的な体組成の獲得に効果的であると言える。

5. 今回の実践を通して

子どもたちと直接話したりして触れ合い、さらにデータという数値的な面からも中学生の現状を把握することができたというのは貴重な経験だと感じている。また、今回の実践で、発育期における運動の必要性や運動指導を行う側の重要性を再確認することができた。この経験を生かし、さらに知識を深め指導者としての力を高めていきたいと思う。

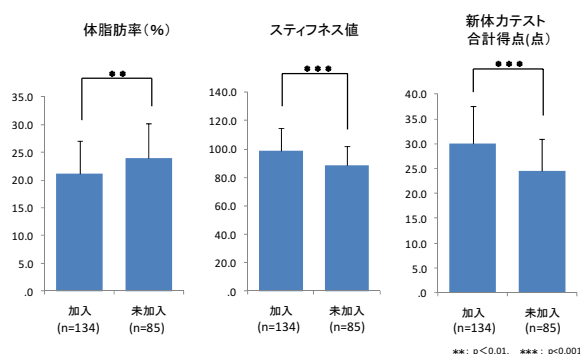


図1. 運動系の部活動や習い事への加入状況と各測定値(女子)

表1. 新体力テスト各測定値と体脂肪率・スティフネス値の偏相関

	男子 (n=229~250)		女子 (n=216~227)		男女間における 相関係数の比較	
	体脂肪率	スティフネス値	体脂肪率	スティフネス値	体脂肪率	スティフネス値
握力 (kg)	.165*	.244**	-.067	.158*	ns	ns
上体起こし (回)	-.331**	.221**	-.229**	.188**	ns	ns
長座体前屈 (cm)	.030	-.053	-.012	.150*	ns	*
反復横とび (回)	-.319**	.192**	-.373**	.247**	ns	ns
20mシャトルラン (回)	-.447**	.286**	-.407**	.294**	ns	ns
50m走 (秒)	.302**	-.273**	.306**	-.293**	ns	ns
立ち幅とび (cm)	-.253**	.196**	-.436**	.258**	*	*
ハンドボール投げ (m)	-.046	.248**	-.178*	.349**	ns	ns
合計得点	-.284**	.280**	-.360**	.402**	ns	**

制約変数: 年齢, * ; $p<0.05$, ** ; $p<0.01$

児童の身体活動量増加と体力向上を目指した実践とその効果(課題 2)

保健体育コース 58 期 206041 加藤真史, 206151 山崎智己

1. 緒言

近年我が国では、遊び場や遊び時間の減少によって児童の遊びが変化している。それに伴い、児童の身体活動量の減少と体力の低下が問題となっている。毎年全国の小中学校で実施されている文部科学省の新体力テストの結果における子どもの体力は、1985 年頃を境に低下傾向を示している。

児童の身体活動量の減少、体力の低下は小児期の健全な発育発達を妨げるだけでなく、生活習慣病へのリスクの増大にも大きく関与しているなど多くの問題がある。

我が国では子どもに関して、中央教育審議会答申において「子どもの体力向上のための総合的な方策」が打ち出され、体力向上のため各学校において様々な取組がなされている。しかし学校内だけの取り組みには限界があり、地域との連携が必要であるが学校外での実践例は少ない。

そこで本研究では、学校外の活動の場として放課後の学童保育に注目し、学童保育に通う小学校中高学年児童を対象とし、児童の身体活動量の増加と体力の向上を目指した運動指導を継続して行い、その効果と課題について検討し、これからの学校現場や地域との連携の場における資料とすることを目的とした。

2. 調査対象及び方法

1) 対象及び期間

学童保育に通う中高学年の児童 45 名を対象に運動指導を行う群(以下「運動指導群」、男子 13 名、女子 15 名)と、運動指導は特に行わず健康教育を行う群(以下「健康教育群」、男子 6 名、女子 11 名)を設定した。

調査期間は 2009 年 9 月上旬から 2009 年 12 月上旬の 3 ヶ月間とし、1 ヶ月ごとに第 1 期から第 3 期に分けた。運動指導群へは週 2 回、1 回 1 時間程度の運動指導を、健康教育群へは月 1 回程度の健康教育を、三重大学保健体育科の学生である著者らが指導者として行った。

2) 測定項目及び方法

以下に示す測定項目を介入期間の前後で測定し、運動指導群、健康教育群間において介入前、介入後それぞれの平均値の比較を、各群において介入前後の平均値の比較を行った。また新体力テストについては、介入前後における変化率を算出し、その平均値について両群間で比較を行った。

①身体計測 各児童の身長、体重、体組成を測定した。

②新体力テスト 文部科学省発令の新体力テストの 8 種目を測定した。総合評価には記録を得点化し、その合計得点を用いた。

③身体活動量 万歩計を用いて、介入前と介入中の学童保育活動時間中における歩数を測定した。比較を容易にするため 1 時間当たりの歩数を算出した。

④質問紙調査 運動習慣や生活習慣に関する調査を行った。

3. 結果及び考察

1) 形態

各群における介入前後での比較では、両群ともに身長、体重、体脂肪率において介入後が介入前より有意に高い値を示した($p < 0.05$)。また身長の変化率において、健康教育群($1.4 \pm 0.6\%$)が運動指導群($0.9 \pm 0.6\%$)に対して有意に高い値を示した($p < 0.05$)。

2) 身体活動量

運動指導群において、第 1 期の歩数(1653.2 ± 495.5 歩/時間)は介入前(2075.2 ± 814.4 歩/時間)より

も有意に低い値を示し($p<0.05$)、第2期の歩数(2055.3 ± 806.4 歩/時間)は第1期(1653.2 ± 495.5 歩/時間)よりも有意に高い値を示した($p<0.05$)。また健康教育群において、第2期の歩数(2305.3 ± 822.0 歩/時間)は介入前(1885.8 ± 763.2 歩/時間)よりも有意に高い値を示した($p<0.05$) (図1)。全体的に運動指導群の活動量のほうが低い値となっていたのは、指導者である我々が児童の自由な活動を制限してしまったためと考えられ、今後は児童らの活動に助言を与えるような支援的に行う介入が必要であると考えられる。

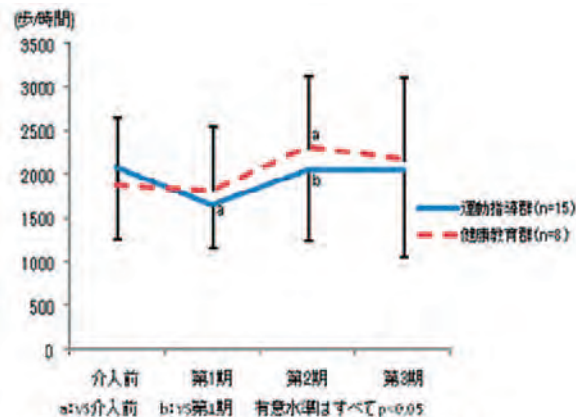


図1. 学童時間1時間あたりにける平均歩数の推移

すべての項目において有意な差は認められなかった。次に、介入前後における測定値の変化率について両群間で比較を行ったところ、50m 走において運動指導群が健康教育群よりも有意にタイムが短くなり、20m シャトルランでは健康教育群が運動指導群よりも有意に記録が伸びていた($p<0.05$)。有意差は出ないまでも、運動指導群では上体起こし、長座体前屈、反復横とび、ソフトボール投げ、合計得点において健康教育群よりも変化率が大きかった。また個々人でみたときに、運動指導群のほうが健康教育群以上に体力の向上をしていた児童が多くみられた。これらのことから、専門的な立場の者による計画的な

3) 新体力テスト

新体力テストの結果を表1に示した。介入前における両群間の比較では、20m シャトルランにおいて運動指導群が健康教育群よりも、上体起こしにおいて健康教育群が運動指導群よりも有意に高い値を示した($p<0.05$)。各群において介入の前後における変化を検討したところ、運動指導群では上体起こし、反復横とび、合計得点において介入後有意に高い値を示した($p<0.05$)。健康教育群では上体起こし、反復横とび、20m シャトルラン、50m 走において介入後有意に高い値を示した($p<0.05$)。介入後における両群間での比較では、

運動指導が健康教育を行うだけの介入よりも児童らの体力向上に向けた取り組みとして効果的である可能性が示唆された。

3) 質問紙調査

運動に対する意識や運動頻度については介入前後で両群に差は認められなかった。これは介入前の段階から両群ともに高い意識を持ち運動量も確保されている児童が多かったためと考えられる。

4. まとめ

今回の介入では、学童保育が取り組みの場として有効である可能性は示されたが、体力に関して向上傾向を示すにとどまり、介入方法や介入

表1. 対象者における新体力テストの結果及び介入前後の変化率

	運動指導群 (n=15)			健康教育群 (n=14)		
	介入前	介入後	変化率(%)	介入前	介入後	変化率(%)
握力 (kg)	14.1±4.4	14.2±3.6	2.7±16.1	14.9±2.7	15.6±3.2	4.9±10.2
上体起こし (回)	11.9±6.5 ^a	15.0±8.0 ^b	89.1±231.0	16.4±4.2	18.7±4.3 ^b	18.0±23.7
長座体前屈 (cm)	34.4±5.8	35.2±6.4	3.2±16.8	36.0±4.4	35.3±8.5	-1.9±20.5
反復横とび (回)	32.6±4.0	39.0±4.9 ^a	21.0±20.7	32.6±4.5	37.9±4.9 ^b	16.9±11.2
立ち幅とび (cm)	131.7±13.2	133.5±15.2	1.7±11.0	125.9±19.2	126.4±16.4	2.6±21.5
50m走 (秒)	10.1±0.8	9.9±0.7	-2.0±6.0	9.8±0.8	10.1±0.8 ^b	3.2±4.0 ^c
20mシャトルラン (回)	47.9±14.2 ^a	45.0±17.8	-5.5±21.6	31.9±10.3	40.6±16.5 ^b	36.0±41.0 ^c
ソフトボール投げ (m)	17.4±5.3	18.7±6.3	8.4±20.9	20.1±8.3	20.7±8.9	3.0±14.3
合計得点 (点)	47.2±7.0	50.3±7.9 ^b	6.5±7.7	49.1±7.6	51.6±9.4	5.1±9.8

同項目の測定値について両群間で有意差があった場合
各群の測定値について介入前後で有意差があった場合
変化率について両群間で有意差があった場合
有意水準はすべて $p<0.05$

平均値±標準偏差

入期間を改善していくことが課題として明らかにされた。

また3か月という短い期間ではあるが、実践を通して児童の体力低下という問題に直面することができたことは、これから教員を目指す我々にとって非常に貴重な体験となった。この実践を通して実際の教育現場で活動したり、子どもらと触れ合ったことで、教員になるにあたって必要な力を身につける上で有効であったと感じている。今後は我々が教員となり学校や地域と連携しよりよい活動プログラムを構築していけるよう努力する必要があることを実感した。これからも学生が教育の現場に入るカリキュラムが必要だと考えられ、より多くの機会の提供や環境の充実が望まれる。

6. 家政科教育

食物分野における小・中学校との連携

家政教育講座 磯部由香
平島 円

1. 活動内容

平成 21 年 10 月～12 月にかけて、一身田・橋北地区の幼稚園、小・中学校と食物分野において連携活動を行った。活動の概要について、教科ごとにまとめる。

(1) 家庭科における活動

栗真小学校、西が丘小学校では「弁当作り」、南立誠小学校では「昼食作り」の授業において、献立作成・実習計画・調理実習の補助を行った。栗真小学校からは、子どもたちの振り返りプリントの冊子をいただき、学生が回覧して振り返りを実施した。

一身田中学校、橋北中学校では調理実習の補助を行った。

(2) 生活科における活動

一身田小学校、栗真小学校において、「さつまいもの蒸しパン作り」の調理実習の補助を行った。栗真小学校からは子どもたちの振り返りカードの一部をいただき、学生が回覧した。

(3) 総合的な学習の時間における連携

北立誠小学校において、食に関する「模擬授業」を行った。「小学校専門家庭 C」の受講生 48 名を 6 班に分け、6 種類のテーマを与え、それぞれのテーマに沿った授業内容を考えさせた。事前に北立誠小学校で学生の授業案をもとに時間と内容に関して打ち合わせを行い、スムーズに活動を行うことができた。小学生に行った模擬授業の感想のアンケートを集計し、学生の反省とともにレポートとしてまとめ、北立誠小学校にお礼として提出した。

西が丘小学校では、「豆腐作り」の調理実習の補助を行った。事前に大学にて打ち合わせを行い、学生たちの補助内容についての詳細な説明を受けた上で活動を行うことができた。

上記の活動に参加した学生には、さまざまな気づきがあったようである。特に、子どもの発達段階に応じた実習の指導方法を知るとともに、実習のような体験活動の学習における有効性についても実感したようである。図 1 に学生の振り返りの一例を示す。

教育ボランティア活動 報告書	
学籍番号	
名まえ	
・活動日：2009年11月9日	
・学校：西が丘小学校	
・クラス：3年	
・教科：生活	
・活動内容：	
ガスコンロに火をつける、にがりに豆乳を入れる、子どもたちの作業の補助	
<p>・授業について気づいたこと</p> <p>子どもたちは事前の授業で自分たちの役割をすでに決めてあったので、スムーズに作業を進められていた。次に何をするかきちんと把握していて、混乱もなく、班で協力して豆腐作りができていたと思う。ただ、子どもたちは何にでも興味関心を持つので、やはり自分たちで火を使わせるのは危ないだろうと感じた。</p> <p>1・2限での豆腐作りの失敗から「にがりに豆乳を勢よく入れる」というアドバイスを頂いていたので、うまく豆腐を固めることができた。授業を行う際には、事前に十分な準備と予習が大切だと感じた。教育実習に行った時に心がけようと思った。</p>	
<p>・子どもたちについて気づいたこと</p> <p>豆腐とおからが子どもたちに大人気で、とても驚いた。私は最近の子は豆腐やおからは全然食べないと思っていたので驚いた。また、「美味しい」と何回も言っていたことも印象的だった。</p> <p>そして、3年生は幼いけれど、自分の役割をしっかり把握して作業を進めていたことに感心した。先生の言うことをよく聞いて、指示に従うことができていた。私が思っているよりも、小学3年生はしっかり作業ができるということに驚いた。</p>	
<p>・その他、感想・反省など。</p> <p>今回の授業補佐では、現場で子どもたちの様子を実際に見て、感じる事ができて、とても貴重な経験ができた。私は来年、附属小学校に教育実習に行くことになっているので、実際の小学生の様子を見た事で、教育実習での授業をイメージしやすくなったと思う。今回の授業補佐で感じた子どもたちの様子を忘れずに、来年の教育実習に活かしていきたいと思った。</p>	

教育ボランティア活動 報告書	
学籍番号	
名まえ	
・活動日：2009年11月9日（月） 1～4時限	
・学校：西が丘小学校	
・クラス	
・教科：総合	
・活動内容：	
豆腐作りの調理補助	
<p>・授業について気づいたこと</p> <p>まず、一度でも実際に予行演習を行うことは重要だと感じた。</p> <p>当日の1・2時限目では、打ち合わせで貰ったプリントや先生方からの話を元に何度もイメージトレーニングをしたにも関わらず、失敗することが多かった。また子どもたちに聞かれた事に答えられないことも多くあたふたと作業してしまい、自分の混乱が子どもたちに伝わってしまったのではと心配だった。</p> <p>一方、3・4時限目では一度実際に行った作業工程も頭をしっかり入っており、前回での反省点を生かすことも出来たので、スムーズに出来たように思う。精神的にも1・2時限目よりも気楽にすることが出来、技術面でも精神面でも、一度実際に作業を行うことは重要だと感じた。</p> <p>今回自分たちは「補助」という形だったが、もし教員の立場に立ったとき、予習不足から来る失敗は教員の責任だな、とも思った。</p>	
<p>・子どもたちについて気づいたこと</p> <p>もっと、作業をやりたい子ややりたがる子。「暴君（言い方は悪いが）」などがいいるのではないかと緊張して臨んだが、そう思った事はなく想像以上にスムーズに作業は進んだ。子どもたち自身がしっかりしていたからかもしれないし、あるいはきちんと役割分担が設定されていたからかもしれない。</p> <p>また、子どもたちと自分はほぼ10才離れているが、当時の自分たちと今の子どもたちでは、「先生のOKサイン」や下品なギャグなど、あまり変わっていないという印象も受けた。</p>	
<p>・その他、感想・反省など。</p> <p>反省：一度実際に授業内容を行うことは重要だと感じた。</p> <p>感想：また子どもとのコミュニケーションの取り方に慣れていないと思った。だからこういった教育ボランティアに参加出来る機会があれば、出来る限り参加して慣れていきたいと思う。</p>	

図1 学生の振り返りの一例

（4）保護者向けの食育活動

昨年度に引き続き、保護者を巻き込んだ食育活動を行った。具体的には、簡単朝食レシピ集の作成、食育講演会と調理実習を実施した。

2. 今後の課題

上記に示した「小学校専門家庭C」以外にも、取り組みの一部は「教育実地研究」、「調理科学」、「食物学特論演習I」の授業において実施したが、ほとんどが大学の授業における活動として位置づけることができず、取り組みごとに希望する学生を募るという形になったことから、実践的指導力を持った教員の育成という視点としては、効果的に行うことができなかった。

また、単発の連携が多かったため、事前の打ち合わせが不十分であったり、一部の実践では小学校側に活動後の振り返りを依頼したが、十分な時間がとれなかったりした。次年度は、事前打ち合わせ→教材についての検討→授業補助・参観→振り返り→学生自身の省察のサイクルで実施し、効果的な連携を行っていきたい。また、学生の学年に応じて連携内容を考慮し、省察方法についても検討すべきであると感じた。

7. 英語教育

英語活動を通じた地域連携

英語教育講座 荒尾浩子

2009 年度、西が丘小学校および北立誠小学校と英語教育コースの学生が実施した連携活動についてここに報告する。

1. 西が丘小学校との連携

2009 年 10 月 30 日、総合演習の授業内で西が丘小学校 5 年生の英語活動に参加した。大学生は 4 グループに分かれ、それぞれ 4 クラスに入った。初めに、先生と大学生で英語での基本のあいさつの仕方をデモンストレーションして見せ、その後児童同士や大学生と児童で名前やお互いの気分を尋ね合った。その後、音楽にあわせて英語とともに体を動かす“Dansinglish”を行った。児童の前で大学生が一通りの発音をした後、音楽を流し、実際に体を動かした。大学生は、児童の中に混ざり、ペアで行う動きの所は、相手がいない児童と一緒にいたりした。その後、児童は床に座り、主活動に入っていった。英語ノートのレッスン 5 を基に大学生は shoes や pants といった衣服についての英語をイラストの入ったカードを見せながら発音し、その後児童にリピートさせた。ここで得た英語の音声とその意味を使って The Key Word Game を行った。大学生がカードを見せながら順番に発音をしていくなかで、決めておいたキーワードが聞こえたらペアーになっている児童は真ん中に置いておいた消しゴムを素早く取るというものである。さらに英語ノートを使用した活動として、好きな色の服を児童、大学生が混じってお互いに伝え合うというものをした。児童は自分のノートに好きな服の絵を描いており、大学生もあらかじめ同じイラストに色を塗ったものを用意してきていた。大学生が事前に描いたその服のイラストを黒板に貼り、先ほど伝え合った好きな色の服についての情報を基に、誰の絵なのかをあてるクイズを行った。最後のまとめとして、その日の感想を児童が日本語で発表した。「大学生が来てくれて楽しかった」などといった感想が多くでた。大学生のほうからも一人ひとり英語活動に参加した感想を述べて終わった。

2. 北立誠小学校との連携

11 月 19 日と 26 日の 2 回、英語科教育特講 I の授業内で北立誠小学校に行き 5 年生と 6 年生の英語活動に参加した。（5 年生については 19 日のみ）。当初、11 月 5 日も予定されていたがインフルエンザの流行により中止となった。11 月 19 日は、学生は 4 名ずつの 3 グループに分かれ、それぞれ 5 年 1 組、2 組、6 年 1 組の授業に参加した。まずは 5 年生の英語活動の参加についてである。子ども達が小グループに分かれているのでそこに大学生が一人ずつはいるという形で行われた。主な活動は 3 つあり、1 つ目は、簡単な自己紹介を英語で行った後は色の言い方を慣れ親しむ活動である。前で大学生が様々な色紙から 1 枚を選び、その日に着ている服の中にその色が含まれていたら立ち上がり、色の歌を歌うという活動をした。2 つ目は、英語でインタビューをする活動である。それぞれの児童にインタビューのための質問が書いてある用紙（Do you like~?や、Can you~?などの質問）が渡されて、聞いた質

問の番号を書き、インタビューをした相手からサイン書いてもらうという活動である。学生は、教室内を別々に移動し聞きにやってくる児童の質問に一人ひとり答えた。3つ目は、児童が **Puff the Magic Dragon** という歌を合唱した。児童は英語の歌詞をしっかりと覚えておりとても上手であった。最後に振り返りと別れのあいさつをして終わった。

次に6年生の英語活動についてである。ここでは2回目の参加である26日の英語活動について報告する。主な活動は4つあった。1つ目は、英語によるインタビューで多くの情報を大学生から得てグループごとに競う合うものであった。グループに分かれ、児童が大学生に英語であいさつをして、自分の名前を言った後、大学生の名前を聞く。そこから児童は、**I like~. How about you? Where do you live? What~ do you like the best? When is your birthday?** と言った具合に、様々な質問をして会話を続けていく。その質問をメモに取った後、グループごとに児童は、1分間でどれだけ多くのゲストである大学生についての内容を紹介できるかどうかを競うという活動であった。2つ目は、児童が修学旅行で奈良に言ったときに出会った外国人観光客に、日本の文化について紹介した時の内容をグループごとに加わっている大学生に発表した。例えば色々な具の味噌汁を写真で見せ説明をしたりするといった内容であった。3つ目は、今度は大学生のほうが、あらかじめ用意してきた日本文化について一人ずつ英語で発表を行うというものであった。写真や絵を用意して、わかり易い英語を使って発表した。児童はみんな興味を持ち、楽しそうな聞き入っていた。4つ目は、先ほどグループごとに外国人観光客に日本文化を紹介し、その後、外国人観光客に対してもそれらの伝えた内容に関して質問し答えてもらったことを、グループごとに前に出てクラス全体に発表するというものであった。児童は緊張している様子だったが、それぞれが分担して頑張って英語を話した。そして最後に、大学生から振り返りのコメントを発表し終わりとなった。

3. まとめ

2009年度は、両小学校を合わせて学生は計3回、英語活動に参加した。学生らは小学校英語活動についてある程度の情報を得てはいるが、実態はよく理解できていないこともあり、このように実際に英語活動がどのように実施されているかということを目で見て体験できることは彼らにとって貴重な機会である。また現在、小学校で児童と英語の関わり合いの程度を把握することができた。後の学生らの感想として、児童の習熟度は様々であるが英語そのものの習熟度よりいかにコミュニケーションを積極的にしようとするかという態度が重要であるということを感じたという声があった。英語活動が一般の英語学校で子供向けにされている英語のレッスンとは違うということもしっかりと認識できたようだ。児童にとってはゲストがやって来て英語でコミュニケーションをするという非日常的な出来事であったと思われるが、知らない人と知り合っていくツールとして慣れ親しんでいる英語を用いることが自分たちはできるのだと実感できることは重要なことである。また大学生は大人のゲストとは違いより親しみが持つことができる対象でもあるので近接目標としてよい刺激にもなるのと同時に、関わりたいというコミュニケーションへの動機付けを高める効果もあったのではなかろうか。

受け入れていただいた小学校の先生方には、授業案や学生への指示などにおいてお手数をおかけし、大変お世話になったことを深く感謝する。

白塚小学校『なかよし学級』の取り組み

三重大学 中西智子

白塚小学校 高須 昌子・田中 秀幸

特別支援学級『なかよし学級』は、知的障害児と情緒障害児・自閉症児の2クラス9名の活動を展開するグループである。昨年度は学生達が参加したが、本年度は小学校の授業予定とのかんけいで学生の参加ができなかった。中西のみの参加となり、昨年度に引き続いて音楽活動「リズム遊び」を展開した。成果として、「なかよし学級の児童は、歌を歌うときは、音程をとったり歌詞を覚えたりするのが苦手な子が多く、間違えることにこだわり声が小さくなりがちだが、リズムのみの打楽器の活動は、間違えることにこだわることが少ない。同時に、思い切り打つ腕の動きは、全身の動きであり、気持ちを発散することにもなる。時には児童からの発想が生まれ、全員で共有した。」という成果が挙げられた。

このように、教師には音楽活動を通して一人ひとりの児童の活動が仲間に誘発されて活発になった、との手応えを得た。このことから、2年目の活動を以下の目標で実践した。

- ①一人ひとりの児童が自分の経験したことで、充実感を得る。
- ②クラスの仲間と一緒に楽しみながら活動する。
- ③できるようになった手ごたえを仲間で認め合う。
- ④特別支援教育研究会津支部の「卒業生を送る会」で発表する。

打ち合わせの中では、児童の関心が高い和太鼓(中、小)、波の音が出る手作り楽器、足に鈴を付けてステップすることで鈴の繋がりや音群の変化を楽しめるなど、実践の企画時点で、手作り楽器の工夫を進めた。その結果、児童が音具(音の道具)で演奏を楽しみ、自ら音の出し方の工夫をする様子が観察できた。

音の構成では、昨年に続き、和太鼓、締太鼓、小太鼓、ドラムセット(3種類の小さな楽器のセット)などの打楽器ではリズムを言葉で覚え、言葉を唱えながらリズム奏をした。



ダンボールの筒に竹串を差し込み、中に米を入れて“波の音の効果音”の様な楽器を制作して使用する等、全員参加が原則で、全員がそれぞれに気に入った楽器(音具)で演奏可能であることを重視した。

児童との演奏における約束としては、

- ① 初めの音と終わりの音を揃えること
- ② 仲間の音を聞き合うこと

である。

前年度と同様に、児童は音譜ではなく、リズムを言葉に置き換えて、言葉のリズム感覚で全体を演奏した。例えば、音を揃える際の拍感覚を共有するために、バンブーダンスで3拍子のリズム感覚をステップで楽しむなど、4拍子と3拍子のリズム変化を感じることができるような活動を展開した。感覚的に拍子の違いと音具の音色の差異を楽しめるようになり、演奏全体をまとめる方向性が確定した。

打楽器の音と調和する鈴の音色を入れることとなり、バンブーダンスの時には足へ鈴を繫いだゴムの輪を付けたり、40個の鈴を団扇へ付けて振るなど、さまざまな工夫が生まれた。

自分のステップと仲間のステップが一体感を生み、『なかよし学級の音具』での練習は 児童には楽譜とは無縁でありながら、音を楽しめるようになった。指導者は、児童が全体の流れを把握できるように、簡単なストーリーを組み立てた。児童が演奏する全体の音郡の流れの構成は、「白塚の浜の夜がだんだん明けてきました。子どもたちが元気に浜で遊び始めました・・・」とした。全員のイメージが共有できたことで、打の強弱、速さの変化、交互打ち、最後の1打に気持ちを合わせるなどの指導が可能になった。

全員がそれぞれに可能なことを、譲り合うことも含めて、『なかよし学級』の共同作業が続いた。

「卒業生を送る会」は白塚小学校の楽器の披露も兼ねて、無事に演奏が終了した。先生達は、来年への取り組みの工夫が始まっている。

「暗闇部屋」の実践報告

幼児教育講座 河崎道夫

教育実地研究基礎（幼児教育 1 年 11 名）において、幼稚園の夏祭りに「暗闇部屋コーナー」を通して参加し、幼児教育現場で子どもとふれあう活動を行った。

「暗闇部屋」とは「おばけ屋敷」と違い、ただ光がない真っ暗闇を子どもに体験してもらうための部屋であり、これまでも保育実践がある。今回は学生の発案で「暗闇の中で触覚を感じることを加えた。

4 月のオリエンテーション後、計画と準備を数回行い、段ボール集め（300 枚目標）を行った。学生は、実行委員 4 名が部屋作成の下準備で幼稚園を訪れた。また幼稚園と子どもたちに慣れるため全員が半数に分かれ 1 回ずつ幼稚園を訪問し、子どもたちと遊ぶ機会をもった。

夏祭り（2009 年 7 月 4 日・土曜日）当日は、9 時 30 分に集合し幼稚園の遊戯室内で部屋の作成にとりかかった。新聞紙・でんぷんのり・ガムテープ・ペットボトルを使って、通路と暗闇部屋の壁を作った。遊戯室の窓や入り口を、光がいきなり入らないように業務用の黒いポリ袋や段ボールを使って覆った。暗闇部屋の床は、「ただの床」「しわくちゃにした新聞紙を敷いた所」「プチプチ（包装用ビニール）を敷いた所」の 3 か所を設置した。

夕方、夏祭りの開始とともに暗闇部屋のコーナーも開場、次々に子どもたちが挑戦していった。入り口の説明や案内、出口でのメダル渡し、部屋の中での待機と観察、出入り口でのビデオ撮影など分担して実施した。

大勢の子どもたちが挑戦し楽しんだ。一人では入れない子は友達、兄弟、お父さんなどと一緒に入った。入り口でピタッと止まり泣くだけで動くことができない子どももいた。出口から出てきた子はみなすてきな笑顔だった。2 度、3 度と挑戦する子もいた。幼稚園職員や父母も入って楽しんだ。

「なかはどうなっているの？」

「ひとりでへいき!!!!」

「ちょっとこわい…」

「どこ～？」「くらいよ～」

「みえないよ～」「こわいよ～」

など子どもたちの様々な姿を見ることができた。

終了後、子どもたち、職員、父母たちとの盆踊りの輪に加わりともに楽しんだ。また、後片付けでは職員や父母たちが協力してくれてスムーズに終わり、教育の場が様々な人々の支え合いで成り立っていることを実感することができた。

大学生になって初めて自分達の手で、しかも実際の保育現場に関わることを企画・運営する、実施することができた。企画運営の難しさを経験するとともに、共同で一つのことを成し遂げる楽しさ、子どもたちの笑顔の素晴らしさ、そして保育が保育者はもちろん、地域や保護者の協力共同で充実していくことに、改めて気付くことが出来た。

生きもの環境づくりプロジェクト報告

幼児教育講座 河崎道夫

山崎理沙（58期生）

昨年度から開設された授業科目「教育実地研究」において、白塚幼稚園において子どもと生きものの関わりを豊かにする環境作りの実践研究を行った。期間は2009年4月～2009年11月。実践研究は幼児教育河崎教員、学生7名（奥山木綿子、恒川文香、寺本由佳、中嶋祐太、西口真梨子、平野梢、山崎理彩）、幼稚園職員4名（園長、年少児担任教員、年長児担任教員、事務員）で行った。また共同実践研究の内容は特に生きものの誕生や成長にかかわる子どもの姿に焦点を当てた山崎理沙の卒業研究としてまとめられている。なお、連携事業とは別に教育実地研究としてはこの活動の外にも同じメンバーで附属幼稚園の「池づくり」の活動を行っており、成果を上げているが、今回の報告では触れない。

<主な取り組み内容>

1. 小動物の卵や幼虫の導入と飼育
2. 水槽の生きものの（メダカ、イモリ等）の導入
3. 畑作り

<取り組みの基本と記録>

これらの環境づくりの活動は幼稚園教職員とともに、極力幼児の前で、できれば幼児とともにやり、子どもの関心を引き起こし、子どもの活動を促す保育の一環として取り組んだ。その際の子どもの発言、行動を記録し、子どもと生きもののかかわりの意味を検討する資料とした。

<実践の経過>

4月9日、16日、21日、23日、28日、30日：畑づくり
5月7日：カエルの卵とイモリの導入、5月12日：孵化
5月21日：メダカとり（川で、学生のみ）、5月26日：メダカを園に持っていく
5月28日：アゲハの幼虫を園に持っていく
6月1日：蚕の導入
6月24日～11月11日 観察と聞き取り（山崎）
7月13日：畑の野菜の収穫、16日：野菜を材料にピザパーティー

<子どもの姿>

はじめて見るイモリを腕に這わせたり、ふわふわの卵から孵化したオタマジャクシを干にしたり、幼虫から羽化したばかりのアゲハを見たり、桑の葉を持ってきて蚕を育てたりと、この活動の中でたくさんの小動物と触れあう体験をした。ときに目を輝かせ、驚いたり、こわごわ触ったり、子どもの生き生きとした姿を多く見る事ができた。畑づくりで

は、そもそもの最初から、つまり園庭の一部を掘り起こし畑の土を入れて作るところから始まった。これまでの学生が成長し生活してきたなかではほとんど経験したことのない活動であり、とまどいもあったが、園児たちと触れあいながら、子どもたちのための活動であったため、意欲的に取り組めたようである。学生と園児とが一緒に植えた野菜（ピーマン、ナス、トマト、エンドウ豆など）の成長を楽しみにする子どもたちは姿がよく見られた。収穫した野菜でピザパーティーが行われ、普段は嫌いで食べることのできなかったはずの野菜を、おいしいおいしいといって食べる子どもたちの姿が見られ、この活動の重要性が感じられた。

< 学生の育ち……レポートより抜粋 >

「今回の畑作りの作業をしたことによって、畑作りの難しさ、楽しさ、不安など感じるものがたくさんあった。また、子どもと共に作業をしたことによって、楽しさは倍増したように思う。

今も、お世話係さんが毎日水をあげている姿を見ると、「畑を作って良かったなあ」と思う。自分たちが植えた野菜だからこそ、きっと収穫時はとてもおいしく感じられるだろう。これから先の成長がとても楽しみだ」

「苗に添え木を立てるとき、子どもたちは興味をもったようで、畑の周りに集まって添え木を立てていた。立てることが楽しそうだったのが印象的だった。

うねづくりで手伝った年中児クラスの女の子が苗の横のうねにスナックエンドウの種をまくことになった。一回目は先生に言われて土をかぶせたが、二回目には自分から土をかぶせていた。実際に経験することで子どもたちは少しずつ学んでいくのだと思った。

畑づくりを行って、うねはどのようにすればいいのかなど自分に基本的な知識がほとんどなかったのも、子どもたちと一緒に取り組むならばもっと勉強しておかなければいけなかったと感じた。また、子どもとの関わり方についても勉強していきたいと思った。」

< 参考 >

・山崎理沙 2010年 子どもは生きものの誕生・成長をどう受け止めるか ―「幼稚園での生きもの環境づくり」を通して― 2009年度三重大大学教育学部卒業論文

北立誠幼稚園：未就園児保育「たんぽぽ会」の運営

幼児教育講座 滝口圭子

(1) 「たんぽぽ会」とは

●地域子ども（0歳～4歳）と保護者が自由に参加できる。

●第1・第3月曜日を中心として月2、3回程度実施

学生の参加日は、2009（平成21）年10月19日、11月2日、11月16日、11月26日、12月7日、12月16日、2010（平成22）年1月13日、1月20日、2月1日であった。

●運営グループメンバー

北立誠幼稚園園長：小菅なぎさ先生

北立誠幼稚園保護者ボランティア

幼児教育コース4年生：恒川文香・山崎理沙

幼児教育コース3年生：天野由貴・雨皿麻希・伊藤加奈・迫田里紗・佐藤由基・森萌野・山口麻衣
吉村淳美

●「たんぽぽ会」の当日の流れを表1にまとめた。

●2010（平成22）年2月1日の「たんぽぽ会」終了後、学生に最終レポートの提出を求めた。最終レポートの作成に当たっては、以下の点について記述するよう指示した。

①よかった点・課題点・反省点・全体のまとめ

②約4か月を経て何が変わったか、または変わらなかったのか。変わったとしたら、変容の具体的内容、変容の契機、時期、理由等。

(2) 学生の最終レポートの紹介

最終レポート1（抜粋）4年生

初めて「たんぽぽ会」に参加させていただいたとき、受付の仕方や活動の流れなどを完全に把握していなかったために、多くの学生が手持ち無沙汰の状態になっていた。このことは、前もって幼稚園に足を運び、未就園児の会を見学させていただくことで解決できるように思われる。自分の目で実際の様子を一度見ておくと、そのときにすべきことや必要とされている援助にも気づけるようになると思う。更に、未就園児の数に対して学生数が少し多すぎるのではないかと感じた。子どもたちが複数の大人に囲まれて恐怖を感じぬよう、低い姿勢で親子を出迎えようと心がけたが、中には学生の多さに圧倒さ

表1 「たんぽぽ会」当日の流れ（上段から下段へ時系列に並べた）

10:00～11:00am	登園（毎回共通） ・挨拶をする ・出席ブックにシールを貼る 自由遊び（毎回共通） ・ままごと・粘土・積み木・おもちゃ ・ジャングルジム・滑り台・砂場 等
11:00～11:30am	片付け 設定遊び（活動日により異なる） ・手遊び・ふれあい遊び・絵本の読み聞かせ・歌 等
11:30～11:40am	降園
11:40am～	掃除 反省会

れてしまった子どももいたのではないかと思います。保護者から離れようとしないうちの子が多く見られた。その反面、学生が多くいることで活動が盛り上がり、妊娠していられる方や2人の子どもを連れていられる方の補助に入ったりできるなどよい面もあった。

自由遊びの時間には、粘土やブロック、お絵描き、ままごとなど、様々なコーナーが用意されており、子どもたちの興味に合わせて配置を変えるなどの工夫がされていた。子どもたちと出会ったばかりの頃は私たちも緊張していたが、遊びを通して仲良くなれることを実感した。そのためにも1つの「もの」から様々な遊びを展開できるようにしておく必要がある。例えば、粘土遊びにしても、広げる・伸ばす・ちぎる・丸めるなど、たくさんの楽しみ方がある。手指を駆使して動物や食べ物を作って見せると想像以上に喜んでくれたことが強く印象に残っている。活動中、保護者の方が「先生、上手だねー。〇〇（子どもの名前）も教えてもらったら？」などと声がけをしてくださったおかげで、子どもと学生の距離が随分縮まったこともあった。しかし、学生という立場に甘えることなく、もっと積極的に子どもや保護者の方と関わっていけたらよかったと反省している。

これから保育者になる私たちにとって、保護者の生の声を聞かせていただける機会は大変ありがたいものである。母親になって気づいたことや、不安、悩みなどを打ち明けてくださる方もいた。「たんぽぽ会」を通して、先生方やボランティアの方から保育のアドバイスをいただくこともできた。私たちの考案した活動を快く受け入れてくださったことにも心から感謝したい。最後に、本年度の取り組みは曜日の関係もあり、毎回参加することができず、ちょうど会の運営に慣れてきた頃に、次回の参加までに1か月以上日にちが空いてしまうこともあった。来年度以降は、学生も定期的に参加できるようになれば、他のスタッフの皆さんとの間により深い関係が生まれると思う。今後も「たんぽぽ会」を、学生が現役の先生の技を習得させていただく絶好の機会にするとともに、学生ならではのアイデアを提案することで「たんぽぽ会」の取り組みがより楽しいものになっていくことを心から願っている。

最終レポート2（抜粋）3年生

初めて「たんぽぽ会」に参加したときにまず思ったのは、赤ちゃんが多いということであった。2年次に授業「幼児教育総合演習」で運営に参加した附属幼稚園の未就園児保育「コアラの会」では、ほとんどが2歳以上の子どもであり、子どもが幼稚園の雰囲気になれることを期待して参加された保護者も多かったように思う。今回参加させていただいた「たんぽぽ会」では、お母さん方が子どものことや最近の出来事について話し合っている様子が印象的であった。普段、子どもと長い時間を一緒に過ごしているお母さんも多いだろうと思うので、このような場はお母さん方が羽を伸ばしたり、育児の相談などをすることで気持ちが楽になったりということに役立っているのだろうと思った。



「たんぽぽ会」では、ぶどう、クリスマスのプレゼント袋、鬼の面など、季節に合わせた制作遊びも行われた。「たんぽぽ会」に来る子どもたちは、幼稚園に通った経験がないので、制作の経験も少ないと思われる。保護者に言われるがままに制作しているという子どもの姿もしばしば見られた。私は、子どもたちにあまり楽しそうな笑顔が見られないことが気になっていた。あるとき、園長先生が制作をしている子どもと関わっている様子を見ていた。園長先生は満面の笑顔で、色塗りをしている子どもがクレヨン動かす動きに合わせて「ぐるぐるしてるんだね。ぐるぐる」といった言葉がけをされていた。子どもは初めは真顔だったが、そのうち楽しそうに色を塗り始めた。今まで、私が関わった制作遊びで楽しそうな子どもたちの姿があったのは、制作を楽しむことを知っている子どもたちばかりであったからかもしれない。子どもは絵を描いたり何かを作ったりするなど、もともと制作が好きだから制作遊びを楽しめると考えていたが、周囲にいる保育者が、子どもが楽しいと感じられるような雰囲気を作り、また保育者が自身の楽しさを表現することで、制作の楽しさが子どもにも感じられるようになるのだろう。園長先生のその姿を見てから、子どもたちに積極的に声をかけるように努めると、楽しむ姿やもっとしたいと要求する姿が見られて嬉しかった。子どもの緊張が解けないこともあったが、「この色もきれいだね!」「すてきだね〜!」などの声がけをして、少しでも「楽しかった」という思いを感じられるよう支援した。「たんぽぽ会」では「コアラの会」とは違った視点を持てるようになったように思う。今回の経験をしっかりと心に留め、次の機会に活かしたい。

最終レポート3（抜粋）3年生

毎回、自由遊びが終わった後の設定遊びを担当させていただきました。「たんぽぽ会」に参加している子どもたちは、0〜4歳児という幅広い年齢層でした。活動の内容が年齢に合わず難しすぎた場合や、反対に簡単すぎた場合、子どもたちは活動を楽しむことができないと思います。そのため、年齢に関係なく誰もが楽しめる活動を考えることは難しいのではないかと感じていました。しかし、園長先生の工夫された活動を見て、その考えが変わりました。初めて「たんぽぽ会」に参加させていただいたとき、園長先生は子どもたちに絵本を読み、その後絵本に出てきた「お母さんにぎゅっとしてもらう宿題」を参加者にも伝え、親子のふれあい遊びへと発展させていっていただきました。親子でのふれあい遊びを取り入れることで、子どもたちは年齢に関係なく楽しめることに気がつきました。ふれあい遊びをしているときには、子どもたちにも保護者の方にも笑顔が見られました。生活する中で、ちょこちょこくすぐったり、じゃんけんをしたりなどの親子のふれあいは、意識しないとなかなか作ることができないと思います。家庭でもすぐにできるようなふれあい遊びを紹介することは、保護者の方にとっても役に立つことではないかと感じました。



「たんぼぼ会」の活動後に部屋の掃除をし、次回の「たんぼぼ会」の環境設定をするとき、園長先生は、子どもが遊ぶ積み木やおもちゃの車などを、意図的にごさの上に出しておいたり、粘土板の上に粘土を置いておいたりして、子どもたちが気になるように、そして十分に遊べるように保育環境を工夫されていました。こういった配慮があって、子どもたちの楽しい時間が作られるのだと思います。「たんぼぼ会」という実際の保育の現場で、特に園長先生の姿から学ぶことが多くありました。来年度も「たんぼぼ会」に参加し、さらに学びを深めていきたいです。半年間、ありがとうございました。

最終レポート4（抜粋）3年生

お母さん方が私たち学生にたくさん声をかけてくださったので、初日から楽しんで関わることができました。本当に温かく受け入れてくださったので、とても嬉しかったです。「普段は家中を走り回っているんですけど、今日は静かで…」という話をお聞きしました。保護者の方々と話をさせていただく中で、子どもたちの好きなものや日常の姿など、「たんぼぼ会」のみでは気づけないことがたくさんあるのだということを知りました。保育者が保護者の方々と信頼関係を作り上げることは非常に大切なことだと思っていましたし、保護者の方々のよき相談相手にもなれればと考えていました。しかし、何よりも、子どもたちのことをより深く理解するためにこそ、保護者の方の協力が不可欠なのだ実感できました。初日に、ある保護者の方から、子どもの話す言葉の数が少なく他のお子さんよりも発達が遅れているのだという話をさせていただきました。私は、どのように言葉を返したらよいのかわかりませんでした。「よき相談相手になりたい」と口では言えても、実際は本当に難しいです。いい加減な返事をすることはできません。自分の勉強不足を思い知らされました。

「たんぼぼ会」では、「〇〇くんが来るの待ってる!!」と、友達に対する意識の芽生えも見られましたが、玩具や道具の取り合いの場面も多くありました。周りの子どもの遊んでいるものが欲しくなるというのは、自分の周りに興味を抱いているからだと思われます。他の子が自分のものを取っていつてしまうとき、無反応に見える子もいれば、嫌がる子、何も言わず渡す子、「どうぞ」と言って渡す子など1人1人反応が違っていました。見ていて面白かったのですが、どのように支援すればよいのか迷いました。少子化などの問題により、なかなか遊び相手が見つからず、園に通っていない子どもたちは、どうしても大人と過ごす時間が多くなってしまうのが現状でしょう。「たんぼぼ会」は、そのような子どもたちにとって、大切な経験の場になっているのだらうと思います。色々な個性を持った子どもたちが同じ部屋で過ごすことの難しさ、面白さ、大切さを学ばせていただきました。貴重な経験をさせていただきました。ありがとうございました。



白塚幼稚園：未就園児保育「ぴょんちゃんクラブ」の運営

幼児教育講座 滝口圭子

(1) 「ぴょんちゃんクラブ」とは

●地域の子ども（0歳～4歳）と保護者が自由に参加できる。

●毎週火曜日実施

学生は、前期は2009（平成21）年5月12日から7月7日まで、後期は2009（平成21）年10月27日から2010（平成22）年1月26日まで、原則として毎週参加した。

●運営グループメンバー

白塚幼稚園園長：浅田美知子先生

白塚幼稚園保護者ボランティア（前期8名・後期7名）

幼児教育コース4年生：鈴木麻友・高瀬由美子・辻彰士・成実由希子・水谷りさ

●「ぴょんちゃんクラブ」の当日の流れを表2にまとめた。

●本活動は2007（平成19）年度から続き3年目となる。

(2) 2009（平成21）年度教育実地研究（通年）との連動

●幼児教育コース4年生に対しては、2009（平成21）年度教育実地研究（通年）の授業として単位認定を行った。

●授業の目的:公立幼稚園で毎週実施されている未就園児保育の運営に関わり、保育内容の一部を企画、創作、実演することを通して、それまで培ってきた実践力をより確かなものとすると同時に、公立幼稚園が担う地域の子育て支援の具体的内容を知り、その課題と具体的対策について考察する。

●参加学生は、後期から、毎回の活動後に、当日観察した子どもや保護者の様子を実践記録ノート（通称ぴょんちゃんノート）にまとめて提出した。また、学生には約4か月が過ぎる中で子どもや保護者の変化をとらえられると望ましいと伝えた。提出された実践記録ノートは、毎回滝口が目を通し、必要に応じてコメントを書き込み学生に返却した。また、教育実地研究後期終了後には最終レポートの提出を求めた。最終レポートの作成に当たっては、自らのぴょんちゃんノートを見返しながら、以下の点について記述するよう指示した。

①よかった点・課題点・反省点・全体のまとめ

②約4か月を経て何が変わったか、または変わらなかったのか。変わったとしたら、変容の具体的内容、変容の契機、時期、理由等。

表2 「ぴょんちゃんクラブ」当日の流れ（上段から下段へ時系列に並べた）

9:30～10:30am	登園（毎回共通） ・挨拶をする ・お便りノートにシールを貼る 自由遊び（毎回共通） ・部屋や園庭の遊具で遊ぶ ・粘土・お絵描き・ブロック 等
10:30～10:40am	片付け
10:40～11:00am	設定遊び（活動日により異なる） ・手遊び・歌・リズム遊び・絵本の読み聞かせ 等 降園
11:10am～	反省会

(3) 学生の最終レポートの紹介

最終レポート 1 (抜粋)

「ぴよんちゃんクラブ」の運営に関わって間もない頃は、保護者でもあるお母さん先生と一緒に運営していくこと、自由遊びでの未就園児との関わり方、保護者への関わり方など、戸惑うことばかりであった。特に自身の課題であると感じたのは、保護者への積極的な関わりであった。話しかけるタイミングや話の内容など、考えれば考えるほど声をかけるきっかけを逃してしまっていた。しかし、学生に話しかけてくださった保護者と会話が始まり、そこに他の保護者も加わるという形で少しずつ輪が広がり、私自身も保護者との会話を自然に始められるようになった。

また、お母さん先生との関係も変化した。最初の頃は、学生とお母さん先生がそれぞれで集まっているという場面が多かったが、回を重ね、徐々に打ち解けていく中でそういった場面が減った。そして現在では、お互いに構えることなく話しかけられるようになり、「ぴよんちゃんクラブ」の準備中や活動中、そして反省会などいくつかの場面で意見交換が盛んになった。私が自然に話しかけられるようになったのは、お母さん先生の温かい雰囲気はもちろんのこと、お母さん先生の発案で浅田先生が発行してくださった「スタッフ news」を通じて、お互いのことを少しずつ知ることができたからであると思う。このように、スタッフ同士が親しみを感じあい、意見交換を盛んに行えば、「ぴよんちゃんクラブ」はますます未就園児やその保護者にとって居心地のよい場になるのではないだろうか。

私の気持ちの中でこの活動を通して変わらなかったのは、保護者への支援に力を入れたいという気持ちである。「ぴよんちゃんクラブ」に対して、浅田先生は地域に密着した育児支援として行いたいという強い意識を持たれているようであり、私も保護者に関わり、助け合いながら信頼の輪を広げ、保護者を支援していくことは、地域に根ざす幼稚園にとってとても重要な役割であると考えている。育児に関する不安や疑問、ストレスなどを共有し発散できる場を提供することが、保護者の精神的な安定につながり、子どもたちの成長もより健やかなものとなるのではないかと。私は今回の活動を通して、何よりも保護者と保護者、あるいは保育者と保護者の関係の重要性を認識することができた。

この1年、力が足りずできないことばかりでしたが、皆さんに教えていただき助けていただいて、最後まで運営に参加することができました。参加する機会を与えてくださった滝口先生、現場で様々なことを教えてくださった浅田先生、運営していく上で私たち学生を引っ張り助けてくださったお母さん先生方、そして一緒に運営について考え頑張った教育ゼミの学生たち、皆さんに感謝しています。本当にありがとうございました。



最終レポート 2（抜粋）

1 年間の「ぴよんちゃんクラブ」を通して、低年齢児や保護者との接し方など、保育における技術を学んだだけでなく、私は多くの人に支えられて成長しているということや、1 人ではなく大勢で計画することで、より充実した活動をすることができるということを実感することができた。浅田先生やお母さん先生方は、優しく私たちを見守ってくださりながら、反省会のときに「〇〇がよかった」や「〇〇をこうした方がよかった」などアドバイスをしてくださった。このようなアドバイスのおかげで、やり終えたことで満足している私たちを引き締めていただいたり、また悩みを解決したりすることができた。また、学生 5 人で話し合うことにより、私とは違った意見から自分の考えを改めて見直したり、誰かの一言が膨らんでいき現実的な計画に発展したりすることもあった。他にも、「ぴよんちゃんクラブ」の子どもたちの笑顔や保護者の方の温かい笑顔は、いつも私を頑張るぞという気持ちにさせてくれた。私は、「ぴよんちゃんクラブ」に関わってきた 1 年間、何度も練習が足りなかったという反省を繰り返してきた。おそらく、何度練習を重ねても、予期せぬことが起こったり、失敗があったりするのだろう。しかし、何度も練習をし、起こり得ることやその対策を考えた上で得た反省点は、何もしなかったときの反省点に比べ、とても有意義なものだと思う。私は、来年、保育者となっても、練習と反省の重要性を忘れず、常によりよい保育を目指し、向上心を持って取り組んでいきたい。

浅田先生をはじめ白塚幼稚園の先生方、お母さん先生の皆さん、1 年間本当にありがとうございました。

最終レポート 3（抜粋）

運営を始めた頃は子どもたちともうまく会話できず、どんな遊びに興味を示すのかもわからず、2 時間ほどの「ぴよんちゃんクラブ」の時間を長く感じていた。私が後悔しているのは、自分が関わることのできる「ぴよんちゃんクラブ」が残り少なくなってきたことに気づいてから、「一回一回を大切にしないといけない」と感じ始めたことである。一回一回を「来てよかったな」「来週も来よう」と子どもにもお母さんにも思ってもらえる「ぴよんちゃんクラブ」にするために、私なりに活動の中で楽しんで欲しいことを決めたり、誰が何をして楽しんでいたかを見たりするようにしていった。子育て支援の観点からも、私たちにできることを考え始めたのも後期になってからである。親としての立場からお母さん先生が、プロの保育者として浅田先生が、そして同期の学生が、それぞれの視点から意見を出し合い共有し、「ぴよんちゃんクラブ」の時間を参加する親子に有効活用してもらおうと模索できたことに感謝したい。また、「子ども」だけに向き合うのではなく、「子どもの背景（特にきょうだい関係に起因する心の不安定さ）」を理解し関わっていくことの大切さを学んだ。

このように 10 か月で気持ちが変わっていったきっかけを振り返ると、子どもの表情だったと思う。

具体的には、浅田先生の手袋シアター「3 匹やぎのがらがらどん」を見ている子どもたちの豊かな感情表現であった。「ただ聞かせるだけではなく、私もこんなふう to 子どもたちをお話の世界に引き込んで一緒に楽しみたい！」そう感じてから、子どもが楽しい時間を作りたい、子どもが楽しむ顔を見たいと強く思い始めた。保育の現場に出ていくときが迫ってきたが、「ぴよんちゃんクラブ」での実践から感じたこと、学んだことを忘れずに頑張っていきたい。



最終レポート 4（抜粋）

後期に入り、前期よりも学生で活動を考えることが多くなった。パネルシアターやリズム遊びを担当したときに、既製品や一般的に知られている遊び方をそのまま使うのではなく、子どもたちに合わせてわかりやすくアレンジすることや、例えばルールも工夫してわかりやすく変えていくことの大切さを学んだ。また、浅田先生から「主体的に動くこと、今自分は何ができるのかを考えて動くことが大切である」とのアドバイスをいただき、周りを見て、今自分ができることは何かを考えるようになったように思う。これは保育現場においてのみならず、他の場面でも必要な姿勢であろう。常に、自分ができることは何かを考えて行動していきたい。

反省点の1点目は、設定遊びの活動において、学生と子どもたちとの間に見えない境界線があったことである。反省会において、保育の中で子どもたちが「いつ」「何を」楽しんでいるのかを把握するよう努め、子どもたちが楽しめるためにはどのような手立てが必要なのかを考えること、子どもたちがどのような楽しみ方をしているのかをキャッチし自由自在に反応することの重要性についてアドバイスいただいた。2点目は、長期的に計画する必要があったことである。落ち葉プールをしたときに、子どもたちから「またやりたい」との声が聞かれたが、計画上、次の回に実施することができなかった。もっと以前から落ち葉プールを計画し実行していれば、複数回実施することができたであろう。3点目は、もっと自信を持って取り組むことができるように、私自身が更に練習を重ねていくことである。浅田先生から「ここまででよいと思わずに、更に練習を重ねることが大事である。どんなに練習していても、本番になると緊張して失敗することがある」とのアドバイスをいただいた。常に、練習に練習を重ねる姿勢を忘れず、自信を持って保育に臨めるよう努力していきたい。

園長先生、お母さん先生、1年間ありがとうございました。

最終レポート 5（抜粋）

前期は活動に参加し始めたばかりということに甘え、反省会に参加しながらも、その反省を翌週の活動になかなか活かせていなかったように思う。しかし、後期に入り、私たちが活動に参加できる残りの回数がわずかになってきたことに気づき始めた頃から、自分たちの提供する活動にもっと責任を持たなければならないという意識が生まれ、「限られた時間の中でもっと充実した活動を提供していきたい」という気持ちが芽生えた。それからは、反省会での発言も「〇〇ができなかったので、もっと頑張りたい」といった抽象的な内容から、子どもたちを継続的に見て「〇〇ちゃんは今週はこんなことができるようになったので、来週はこんな言葉がけをしてみたい」という具体的な内容に変化していった。「ぴょんちゃんクラブ」では、子どもだけでなく、地域の保護者、お母さん先生や幼稚園の先生と密接に関わることができ、現場に対して、不安だけでなく楽しみに思う気持ちも抱けるようになった。これからは、反省会でいただいたアドバイスや「ぴょんちゃんクラブ」のアットホームな雰囲気を忘れずに、「ぴょんちゃんクラブ」のような雰囲気作りができる保育者になれるよう努力していきたい。

浅田先生や、お母さん先生の皆さんには、未熟で至らない点ばかりであった私たちを、1年間温かく指導していただきました。保育技術の面においても、気持ちの面においても、大きく成長できたのは、白塚幼稚園の皆さんのおかげです。本当にありがとうございました。



白塚幼稚園：「うさぎのうーちゃん」の歌作り

幼児教育講座 滝口圭子

(1) 実施要領

- 日時及び各回の活動内容：表3に示す。
- 場所：白塚幼稚園くじら組（年長クラス）及び遊戯室
- 対象：白塚幼稚園くじら組（年長クラス）の子どもたち
- 内容：白塚幼稚園で飼っているうさぎのうーちゃんの歌を作る。
- 参加者：白塚幼稚園園長：浅田美知子先生
 白塚幼稚園くじら組担任：足立深雪先生
 三重大学教育学部理科教育講座：後藤太一郎
 三重大学教育学部音楽教育講座：根津知佳子
 三重大学教育学部幼児教育講座：滝口圭子
 教育学部幼児教育コース4年生：辻彰士・中嶋祐太・平野梢・山崎理沙 3年生：森陽子
 教育学研究科教科教育専攻音楽教育専修2年生：高林朋世
- 本活動は、音楽教育講座の根津知佳子先生と白塚幼稚園園長浅田美知子先生の話し合いの中で着想され、その後、根津先生より滝口にお話があり、幼児教育講座も参加させていただくこととなった。滝口の呼びかけにより、幼児教育コースから有志5名が集まった。滝口は全活動に参加し、ビデオ撮影を担当した。全活動において浅田先生と足立先生にご参加いただき、きめ細かい支援をいただいた。

(2) 活動内容の詳細

- 第1回：1月25日（月） 参加者（学生）：辻・中嶋・平野・山崎・森陽子
- ・くじら組の部屋の中に、積み木で囲ったうーちゃんの遊び場所が用意してある。その中に浅田先生と

表3 「うさぎのうーちゃん」の歌作りの活動日時と概要

日付 2010（平成22）年	活動内容
1/15（金）	白塚幼稚園での打ち合わせ
第1回 1/25（月） 10:00～10:30am	うーちゃんの歌の歌詞に使用することを目的とし、子どもたちとうーちゃんとの関わりにおいて、子どもたちから発せられた言葉を収集した。 参加者（学生）：辻・中嶋・平野・山崎・森陽子
第2回 1/27（水） 9:30～10:10am	学生1人と子どもたち数名の4グループを作り、各グループで2小節ほどの歌詞とメロディーを考案した。 参加者（学生）：辻・中嶋・平野・山崎
第3回 2/1（月） 10:00～10:15am	前回、前々回に収集された歌詞とメロディーを活かしながら、学生によって作詞、作曲されたうーちゃんの歌を、子どもたちに披露した。 参加者（学生）：辻・中嶋・平野・森陽子
第4回 3/4（木） 11:00～11:15am	うーちゃんの2歳の誕生日会において、音楽教育コースの学生により曲の洗練及び伴奏譜が施された「うさぎのうーちゃん」を、子どもたちに披露した。 参加者（大学教員）：後藤・根津 参加者（学生）：高林・山崎・森萌野
3/24（水）	卒園式 子どもたちによる「うさぎのうーちゃん」合唱

うーちゃんがいる。足立先生からお話があり、うーちゃんと遊びたい子どもは積み木の遊び場所にやってくる。浅田先生が、子どもたちに「うーちゃんにいっぱいお話ししてあげて」と語りかける。

- ・学生は、浅田先生からの多様な問いかけに子どもたちが返した言葉や、うーちゃんの様子を見て思わず子どもたちの口からこぼれ出た言葉を、メモに書き留めた。
- ・大学に戻り、学生は、第1回活動日以前にくじら組担任の足立先生が収集してくださった子どもたちの言葉、第1回活動において学生が収集した言葉、また第1回活動日に浅田先生よりお話しいただいたエピソードを一覧にまとめた（表4）。
- ・学生は、第2回活動日までに、表4の言葉やエピソードを元に歌詞を作成し、その歌詞にメロディーをつけることに取り組んだ。2小節ほどの歌詞とメロディーを4種類用意した。

表4 収集された子どもたちの言葉やエピソード

足立先生が 収集された言葉	1歳・3月生まれ・背中がふっくら・茶色・足が白い・耳がだらーんとしていてかわいい・人気者・今はエサをたくさん食べる・草のエサはあまり食べない・にんじんの赤いところがすき・緑の葉はきらい・ウンチがたくさん出る・上手にトイレする・逃げるのが速い・うーちゃん逃げていった・植木鉢の下にいるよ・いたずら・トンネルもぐるのが好き・2本足で立つ・悲しいときに心配してくれる・うーちゃんが側にいる
学生が 収集した言葉	こんにちは・こっちだよー・アイドルや・紙食べた・閉じこめたらあかんで・触ると嬉しい・ふわふわ・すごいこの子・ふわふわ・ぷくぷく・あったかい・足がおっきい・耳つつる・男の子・大好き・どうしてこんなかわいいの・赤ちゃんみたい・軽かった、あんな大きいのに！！
浅田先生から いただいた エピソード	子どもたちが、友達とけんかしたときに、うーちゃんのところでじっとしていることがあった。うーちゃんの側にいると安心するようだ。子どもたちにとってうーちゃんは、あったかみのある、側に寄ってきてくれる、かわいい存在である。

●第2回：1月27日（水） 参加者（学生）：辻・中嶋・平野・山崎

- ・第1回活動後に、学生が作成した2小節ほどの歌詞とメロディーを子どもたちの前で披露した。第2回活動において用意した楽器はキーボード、ギター、ピアノ、木琴、リコーダーであった。
- ・学生が披露した歌詞の中に、自分の発した言葉が使われていることを発見し、驚き喜ぶ子どもたちの姿があった。
- ・浅田先生によるお話の後、足立先生に支援をいただき、学生1人と子どもたち数名のグループを4グループ作成した。キーボードグループ（平野・子ども3名）、ギター・ピアノグループ（山崎・子ど



- も3名)，木琴グループ（中嶋・子ども2名），リコーダーグループ（辻・子ども3名）であった。
- ・学生は子どもたちから出た言葉を，自身の担当楽器を用いて，即興でメロディーにしていって。そうしたやり取りを繰り返し，各グループで，2小節ほどの歌詞とメロディーを1つずつ考案した。
 - ・各グループで作成された歌詞とメロディーを，1グループずつ紹介し合い，全員で共有した。
 - ・学生は，第3回活動日までに，第1回，第2回活動において考案された歌詞とメロディーをつなげるなどして，うーちゃんの歌を作詞作曲した（歌詞：表5上段左欄）。

●第3回：2月1日（月） 参加者（学生）：辻・中嶋・平野・森陽子

- ・第3回活動において用意した楽器はキーボード（平野），鉄琴（辻），木琴（中嶋），アルトサックス（森陽子）であった。
- ・子どもたちの前で，学生が1人ずつ，うーちゃんの歌に込めた思いを話した。
- ・学生が作詞作曲したうーちゃんの歌（歌詞：表5上段左欄）を披露した。
- ・子どもたちや足立先生も一緒にうーちゃんの歌を歌った。
- ・大学に戻り，学生は，滝口からの指摘を受け，歌詞の改訂を行った（表5上段右欄）。

表5 幼児教育コースの学生が作成したうーちゃんの歌の歌詞と楽譜

第3回活動で披露した歌詞	第3回活動後に改訂した歌詞
<p>【1番】 元気なうーちゃん ぴよんぴよん ぴよんぴよん 3月生まれの男の子 どうしてこんなにかわいいの みんなのアイドル うーちゃん</p> <p>【2番】 かわいいうーちゃん ぴよんぴよん ぴよんぴよん 大きなお耳が自慢です どんときでも一緒だよ みんなのアイドル うーちゃん</p>	<p>【1番】 元気なうーちゃん ぴよんぴよん ぴよんぴよん 3月生まれの男の子 赤ちゃんみたいによく眠る みんなのアイドル うーちゃん</p> <p>【2番】 いたずらうーちゃん ぴよんぴよん ぴよんぴよん 大きなお耳が自慢です かなしいときでも一緒だよ みんなのアイドル うーちゃん</p> <p>【3番】 ふわふわうーちゃん ぴよんぴよん ぴよんぴよん おふとんみたいに気持ちいい どうしてこんなにかわいいの みんなのアイドル うーちゃん</p>
	

●第4回：3月4日（木） 参加者（大学教員）：後藤・根津 （学生）：高林・山崎・森萌野

- ・遊戯室に、えび組（年少クラス）、くじら組（年長クラス）の子どもたち、白塚幼稚園の先生方、来年度白塚幼稚園に入園する子どもたちと保護者、大学関係者が集まる。浅田先生より、今日のはうさぎのうーちゃんの2歳の誕生日会であり、お祝いにうーちゃんの歌「うさぎのうーちゃん」を贈ることが伝えられる。
- ・根津先生と高林さんが子どもたちにリコーダーを紹介し、2人で「うさぎのうーちゃん」を吹く。吹き終わると、子どもたちから「2番も！」と声上がり、2回目のリコーダーの演奏に合わせて子どもたちや参加者が2番の歌詞を歌い始める。3番も同様である。
- ・浅田先生のお話があり、根津先生のピアノ伴奏で子どもたちと白塚幼稚園の先生方で「うさぎのうーちゃん」を合唱する。優しいうーちゃんバージョンと元気なうーちゃんバージョンの2種の伴奏に合わせて、子どもたちも歌い方を変えて歌う。他の参加者も歌っている。



（3）学生の感想の紹介

●辻彰士：初めての取り組みでしたので、当初はどのように頑張ればよいのかよくわからず、戸惑うばかりでした。しかし、子どもたちのうーちゃんのことを好きという気持ち、白塚幼稚園の先生方の歌の完成を楽しみにしている気持ちをひしひしと感じてからは、とてもやりがいを感じました。歌詞やメロディーを考えることの楽しさを知ることができ、貴重な経験となりました。ありがとうございました。

●中嶋祐太：子どもたちがうーちゃんと触れ合う姿から言葉を拾い、その言葉を歌詞にしていくことはとても難しかったです。言葉からメロディーを引き出し、そのメロディーに違和感なく続く言葉を選んでつなげなくてはならないので、選択できる言葉が限られました。しかし、私たちが作った歌を、子どもたちが歌ってくれたときには、不思議な感覚がしてとても嬉しかったです。ありがとうございました。

●平野梢：歌を作るという初めての試みで、最初は不安がありました。しかし、子どもたちのうーちゃんへの思いを聞いたり、うーちゃんと接しているときの表情を見ていると、いろんなフレーズが浮かんできて、とても楽しく歌を作ることができました。子どもたちがすぐに覚えてくれて嬉しかったです。

●山崎理沙：子どもたちの言葉を拾い、その言葉を歌にするというのはなかなか難しかったです。しかし、第2回目の活動で、子どもたちの言葉をもとに作ってきた数小節の歌を、子どもたちに披露したときの子どもたちの笑顔は、とても印象的でした。この歌は、白塚幼稚園の子どもたちにとっても、私たちにとっても、思い出深い歌になると思います。

●森陽子：歌を披露したとき、子どもたちは歌詞の中から自分の気持ちに合う部分を数えたり、すぐに覚えて一緒に歌おうとしていました。うーちゃんを大切に思っている気持ちが伝わってきました。

小学校におけるパソコンによる名刺づくりの支援

下村 勉（三重大学教育学部附属教育実践総合センター）

1. 取り組みの概要

「小学校で、パソコンを用いた名刺づくりをしたい。小学校3年生で、担任教師を含めてパソコンの使用経験は少ないので、大学生の支援をお願いしたい」との要請を受けて、私の担当する授業の一部を活用して、支援することとした。これまでゼミの学生とともに、小学校を訪れて交流を持ったことはあるが、30名近い学生による支援は初めてであった。準備等に時間がかかったり、改善点もいくつかあったが、子どもたちは名刺づくりを楽しみ、大学生もその支援活動に満足感を感じた。その概要は以下のとおりである。

<小学校側>

1) 栗真小学校3年生23名（担任：岡山均先生）

2) 「総合的な学習の時間」での名刺づくりの支援

目的は、名刺の作成。パソコンの操作は主目的でない。

名刺は児童の写真入りとする。パソコンは20台あるが、その中の16台が使用可能。

3) 授業実施日：2010年1月21日(木)、10:40-12:25（2時間分）

4) 場所：栗真小学校3階パソコン教室

<三重大学側>

1) 学部授業：「教育工学」〔(木曜・3-4限、担当：下村勉)の一部を活用して支援する。]

2) 受講生 教育学部1～4年生 31名（8グループ）

3) 単なる手伝いにならないようにする。

4) 事前に自分で名刺のサンプルを作って準備する。想定されるトラブルや留意点をあげておく。

5) 交流授業のあと、感想等をレポートする。

2. 「パソコンを用いた名刺づくり」の支援の取り組み経過

2.1 準備

(1) 担当教師との打ち合わせ

実践に当たって打ち合わせを2回実施した。

1回目は、授業の目的、実施条件、パソコン環境、使用ソフト、必要な消耗品などを打ち合わせた。大きな問題点として、名刺づくりにどのソフトをどう準備するかが浮かび上がった。大学生と小学生が同じソフトを用いる必要があるが、想定したフリーソフトを小学校のパソコンすべてにインストールすることがパソコンのセキュリティーの関係上、容易でないことがわかった(小学校にあるソフトで名刺作成もできるが、逆に大学のパソコンにはそのソフトが入っていない)。結局、津市教育委員会の担当者の方に対応いただき、フリーソフト「ラベル屋さん」をインストールしていただいた。

2回目は、直前(1/19)に、授業の進め方、直前準備、ソフトの確認、印刷チェック、などを行った。限られた時間なので、とにかく写真入の名刺を作り上げることが最優先にすること、写真はあらかじめ撮影してパソコンに入れておくこと、テンプレートを使用することなどを確認した。

(2) 授業「教育工学」における準備

実践に当たって、「教育工学」の授業 1 コマ分をあてた。大学のパソコン教室にも今回使用するソフト「ラベル屋さん」はインストールされていないので、そのインストール操作からはじめた。それから支援内容となる顔入り名刺の作成を行った。顔写真は、携帯電話の写真メールまたはデジタルカメラから取り込んだ。そのあと名刺用ラベル用紙に印刷した。大学生においても、ソフトのインストールの時間があるものの印刷までに90分の授業時間を要した。顔写真はあらかじめ準備をしておくこと、テンプレートを使用することなどの必要性を実感した。

なお、学生には、作成した名刺を配布した名札入れとともに当日に持ってくること、小学生とコミュニケーションしながら作業をすること、実践のよかった点と改善点をあとでレポートしてもらうことなどを指示した。

(3) 小学生の写真撮影とパソコンへの取り込み(担任教師)

小学生の顔写真の作成とパソコンへの取り込みは担当の先生にお願いした。通常ならば写真ファイルを教師用パソコンの共有ファイルに保存して、児童用PCからコピーする予定だったが、ネットワークがうまく機能しなかったので、個々のPCのマイドキュメント/マイピクチャーにUSBメモリからコピーした。



図1 フリーソフト「ラベル屋さん」による名刺づくり(サンプル)

2.2 授業の実施

(1) 直前の指示

パソコン室に集合した学生に対して、プリントを配布して、担当する児童とパソコンとの対応および留意事項を指示した。児童は23名、大学生は31名(8グループ)、パソコンは16台である。

1つのデスクにパソコン2台が設置されているので、学生の1グループが2台のパソコン、3名の児童を担当した(3グループは児童2名)。また、顔写真の保存場所や、名刺に入れる情報、テンプレートを使うこと、1枚で2名分を作成すること、使えるプリンタなどを指示した。いずれも時間内に作業を終えるための留意点がほとんどである。

(2) 名刺づくりの共同作業

パソコン室に小学生が入り、指定された場所に着席した。大学生が持参した名刺入り名札を用いて、担当グループの子どもたちに自己紹介をしてから作業が始まった。

名刺作成ソフトを立ち上げ、まずテンプレートを選択する。選んだテンプレートで、氏名、学校名などをローマ字で入力した。自分の顔写真を選び、コピーして名刺に貼り付け、適当な大きさに縮小する。レイアウトを整え、1枚の名刺を完成させる。つづいて片側に同じものをコピーする(同じものが5枚できる)。同じ作業をもう一人の子どもについて行う。2名分の名刺ができれば、印刷作業に移る。

今回、準備した名刺用紙で紙詰まりが生じたため、通常のA4用紙(光沢紙)を使用した。そのため、後から切り離すために、印刷画面で、「1片枠を印刷する」にチェックを入れてから印刷実行を行うようにした。



パソコンを用いた名刺づくりの実践

2.3 事後指導

学生に、授業の感想を Moodle に記入するように指示した。小学生は、大学生に対して、感想を含めたお礼の手紙を書いたかったので、次の授業で学生に回覧した。また、最終のレポート課題の1つに「今回の実践をもとに、今回の改善点やどのようにこの授業を発展させるか」を設定・奨励した。

3. まとめ

小学生から大学生にあてたお礼の手紙には、「少しむずかしかったけど、きれいにできてうれしかった」「大学の兄さん、姉さんがやさしく教えてくれたのでうれしかった」「みんながにこにこしていて楽しかった」「(大学生から)名刺がもらえてうれしかった」など、自分の名刺がきれいにできたこと、大学生にやさしく教えてもらえたことにとっても満足しており、「また学校に来てください」との言葉を随所にみることができた。

大学生の感想には、「苦勞して作ったせいか、できあがった名刺に愛着を持っていた」「子どもとかかわれ名刺作成の目的も果たせたのでよかった」「大学生側も子どもとかかわれて、双方により活動となった」など、この実践に参加できたことに対して肯定的な評価がほとんどであった。改善点も考えるように指示してあったこともあり、多くの改善点があげられた。たとえば「ソフトや顔写真が入っていないパソコンがあった。事前チェックが必要。(実際は入っていたのだが、別のユーザー名でログインしていたために見当たらなかった)」「インターネットやプリンタへの接続がうまくいかずに子どもが退屈そうな場面があった」「ローマ字入力がむずかしかったので工夫が必要」「大学生の人数が多すぎた。2回に分けてもよかったのでは」「テンプレートは多すぎる。限定してもよいのでは」「子どもの作品の鑑賞の時間がほしかった」などである。また、学生のレポートからも、なりたい職業を書く「なりきり名刺」、友達を紹介する「友達名刺」、名刺交換の実施やトランプやかるたとりように活用するなどのいろいろなアイデアが出された。これらの改善点やアイデアを今後の実践に生かしていく予定である。

最後に、この授業実践を企画実施いただいた栗真小学校の岡山均先生に感謝します。子どもの写真の撮影からパソコンへの取り込みなど、なれない作業にもご苦勞いただきました。また、津教育委員会の担当者には、ソフトのインストールの協力をいただきました。この場を借りてお礼を申し上げます。

電子黒板「mimio」使用説明会の報告

連携担当事務補佐員 平山 円

新しい学習指導要領では ICT を活用した教育を各教科で取り入れるように明記された中で、教員養成における授業の中でも ICT を生かした授業づくりを学生に指導する必要性が高まってきました。特に昨年来、小中学校の多くの教室に電子黒板が配置される状況になってきたことから、これまで本学部では活用例のない電子黒板を導入して活用例を指導することは欠かせないでしょう。本学部大学教育・学生推進事業の一つとして、学生と連携校教員の協同による電子黒板を活用した授業づくりの推進を計画しました。学生が電子黒板の使用に習熟し、連携校教員の指導案に基づき協働しながら電子黒板用教材を作成することで、電子黒板の活用とともに連携校との間で共有できるコンテンツを蓄積できることが期待されます。

大学教育だけでなく学校現場でも活用する中で、できるだけ移動が簡便でなければなりません。そのためには、日本では主流であるテレビ型でなく、液晶プロジェクター投影型がこの条件を満たしています。現在、アメリカでは最も普及している「mimio」という商品はこのタイプで最も優れていると考えられ、最近では日本でも導入例が増加しており、本事業でも mimio の導入を決めました。

しかし、電子黒板の使用経験者は連携校だけでなく大学にもほとんどいないことから、①電子黒板はどのようなものであるのか、②電子黒板の活用で授業がどのようにかわるのか、③児童・生徒が電子黒板を使用することでどのような力がついたのかを、使用者に説明することが必要です。

そこで、連携校である一身田・橋北校区の小中学校の先生方および大学教員を対象とした電子黒板の使用説明会を企画しました。説明には、mimio の日本代理店である株式会社 OTTO プロダクト事業部副部長の森田清一氏にお越しいただき、一身田小学校（1月25日）および三重大学（26日）を会場として開催しました。両日とも多数の参加があり（1日目は60名、2日目は40名）、大盛況のうちに終わることができました。

森田氏には mimio の紹介も含め、設置方法や現場での活用例をわかりやすくご説明いただきました。当日は mimio の簡単取り扱いマニュアル（資料1）を配布し、説明後には参加者が実際に mimio を操作する時間もとりました。説明会終了後には今回の説明会に対するアンケートを行いました。

以下に、説明会の概要を述べます。

1. 開催日時・場所

2010年1月25日（月）	16時10分～17時00分	一身田中学校
2010年1月26日（火）	12時10分～12時50分	三重大学教育学部専門1号館201教室
2010年1月26日（火）	16時30分～17時20分	三重大学教育学部専門1号館201教室

2. 説明会の内容 —電子黒板『mimio』とは—

(1) 『mimio』の設置と操作

電子黒板 mimio は、従来のテレビ型電子黒板とは様相がまるで異なります。大きな特性として、コ

コンパクトで設置が簡単な上、ワイヤレスなので机まわりがコードで邪魔になることはありません。あらかじめパソコンにプロジェクターを接続し、ホワイトボードに投影しておく必要があります。必要部品は本体、専用ペン、パソコンのUSBポートに差し込むワイヤレス受信機、の3点です。



図1. mimio 機器 A. 専用ペン B. 本体 C. ワイヤレス受信機

説明会ではまず、森田氏から必要部品の紹介があり、その後「mimio 簡単マニュアル」(森田氏作成)をもとに mimio の基本操作の説明が丁寧に行われました。基本操作の概要は以下の通りでした。①本体を開く(写真はすでに開いた状態)。②ワイヤレス受信機をパソコンのUSBポートに差し込む。③ホワイトボードに本体を取り付ける。④パソコンの画像をホワイトボードに投影し、投影画像と mimio 本体部の位置を調節する。⑥キャリブレーションをおこなう(これは投影場所と専用ペンの位置関係を登録する作業である)。なお、今回の説明会では mimio が普通の教室の黒板で使用されることを前提に、持ち運びが簡単なマグネット式ホワイトボードを黒板に設置して行いました。

(2) 専用ペントール

電子黒板は専用ペンを使うことでより便利になります。ホワイトボード上だけでなく、パソコン上の操作も専用のペンで可能です。mimio 専用のペントールは、機能も豊富で、色や太さの選択、手書きした図形の補正などが容易にできます。図形補正の美しさと速さに会参加者からは驚きの声があがっていました。補正速度は速いので、算数や数学の授業などではこの機能が大いに活用されると思われます。

今回の説明会ではホワイトボードの背面は黒板でしたが、ロールスクリーンなど面が柔らかいものに投影した場合にはボードにペンを押つけて使うことが困難となります。しかし専用ペンはスクリーンに押しつけなくとも、少し離れた操作することができるため、ロールスクリーン上での使用も可能です。

(3) 『mimio』の機能と活用例

mimio では専用ペンで書き込んだ内容とともに、スクリーン画面をそのまま電子ファイルとしてパソコンに保存できます。板書したものがそのまま残るという点で、誰もがすぐにでも使える機能です。あらかじめ PowerPoint と同じような感覚で作成しておけば、表示画面上に、書き込みが自由にできるために PowerPoint より使いやすく、また画面の一部をペントールで囲めば、その部分が拡大することが簡単であることも大きな特徴と言えるかもしれません。その他にも、カーテン機能を使えば、問題と答えをあらかじめ書いておき、答えの部分だけを隠しておくということもできます。生徒が答えを考える時間にタイマー機能を使えば、教師は生徒が問題に取り組む様子を従来よりも余裕をもって行うことができます。

今回森田氏は説明の中で、小学校 5 年生と 6 年生の英語ノートのデジタル版、各教科書会社が販売している電子ノート素材、またインターネットからダウンロードした地図や天気図など、実際に用いられているデジタルコンテンツを多数示されました。このようなコンテンツを単にパソコンで提示するだけでなく、mimio を使うことで、より効果的にコンテンツを活用できます。

教育効果として、ある指導内容について mimio を使った場合の方が成績が向上した例や、児童の成績を上位、中位、下位に分けた場合、mimio を使った場合に中位と下位の児童の成績向上が顕著であることを示されました。児童が mimio により学習している箇所がわかることや、黒板に注意が向くことなどが、その理由と考えられています。

mimio は移動式であるため、異なる教室での使用が容易です。ある学校では、クラスに「電子黒板準備係」を作り、生徒が準備した段階で教師がパソコンを持ってきてつなげるということをしているようです。生徒は電子黒板に関心をもつために、このようなことは簡単にできるそうです。



図 2. 一身田中学校での説明会の様子



図 3. 参加者が操作を体験している様子

(4) 質疑応答

計 3 回の説明会での主な質問は、手書き入力文字の活字変換の可否、板書内容の保存方法などについてでした。手書き入力文字の活字変換は mimio の機能にはありませんが、パソコンのソフトにより使用可能です。また保存方法については、通常のパソコン上でのファイルの保存と同様に、パソコン本体や USB メモリーにファイル名を指定して保存することができます。ファイルの保存形式については、mimio のソフト独自の形式であるペンプラスファイルの他、JPEG や GIF などイメージファイルとしての保存が可能です。

最後に、マッキントッシュの OS 上での使用は可能であるかという質問がありましたが、マッキントッシュでの mimio の使用は現在は英語版に限られ、日本語版はまだないということでした。

3. 参加者アンケートの結果から

今回の説明会（計 3 回）の参加者は 108 名で、そのうち 100 名からアンケートの回答を得ました。電子黒板にとっても関心のある参加者が 47%、少し関心のある参加者が 47%と、電子黒板にご関心がある方にご参加いただけたようです。この関心の高さに反して、86%の方はこれまでに電子黒板を使用することがありませんでした。これまでに授業で使用したことがある参加者はわずか 4%でした。説明会の中で実際に手にとって操作した参加者は両日とも 1 名だけだったので、説明だけでは不十分との意見もありました。

今回の説明会で電子黒板の使用方法が「よくわかった」、「少しわかった」と回答した参加者は 91%、電子黒板の使用に関心をもった参加者は 93%と高いものでした。森田氏の説明が適切で、参加者へ

の関心を高めるものであり、今回の説明会の意義は大きかったと思われます。


電子黒板で使用する教材開発を連携校の教員と大学生が協同で進めることについてどう思うか尋ねたところ、26%の参加者から「積極的に進めたい」、46%から「進めてもよい」という回答が得られました。アンケートの自由記述欄には、設置や操作、活用事例、および今後の展望などについて、多くの意見や質問が寄せられました。それらは表1の通りで、有効性を感じているために是非活用したいという意見が多数みられました。プロジェクターとパソコンの準備に手間がかかりそうであるという消極的な感想もありましたが、不安なく使用できるように、連携担当者として先生方のサポートにあたりたいと思っています。

4. 今後の展望


説明会終了後、mimio 使用方法について地域連携室に問い合わせがありました。実際に使い始めようという試みがさっそく始まっているようです。今回の説明会を契機に、一身田・橋北校区の学校園と三重大大学の連携教育活動の取り組みの中で電子黒板が積極的に活用されることが期待されます。このことが、他校の教員にもいい影響を及ぼすのではないのでしょうか。導入しても活用しない機器も多いようですが、学生が連携校に関わる中で、今回の mimio は使用頻度も高くなると思われます。

アンケートの自由記述欄の回答にも見られたように、今後 mimio の活用が始まれば、活用事例の紹介、活用上の課題解決のための意見交換などの場を求める声が高まることもあるでしょう。海外ではすでにインターネットのホームページを使って、mimio デジタルコンテンツの情報交換などが活発に行われています。今後、より多くの学校現場で活用され、授業がより楽しいものとなるような環境が整備されることが望まれます。

資料 1. mimio 簡単取り扱いマニュアル



簡単マニュアル




make it interesting

mimio のペンツールの操作


1. mimio 本体のセットアップ

mimio 本体を開きます。



3. mimio ワイヤレスで通信


ワイヤレス受信機を PC の USB ポートに差し込みます。



5. mimio 本体の設定する


PC のデスクトップ画像をボードに投影します。投影した画像が、ボードと mimio の端から 5~8cm 程度内側になるように調整します。

mimio 本体の取付位置は、センサーを内側にする場合、左・右・上・下どこでも設置可能です。




2. ブラケットの装着

mimio 本体にマグネット付ブラケットを装着します。



4. mimio 本体を装着する

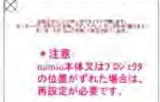
mimio 本体をホワイトボードに取り付けます。



* バッテリー駆動の場合は、パワーボタン を押し、緑に点灯することを確認します。

6. キャリブレーション

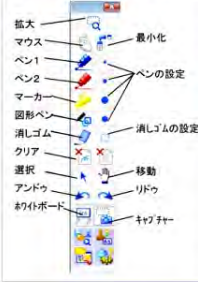
- mimio 本体の一番下にある ボタンを押します。
- インタラクティブペンを垂直に持ち、各ターゲットの中心でインタラクティブペンをクリックします。
- 前のキャリブレーションターゲットが消え、次のターゲットが表示されます。これを 9 回行うとキャリブレーション画面が消え、セットアップは終了です。



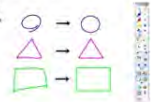
* 注意
mimio 本体又はペンがディスプレイの位置がずれた場合は、再設定が必要です。

デスクトップ画面に書く

ペンツールを使いインタラクティブ・ペンで手書きや拡大が可能です。デスクトップ上のホームページやデジタルコンテンツ等に手書きが可能です。また、ホワイトボードに手書き等は、保存することも可能です。




- ペン、マウス、ペン1、ペン2、マーカー、図形ペン、消しゴム、クリア、選択、アンドゥ、ホワイトボード、リドゥ、キャプチャ
- ペン、マーカー で書けます。マーカーは半透明のペンです。ペンの設定 でペンの色・種類・太さを変更できます。
- 消しゴム で消せます。
- 消しゴムの設定 で消しゴムのサイズを変更できます。
- または でクリアします。
- 間違って書いて消したい場合には、アンドゥ を押すと、1つずつ動作が元に戻ります。
- 元に戻しすぎたら、リドゥ を押すと、1つずつ動作が逆戻りします。
- ホワイトボード を押すと、ホワイトボードになります。ホワイトボードに、手書きなどを保存することが可能です。
- 図形ペン 使って手書きの図形を描くと、自動的に整形され、きれいな図形になります。描いた図形の上に、同じ図形ペンで「×」を描くと、その図形を消すことができます。



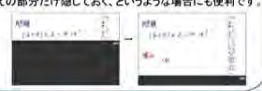
タイマー機能を使う

タイマー を押すと、デジタルタイマーが表示されます。音声メッセージを設定しておく。経過時間ごとに音声で知らせることができます。テストなどで時間を計るのに便利。



カーテン機能を使ってみよう

カーテン を押すと、黒色のウィンドウが表示されます。例えば、問題と答えをあらかじめ書いておきながら、答えの部分だけ隠しておく、というような場合にも便利です。



パソコンの画像を取り込もう

指定領域のキャプチャ を押すと、「十字ハサミ」型のカーソル になります。アプリケーションの、取り込みたい領域をドラッグすると、指定領域の画像を取り、キャプチャ後、取り込んだイメージの貼り付け・保存ダイアログが表示されます。

Web を効果的に使おう

Web リンク集 にはお気に入りの Web ページを登録しておくことができます。クリックで、指定した Web ページを表示することができます。インターネット情報の取り込みを、より早く、より簡単に行うことができます。

MEMO バッテリーについて

パワーボタン


パワーボタンの色でバッテリーの残量がわかります。
緑(点灯) 6時間以上
黄色(点灯) 1~5時間
黄色(点滅) 1時間以内

- 単三乾電池を使用した場合、連続使用時間は、約 40 時間になります。充電電池の使用も可能です。
- mimio の電源を単三乾電池で使用している場合、インタラクティブ・ペンを 30 分間使用しない場合、mimio の電源が切れるようになっています。
- mimio 本体の電源は、単三乾電池(4本)以外に、USB ケーブルや AC アダプターから供給することも可能です。

詳しい説明

それぞれの機能についての詳しい説明は、ヘルプ に記載してあります。そちらもどうぞご覧ください。

また、mimio に同梱されている「かんたん！ PenPlus プロ for mimio」もご参照ください。



■ 国内販売代理店 株式会社 OTTO

〒104-0045 東京都中央区築地4-1-17
TEL: 03-3544-1181 FAX: 03-3544-1182
Mail: mimio@otto.co.jp
ホームページURL: <http://www.mimioxi.net/>

表 1. アンケート集計結果

回答者

参加者総数	回答数	回答率
108	100	92.59%

性別

男性	女性	無回答
35	53	12

職種

小学校教員	中学校教員	大学教員	無回答
64	14	17	5

1.電子黒板の使用に関心がありますか

とてもある	少しある	どちらともいえない	あまりない	ない
47	47	4	2	0

2.これまでに電子黒板を使用したことがありますか

授業である	研修会である	ない	その他
4	9	86	1

3.今回の説明で、電子黒板の使用方法がわかりましたか

よくわかった	少しわかった	どちらともいえない	あまりわからなかった	わからなかった
21	70	8	1	0

4.今回の説明で電子黒板の使用に関心をもちましたか

とてもある	少しある	どちらともいえない	あまりない	ない	無回答
46	47	5	1	0	1

5.電子黒板で活用する教材開発を連携校教員と大学生が協同して進めることについてどう思われますか

積極的に進めたい	進めてもよい	どちらともいえない	あまりしたくない	したくない
26	46	25	2	1

6.電子黒板の使用についてご意見・ご質問がありましたらお書きください(一部抜粋)

実際に使ってみないとわからないところもあると思いますが、大まかな使い方はわかりました。
ぜひ授業の中で取り入れていきたいと思いました。
子どもたちの顔を見ながら授業できるのがよいと思いました。
まだよくわかりませんが、これからだと思います。
教材内容によっては有効的に使えると思う。
日々の授業で子どもたちにわかりやすく説明するためにとてもよいと思いました。
今日の説明を聞いて使えたら子ども達も興味をもって学習できるだろうなと思いました。何度も使ってみて慣れることが大事だなと思いました。
実際に使ってみないと分からない部分もあったが、子どもたちは“DS”でタッチペン形式には慣れていると思うので、楽しく学習できそうだなと思った。
少人数対応では視覚的に刺激があり有効的だが30人程度の学級だと画面が小さかったり児童の反応がわかりにくいのではないかとと思われる。
使い方によって、その価値が変化すると思います。
学習を進める上でとても効果的なのは明らか。あとは授業の場で、使う側がどう使いこなすか、また、アナログ教材との併用をどう考えるかによるところが大きいと思う。
便利だと思います。使いたいです。目に負担があるのではないかと少し心配です。
常時使える環境を作っておくことで活用の工夫や向上につながっていくと思います。活用事例の交流を今後行っていければよいと思います。
効果的使い方の例等、ありましたら、参考にし、そこを手始めに使用してみたい。
活用の仕方が十分理解できていない部分があるのでそういった不安を解消できる講習会があればと思います。
どんな時にどう使うと便利なのか、活用した実践を数多く見てみたい。
使ってみる中で、使い方は人それぞれになっていくと思うので、今後色々なバージョンの授業がでてくるのではと思いました。そういうのも知りたいです。
実際に使いながらどのように使っていくのかを研究すべきだと思った。まずは担当者を決めて、模擬授業を実践してイメージをもつことが必要だと感じた。
コンテンツをたくさん蓄積し、ぜひ共有していきたい。
適切な教材、ソフトの作成収集が、電子黒板利用の有効性を左右すると思う。
体育や保健での活用について考えてみたい。
次には実際の授業で使えるような教材で楽しく説明していただけるとありがたい。
便利だとは思いますが、実際に日々授業で活用していくには設備面でも、まだまだ課題があると思う。
プロジェクターの準備が大変かと思います。もう少しスクリーンが広いほうがいいです。うしろのほうはみえません。
PCとプロジェクターが必要なので、なかなか即、授業で使用するというのがむずかしいと思われます。

ICT環境の効果

地域連携で電子黒板を活用

三重大学教育学部 教員養成の試み

三重大大学教育学部では、地域の小学校との連携で教員志望の学生の資質向上を目指す試みを「スマート」した。そのひとつが電子黒板システム「F101」とプロジェクター、タブレット「PC、スクリーン」等を介した先生や各校での活用支援だ。地域連携を進める理由、その方法、電子黒板の活用法について三重大大学教育学部の浅藤太一郎教授に聞いた。

地域連携で教員養成

三重大学教育学部では、学校現場で役立つ指導力の育成を目指した方リキウムを作成している。教育実習だけではなく、21年度「大学教育・学支援推進事業 大学教推進プログラム」にも採られ、「地域連携実

く、初年次より全学年にわたって、年間20日以上教
育現場での活動時間を確
保、実践的な指導力を育
むというものだ。そのた
めには、附属学校だけで
は不足で、より多くの小
中学校が学生の受け入れ
先として必要だ。

そこで、隣接校区の
幼・小・中学校との連
携を強化、学生の教育
現場体験を核とした教
育モデルに着手。平成



三重大大学
後藤太一郎教授

學生が学校に貢献でき

上、持ち運びが便利
な点も重要だ。地域
連携校からは、早速
「使ってみたい」と
いう声があがり、活
用がスタート。使い

方に関する問合せには、駆け付ける。隣接地区な
地城連携室から自転車であ
らではのメリットだ。

特別支援学級の
理解を深める

津市立一身田小学校

事態に各校ではどのような活用をしているのか。津市立一丁小学校で三置・山口悦子校長は、「同校の特別支援学級『いの木』について、理解を深める特別授業や、隣の子と自分の違



絵カードの工夫を説明する

得意なこと、苦手なことはみんな違う

視覚に訴える教材で焦点化

ね、なおくんも同じだよ」となおくんの特徴を示していく。なおくんは、絵がこても上手だ。そして、考えることに時間がかかきも大きな声を出さないういなどの意見が出る。村田教諭は「ほかのクラスではこんな関わり方を考えてくれまして」と、

る。騒がしい場所や冗談は苦手。

6年生が作ったひろくん（6年支援学級）に

「なほくんは、朝学習 上手に伝えるための絵のときはみんなと一緒に学習します。どうしてだに提示した。」

かわかる。朝学習は、みんなが静かだから一様に勉強できるんだよ。」「国語の時間は、『しいの木』で勉強します。考えの時間に時間がかかるから、しい

電子黒板で考えるきつかけを提供

今日の授業の目的について村田教諭は、

「特別支援学級の子もたのびを考えると、一人一人みな違っていて語り聞、その子にあった関わり方があると感じました。その理解が深まれば、子どもたち自身の生活の幅も広がるはず」と話す。

電子黒板については「今見せたいところを素早く拡大できる点が良い。授業の進めに合わせ

使った」と言う。山口校長は今日の授業について「子どもたちにとって、視覚に訴えることの重要性を再認識した。今考えるべき点を拡大して提示することができたので、子どもたちの思考が促され、考えやすくなった。いつも以上に課題に集中しており、話し合いが進んでいた」と述べた。

地域連携室では今後、

ことはみんな違う
る教材で焦点化



ワークシートをもとに
話し合いも熱心に進む

Ⅲ 隣接学校園からみた連携活動



1. 白塚幼稚園

津市立白塚幼稚園 足立 深幸

1 生き物環境作りの実践研究・・・4／16, 4／23, 4／30

(河崎道夫先生と学生)

子どもたちの生活動線に畑があることで、子どもたちはより野菜の生長や栽培に興味や関心を持つに違いないという気持ちから、川崎先生と学生に手伝っていただき、今年度新たに畑を作った。

河崎先生や学生の作業の様子に、子どもたちは目を輝かせ、自分たちも砂遊び用のスコップやシャベル、バケツなどを使って一緒に作業を行った。子どもたちは一緒に作業をすることで、地盤の固さ、水が土にどんどん吸い込まれていく様子、畝にした土が雨で流されないようにレンガを使って囲うことなど、実体験の中でたくさんのことを学ぶことができた。

畑には、夏野菜（ピーマン、ミニトマト、なす）を植えた。子どもたちは、夏野菜を育てる中で、いくつかの疑問を持ち、気づきをする。畑が間近にあるということは、それらの疑問を、即、畑の様子を見て確かめることにより解決できたり、生長を間近で捉えたりでき、子どもたちに植物栽培の楽しさを広げる結果になった。その後も、小松菜、小カブ、大根・・・と、野菜の栽培は続いている。

他にも、河崎先生にイモリ、シュレーケルアオガエル、アゲハチョウの幼虫などの生き物をいただき、子どもたちが世話をする中で、命の大切さを考えたり感じたりすることができた。



2 休日参観・親子活動・・・6／13

(岡野昇先生と学生)

事前に岡野先生や学生と話し合う機会を持ち、“大人も子どももちゃんと子どもしよう”ということをねらいとして親子活動を行った。内容については、学生が計画・進行していった。

子どもたちの、チャレンジ精神を引き出すような心地よいスリル、自分の力に応じてチャレンジでき、絶対受け止めてもらえるという安心感、心をくすぐるようなユーモアたっぷりのストーリー性のある内容で、しかも必ず、一つひとつの動きに大人の支え・協力が埋め込まれており、時には、岡野先生と学生の補助する中、大人が挑戦する場面もあり、子どもたちは大人の挑戦する姿を見て、嬉しく感じたり、あこがれを感じたりして意欲を増していったように思う。

日頃経験できない保護者同士のつながりという大きい安定感のある力の中で、子どもたちは身体と心を躍らせて遊んだ。学生たちの、子どもと保護者とを引っ張っていきながら保護者同士をつなぎ、自分たちも親と一体になろうとする姿勢が、今回の参観を盛り上げる結果になったように思う。



3 白塚敬老会への出演支援・・・10／25

(根津知佳子先生と学生)

例年、白塚地区の敬老会に園児たちが参加し、リズムや、歌などで出演している。今年は、根津先

生や学生に手伝ってもらい、子どもたちの大好きな絵本『はらぺこあおむし』のストーリーを、歌で進めていくことにした。子どもたちが歌でストーリーを担当し、学生たちに楽器（ピアノ、マラカス、タンブリンなど）で、音楽と進行を担当してもらった。

学生たちは、子どもたちの様子を知るために事前に園に来て子どもたちと一緒に遊ぶ時間を持った上で、ストーリーや子どもたちの歌に合った音楽を考えてくれた。そして、何度か子どもたちと一緒に練習していただいた。

子どもたちと学生の歌と音楽から、『はらぺこあおむし』のほのぼのとした愛らしさが伝わり、客席から大きな拍手をいただいた。



4 うさぎのうーちゃんの歌作り・・・1／2 5、1／2 7、2／1、他

（滝口圭子先生、根津知佳子先生、学生）

昨年の現代G Pの活動で、園に買っていただいたうさぎの『うーちゃん』

うーちゃんは、白塚幼稚園の大切な一員・家族で、子どもたちもうーちゃんに心を癒されたり、和まされたりしながら、安定した気持ちで園生活を送っている。ある日、「子どもたちが大事にしている、大好きなうーちゃんの歌を作らない?!」という誘いかけを根津先生からいただいたことがきっかけとなり、私たち教員も、“どうして今まで、それに気がつかなかったのか?”とそのきっかけをうれしく思いながら、うーちゃんの歌作りがスタートした。

子どもたちがうーちゃんと触れ合う中で、子どもたちがつぶやく言葉や言葉の持つリズムを学生にひろってもらい、実際に楽器を使うとどんな風になるのかを演奏したり、また、どんなふうにしたいかを子どもたちから引き出したりなど、小グループに分かれて楽しく作っていった。今、自分の言った言葉が楽器で演奏され歌になるという経験は、子どもたちにとって大きな感動で、自分の思ったことが言葉やメロディーになることの喜びを実感できた。

この生まれたての歌には、根津先生と学生に、仕上げのエッセンスを加えていただき、うーちゃんの歌が完成する予定である。うーちゃんの2歳の誕生日である3月7日には、みんなでこの歌を歌いお祝いすることを楽しみにしている。



5 楽器演奏（トーンチャイム、ハンドベル）・・・1 2／1 8、1／2 8

（根津知佳子先生と学生）

子どもたちの前で、根津先生と学生が布でくるまれた大切な楽器を「大事な赤ちゃん」と言いながら、1本ずつチャイムやベルを取り出すところから始まった。優しい雰囲気の中で、子どもたちは楽器に出会い、その音色を楽しむことができた。子どもたちは根津先生と学生の演奏に心動かされ、“あんなきれいな音をならしたい”“自分も使ってみたい”と感じ、その後、クラスで取り組んでいたベルの演奏に和音を入れたいと言い出した。今、「きらきら星」の曲に和音を取り入れて演奏をしている。楽器との丁寧な出会いと演奏の楽しさを子どもたちと私たち職員は学ぶことができた。



6 未就園児保育（ぴょんちゃんクラブ）の計画と運営・・・5／19～1／26

（滝口圭子先生と学生）

毎火曜日の午前中、当園では未就園児（白塚地区0歳から3歳の乳幼児対象）が保護者と共に、ままごと、粘土遊び、砂場での遊び、リズム、ふれあい遊び、絵本の読み聞かせなど、一緒に遊ぶ機会を設けている。朝、毎回5名の学生が当園の保護者ボランティアと共に、その日の計画や担当について話し合いを持つと共に、時間になりやってきた未就園児に声をかけ一緒に遊んだり、その保護者と子どもの成長について話し合ったりなど、活動の支援をしてくれた。



この活動は、今年3年目である。滝口先生との話し合いはもちろんであるが、毎年、学生同士のバトンタッチがきっちりとできており、学生が変わっても同じ気持ちで続いていく継続的な取り組みである。学生は、保護者ボランティアのお母さん先生と一緒に過ごすことで、母親の思いを知り、母親ならではの子どもへの接し方を学んだ。また、今年も大事にしてきた反省会では、保護者ボランティアも学生も教師も、“適切な支援はできたか”“次回はどのようにしていこうか？”という視点で話し合うことができ、それは、子どもや保護者の行動の奥にある気持ちを知ることにつながると同時に、学生が周りの様子を見て自分は何ができるかを考えたり、主体的に行動したりすることにつながった。

7 音楽物語上演・・・6／21

（中西智子先生と学生）

「くれよんのくろくん」「ねずみくんの音楽会」「まっくろくろのくろちゃん」の3本のお話を、上演していただいた。21名のたくさんの学生が様々なアイデアで歌詞やお話の内容に合わせて、楽しく演じてくれる作品に、子どもたちは見入っていた。暗がりや鮮やかな色を発するブラックシアターや、大きなロール紙を巻くことでストーリーに動きを感じたり、また、本物の楽器の音色での効果音に、子どもは引き込まれていった。子どもたちは、そばにいる友達と顔を見合わせたりほほえんだりする姿が見られ、学生による音楽物語上演は、他では味わうことのできない心豊かなひとときとなった。



8 夕涼み会での「暗やみ部屋」の計画と実施

（河崎道夫先生と学生）

夕涼み会の催しで、子どもたちがドキドキするような例年にない楽しい催しはできないものだろうかと河崎先生に相談したところ、「暗やみ部屋」を提案して頂いた。



河崎先生、学生と具体的な進め方について話し合い、材料等すべて学生が用意し実施してくれた。「暗やみ部屋」という名の通り、トンネルをくぐるとそこは真っ暗な部屋になっていて、段ボールで仕切られた道を通して出てくるというものである。ただ、それだけのことであるが、子どもはもちろん大人にも人気で、行列ができるほどの大盛況であった。「暗やみ」という言葉からのイメージ、それは、それぞれの子どもによって違うものがあるのだろうが、ドキドキ感、ワクワク感は大人も含め、たくさんの子どもの共通していたのを感じ、私たちにとって催し物について考える良い機会となった。

9 「食教育」の講演と調理実習（保護者向け・・・2／26実施予定）

（磯部由香先生）

子どもと保護者が「朝食」に関心を持ち、朝から朝食エネルギーいっぱい幼稚園にやってくる事ができるよう、その手だてを保護者と一緒に考え取り組んでいる。昨年の「お弁当レシピ集」に引き続き、今年も保護者、職員全員参加で「朝食レシピ集」を作ると共に、磯部先生から朝食の大切さについての講演と実習の指導を受ける。磯部先生の講演と実習指導は、昨年もしていただき、保護者から“是非今年も！”と期待する声がたくさん上がっていた。今年は、朝食の大切さを意識できるよう、きっかけ作りにご協力をいただく。

10 「うちのひととあそぼう」のポスターとカード作り

（岡野昇先生と学生）

教師自身が“仲間作りの遊び”の方法を学び、園で子どもたちに返していきたい、という気持ちで南立誠幼稚園、北立誠幼稚園、そして当園の教員が集まり、岡野先生に実技と講話でのご指導いただき、学生たちに補助していただいた。よく知っている3園の教員が集まり、一緒に体を動かすことはとても楽しく時間を忘れる程で、何よりも、運動遊びが特別な物ではなく、子どもの生活の中での何気ない動きや気持ちが色々な運動遊びやゲームに結びつき、心と体を育てるということを実感した。その後、ご指導いただいた運動を参考に、教員一人一人がオリジナルの運動遊びを幾つか考えて、3園で持ち寄り、それらを岡野先生や学生に分類・整理していただき、みんなで『うちのひととあそぼう』カードとポスターを作った。

<成果と課題>

今回の教育GPの取り組みには、1「園の教育的支援となる学生の実地研究」、2「園の教員からの指導が主となる学生の実地研究」、3「大学教員による園に対する教育支援活動」、4「大学を活用した地域活動」の4つの具体的内容があげられている。私たちは、今回、教育GPを受けるにあたり、主に1，2，3，の3つの内容を大事に考えた。

特に2について、私たち教員は、学生が教師という仕事に対して意欲を持って欲しいという気持ちで指導にかかわっているが、それは同時に自分たちの保育を見直したり教師としての自分を考えたりすることにつながっていることに気づいた。教師として何年経っていても、新鮮な気持ちで日々の保育に取り組んでいきたいと改めて思った。また、3については、今年も先生方から色々なきっかけやヒントをいただくことができたことがうれしい。

そんな中で大きな反省は、先生方からたくさんのきっかけをいただいたのに、その場限りで終わってしまっている事が多くあり、次につなげることがなかなかできなかったことである。たとえば、親子活動では、1組の親子という単位での活動ではなく、幼稚園全体の親子がつながることの楽しさを保護者も子どももみんなが実感したにもかかわらず、その楽しさを次につなげることができなかった。白塚幼稚園としてみんながつながる工夫をもっとすることができたのではないかなと思う。

今後は、色々なきっかけを生かせるように努力したい。

2. 北立誠幼稚園

<活動実施項目>

- 1, 音楽劇の観劇
- 2, ロボットの製作と手作りおもちゃの製作
- 3, 留学生との国際交流
- 4, 書道体験活動
- 5, 未就園児の遊ぶ会（たんぽぽ会）の運営支援

<対象児>

4歳児 18名 5歳児 9名

<活動内容及び考察>

1, 音楽劇の観劇

平成 21 年 4 月 24 日 9:00～10:00（一緒に遊ぶ）
平成 21 年 6 月 19 日 9:30～（音楽劇を観劇する）
中西智子先生、三重大学生 21 名



初めに、音楽劇作成に向けて、園児と一緒に遊んだり、触れ合ったりして幼児の様子を観察し、幼児と楽しくかかわるきっかけづくりをした。その中では、一緒に鬼ごっこをしたり、砂場で穴を掘ったりして楽しく遊ぶ姿が見られた。学生も、初めはどのようにかわかってよいのかわからない様子だったが、子どもたちから誘われ、次第に自分たちから動き出していく姿が見られた。

子どもたちに親しまれている絵本「まっくろネリノ」「ねずみくんとおんがくかい」「くれよんのくろちゃん」を題材にし、ペープサートを使つての音楽劇を見せてもらった。ブラックライトや巻き絵風など、様々な工夫がされており、子どもたちは楽しいお話と歌に引き込まれ、とても集中して見ていた。また、お話の間には手遊びをして、子どもたちの気持ちを和ませる場面もあり、時間構成に工夫がなされていた。

2, ロボットと手作りおもちゃの製作

平成 21 年 11 月 10 日 12:25～（ロボットを見せてもらい遊ぶ）
平成 21 年 12 月 2 日 12:15～（ロボットを製作する）
平成 22 年 2 月 26 日（手作りおもちゃを製作する）予定
魚住明生先生、三重大学生 7 名～8 名



1 回目は、学生が作ってくれたロボット（モーターで動くおもちゃ）を見せてもらい、実際に触れたり、遊んだりした。子どもたちは興味を示し、次回の製作に期待している様子が伺えた。

2 回目は、学生の援助のもと、子どもたちが様々な材料や道具を使い、「ジェラシックパークで遊ぼう」をテーマに、ロボットを作り、それを動かして遊んだ。年長児は、学生に

教えてもらいながら、自分でワイヤーストリッパーを使って導線の被膜をとったり、半田付けを見せてもらったりするなど、製作過程に大変興味を示し、取り組むことができた。また、ジェラシックパーク（段ボールで作った遊び場所）で遊ぶ場面でも、うまく一本橋を渡らせようと慎重にモーターのスイッチを動かしたり、工夫したりする姿が見られた。年少児は、製作にも興味を示したが、それ以上に自分で作ったおもちゃがモーターで動くことがうれしく、動かすことを楽しむ姿が見られた。



3, 留学生との国際交流

平成 21 年 11 月 2 日 12:50~13:45

平成 22 年 2 月 3 日 12:50~13:45

林朝子先生、三重大学生 21 名（中国・天津師範大学留学生）

1 回目は、まずクイズ形式で中国の紹介をしてもらったり、簡単な中国語の挨拶を教えてもらったりした。その後、仲良くなるために名刺交換をしたり、一緒に中国のダンスを教えてもらったりした。2 回目は、前回にした中国語の挨拶や小さい頃に学んだダンスを思い出して一緒にしたり、中国の遊びのひとつである“羽蹴り”を教えてもらったりし、楽しく中国の文化に触れ、留学生と交流することが出来た。一緒にふれあって遊ぶ中で子どもたちが自分たちから楽しくかかわっていかうとする姿が見られた。



4, 書道体験活動

平成 21 年 11 月 5 日 13:00~13:50

平成 22 年 1 月 28 日 13:00~14:15

林朝子先生、三重大学生 30 名

1 回目は、担当教官にまず、筆で書いた字を見せてもらったり、道具の説明をしてもらったりした。その後、子どもたちは、学生に手順を教えてもらいながら、大きな紙に絵や模様を描いた。うれしそうに筆を大胆に動かせる子、墨をたくさん含ませて描く子、初めての活動にドキドキしている子、手を添えてもらって書き始める子などいろいろな姿が見られた。2 回目は、前回の経験を活かし、4 歳児は絵や自分の顔を描いたり、5 歳児は自分の名前や修了式の時に使う文字を一文字ずつ書いたりした。学生が、丁寧に子どもたちに指導してもらったので、子どもたちは安定した気持ちで体験することが出来た。



5, 未就園児の遊ぶ会（たんぽぽ会）の運営支援

平成 21 年 10 月 19 日~22 年 2 月 1 日

滝口圭子先生、三重大学生の 2~4 年生（3 年生中心）

当園では、月 2~3 回、月曜日の午前中、未就園児（0 歳~3 歳児）が保護者と共に、粘土やままごと、絵画製作、積木、ボール遊びなどをして遊ぶ会を実施している。このような中、10 月より、子育て支援に参加していただいた。

10:00～11:00 までの前半の時間は、親子で遊んでいる様子を見たり、一緒に遊んだりしてもらった。その後、11:30 までの後半の時間は、毎回、触れ合い遊びやリズム、歌、絵本の読み聞かせなど、未就園児の興味や関心を考えながら教材を準備し、学生が中心となって活動内容を立案、指導した。それぞれの学生の意欲的な姿やチームワークのすばらしさ、一生懸命さが感じられた。

たんぽぽ会終了時には、毎回、短い時間ではあるが、学生と一緒に教材研究をしたり、その日の感想や反省、質問等を出し合ったりした。

<成果と課題>

～活動実施項目より～

1、音楽劇の観劇

事前に、学生からの計画書（題材の選択理由やねらい・工夫など）をもとに、打ち合わせ会をもち、子どもの発達やその時期の姿、準備等の確認をし、当日を迎えた。事後の反省では、担当教官や学生、幼稚園教員が気づいたことを話し合い、間の取り方や背景の動かせ方に気をつけること、メリハリをつけること、子どもの声や反応に対応できる力をつけることなど今後につながる話をする事が出来た。

2、ロボットと手作りおもちゃの製作

事前に、学生からの学年別の指導案をもとに、活動の流れや準備、子どもたちの発達やその時期の姿などを確認し、どのように興味・関心をもたせたり、楽しませたりすればよいのか等の打ち合わせをした。事後の反省会では、学生からも、学年による楽しみ方やそれに伴う準備や言葉かけ、援助等の仕方の工夫、時間配分について等の細かな反省が出され、それに基づいた考察など話し合うことが出来た。

3、留学生との国際交流

担当教官と幼稚園教員との事前打ち合わせの中で、留学生が、“日本語を使って、中国文化を伝えたい”“日本の学校や幼稚園を見たい”という思いをもっていることが分かった。そのことを大切にしながら、子どもたちの発達や姿を考慮して楽しく交流できるように話し合った。また、学生を含めた事後の反省会をもつことはできなかったが、事後に担当教官より、学生の感想を聞かせてもらった。学生一人一人が積極的に真摯に取り組んでいたことが分かり、うれしく思った。

4、書道体験活動

毎回、最初に担当教官が導入をしていただいたが、その内容や言葉かけ、子どもの気持ちの受け止め方、返し方など、ひきつけ方がとても上手で、教職を目指している学生にとって大変勉強になったと思う。また、子どもたちの表情や言葉、気持ちの受け止めとい

う点では、学生が子どもたちから様々なことを学ぶことができ、今後に活かしていくことができると思う。

『書道体験』という活動の考え方については、学生の中でもいろいろな受け止め方があり、意見が分かれたようであるが、幼稚園側としては、太い筆で墨を使って絵や字を書く経験は大変貴重だった。今後、書道としての考え方や子どもたちが親しみをもって楽しめる活動としてのとらえ方など、様々な意見を出し合う中で、互いに理解し合えるように取り組んでいきたい。

5、未就園児の遊ぶ会（たんぽぽ会）の運営支援

「子どもと同じ目線に立ち、同じことをすることで、子どもが楽しんでいることが少し分かった」「自分自身が楽しんでいることに気づいた」「保護者から子育ての質問もあったが、知識や経験がなく答えられず悔しかった」「計画通りに進まず、ハプニングもあったが、そのような時も慌てず、その場の状況に合わせて子どもたちに返していけるような力をつけていきたい」等、保育の基本や今後につながる課題を見つけることができたのではないかと思う。その都度、幼稚園側の思いや大事にしていること等を伝えたが、時間に余裕がなく、上手く伝えきれないこともあったと思われる。来年度は、事後反省会をきちんと設定していきたい。

～全体として～

- ・ 普段、幼稚園だけでは出来ない活動をしていただいていたことは、子どもたちにとって経験の幅が広がった。その中で、子どもたちは、いろいろな刺激を受けたり、戸惑ったり、あゆみだしたりするなどそれぞれが自分の力を出し切ることができた。また、私たちも子どもの姿をいろいろな角度からとらえることができた。
- ・ ほとんどの学生は小中学校中心に年齢の大きな子どもとかかわっていることが多い。その中では、言葉や紙面で伝えられることも多いが、幼稚園の子どもたちとかかわる中では、年齢が小さいので言葉では表現しにくい内面の思いをくみ取り、返していくことが多い。それぞれの学生にとって、子どもとコミュニケーションをとることの一番基礎になる体験ができたのではないかと思う。
- ・ 事後の話し合いの中では、活動についての反省で終わってしまうことが多く、子どもたちの気持ちやその時の教師の受け止めや援助などがしっかりと話し合うことができなかった。今後、話し合いを重ねる中で、子どもたちの思いや援助の仕方など共有できるようにしたいと思う。
- ・ 大学の授業の関係で、時間に余裕がなかった。今後、時間が確保できるように考えていくことが大切である。
- ・ 今年度、当園の連携事業は二学期以降に集中してしまった。来年度は、早い時期に話し合いの場をもち、年間計画を立てて計画的に進めていけるようにしていきたい。そして、互いに学び合える場にしていきたい。

3. 南立誠幼稚園

「生き物大好き！」（ザリガニについての話）

7月17日 10:15～11:00

指導者：後藤太一郎先生 教育学部学生1名

参加者：5歳児 25名

子どもたちは、園や園外保育で見つけた虫や小動物を飼育し、その名前や様子、成長の過程に関心を持ち始めている。今回、より生き物を身近に感じ、好奇心を育てる機会として、園でも飼育しているザリガニについて、大学の先生にお話をしていただいた。

まずは、体のことについて、ペットボトルを利用して作られたザリガニの体の中が見える模型を使って教えていただいた。心臓の場所など日頃見えない部分や、足の数え方など新しいことを知り子どもたちは感心した様子だった。

そして、オスとメスの見分け方について、テレビに大きく映し出して教えていただいたり、実物の部分を指しながら聞かせてもらったりした。また、飼う時に気をつけるとよいことを聞き、その後も子どもたちはそのことを思い出しながら毎日楽しんで世話をしている。



本や教師の話では知らなかったことを聞いたり見たりできたこと、また、子どもたちの質問に一つ一つ答えていただいたことで、ますますザリガニへの関心が高まったようである。早速、知ったことを確かめるように園のザリガニを見たり、家の人や年少児に教えたりする姿が見られた。

「三重大大学に遠足に行ったよ！」

三重大大学構内にてどんぐり拾い

10月15日 10:00～12:30

指導者：平山大輔先生、河崎道夫先生、後藤太一郎先生

教育学部学生4名

参加者：4・5歳児 計38名

秋が深まるにつれ、子どもたちは園庭や戸外で、落ちているどんぐりやまつぼっくりを見つけ、

大切に手にしたり、形や大きさなどに興味を持ったりする。今年度、小動物や植物に関心が強い子どもたちの実態からも、公園等を散策しながら、実際に見つけた木の実などの話をその都度聞かせてもらい、子どもたちの興味に応えていきたいと、大学の先生方や学生の方にも一緒に行っていただけよう協力をお願いした。

大学より、構内での散策を提案いただき、例年公共交通機関を利用して行う秋の遠足を「三重大学へのどんぐり遠足」として実施することにした。



バスに乗り、三重大学に着くと、大学の先生や学生の方に案内してもらいながら散策し構内を歩いた。子どもたちは、「大学って広いな」「〇〇もある。すごい」などと、道中、大学の方々と楽しく話しながら歩く先々で、様々な木の実を見つけ、実際に手にしたり、いろいろな名前や、生長の様子を知ったりすることも楽しい様子であった。

今回の遠足では、大学の先生や学生の方など、いろいろな人と楽しくかかわりながら、広い構内で秋の自然に触れ、樹木の果実や種子を取りながら、見たり触れたりして、自然物への興味や関心を深めることができた。学生も子どもたちの目線に立って思いを受けとめ、言葉を丁寧にかけてくれる姿が見られた。

翌日、年長児の中には、大学で見つけたいろいろな木の実を手に、名前を書いて飾る姿があり、そのコーナーは、「どんぐりひろば」と名づけられた。その後も、どんぐりのことを更に詳しく知りたいと図鑑を調べたり、友だちに知らせたりする姿も見られた。後日、子どもたちより、“大学の先生方や学生の方にお礼のお手紙を書きたい”という声があり、一緒に散策してうれしかった思いや、いろいろなことを知って楽しかったこと、もっと知りたいことなどを記したお礼の手紙を書いた。

運動的な遊びに関する研修会

指導者：岡野昇先生
教育学部学生 大学院生
北立誠幼、白塚幼、南立誠幼、教諭

- 10月7日 15:30～17:15 北立誠幼稚園
＜人とのかかわりを中心に＞
- 10月21日 15:30～17:15 北立誠幼稚園
＜物とのかかわりを中心に＞
- 12月15日 16:00～ 三重大学
＜運動遊びに関するカード作成について話し合い＞

○ 1月21日 15:00～17:15 南立誠幼稚園

<公開保育および実技を伴った講話>

現在、子どもの体力低下が問題視されているが、当園においても、幼児たちは、運動的な経験の少ない子が多く、入園するまで公園で遊んだことがない幼児がいたり、園では、外で遊ぶことが好きな幼児たちも家庭ではゲームで遊んでいるなど、コミュニケーション不足や、体を十分に動かしたり、戸外で遊ぶ楽しさを味わったりする事が少ないという現状がある。

幼稚園は、子どもの心や体を育てる大切な場である。体を楽しく動かすことで、自信がついたり、意欲や人とのコミュニケーション力にもつながっていくのではないかと考える。この様なことから、子どもたちに、体を使って楽しむ遊びの経験を十分させたいという思いから、大学と連携をし、まずは教師自身が様々な運動的な遊びを取り入れ、研修してきた。

研修の中では、「子どもが思わず夢中になり体を動かせるような運動」、「ルールがシンプル」、「一人では行えない活動」という視点を持つことが大切であることを学んだ。子どもにとって分かりやすいルールは夢中になりやすいこと、まずは2～3人での遊びを積極的に行うことにより、仲間との距離感や関わり方を学んでいくこと、そういった運動を通して、相手を感じることや相手に任せるという関係を自然に感じられることも知った。

また、物とのかかわりを通して、(運動用具や器具を使って)、子どもが思わず遊んでみたい、自ら関わってみたいくなる環境になっているかを考え、見直していく必要がある。

物と関わることにより、遊びの多様性が出てくるので、教師自身が、物からキャッチできる豊かな心と体、感性などが必要であることを学んだ。

今回の研修の中で、学生とペアになり、グループを作って活動することにより、学生にアドバイスをしてもらいながら、運動の仕方のコツ、力の入れ具合、ねらいとする動きを確認しながら研修することができたように思われる。相手を感じるという部分については特に意識でき、改めて、遊びを通して仲間との距離感、関わり方を学ぶことの意味を確認できた。

教師が研修し、学んだことを幼稚園の子どもたちにどう返していくかがこれからの課題である。研修したことを、幼児の発達や実態などに照らし合わせ、幼児たちが“みんなと体を動かすことが楽しい”と感じられるような活動を意図的に取り入れ、無理のないように発達に見合った形で取り組む工夫をしていきたい。

本園ならではの運動的な遊びの取り組みを始めたところであり、幼児の実態や発達を考えて指導することは、今まだ課題も多い。指導方法などについても、大学の学生、先生方と一緒に考え、具体的な指導方法を教えていただきながら、今後も継続した取り組みを行っていききたいと思う。

4. 栗真小学校

「教育実地研究Ⅰ」を受講している学生との連携

年間を通して各学年の授業時に支援に入っていた。原則として、毎回同じクラスに同じ学生に入ってもらった。大変、真面目な学生達で、授業の前の休み時間に教室に来て、子どもたちとコミュニケーションをとる姿が見られたり、運動場でボール遊びを一緒にしている姿を見かけたりと積極的な学生達でした。

各学年の活動や様子

1年生

主に算数の指導の補助をしてもらった。くり上がり、くり下がり の計算の苦手な児童について個別指導してもらう。問題に対する答えを個々の児童がノートやドリル、プリントに書いた物を教師と学生2人でチェックすることで、すぐに個々の児童のつまづいたところがわかり、指導することができたとし、全員が理解してから次の問題に進むことができた。

その他にも生活科の焼き芋やお楽しみ会でのケーキ作りで、子どもたちの中に入って、焼いたり、作ったりふれあってもらった。休み時間にも外でボール遊びをしてもらったり、子どもたちもよろこんでいた。

2年生

主に図画工作の時間の支援に来てもらっている。図工では、児童一人一人が個性を生かしてのびのびと作品が作れるように、個別支援をお願いした。子どもたちは、親しみやすいお兄さんといった感覚で接しているようで、学生は、一人一人と会話を交わしながら、作りたい作品についていろいろとアドバイスしたり、思いを聞いたりして、子どもたちは打ち解けた雰囲気 で学習できた。

3年生

円のかきかた、正三角形のかきかたなど、個別指導をしてもらった。あまりのある割り算の総復習のプログラム学習において、採点や、間違い直しなどを担任とともにやってもらった。担任が一斉指導する中で、つまづいている子に個別に説明をして、子どもとともに考え楽しく学習することができた。休み時間に、児童の話相手になったり、時間があるときは学級遊びに参加してくれ、仲良くなって、児童は大学生のお兄さんと学習できることを楽しみにしていた。

4年生

主に算数科の授業で、練習問題の採点や間違い直しをする時の個別指導をしてもらっ

る。算数は「できる・できない」の差が大きくつまずき部分も個々ばらばらである。一人一人が理解するには、個別指導が必要で、担任ひとりでは不十分である。これを支援してもらい大変助かった。児童にとってもわからないところを気軽に聞ける存在になっていた。

5年生

主に算数科の時間に支援に入ってもらった。授業では、机間巡視をして、つまずいている子に声をかけ支援をしてもらった。また、計算ドリル等を使った復習では、子どもの解答を見てもらい、間違っている子には、どこで間違ったのか分かりやすく説明をしてもらった。子どもたちに誠実な態度で向かい合っていたことはとても良かった。

6年生

主に算数科に入ってもらい、練習問題の採点をしてもらった。できた児童から採点をしてもらっている間に、教師が個別にわからない児童に指導にいけるので、大変助かった。また、テスト直しのある時間で、教室を別にして直しの必要なグループと必要でないグループとに分けて手助けしてもらったのも大変助かった。

しいのき学級

算数の時間に入ってもらっている。休み時間から積極的にしいのきの児童と関わってもらっており、やる気を感じる。しかし若干過干渉な面が見られた。事前に児童の接し方についての打ち合わせが必要であったと感じた。とても礼儀正しい学生で、最後の日には、子ども一人一人に声かけをしてくれて、児童にとって心に残ったと思う。

成果と課題

概ね、受け入れ側の小学校の方は、大変助かった。学生にとってはどうだったのでしょうか？授業の進め方や関わり方等について、担任と学生との打ち合わせの時間を十分とることなく授業に入り、その時必要とする支援を学生に指示し、動いてもらうという形を取ってきた。が、学生を育てるという意味でも、事前の打ち合わせや進め方等の話し合いが必要であると思う。特に、関わり方に配慮が必要な児童がいる学級では大切になってくると思われる。また、前期後期で学生の時間割と学校側の時間割がうまく合わず、学生が得意とする教科に必ずしも入ってもらえないこともあった。

大学側の学生の人材養成の具体的な道筋や連携校との打ち合わせ等が必要であるように思う。

その他の連携

低学年では、生活で収穫したさつまいもを使い、蒸しパン作りを行った。家庭科の学生5人と教育アシスト1人に各班1人ずつ入ってもらい、児童の支援をお願いした。学生は、

白衣を着て、初めて包丁を持つ1・2年生の児童に手を添えてさつまいもを切ったり、粉をまぜたり、等分にすくい入れるお手伝いをしてもらった。片付けの方も最後まで手際よくでき、スムーズに進めることができた。



中学年の3年生では、パソコンを使つての名刺作りを行った。児童は、自分の写真入りの名刺を作りたいという願いを1学期からもっていた。そこで、大学側との連携で30名以上の学生の支援で各自、お気に入りの名刺ができた。子どもたちは、今までに一度しかパソコンを使ったことがなかったので、どの子も興味はあったが、うまく使えるのか不安な気持ちを持っていた。しかし、一人の児童に一人ずつ学生がつき、やさしく、ていねいに各自の要望に合わせたものを作れるように支援してもらったので、楽しく名刺作りに取り組むことができた。また、教員もパソコンを使った授業実践への意欲を高めた。



高学年では、社会の授業と家庭科の授業で連携の取り組みを行った。

【社会の授業】

- 1 「旧伊勢街道（栗真町屋町）の町並み保存」
- 2 「中国の自然と社会 ウォッチング」

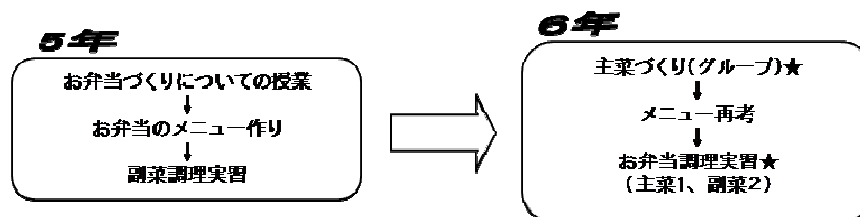
1の授業では、関町の町並みをもとに、授業が展開されていった。学生の詳しい事前調査やていねいな授業展開はよかったが、子どもたちには、提示された資料、説明だけでは関町の町並み保存についてイメージすることが難しく、次の展開へとつなげにくい場面があった。どうすれば子どもたちにうまくイメージさせられるか、より具体的な資料、説明が必要であると感じた。

2の授業では、地図を使って、中国の地形や気候を学び、西部と東部の相違点に気づき、なぜ違いが生じるのか様々な理由を考えた。黒板に書いた地図に子供たちが実際に書き込み、互いの考えを交流することができた。

両方とも、事前の指導案の検討会を持ち、子どもの様子も見にきてもらったので、授業はスムーズに進んだ。教科書だけではできないような授業をしてもらえて、児童にとっては大変有意義な授業になったと思う。

【家庭科の授業】

学生に授業をしてもらうということではなく、5年～6年にわたって“お弁当作り”に関わってもらった。



この学習では、事前に磯部先生に調理実習時の留意点や助言をいただいたり、調理実習の際に家政教育コースの学生4名と教育アシスト数名に支援に入ってもらった(★)。調理するメニューの数が多く、担当教員だけでは目の届かない部分も多いが、子どもたちは困ったときにすぐにその場でアドバイスを受けることができ、スムーズに調理を進められた。また、慣れない揚げ物や調理方法を行うときにも、常に寄り添っていた学生の存在によって安心して調理を行えたのではないかと感じている。

2年間で継続して行っている活動の中で、子どもたちは一人でお弁当を完成させた達成感をもったり、いつも自分たちに料理を作ってくれる人に感謝の気持ちを持てたりするようになった。子どもたちの学びを深めていくために、授業者と支援者が連携し2年間にわたる継続的な支援を続けていくことができたと感じている。

5年 副菜作り



6年 お弁当作り



【連合音楽会への支援】

4～6年生の津市連合音楽会に向けての音楽の授業、休み時間の練習の支援に入ってもらった。教育学部のコースと学年を越えてたくさんの学生が、直接楽器の指導を行ったり、練習を見守り児童たちに感想を伝えたりといった、多様な支援を続けてもらった。また、音楽集会では、児童たちの演奏の他に、教育アシストの学生や吹奏楽団のアンサンブルの演奏もしてもらった。生の音楽に触れ、児童たちは、音楽により関心を持ったり自身の表現活動につなげるきっかけを得たりしたと思う。

また、今年で3年目になるが2月の末の6年生を送る会で音楽家有志による演奏も予定している。

5. 白塚小学校

白塚小学校 永井幸良

1 今年度の取り組み

(1) 特別支援学級での取り組み

昨年度に引き続き、幼児教育科の中西智子教授との連携で、音楽活動「リズム遊び」に取り組んだ。どの子ども、集団活動で相互に学び取り、個々の発達を促す1つの方法として、音楽活動が適していると考えた。

目標としては、次のことをねらっている。

- ①一人ひとりの児童が自分の経験したことで、充実感を得る。
- ②クラスの仲間と一緒に楽しみながら活動する。
- ③できるようになった手ごたえを仲間で認め合う。
- ④特別支援教育研究会の「卒業生を送る会」で発表する。

リズムを打つ打楽器に取り組んだのは、歌を歌うときは、音程をとったり歌詞を覚えたりするのが苦手な子どもが多く、間違えることにこだわり声が小さくなりがちだが、リズムのみの打楽器の場合は、間違えることにこだわるのが少ない。同時に、思い切り打つ腕の動きは、全身の動きであり、気持ちを発散することにもなるようだからである。



中西教授との打ち合わせの中で、子どもたちの興味を引く楽器として、和太鼓（中、小）、波の音が出る手作り楽器、足でもリズムをとる鈴など紹介していただいた。また、楽譜は使用しないで、リズムを言葉で覚え、言葉に合わせてバチを打つと無理なく楽しくできることも教えていただいた。授業にも参加していただき、指導していただいた。



和太鼓、締太鼓、小太鼓、ドラムセット（3種類の小さな楽器のセット）などを用意し、全員が一緒に演奏できるようにし、仲間と一緒に音を出す経験をした。次に、仲間とリズムを揃える方向へと進んだ。特に、初めの1打と終わりの1打は一致するよう意識して練習し、だんだん揃うようになってきた。

拍感覚を体で確認できるバンブーダンスにも取り組んだ。児童の顔の表情や、身体の動きから、全身運動で獲得した拍感覚は、音楽で息を合やす体験であり、友だちと一緒に跳ぶことで音を仲間と共有できたという達成感

を持ったようだ。

特別支援研究会の「卒業生を送る会」をこの練習の発表の場とすることにした。簡単なストーリー（白塚の浜の夜がだんだん明け、子どもたちが元気に遊び始める）を、波の音、太鼓の強弱、みんなで合わせるなど、練習したことを組み合わせて表現した。

今後、貝をこすってかえるの鳴き声を表現するなど、音作りをしたり、音を絵で自由に表現したりする活動も計画している。

（２）教育実地研究

7名の学生が、1年から6年、特別支援学級へ入って、授業を参観したり、学習活動の支援をしたりした。算数・生活科の学習では、個々に声をかけながらみてもらったり、九九のチェックを一緒にしてもらったり、総合学習でパソコン指導や学習のまとめなどで、支援してもらった。算数「重さ」や理科の実験などの活動では、個別に支援が必要な子どもたちに関わって支援してもらえたことはよかった。

子どもたちは、来てもらうのを楽しみにしていて、一緒にはりきって勉強した。また、休み時間にも子どもたちと遊び、積極的に関わろうとする学生の姿が見られ、子どもたちも一緒に遊ぶことを楽しみにしていた。

２ 成果と課題

（１）成果

特別支援学級での取り組みは、新しい楽器・珍しい楽器を紹介してもらうことで子どもたちが興味を持って活動できた。また、打の強弱、速さの変化、交互打ち、最後の1打に気持ちを合わせるなどの指導をしていただき、活動に広がりを持たせることができた。子どもたちの実態を見ながら話し合い、学習を進め、発表する小作品を仕上げることができ、子どもたちも満足感が得られた。

実地研究では、授業の中で子どもに個々に声をかけてもらったり、支援を必要とする子に関わってもらったりしたことは良かった。子どもにとっても、大学生と接する機会をもてたことで、普段経験できないことを経験できた。

（２）課題

今年度は、連携できた活動が少なかった。学校活動の中で、連携できる部分を計画的に組み入れていけるとよいと思う。

実地研究については、授業の補助をしてもらったり、子どもに関わってもらったりしたが、授業の参観に終わってしまうこともあった。また、その時間ごとに入ってもらうので、継続的な取り組みになりにくいということもある。どのように授業に入ってもらうか、年度初めに打ち合わせをする必要があると感じるし、時間割を決定する頃に、学生の来てもらう曜日や時間がわかっていると、それを考慮して時間割が決められるのではないかな。本年度は、各学年に1名ずつの配置としたが、2，3学級を毎週順に支援することになり、3週に1度しか顔を見られない学年もあり、今後検討していきたい。

1. 教育実地研究基礎

今年度は10人の学生を受け入れ、各学級の授業時に支援に入ってもらうことができた。原則として毎回同じクラスに入ってもらい、個別の支援、丸付けや掲示の手伝いなどを行ってもらった。

支援者が増えることで、子どもたちによりきめ細かな指導ができたことや、学生が入ることで、教員にとっても子どもにとってもよい刺激を受けたことが、学校側の成果としてあげられる。学生の中には、特別支援学級に入っていたことをきっかけに、特別支援に関心をもち、後期に特別支援の授業を取るなど、実地研究で経験したことを今後の進路に活かしていた人もいたようだ。

課題としては、昨年度の反省をふまえ、欠席連絡や次の授業の準備物など、すぐに連絡をとることができるよう、担当者とメール連絡をすることにしてはいたが、十分に活かすことができなかった。また、担任と学生が打ち合わせをする時間がとれないので、中身に深まりがなかった。この講座で学生の習得すべき力がはっきりせず、教員側から何をどこまで学生にしてもらうべきなのか、どのように声をかけていけばいいのか、今後考えていく必要がある。

2. 学級活動（親子活動）の取組

昨年度も好評だったPTAの学級活動（親子活動）における連携を、春に呼びかけたところ、保護者からも是非大学の先生にお願いしたいという声があり、今年度は6クラスで協力をお願いした。

～2年 2組・4組 「体ほぐしの運動」～ 岡野昇先生・学生6名



2年生の親子活動であることに留意し“みんなファミリー!!ワクワク枠広げ!”のテーマで、「集合ゲーム」「サークルジャンプ」「びりっ!ズブートキャンプ」を企画していただいた。大勢でしてこそ楽しめる遊びを通して、親子・クラスの枠を超え、心も体も温まり、リフレッシュできる活動を行うことができた。

～4年 2組・3組 「植物について」～ 平山大輔先生

身近にある植物の様子を観察しようということで、身の周りにある植物の「実」の観察を校庭や高田本山で行った。身近にある植物をよく観察すると、見たことのない「実」が

ついていることに気づき、それを採取したり、遊びに使ったりした。最後に教室にもどり、大学の先生に持ってきていただいていた、変わった「実」を見せていただき、説明を伺った。

子どもたちは、今まで気づかなかった植物の特徴に気づき、楽しく採取したり、「実」を使って遊んだりしていた。新しい発見だったようで、夢中になって取り組み、あっという間に時間が経ってしまい残念がっていた。理科的な発見が、今後の興味関心につながるもので、とてもよかった。保護者の方も、子どもたちと一緒に、木の実や葉を採取したり遊んだりすることができ、喜んでいただけた。先生には事前に何度も足を運んでいただき、説明をして頂いていたので、当日どんな動きになるのかが予想でき大変助かった。

～4年 4組 「磁石のおもしろ実験」～ 牧原義一先生

磁石の性質についてのお話の後に、“いろいろな磁石のN極、S極の観察”“パイプ中のネオジム磁石の落下実験”“鉄球とネオジム磁石をぶつけてみようの実験”の3つの実験をした。

各班にわかれて、先生の説明や保護者の人たちの協力をしてもらい、子どもたちが実験をした。磁石の学習は3年生の理科で行っているが、磁石にかくされた不思議さを新たに感じたようだった。また、ネオジム磁石のパワーに驚いていた。驚きに目を輝かせている児童と、それを嬉しそうに見つめる保護者の姿が印象的だった。

～5年 1組 「立体地図作りと火山」～ 荻原彰先生

立体地図作りは、お弁当箱に使われるプラスチックのパックを使い、外側の等高線から一枚に一本ずつ書いておき、それを重ね合わせることで立体的に見える地図を作るというものである。当日は、最初は親子が別々に作り、次に親子で協力してひとつの立体地図を作成した。

火山の説明については、5年生には若干難しいところもあったが、映像を見せていただきながらの学習で、楽しく火山について学ぶことができたようだった。また、立体地図作りはとても意欲的に行っていた。保護者と一緒に何かを作るという経験は普段あまりないようで、親子で相談をしながら楽しそうに作成をしていた。先生には、立体地図作りに必要なプラスチックのパックを大量に準備していただき、とてもありがたかった。



～学級活動の取組における成果と課題～

普段出来ないことをさせていただいたり、教えていただいたりできるということで、今年度も全体的に好評だった。学生が主体となり、活動を進めてもらった取組もあったが、学生にとっても、子どもたちにとってもよい経験となった。学級活動のように、観察や実

験、運動など、活動を伴う時間には、ぜひ学生にも来ていただき、来年度以降も引き続きお願いしたい。

ただ、PTAの学級活動ということで、従来保護者が中心となって活動を計画したり、打ち合わせをしたりしてきた活動であり、来年度以降も担任と大学側が連絡をとっていくべきなのか、保護者に任せることができるのか、またどのように連絡をとっていくのか、本校の課題である。日程調整が難しく、実現できなかった学級もあったことが残念である。

3. 他の連携活動（継続して行っている取組）

～2年生 生活科 「ぐんぐんのびろ」～

1学期から畑で育ててきたサツマイモを収穫・調理する活動を2学期に行った。友だちと喜びを分かち合いながら収穫し、収穫後には、つるを使って縄跳びや綱引きをして遊んだり、リースを作ったりした。また、イモを使って蒸しパンを作った。子どもたちは、家庭科室で調理実習をするのは初めてでとても楽しみにしていたが、磯部先生のご協力のもと学生たちの支援を受け、衛生や安全に気をつけながら、協力しておいしい蒸しパンを作ることができた。完成した蒸しパンは、1年生やお世話になっている先生方にも食べていただいた。学習後に書いた振り返りカードには、意欲的に取り組んだ子どもたちの姿が生き生きと表現されていた。



～世界を結ぼうクラブ～

世界には様々な文化があることを知ることと、外国につながる子どもたちにとっては、母国の歴史や習慣、文化を深く知ることアイデンティティを構築すると同時に、日本の子どもたちに発信することを目標に、昨年度よりこのクラブを行っている。

1学期は、日本の小学校で行っているクラブの様子をブラジルの友だちに紹介しようということで、4グループにわかれて取材をした。この時に、学生にビデオを撮ってもらい、夏休みに編集していただいた。できあがったビデオは、昨年度から交流している“めぐみ学園”に送った。2学期に入って初めてのクラブでは、そのビデオをみんなで視聴することができ、子どもたちも喜んでいて。その後、ブラジルの遊びを楽しんだり、お菓子作りをしたりと、楽しい活動をする中で、学生と子どもたちの距離も縮まってきたように思う。3学期に入り、日本語に入ってきている外来語について、どこの国の言葉かを考えた。次のクラブは、学生の提案で進めることになっている。

ビデオカメラの操作や、DVDの作成など、子どもたちだけでは難しいところを助けてもらったので、大変よかった。子どもと一緒にゲームやお菓子作りを楽しんだり、クイズの時には、子どもたちの考えを聞いてもらったりと、学生が上手に関わってくれている。

本校には、日本語指導の教員がおり、一緒にクラブ活動を指導してきたが、学生にとっては現場で働く教員と関わるができるチャンスである。もっと積極的に質問をしてもらってもよかったと思う。

4. 校内研修の取組

本校は、今年度から「主体的に学び、高めあう子どもの育成 ～学び合いつながり合う授業の創造を通して～」を研究主題に校内研修を進めてきた。初年度ということもあり、教職員間で「学び合い」に対する共通理解を図る必要があった。

そこで、8月4日（火）に岡野昇先生を講師に招いて、「学び合い」の理論や具体的な指導法を教えていただいた。専門的見地からのご指導は、私たちが研究を深めていく上で大変参考になった。

さらに、岡野先生には、授業研究会の助言者として来校していただいた。

1 1月17日（木）6年4組体育科授業研究 題材名「アタック、コーン」

1 1月25日（水）2年3組国語科授業研究 題材名「せいのび」

1 2月 2日（水）1年1組国語科授業研究 題材名「ずうっと、ずっと、大すきだよ」

2月 2日（火）4年1組社会科授業研究 題材名「高田仏だん調査隊」

研究協議会では、「学び合い」を進める上での課題を明らかにしていただくとともに、私たちの話し合いを踏まえたアドバイスをしていただけたので、その後の授業づくりにつなげていくことができた。また、研究協議会の在り方についてもご指導いただき、校内研修会の充実を図ることができた。

～ 6年4組体育科授業研究 「アタック、コーン」

“安心してやってみようとする気持ちを大切にする” ～

大学の専門的立場からの意見をいただきながら、教材の選定、授業の組み立て、指導案検討とすべてに支援いただいた。特に、教材選定の段階では、今までの事例や学生さんたちが考えた内容を複数提示いただいたことで、やってみようとしていること、子どもに学んでほしいことがより明確になっていった。年齢、性別、経験と様々異なる方が一堂に会して率直な意見をいただく機会はなかなかなく、よい条件で授業の組み立てに取り組めた。また、教材、教具についても予算面で支援をいただいたことも連携事業の成果である。



子どもたちの様子にも変化があり、もっとやりたい、体育が楽しめという声や、友だちに応援されたのが一番嬉しいという感想が出てきた。日常では起きない関係を少しでも作り出せたことで、関係も広がったことを今後の生活につなげ大切にしていきたい。また、失敗やミスが起きても、安心して運動に取り組んだり、挑戦したりする様子も見られた。

7. 北立誠小学校

連携担当・大井 雅士

I. 活動概要

北立誠小学校と三重大学との連携活動は、本年度は1年生・2年生・5年生・6年生の各学年において実施された（表参照）。主に6年生と協力しての活動が多く、活動内容は英語活動や環境教育といった、三重大学の学生と児童が協力して実施したものから、小学校の授業を学生が参観し、児童と交流するといったものまで、様々である。

表：本年度実施された、三重大学との連携活動

学期	月日	学年	概要
一学期	5 / 1	6年	※年間活動打ち合わせ
	6 / 5	6年	※初回活動準備打ち合わせ
	6 / 9	6年	※ISO学生委員会と6年生の討議
	6 / 10	6年	大学生と6年生によるオーストラリアについての学習や、オーストラリアの小学校との英語によるテレビ会議の質問作り
	6 / 11	6年	オーストラリアの小学校より教師が来校、交流
	6 / 29	6年	オーストラリアの小学校とのテレビ会議
	7 / 1	2年	大学生による生活科の授業参観、活動の支援
	7 / 6	6年	テレビ会議後の感想意見交換
	7 / 8	1年	小学校と幼稚園との交流事業の参観、大学生との交流
二学期	10 / 26	6年	※ISO学生委員会と6年生の討議
	11 / 5	6年	大学生と6年生で英語によるコミュニケーション
	11 / 19	5年	大学生と5年生で英語によるコミュニケーション
	11 / 19	6年	大学生と6年生で英語によるコミュニケーション
	11 / 21	6年	※北立誠小学校での文化祭にISO委員会のブース設置
	12 / 15	6年	※ISO学生と6年生による町屋海岸清掃と松林手入れ作業
三学期	1 / 22	5年	三重大学において、大学生と5年生で英語によるコミュニケーション
	2 / 17～ 2 / 23	6年	※三重大学での児童ポスター展示
	2 / 19	6年	※三重大学での環境学習の見学
	3月	6年	※ISO学生と6年生による町屋海岸清掃 ※児童の作品をもとに作った看板の設置

※ISO学生委員会との、「環境学習」を通した取り組み。

Ⅱ. 大学との連携活動における成果と課題

ここでは、連携活動を行う中で見えてきた成果・課題について、関わった学年の教師に聞くなどして明らかになったものをまとめていくこととする。

1. 成果

多くの教師が成果として挙げていたのは、大学生が授業の中に入ってくることによって子どもにとっても刺激になるということであった。授業参観に来た学生であっても、授業の流れの中で共に活動することでいい意味での緊張感が生まれ、楽しく活動し、コミュニケーションをとることができた。大学生とともに話し合う機会も多かった6年生は、大学生と協働し、アドバイスを受けることで自分たちだけでは実行の難しい行動も起こすことができた。また、小学生と共に大学生が視点を共有し合うために、小さな一歩…「物事に取り組む際の出発の原点」から考えることができたのも、大きなメリットであったといえる。

2. 課題

成果がある一方、課題や検討を要する点もいくつかあるという報告も受けている。まず、授業参観に来る大学生の数が多く、一クラスに二十人以上の大学生が参観に来るということもあった。あまりにも大学生の数が多いために子どもとの関わりが深まりにくかったのではないかと考えられる。

また、これ以上に早急に検討を要すると言えるのが、スケジュールの過密化である。これは、特に大学生との連携活動の回数が多かった6年生に当てはまる。先に挙げた表を参照すると、実施した活動のうちのほとんどが6年生とのものであり、特定の時期に集中すること多いのが分かる。小学校では大学生との連携活動以外にも様々な行事があり、このように多忙なスケジュールの下では、連携活動での取り組みやその準備が、「子どもたちが学ぶため」ではなく、「連携活動を成立させるため」のものとなりかねない。また、子どもたち自身も連携活動に向けてじつくりと準備をすることができないため、連続して行われる活動に対して、「またか」といった倦怠感を抱きかねないのではないだろうか。

Ⅲ. まとめ

本年度の連携活動は、特に6年生を中心として実施され、内容も多岐に渡るものであった。こういった取り組みの中で、小学生は学校の中で学習するだけでは得られない体験をすることができ、いい刺激になったという活動も報告された。

一方、改善点…特にスケジュールの過密化については、緊急に検討を要すると考えられる。本年度は様々な活動が実現できたが、次年度担当する教師が変われば取り組みに対するスタンスが変わってくる可能性もある。持続可能な取り組みとするためにも、必要以上に小学校教師や児童に負担をかけるような活動の日程を見直すことや、連携する学年を分散させることが必要となってくるのではないかと。

8. 南立誠小学校

南立誠小学校 連携担当 平松 玲子

	活動名	対象	日時	三重大学担当者	南立誠小担当者
1 児 童 対 象	春の遠足	4年児童	4月24日	後藤太一郎先生	福島チヨ子、田中 徹
	生活科秋を見つけよう	1年児童	10月27日	平山 大輔先生	萩 恵子・田中由美子
	火山の立体模型をつくろう	6年児童	11月16日	荻原 彰先生	山本 朝香
	6年家庭科調理実習	6年児童	11月26日 12月3日	平島 円先生	小柴 文香
	音楽科 「ハンドベルとトーンチャ イム」による演奏	2年児童	12月17日	根津知佳子先生	若林 俊子 北村 美樹 松本 靖子
2 P T A 対 象	P T A学年活動 「親子で楽しく取り組める 運動」	3年児童 保護者	10月6日	岡野 昇先生	駒田 秀樹
3 教 職 員 対 象	国語「『話す』『聞く』を中 心に子どもたちのつながり を深める授業づくり」	教職員	7月23日	橋本 博孝先生	駒田 秀樹
	理科教材研究 「豆電球や電池 磁石を使 った実験・おもちゃ作り」	教職員	7月24日	牧原 義一先生	駒田 秀樹
	体育教材研究 「体力の向上や仲間づくり を深める運動」	教職員	7月31日	岡野 昇先生	駒田 秀樹
	保健健康教育	教職員	1月6日 他会議	富樫 健二先生	廣田 尚美

活動名	対象	日時	三重大大学担当者	南立誠小担当者
生活科秋を見つけよう	1年児童	10月27日	平山 大輔先生	萩恵子・田中由美子

子どもたちは、1学期に近くの遊び場へ出かけ、遊びを通して自然と親しんできた。2学期になり、校庭の片隅や遊び場から虫の鳴き声が聞こえたり秋らしい草花が見られるようになった。しかし、子どもたちは、自然のものを使って遊んだり、道具を作ったりすることは、あまりない。

そこで、秋の自然の中へ子どもたちを誘い、思う存分自然に浸らせ、友だちと工夫しながら遊ぶ楽しさを味わわせたいと思った。そこで、津偕楽公園へでかけ、平山先生に木の実の話をしていただいた。



平山先生の話聞く子どもたち



こんな木の実もとりました



斜面でどんぐりを拾う子ども

《成果》

子どもたちは、興味深く平山先生の話聞くことができた。また、学生さんに木の実を採っていただいたり、安全面でも気を配っていただいたりした。

《課題》

木の実を採集する時だけでなく、秋フェスタに向けての各クラスでの制作活動を一緒に入っていたきたいと依頼したところ、学生さんのスケジュールとうまく合わず、お手伝いいただけなかったことが、残念であった。

活動名	対象	日時	三重大大学担当者	南立誠小担当者
春の遠足	4年児童	4月24日	後藤太一郎先生	福島チヨ子、田中徹

春の遠足で大学を訪問し、4つのコース（白ザリガニ、太陽、磁石、結晶）に分かれ、実験や観察をしました。子どもたちは目を輝かせ、楽しく学びました。

《成果》

教材・設備等、小学校現場では不十分であり、大学との連携で様々な体験ができてよかった。



活 動 名	対 象	日 時	三重大学担当者	南立誠小担当者
火山の立体模型をつくろう	6 年生児童	11 月 16 日	荻原 彰先生	山本 朝香



荻原先生の自己紹介が終わった後、スクリーンに映し出された富士山を指差し、「今日は、皆さんが知っているこの山の模型をつくりましょう」という言葉から授業が始まった。子どもたちは楽しみに製作活動に取り組んだ。

まず、配られた等高線を青、赤の色鉛筆で丁寧になぞり、プラスチックにその等高線をネームペンでなぞっていく。1枚書けたら、さらに1枚上にかぶせ順に等高線をネームペンでかいて重ねていく。その作業を繰り返し行う



中、子どもたちからは、「わあ〜」という驚きの声が…。みるみる富士山の姿が立体的にプラスチックに見えた。子どもたちは「先生、富士山ができた。」と嬉しそうに話してくれた。お手軽立体地図でもしっかり地形はわかることを子どもたちは学んだ。

子どもたちはその地形に、大きな谷ができていることに気づき、これが、「大沢くずれ」というもので、大雨により柔らかいところがけずられ、大きな岩が残り、その岩が重みでくずれ、この現象が長い間続いた結果のものであることを説明していただいた。そこで、子どもたちが驚いたことは、このことがずっと続けば、今の富士山は2つに分かれてしまうかもしれない、ということだった。



2時間目に、外国の火山の噴火の様子や、住民の避難の様子を動画で見せていただいた。さらに、日本の雲仙普賢岳の崩れ落ちる様子やそれに伴う土石流の映像。桜島のガスによる爆発的噴火の映像。阿蘇山の巨大火砕流の流れ出る映像を見せていただき、それを見た子どもたちは、火山活動のすさまじさに真剣な様子だった。最後に、「火山は怖いものというイメージがあるが、私たちに自然を与えてくれているものである。火山の恩恵をいっぱい受けているのです。」と先生のおっしゃったことに子どもたちはほっと安心した様子だった。

<子どもたちの感想>

- ・ 私たちの周りには、あんまりこのような山がなくて、山が崩れるところを見たことはなく、火山のことも全く知りませんでした。今日勉強できてよかったです。
- ・ 今日の授業で火山に興味がもてました。火山と地震、どちらを選ぶ？といわれたら私は火山の勉強をしたいです。
- ・ 私がびっくりしたのは、富士山がこのままずっと噴火しないで大沢崩れが続いていくといつか富士山はなくなってしまうということです。自分の子どもや孫にも今のままのきれいな富士山をみてほしいし、日本の代表 Mt, Fuji を守っていきたいです。
- ・ 等高線を使って富士山を作るなんて考えられなかったけど、作っていくうちにだんだんわかってきておもしろいな、と思いました。出来上がった富士山を見て、思わず「すごい」と言ってしまいました。

活動名	対象	日時	三重大大学担当者	南立誠小担当者
6年家庭科調理実習	6年児童	11月26日 12月3日	平島 円 先生	小柴 文香

6年生の子どもたちは、2学期の授業で、給食調べや各家庭での献立調べなどを通して自分の食生活を振り返り、栄養バランスを考えた食生活の大切さについて学習してきた。この学習をもとに、主食・汁物・主菜・副菜を作る調理実習を行った。2回の調理実習当日に、平島先生と研究室の学生(各日3人)に入っていた。

○調理実習1回目…主食(鍋で炊くごはん)・汁物(あげ、わかめ、ねぎの味噌汁)

各班でごはんのみそ汁作りに取り組んだ。事前に学習した決められた作り方での調理であったが、ほとんどの児童が鍋でご飯を炊くことが初めてであったので、「これであっているのか」と迷うことがあった。そんな時に学生からすぐに教えてもらったので、安心して取り組めたようであった。

○調理実習2回目…各班オリジナルの主菜・副菜作り

2回目の調理実習では、事前に班で考えた主菜・副菜作りを行った。調理するメニュー数が多く、担当の教員だけではなかなか目が行き届きにくいこともあるのではないかと考えていたが、学生に入ってもらったことで、子どもたちは困ったときに教えてもらうことができた。また、さまざまな食材を扱う中で、それぞれの食材の扱い方についてもアドバイスしてもらうことができた。

2回の実習とも、大きな失敗やけがをすることもなく、安全に楽しく作ることができた。子どもたちの感想にも、「じゃがいものゆで方を初めて知って勉強になった」「おいしかった」「また家でも作ってみたいと思った」と良い感想が書かれており、充実した実習となった。

《課題》

今回は依頼時期も遅かったため、実習当日に来ていただくことしかできなかったが、可能であれば、計画を立てる段階や、栄養バランスの学習のところから学生に入っていたと、もっと幅広い学習ができたのではないかと考えた。

活動名	対象	日時	三重大大学担当者	南立誠小担当者
保健健康教育	教職員	1月6日 他 会議	富樫 健二先生	廣田 尚美

橋北中学校区では養護教諭および保健主事を中心に児童生活習慣について実態を把握し、実態に合わせて児童、生徒がより健康に過ごせるように保健指導・保健学習を実施していきたいと考えています。富樫先生には橋北中学校区の児童、生徒の実態把握のための生活習慣アンケートの作成や集計、解析について会議にも来ていただきご指導いただいています。また1月6日には三重大大学にて養護教諭を対象に、アンケートの作成から入力方法、集計等について研修会をしていただきました。

今後の取り組み予定としては、生活習慣アンケートからみえてきた児童、生徒の実態に合わせ、富樫先生に助言をいただきながら橋北中学校区の担当で相談しながら保健学習、保健指導に取り組んでいきたいと考えています。

活動名	対象	日時	三重大学担当者	南立誠小担当者
音楽科 「ハンドベルとトーンチャイム」 による演奏	2年児童	1 12月17日	根津知佳子先生	若林 俊子 北村 美樹 松本 靖子

2年生の音楽科で「いろいろな楽器の音を楽しもう」の学習で、ハンドベルとトーンチャイムによる演奏会を鑑賞しました。児童の中には、初めての経験であった子や、今までにハンドベルを鳴らしたり、ハンドベルの曲を聴いたりした経験がある児童もいたりして様々ではあったが、根津先生とアシスタントとして三重大学の4名の学生の方に美しいハンドベルやトーンチャイムの音色を楽しむ演奏を聞かせていただきました。最初は、「ジュピター」の曲で始まり、讃美歌やクリスマスソングなどを聞いたり、崖の上のポニョと一緒に演奏したりしました。ハンドベルは、児童にも簡単に演奏でき、どの子も楽しく生き生きと楽器演奏を楽しむことができました。友だちと一緒に、演奏できる楽しさやハンドベルの音階を体感できる喜びも大きかったようです。あっという間の1時間でしたが、心も体もうっとりとして、ハンドベルやトーンチャイムの音色を味わいました。根津先生には、音楽を通して友だちと一緒に楽しむ良さを伝えてもらいました。心豊かなひと時でした。

《児童の感想》



* トーンチャイムの音は、とてもきれいでした。ハンドベルは、とてもはっきりした音でもとてもひびいていました。

* はじめは、どんながっきで、どんな音楽をするのか楽しみにしていました。見ると、とてもたいへんそうでしたが、聞いていると、とてもきれいでした。

* わたしは、トーンチャイムをえんそうしました。トーンチャイムは、少しおもかったけど楽しかったです。もう一回やりたいです。

* ハンドベルの高い音と低い音のちがいが、よくわかりました。えんそうも、とても音がそろっていて上手でした。



《成果と課題》

児童の多くが初めての経験でしたが、ハンドベルやトーンチャイムを実際にならす体験ができて、とても楽しく活動できました。一回きりでなく継続して体験型演奏会を持ちたいと児童も希望していました。

活動名	対象	日時	三重大学担当者	南立誠小担当者
P T A 学年活動 「親子で楽しく取り組める運動」	3 年児童 保護者	10月6日	岡野 昇先生	駒田 秀樹

3 年生の P T A 学年活動「親子が楽しく取り組める運動」で岡野先生とアシスタントとして三重大学の 6 名の学生の方に楽しい運動をいろいろ教えていただきました。

最初は、「船長さんの命令ゲーム」でスタートし、そのゲームの中で、友だちと握手したり、友だちのお母さん達と握手したり、5 人・1 0 人で手をつないで組を作ったりしました。その次には、できた組で手をつないだまま息を合わせて前後左右に動いたり、引っ張り合いをしたりしました。最後には、参加した保護者全員で人間椅子を完成させ子どもたちから大きな拍手をもらいました。保護者の声援の中、子どもたちも負けじと全員で人間椅子を完成させ、大きな拍手で盛り上がりました。

あっという間の 2 時間でしたが、最初から終わりまで、「誰かと触れ合う、誰かとつながる」そんな活動だったように思います。岡野先生には、本校のキーワード「つながり」を意識した取組をしていただき、親子ともに思い出に残るとともに、つながりを深めることができたように思います。

《保護者の感想》



とても楽しいレクリエーションでした。親子はもちろんのこと、他の子どもやお母さん方とのコミュニケーションもとれて良かったと思います。円になっての人間椅子は感動しました。子どもたちも今回とても楽しんでいたと思います。

子どもたちと楽しく体を動かし充実した時間となりました。多数の保護者の方から久しぶりに体を動かして楽しめたと感想をいただきました。岡野先生が学生さんを連れてきてくださったのも親子ともに好評でした。人間椅子で保護者の結束も深まったのではないのでしょうか。みなさん感激していました。



活動名	対象	日時	三重大大学担当者	南立誠小担当者
国語「『話す』『聞く』を中心に子どもたちのつながりを深める授業づくり」	教職員	7月23日	橋本 博孝先生	駒田 秀樹

本校では、「伝え合い、つながり合い、共に高め合う子どもの育成～ つながろう！ わたし あなた みんな ～」を研究テーマとして学びのつながりを深める研究を行っています。特に、「『話す』『聞く』を中心に子どもたちのつながりを深める授業づくり」を行っていくために、いろいろ指導・助言いただきました。

「つなぐ」という言葉の語源は、「綱」であること、そして子どもの発達段階に応じ「綱」から

「綱」にすることが大切であることをはじめ、人間だけが言葉を認識できる生き物であり、言葉を使うことで、空間や時間を超えることができるすばらしさや子どもたちの言葉の力を伸ばすには、子どもたちの暮らし丸ごと考えていくことの大切さ、「場の共有」がコミュニケーションの前提であり、安心して何でも言い合える空間や信頼感が大切であることを教えていただきました。



後半は、文学教材の読み方について、「大きなかぶ」の教材を2つの出版社の教科書を比較しながら教えていただきました。まず、同じ文学教材であるにもかかわらず、話の表記に違いがあることを知りました。その作品を読むとき、語り手のレベルで読んでいくことが大切であり、そうすることで、その表記のちがいも理解できるし、作品の意味するところも明らかになってくることがよくわかりました。

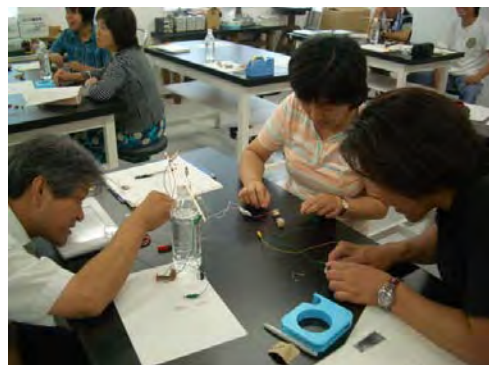
《成果》

理論的な話だけでなく、具体的な例を挙げて説明していただき、大変分かり易く、また、楽しく聞かせていただくことができました。同じ文学作品でも著者・編者によって、その表現や挿し絵、作品自体に秘められた意味まで変わってくるということに大変驚きました。指導書に書かれている意味や指導方法をそのまま子どもたちに教えるのではなく、指導者である教師がしっかり教材研究を行い、自分なりの解釈、そのクラスなりの解釈をすることが必要だと感じました。また、現代の子どもたちの「ことば」のイメージは世代によって変化しているという事実もしっかり配慮すべきだと分かりました。

《課題》

文学作品では「場の共有」や子どもたちの読みにおける「意味づけ」が大切であり、多種多様な「意味づけ」が出ることにより、自分への葛藤や他への葛藤がおこり、そのことでつながりも深まることを教えていただきましたが、これを授業の中でどう展開していくことこそが大切であり、今後の課題でもあると言えます。

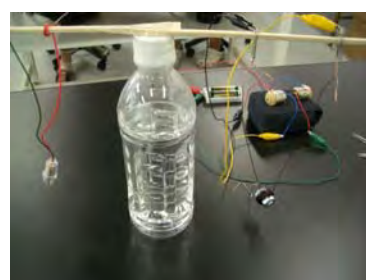
活動名	対象	日時	三重大大学担当者	南立誠小担当者
理科教材研究 「豆電球や電池 磁石を使った 実験・おもちゃ作り」	教職員	7月24日	牧原 義一先生	駒田 秀樹



本校では、「伝え合い、つながり合い、共に高め合う子どもの育成～ つながろう！ わたしあなた みんな ～」を研究テーマとして学びのつながりを深める研究を行うとともに、教師一人ひとりの授業力向上の取組も進めています。今回は、その一環として、楽しい授業を想像するため教材づくりということで「豆電球や電池 磁石を使った実験・おもちゃ作り」を教えていただきました。

まず、いろいろな磁石のN極、S極の観察と言うことで、実際にいろいろな磁石を使ってN極、S極を確かめました。その方法の一つとして、「メモレBR」という道具を使うと板磁石などのN極、S極の様子がよくわかり、より磁石の不思議さを伝えることができると分かりました。

次には、電流と磁石の相互作用と言うことで、電磁石を実際に作りいろいろ体験することができました。市販のセット教材ではなく、ペットボトルや割り箸、ゼムクリップなど身近な道具を効果的に利用することで、実験が容易になり分かり易くなることを体感することができました。実験を進めるにあたっては、実際に子どもがつまづきやすいところや成功のこつ、うまくいかなかったときの検証の仕方や直し方など、いろいろアドバイスしていただきました。



ネオジム磁石を使った実験では、結果を予想することが難しく、その結果にみんなが驚きました。磁石と電流の不思議を体感した一瞬でした。

《成果》

教える側の準備の大変さから「実験はめんどくさい」「できるだけ簡単な実験で」「師範実験で」と考えがちですが、今回実験する側で研修をさせていただき、予想したり、仮説を立ててみたりして結果がどうなるかのわくわくする気持ちや、上手くいったときの達成感、上手くいかなかったときにいろいろ工夫して追求したりする楽しさなどを改めて感じることができました。子どもたちの興味・関心を深め、科学的な思考力が高まるような実験を授業の中でできる限り多く実施していく重要性を強く感じました。



《課題》

身近な道具工夫することにより、楽しく分かりやすい実験ができることを教えてもらいました。しかしながら、準備が教師の大きな負担になっているのも現実です。設備や人的配置の充実とともに、負担にならないような工夫や手だてが必要だと感じました。

活動名	対象	日時	三重大学担当者	南立誠小担当者
体育教材研究 「体力の向上や仲間づくりを深める運動」	教職員	7月31日	岡野 昇先生	駒田 秀樹



本校では、「伝え合い、つながり合い、共に高め合う子どもの育成～ つながろう！ わたし あなた みんな ～」を研究テーマとして学びのつながりを深める研究を行うとともに、教師一人ひとりの授業力向上の取組も進めています。今回は、その一環として、子どもたちの体力の向上を図るとともに仲間づくりを深めるための運動やゲームを取り入れた楽しい活動を教えていただきました。

まずは準備運動、2人1組になったの体ほぐしの運動、一見マッサージのようにも見えますが、ほぐす場所や力の入れ加減など相手の表情や声など常に相手の様子を意識しながら行うことが大切です。次には、2人1組や3人1組になってタイミングを合わせたりする運動をしました。呼吸を合わすことや相手を信用して自分の体重を預けることなど、簡単そうでなかなか難しかったです。普段の体育では、全体で準備体操を行っても、一人で体を動かすことが多かったように思います。「つながり」を大切にするのであれば、できるだけ相手を意識した運動や取組を行い、その中で相手を知り、相手を思いやる気持ちなどを育てていくことが大切であることを教えてもらいました。「とっさの出来事」「犬のしっぽとり」「子とり鬼ごっこ」など、その後の瞬発力やバランス感覚を養う運動や調整力を養う運動、跳力や走力を養う運動を実際にやってみましたが、どの運動も個人でなく、常に人との関わりながら活動するものでした。

《成果》

2時間の研修会ではありましたが、参加者全員が



つつい力一杯体を動かし、気持ちのいい汗をかくことができました。岡野先生には、本校の研修の取組も理解していただき、「つながり」が根底に感じられる研修会を進めていただけました。普段の子どもたちの授業においては、教師が目標や目的をしっかりとち、子どもたちが楽しみながら、結果としてねらいとする力が付くような活動をさせていくことが大切であることがよくわかりました。

9. 西が丘小学校

中川 弘子

今年度から大学との連携ということで、こういった活動ができるのか考え、各学年から希望をあげ実践を試みた

3年生の豆腐づくり

三年生は、総合の学習で大豆を育ててきた。大豆が豆腐やしょう油や味噌などになることなど調べ学習を中心に学習してきた。そこで、子どもたちに体験活動をさせたいと考え、豆腐作りをすることを計画した。ミキサーにかけたり、決められた温度まで上げたり、また、熱い豆乳を勢いよく流し込む作業があったり、三年生のみでするのは、不安な面があった。そこで、三重大大学の磯部由香先生の指導のもと、大学生に来ていただき、取り組むことを計画した。

大学生から教えていただいたり、手伝っていただいたりして、どの班も出来立ての手作り豆腐をおいしくいただくことができた。豆腐の試食中も、大学生といろいろ話ができ、子どもたちは大変楽しく過ごすことが出来た。

子どもたちにとっては、担任以外の大人との活動で、刺激を受けて良かった。

2月中旬に大学の牧原義一先生の指導のもと、じしゃくのおもしろ実験を予定している。



お豆腐づくり

5年生の小学校における外国語活動について

子どもたちは、ALTの先生と共に外国語活動を楽しんでいる。外国語活動を通して言葉が通じる喜びを一人ひとり感じてほしいと日頃から思っている。また、英語がツールだと、男女関係無く話すことも出来るので、出来る限り多くの機会設定し、話す活動を取っている。コミュニケーション能力を育てるには、より多くの通じる喜びが感じられる体験を与えていくことが大切だと考える。

そこで、大学の荒尾浩子先生の指導のもと大学生に各クラス4名ずつ入っていただくことにした。子どもたちは、初めて出会う人ではあるが、恥ずかしそうにしながらも、自信を見せながら、大学生に英語で話しかけていた。より多く、より長く話す機会を持つこと

が出来たことは大変良かった。コミュニケーションの相手として、英語を学習している大学生さんは、大変意義深く、子どもたちは自分の言葉が通じた喜び、正しい発音での会話を楽しんだ。また、大学生から英語の楽しさを語ってもらう時間をもつことにより、より一層興味を持つことができた。大学生にあこがれを持ち、努力をしていこう、伝えるために外国語を学んでいこうという気持ちを持つことができた児童が多かった。

問題点として、大学生の授業時間と小学校の授業時間と合わず、日課を変える必要があった。



外 国 語 活 動

5 年生の理科実験

5年生のPTA活動として、親子での理科実験を計画した。この活動は数年前から行っていて、理科離れが言われる今日、楽しく学べるという実験は、子どもたちに興味をもたせるのに大変役立っている。大学の荻原彰先生・平賀伸夫先生・後藤太一郎先生に授業の企画や授業を進めていただいた。テレビでしかできないルミノール現象などを実際に自分で体験できてとても興味深そうであった。

4クラスあるうえ、保護者もみえるので、会場が十分取れず、音の実験と中電が1つの会場となり、聞こえにくかったという反省は残った。

{子どもの感想}

私は、今までやってきた学年活動の中で、一番おもしろかったと思います。やった事があるのは、3つありました。やったことがなかったのは、指紋の勉強です。今日やった中でも指紋が一番楽しかったです。私は、粉を振り掛ける方でした。初めてやるので、少しワクワクしました。やり方があまり分からないので、こすっていたら大学の人たちが「回しながら粉を振り掛けるみたいにやるよ！」と教えてくれたので、やってみると指紋がくっきり見えておもしろかったです。理科はあまり好きではなかったけど、この学年活動をして、理科がとても好きになったので、これからは。進んで理科の勉強をしようと思いました。こんなに楽しくできた学年活動は、大学生さんのおかげなので、すごく感謝しています。



理科実験

6 年生のお弁当作り

中学生になると、給食がなくお弁当を持参することになる。そこで、お弁当を自分で作る体験をすることは、自分で作ってみようとする態度が育つとともに、お弁当の量や彩りや味付けなどを体感してみることはたいへん意義深いと考えた。子どもたちは、今までに調理実習はしているが、みんな決まった手順で決まったものを作るだけで、自分たちで調理名から、作り方、量を考えるのは始めてだ。

そこで、大学の平島円先生の指導のもと大学生の力を借りて作ってみることにした。お弁当を作る上で、考えなければいけないことや工夫は事前に家の人に聞いてきてくることにした。始めに、お弁当作りは、量・栄養面・作り方など考えて作らなければいけないことなどを話し合った。その後、料理名を考え、その材料の栄養のバランスや分類の仕方など大学生に教えていただいた。今まで、みんなで同じものを作っていたので、班で自由に考え作ることには不安があったが、1つずつアドバイスをいただきながら考えていくことができた。子どもたちは、自分の担当のところは、家で作ってみたり、レシピを家の人に教えてもらってきたりした。しかし、実際に作ってみると、切り方だったり、ゆで加減だったり、細かい一つ一つにつまずくことがあった。

子どもたちは、一緒に作っている大学生に味付け・調味料・切り方・ゆで方・焼き方・お弁当の詰め方など、その場その場でほめてもらったことが、とても嬉しかったようである。なにより失敗せずにすんだことが、自信になったし、間違えないかハラハラしていたのが、大学生がいてくれるので心強かった。

今回があるから、すべてできるということではないが、自分たちだけでやったという自信にはなったと思うし、またやってみようという意欲付けにはなったと思う。作った後の感想で、いつも作ってくれる親に対して感謝の気持ちや手際よくやっていることに対しての気持ちを書いている子もいた。



献立作り



お弁当作り



できあがったお弁当

成果と課題

子どもたちにとって、大学生がそばにいてくれることで、分からないことをすぐに聞くことができたり、作業の面で、不安なところを助けていただけたりと大変心強かった。大学生に教えていただいた実験は新鮮で楽しい経験をすることができた。

学生にとっては、現場で実際に子どもと触れ合い子どもの実態を知ることが、実践力を高める上で、効果があったと思う。

しかし、大学側との打ち合わせをする時間が少ないことで、大学生の子どもとの関わり方や支援の仕方がはっきりしなかったこともあった。そのため、学生にとって十分に学ぶことができる場にならなかったこともあった。また、大学生の授業時間と学校の授業時間がうまく合わずに、授業の途中で帰ることになったり、休み時間から授業を始めたというところもあった。

電子黒板は、大変役立ち、いろいろな授業で活用しつつある。また大学からいろいろな活用方法を教えていただけるとありがたいです。

創造性や社会性を育む教育活動の充実について

— 三重大大学教育学部との連携による多彩な教育活動から —

1 三重大大学との連携による教育活動のねらい

社会の成熟化に伴い、核家族化や少子化、さらには情報化の急速な進展などにより社会環境が大きく変化し、今日では子どもたちが地域社会と関わる機会は確実に減少している。

そのため、地域との関わりの中で自然に身につけてきていたことができず、子どもたちのコミュニケーション力や社会性の低下を招いていると感じられる。

そこで、本校では、実社会で求められる基礎的な社会人としての諸能力を育むために、地域社会や地域の高等教育機関等の教育力（三重大大学教育学部の「大学教育・学生支援推進事業（隣接学校園との連携を核とした教育モデル）」を活用し、教育活動に積極的に導入するとともに、さらに激変していく社会に柔軟に対応し、創造的に物事を考え、主体的に行動できる「生きる力」を涵養していこうと考えている。

2 平成21年度の具体的取組内容

(1) 基礎・基本の定着を図る教育活動の取組

① 数学科での学習支援

三重大大学教育学部の学生が指導アシスタントとして生徒の様子を見ながら演習問題に赤ペンで個人支援を行う取組や授業で理解できない、疑問に感じたことなどがある生徒にたいして個別指導を行うことで基礎学力の定着を図る取組を行った。また、授業後、大学生にフィードバックシートを毎時間記入してもらい、よりよいアシスタントの活用法を見つけるための検証も行った。

さらに、三重大大学教育学部数学科准教授を講師に招き、教員との合同研究会を開催した。その中で分かりやすい授業の実現のために授業の進め方の工夫、教具の使い方や身近な問題に利用できること等、教科内容が生徒のより興味や関心を抱けるような支援方法を検討し、それを基に教科担当教員が授業実践を行っている。

② 理科での学習支援

平成21年度も1年生の理科の時間に三重大大学教育学部の学生が、基本的な学習内容の理解と観察や実験の支援を行った。中学校に入学した1年生にとって観察や実験は、興味や期待が大きい反面、扱ったことのない実験器具などに対して不安も少なからずある。そうした中、顕微鏡を使った観察やガスバーナーを使った内容をスムーズに行えるようにするためには、複数の支援者が必要になってくる。

1月には大学生が中心となって、溶岩の粘りけを小麦粉を使ったモデル実験を行った。また、常に3名から4名の大学生が各班の実験テーブルを担当し、安全面の管理と実験が予定通り進められているか等の確認をしている。さらに、わからないことや疑問が生じた時には、すぐに対応できる体制となっているため、生徒たちも安心して授業が進められている。

③ 理科と家庭科のクロスカリキュラム

この学習は、事前に学習した内容をもとにして、魚類であるニジマスにも自分たちと同じような消化系、呼吸系、神経系があることを確認する学習活動を通して、生きた生物を解剖することで正しい生命観を身につけることができる。これは、写真や図解による学習形態で得られる知識を超えた成果が得ることができる。

また、解剖で使用したニジマスはその後ムニエルに調理され、残さず食べることで「命をいた





だいている」という食育の基本を学ぶことにもつながる。特に現在の日本人の食生活は、外食・コンビニ食などの利用によるバランスを欠いた食生活、肥満や生活習慣病等の原因等の問題に対して、中学生の時期から食事についての正しい知識を身につけ、

主体的に食材を選ぶ力と自分で食事を整える力が必要とされている。学校での調理実習は、作ることの喜びや食べる楽しみを味わうとともに、自分たちの日常の食生活を見直したりするうえでとても意義がある学習活動のひとつである。

この理科と家庭科のクロスカリキュラムでは、三重大学教育学部の理科及び家庭科の教授に加えて、大学生や大学院生が各実習テーブルを担当し、実習内容の手順やポイントを詳しく説明する等の支援を行い、生徒の学習効果を高める取り組みを行った。



④ 社会科での学習支援

夏休みの自由研究のテーマを考える学習活動において、大学生がコーディネーターとなって班別の課題学習を支援する学習形態を実施した。自由研究のテーマを考える際、生徒一人では、偏ったアイデアや狭い範囲で物事を考えてしまいがちとなる。

そこで、班別学習で、クラスメイトのさまざまな意見や年齢の違う大学生からのアドバイスを得ることで、幅広いものの見方や考え方が芽生え、自分一人では思いつかなかったアイデア基にテーマ設定することができた。生徒は大学生の自分の自由研究の体験談や失敗談、自分の足で現地に赴きその土地の雰囲気を感じるものの大切さなどを聞き、歴史や産業等に興味や関心が高まり、自由研究に対して前向きに取り組もうとする気持ちが高揚され、実際に体験したことをまとめた、生き生きとした自由研究がたくさんつくられた。



⑤ 音楽科での学習支援

音楽の授業では、音楽祭の合唱コンクールに向けて三重大学教育学部音楽科の学生がパート練習や合唱練習の支援を行っている。音程の確認だけではなく、発声方法や音楽の表現方法など専門的に学べる時間が増えたことや、声楽を専攻している学生の歌声を間近で聞く機会が増えることで、生徒は年々コーラスへの取組姿勢が意欲的になってきている。また、学生が支援するクラスを固定することや、同じ学生が同じクラスに学習支援に入り、継続した指導ができるように日程をやり繰りするなど支援体制を強化した。



⑥ 体育科での学習支援

昨年器械プログラムである「ラート」を全国で初めて、三重大学教育学部の体育科と指導案を何度も検討し、その効果を検証するために中学校の授業カリキュラムの中に導入した。

生徒の反応は「これ何?」「どうやってするの?」と、今まで見たことも、触ったことも無い器具(ラート)にとっても興味を示し、「できる」「できない」という先入観なく、意欲的に取り組む姿が多く見られた。また、「ラート」は、個人個人のスキルの上達以外に、生徒同士の助け合いや仲間作りといった内面的な成長が多く見られた。特に「達成感を味わう」「グループ活動で高めあう」など授業で大切にしたいことをたくさん実感することができ、生徒も「もう一度やってみたい」など前向きな姿勢が見られた。



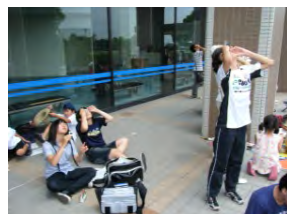
⑦ 文化祭 合唱コラボ「ジョイントコンサート」

文化祭として各学級の合唱、吹奏楽部の発表、三重大学教育学部音楽科の合唱発表を同時に三重大学の大ホールを借りて行った。大ホールを会場にして合唱コンクールを開催できることは、音楽設備の整った大舞台で発表する喜びや緊張感を体験したり、大学生の本格的な合唱を鑑賞できることは、音楽の学習目的を効果的に達成できるものである。



⑧ 大学教授による理科の特別授業

本年度夏休みに、三重大学教育学部において、大学教授による理科の特別授業を行った。「日食を観察しよう」「細胞の観察と顕微鏡の操作」「化学変化とエネルギーの移り変わり」の3講座に理科に興味ある生徒（1講座3人ほど）がもっと専門的に学習したいという希望のもと、自主的に参加した。普段中学校で学ぶ内容より専門的な学習内容を高性能の観測器・計測器を活用しながら、少人数で指導してもらい、詳しく理解することができた。生徒も大学での学習ということもあり、よい緊張感に包まれ意欲的に学習することができた。



（2）創造性を高めるキャリア教育の取組

起業教育「会社をつくろう」は、三重大学教育学部の山根教授が開発した学習プログラムで、学校教育と実社会とが密接な関係性を持つことを実感させる内容である。その特色は、地域の特色や地域課題を考え、その課題解決のために地域の中で実践する活動をととして、創造力やチャレンジ精神、コミュニケーション力、チームワーク力等の必要性を実感するものである。

平成21年度は、その成果を発表する場として、11月8日（日）に開催された「一身田寺内町まつり」のメインストリートに24グループが店舗を設営し、「環境・エコ」をテーマに各グループが考案したオリジナル商品を販売した。生徒は販売活動を通じて地域の方々とのコミュニケーションを図るとともに、地域の一員として生徒自らが課題解決のために主体的に行動を起こすことの重要性を実感することができた。



また、ことの活動に対して多くの保護者も参観し、生徒たちが作った商品の完成度の高さやアイデアの豊富さ、一生懸命に取り組んで姿を見て、わが子の成長ぶりを実感できたという感想も届いており、地域の中での教育の効果を広報していく上でも大きな成果が上げられている。この販売活動で成果をあげた上位3グループは11月23日（月）に京都大学で開催された「バーチャルカンパニートレードフェア2009」に出場し、京都工業会賞（中学生部門第2位）となり、参加した生徒も継続して取り組んできた活動に対する評価を受けたことにより、達成感・充実感を得ることができた。これまでの活動には、昨年度の取組に加えて、三重大学教育学部社会科教室の学生がアシスタントとなり、金融教育の視点を取り入れたトレーディングゲームを行うことで、経済・流通・経営などについてポイントを抑えることができた。

平成21年度の連携についての総括

(1) 基礎・基本の定着を図る教育活動の取組について

大学生アシスタントは、学習課題がスムーズに進められなかったとき、気軽に相談できる存在として、生徒はよく声をかけるようになった。こうした人的学習環境の整備が、生徒の学習に対する興味や関心を高めることや基本的な学習内容の習得につながってきている。

また、教師にとっても大学との連携等により、先進的な授業を展開していくことが教師の資質向上にもつながり、ひいては生徒の興味や関心を引き出す授業へと発展している。教師自身が楽しく、また興味深く授業を進めることが生徒にやる気へと反映している。そして、こうしたネットワーク型授業に多くの教員が取り組むことで、担当教科が異なる教師同士でも指導のポイントや外部人材の導入の仕方などの工夫について議論が進められ、関連しながら集団としての教師力が高まっていく。

(2) 創造性を高めるキャリア教育の取組

生徒のほとんどが会社の経営の難しさを体感し、会社や仕事が単なる「お金もうけ」でなく、社会貢献であるという認識が深まった。また、課題を克服するには、無から有を生み出すことが求められる。様々な情報を収集したり、コミュニケーションを重ねたり、計画立案や実践を試行錯誤しながら取り組むことを通して創造性を高めることができる。こうした失敗を繰り返すことで得られる様々な事柄が大切であることを実感することができた。起業精神を獲得するには、チャレンジ精神を欠く事はできないということを実感することができた。

(3) 教育実践発表会からの検証

【授業公開について】

どの教科においても特色ある授業をしっかりと準備をなされ、地域の方や生徒アンケートでも好評であることを示唆する結果が得られた。また、多くの来校者があり、一身田中学校が目指す教育を広報することができたとともに、地域の専門的な知識や技能を有する方々が授業の中に入ることの有効性を理解してもらえらる機会となったと思われる。

さらに、どの授業においても実社会で必要とされる内容や現代の社会問題を扱ったものもあり、学校教育の延長線上に社会が存在するものであるというキャリア教育の視点のもと、教師一人ひとりが工夫を凝らして授業を進めることができた。

【全体発表について】

生徒が主体となって自分の学校の取組を紹介できたことで、改めて自分の学校をみつめなおすとともに、学校での学習活動の狙いを理解することができたように思える。

また、学年ごとに実演や映像で自分の取組を多くの人たちに説明することは、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力の向上につながっている。短い時間の中で、集中して何度も練習を重ねてきた結果、全体を通してスムーズに表現でき、取組がわかりやすくまとめられていた。

さらに、生徒たちにとって他学年の学習活動を知ることができたことは、3年間の一身田中学校の教育のめざすところを把握でき、自分の学校にあらためて誇りを持てる気運が高まった。そしてなにより、日頃の取組があるからこそ充実した内容で発信できたと感じている。すべての発表において、時間的な負担感を上まわる充実感があつた。

1 1. 橋北中学校

① SSS (サタデー ステップアップ スクール)

5年前から生徒の学習意欲を活かした土曜日の過ごし方を支援する取り組みとして、数学と英語の学習支援を実施している。ボランティアの大学生に、宿題や各自の教材等で分からないところ等を質問することで課題を解決していく。

○ねらい 学習意欲のある生徒の学習機会を確保し、一人ひとりの学習進度に応じた助言を行うことで、基礎基本の定着や発展的な学習を支援する。

○実施期間 6月、11月、12月、1月、2月 (合計17回予定)

○実施日 毎週土曜日を原則とする。土曜日が祝日や夏季総体等の行事と重なる場合は開校しない。

○開設クラス 各学年1クラス(定員はそれぞれ40名を限度とする)

○時間	8:30～9:20	1年英語	
	9:30～10:20	2年英語	1年数学
	10:30～11:20	3年英語	2年数学
	11:30～12:20		3年数学

※原則として開校時間には部活動を実施しない。大会等が行われる場合はこの限りではない。

○今年度の参加人数 1年23人 2年12人 3年9人

○生徒の感想より

- ・ わからないところがあれば、優しく教えてくれる。
- ・ 土日の休みに勉強をする機会が増えた。
- ・ 今までわからなかった問題がわかるようになった。
- ・ テスト勉強の仕方などを教えてくれた。
- ・ 勉強時間が増えたとし、宿題も終わり、提出物がはかどる。
- ・ 朝早く大変だけど頑張った分だけ自分に返ってくるので、これからも頑張っていきたい。
- ・ 英語や数学以外にも勉強できるようにしてほしい。

② 骨密度の測定(保健体育科)

<はじめに>

近年、「メタボリックシンドローム」なる言葉で知られているように、体型比に対する過体重が生活習慣病の一因となることが指摘されている。また、10代から20代の女性を中心としたやせ志向も今後の健康状態を損なう危険性があると懸念されている。特にやせ志向による無理なダイエットは本人の健康状態のみならず、低出生体重児など次世代の子どもたちへも影響があるとされている。

このような状況の下、子どもたちに適正な体型認識を持たせ、健康増進三大要因である運動・栄養・休養を通して、望ましい健康状態を維持、管理させていくことは学校期を終えた後も重要な課題であると考えられる。

そこで今回、生徒の体型に関する認識と体組成計・骨密度計を用い、からだの客観的情報を伝える中で、個の健康観を確立させることをねらいとして大学との連携を行った。

これまで客観的に自己の健康状態を見つめる指標として、新体力テストを利用してきた。体力要素の平均から自分の優れている部分や弱い部分、また、バランスを欠いた発達をしている部分、さらには前年度からの向上度合いなどをすることで、以後の健康（体力）課題を明らかとしてきた。しかしながら、この指標は筋力を最大限に発揮することで得られる情報であり、情報の質および量としては十分なものではない。同様に身長や体重などの体型指標も時系列を追った発達度合いはわかるものの、質的な部分を検討する上では弱いところがある。その意味で、今回の連携では、質的な部分の補完の意味もある。

<測定の実際>

○測定期間 平成21年9月 第1および第2週

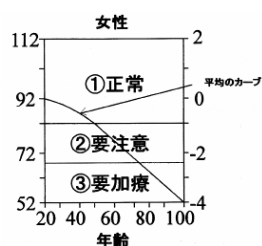
○測定対象 橋北中学校 第1学年～第3学年 男女

第1学年 M (n=90) F (n=72)

第2学年 M (n=80) F (n=64)

第3学年 M (n=81) F (n=90)

○測定項目 体重、体脂肪率、脂肪量、除脂肪量、筋肉量、体水分量、体水分率
BMI、推定骨量、スティフネス値



骨密度測定



調査用紙記入



体組成測定

<測定後の経過>

測定結果をもとに事後指導をする段階にきているが、単元の都合上学年末に実施する予定である。それゆえ、現段階では報告できる内容はない。

③ ラート研修（保健体育科）

<はじめに>

学習指導要領の移行、転換時期にあたり、中学校では「武道」の取り扱いについて議論が集中しがちであるが、「体づくり」もその内容を巡り注目されなければならない。

そのよりどころとして、運動の発生または成立する（している）関係に着目してみると、これまでにない切り口から検討することができる。

これまで取り組んできた運動、動作、その複合体であるスポーツ種目は「働きかける」ことで得る感覚が主となる。しかしながら、拮抗する関係にある「働きかけられる」ことに注目してみると、その体験や経験は十分とは言えない。

そこでラートを導入し「働きかけられる」感覚に取り組みたいと考えている。

<教員研修>

来年度からの本格的実施にあたり、本年度は先行実践をしている一身田中学校の研究授業（11月）と実技研修（12月）を行った。



④ 調理実習における大学生・大学院生との連携（家庭科）

●はじめに

本校では、技術・家庭科（家庭分野）において2年生で食生活に関する内容を取り入れている。生徒たちは、食生活にも調理実習にも関心はあるが、日常生活における調理体験は少ない。授業を始める前に行った食生活に関するアンケートでは、次のような結果を得ている。

「自分で料理をすることがありますか？」

よくする 19% ときどきする 39% あまりしない 42%

「弁当を自分でつくったことがありますか？」

ある 22% ない 78%

週1時間という限られた授業時数ではあるが、生徒たちの調理体験を増やし、技能を高めることを目指して調理実習の時間をできるだけ確保したいと考え、これまでも50分で完了できる調理実習を実施してきた。しかし、実際は50分間で作り、試食し、後片づけまでしようとするとなかなかハードな過程となる。慌ただしく追い立てられて終わる調理実習から、より効率よく技能や実践力を身につけられる調理実習となることを目指して、大学との連携を試みた。

●授業の実際

2学期に2年生4クラスにおいて3回の調理実習を行った。

- 第1回 豚肉のしょうが焼き、もやしとピーマンのソテー、わかめのスープ
- 第2回 手開きにしたいわしのかば焼き、ほうれん草のごま和え
- 第3回 手作りりんごジャムを使って揚げ春巻き、紅茶

このうち、第1回と第2回の調理実習のうち、可能な時間に大学生、大学院生による実習補助を取り入れた。

大学生、大学院生には事前に献立は伝えた。調理手順はその場で確認してもらい、6つの班に分かれている生徒たちの各班を担当教師とともに巡視してもらった。生徒たちは、事前の授業で手順や注意事項を確認しているが、実習中是一つひとつの作業について質問が続出する。その生徒たちへの対応をしてもらうことができた。この連携により生徒の作業が円滑に進み、失敗も少なく、安全性も高めることができた。

●今後に向けて

調理実習は、上記のような課題の他にも教師側の事前準備や、実習中の安全確保などさまざまな課題がある。担当教師以外に複数の指導者が関わることで、安全で充実した調理実習となる。学生の授業との連携をはかりながら今後も計画的に進めていきたい。

⑤ コーラスコンクールの実施

10月26日（月）に三翠ホールにて行われる予定であった。そこでは、音楽科の学生による合唱も予定されていた。残念ながら前週よりインフルエンザによる学級閉鎖が出て、その後も患者が増えたため延期となってしまった。その後11月13日（金）に学校の体育館にてコーラスコンクールが行われた。三重大音楽科の兼重直史先生から講評と音楽にかかわるお話を頂けたことは、生徒へ大変いい刺激となった。

来年は、三翠ホールにてコーラスコンクールを行い、音楽科の学生による合唱も是非聴かせてもらいたい。

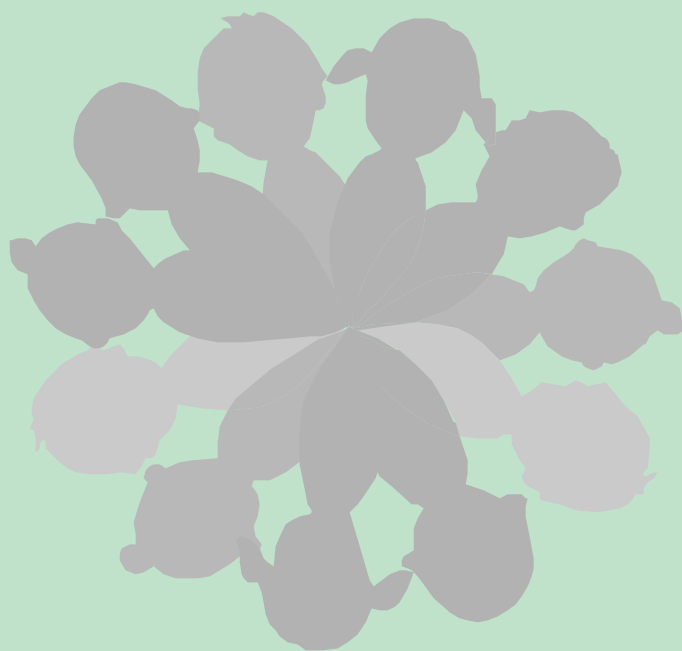
⑥ 百人一首大会の実施

1月22日（金）に、2年生において文化委員を中心に百人一首大会を実施した。体育館で、各クラスを3人から4人の10グループに分け、合計40チームで源平合戦を行なった。国語科の学生2名に、開会式での自己紹介後、2試合で交互に札を読んでもらった。閉会式においては、百人一首に対する思いも聞かせてもらった。「恋の歌もたくさんあるので、しっかり内容を理解してみしてほしい」などの言葉をもらえて大変よかった。

課題としては、今回、学生に来てもらうことが大会直前に決まったため、当日打ち合わせだったので、時間配分やルールや会の運営についてきめ細やかな打ち合わせができなかった。読むスピードや間の取り方についても、その都度要請していたので、大変だったと思う。次回は是非、大会前の各クラスでの練習にも参加して、生徒の様子も見てもらいながら交流を深めた上で、当日参加してもらえとなお生徒たちも張り切って大会に臨めると思われる。



Ⅳ 成果報告会



隣接学校園との連携に基づく教育フォーラム —平成 21 年度大学教育・学生支援推進事業の報告会—

日時： 平成 22 年 2 月 19 日（金）13：30～17：30（開会は14：30）

場所： 三重大学総合研究棟II メディアホール

プログラム：

13：30～14：30	ポスター発表		
14：30	開会	司会・進行	根津知佳子
14：30～14：35	開会あいさつ	教育学部長	上垣 渉 …… p. 191
14：35～14：50	取組概要の報告	連携担当	後藤太一郎 …… p. 192
14：50～16：10	学生・教員による連携活動報告（ポスター発表を含む）		pp. 193～259
16：10～17：10	連携校による連携活動報告		p. 260
17：10～17：30	総合討論		pp. 260～263
	一身田中学校 校長		笠原 哲
	南立誠小学校 校長		東谷和久
	南立誠幼稚園 園長		丹羽立子
	津市教育委員会		
	教育研究支援課 課長		田邊正明
	三重大学教育学部		岡野 昇

開会の挨拶

三重大学 教育学部長 上垣 渉

皆さんこんにちは。教育学部長の上垣でございます。本日は、一身田中学校区ならびに橋北中学校区と三重大学教育学部の連携活動に関するフォーラムにご参加いただきまして、誠にありがとうございます。この連携事業は、今年度すなわち平成 21 年度に文科省の大学教育推進プログラムに採択されたもので、平成 23 年度まで 3 年間継続して実施される予定になっております。この事業の目的は、学生たちが学校現場に出向き、子どもあるいは学校に対する理解を深めるとともに、教育アシスタント活動などの経験により実践的な教育力を身につけることと、隣接学校園の教育活動を支援することです。その目的のために、教育学部は本学部の中に一身田・橋北校区連携推進委員会を設置し、後藤太一郎先生を委員長としてこの連携活動を昨年から進めて参りました。本日の資料集の 9 ページから 13 ページにかけて、昨年 5 月から進められている 91 項目の連携活動が記録されております。教科につきましても、ほぼすべての教科の学生あるいは教員がこの活動に携わっております。本日はこの学生たちの活動発表、連携学校園からの活動報告、および総合討論が予定されております。ぜひ実り豊かなフォーラムにさせていただくとともに、今後の連携活動の糧となれぱと思っております。

最後になりましたが、この隣接学校園との連携活動を温かく見守っていただき、ご支援をいただいております津市教育委員会に厚く御礼申し上げます。簡単ではございますが、開会の挨拶といたします。

取組概要の報告

三重大大学教育学部 大学教育推進プログラム取組責任者 後藤太一郎

一身田・橋北校区の学校園と教育学部との連携を担当しております後藤です。すでに学部長からお話がありましたように、一身田校区の学校園とは4年前より連携がはじまっています。

教員を目指す学生の実践的指導力や学校現場の理解を高めるために、学生が実践的な活動を体験することは欠かせません。そのような場として、連携校の先生方にはたいへんご協力いただいております。

学生が多様な学校現場での体験を、授業時間の中でもできることが望ましく、教育学部と隣接する学校区である橋北校区の学校園とも連携を21年度よりお願いして4月当初より連携活動が行われてきました。これに必要な最低限の経費は、学部予算でまかなう計画でした。この取組は教員養成では欠かせないものであることから、文部科学省による21年度の大学教育・学生支援推進事業に申請しております。その採択が21年9月に決まりました。取組名称は「隣接学校との連携を核とした教育モデル」で、23年度まで経費を受けることができます。

この取組の概要はお配りしたパンフレットに記されています。連携校の先生方や大学の先生方にはすでに何度もご説明したことですが、学生の皆さんの中には、どのような背景があつてどのような目的で隣接校区との連携活動が行われているか知らない方が多いかと思います。ここでは、この取組の概要と、21年度はどのようなことを進めてきたかをご説明させていただきます。

(中略 詳細は本報告書の1～8ページ)

21年度は資料にありますように91の連携活動が行われ、約30名の大学教員が関わり、約20の授業科目と関連しています。本日の学生及び大学教員からの発表は、この中の約3分の1ということになります。

また、連携活動を円滑に進めるためには、地域連携室の整備が欠かせません。耐震改修工事により地域連携室が3部屋ほど作られました。このうちの地域連携室Aを接続校区との連携推進の拠点とし、連携活動に必要な資料作りや授業記録のための機器、また、電子黒板についても学生の皆さんが授業で学び、連携校にも1台ずつ配備することで、学生が連携校の先生方とともに、これを活用するとともに、教材作りについても共同でつくり、共有できることを期待しています。

部屋やモノだけあっても機能しません。これらの支援をしてくださる方が、連携室に常駐してくれています。ご紹介します。平山円さんです。連携校と大学をつなぐ、大事な役割をお願いしています。学生が連携校に行く上でもお手伝いしてくれます。このような看板を部屋の前に設置してありますので、場所がわかりやすくなったと思います。是非気軽に来てください。

いい雰囲気、学生支援のために連携が進みますよう、どうか宜しくお願いいたします。

学生・教員による連携活動報告（ポスター発表を含む）

（本報告書の194～259ページ）

ブース no.	コース	発表代表者	活動名
1	保健体育コース	伊藤茂子 他3名	体づくり運動としてのラート運動 ー身田中学校保健体育科授業研究会ー
2	保健体育コース	加藤貴章	中学生男女の運動習慣と体組成・骨密度・体力値の関連について
3	保健体育コース	加藤拓史	中学生の生活習慣・体型認識と体組成・骨密度との関連
4	数学教育コース	宇野哲矢、長谷川優斗	教育実地研究・一身田中学校
5	理科教育コース	橋谷耕司	理科教育法受講生による隣接校区との授業連携
6	音楽教育コース	高林朋世 他3名	一身田&橋北 Sound Map
7	家政教育コース	富田かすみ	食分野における小・中学校との連携
8	保健体育コース	加藤真史、山崎智己	児童の身体活動量増加と体力向上を目指した実践とその効果
9	保健体育コース	廣智恵里 他4名	「ちゃんと子どもする」ということ ー白塚幼稚園における親子活動からー
10	幼児教育コース	辻彰士	白塚幼稚園での未就園児保育の運営： びよんちゃんクラブ・みんなで子育て09
11	幼児教育コース	岩永尚子、岡あゆみ	暗闇部屋の実践 ー幼児教育1年教育実地研究基礎ー
12	幼児教育コース	恒川文香 他3名	生きもの環境作り
13	幼児教育コース	天野由貴	北立誠幼稚園での未就園児保育の運営： たんぼぼ会に参加して
14	技術教育コース	中村友紀	北立誠幼稚園ものづくり出前授業の報告
15	保健体育コース	林直哉 他3名	幼児教育で大切にしたい運動遊び ー大学と教育現場によるコラボレーションポスター作成ー
16	数学教育コース	竹中優太、築地矩弘	教育実地研究・栗真小学校
17	数学教育コース	佐藤大輔、中山真希	教育実地研究・白塚小学校
18	数学教育コース	田中祐一郎、飛世千織	教育実地研究・一身田小学校
19	国語教育コース	松田亘平	子どもと一緒に毛筆体験
20	日本語教育コース	佐藤梨恵、辻野晶子	一身田小学校クラブ活動「世界を結ぼう」
21	保健体育コース	中西毅徳 他3名	参加者に対する指導者の関わり方について ー一身田小学校の親子活動における実践からー
22	教育学研究科	古結亜希 他8名	わくわくコミュニケーションクラブによる小学生のコミュニケーション 力育成の取り組み～北立誠小学校での実践～
23	英語教育コース	福井沙貴 他3名	英語活動を通じた地域連携
24	理科教育講座	牧原義一	南立誠小学校理科教職員研修会
25	理科教育講座	平山大輔	大学キャンパスを活用した自然観察授業 ーきのみをさがそうー

体づくり運動としてのラート運動

— 一身田中学校保健体育科授業研究会 —

報告者：○伊藤茂子・廣智恵里・中西毅徳・

林 直哉（保健体育3年）

指導教員：後藤洋子・岡野 昇

KW：広がるからだ、ラートと一体、技の横の深まり

1. はじめに

三重県津市立一身田中学校（以下、一身田中学校）は、体育学習の内容としてラート運動を導入するために、平成19年度から一身田中学校教員がラート運動の研修を行ってきた。平成20年度には、全国初となる正課体育の授業（中学2・3年を対象）としてラート運動（器械運動領域）を実施した。平成21年度の3年目の取り組みにして、全国でも前例のないラート運動授業（体づくり運動領域）の公開授業と研究協議会が行われた。

本稿では、この一身田中学校保健体育科授業研究会における研究協議会をもとに、体づくり運動としてのラート運動について検討する。

2. 一身田中学校保健体育科授業研究会概要

①実施期日：平成21年11月12日（木）

②実施場所：一身田中学校体育館

・公開演技（13：00～13：15）

・公開授業（13：30～14：40）

実施場所：三重大学教育学部大会議室

・研究協議会（15：30～17：30）

③参加者：講師 長谷川聖修教授（筑波大学）

一身田中学校教員 4名

日本ラート協会員 1名

公開演技者 2名

一般教員 10名

三重大学教員 4名

三重大学院生 2名

三重大学学生 14名

3. 一身田中学校保健体育科授業研究会概要

まず、公開授業の前に、ラート世界選手権入賞者の檜皮貴子氏（東京芸術大）と深瀬友香子氏（目

白大）が、全校生徒が集まる体育館で直転や斜転・跳躍のラート演技を披露した。

次に、公開授業は、2年4組（男17名、女15名）を対象として、杉崎隆典先生と小方順治先生（チームチーティングで清長隆司先生と堤あい先生）で行われ、全6時間のうちの3時間目で、目標は「いろいろな回り方をしてみよう②」であった。

生徒たちは側方回転を中心に行い、先生はグループごとに注意点や回り方の提示をした。授業の中盤に、シュピンドル前方回転の見本を杉崎先生が行い、再びグループ活動に戻った。同じ技をゆっくり回ってみたり、自然と補助についたり、からだの動きや感じを伝え合ったりする生徒の姿がみられた。最後に、学習カードに反省などを記入し授業は終了した。

公開授業をうけ、研究協議会では「中学校保健体育科授業にラート運動を導入することの意味～中学校体育カリキュラムにおける体づくり運動としてのあり方をめぐって～」というテーマでグループワークを中心に行われた。

三重大学教員からこれまでの取り組みの経緯の紹介の後、授業者から授業内容と授業展開の説明があった。次に、講師である長谷川氏からイリックスとしてのラートのおもしろさと、思いのままにならないからだへの気づき、運動領域を超えたラート運動の可能性について指導があった。

その後、グループワークで話し合ったことを基に、運動者とラートの相互主体関係から生まれるおもしろさ、ラート運動が生み出す他者とのかわり合い、自己の発見と技の広がり、ラート運動の不自由さとからだ育ての4つが、三重大学学生から報告された。

グループワークの後、2つの図が提示された。ひとつは、従来の体育観は易しいものから難しいものへ、できないものをできるようにといった、難しい技を獲得することを目指すカリキュラムであることを示す図が提示された（図1）。

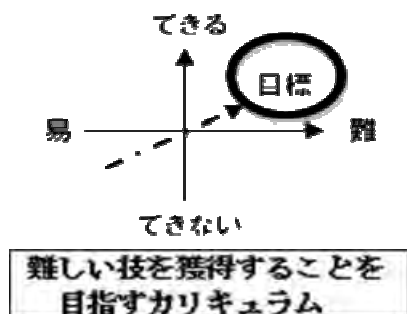


図1 器械運動としてのラート運動

もうひとつの図は、体づくり運動としてのラート運動では、ラートにどう働きかけラートからの情報をどう受け取るという、ラートから働きかけられるという往還の重要性と、回ることができたらゴールではなく、技と回り方との組み合わせで、できていると思う子に対しできなくしてあげ、できてきたら、またできなくさせるという視点が、従来の右肩上がりの価値観をもつ体育観では抜けていることを指摘し、この行き来の中で子どもたちは運動のおもしろさを学んでいくことを表した（図2）。

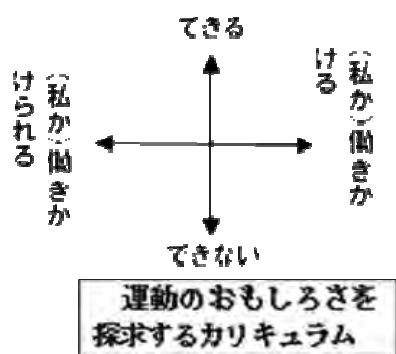


図2 体づくり運動としてのラート運動

グループワークなどを受け、長谷川氏は音楽とボールを使ったアクティビティを取り入れながら、「できる - できない」は関係のない、生の根源としての運動という話をされた。

最後の総括として、三重大大学の山本俊彦先生から、遊びとしての教育（運動文化の伝承と創造）の話で研究協議会は終了した。

4. 考察

一身田中学校保健体育科研究会における研究協議会をもとに、体づくり運動としてのラート運動について考察する。

器械運動領域でラート運動を扱う場合、より完成した技を追求し、より高い難易度の技が評価の対象となる。つまり、生徒はより難易度の高い技を獲得することが求められ、技の完成形へ「向かうからだ」が要求されるであろう。これは、ラートに対し技を獲得するための道具として認識させ、自分の思い通りにラートに働きかけることばかりに意識を向けると考えられる。

一方、多様な経験・運動が大切とされる体づくり運動の場合、技の難易度の高さが求められるのではない。ラートと溶け込むといった感覚、いわゆる「（ラートに）働き - 働きかけられる」という往還を味わい、ラートと一体となり気持ちよく回るといった感覚が重要とされるのではないだろうか。この身体感覚を味わえたとき、結果的にスキルは身に付いていると考えられる。技と回り方の組み合わせも含めることで、図2に示されるように、できていたと思っていた技ができなくなり、またできるようになり、またできなくなる。この行き来の中で子どもは多様な経験・運動をする「広がるからだ」が育つのではないだろうか。

図1で示された、易しいとされる技から難しいとされる技へ・できないものをできるようにといった右肩上がりの縦の高まりではなく、できたりできなくなったりする中で、ラートと一体となり気持ちよく回るといった「（ラートに）働きかけ - 働きかけられる」といった身体感覚を味わいながら、技と回り方を組み合わせ、技を横に深めていく子どもの「広がるからだ」を、体づくり運動としてのラート運動は育てる可能性があると考えられる。

5. おわりに

一身田中学校保健体育科授業研究会において、以下のことが考察された。

体づくり運動としてのラート運動は、技の獲得に「向かうからだ」ではなく、技と多様な回り方の組み合わせで技を横に深めていくことにより、子どもの「広がるからだ」を育てる可能性があり、それを可能とするのは「（私がラートに）働きかける - （私がラートに）働きかけられる」というラートと一体となるような身体感覚であることが考察された。

これまでの取り組み

2007年

- 8.6 ラート運動導入をめぐる検討会
 - 保健体育科の授業にラート運動を導入することの可能性と課題について議論した。
- 10.16 第一回ラート実技研修会
 - ラートの概要説明・基礎実技、「ラート検定級ビデオ(日本ラート協会編)」を視聴。講師は後藤洋子教員(三重大・日本体操学会副会長)。
- 12.27 第二回ラート実技研修会
 - ラート検定5級技を中心に実習。授業導入部の内容について学ぶ。講師は西井恵英理子氏(日本ラート協会総務部長)、アシスタントは中央大学部生1名。

2008年

- 8.4 第三回ラート実技研修会
 - ラート検定5級技を中心に実習。ラート運動の授業づくりについて学ぶ。講師は深瀬友香子氏(目白大学)。
- 9.3～10.4 単元「ラート運動」の実施。
 - 授業参観と観察及び指導補助

●2年生(5クラス)と3年生(5クラス)を対象に「ラート運動」の単元学習を行った。学生1名は10クラス、60時間の授業に参加し、授業参観と観察記録、質問し調査等に基づきながら分析・考察を行い、卒業論文(中学校体育のカリキュラム改善に関する一考察)としてまとめた。

2009年

- 5.28 第一回ラート運動学習指導案検討会
 - 11月12日の公開授業に向けた学習指導案検討を行った。
- 7.27 第四回ラート運動実技研修会
 - 講師に檜皮貴子氏(東京芸術大)を迎え、「ラート運動のチェックポイントと応用」～3年生の授業で何を教えるか～」のテーマで、単元における内容構成にかかわる研修を行った。
- 8.24 第二回ラート運動学習指導案検討会
 - カリキュラムレベルにおけるラート運動の位置づけ、ラート運動の特性と身体観、学び合い学習のあり方が論点となった。
- 9.29 第三回ラート運動学習指導案検討会
 - 「体づくり運動」または「器械運動」としてのラート運動を、それぞれの背景にある学習観について議論した。
- 10.22 第四回ラート運動学習指導案検討会
 - 「体づくり運動としてのラート運動」の単元構成における学習過程であり、何を、どのように学ばせるか議論した。
- 11.6 第五回ラート運動学習指導案検討会
 - 単元目標の再確認、授業の目標と学習カードの一体化について議論した。

一身田中学校保健体育科授業研究会 ～体づくり運動としてのラート運動～

発表者：○伊藤茂子・廣智恵里・

中西毅徳・林 直哉(保健体育3年)

指導教員：後藤洋子・岡野 昇

ラート授業研究の概要

2007年度からラート運動を正課体育授業に導入するため、準備を進めてきた。日本では前例のない正課体育の授業として、2008年度から実施することができた。

2009年度の3年目の取り組みにして公開授業研究会が(一身田中と三重大で)行われた。

公開演技と公開授業

公開授業前に、ラート世界選手権入賞者(檜皮氏・深瀬氏)による公開演技が一身田中学校の全校生徒の前で行われた。

津市立一身田中学校で2009年11月12日、2年4組(男17名、女15名)を対象に、全6時のうちの第3時「いろいろな回り方をしてみよう②」を目標に、杉崎隆典先生と小方順治先生(TTで清長隆司先生・堤あい先生)の授業が公開された。側方回転を中心に、シェビンデル前方回転の説明が行われた。その後は自分のしたい技をグループで行い、最後に反省カードを記入し授業を終えた。

公開演技の様子



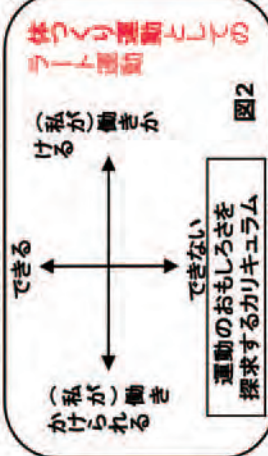
公開授業の様子



研究協議会

「中学校保健体育科授業にラートを導入することの意味～中学校体育カリキュラムにおける体づくり運動のあり方をめぐって」のテーマについて、グループワークを中心に協議した。

講師に長谷川聖修教授(筑波大学)、一身田中学校保健体育科教員4名、日本ラート協会員1名、公開演技者2名、一般教員10名、三重大学教員4名、院生2名、学部生14名が参加した。



右上の図は研究協議会において提示されたものである。図1は、右肩上がりの価値観をもつ、易しいものから難しいものへ、できないものをできるようにといった、難しい技を獲得することを目指すカリキュラムであることを示す。図2は、ラートにどう働きかけらなから情報はどう受け取るかというラートに働きかけられるという往還の重要性と、できていると思う子に対し技と回り方の組み合わせで、できている技をできなくさせるという、この行き来の中全体の子どもの運動のおもしろさを学んでいくことを示す。

体づくり運動としてのラート運動は、技の獲得に「向かうからだ」ではなく、技と多様な回り方の組み合わせで技を横に深めていくことにより、子どもの「広がるからだ」を育てる可能性があり、それを可能とするのは「(私がラートに)働きかけられる・働きかけられる」というラートと一体となるような身体感覚であることが考察された。

中学生男女の運動習慣と体組成・骨密度・体力値の関連について

保健体育コース 58 期 206038 加藤 貴章
指導教員 富樫 健二

I 緒言

これまでの先行研究によって、骨量は 10 代後半に成人と同レベルに到達することが報告されているように、思春期は二次性徴を迎え、形態的、機能的な変化が著しく、骨の量、質ともに急速な変化をとげる時期である。成人以降は骨吸収と骨形成の平衡が保たれ、骨量は一定を維持し、40～50 歳頃からは人体における総カルシウム量は低下し始める。したがって、成人期の最大骨量（peak bone mass）をできるだけ高くするために、10 代前半期から骨量を増加させ、骨密度を高めておくことが重要であると言える。

骨密度や骨量と関連する因子についての研究は多くされており、運動習慣と骨密度の関連についても様々な研究がされている。しかしながら、これまでの研究では女子学生のみを対象としたものや、対象者数が少ないものなどが多く、骨形成において重要な二次性徴を迎える中学生の男女を多数対象とし、運動習慣と体組成・体力値・骨密度との関係を総合的に検討した研究はされていない。

そこで本研究は中学生を対象とし、体組成・踵骨骨密度測定、運動習慣について運動に対する意識や身体活動量などの質問紙調査を実施し、新体力テストの結果も含めて、運動習慣と体組成・骨密度・体力値との関連を明らかにすることを目的とし、検討をした。

II 方法

1) 対象と測定内容

中学生の男女 465 名（男子 244 名、女子 221 名）を対象とし、保健体育の授業時間に体組成・骨密度の測定、運動習慣の質問紙調査を行った。

2) 解析方法

統計処理には SPSS 社製 PASW Statistics ver.18 を用い、数値は平均値±標準偏差で表した。クロス集計に関する処理には χ^2 検定を用いた。2 群間の平均値の比較には対応のない t 検定を用い、3 群間以上の場合是一元配置分散分析を行った。2 変量の関連性の処理には Pearson の相関係数を用い相関分析を行った。いずれの検定においても危険率 5%未満をもって有意とみなした。

III 結果および考察

1) 身体的特性とスティフネス値について

男子では体脂肪率とスティフネス値との間には有意な関係を確認できなかったが、女子では体脂肪率とスティフネス値との間に有意な正の相関（ $p<0.05$ ）を認めた。女子で体脂肪率とスティフネス値との間に関連が認められた要因は、脂肪細胞においてテストステロンが芳香化されることにより、骨吸収作用を抑制する（骨密度を高くする）エストロゲン（女性ホルモン）が、生合成されることなどが考えられる。

2) 運動習慣、体力測定値と体組成、スティフネス値の関連

運動やスポーツなどからだを動かすことは好きですか」の問いに対し、「好き」群と「嫌い」群とで比較すると、男女ともに運動系の部活動や習い事への加入率も有意に高く、加入している生徒を対象に平日・休日・1 週間の身体活動時間をみたときも「好き」群が「嫌い」群に対して男女ともに有意に高い値を示した。また、「運動系の部活動やスポーツの習い事をしていますか」の問いに対し、「加入」群と「未加入」群とで体脂肪率・スティフネス値・新体力テスト合計得点を比較したところ、男子において体脂肪率の比較は「加入」群（ $13.1\pm5.7\%$ ）が「未加入」群（ $18.7\pm8.5\%$ ）よりも有意に低値（ $p<0.001$ ）を示し、体力テスト合計得点の比較は「加入」群（ 39.0 ± 12.2 点）が「未加入」群（ 31.6 ± 12.7 点）よりも有意に高値（ $p<0.01$ ）を示

したが、スティフネス値の比較は「加入」群（96.9±15.7）と「未加入」群（92.9±14.3）との間に有意差はみられなかった。女子において体脂肪率の比較は「加入」群（21.2±5.8%）が「未加入」群（24.0±6.2%）よりも有意に低値（ $p<0.01$ ）を示し、スティフネス値の比較は「加入」群（99.0±15.8）が「未加入」群（88.3±13.4）よりも有意に高値（ $p<0.001$ ）を示し、体力テスト合計得点の比較は「加入」群（30.1±7.5点）が「未加入」群（24.5±6.5点）よりも有意に高値（ $p<0.001$ ）を示した（図1）。以上の結果も踏まえて、運動意識を持つ者ほど放課後や昼休みに外遊びをすることや、運動系の部活動や習い事へ加入し、身体活動量も多いということが、「好き」群は低い体脂肪率や高いスティフネス値・体力値を示したと考えられる。

「新体力テスト」の各項目の結果・合計得点と体脂肪率との関連について表1に示した。全体として男女とも多くの項目で有意な負の相関関係を示し、またスティフネス値との関連については、男女とも多くの項目で有意な正の相関関係を示した。どちらの関連においても特に「20mシャトルラン」や「50m走」、「反復横とび」のような下半身の筋力や筋持久力を必要とする種目とは、強い相関がみられたが、「長座体前屈」には男女ともに有意な相関は得られなかった。

質問紙の結果や、新体力測定値の結果とスティフネス値の関連をみると、男子よりも女子に強い関連があることが明らかとなった。

IV まとめ

以上の結果から、運動系の部活動や習い事に加入している生徒ほど体脂肪率は低く、スティフネス値・体力値は高いこと、さらにその関連は男子よりも女子の方が強いことが明らかになった。また、運動やスポーツなどからだを動かすことが好きという「意識」が、外遊びを行うことや運動系の部活動、スポーツの習い事に加入し多くの身体活動を行うという「行動」を生じさせ、その結果、高い体力値や骨密度、健康的な体組成を獲得するという一連の繋がりを持っている可能性も考えられる結果となった。よって学校体育など中学生に運動指導を行う場では、まず「運動やからだを動かすことが好き」という生徒を1人でも多く増やすような健康教育や運動指導、また体育授業を実施していくことが、身体活動量の増加や、体力値・骨密度の向上、健康的な体組成の獲得に効果的であると言える。

<今回の実践を通して>

子どもたちと直接話したりして触れ合い、さらにデータという数値的な面からも中学生の現状を把握することができたというのは貴重な経験だと感じている。また、今回の実践で、発育期における運動の必要性や運動指導を行う側の重要性を再確認することができた。この経験を生かし、さらに知識を深め指導者としての力を高めていきたいと思う。

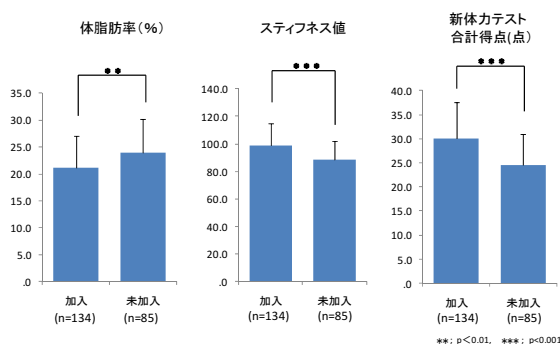


図1. 運動系の部活動や習い事への加入状況と各測定値(女子)

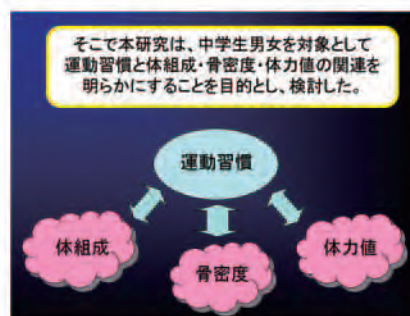
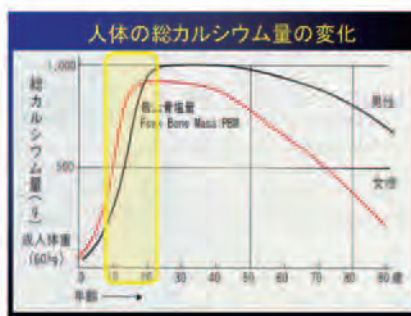
表1. 新体力テスト各測定値と体脂肪率・スティフネス値の偏相関

	男子 (n=229~250)		女子 (n=216~227)		男女間における 相関係数の比較	
	体脂肪率	スティフネス値	体脂肪率	スティフネス値	体脂肪率	スティフネス値
握力 (kg)	.165*	.244**	-.067	.158*	ns	ns
上体起こし (回)	-.331**	.221**	-.229**	.188**	ns	ns
長座体前屈 (cm)	.030	-.053	-.012	.150*	ns	*
反復横とび (回)	-.319**	.192**	-.373**	.247**	ns	ns
20mシャトルラン (回)	-.447**	.286**	-.407**	.294**	ns	ns
50m走 (秒)	.302**	-.273**	.306**	-.293**	ns	ns
立ち幅とび (cm)	-.253**	.196**	-.436**	.258**	*	*
ハットボール投げ (m)	-.046	.248**	-.178*	.349**	ns	ns
合計得点	-.284**	.280**	-.360**	.402**	ns	**

制御変数: 年齢, *, $p<0.05$, **, $p<0.01$

中学生男女の運動習慣と体組成・骨密度・体力値の関連について

保健体育コース 58期 206038 加藤 貴章
指導教員 富樫 健二



対象

- 三重県津市内のK中学校
- 男子244名、女子221名の計465名
- 平成21年9月に調査を実施



調査内容

質問紙の記入風景

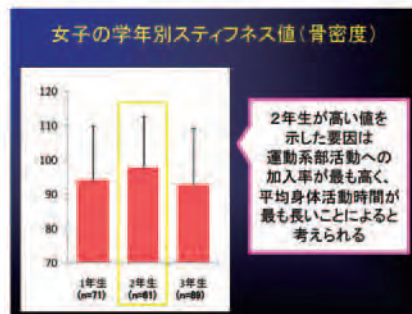
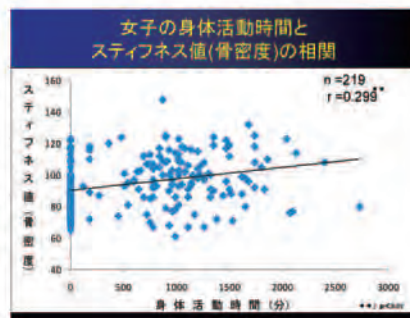
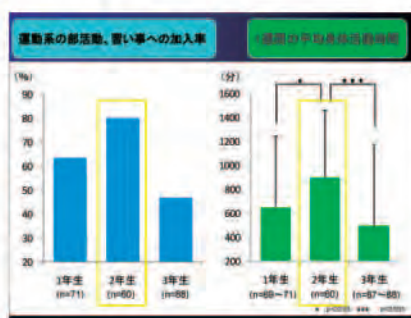
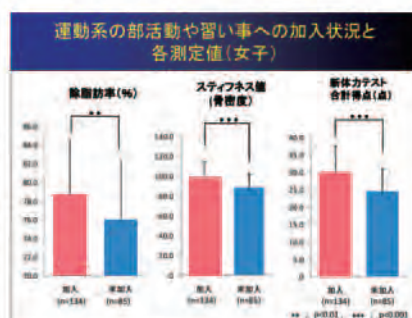
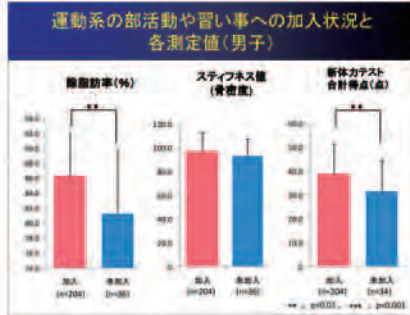
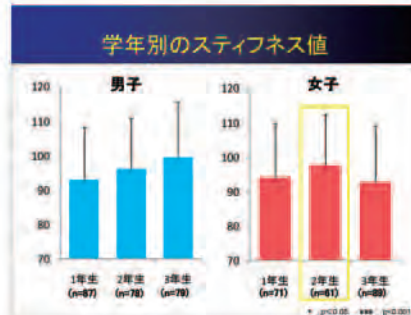
- 運動系の部活動や習い事への加入状況と種目
- 部活動や習い事での身体活動時間(1週間の合計)

<新体力テスト>

- 握力
- 反復横とび
- 立ち幅跳び
- 上体起こし
- 20mシャトルラン
- ハンドボール投げ
- 長座体前屈
- 50m走

対象者の身体的特性

	年齢 (歳)	身長 (cm)	体重 (kg)	体脂肪率 (%)	除脂肪量 (kg)	
男子	1年生 (n=87)	124.4 ± 0.5	151.5 ± 8.0	44.4 ± 9.1	15.1 ± 7.7	37.2 ± 5.3
	2年生 (n=78)	134.4 ± 0.5	180.0 ± 8.4	50.8 ± 9.0	15.2 ± 8.6	42.5 ± 5.7
	3年生 (n=79)	145.0 ± 0.5	186.6 ± 7.1	54.1 ± 8.5	13.1 ± 5.3	46.7 ± 5.7
女子	1年生 (n=71)	125.0 ± 0.5	153.0 ± 5.2	43.1 ± 8.1	15.5 ± 6.8	34.5 ± 4.3
	2年生 (n=61)	134.0 ± 0.5	154.3 ± 5.1	45.7 ± 7.3	22.0 ± 6.2	35.3 ± 3.3
	3年生 (n=69)	143.0 ± 0.5	157.5 ± 5.7	49.9 ± 7.7	25.1 ± 6.5	37.0 ± 3.5



まとめ

発育期における中学生男女に運動系部活動への参加や身体活動量を増やすよう運動指導を行うことは生涯における健全な体組成やスティフネス値(骨密度)、体力値の獲得に有用であると、数値的に証明することができた。

特に女子においては、将来骨粗鬆症になる危険率も男子と比べ高い現状があるのにも関わらず、運動系部活動や習い事への参加率、身体活動量は男子より劣っている。よって、特に発育期女子には運動系部活動へ参加することや身体活動量が増えるよう運動指導を行うことが必要であると言える。

今回の実践を通して

- 子どもたちと直接話すなどして触れ合い、さらにデータという数値的な面からも中学生の現状を把握することができたというのは貴重な経験だと感じている。
- 今回の実践で、生涯における健全なからだづくりの為に、発育期における運動の必要性や運動指導を行う側の重要性を再確認することができた。

中学生の生活習慣・体型認識と体組成・骨密度との関連

保健体育コース 58 期 206039 番 加藤 拓史

指導教官 富樫 健二

1. 緒言

近年、肥満や生活習慣病を有する成人が増え、肥満傾向を示す子どもも増えている。しかし、その一方で 20、30 歳代女性を中心に低体重女性の増加も問題となっており、その低年齢化も危惧されている。若年女性の極端な低体重や無理な減量行動は、月経異常や骨粗鬆症、摂食障害といった健康障害の要因となるばかりでなく、将来の成人病発症が懸念される低出生体重児を出産するリスクが高くなることも報告されている（成人病胎児期発症説）。

このように、低体重者自身の将来の健康だけでなく次世代の健康が損なわれる危険が増すにもかかわらず、20、30 歳代の女性では低体重や標準と判定されながらもさらに体重を減らそうとしている現状がある。やせ志向の増加の背景には自身の体型についての認識のずれや理想の体型の瘦身化がある。

この傾向は小・中学生のころから現れており、不健康やせの増加が危ぶまれている。中学生期は急激な成長がみられる時期であり、特に骨密度においては一般的に 20 歳くらいをピークに減少していくとされている。よって、中学生期でのより多くの骨量獲得は将来における骨粗鬆症の予防に大きく関わってくる。

そこで本研究は、中学 1～3 年生の男女を対象として「やせ志向」や体型認識の傾向を検討し、それらと生活習慣（運動習慣・食習慣を含む）や体組成・骨密度との関連を明らかにすることを目的とした。

2. 対象者及び方法

今回の調査は、学校長の許可を得て、対象校の体育科教員の指導のもと保健体育の授業時間に行った。

1) 対象：M 県内の K 中学校の生徒 465 名（男子 244 名、女子 221 名）を対象とした。

2) 方法：マルチ周波数体組成計を用いて体組成（体重、体脂肪率、除脂肪量）を、超音波踵骨測定装置を用いて右足踵骨の骨密度（スティフネス値）を測定し、自記式質問紙を用いて生活習慣、食習慣、体型、運動習慣を、簡易型自記式食事歴法質問表の中高校生用を用いて栄養摂取状況を調査した。

本研究においては、体格の判定指標として体型指数を算出し、体型指数－15%未満を「やせ」、－15%以上 20%未満を「標準」、20%以上を「肥満」とした。「やせ志向」については、実際に測定された結果と質問紙の回答を用い、やせ体型を望む生徒を「やせ志向あり」とした。

3. 結果及び考察

1) 形態・やせ志向について

学年間の差について性別にみると、男子では身長、体重、除脂肪量は学年が上がるにつれて有意に増加し、一方、肥満度は 3 年生が 1、2 年生に比べ有意に低値を示した。女子では身長、体重、除脂肪量は学年が上がるごとに増加傾向を示し、すべての項目で 1、2 年生と 3 年生の間で有意差が認められ、体脂肪率は学年が上がるごとに有意に増加した。このことから、男子では筋肉質な体型に、女子では脂肪がつき女性的な体型に変化しつつあることがうかがえる。

しかし、客観的体型評価で「やせ」に判定される生徒の割合は女子（14.9%）が男子（5.3%）に比べ高い値を示し（表 1）、理想体型に「やせている」を選択した生徒の割合（女子 50.0%、男子 18.5%）、「やせ志向あり」の生徒の割合（女子 69.9%、男子 27.0%）でも女子が高い値を示した。また、体型認識のずれについては、標準体型に判定された生徒で自分を「太っている」と認識している生徒の割合は、女子（30.1%）が男子（11.7%）に比べ高い値を示し、女子では学年が上がるにつれて自分を「太っている」と認識してい

る生徒の割合が増加し（15.0%→45.6%）、一方で自分の体型を「ふつう」と正しく認識している生徒の割合が減少（75.0%→47.1%）傾向がみられた。

このように、中学生女子の間で痩身志向が広まっており、やせた体型に強い憧れを持っていることがうかがえる。よって、中学校のできるだけ早い段階で「やせ志向」や体型認識についての指導を行うことが重要だと考えられる。

2) スティフネス値について

肥満度判定ごとにスティフネス値の平均値を比較してみると、女子においては「やせ」が「標準」、「肥満」に比べ有意に低い値を示し（表 2）、痩身志向を持ち、減量行動を行うことで体重や体脂肪を落とすことはスティフネス値の低下につながることを示唆された。一方、「やせ志向」やダイエット経験の有無については、事前に予想された「やせ志向」やダイエット経験のある生徒ほど骨密度が低いという結果にはならず、「やせ志向」やダイエット経験のある生徒ほど骨密度は高かったが、これはやせたいという意識はあるものの、実際にやせるまでに至っていないためと推測される。

3) 栄養摂取量について

主な栄養素の摂取量とスティフネス値との間には、男女ともに明らかな関連はみられなかったものの、やせ志向別の栄養摂取量については、女子で「やせ志向あり」の生徒の方が摂取量は低い値を示した。これは、やせ志向によって食事量を減らすなどの減量行動が背景にあると考えられ、将来の健康障害を引き起こす可能性も考えられる。よって、中学生期においては「やせ志向」や体型認識同様、女子を中心とした食に関する教育の重要性が示唆された。

4. まとめ

今回の調査では、「やせ志向」のような意識面と骨密度との間には直接的な関連はみられなかったため、体型や身体活動量など骨密度に影響する因子によって対象者をグループ分けしての検討が必要と考えられた。しかし、女子においては「やせ志向」を持ったり、自身の体型を実際よりも太って認識している生徒が多く、「やせ志向」を持つ生徒の栄養摂取量が低い傾向があったため、中学生期には女子を中心に「やせ志向」や体型認識、食に関する教育を行うことが、将来における健康障害を予防するために重要であることが示唆された。

5. 今回の研究を通じて

本研究では、対象中学校に協力していただくことでたくさんのデータを収集することができ、中学生の実態について深く知ることができた。

また、文部科学省などが発表している統計調査結果ではなく、自分自身の手でデータを収集したこともあり、これまで以上に身近な問題としてとらえることができ、中学生の実態とその改善の重要性について問題意識が高まった。

今後の課題として、本研究では実態調査にとどまってしまったため、今回の調査でわかったやせ志向や骨密度の低下について、改善するための教育内容や方法を考えるとともに、介入による効果を検討することが必要だと考えられた。

表 1. 各体型の割合における性差

	n (%)		
	やせ 肥満度<-15%	標準 -15%≤肥満度<20%	肥満 20%≤肥満度
男子 (n=244)	13 (5.3)	206 (84.4)	25 (10.2)
女子 (n=221)	33 (14.9)	177 (80.1)	11 (5.0)

男女間 $p<0.05$, $\chi^2=15.2$

表 2. 性別ごとの肥満度判定別におけるスティフネス値

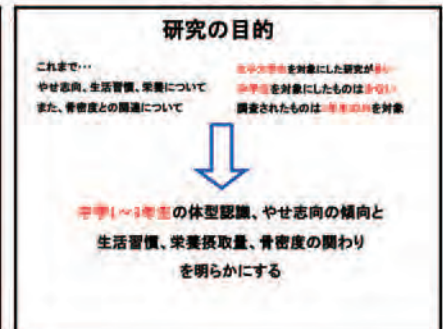
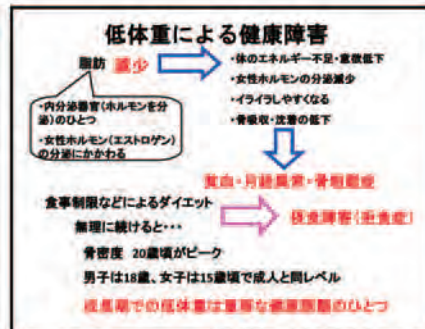
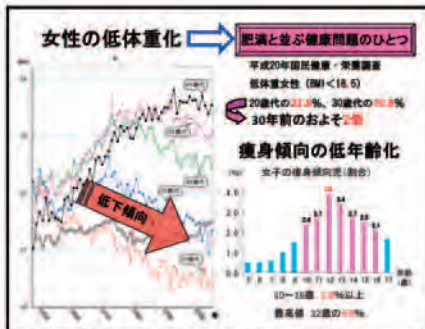
	男子			女子		
	n	スティフネス値		n	スティフネス値	
やせ	13	93.6 ± 15.8		33	84.8 ± 12.8	a
標準	206	96.7 ± 15.7		177	96.0 ± 15.4	b
肥満	25	93.6 ± 13.6		11	105.6 ± 16.0	

a; やせ vs 標準, b; やせ vs 肥満, $p<0.05$

中学生の生活習慣・体型認識と体組成・骨密度との関連

保健体育コース 58期 206039番 加藤 拓史

指導教員 富樫 健二



本研究における客観的体型評価の方法

$$\text{体型指数}(\%) = \frac{[\text{実測体重}(\text{kg}) - \text{標準体重}(\text{kg})]}{\text{標準体重}} \times 100$$

各体型に判定される生徒の割合

	n (%)		
	やせ 体型指数 < -15%	標準 -15% ≤ 体型指数 < 20%	肥満 20% ≤ 体型指数
男子(n=244)	13 (5.3)	208 (84.4)	25 (10.2)
女子(n=221)	33 (14.9)	177 (80.1)	11 (5.0)

男女差: $\chi^2=0.05$ 、 $p=0.85$

女子に痩身傾向の生徒が多い
男子の約1割

標準体型生徒の主観的体型評価の傾向

	n (%)		
	やせている 少しやせている やせている	ふつう	太っている 少し太っている 太っている
男子(n=205)	88 (32.2)	115 (56.1)	24 (11.7)
女子(n=178)	18 (9.1)	107 (60.0)	53 (30.1)

男女差: $\chi^2=9.00$ 、 $p=0.03$

女子の約3分の1は自分を太っていると思っている
男子の約1割

学年別における女子の主観的体型評価

	n (%)		
	やせている	ふつう	太っている
女子 1年生(n=80)	8 (10.0)	45 (75.0)	9 (15.0)
2年生(n=48)	9 (10.4)	30 (62.5)	13 (27.1)
3年生(n=48)	9 (7.4)	32 (47.1)	31 (45.8)

客観的体型評価で「標準」の生徒のみ
学年が上がるほど自分の体型を正しく認識できていない
学年が上がるにつれて体型評価のずれが大きくなっていく

やせ志向の判定基準

今後の体型 への希望	やせたい 少しやせたい すくやせたい	今のままでよい	太りたい 少し太りたい すく太りたい
体型指数			
やせ 体型指数<-15%	やせ志向あり	やせ志向あり	やせ志向なし
標準 -15%≦体型指数<20%	やせ志向あり	やせ志向なし	やせ志向なし
肥満 20%≦体型指数	やせ志向なし	やせ志向なし	やせ志向なし

やせ志向の有無における性差

	n (%)	
	やせ志向あり	やせ志向なし
男子(n=241)	65 (27.0)	176 (73.0)
女子(n=219)	153 (69.9)	66 (30.1)

男女差: $\chi^2=10.00$ 、 $p=0.001$

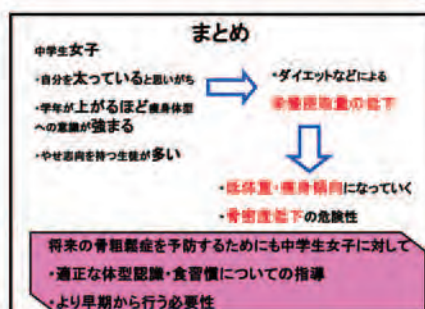
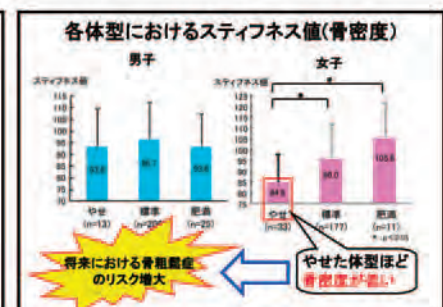
女子の方が男子よりやせ志向を持つ生徒が多い(約7割)
女子への指導が重要

女子におけるやせ志向別の各栄養素摂取量

	やせ志向あり(n=153)	やせ志向なし(n=66)	有意差
エネルギー(kcal)	2042.2 ± 801.1	2417.5 ± 1195.8	*
たんぱく質(g/d)	73.8 ± 34.5	85.0 ± 30.8	*
脂質(g/d)	72.4 ± 31.1	85.1 ± 47.5	*
炭水化物(g/d)	288.5 ± 106.1	318.1 ± 147.7	*
カルシウム(mg/d)	738.5 ± 392.8	848.7 ± 396.1	*
リン(mg/d)	1217.0 ± 561.0	1401.5 ± 873.3	*
鉄(mg/d)	6.3 ± 3.5	9.4 ± 5.2	*
ビタミンD(mg/d)	15.7 ± 15.9	20.2 ± 21.7	*
ビタミンE(mg/d)	298.2 ± 178.8	300.4 ± 204.5	*
総食物繊維(g/d)	11.1 ± 5.5	13.5 ± 7.5	*

* $p < 0.05$

やせ志向を持つ生徒ほど栄養摂取量が低い



今回の研究を通じて

本研究では、対象中学校に協力していただくことでたくさんのデータを収集することができ、中学生の実態について深く知ることができました。
また、文部科学省などが発表している統計調査結果ではなく、自分自身の手でデータを収集したこともあり、これまで以上に身近な問題としてとらえることができ、中学生の実態とその改善の重要性について問題意識が高まりました。
今後の課題として、本研究では実態調査にとどまってしまうため、今回の調査でわかったやせ志向や骨密度の低下について、改善するための教育内容や方法を考えると、介入による効果を検討することが必要だと考えられました。

教育実地研究を通して学んだこと

発表者：宇野哲矢 長谷川優斗（数学教育コース3年）

要旨作成：高崎俊彦 大西康太（数学教育コース3年）

指導教員：中西正治

教育実地研究では、三重大大学の隣接校である一身田中学校にお世話になりました。ここでは学習支援をさせていただきました。その学習支援を通して学んだこと、感じたことを項目別にまとめました。

『TT（ティームティーチング）について』

私たちは学習支援のTTという形で授業の補佐をさせてもらいながら、授業も見せていただきました。TTは、教師の数がたくさん必要になりますが、苦手な教科を学習している生徒への個別のサポートが可能です。そのため、一人で授業を行うよりも細かく対応できる良い方法だと、感じました。特に机間巡視を行い、質問をしたくてもできない生徒へのサポートができることは、TTならではのことでないかと感じました。

『学力について』

生徒は、一人一人理解度や理解しやすい分野も異なります。教科ごとに、得意な生徒と苦手な生徒の差が大きいと、多くの学生が実感しました。教師はその差を踏まえ、どこでつまづいているのかをくみ取りながら、授業を行う必要を感じました。また、個々の対応をすることで、差を埋めることも必要だと思いました。ただ、どれだけ良い授業をしても、一斉授業には限界があるのではないかと感じました。

『授業について』

多くの学生が感じたのは、教科書をなぞるだけの授業では、生徒は興味を持てず、学習意欲が低下してしまうということです。そのため、この学習支援を通して現場の先生方の工夫を拝見できたことは、極めて貴重な体験だったと思っています。

生徒が学習意欲を失くさないように、活動を取り入れたり、教具を活用したりと、生徒を惹きつける工夫をいろいろ見せて頂くことができました。また、生徒を答えに導くために、どのように発問をすれば良いのかや、わざと間違えたりするなど色々な方法を知ることができました。

生徒は黒板をそのまま写すので、板書の仕方にも注意が必要であり、口頭でポイントを何度も言い、生徒に意識させることも必要だと感じました。

生徒は毎日、体調、気分、反応が違うので、それを考慮し臨機応変に授業の時間配分、説明の仕方などを変えることで、生徒の興味や理解を深めることができるのではないかと感じました。しかし、生徒に合わせ臨機応変に展開していかなければならないからこそ、授業というものは難しいのだろうと感じています。

『生徒との関わり方』

学習支援をしていて、生徒が今自分で考えているのか、わからないのか見極めるのが難しかったです。生徒自身が考えているのであれば、たとえそれが合っていないでも十分価値があることなので、声をかけて、その考え方を聞いてあげなければならない。しかし、声をかけるタイミングが難しいと思いました。

生徒と一緒に考えてあげると、嬉しそうにしている生徒もいましたが、週一回の学習支援なので少しよそよそしく関わってしまう生徒もいました。思い切って話をしていくことも大事だと思いました。また、同じ授業でも、生徒との関係が良いかどうかで、結果が違うのではないかと感じました。そのため、生徒と積極的に関わり、関係をつくっておくことは重要であると思いました。

以上が、学習支援を通して、我々学生が感じたことをまとめたものです。教育実習も終えている学生も多く、そこで指導、指摘して頂いたことなどをもとに実地研究を行ってきました。そして、いろいろな指導について再び考えさせられました。それらは、これからの財産になると感じた学生が多かったです。

一身田中学校の先生方、本当にありがとうございました。

教育実地研究

一身田中学校における教育実地研究

指導教員：中西正治

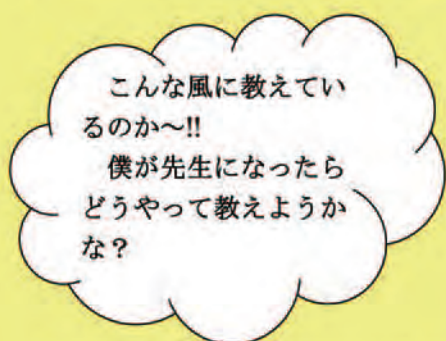
発表者：宇野哲矢 長谷川優斗（数学教育コース 3 年）

ポスター作製：江藤公美 服部修二（情報教育課程 3 年）



これは、ここをこうして
考えるといいよ。
また、わからなかったら
聞いてくださいね。

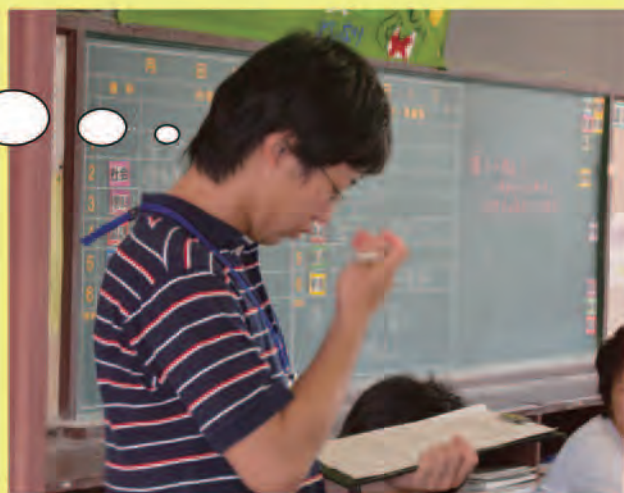
問題を解くためのヒントをだ
してあげると、生徒自ら答えへ
の流れに気がついてくれた。



こんな風に教えてい
るのか～!!

僕が先生になったら
どうやって教えようか
な？

点対称表すとき、トランプの
絵札を使うことで、数学が身近
なものであると感じることが
できる授業であった。



この教育実地研究を通して、授業の創意工夫の仕方や生徒との接し
方の難しさなどを知ることができ、とても貴重な経験であった。

理科教育法受講生による隣接校区との授業連携

理科教育法Ⅰ・Ⅱ受講者

指導教員 平賀伸夫・萩原彰

1. はじめに

理科教育法では、学生が隣接校区の学校（一身田中学校・西が丘小学校）の理科授業の観察・補助を行い、また学生による実験講座を行っている。以下はその活動及び連携による学生教育の効果の概要である。

2. 活動概要

(1) 授業科目名 理科教育法Ⅰ・Ⅱ

(2) 受講者数及び学年

理科教育コース 3年生 20名、4年生 3名、大学院生 1名

技術教育コース 4年生 2名

計 26名

3 時期、学生の担当時間数

一身田中学校

前期：5月上旬～7月上旬(全30日間、学生1人あたり4時間担当し、1回の授業に3～4人の学生が参加した)

後期：12月上旬～1月下旬(全20日間、学生1人あたり3時間担当し、1回の授業に3～4人の学生が参加した)

西が丘小学校

12月2日 理科実験講座

4 活動の対象となったクラス

一身田中学校 1年生 理科 5クラス、西が丘小学校 5年生 4クラス

5 活動の内容

一身田中学校

前期に扱った単元は、一身田中学校1年生が理科第1分野「身近で起こる不思議な現象」であり、生徒が学習課題の解決に困っているときにアドバイスを与えるなど、ティーチング・アシスタントとしての役割を担当した。

後期の活動においては、実習生自身による授業を行った。単元は「水溶液の性質」であり、授業の内容は、指示薬による呈色や金属との反応を使った物質の性質についての実験である。

西が丘小学校

音、ルミノール反応、植物の葉脈をテーマとした実験講座を行った。

6 連携の効果

連携の効果を検証するため、活動前、前期終了後、教育実習後、後期終了直前のそれぞれの時期に、活動を振り返るアンケートを行って学生の意識変化を追跡した。また後期終了直前に、1年間の振り返りを行った。アンケートは「理科の教師に必要な力」を記述式で

回答するという形式で行った。

以下はアンケートを資料とした振り返りの中で行われた分析をまとめたものである

- ・ 教科についての知識の重要性は活動前から意識されている。しかし活動前には、知識の
とらえかたが、理科の知識というやや一般的・抽象的なものだったが、その後は、より
授業に即した形で知識の必要性を捉え直す傾向が見られる。
- ・ 「面白く、ひきつける授業作り」は一貫して重要なものだと考えられている。前期終了
時には、そのための工夫として身近なものとの関連づけや教師の説明力・表現力が意識
されるようになった。実習修了後には、これらに加えて、考えさせる時間作りやメリハ
リのある授業の必要性も指摘されている。
- ・ 前期には、安全管理の面から、予備実験の大切さが意識されている。実習後は、予備実
験の意味をより広くとらえ、教材研究のための予備実験というとらえに変化している。
- ・ 教育実習終了後は新たなカテゴリーの「理科の教師に必要な力」は出現しない。

全体的な傾向は以上の通りであるが、ふりかえりの中で分かったことは、学生が考える
「理科の教師に必要な力」の構造には、違いが見られることである。大きく言うと2つの
傾向がある。

一つは信頼関係が授業の基盤であって、信頼関係が作れば、授業もスムーズに運営す
ることができるという考え方である。この考え方の学生は、授業の外でも、教師ができる
だけ児童生徒と関わって、児童生徒と親しくすることが大切だと考えている。知識の必要
性は認識しているが、あまり重視はされない。

もう一つの考え方は、信頼関係が作られるためには、まず教師が理科の知識をしっかり
持ち、児童生徒の質問にもきちんと対応できることが大切だというものである。しっかり
した知識があれば、それが授業の構成力を支える基盤となり、信頼関係もできていくとす
る立場である。

良い授業の基盤となるのは、信頼関係なのか知識なのかという重点の違いであり、折り
合えない訳ではないと思われるが、短い振り返りの時間の中では、十分に詰めることがで
きなかった事は課題として残されている。

理科教育法 I・II

三重大学教育学部 理科教育コース

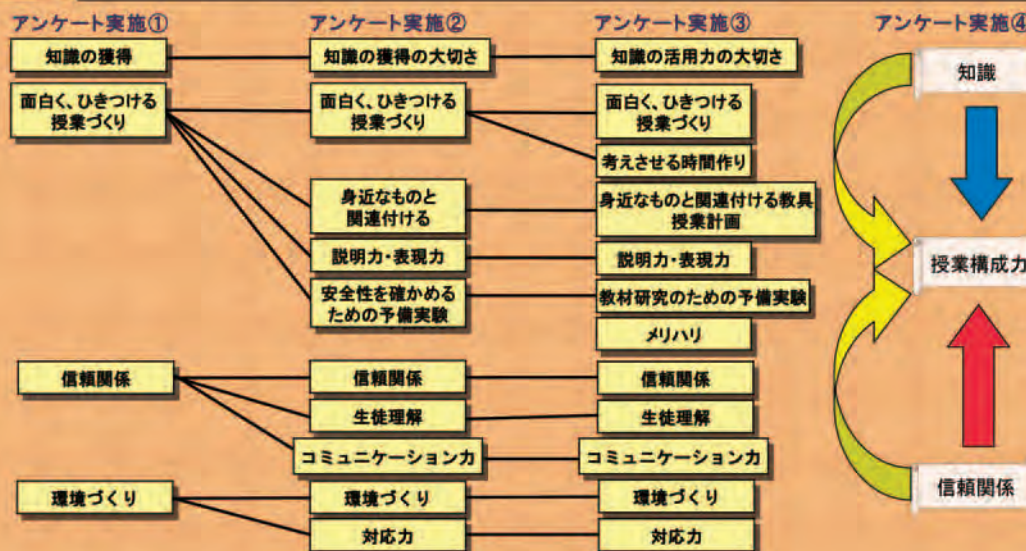
隣接校区への授業支援を活用した『理科教育法』の事例



- 講義 中等理科教育法Ⅰ(前期) 指導教員:平賀伸夫、荻原彰
中等理科教育法Ⅱ(後期) 指導教員:荻原彰、平賀伸夫
- 目的 (前期) 理科授業への心構えや児童生徒への接し方を学ぶ
(後期) Plan-Do-Seeの体験を通じて理科授業の運営について学ぶ
- 活動概要 一身田中学校区の小・中学校における授業補助、実験補助および授業実践
- 学生 三重大学 教育学部 理科教育コース 3年生 20名 ・ 4年生 3名 ・ 院生 1名
技術教育コース 4年生 2名
- 対象学校 一身田中学校 1年生 理科 (受講生 約30名×6クラス)
西が丘小学校 5年生 実験教室 (受講生 約40名×4クラス)
- 期間 前期:5月上旬~7月上旬(全30日間、学生1人あたり4時間担当)
後期:1月上旬~ (全20日間、学生1人あたり3時間担当)
- 課題 4回にわたるアンケートへの記入



アンケート 理科の教師として、どのような力が大切だと思いますか。具体的に記してください。



まとめ

1年間の活動を通して、教師として自分にとって必要なもの足りないものを具体的に自覚できるようになった。

感想・改善点

- ・現場を体験する機会には実際にあまりないので、教育実習前に現場を体験できたことはとてもよかった。
- ・今回6月にも教育実習があったため、学校間での生徒の実状差を経験できるいい機会になったと思う。
- ・2月の段階との比較をする上でも、4月段階でも授業実践を行う必要があるのではないかと思います。

一身田&橋北 Sound Map

三重大学教育学部教育学研究科 2 年：高林朋世・山路淳子

1 年：大久保友加里・立川玲奈

指導教員：三重大学教育学部 根津知佳子

音楽教育コースでは、2006 年度に一身田中学校のコーラスコンクールに参加したことから、一身田地区とのかかわりが始まっている。一身田中学校のコーラスコンクールに大学生が参加するという取り組みはコラボ音楽祭として現在まで継続されている。2007 年度からは大学生が中学校へ行き、日常の合唱練習の支援もおこなわれてきた。今年は橋北中学校においても、コーラスコンクールの交流が始まり、大学院生が中学生の発表を聴き、後日コメントシートを作成して中学生に返すという取り組みをおこなった。

ほかにも、一身田中学における授業実践、白塚幼稚園の音楽活動、南立誠小学校でのハンドベル演奏とトーンチャイム体験、西が丘小学校における箏をつかった音楽授業実践、栗真小学校における合奏支援と演奏活動、白塚小学校での演奏活動など、一身田地区、橋北地区のそれぞれの園や小学校に、大学生と子どもたちの音楽交流が広がってきている。これらの活動は、大学での授業や研究と連動した形式でおこなわれ、各地域での交流は学生にとって大きな学びとなっている。

2009 年度、白塚幼稚園では、継続的に音楽活動の交流をおこなってきた。11 月には、音楽療法演習の授業を通して、白塚地域の敬老会での音楽劇の発表を一緒におこなった。この活動では、園児の練習風景の見学から始まり、2 回のリハーサル、本番と、約 1 カ月にわたって園児たちとともに音楽をつくっていった。

活動にかかわった学生は初めて幼稚園を訪問して、「幼稚園の子どもというと、元気でやんちゃなイメージがあったけれど、はじめはこちらの反応をみているんだなと思った」「押してみたり引いてみたり（園児が）相手の様子をみている」など、園児とかかわって受け取った感覚から、応答的にかかわるということに気づいている。その感覚をもとに、「安心して表現してもらうためには、自分たちがどんな伴奏をしようか」など、楽器の選び方、編曲の仕方など実際の活動に生かしていった。

このように、大学の授業で学んだ理論をもとに、授業実践の計画やそれぞれの園や小学校にあった演奏活動のプログラムを作成し、現場に赴く。そして現場の子どもたちとの交流で感じたこと、気付いたことを記録の作成や振り返りを通して言語化する。そして再び大学の授業で、子どもの発達について、また人と音楽でかかわることの面白さや繊細さについて、知識や理論と結びつけて学んでいくことができる。昨年中学校での授業実践にも参加した学生は、白塚幼稚園での活動について「(中学生とは)一緒に音楽をやるという感じだったけれど、今回は“のってきてもらう”という感じ。杵をつくった」と、それぞれの場に適した音楽活動を展開したことを振り返っている。

一身田地区・橋北地区のそれぞれの地域で、幅広い年齢層の人々と一緒に音楽を通して交流している学生同士がともに活動することで、それぞれの視点での気付きがあり、学びあうことができると感じている。

一身田 & 橋北 Sound Map

教育学研究科: 高林朋世・山路淳子
大久保友加里・立河玲奈
指導教員: 根津知佳子

音楽教育コースでは、一身田地区・橋北地区の幅広い年齢層の人たちと音楽を通して交流しています。それぞれの場所の活動に参加した学生が、授業で出会い、活動計画をたて、振り返りをおこなうことでより学びが深まっていくと感じています。

白塚幼稚園

10月: 敬老会で「はらぺこあおむし」の音楽劇支援・発表

学生の声...

「幼稚園児って、元気でやんちゃなイメージがあったけれど、はじめはこちらの反応をみているんだな」
「子どもたちが安心して演奏するためには、どんなふうに編曲しようか」
「1か月で子どもたちはこんなに変わる」
「自分たちは音楽で子どもたちがのる“枠”を提供できた」

12月: トーンチャイム活動

12月21日の記録:

子どもたちは私たちがトーンチャイムを入った大きなかぼと布をもって教室に入ると、「赤ちゃんだ!」「赤ちゃんのミルクとか入ってる」と、「赤ちゃんがやってきた」お話が始まっていった。中からトーンチャイムが出てくると初めて見る楽器に一人ひとりがどうやって音が出るのか、振ってみたり、「これがスイッチ!」と押してみたり。そのうちかい君が「てやっ」と力いっぱい楽器を振ってみると、その力とは逆のような柔らかい音が聴こえた。みんなはわっと集まり、かい君をみて大事そうにトーンチャイムを振り、音に耳を傾けているようだった。



1月: ハンドベル活動

1月27日:
ハンドベルで「きらきら星」を演奏しました。音を出さないときは楽器を大事に胸の前でもって、自分の番になったら息を合わせて。みんなでひとつの音楽ができました。

一身田中学校

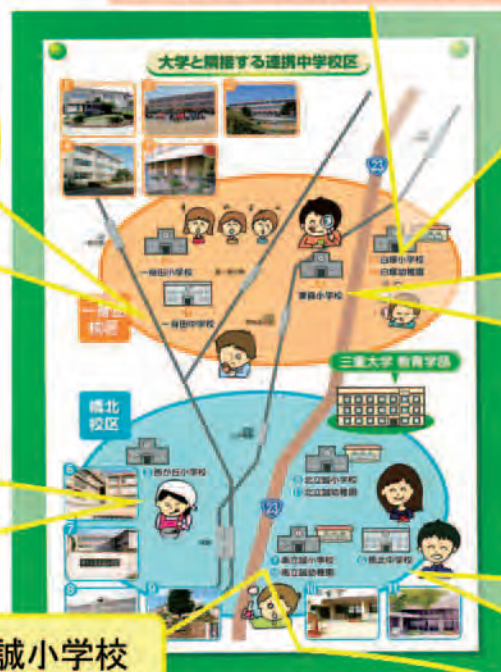
2006年度からコーラスコンクールに大学生も参加しています。2007年度からはクラスに大学生が入り、合唱練習の支援もしています。

西が丘小学校

小学校の先生が、大学に来て勉強しています。今年は大学で研究を行いながら、「箏」を使った音楽の授業実践を行いました。

南立誠小学校

2年生の子どもたちと一緒にトーンチャイム活動を行いました。はじめて触る楽器でしたがみんなでよく聴き合い、あわせて音を出しました。



栗真小学校 白塚小学校

栗真小では連合音楽会の合奏練習支援をおこなっています。白塚小と栗真小では、クリスマス会や6年生を送る会で、演奏を通して交流をしました。

橋北中学校

今年からコーラスコンクールでの大学生との交流が始まりました。中学生のステージを大学生が聴き、コメントシートを作成しました。

食物分野における小・中学校との連携

家政教育講座 磯部由香

平島 円

1. 活動内容

平成 21 年 10 月～12 月にかけて、一身田・橋北地区の小・中学校と食物分野において連携活動を行った。活動の概要について、教科ごとにまとめる。

(1) 家庭科における活動

栗真小学校、西が丘小学校では「弁当作り」、南立誠小学校では「昼食作り」の授業において、献立作成・実習計画・調理実習の補助を行った。栗真小学校からは、子どもたちの振り返りプリントの冊子をいただき、学生が回覧して振り返りを実施した。

一身田中学校、橋北中学校では調理実習の補助を行った。

(2) 生活科における活動

一身田小学校、栗真小学校において、「さつまいもの蒸しパン作り」の調理実習の補助を行った。栗真小学校からは子どもたちの振り返りカードの一部をいただき、学生が回覧した。

(3) 総合的な学習の時間における連携

北立誠小学校において、食に関する「模擬授業」を行った。「小学校専門家庭 C」の受講生 48 名を 6 班に分け、6 種類のテーマを与え、それぞれのテーマに沿った授業内容を考えさせた。事前に北立誠小学校で学生の授業案をもとに時間と内容に関して打ち合わせを行い、スムーズに活動を行うことができた。小学生に行った模擬授業の感想のアンケートを集計し、学生の反省とともにレポートとしてまとめ、北立誠小学校にお礼として提出した。

西が丘小学校では、「豆腐作り」の調理実習の補助を行った。事前に大学にて打ち合わせを行い、学生たちの補助内容についての詳細な説明を受けた上で活動を行うことができた。

上記の活動に参加した学生には、さまざまな気づきがあったようである。特に、子どもの発達段階に応じた実習の指導方法を知るとともに、実習のような体験活動の学習における有効性についても実感したようである。図 1 に学生の振り返りの一例を示す。

教育ボランティア活動 報告書	教育ボランティア活動 報告書
学籍番号 名まえ	学籍番号 名まえ
・活動日：2009年11月9日	・活動日：2009年11月9日（月） 1～4時限
・学校：西が丘小学校	・学校：西が丘小学校
・クラス：3年	・クラス
・教科：生活	・教科：総合
・活動内容： ガスコンロに火をつける、にがりに豆乳を入れる、子どもたちの作業の補助	・活動内容： 豆腐作りの調理補助
・授業について気づいたこと 子どもたちは事前の授業で自分たちの役割をすでに決めてあったので、スムーズに作業を進められていた。次に何をやるかきちんと把握していて、混乱もなく、班で協力して豆腐作りができていたと思う。ただ、子どもたちは何にでも興味関心を持つので、やはり自分たちで火を使わせるのは危ないだろうと感じた。 1・2限での豆腐作りの失敗から「にがりに豆乳を熱いよく入れる」というアドバイスを頂いていたので、うまく豆腐を固めることができた。授業を行う際には、事前に十分な準備と予習が大切だと感じた。教育実習に行った時に心がけようと思った。	・授業について気づいたこと まず、一度でも実際に予行演習を行うことは重要だと感じた。 当日の1・2時限目では、打ち合わせで貰ったプリントや先生方からの話を元に何度もイメージトレーニングをしたにも関わらず、失敗することが多かった。また子どもたちに聞かれた事に答えられないことも多くあふたと作業してしまい、自分の混乱が子どもたちに伝わってしまったのではと心配だった。 一方、3・4時限目では一度実際に行った為作業工程も頭にしっかり入っており、前回での反省点を生かすことも出来たので、スムーズに出来たように思う。精神的にも1・2時限目よりも気楽にすることが出来、技術面でも精神面でも、一度実際に作業を行うことは重要だと感じた。 今回自分たちは「補助」という形だったが、もし教員の立場に立ったとき、予習不足から来る失敗は教員の責任だな、とも思った。
・子どもたちについて気づいたこと 豆腐とおからが子どもたちに大人気で、とても驚いた。私は最近の子は豆腐やおからは全然食べないと思っていたので驚いた。また、「美味しい」と何回も言っていたことも印象的だった。 そして、3年生は幼いけれど、自分の役割をしっかりと把握して作業を進めていたことに感心した。先生の言うことをよく聞いて、指示に従うことができていた。私が思っているよりも、小学3年生はしっかり作業ができるということに驚いた。	・子どもたちについて気づいたこと もっと、作業をやりたがりやの子ややりたがる子。“暴君（言い方は悪いが）”などがいるのではないかと緊張して臨んだが、そういった事はなく想像以上にスムーズに作業は進んだ。子どもたち自身がしっかりしていたからかもしれないし、あるいはきちんと役割分担が設定されていたからかもしれない。 また、子どもたちと自分はほぼ10才離れているが、当時の自分たちと今の子どもたちでは、「先生のOKサイン」や下品なギャグなど、あまり変わっていないという印象も受けた。
・その他、感想・反省など。 今回の授業補助では、現場で子どもたちの様子を実際に見て、感じる事ができて、とても貴重な経験ができた。私は来年、附属小学校に教育実習に行くことになっているので、実際の小学生の様子を見た事で、教育実習での授業をイメージしやすくなったと思う。今回の授業補助で感じた子どもたちの様子を忘れずに、来年の教育実習に活かしていきたいと思った。	・その他、感想・反省など。 反省：一度実際に授業内容を行うことは重要だと感じた。 感想：まだ子どもとのコミュニケーションの取り方に慣れていないと思った。だからこういった教育ボランティアに参加出来る機会があれば、出来る限り参加して慣れていきたいと思う。

図 1 学生の振り返りの一例

2. 今後の課題

上記に示した「小学校専門家庭 C」以外にも、取り組みの一部は「教育実地研究」、「調理科学」、「食物学特論演習 I」の授業において実施したが、ほとんどが大学の授業における活動として位置づけることができず、取り組みごとに希望する学生を募るという形になったことから、実践的指導力を持った教員の育成という視点としては、効果的に行うことができなかった。

また、単発の連携が多かったため、事前の打ち合わせが不十分であったり、一部の実践では小学校側に活動後の振り返りを依頼したが、十分な時間がとれなかったりした。次年度は、事前打ち合わせ→教材についての検討→授業補助・参観→振り返り→学生自身の省察のサイクルで実施し、効果的な連携を行っていきたい。また、学生の学年に応じて連携内容を考慮し、省察方法についても検討すべきであると感じた。

近隣小・中学校における 食物分野での連携

学生：家政教育・消費生活科学コース他
担当教員：磯部由香、平島円

1. 活動内容

一身田小学校
2年生
生活科
さつまいもの調理

西ヶ丘小学校
3年生
総合学習
豆腐作り

西ヶ丘小学校
6年生
家庭科
弁当作り

栗真小学校
6年生
家庭科
弁当作り



南立誠小学校
6年生
家庭科
昼食作り

栗真小学校
1、2年生
生活科
さつまいもの調理

北立誠小学校
5年生
総合学習
食関連の模擬授業

一身田中学校
2年生
家庭科
ニジマスの調理

橋北中学校
2年生
家庭科
豚肉の生姜焼き 他

2. 学生の振り返り

活動後には、任意で振り返りシートに記入をし、提出させた。

(項目：活動内容、授業を見て思ったこと、子どもたちについて気づいたこと、その他)

1年生

- ・自分が小学校を卒業してから随分とたったのでどんなのだろうと楽しみにしていました。いざ行ってみると先生の陰の努力がたくさんあることに気づきました。
- ・子どもたちは想像以上にしっかりしていて驚きました。
- ・今回自分たちは「補助」という形だったが、もし教員の立場に立ったとき、予習不足から来る失敗は教員の責任だな、とも思った。

2年生

- ・先生の発言が「～してくれてありがとう」「～くんががんばってるね」など子どもをほめることが基本の話しかけだった。
- ・今回の授業補助では、現場で子どもたちの様子を実際に見て、感じる事ができて、とても貴重な経験ができた。私は来年、附属小学校に教育実習に行くことになっているので、実際の小学生の様子を見た事で、教育実習での授業をイメージしやすくなったと思う。

3年生

- ・誰かが代表して調理を行う班、どの子も平等になるように、順番をじゃんけんなどで1つ1つ決めて調理を行う班など、班によって子どもたちのルールが違うため進度に差が見られた。
- ・班内でのケンカがあったりと、こちらが考えている以上に子どもが活動を行うには時間がかかったり、問題が発生してしまうことがよくわかり、1人で子どもたち全員に目を配るのはすごく大変だと思った。

4年生

- ・学校という実際の現場の中での取り組みに参加することで、その大変さや自分が教師となった時のイメージを膨らませることができたのが良かったと思う。
- ・たくさんの学校、そして子どもをみる事ができ、来年から教壇に立つにあたっての心構えそして今の自分には足りないものを知ることができた。

3. 今後の課題

今年度は、単発の連携が多かったため、学生の教師力を育てること有効な活動であったとは言い難い。次年度は、事前打ち合わせ→教材についての検討→授業補助・参観→振り返り→学生自身の省察のサイクルで、効果的な連携を行っていきたい。また、学生の学年に応じて連携内容を考慮し、省察についても検討すべきであると感じた。

児童の身体活動量増加と体力向上を目指した実践とその効果

保健体育コース 58 期 206041 加藤真史
206151 山崎智己
指導教員 富樫健二

I. 緒言

近年我が国では、遊び場や遊び時間の減少によって児童の遊びが変化している。それに伴い、児童の身体活動量の減少と体力の低下が問題となっている。毎年全国の小中学校で実施されている文部科学省の新体力テストの結果における子どもの体力は、1985 年頃を境に低下傾向を示している。

児童の身体活動量の減少、体力の低下は小児期の健全な発育発達を妨げるだけでなく、生活習慣病へのリスクの増大にも大きく関与しているなど多くの問題がある。

我が国では子どもに関して、中央教育審議会答申において「子どもの体力向上のための総合的な方策」が打ち出され、体力向上のため各学校において様々な取組がなされている。しかし学校内だけの取り組みには限界があり、地域との連携が必要であるが学校外での実践例は少ない。

そこで本研究では、学校外の活動の場として放課後の学童保育に注目し、学童保育に通う小学校中高学年児童を対象とし、児童の身体活動量の増加と体力の向上を目指した運動指導を継続して行い、その効果と課題について検討し、これからの学校現場や地域との連携の場における資料とすることを目的とした。

II. 調査対象及び方法

1) 対象及び期間

M 県内の学童保育に通う中高学年の児童 45 名を対象に運動指導を行う群(以下「運動指導群」、男子 13 名、女子 15 名)と、運動指導は特に行わず健康教育を行う群(以下「健康教育群」、男子 6 名、女子 11 名)を設定した。

調査期間は 2009 年 9 月上旬から 2009 年 12 月上旬の 3 ヶ月間とし、1 ヶ月ごとに第 1 期から第 3 期に分けた。運動指導群へは週 2 回、1 回 1 時間程度の運動指導を、健康教育群へは月 1 回程度の健康教育を、三重大学保健体育科の学生である著者らが指導者として行った。

2) 測定項目及び方法

以下に示す測定項目を介入期間の前後で測定し、運動指導群、健康教育群間において介入前、介入後それぞれの平均値の比較を、各群において介入前後の平均値の比較を行った。また新体力テストについては、介入前後における変化率を算出し、その平均値について両群間で比較を行った。

①身体計測

各児童の身長、体重、体組成を測定した。

②新体力テスト

文部科学省発令の新体力テストの 8 種目を測定した。総合評価には記録を得点化し、その合計得点を用いた。

③身体活動量

万歩計を用いて、介入前と介入中の学童保育活動時間中における歩数を測定した。比較を容易にするため 1 時間当たりの歩数を算出した。

④質問紙調査

運動習慣や生活習慣に関する調査を行った。

III. 結果及び考察

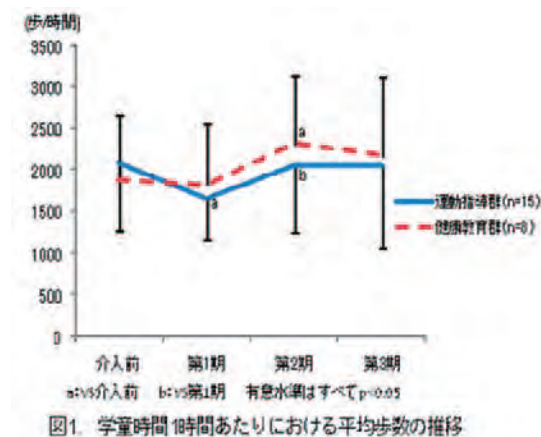
1) 形態

各群における介入前後での比較では、両群ともに身長、体重、体脂肪率において介入後が介入前より有意に高い値を示した($p<0.05$)。また身長の変化率において、健康教育群($1.4\pm0.6\%$)が運動指導群($0.9\pm0.6\%$)に対して有意に

高い値を示した($p<0.05$)。

2) 身体活動量

運動指導群において、第1期の歩数(1653.2 ± 495.5 歩/時間)は介入前(2075.2 ± 814.4 歩/時間)よりも有意に低い値を示し($p<0.05$)、第2期の歩数(2055.3 ± 806.4 歩/時間)は第1期(1653.2 ± 495.5 歩/時間)よりも有意に高い値を示した($p<0.05$)。また健康教育群において、第2期の歩数(2305.3 ± 822.0 歩/時間)は介入前(1885.8 ± 763.2 歩/時間)よりも有意に高い値を示した($p<0.05$) (図1)。全体的に運動指導群の活動量のほうが低い値となっていたのは、指導者である我々が児童の自由な活動を制限してしまったためと考えられ、今後は児童らの活動に助言を与えるような支援者的に行う介入が必要であると考えられる。



3) 新体力テスト

新体力テストの結果を表1に示した。介入前における両群間の比較では、20m シャトルランにおいて運動指導群が健康教育群よりも有意に高い値を示した($p<0.05$)。各群において介入の前後における変化を検討したところ、運動指導群では上体起こし、反復横とび、合計得点において介入後有意に高い値を示した($p<0.05$)。健康教育群では上体起こし、反復横とび、20m シャトルラン、50m 走において介入後有意に高い値を示した($p<0.05$)。介入後における両群間での比較では、すべての項目において有意な差

は認められなかった。次に、介入前後における測定値の変化率について両群間で比較を行ったところ、50m 走において運動指導群が健康教育群よりも有意にタイムが短くなり、20m シャトルランでは健康教育群が運動指導群よりも有意に記録が伸びていた($p<0.05$)。有意差は出ないまでも、運動指導群では上体起こし、長座体前屈、反復横とび、ソフトボール投げ、合計得点において健康教育群よりも変化率が大きかった。また個々人で見たときに、運動指導群のほうが健康教育群以上に体力の向上をしていた児童が多くみられた。これらのことから、専門的な立場の者による計画的な運動指導が健康教育を行うだけの介入よりも児童らの体力向上に向けた取り組みとして効果的である

可能性が示唆された。

3) 質問紙調査

運動に対する意識や運動頻度については介入前後で両群に有意差は認められなかった。これは介入前の段階から両群ともに高い意識を持ち運動量も確保されている児童が多かったためと考えられる。

IV. まとめ

今回の介入では、学童保育が取り組みの場として有効である可能性は示されたが、体力に関して向上傾向を示すにとどまり、介入方法や介入期間を改善していくことが課題として明らかにされた。

また3か月という短い期間ではあるが、実践を通して児童の体力低下という問題に直面することができたことは、これから教員を目指す我々にとって非常に貴重な体験となった。この実践を通して実際の教育現場で活動したり、子どもらと触れ合ったことで、教員になるにあたって必要な力を身につける上で有効であったと感じている。今後は我々が教員となり学校や地域と連携しよりよい活動プログラムを構築していけるよう努力する必要があることを実感した。これからも学生が教育の現場に入るカリキュラムが必要だと考えられ、より多くの機会の提供や環境の充実が望まれる。

表1. 対象者における新体力テストの結果及び介入前後の変化率

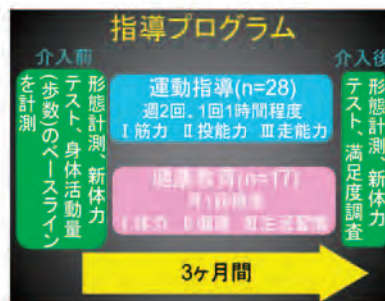
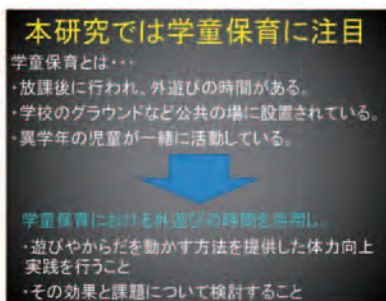
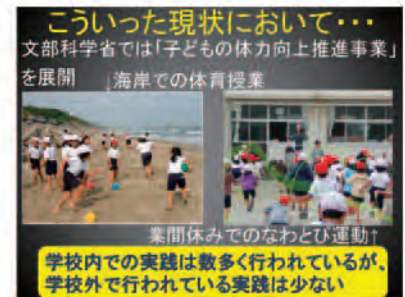
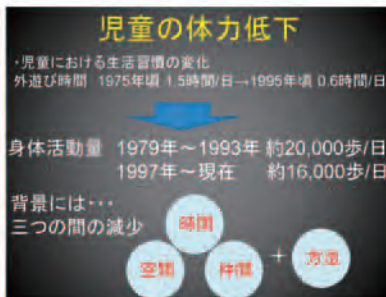
	運動指導群 (n=15)			健康教育群 (n=14)		
	介入前	介入後	変化率(%)	介入前	介入後	変化率(%)
握力 (kg)	14.1±4.4	14.2±3.6	2.7±16.1	14.9±2.7	15.6±3.2	4.9±10.2
上体起こし (回)	11.9±6.5 ^a	15.0±6.0 ^b	89.1±231.0	16.4±4.2	18.7±4.3 ^b	18.0±23.7
長座体前屈 (cm)	34.4±5.8	35.2±6.4	3.2±16.8	36.0±4.4	35.3±8.5	-1.9±20.5
反復横とび (回)	32.6±4.0	39.0±4.9 ^a	21.0±20.7	32.6±4.5	37.9±4.9 ^b	16.9±11.2
立ち幅とび (cm)	131.7±13.2	133.5±15.2	1.7±11.0	125.9±19.2	126.4±16.4	2.6±21.5
50m走 (秒)	10.1±0.6	9.9±0.7	-2.0±6.0	9.8±0.8	10.1±0.8 ^b	3.2±4.0 ^b
20mシャトルラン (回)	47.9±14.2 ^a	45.0±17.8	-5.5±21.0	31.9±16.3	40.6±16.5 ^a	36.0±41.0 ^a
ソフトボール投げ (m)	17.4±5.3	18.7±6.3	8.4±20.9	20.1±8.3	20.7±8.9	3.0±14.3
合計得点 (点)	47.2±7.0	50.3±7.9 ^a	6.5±7.7	49.1±7.6	51.6±9.4	5.1±9.8

同時期の測定値について両群間で有意差があった場合
各群の測定値について介入前後で有意差があった場合
変化率について両群間で有意差があった場合
有意差はすべて $p<0.05$

平均値±標準偏差

児童の身体活動量増加と体力向上を目指した実践とその効果

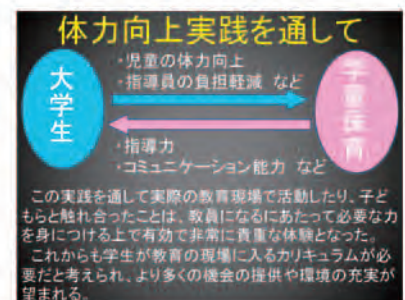
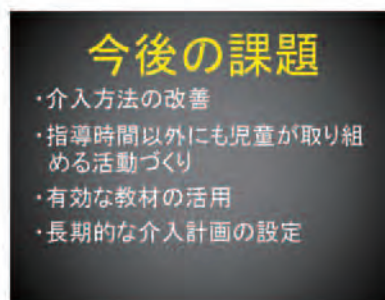
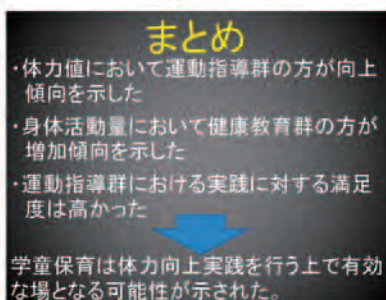
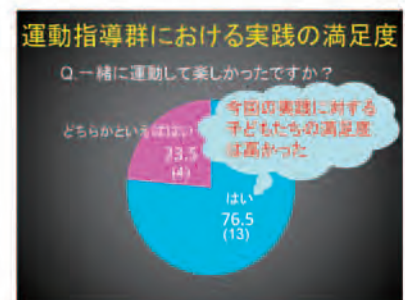
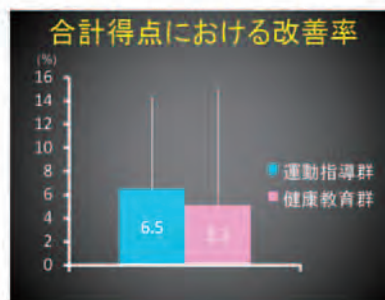
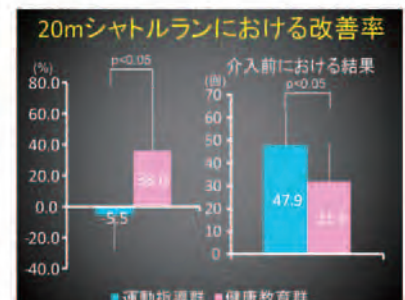
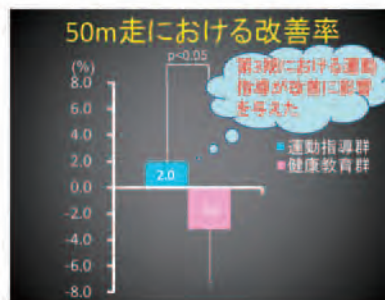
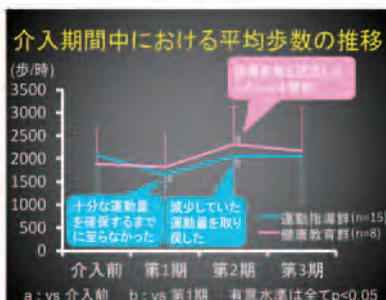
保健体育コース58期 206041 加藤真史
206151 山崎智己
指導教員 富樫健二



介入前後における身体的特性の変化

	運動指導群 (男児6名 女児9名)		健康教育群 (男児5名 女児9名)	
	介入前	介入後	介入前	介入後
年齢(歳)	8.9±0.9	8.8±0.9		
身長(cm)	133.1±7.5	134.3±7.2	132.2±6.4	134.0±6.9
体重(kg)	31.1±7.1	32.8±7.3	31.0±6.7	32.5±6.7
体脂肪率(%)	19.2±4.0	21.1±4.3	19.4±5.7	22.2±5.9

平均値±標準偏差



「ちゃんと子どもする」ということ

— 白塚幼稚園における親子活動から —

報告者：○廣智恵里・伊藤茂子・高城 稔

遠島 萌・藤村麗佳(保健体育3年)

指導教員：山本俊彦・岡野 昇

KW: ハラハラ・ドキドキ, 信頼, 共感

1. はじめに

私たちは、「総合演習」という専門授業の一環として、白塚幼稚園(以下、白塚幼)において、親子活動を行った。子どもたちは、高いところに登る・飛び降りる・足場が不安定なところに立つなど、普段から「ハラハラ・ドキドキ」を求めているように感じられる。しかし、親の「危ないことから子どもを守ろうとする想い」が先行し、子どもから楽しみを奪う結果になっているのではないかと考えた。そこで、あえてスリルを体験できる活動を用意することにした。子どもたちが「ハラハラ・ドキドキ」の世界を前にして、その楽しさに浸ったり、恐怖の世界に挑戦しようとしたりと、ありのままの自分でその世界に夢中になることを「ちゃんと子どもする」と捉え、それをテーマに今回の親子活動を行った。

2. 授業実施概要

①実施日時: 2009年6月13日(土)

9時30分～11時

②実施場所: 白塚小学校(体育館)

③参加者

- ・白塚幼: 4歳児8名, 5歳児10名, 保護者23名, 教職員5名
- ・三重大大学教育学部学生3年5名

3. 活動概要

全ての活動を「宝探しにいこう」というストーリーに沿って行った。①体ほぐしの運動を取り入れた「準備運動」、②親が作った丸太の橋が動く「丸太ころがり」、③親が四つん這いになりつながって作った橋を渡る「グラグラ橋」、④舞台の上に投げられる「がけのり」、⑤舞台の上から転がり落ちる「がけジャンプ」、⑥Gボールを用いる「ぽにょボール」の6つの活動を行った。

4. 考察

子どもたちは、不安定さや体が宙に浮く「ハラハラ・ドキドキ」の世界を楽しんでいた。この日行った活動は、自分一人で成立させることができないものばかりで、大人を信じて身を任せることで初めて「ハラハラ・ドキドキ」の世界を堪能できるものである。このことから、「ちゃんと子どもする」ためには他者とのかかわりが重要であることが考察された。中には、恐怖でなかなか取り組めない子もいた。しかし、その世界に近づこうとすることこそ感じる恐怖は、決してマイナスなものではなく、「ハラハラ・ドキドキ」の世界に浸ろうとした証なのではないだろうか。

また保護者からは、普段はできないような運動を楽しんだり、活動に挑戦しようとする様子がうかがえた。そのような保護者の姿が、子どもたちの「楽しそうだな、やってみよう」という気持ちを引き出す要素になっていたものと考えられる。

5. まとめ

「ちゃんと子どもする」ことは、ただ「ハラハラ・ドキドキ」できる場を設定するだけでは成立しない。「ちょっとこわそうだけど、おもしろそう」という、子どもたちの冒険心を駆り立てる活動を提供することに加えて、他者(今回の場合は保護者)と信頼し合うこと、気持ちを共有し合うこともその条件となる。今回の親子活動では、運動を楽しんだり、挑戦したりする保護者の「ちゃんと子どもする」姿が、子どもたちの「やってみよう」という気持ちを助長していたものと考えられる。

私たちは、こうした「ハラハラ・ドキドキ」の世界を提供することだけでなく、こうした信頼関係や共感を生み出す場づくりも大切であることを学んだ。

白塚幼稚園 親子活動

親子活動

3. 活動内容



1. 活動の経緯 ～なぜ「ちゃんと子どもする」ことが大事？～

私たちは、「総合演習」という授業の一環で、2009年6月13日(土)に津市立白塚幼稚園で親子活動を行った。活動内容を考える際に、子どもは「ハラハラ・ドキドキ」する遊びが好きだという意見が出た。子どもは、高いところに登る・飛び降りる・足場が不安定なところに立つなど、確かに普段から「ハラハラ・ドキドキ」を求めている。しかし親は、子どもが危険なこと・ケガにつながることをしないかと心配し、その危険から子どもを守ろうとする思いが先行し、子どもから楽しみを奪ってしまう結果になっているのではないかと考えた。そこで、あえてスリルのある活動を提供することで、子どもが心から「ハラハラ・ドキドキ」の世界に浸ることができるように、つまり「ちゃんと子どもする」ことができるような活動を考えてみた。

2. 学生のねらい ～ちゃんと子どもするとは？～

私たちは、「ハラハラ・ドキドキ」の世界を前にして、その楽しさに浸ったり、恐怖に挑戦しようとしたりと、ありのままの自分でその世界に夢中になることを「ちゃんと子どもする」と捉えた。その「ちゃんと子どもする」ということを明らかにするため、「ハラハラ・ドキドキ」の世界に誘い込めるような活動内容を企画した。

4. ふりかえり

子どもたちは、不安定さや体が宙に浮く「ハラハラ・ドキドキ」を楽しんでいた。どの活動も、自分ひとりでは成立させることはできないものばかりで、大人を信じて身を任せることで初めて「ハラハラ・ドキドキ」の世界を堪能できるものである。このことから、「ちゃんと子どもする」ためには他者とのかわりが重要であることが考察された。中には、恐怖でなかなか取り組めない子もいたが、その世界に近づこうとするからこそ感じる恐怖は、決してマイナスのものではなく、「ハラハラ・ドキドキ」の世界に浸ろうとした証なのではないだろうか。

また保護者からは、普段はできないような運動を楽しんだり、活動に挑戦しようとしていたりする様子が見えた。そのような保護者の姿が、子どもたちの「楽しそう・やってみたい」という気持ちを引き出す要素になっていたのではないだろうか。

「ちゃんと子どもする」ためには、ただ「ハラハラ・ドキドキ」できる場を設定するだけでなく、他者(今回は保護者)と信頼し合うこと、気持ちを共有し合うこともその条件となる。私たちはこうした「かわり合い」を生み出せるような場づくりの大切さを学んだ。

報告者 ○廣智恵里・伊藤茂子・高城 稔

藤村麗佳・遠島 萌(保健体育コース3年)

指導教員 山本俊彦・岡野 昇

白塚幼稚園での未就園児保育の運営 ：ぴよんちゃんクラブ・みんなで子育て 09

三重大学教育学部幼児教育コース 4 年

鈴木麻友・高瀬由美子・辻彰士・成実由希子・水谷りさ

指導教員：三重大学教育学部 滝口圭子

「ぴよんちゃんクラブ」とは、津市立白塚幼稚園が地域に公開している未就園児保育である。この「ぴよんちゃんクラブ」の運営に、三重大学教育学部幼児教育コースの学生が参加させていただくようになってから、早いもので 3 年が過ぎようとしている。「ぴよんちゃんクラブ」の対象は、地域の保護者と子ども（0～3 歳）であり、例えば白塚幼稚園への入園予定はなくとも参加可能である。原則として、毎週火曜日に実施しているが、参加者の固定を目指しているわけではないので、開催日によって参加者数に変動がある。運営グループメンバーは、白塚幼稚園園長浅田美知子先生、白塚幼稚園保護者ボランティアの皆さん、幼児教育コース 4 年生の鈴木麻友、高瀬由美子、辻彰士、成実由希子、水谷りさであった。学生は、前期は平成 21（2009）年 5 月から 7 月まで、後期は平成 21（2009）年 10 月から平成 22（2010）年 1 月まで、原則として毎週参加した。「ぴよんちゃんクラブ」の当日の流れを表 1 にまとめた。本活動は、平成 21（2009）年度教育実地研究の授業として単位認定を行った。授業の目的は、公立幼稚園で毎週実施されている未就園児保育の運営に関わり、保育内容の一部を企画、創作、実演することを通して、それまで培ってきた実践力をより確かなものとすると同時に、公立幼稚園が担う地域の子育て支援の具体的内容を知り、その課題と具体的対策について考察することとした。学生は、毎回の活動後に、当日観察した子どもや保護者の様子を実践記録ノートにまとめて提出した。提出された実践記録ノートは、毎回滝口が目を通し、必要に応じてコメントを書き込み学生に返却した。また、教育実地研究終了後に最終レポートの提出を求めた。最終レポートの作成に当たっては、自らのぴよんちゃんノートを見返しながら、課題点、反省点、約 1 年を経ての変容の有無、変容の具体的内容や変容の契機等について記述するよう指示した。

表 1 「ぴよんちゃんクラブ」当日の流れ

9:30～10:30am	登園 ・挨拶をする ・出席ブックにシールを貼る 自由遊び ・粘土・お絵描き・ままごと・ブロック遊び 等
10:30～10:40am	片付け
10:40～11:00am	設定遊び ・手遊び・歌・リズム遊び・絵本の読み聞かせ 等
11:10am～	降園 反省会

白塚幼稚園での未就園児保育の運営

ぴよんちゃんクラブ:みんなで子育て09

鈴木麻友・高瀬由美子・辻彰士・成実由希子・水谷りさ

三重大学教育学部 幼児教育コース4年

指導教員:滝口圭子

ぴよんちゃんクラブとは

- 近隣の保護者と子どもが参加
- 子どもの年齢:0歳~3歳
- 毎週火曜日実施
- 運営グループメンバー
 - ・白塚幼稚園 浅田美知子園長
 - ・白塚幼稚園保護者 お母さん先生 8名
 - ・学生 5名



ぴよんちゃんクラブの意味

● 地域密着型子育て支援

保護者同士が、子育てに関する悩みを打ち明けることなどを通して、お互いの思いに共感し合い、そして安心を抱いて帰ることができるような場の提供。

● 未就園児を対象とした保育

入園を予定している園児の、入園に対する抵抗感を和らげる。

1日の流れ

9:30	あいさつをする
～	出席ブックにシールを貼る
10:30	自由遊び
～	粘土・お絵描き・ブロック 等
10:30	片付け
10:40	設定遊び
～	手遊び・歌・絵本・リズム遊び 等
11:00	降園
11:10	反省会



自由遊びでの親子の様子

- 各コーナー(粘土、ままごと、ブロック、大型積み木等)の遊びの中から、子ども自らが選んで遊ぶ。

- 秋頃から友達と一緒に遊ぶ姿が見られた。

- 保護者同士の関係が広がっていった。



学生が学んだこと

- 保育室全体が見渡せる位置に座る。
- 全体を見て、自分がすべきこと、できることを考えて動く。
- 学生自身が楽しむことで、子どもたちもその場に入りやすくなる。
- 保護者と打ち解けて会話することで、子どもの警戒心が薄れる。
- 個々の発達段階や興味を把握し、次の保育に反映する。

設定遊びでの子どもの様子

- 手遊び・歌・リズム遊び・絵本・劇・パネルシアター 等

- 手遊びやリズム遊びは、繰り返すことで、できなかったことができるようになった。

- 絵本やパネルシアターは、回を重ねるごとに、自分の気持ちを、表情や言葉で表現する姿が見られた。



学生が学んだこと

- 特定の手遊びを、1年を通して毎回行ったことにより、子どもたちの気持ちが切り替わるきっかけとして定着した。
- 育児の最中であるお母さん先生の、子どもに対する表情や雰囲気、言葉がけなど。
- 役割分担やその日の活動の流れに加えて、「活動のねらい」を明確にして共有すること。



まとめ

ぴよんちゃんクラブという実践の場において、様々なことに挑戦させて頂き、更にベテランの保育者やお母さん先生から意見やアドバイスを頂く貴重な機会を得ることができた。

今後、保育現場に出ていく者として、この貴重な経験を生かし、子どもを対象とした保育のみならず、保護者の支援も視野に入れて、尽力し続けていきたい。



暗闇部屋の実践－幼児教育1年教育実地研究基礎－

日時：2009年7月4日 土曜日 9時30分～20時（夏祭り18時～19時）

場所：津市立白塚幼稚園 ゆうぎ室

参加者：三重大学A類幼児教育コース61期生 11名 （担当教員・河崎道夫）

白塚幼稚園の子どもたち、保護者の方々、先生方

「暗闇部屋」とは

おぼけ屋敷と違いただ光がない真っ暗闇を子どもに体験してもらうための部屋。保育実践がこれまである。

さらに今回は「暗闇の中で触覚を感じることを」加えた。

幼稚園と子どもたちに慣れるため2回ほど幼稚園を訪問、子どもたちと遊んだ。

作成

準備：段ボール(約300枚)集め

壁：新聞紙・でんぷんのり・ガムテープ・ペットボトルを使ってまずは壁を作った。窓は業務用の黒いポリ袋で覆い光が入らないように工夫。

床：ただの床・しわくちゃにした新聞紙を敷いた所・プチプチを敷いた所の3か所を用意。

子ども

1人がビデオカメラを回し、外にいる子どもの様子を撮影した。

暗闇部屋のなかには安全のためにも3人が待機し、中での様子も観察した。

一人では入れない子は友達、兄弟、お父さんなどと一緒に入った。

「なかはどうなっているの？」

「ひとりでへいき!!!!」

「ちょっとこわい…」

「どこ～？」「くらいよ～」

「みえないよ～」「こわいよ～」

入り口でピタッと止まり泣くだけで動くことができない子どももいた。

出口から出てきた子はみなすてきな笑顔だった。2度、3度と入る子もいた。

成果

大学生になって初めて自分達の手で、しかも実際の保育現場に関わることを企画・運営する、実施することができた。企画運営の難しさを経験するとともに、共同で一つのことを成し遂げる楽しさ、子どもたちの笑顔の素晴らしさ、そして保育が保育者はもちろん、地域や保護者の協力共同で充実していくことに、改めて気付くことが出来た。

暗闇部屋の実践 — 幼児教育 1 年教育実地研究基礎 —

日時：2009 年 7 月 4 日 土曜日 9 時 30 分～20 時（夏祭り 18 時～19 時）

場所：津市立白塚幼稚園 ゆうぎ室

参加者：三重大学 A 類幼児教育コース 61 期生 11 名（担当教員・河崎道夫）

白塚幼稚園の子どもたち、保護者の方々、先生方

「暗闇部屋を作ろう！！」

「暗闇部屋」と言っても子どもを怖がらせるのが目的のお化け屋敷ではありません。

まずは大前提として「暗闇の中での子どもの様子を観察する。」というテーマがあり

さらにオリジナリティを加えるために「暗闇の中で触覚を感じる」というサブタイトルを付けました。
何も見ることができない状態で、手に触れるもの・足で触れたものを一体子供たちがどう感じ取るのだろうか？

暗い＝怖いという概念の強い幼少期に、果たして触覚という所まで意識が追い付くのだろうか？

このような考えのもとに、どんな構造にしたら良いか、何を使えば良いか
どのように子どもたちに言葉がけをしていくべきなのか、などを考えました。

段ボール(300 枚！！)・新聞紙・でんぷんのり・ガムテープ・ペットボトルを使って
まずは壁を作ります。窓は業務用の黒いポリ袋で覆い光が入らないように工夫。
みんな汗だく……。でもとっても楽しい！
子どもたちも、楽しんでくれるかなあ。



次は床を作ります。

ただの床・しわくちゃにした新聞紙を敷いた所・プチプチを敷いた所の 3 か所を用意。真っ暗な中、子どもたちはどんな風に感じるんだろう？子どもたちに安全に楽しんでもらうためにどんな声かけをしようか、みんなで考えました。

完成して

入口で2人の説明をきいてから入ってもらいました。1人がカメラを回し、外にいる子どもの様子を撮影しました。

暗闇部屋のなかには安全のためにも3人が待機し、中での様子も観察しました。

一緒に入ったのは、友達、兄弟、お父さんが多かったです。なかには一人で入る子もいました。



そのころ、中では…

「どこ〜?」「くらいよ〜」
「みえないよ〜」「こわいよ〜」
という子どもたちの声が聞こえてきました。

子どもたちの声
「なかはどうなっているの?」
「ひとりでへいき!!!!」
「ちょっどこわい…」



怖がって、お父さんに抱っこしてもらっています。

出口では、事前に用意しておいた手作りのクマのメダルを子どもたちにプレゼント。

怖がっている子や泣いて出てくる子もいました。

一方で、楽しいといって何回も入ってくれる子がいました。

「なんかプチプチしとった!!」「足になんか当たった!」
といった声も聞こえました。

最後に、子どもたちと一緒に盆踊りを楽しみました。

盆踊りをしたあとは、みんなで片付け。作るのには時間がかかりましたが、片付けるのはあっという間。片付ける際には先生方や保護者の方々にも協力していただきました。

当初の予定と違ったり、実際にやってみるとどんどん良いアイディアが浮かんだり、子どもたちの楽しそうな姿に元気を貰ったり……。

大学生になって初めて自分達の手で、しかも実際の教育現場に関わることを企画・運営する。このことは私達にとってとても良い経験であったし、また企画運営の難しさ、楽しさ、子どもたちの笑顔の素晴らしさに改めて気付くことが出来ました。

今回の企画にあたってご協力頂いた先生方、保護者の皆さま、そしてなにより楽しく遊んでくれた白塚幼稚園の園児のみなさん、本当にありがとうございました。



生きもの環境作り

三重大大学教育学部幼児教育コース 4 年

奥山木綿子・恒川文香・寺本由佳・中嶋祐太・西口真梨子・平野梢・山崎理沙

指導教員：河崎道夫

●生きもの環境作りとは

三重大大学教育学部幼児教育コースの教員・学生が、幼稚園において子どもたちが生きものなどの自然に関われる環境作りを行った。

●生きもの環境作りの目的

子どもたちが自然と関わる可以增加する機会を増やすことや、保育者を志す学生が幼稚園での環境について考えることを目的としている。

●内容

畑作り…白塚幼稚園の園庭の花壇を耕して畑を作り、子どもたちと共に野菜の苗を植えた。

池作り…附属幼稚園の園庭に、穴を掘って石を敷き詰め、そこに水を流し池を作った。

メダカ捕り…附属幼稚園の近くを流れる川でメダカを捕り、作った池に放した。

●子どもたちの様子

各々の遊びをする傍ら、畑が作られていく様子を気に向け、積極的に学生の手伝いをする様子や、学生が池を作る様子に興味を持ち、「何してるの？」と声をかける様子などが見られた。

●学生が学んだこと

子どもが発見したこと、興味を持ったことに丁寧にに関わり、それをみんなで共有することや、学生自身が、植物、生きものなどについてもっと知識や経験を積み重ねていくことが大切だと感じた。

●まとめ

子どもたちは幼稚園で生きものに関わることで、多くの人と関わり、自分の持つ力を十分に発揮し多くの経験をしている。また、生きもの環境を作ることによって学生もたくさんの経験や知識を得ることができた。さらに、生きもののある環境をきっかけに様々な人間関係が深まり、子どもを取り巻く環境をさらに豊かにしたと考えられる。

生きもの環境作り 公立幼稚園において

奥山木綿子・恒川文香・寺本由佳・中嶋祐太・西口真梨子・平野梢・山崎理沙

三重大学教育学部 幼児教育コース4年

指導教員: 河崎道夫

生きもの環境作りとは

三重大学教育学部幼児教育コースの教員1名・学生7名が津市内の二つの公立幼稚園において、子どもたちが生きものなどの自然に関わる環境作りを行った。

生きもの環境作りの目的

- 自然に囲まれているとはいえない現在の幼稚園において、子どもたちが自然と関わるができる機会を増やすため。
- 保育者を志す学生が、実際に幼稚園において「生きもの環境作り」を行うことで幼稚園での環境について考えるため。

内容

- 畑作り・・・白塚幼稚園の園庭の花壇を耕して畑を作り、子どもたちと共に野菜の苗を植えた。
- 池作り・・・附属幼稚園の園庭に、穴を掘って石を敷き詰め、そこに水を流し池を作った。
- メダカ捕り・・・附属幼稚園の近くを流れる川でメダカを捕り、作った池に放した。

子どもたちの様子

- 各々の遊びをする傍ら、畑が作られていく様子を気にかけて、積極的に学生の手伝いをする。
- 畑に何を植えるのか、自分の好きな野菜の苗はあるのか気になり学生に尋ねる。
- 苗を植える順番がまわってくることを楽しみに待ち、土かけや添え木、水やりもやる気を持って一生懸命行う。

子どもたちの様子

- 手伝いをする中で、学生との会話や、やりとりを楽しむ。
- 苗を植えるなどの初めての作業にとまどいながらも、土の感触を楽しみながら作業を行う。
- 学生が池を作る様子に興味を持ち、「何してるの？」などと声をかける。

学生が学んだこと

- 学生(保育者)自身が、植物、生きものなどについてもっと知識や経験を積み重ねていくこと。
- 子どもが発見したこと、興味を持ったことに丁寧にに関わり、それをみんなで共有すること。
- 大人が率先してやってみせること。
- 興味を持ち、一生懸命取り組んでいる子があり、そのような姿を認めること。

学生が学んだこと

- 「やってみたい！」など園児の気持ちを大切にすること。
- 苗を植えるときなど、子どもに分かりやすい説明をすること。
- 作業中、子どもに遊ぼうと誘われたときの対応。
- スコップや鍬などを使う際、子どもたちにけがをさせない配慮。

まとめ

子どもたちは幼稚園で生きものと関わることで、多くの人と関わり、自分の持つ力を十分に発揮し多くの経験をしている。また、生きもの環境を作ることによって学生もたくさんの経験や知識を得ることができた。さらに生きもののある環境をきっかけに様々な人間関係が深まり、子どもを取り巻く環境をさらに豊かにしたと考えられる。

北立誠幼稚園での未就園児保育の運営 ：たんぽぽ会に参加して

三重大学教育学部幼児教育コース

4 年生：恒川文香・山崎理沙

3 年生：天野由貴・雨皿麻希・伊藤加奈・迫田里紗

佐藤由基・森萌野・山口麻衣・吉村淳美

指導教員：三重大学教育学部 滝口圭子

「たんぽぽ会」とは、津市立北立誠幼稚園が地域に公開している未就園児保育である。平成 20（2008）年度の三重大学祭の折に、「たんぽぽ会」の関係者の方が幼児教育コースの学生が出店したテントに来てくださり、学生が直接「たんぽぽ会」の運営支援の依頼をいただいたという経緯がある。平成 21（2009）年度からは、滝口が窓口となり、有志の学生が「たんぽぽ会」の運営に参加させていただいている。「たんぽぽ会」の対象は、地域の保護者と子ども（0～3 歳）であり、例えば北立誠幼稚園への入園予定はなくとも参加可能である。第 1，第 3 月曜日を中心に月 2，3 回実施しているが、参加者の固定を目指しているわけではないので、開催日によって参加者数に変動がある。運営グループメンバーは、北立誠幼稚園園長小菅なぎさ先生、北立誠幼稚園保護者ボランティアの皆さん、幼児教育コース 4 年生の恒川文香、山崎理沙、幼児教育コース 3 年生の天野由貴、雨皿麻希、伊藤加奈、迫田里紗、佐藤由基、森萌野、山口麻衣、吉村淳美であった。学生の参加日は、平成 21 年 10 月 19 日、11 月 2 日、11 月 16 日、11 月 26 日、12 月 7 日、12 月 16 日、平成 22 年 1 月 13 日、1 月 20 日、2 月 1 日であった。「たんぽぽ会」の当日の流れを表 1 にまとめた。「たんぽぽ会」終了後、学生に最終レポートの提出を求めた。今回の教育フォーラムでのポスター発表に際して学生が挙げた反省点は、「子どもたちとの関わり方がわからず立っているだけのことがあった」「参加者が固定でなかったこともあり名前を覚えられなかった」「園長先生に打ち合わせの連絡をするのが遅かった」であった。

表 1 「たんぽぽ会」当日の流れ

10:00am～	登園 ・挨拶をする ・出席ブックにシールを貼る 自由遊び ・ままごと・粘土・積み木 ジャングルジム・滑り台・砂場 等
11:00am～	片付け 設定遊び ・手遊び・ふれあい遊び・絵本・歌 など
11:30am～	降園
11:40am～	掃除 反省会

北立誠幼稚園における 未就園児保育への参加



三重大学教育学部幼

児教育コース3・4年



三重大学教育学部 滝口圭子



たんぽぽ会



幼稚園に入園していない子どもと保護者が、
園舎や園庭で楽しいひと時を過ごす。

- 開放日：第1・第3月曜日を中心として
月2・3回程度
- 対象：北立誠地区の0～3歳児と保護者
- 運営グループメンバー
 - ・北立誠幼稚園園長小菅なぎさ先生
 - ・お母さんボランティア
 - ・幼児教育コース3・4年生(10名)

自由遊び



当日の流れ



10:00～	登園 ・出席フックにシールを貼る 自由遊び ・おままごと・粘土・積み木・おもちゃ ジャングルジム・すべり台・砂場 など
11:00～	片づけ 設定遊び ・手遊び・ふれあい遊び・絵本・歌 など
11:30～	降園
11:40～	掃除 反省会

制作遊び



学生の出し物



たんぽぽ会に参加して



- 回を重ねるごとに保護者から離れて遊ぶ子どもが増え、保護者同士で安心して話す姿がみられてよかった。
- 今まであまり関わったことのない年齢(0歳～2歳)の子どもたちと関わることができた。
- 保護者の方から、子どもの家での様子などの話を聞くことができた。
- 子どもたちと同じ作品を作らせていただいたり、新しい手遊びを教えていただいたりして、多くのことを学んだ。



反省点



- 活動の最初の頃は、子どもたちとの関わり方がわからず、立っただけであった。
→ 子どもに対しても保護者に対しても、自分から積極的に話しかけるべきであった。
- 参加者が固定でなかったこともあり、名前を覚えられなかった。
→ 1回1回を大切に覚えてられるように努力する。
- 園長先生に打ち合わせの連絡をするのが遅かった。
→ 次回の活動について早めに話し合い、計画を立てて練習に取り組むべきであった。



まとめ



実際の保育の現場において、園長先生やお母さんボランティアの方々、そして保護者の方々から学ぶことが多く、授業ではできない経験ができた。



来年度も、たんぽぽ会の運営のお手伝いをさせていただき予定である。今年度の反省を活かし、参加される親子が有意義な時間を過ごすことができるようなたんぽぽ会を作っていきたい。

北立誠幼稚園ものづくり出前授業の報告

教育学部技術教育コース 技術科教育研究室

1. 出前授業の目的

現在、子どもたちのものづくり離れが進んでいると言われています。ものづくりに対する興味・関心は幼い頃から培われるため、幼稚園時代のものづくり体験はとても重要です。そこで、この出前授業では、子どもたちに作る楽しさを実感してもらうことを目的として、いろいろな工具や素材を使い、恐竜ロボットを作ってもらいました。



図1 製作する恐竜ロボット（見本）

2. 題材：「ジュラシックパークで遊ぼう」について

今回の授業では、題材として簡単な恐竜ロボットの製作を取り上げました。モータの振動で動くロボットを作ることにより子どもたちにもものづくりの楽しさと、自分が作ったもので実際に遊ぶ楽しさを体験してもらうことを目的としてこの題材を設定しました。

3. 活動内容

(1) 対象：年長児9人、年少児18人

(2) 日程：打ち合わせ 10月14日（水）

指導案指導 10月21日（水）

顔合わせ 11月10日（火）

授業当日 12月 2日（水）

(3) 具体的な当日の活動

最初に、恐竜ロボットの見本を見てもらい、本日の活動について説明します。次に、実際の作業に取りかかります。具体的には、ワイヤーストリッパーでコードの被膜を取り、はんだづけを行います。はんだづけでは、金属が溶けたところを見てもらいます。その後、それぞれはさみを使用して材料を適当な大きさに切ったり、恐竜の絵を動作部分に貼り付けたりします。すべての作業が終了したら自分の回りや部屋を片付けます。その後、場所を遊戯室に移動し、遊び方を指導者から聞いてジュラシックパークで遊びます。最後に、まとめとして、頑張ったことなどを発表します。

表1 指導略案（90分）

時間	活動内容
0分	・活動内容を聞く。
10分	・ワイヤーストリッパーを使って被膜を剥く。（作業）
25分	・はんだづけを見て、金属が溶けるとところを見る。 （作業）
50分	・ゴミ・工具を片付ける。
55分	・ジュラシックパークで遊ぶ。
75分	・活動を振り返る。

4. 成果

作業の場面では、子どもたちにはさみ・ワイヤーストリッパーの使い方を見せ、実際に安全に工具を使用してもらうことができました。また、はんだが溶けるのを見て、金属が溶けることを知ってもらうことができました。遊ぶ場面では、ロボットで楽しく遊んでもらうことができ、他の子どもが作った作品を見てそのよさを感じることができたようでした。作業全体を通して、自分たちが思ってい

たよりも子どもの握力がないことに気づきました。例えば、はさみを使って画用紙を切ることでさえ子どもたちには難しく、また個人差がありました。特に、チューブや両面テープなど、紙以外のものを切る時はどこをどう切るかという説明がとても大事だということを実感しました。

5. 今後の課題

全体を振り返って、まず出前授業に行く前の準備がとても大切であることが分かりました。実際に作業を始める際に、準備物が不足していることが分かり、授業が円滑に進まなかったからです。次に、今回の活動は子どもたちにとって難しい作業が多いことに気づきました。事前に子どもたちの力量を把握しておくことが必要であったと思います。また、授業中においては、子どもたちに分かりやすい言葉を用いて説明することが重要で、事前に使う言葉を吟味するべきだったと思います。最後に、子どもたちは作ったもので精一杯遊んでくれるので、もっと壊れにくい物にすることを今後の課題としたいと思います。



図2 製作に使用した工具



園児と学生が顔合わせをしている様子



園児がワイヤーストリッパーを使用している様子

園児がロボットで遊んでいる様子



北立誠幼稚園への出前授業



私たちの研究室では、地域連携の一環として北立誠幼稚園で出前授業を毎年行っています。技術科教育の特徴を生かした教材を提案し、幼稚園の先生方と何度も打ち合わせをして、授業する内容を決定しました。

今回は「ジュラシックパークで遊ぼう」をテーマにして、動きのある恐竜を作りました。

みんなで恐竜ロボット作り



まずは説明



導線通しが難しい！



丁寧に指導中



衝撃のはんだづけ!!

日程：2009年12月2日

対象：年長児9人、年少児18人

作り方

1. ワイヤーストリッパーで被膜を取ります。
2. モーターに導線を通します。
3. 通した導線をはんだづけします。
4. モーターに園児が描いた恐竜の絵を貼り付けます。



製作した恐竜ロボット

みんなでジュラシックパーク遊び



池でおさんぽ♪



競争だ～！



大きな大きな滑り台



最後に感想



使用した工具

【成果】

- ・安全に工具を使用してもらうことができました。
- ・金属が溶けることを実感してもらうことができました。
- ・恐竜ロボットで楽しく遊んでもらうことができました。

【課題】

- ・準備がとても大切であることがわかりました。
- ・園児の力量を把握しておくことが必要でした。
- ・園児にもわかる言葉を使って説明することが重要でした。
- ・もう少し壊れにくい教材にするべきでした。

幼児教育で大切にしたい運動遊び

—大学と教育現場によるコラボレーションポスターの作成—

報告者：○林 直哉・伊藤茂子・中西毅徳

廣智恵里（保健体育3年）

指導教員：山本俊彦・岡野 昇

KW: 二人称的身体・遊びの意味世界

1. はじめに

今年度7月に、三重大学教育学部保健体育科教育学研究室編集『子どもが夢中になる運動の世界づくりカードシリーズ1「体力を高める運動」』を発行した。カードは反響を呼び、三重県内の多くの小学校現場で活用されているが、小学校低学年や幼稚園の子どもたちには、少し運動内容が難しいという声もあがった。これを受け、カードシリーズ第2弾として、「幼児教育で大切にしたい運動遊び」の提供を行うことを目的として、津市立南立誠幼稚園・津市立北立誠幼稚園・津市立白塚幼稚園（以下、3幼稚園）と協働でカードの作成に取り組むことになった。

カード作成に向けての検討過程を通して、『わたしたちの運動遊びシリーズ「おうちの人と遊ぼう」（ポスター）』の発行に至った。今回はその発行に至るまでの経緯を明らかにし考察する。

2. 活動の経緯と概要

●2009.12.1 三重大学教員による実技講習

津市立北立誠幼稚園にて、3幼稚園の先生方を対象に、主として、人とのかかわりを大切にしたい運動遊びの実技講習が行われ

た。その際、『子どもが夢中になる運動遊びカード』の幼稚園版の協働作成を提案した。

●2009.12.8 「体育教材研究演習」(第6回)

上記の3幼稚園から1園につき10部、合計30部の「子どもたちに経験させたい運動遊び」の草案をイラストつきで提出していただき、それをもとに大学生が授業日までに20の運動遊びを考案した。さらにそれについて、授業で大学教員と大学生が検討を行った。カードの形式の他に「遊びの意味世界」と「二人称的身体」について議論が交わされた。

●2009.12.15 「体育教材研究演習」(第7回)

大学に3幼稚園の先生方に来ていただき、前回の授業で議論・検討した内容や、カード作りの進捗状況を大学生が発表した。その発表を踏まえ、カードの内容や表記の仕方などについてグループに分かれて議論、検討した。

●2009.12.22 「体育教材研究演習」(第8回)

前回得られた幼稚園教諭の意見・考えをもとに、大学教員・大学生が再び議論した。議論していく中で、4つの遊びの世界を提示するのであれば、カード形式よりもポスター形式のほうが適しているという意見でまとまり、ポスターという形で作成してい

くことが決定した。

●2010.1.12「体育教材研究演習」(第9回)

大学教員・大学生がポスターについて検討。ポスターの第1弾として、『おうちのひとと遊ぼう』を提案することに決定した。

●2010. 2.1 ポスター・カードの作成

『わたしたちの運動遊びシリーズ「おうちのひとと遊ぼう」』発行した。なお、このポスターは津市内と四日市市内の全幼稚園に配布された。

3. 考察

今回、幼児教育で大切にしたい運動遊びを考える中で、「遊びの意味世界」と「二人称的身体」の2つがキーワードとなった。

「遊びの意味世界」は、アゴン(競争)・ミミクリー(模倣)・アレア(運)・イリンクス(めまい)の4つから構成されているのにもかかわらず、学校体育では、アゴン・ミミクリーが主に扱われ、アレア・イリンクスは、ほとんど取り扱われていない。しかし、アレアやイリンクスに潜む、偶然や不安定さがゆえのワクワク感や、危険な場面でのハラハラ感を子どもは求めていると考える。それは、子どもたちが休日になると、遊園地に行きたがることで証明される。子どもたちは、ジェットコースターなどで味わえるフワッとした感覚(イリンクス)を求めているのだと思う。これらの理由より、今回のポスターは、こうした非日常的な感覚を含んだ遊びの世界4つすべてを味わえる運動遊びを提供できるよう検討し作成した。

また、「二人称的身体」はテレビやテレビゲームといった「情報」で結ばれているだけの希薄な関係ではなく、運動遊びの中で「悔しい、楽しい」といった「情緒」を交

換する「深くて、時には煩わしい関係」をたくさんつくることができる身体である。この身体こそが今の子どものコミュニケーション能力の欠如の問題などを解決しうるのではないかと考え、今回は運動遊びの提供によって、問題解決にアプローチした。

4. 終わりに

幼児教育の間に「二人称的身体」をたくさんつくりあげることが、子どもたちの豊かな人間形成に役立つと考えられる。また、たくさんの遊び(の意味世界)に触れることで、運動遊びのおもしろさも広がっていく。

今まで、私は既存の運動遊びのユーザー(使い手)であったが、今回のポスター作りで初めてメーカー(作り手)になった。今までなかったものを新しく作りだすことは容易ではなく、学生同士で何度も話し合い、共に悩んだ。その中で、4つの遊びの世界の分類が遊びを作り出す上でとても大きな手がかりとなった。遊びの4分類の中のどの部分で遊ばせるのかを絞るだけで、運動遊びの案が出やすくなった。小学校低学年の体育の学習指導要領にも「運動遊び」が多く明記されているので、この遊びに対する視点が授業づくりに大いに役立つと考える。小学校体育には教科書がなく、教師がカリキュラムメーカーになることが求められている。いかにして遊びを作り出すかを考えた今回の経験は、私にとって非常に貴重なことであった。

幼児教育で大切にしたい運動遊び

指導教員：山本俊彦・岡野昇（三重大学）

発表者：○林 直哉・伊藤茂子・中西毅徳・廣智恵里（三重大学3年）

これまでの取り組み

2009

12.1 実技講習：抄録に準ずる（別紙参照）

於：北立誠幼稚園

大学教員（岡野）が3幼稚園の先生方に運動遊びの講習を行い、「子どもが夢中になる運動遊びカード」の幼稚園版の協働作成を提案される。

12.8 第6回体育教材研究演習

上記の3幼稚園からの草案をもとに、大学教員、大学生が検討。「遊びの世界」「二人称的身体」について議論が交わされた。

12.15 第7回体育教材研究演習

大学に上記の3幼稚園の先生方に来ていただき、カードについて検討・議論。幼児教育で大切にしたい「遊びの世界」「二人称的身体」について学生がプレゼン。それをもとにカードの表記の仕方など具体的な議論がかわされた。

12.22 第8回体育教材研究演習

前回得られた幼稚園教諭の意見・考えを基に、大学教員・大学生が再び検討。カードではなく、ポスターという形で作成していくことに決定。

2010

1.12 第9回体育教材研究演習

大学教員・大学生がポスターについて検討。ポスターの第1弾として、おうちの人と遊ぶ遊びを提案することに決定。

2.1 わたしたちの運動遊びシリーズ おうちの人と遊ぼう 発行

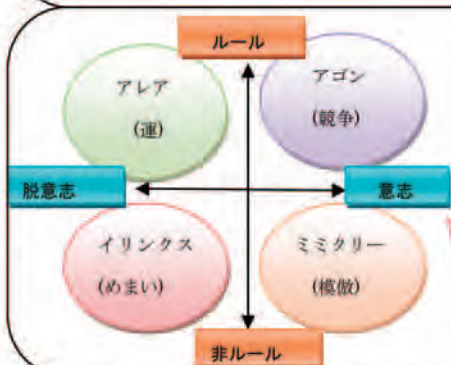
活動概要

三重大学教育学部と上記の3幼稚園（津市立白塚幼稚園・津市立北立誠幼稚園・津市立南立誠幼稚園）が、「一人では生まれない二人称的な運動遊びの提案」をコンセプトに、ポスターの作成に取り組んだ。今回はその第1弾として、おうちの人との遊びを提示する形でポスターを発行した。



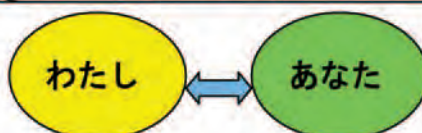
実技講習の様子

Gボール・滑車などを使った運動遊びなどを紹介した。その中で、運動遊びは、自己の働きかけと他者（人・モノ）からの働きかけによって成り立っていることを実際に活動を通して体験していただいた。（2009.12.1）



遊びの意味世界

学校現場では右半分がよく取り上げられているが、左側の、危険なこと・不安定なところにもおもしろさが潜んでいると考え、今回は4つすべての遊びの世界を味わえる運動遊びカードを目指した。（2009.12.8）



二人称的身体

あなた（他者）がいて初めて成り立つ相互主体の関係。（2009.12.8）



グループにわかれての話し合いの様子。子どもたちは何を遊んでいるのか。何に夢中になっているのか。現場の先生の生の声を踏まえ、遊びの解釈についての議論が交わされた。（2009.12.22）

～振り返り～

テレビやテレビゲーム、携帯電話が今の子どもたちのコミュニケーションの時間や他者との触れ合いの機会を奪っている。今回の活動は、そんな現状を運動という視点から、遊びの提示という切り口で、取り組み、ポスターの発行に至った。他者とのかかわりの中で、笑ったり、怒ったり、怖がったりといった感情は、あなた（他者）がいてはじめて成り立つものであるから、その二人称的な関係をいかにつくり出すかを編集者が一体となって考えた。今回はおうちの人との遊びの提示でしたが、これにとどまらず、たくさんの他者とのかかわることのできる遊びを提示していきたいと思う。

教育実地研究基礎を通して学んだこと

指導教員 中西正治

〔栗真小学校〕 竹中優太 築地 矩弘 （数学教育コース1年）

栗真小学校では7人がお世話になりました。5月後半から1月の終わりまでの8ヶ月間、諸先生方の手伝いをしながら小学生とともに学びました。私たちは全員数学科ですが、算数以外に国語や図工などさまざまな教科にかかわることができました。大学の授業では1コマずっと同じ科目を勉強しますが、小学校では、1時間のうちに算数と国語など複数の科目をするときもありました。現場では臨機応変に対応しなければならないことがわかりました。また、地域の方を招いて、子どもたちに野菜作りを体験させるなど、教科書を通して学ぶだけではなく、地域や自然からも学ぶ学習をしていました。そして、特別支援学級（しいのき学級）では、教師が板書するときには子どもに文字が見やすいようにある程度大きく書いたり、子どもたちの興味を引くためにインパクトのある映像を見せたりするなど、工夫のあるわかりやすい授業がなされていました。しいのき学級を担当した学生は、「しいのき学級の子どもたちは、一つのことをするのに時間がかかるけれども、一生懸命している。」と語っています。2年生を担当していた学生は、「低学年ほど時間や手間がかかるけど、やりがいがある」と言っています。

子どもたちとは休憩時間にドッジボールや鬼ごっこなどをして遊びました。先生方は「子どもたちと遊んでいただいて、子どもたちは嬉しがっていました。子どもたちと遊ぶ先生が必要だ。」と声をかけてくれました。子どもたちも楽しいし、一緒に遊んでいる私たち学生も楽しい時間を過ごせました。ケーキ作りをするお楽しみ会をした学年では、子どもたちは、普段の授業とは別の顔つきで一生懸命になってケーキを作っていました。小学校に行くたびに子どもたちとより親しくなっていくのが感じられました。

教育の素晴らしさと難しさを目の当たりにして、これからの大学生活3年間の過ごし方を考えさせられました。

〔白塚小学校〕 佐藤大輔 中山真希 （数学教育コース1年）

私たちは、週1回白塚小学校へ行き、授業に参加させていただきました。1年間を通してみると、子どもたちの外見的成長だけでなく、内面的成長も感じられました。初めの頃と比べ、友達に見せる表情もとても豊かになりました。

子どもたちは、私たちがわからないところを教えてあげると、どうしてそうなるのかを目を輝かせながら聞いてくれました。物事を根本からわかっていないと、子どもたちからの質問に十分に答えることができないことが分かりました。

エピソード1

ある晴れた日のことです。白塚小学校では運動会が行われました。私は体育の授業に参加していたので、運動会の練習の風景を1番間近で見ることができました。練習では縁起

のミスも多く、友達といさかいを起こすこともありましたが、迎えた本番で彼らは本当に素晴らしい演技をみんなに魅せてくれました。

エピソード2

6年生の英語の授業で、先生と一緒に英語の劇をしました。中学校では、文法などにつまづく生徒もたくさんいますが、小学校の授業では、子どもたちは楽しんでいる様子でした。先生は「I can sing.」のあとにラララ〜♪と言ったり、「I can fly.」のあとに手をパタパタしたりしていました。英語を理解していなくても意味が分かるように、工夫されていました。小学校の英語の授業を中学校との違いは何か、目的は何か、深く考えさせられました。

〔一身田小学校〕 田中祐一郎 飛世千織 （数学教育コース1年）

私たちは今回、一身田小学校で一年間実地研究基礎でお世話になりました。小学1年生から6年生までの学級と特別支援学級にそれぞれ分かれ、各学級の授業のアシスタントをしながら、実際の現場を、身をもって体感しました。私たちの専攻する数学だけでなく、他の教科の授業にも参加させていただき、普段では経験できないような活動を行うことができました。図工や生活科などの小学校ならではの教科では、子どもとコミュニケーションを取りながら、一緒に活動を進めていくことができ、少しずつ積極的に指導していくことが出来るようになっていきました。

低学年の学級では、聞かれたことを伝えられないことが何度かありました。子どもたちが先生の話がなかなか理解できないため、教師は身振り手振りや板書などを使って上手く伝えることが必要なことがわかりました。また、周りの状況も読めず、自分の都合で質問などをしてくるため、一度に対応できずに困ったこともありました。しかし、その状況を何度も経験するうちに、そのようなことへの対応も少し出来るようになりました。

高学年になってくると、子どもたちは少し落ち着きだし、主に授業中の教師の対応を中心に見学させていただきました。授業で分かりにくいところを子どもたちに定着させるため、公式を教室に掲示して常に目に入るようにしたり、ただ暗記するだけでなく、その言葉の意味を調べて、しっかりと頭に入れるようにしたりと、様々な工夫がなされていました。

特別支援学級では、一人一人に合ったカリキュラムがあり、その子の進度によって学ぶことを随時考えていかなければなりませんでした。また、指導する際にも通常学級とは違ったアプローチが必要で、言葉ではわからないことは視覚的にわかるようにするなどの工夫が多くなされていました。特別支援学級の子どもは、言葉をストレートに受け止めるため、自信をつけさせるような言葉のかけ方も重要で、担当の先生のそういった表現の一つ一つがとても印象的でした。

実際の現場を経験することで、教育の難しさを改めて感じるとともに、子どもたちとのふれあいの楽しさ、素晴らしさを実感できました。

栗真小学校、白塚小学校、一身田小学校の先生方、本当にありがとうございました。

教育実地研究基礎

栗真小学校にて

竹中優太 築地 矩弘（数学教育コース1年）

指導教員：中西正治



〇〇さんが今発表しているのは、…についてのことだよ。
分かったかな？

子供たちは、一度だけだと覚えられなかったり、理解できていなかったりすることがあります。
だから、子どもに再度確認することが重要になります。

話、分かる？
先生の話、しっかり聞こうね!!

教育現場には、教師が話をしている時でも平気で騒いでいる子供もいます。
その子たちに人の話を聞く重要性を教えるのも大切です。



実際に教育現場へと行き、この1年間で多くの経験をしました。この素晴らしい経験をもとに、今後も教師を目指して頑張りたいと思います。

教育実地研究基礎

白塚小学校にて

佐藤大輔 中山真希（数学教育コース1年）

指導教員：中西正治



みんなよくがんばっているなあ。
感心、感心。

子どもたちがやってきた宿
題を添削させてもらいまし
た。
いい経験になりました。

みんな本読み上手だ
なあ。
家で練習してきた
成果が出ているみたい。

練習した分だけ
うまく読めると、み
んなは言いました。



教育実地研究基礎で子どもたちのさまざまな表情を見る
ことができました。
この一年間で培ったことを今後活かしていきたいです。

一身田小学校

指導教員：中西正治

田中祐一郎 飛世千織（数学教育コース1年）



低学年の学級では、
身振り手振りを使って
指導するのも必要！

普段は学生でも、ここ
では先生。生徒たちの
質問にも答えます。



授業を見学すること
で、教えることの難しさ
を再確認・・・。

特別支援学級では、個
別のカリキュラムと、ゆっ
くり丁寧な指導が基本。



国語教育講座（書道Ⅲ）の取り組み

国語教育講座 林朝子

◎活動の概要

テーマ：幼稚園で子どもと一緒に毛筆体験

活動場所：北立誠幼稚園

活動日時：1回目）2009年11月5日（木）12：30～14：30

2回目）2010年1月28日（木）12：30～14：30

参加者：北立誠幼稚園園児 27名（年長9名、年少18名）

書道Ⅲ履修生 28～30名

活動目的：子どもたちの「墨を使って筆で書く」という初めての体験の場への参加を通して、

- 1）1人の子どもと接することで、子どもの気持ちの変化を感じ、
- 2）子どもたちにとって「墨を使って筆で書く」ことの意義を考え、子どもを対象とした有効的な毛筆活動につなげる

支援方法：子ども1人に対し、学生1～2名が支援を行う

活動内容：

1回目）テーマ：筆に慣れよう（年長年少共通）

15分 全体活動：用具などについて説明（林）

30分 個別活動：紙（条幅 1/3）に図形や絵をかく、筆に慣れる ※条幅：70cm×135cm

15分 グループ活動：園児3人グループ

2回目）テーマ：名前を書こう（年長）・筆で楽しもう（年少）

10分 全体活動：用具などについて復習（林）

【年長】

30分 紙（書き初め紙）に名前をひらがなで書く

20分 紙（○）の紙に一文字ずつひらがなを書く

※「きたりっせいようちえん
しゅうりょうしき」を1人
2文字担当

10分 後片付け

【年少】

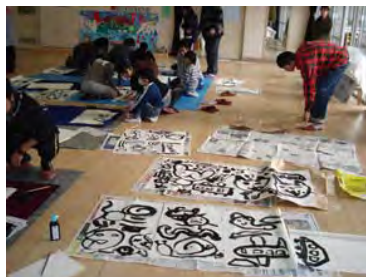
30分 紙（条幅 1/3）に図形や絵をかく

15分 紙（条幅）に3人グループで絵を書く

10分 後片付け

活動後：活動終了後には、授業で振り返りを行うと共に、各自が活動を通じて感じたことや考えたことについてレポート提出を行った。

◎支援の様子



◎活動後の学生の感想（レポートより抜粋）

- ・文字を書いている子どもたちは目を輝かせて書き続け、紙全体が真っ黒になると「新しい紙に換えて」と言い、とても積極的な様子が見て取れた。また、時に「楽しい」と言うなど、純粋に楽しんでいるようであった。
- ・筆に慣れることで子どもたちの中に「書く」という表現が根付いてくることがわかった。書道は子どもが字の練習のために行うもの、大人がたしなむものという見方をしてしまいがちだが、固定されたものではなく、自由で広がりのある存在だと気付いた。
- ・筆は鉛筆やマジックとは違い、墨をたくさんつければ、力強い太い線になる。また、筆にどのくらい力を入れるかによって、墨の付き具合が変わってくる。子どもたちは2回の活動で筆を使ってみて、このような筆のおもしろさに気付くことができたのではないだろうか。
- ・2回の書道体験活動を通して、私はその子どもの発達段階に見合った指導というものについて考えさせられた。たとえば平仮名が書けるといっても、書き順や字形にまで言及していい段階にあるのかなどを考えなければならないと思う。
- ・書道を通して子どものいろいろな面を見ることができた。
- ・幼稚園の子どもたちは泥遊びなどを好きなイメージがあったので、墨がついても気にしないのかと思っていたが、そうではない子もいるのだと知り、新鮮だった。様々な子どもに対処できることが必要だと感じた。
- ・教材との出会いの演出について注目して活動に参加した。小中学校で子どもたちは書写の授業で道具に触れていきますが、以外にその素材や歴史などについては知らないままのように思います。常に新鮮な気持ちで道具に向き合っていくには、「既知」に加えて「未知」の部分について徐々に触れていくことが大切だと感じた。
- ・1回目の体験から時間が空いていたのに、2回目のときに書道具の名前もよく覚えていた。毎日使うわけではないが楽しかったことなどは記憶に残りやすいのだと感じた。
- ・子どもは常に向上心や疑問を持ち、活動の際には私たちが予想していること以上に多くのことを感じ取っているのだと強く実感した。
- ・子どもたち自身が書道体験をどのように考えているかはわかりません。単に遊びと考えているかもしれません。しかし、ただ単に楽しいと思うことが書道を始めるきっかけになるのではないのでしょうか。



◎学生への教育面

子どもたちの「墨を使って筆で書く」という初めての体験の場への入り込みによって、子どもたちが未知のものにどんな気持ちで出会い、どのような反応をするのかを学生自身が体験できた点が非常に大きい。各学生が1人の子どもを担当した点も責任のある指導を促す機会にもなった。また、子どもが楽しんで取り組める書道の実践方法についても考えるきっかけとしても有意義だった。

北立誠幼稚園

子どもと一緒に毛筆体験

活動場所：北立誠幼稚園

参加学生：書道Ⅲ履修生 28～30 名

担当教員：国語教育講座 林朝子

活動日時：1 回目) 2009 年 11 月 5 日 (木) 12:30～14:30

2 回目) 2010 年 1 月 28 日 (木) 12:30～14:30

1 回目のテーマ
筆に慣れよう！

筆？墨？硯？紙？
文鎮？何だか不思議な道具がたくさんあります。皆興味深々。



初めて会って自己紹介。皆緊張しますね。



思いっきり自由に絵を書いてみました。白と黒、筆の感触、楽しそう！

2 回目のテーマ
年長：ひらがなで名前を書こう！
年少：筆で楽しもう！

年少さんも筆に慣れて、太い線や細い線で楽しんでいます。金色に変わる墨にもびっくり！



年長さんは自分の名前をひらがなで書くことに挑戦。書けば書くほどしっかりした字になりました！

活動支援を通して：

子どもたちの「墨を使って筆で書く」という初めての体験の場への入り込みによって、子どもたちが未知のものにどんな気持ちで出会い、どのような反応をするのかを学生自身が体験できた点が非常に大きい。各学生が 1 人の子どもの担当した点も責任のある指導を促す機会にもなった。また、子どもが楽しんで取り組める書道の実践方法についても考えるきっかけとしても有意義だった。

日本語教育コースの取り組み

国語教育講座 林朝子

◎一身田小学校クラブ「世界を結ぼう」と人間発達実地研究Ⅴ（日本語教育コース 1 年 13 名が履修）

外国につながる子どもたちが多く在籍する一身田小学校において、平成 20 年 4 月からスタートした 4 年生以上が対象のクラブ活動。担当は富田先生・シルビア先生・デボラ先生。三重大学教育学部日本語教育コースの学生が中心となってクラブ活動に参加している。このクラブは、日本の子どもたち、外国につながる子どもたちなどと区別することなく、以下の 3 点を活動の目的として設立された。

- ①世界には様々な国や文化があることを知ること
- ②母国の文化や習慣を知り、アイデンティティの確立の一助となること
- ③わかったことや知ったことを皆に発信すること

学校現場の多文化が進む現在、学生にはクラブへの参加を通じて、以下の 2 点について感じ、考える契機を作ることを目的とした。

- 1) 学校現場を体験する：

教師と子ども、子ども同士の様子を観察したり、子どもと共に活動をすることで、子どもとの関係作りについて考える。

- 2) 多文化共生について考える：

教員を目指す学生自身が多文化共生とは何かを考え、多文化共生を進める活動についても考えを深める。

2 年目の今年は、学生が DVD 作成や活動実施などを通し、より子どもたちに関われる機会を設けた。子どもたちと一緒に活動に参加し、多文化や活動内容について考える契機となるように工夫した。

クラブ活動の翌週には、毎回、レポート提出と振り返り授業を行った。小学校で子どもたちとの活動や多文化共生に関わる点で、各自が感じた内容について言葉で発表し、全員で共有することで、お互いに考えを深めることができた。

◎クラブの活動内容と学生の参加方法（活動期間：2009 年 5 月～2010 年 2 月）

回	月	活動タイトル	活動内容	学生の参加方法
1	5	ブラジルってどんな国？	ブラジルに関する様々な写真を見て、同じブラジルであっても北と南で全く風景や文化が違うことを知る。	支援型
2	6	DVD を作ろう！①	ブラジルの友達に日本の小学校のクラブ活動を紹介する DVD 作成の 1 回目。紹介するクラブを決めて、紹介のための文を考える。	
3	7	DVD を作ろう！②	3 つのクラブに分かれて、実際にビデオカメラで撮影する。	支援型
4	10	日本とブラジル	日本とブラジルの学校文化を比較する。	協働参加型
5	11	ブラジルの遊び	Batata quente (バタタ・ケンチ、じゃがいもは熱いよ) というブラジルの遊びを皆で行う。	協働参加型
6	12	Pave (パヴェ) を作ろう！	ブラジルのクリスマスデザートを皆で作って食べる。	協働参加型
7	1	日本の中の世界！？	日本語の中の外来語の由来について皆で考える。	協働参加型
8	2	世界〇×クイズに挑戦！	世界中のいろいろな国に関するクイズについて〇×で答える。	活動指導型

◎今後の課題

参加学生が1年生ということもあり、子どもたちとの接し方に戸惑いを感じるが多かった。クラブの回数も決して多いものではないので、貴重なクラブ参加体験をより有意義にするためにも、前もって子どもたちと学生が触れ合う場を持てるようにしていきたい。さらに、子どもたちへの支援の程度や内容もより具体的に指導していく必要性を感じた。

◎活動後の学生の感想（レポートより抜粋）

【子どもたちとの関係作りについての内容】

- ・やる気を持続させることの難しさを感じた。
- ・自分たちから子どもたちに声をかけていくことが大切だと思う。
- ・先生の配慮で子どもたちとの間に入ることができた。しかし、もっと自分たちから積極的に子どもたちと触れ合っていかなければならないと思った。
- ・子どもたちと交互に並んだので、話す機会がとても多かった。今まで小学生の子とどんな会話をすればいいのかなと思っていたけれど、実際隣に座ってみると、どんどん話かけてくれた。緊張したり変に気を使ったりしているのは、私たち大学生のほうなのかなと思った。
- ・子どもたちより自分のほうが人見知りになっていたように思う。
- ・教師が笑顔で楽しそうに教えていれば、子どもも自然と笑顔になる。

【多文化共生についての内容】

- ・学校の職員室や給食室の入口には、英語・ポルトガル語・ハンゲル語・日本語と4ヶ国語でその場所の名前が表記されていた。
- ・小学校には、日本語教室と書かれた教室があったことに驚いた。自分たちの周りにも日本語教育を必要としている子どもたちが居るのだと実感した。
- ・ブラジルのデザートを作って、食べるという活動を通して、「五感」を使ってブラジルの文化を感じることができた。
- ・名前といっても、日本とブラジルでは長さも並べる順も全く違って、驚いた。本当に身近なものが国によって全く異なるんだと改めて感じた。
- ・言葉というのは、自分たちの身の回りにいつも存在していて、生活には欠かせないものである。よって、外来語もいつも自分たちの身近にあると言える。すなわち、外来語は自分たちがいつも触れている異文化なのである。
- ・外来語という子どもたちにとっても身近な言葉を通し、「いろいろな国」と「日本」、「世界」と「日本」のつながりを学べたと思う。
- ・「12月でもブラジルは暑いからクリスマスケーキは食べないよ」という先生の発言に対し、子どもたちは「なるほど〜」などと口々に行っており、ブラジルが南半球にあることなどしっかり覚えているんだと感じた。
- ・お菓子を通して、ブラジルの食文化の一端を知るということは些細なことのように思えるが、子どもたちが異文化に興味を持つための入口、または、きっかけとなる可能性は非常に大きい。このようなきっかけから、子どもたちの異文化への関心・興味を多に広げていけるのではないかと思う。
- ・食べるときに必ず言う「bom appetite!」という言葉を教えてもらったが、お菓子作りの活動は言葉と文化が関係していて、とてもよいと思った。
- ・子どもの内から様々な文化を学ぶことによって、狭い範囲の常識にとらわれない柔軟な考え方が身に付くのではないか。自分から見て異質なものを排除するのではなく、理解してお互いを尊重するような精神を持ってほしい。

◎学生への教育効果

小学校の現場や多文化共生についてほとんど知識のない状態でのクラブ参加であったが、各自が子どもたちとの関わり方、教師としての役割、多文化共生について少しずつではあるが気付きが得られた。この活動参加で感じた疑問や課題を今後の学習の中で自分なりに更に考えていってほしいと思う。疑問や課題を持つことが、意欲的な学習態度にもつながるであろう。

2009.5月～2010.10月
 一身田小学校クラブ活動

世界を結ぼう！

外国につながる子どもたちが多く在籍する一身田小学校において、平成20年4月からスタートした4年生以上が対象のクラブ活動。担当は富田先生・シルビア先生・デボラ先生。

クラブの目的：

- ①世界には様々な国や文化があることを知ること
- ②母国の文化や習慣を知り、アイデンティティの確立の一助となること
- ③わかったことや知ったことを皆に発信すること

2年目の今年は、学生がDVD作成や活動実施に関わる機会をより多く設け、子どもたちと一緒に多文化活動を行い、多文化や子どもたちの活動内容について考える契機としての役割を重視した。

参加学生：日本語教育コース1年13名、指導教員：林朝子・別府直苗・荻川恵理子

第2・3回 DVDを作ろう！

ブラジルの友だちに日本の小学校のクラブ活動を紹介するためのDVDを作成。選んだクラブは、「将棋」「生け花」「頭の体操」の3つ。紹介するためのシナリオやインタビュー内容も皆で考えたけれど、ビデオカメラの前に立つと緊張で大変でした！ブラジルの友だちに楽しんでもらえるかな？



第4回 日本とブラジル

日本とブラジルの学校文化を比較。ブラジルの学校は午前か午後かを選べるし、昼食は家で食べるし、掃除もないそう。ブラジルから来た友だちは日本の学校文化に驚くのは仕方ないですね。

第1回 ブラジルってどんな国？

皆でポルトガル語で挨拶や自己紹介した後、ブラジル国内の写真をもとの地域のものか考えた。ブラジルは日本の24倍！一つの国でも北と南では文化も景色も大違い。

第5回 ブラジルの遊び

Batata quente (パタタ・ケンチ、じゃがいもは熱いよ！)というブラジルの子どもたちがよくする遊び。ジャガイモの発祥の地はペルー。普段食べているものにも世界とつながっているものが実は多くあります。

第7回 日本語の中の世界！？

日本語の中には多くの外来語がありますが、それは全て英語から・・というわけではありません。様々な外来語を取り上げ、どの国の言葉から来ているのかを考えました。例えば、「ピーマンはフランス語」「金平糖はポルトガル語」「イクラはロシア語」などなど、日本語の中には多くの外国が入りこんでいることに皆びっくりしました。



第8回 世界〇×クイズに挑戦！

活動内容から活動実施まで、全て学生が担当。最後のクラブ活動だったので、一つの国に特定するのではなく、いろいろな国を対象に、簡単な〇×クイズを行った。「フィギュアスケートの発祥の地は日本である」「イタリアでクリスマスプレゼントを持って来てくれるのは魔女である」などなど(Verdadero ヴェルダデーロ)か×(falso ファルソ)かどちらかに動いて解答。どちらか迷ってしまう問題がいっぱい。世界を知るには、日本だけの考え方だけでは無理だと改めて感じました。



クラブ活動に参加して

子どもたちと一緒に活動する中で、子どもたちが積極的に活動に参加したいと思う工夫がとても必要だと感じた。また、学校の中にどのように多文化共生を位置付けていけるのかについて考える機会となった。来年度も参加していきたいです。

参加者に対する指導者の関わり方について

— 一身田小学校の親子活動における実践から —

報告者：○中西毅徳・伊藤茂子・林 直哉
廣智恵里（保健体育3年）
指導教員：山本俊彦・岡野 昇

KW: 双方向的関係

1. はじめに

私たちは「体育教材研究演習」という専門授業の一環として、三重県津市立一身田小学校（以下、一身田小学校）の2年2組・4組PTA親子活動を企画考案し、実践した。

今の子どもたちというのは、特定の友達としか遊ばなかったり、クラスを越えて遊ぶとすることが少ないことから、人間関係が固執しているように思われる。このようなことから、今回の活動のテーマを「親子、クラスの枠を超え『みんな』の概念を広げよう」と設定した。

2. 活動概要

①実施日時：平成22年2月9日（火）
13時50分～14時35分

②実施場所：一身田小学校体育館

③参加者：三重大学准教授（1名）
一身田小学校教員（2名）
一身田小学校児童（51名）
一身田小学校保護者（45名）
三重大学学生（7名）

④活動内容

テーマを「親子、クラスの枠を超えて『みんな』の概念を広げよう」とし、親子の枠、クラスの枠を超えて、体育館にいるみんなで、一人ではできないような活動を通して、様々な人とふれあうというものであった。

主な活動内容は、親子でペアストレッチを行う「からだほぐし活動」、お題に対してどこのグループが早く手をつないで座れるかという「集合ゲーム」、手をつないで円になり、声の通りにみんなでお息を合わせて跳ぶ「サークルジャンプ」、音楽に合わせて新聞紙をやぶったり舞い上げたりする「リズムカル新聞やぶり」、保護者の上に子

どもが寝転び、気持ちを落ち着かせる「お父さん・お母さんベッド」であり、「親子→みんな→親子を含むグループ→親子」という形で、親子から全体に枠を広げ、そしてまた親子へと戻した。

3. 考察

当日の活動の様子を見て、形としては様々な人とふれあっているように見えたが、枠を超え心の底からふれあっているようには見えなかったため、「みんな」という概念を広げることができなかったように思われる。

そこには活動を進める方法に問題があったと感じた。なぜかというところ「お父さん・お母さんベッド」の時に静かにさせようとして、静かにさせるためにチーフである自分だけが一方的に話しており、子どもたちや保護者の反応や、状況を見ようとしなかったからである。そうになってしまうと子どもたちや保護者はただ与えられたことを行うだけになってしまい、受け身の状態になり、自分から他者へかかわっていかうとしないと考ええる。そのようなことが、枠を超えて「みんな」という概念を広げることができなかった原因ではないかと思われる。

よって一方的ではなく、子どもたちや保護者と双方向的な関係になることが大切だと考えられる。

4. まとめ

活動を進める指導者は子どもたちや保護者に一方的にかかわるのではなく、反応や状況を見て、発言に耳を傾けるというような、双方向的なかわりが大切だと考える。

一身田小学校 テーマ親子活動

親子・クラスの枠を超え 「みんな」の概念を広げよう

活動内容

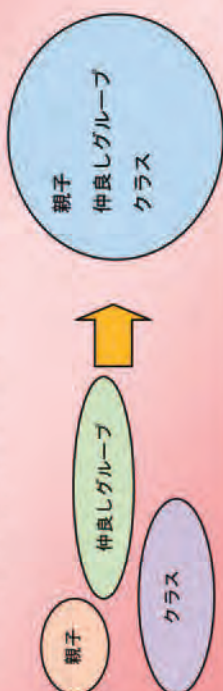
報告者：〇中西毅徳・伊藤茂子・林 直哉・
廣智恵里（保健体育3年）
指導教員：山本俊彦・岡野 昇

活動概要

平成22年2月9日（火）、津市立一身田小学校の2年2組・4組PTA親子活動において児童（51名）、保護者（45名）を対象に親子活動を企画考案し、実践した。三重大学教育学部生7名が参加し、中西がチーフとなり全体進行を務め、他の6名はアシスタントを行った。

～テーマ設定の理由～

近年、昔に比べて「みんな」という概念が狭くなってきていると感じる。特定の友達としか遊ばなかったり、クラスを越えて遊ぼうとすることが少ないことから、人間関係の固執を生み、様々な人とかかわれなくなっていると考ええる。そこで、この親子活動で、固執しているであろう関係をほぐし、「みんな」の概念をひろげもらうためにこのテーマを設定した。



当日に至るまでの取り組み

内容を考察し、チーフとしての動き方、進め方を確認した。内容の考察では、いかに一人ではできない活動を通して、様々な人と関わるができるかを中心に考えた。チーフとしての動き方、進め方では、自分が主役にならないように心がけた。

③サークルジャンプ



手をつないで円になり、声の通りに、みんなでお手合わせしてジャンプ活動を行った。

②集合ゲーム



お題に対して、どこのグループが早く手をつないで座れるかという活動を行った。

①からだほぐし活動



はじめに、親子でペアストレッチなどの活動を行った。

⑤お父さん・お母さんベッド



保護者の上に子どもが寝転び、気持ちを落ち着かせる活動を行った。

④リズムミカル新聞やぶり



音楽に合わせて新聞紙をやぶり、舞い上げたりする活動を行った。

活動を振り返って

当日の活動の様子を見て、形としては様々な人とふれあっているように見えたが、枠を超え心の底からふれあっているように見えなかった。「みんな」という概念を広げることではできなかったように思われる。そこには活動を進める方法に問題があったと感じた。なぜかというところ「お父さん・お母さんベッド」の時に静かにさせようとして、静かにさせるために自分だけが一方的に話しており、子どもたちや保護者の反応や、状況を見ようとしなかったからである。そうやってしまおうと子どもたちや保護者はただ与えられたことを行うだけになってしまい、受け身の状態になり、自分から他者へかかわっていいこうとならないと考える。そのようなことが、枠を超えて「みんな」という概念を広げることができなかった原因ではないかと思われる。

わくわくコミュニケーションクラブによる
小学生のコミュニケーション力育成の取り組み
～北立誠小学校での実践～

三重大大学教育学研究科 古結亜希・梅本貴豊

三重大大学教育学研究科修了 廣岡雅子

三重大大学教育学部 田中健史朗・河井晴美・大平有香

松谷健二・近藤亜裕美・早野和美

三重大大学教育学部教育心理学教室の大学院生・大学生を中心とするボランティアグループは、子どものコミュニケーション能力の育成をねらいとした「わくわくコミュニケーションクラブ」と称する活動を、津市立北立誠小学校で行ってきた。わくわくコミュニケーションクラブ(当初、土曜わくわくクラブ)は、2004年度から津市立南が丘小学校区内の4～6年生の児童を対象としてに開始し、2007年度からは北立誠小学校区内の3～5年生の児童を対象とし実践してきた。また今年度秋からは、対象児童を津市内から広く募り、三重大大学を会場として実践を継続している。

わくわくコミュニケーションクラブは大学院生を中心に立ち上げられ、教育学部学生・大学院生および大学教員、修了生などで構成されてきた。常時10人前後の中心的なスタッフが在籍しており、年度毎に入れ替わっている。教育心理学を学ぶ学生に活動内容を紹介し、興味を持った学生に活動を見学してもらうなどして、随時新しいスタッフを募っている。そして、スタッフミーティングにも参加するなど、見学者の学生の中から次第に継続的に参加する者が現れ、そういった学生らが中心スタッフになっていく。

活動内容は、心理学をベースとした小学生のコミュニケーション能力の育成のためのプログラム開発、実践および評価である。ソーシャルスキルトレーニングや構成的グループエンカウターの要素を取り入れて、子どもが楽しみながら好ましいコミュニケーションについて考え、いくつかの具体的なソーシャルスキルを学ぶ活動を実施している。活動は月2回、土曜日の10時～12時に行う。3学期制の学校のように1年間で春、秋、冬の3つのクラスに分けて行っている。1クラスは4～5回の活動で構成されており、1回の活動につき1つのスキルをターゲットとしている。活動で扱うスキルとしては、あいさつのスキル、聞き方・話し方のスキル、頼み方・断り方のスキルなどがある。

各回の活動は、「ウォーミングアップ(短時間で楽しめる体ほぐし等)→トライ(自宅等で振り返るためのワーク)の確認→メインの活動(デモンストレーションとエクササイ

ズ)→シェアリング(メイン活動で感じたことの共有)とまとめ→活動内容や学習の振り返り」から成る。ウォーミングアップでは、ゲーム性のある活動を行うことで子どもたちの気持ちや体をほぐし、メインの活動に入りやすい雰囲気作りを心がけている。メインの活動では、まず、子どもたちが日常生活でよく体験しているであろう場面を設定して、スタッフによるスキルのデモンストレーションを行う。このデモンストレーションを通して、子どもたちがスキルを使うことに興味を持ち、スキルを身近に感じられるように工夫している。そして、エクササイズで子どもたちが実際にスキルを使う体験をし、スキルについて学んでいる。シェアリングとまとめでは、メインの活動で感じたことや考えたことをグループや全体で共有し、深めている。シェアリングでは、話し合いをする力をつけることもねらいの一つとしている。

スタッフは、各活動の準備・実施・ウェブ上での実践検討を行う。2人のスタッフが活動1回の企画・立案を担当する。この2人が授業者となり、活動の進行役となる。ミーティングを毎週行い、スタッフ全員で検討・改良をした上で各回の活動内容を決定する。

4～6人の子どもでグループ活動を行うため、各グループにグループスタッフを2名ずつを置き、グループ内での進行役や援助などを行う。その他のスタッフは、全体の把握や子どもとの個別的な関わり、授業者やグループスタッフの補助、写真やビデオで活動の記録などを行う。活動後はスタッフ全員が活動内容全体を振り返り、考えたことや疑問に思ったことなどをウェブ上に報告し、スタッフ間で共有できるようにしている。さらに、活動後のミーティングにおいても、気になった部分(子どもの様子や活動内容等)を話し合い、次の活動内容や子どもへの対応に活かしている。

活動に参加した子どもたちからは、「土曜日のわくコミに行くのがいつも楽しみだった。」「学年、クラスのちがう子と一緒に活動できてよかった。」「あいさつのコツや聞き方のコツがあることがわかった。」「話し合いがうまくいかなかったけどうまくできるようになった。」「また、次のクラスも参加したい。」といった感想がよせられている。スタッフから見た子どもたちの変化としても、活動への参加や発言に積極性が出てきたということや、下級生の見本となる行動を示したり、活動の中でリーダーシップを発揮するようになったということ等がある。また、スタッフに対して「学校の授業で自信を持って発表できるようになった」ということを伝えてくれた子どももいる。こういったことをはじめとして、継続して活動する中で、子どもたちが変化している実感が得られている。保護者の方からも、「相手のことを考えることができるようになった。」「学校でも自分の気持ちをクラスメートに伝えられるようになってきた。」という感想をいただいている。

ビデオ記録を用いて子どものコミュニケーション評定や分析をし、それらを基に論文や文献の執筆も行っている。

わくわくコミュニケーションクラブによる 小学生のコミュニケーション力育成の取り組み ～北立誠小学校での実践～



活動の背景

子どもの対人関係・対社会的能力の低下

社会的能力を養うような取り組みが必要！

しかし！

学校教育の中では
本格的な実現は難しい

ボランティアによる教育的活動だ！

心理学をベースとした教育実践

ソーシャルスキル
トレーニング

アサーション
トレーニング

グループ
エンカウンター

主な活動

- ・ 気持ちのいいあいさつ
- ・ 聞きかた、話しかた（他者の視点にたつ）
- ・ 頼みかた、断りかた（お互いに気持ち良く）
- ・ 表情ゲーム（顔の表情・身振り手振り）
- ・ 共同絵画（共同作業の楽しさ、個々の違い）
- ・ 共同問題解決
- ・ いろいろなものの見方（クリティカルシンキング） etc...

活動前

ミーティング

活動内容確認、
配付物や教材の準備、司会進
行の練習など
（1回の活動につき3回程度）

当日

準備（机、いすや受付の設置）
最終確認としての簡単なミーティング

実践

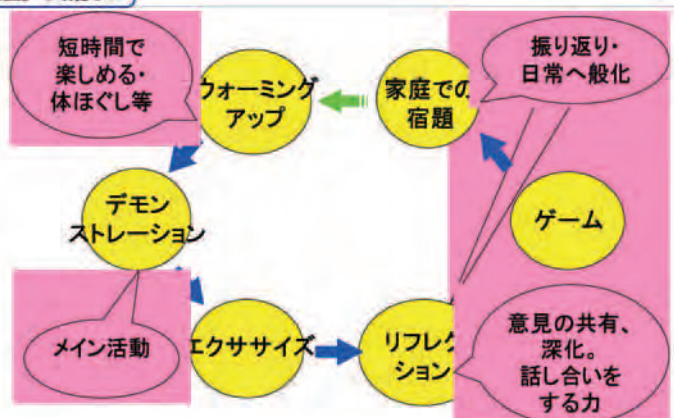
終了後、その日の子どもの行動評価を行う

活動後

リフレクティブミーティング

疑問、感想、
気づきの共有、深化

活動の流れ



えんぴつゲーム



インタビューゲーム



共同絵画～さかなのおはなし～



いろいろなものの見方



表情について



<http://www.cc.mie-u.ac.jp/~wakuwaku/>

1. 西が丘小学校との連携

2009年10月30日、総合演習の授業内で西が丘小学校5年生の英語活動に参加した。大学生は4グループに分かれ、それぞれ4クラスに入った。まず初めに、先生と大学生で基本のあいさつのDEMOをし、その後児童同士で名前やお互いの気分を尋ね合ったりした。大学生に積極的に話しかけてくる児童が大半だったが、なかには近付くと隠れてしまう児童もいた。DEMOで行った会話だけでなく、他のフレーズも使って自分の気持ちを表そうとする姿がみられた。次に、音楽にあわせて英語とともに体を動かすDancinglishという活動をした。児童の前で大学生が一通りの発音をした後、音楽を流し、実際に体を動かした。大学生は、児童の中に混ざり、ペアで行う動きの所は、相手がいない児童と一緒にいたりした。テンポのよい音楽とともに、楽しげな様子がうかがえた。その後、児童は床に座り、大学生はshoesやpantsなどの単語をイラストの入ったカードを見せながら発音し、その後児童にリピートさせた。ここでは、先ほどの賑やかさとは変わって、集中して聞こうとする姿勢がみられた。The Key Word Gameでは、児童は二人ずつのペアになり、初めにキーワードとなる単語を決めておく。大学生がカードを見せながら順番に発音をしていくなかで、その単語が出たときに真ん中に置いておいた消しゴムを素早く取るという活動をした。次に、英語ノートを使用した活動として、好きな色の服をお互いに伝え合うというものをした。児童は自分のノートに好きな服の絵を描いており、得意げに絵を見せてくれる児童もいた。その後、大学生が事前に描いた服の絵を黒板に貼り、先ほど、伝え合った好きな色の服についての情報を基に、誰の絵なのかをあてるクイズを行った。多くの児童が大学生の名前を覚えてくれていたので驚いた。まとめとして、その日の感想を児童が日本語で発表した。「大学生が来てくれて楽しかった」などといった感想があり、嬉しく思った。大学生からも英語で感想を伝えた。最後に児童一人一人と握手をし、別れた。飛びつくように来てくれる子、握手を嫌がる子、恥ずかしがる子などたくさんの児童がいて、楽しく活動を終わることができた。

授業の流れ

1. Greetings 2. Dansinglish 3. Warm up (The Key Word Game) 4. Activity (①Let's introduce the clothes you like. ②Who is this?) 5. Today's Lesson (review) 6. End of Lesson

2. 北立誠小学校との連携

11月19日と26日の2回、英語科教育特講Ⅰの授業内で北立誠小学校に行き5年生と6年生の英語活動に参加した。当初、11月5日も予定されていたがインフルエンザの流行により中止となった。11月19日は、学生は4名ずつの3グループに分かれ、それぞれ5年1組、2組、6年1組の授業に参加した。まずは5年生の英語活動の参加についてである。英語活動はイングリッシュルームと呼ばれる部屋に移動し、子ども達がグループに分かれているのでそこに大学生が一人ずつはいるという形で行われた。主な活動は3つあり、1つ目は、簡単な自己紹介を英語でし、その後は色の名前に関する活動である。前で大学生が様々な色紙から1枚を選び、その日に着ている服のなかにその色が含まれていたら立ち上がり、色の歌を歌うという活動をした。2つ目は、英語でインタビューをする活動である。それぞれにインタビューのための質問が書いてある用紙（Do you like~?や、Can you~?などの質問）が渡されて、聞いた質問の番号を書き、インタビューをした相手からサイン書いてもらうという活動をした。私たち学生はばらばらに移動した。子どもたちは次々に積極的に質問をしに来てくれた。3つ目は、学芸会で発表するPuff the Magic Dragonの合唱の発表でした。子どもたちは英語の歌詞をしっかりと覚えておりとてもとても上手で驚いた。最後に振り返りと別れのあいさつをして終わった。次に6年生の英語活動についてである。主な活動は4つあった。1つ目は、まず、グループに分かれ、その中で子どもたちが私たちに英語であいさつをして、自分の名前を言った後、大学生の名前を聞きく。そこから子どもたちは、I like~. How about you?、Where do you live?、What~ do you like the best?、When is your birthday? と言った具合に、様々な質問をしていく。その質問をメモに取った後、グループごとに子どもたちは、1分間でどれだけ多くのゲストである大学生についての内容を紹介できるかどうかを競うという活動であった。2つ目は、子

どもたちが、修学旅行で奈良に言ったときに出会った外国人観光客に、日本の文化について紹介した時のことを、グループごとに発表した。例えば色々な具の味噌汁を写真で見せ紹介したりするなどといった内容で各グループ工夫があった。3つ目は、今度は大学生が、一人ずつ日本の文化について英語で発表を行うというものであった。写真や絵を用意して、わかり易い英語を使って発表をした。子どもたちはみんな興味を持ち、楽しそうな様子であった。4つ目は、先ほどグループごとに外国人観光客に日本文化を紹介し、外国人観光客に対しても質問した内容を、グループごとに前に出てクラス全体に発表するというものであった。みんな緊張している様子だったが、それぞれの子どもたちが頑張って英語を話した。そして最後に、大学生からのコメントを発表した。

今回の英語活動に参加し、子どもたちと英語の関わり合いについて学んだ。子どもたちの習熟度は様々で、きちんと言ったことを理解できている子もいれば、耳から覚えた言葉をただ述べているという子どももいた。しかし大学生や子どもたちなど、様々な人間が集まり英語を使ってコミュニケーションをとることで、どのような子どもたちも英語に触れ、身体で覚えるという機会になった。子どもたちは英語の習熟度だけでなく、もちろん性格も様々で、引っ込み思案な子もいれば、積極的に参加しようとする子どももいる。しかし活動に参加しにくいと感じている子どもが英語活動に参加できるように工夫し、また英語に苦手意識がある子どもには、理解できるように補助をすることで、「みんなで英語に親しむ」という機会を作ることができる。将来私達が教員になるにあたっても、みんなが楽しめるように、身体を動かしながら、英語の音声に慣れ親しみ色々な人とコミュニケーションがとれるような工夫をしなければいけないということに気づかされた。今回の活動で、一緒に活動する仲間が大学生ということもあって、子どもたちにとっては親しみ易いところがあったであろう。さらに一緒に英語を学習するということで、日本語とは違い、少し疎遠に感じるような英語を、親近感を持って学ぶ体験を通して、英語に対するイメージを少しでも良くしてもらい、そして何か新しいきっかけや刺激になってくれれば良いと感じた。

2009 年度 英語教育コース

西が丘小学校(5年生)での活動報告

活動日:平成 21 年 10 月 30 日
13:00~14:00

1. Greeting

“Hello.”や“Nice to meet you.”等の英語を使い、児童同士そして大学生と挨拶を楽しむ。

2. Dansinglish

音楽に合わせて、ジェスチャーをしながら、元気良く英会話を楽しむ。

3. Warm Up(The Key Word Game)

ゲームを通して、色や衣服を表す単語を集中して聞く。

4. Activity

① Let's introduce the clothes you like.

② Who is this?

Warm up で用いた色や衣服を表す単語を使った文を幾つか用い、好みの服に関するゲームを行う。

5. Today's Lesson

挙手した児童が感想等を言う。

6. End of Lesson

児童が大学生と別れの挨拶を英語で交わす。



英語ノート1

(服や色の活動は Lesson5に基づく)



北立減小学校(6年生)での活動報告

活動日:平成 21 年
11 月 19 日、26 日
13:00~14:00

●自己紹介

児童、大学生の順に1人ずつ自己紹介をする。センテンスカードの使用。

大学生から聞いた情報を各班で発表する。

1. 児童のプレゼンテーション

児童たちは、秋の修学旅行に向けて用意しているプレゼンを大学生に発表する。後に全体で発表するためのリハーサルの要素を含む。



各班が前でプレゼンをする様子

2. 全体のプレゼンテーション

児童たちは、各班で前に出てプレゼンをする。日本の遊び、日本で人気のみそ汁の具など、取り上げるテーマは様々。各班の発表後に質問時間を設ける。

北立城小学校(5年生)での活動報告

活動日:平成 21 年
11 月 26 日
13:00~14:00

1. Greeting and Introduction

簡単なあいさつに加え、“What’s your name?”という児童の問いかけに対し、大学生は“My name is ○○. Nice to meet you.”と答える。

2. Activity

①Let’s sing a song.

・A~E のグループに大学生が各一人入り、“If you are happy.”と一緒に歌う

②Chants

・大学生の着ている服に注意を向け、“Who is

wearing~?”という表現でリズムカルに歌う。

3. Interview

教室内を歩き回り、Do you like~?, What do you like?, Can you~?, What can you do?, Your~is~, のいずれかの5パターンの表現を使い、出会った人にインタビューをする。

4. Let’s sing a song.

“I will” 総合文化センターでの連合音楽会での歌を児童たちが歌って紹介する。

5. How was today’s lesson?

児童は日本語で、大学生は日本語を交えた簡単な英語で感想を述べる。

<感想>

英語活動について

以上2校の小学校と行った英語活動を通して、少しでも早くから英語に触れ、英語を体で感じながら学ぶことは、児童たちにとって良い刺激になると感じた。その一方で、「何を目的に英語活動を行うか」というねらいが子どもたちに伝わっているのかが少し不安に思ってしまった。しかしながら、子どもたちが生き生きと、そして自ら積極的に様々な活動に参加する姿を目の当たりにし、やはり早い段階で英語に親しんでおくことは中学校からの本格的な英語教育への準備段階として意義のあることだと感じた。

子どもたちには、これからも英語を学ぶ楽しさを肌身でたくさん感じてもらいたいと思った。

教職課程の学生として

学校現場でどのように担任の先生が英語活動を指導されているのか知ることができた。子どもたちの参加している様子から子どもの一人ひとりの個性が見て取れたが、その子どもたちにどのように関わっていくかを瞬時に考え柔軟に対応していく経験ができた。学生と児童がお互いに知り合い同じ活動に従事していくためのコミュニケーションのツールとして英語が使用できたことがよかった。

南立誠小学校理科教職員研修会（電池, 豆電球, 磁石を使った楽しい理科実験）

三重大学教育学部理科教育講座(物理) 牧原 義一

1. 研修概要

平成 21 年 7 月 24 日(金), 三重大学・物理学実験室において, 南立誠小学校の先生方(17 名)を対象とした約 3 時間の理科教職員研修会を実施しました。研修内容のご希望としては, 理科の中の「豆電球や電池, 磁石を使ったおもちゃ作り」ということでしたが, 実際は以下に示すような「電池, 豆電球, 磁石を使ったまじめな理科実験」になってしまいました。その中で, 簡単で面白い手作りのおもちゃについても何件か紹介しました。理科の実験や器具の取扱いに不慣れな先生方にとっては, 初めての作業や少し細かい工作等もあって少々難しいものになったかも知れず, 希望通りの研修会となったかどうか心配です。やはり, 実験は楽しいものであることは先生にとっても重要なことであると思います。

2. 研修内容

研修では, 2~3 名 1 組でいくつかの実験を行いました。次のページに, 研修の際に配布した実験内容と実験方法のメモを示しますので参考にしてください。

3. 研修を終わって

電気や磁石に関する学習内容は小学校でも数多く取り上げられ, 子供達も電気や磁気に関するいろいろな現象に非常に興味を示します。教育学部の教員として経験の少ない私の場合は, 「こんな面白い実験がありますよ」とか, 「こんな工夫の仕方もありますよ」などといったことは紹介できます。しかし, 実際の小学校の現場で同じように実験を行うには, 時間, 費用, 技術的な困難さなどの点で難しいことがあるかもしれません。

先生方の方でも, 研修内容を実際の授業で利用できるようにぜひ改良を加えていただきたいと思います(これは, 現場の先生方にしかできないことです)。理科の実験では, 細かい作業を行うことや, うまくやらないと正しい(期待すべき?)結果が出なかったりするものがたくさんあります。また, 期待した結果が出ないと「実験はおもしろくない」と感じる場合も少なくありません。しかし, うまくいかないことを「なぜ?」と考えることはとても重要なことです。今回, 先生方にそのような経験をしていただけたとしたら幸いです。

後日, 南立誠小学校の担当の先生から今回の研修に対する先生方の感想を送っていただきました。その中のいくつかを原文のまま紹介させていただきます。

- ・磁石や電気の実験は難しいところもありましたが, 楽しく実験できました。また, 説明を聞こうとしていても, 聞こえないときの子どもの気持ちが少しわかりました。
- ・楽しく実験ができました。小学校の子どもたちを思い浮かべながら実験していたのですが, つく・つかない, 回る・回らない, できた・できない, のあたりがドキドキで楽しいだろうと思います。ただし実験においては用具が要るので, その準備物があるかどうか, そろっていないとできないものがあったので身近な物でということができれば・・・と思いました。
- ・ゆったりと実験できる余裕がほしいですね。 ・実験準備が大変そう。準備が教師の大きな負担にならないような工夫や手だてが必要だと感じた。
- ・理科実験の楽しさが分かってよかった。ペットボトルと割り箸の利用で机上で配線するよりもわかりやすく工夫のよさが楽しさにつながるがよく分かった。



図 1. 細かい作業に「難しいなあ～」
とつぶやきながら・・・

南立誠小学校・理科教職員研修メモ

実験1：いろいろな磁石のN極，S極の観察

○「メモレBR」（パイロット製）を使用

- ① 棒磁石，リング磁石，丸磁石，板磁石，タイマー磁石の観察
- ② 切れる磁石（ゴム磁石）の切る前・後の磁極の観察
- ③ 磁石を利用したおもちゃの紹介

実験2：電磁石をつくろう

（電流と磁石の相互作用）

- ① 実験器具の作製
ペットボトルスタンド，
コイル（25回巻き，ブランコ型），豆電球
- ② 乾電池で豆電球にあかりをつけよう。
- ③ 導線の近く（上と下）に方位磁針を置いて，豆電球にあかりをつけてみよう。
⇒「電流が流れると，磁針（磁石）は振れる。」
⇒「**電流のまわりには磁気が発生する！**」
（1820年，エルステッド）
・方位磁針を導線で巻いて電流を流すと・・・。

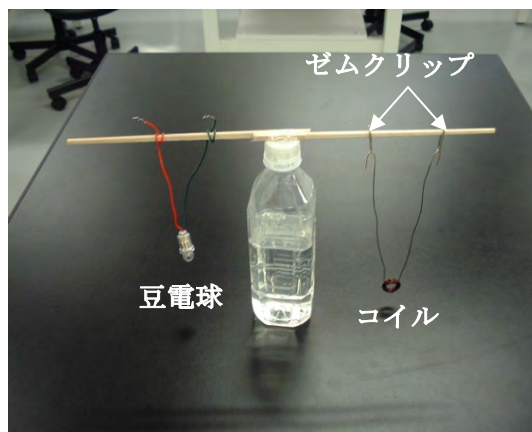


図2．ペットボトルスタンドに取り付けたコイルと豆電球

- ④ コイルに電流を流して，磁石を近づけてみよう。（**電磁石**）
 - ・豆電球，コイル，電池を直列につなぎ，コイルにN極（S極）を近づけてスイッチ ON，OFF。
 - ・コイルにゼムクリップ（鉄）を近づけてスイッチ ON，OFF。
〈以下の実験では，電池の発熱に注意！〉
 - ・電池をコイルに直接つなぎ，ゼムクリップを近づけてスイッチ ON，OFF。
 - ・コイルの中心にボルト・ナット（鉄芯）を入れ，ゼムクリップを近づけてスイッチ ON，OFF。（クリップをもちあげてみよう）。
- ⑤ 電池でモーターを回そう。
モーターの中には，コイルと磁石が入っています。
コイルに電流を流すとコイルは磁石になって，
モーターに固定されている磁石から力を受けて
回転します。

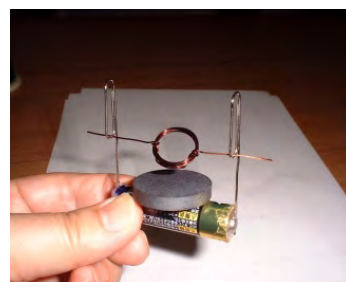
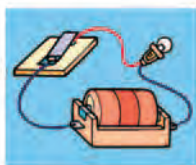


図3．コイルモーター

●あと，「⑥モーターを回して電気を作ろう。（**発電機**）」と，「実験3：金属パイプの中でネオジウム磁石を落下させてみよう」という実験を行いました，紙数の都合で省略します。

南立誠小学校・理科教職員研修会

(電池、豆電球、磁石を使った楽しい理科実験)



三重大学教育学部理科教育講座(物理) 牧原 義一

(平成 21 年 7 月 24 日・三重大学教育学部・物理実験室にて実施)

電気や磁石に関する学習 → 3 年, 5 年, 6 年生で実施

- ・身近で、とてもおもしろい現象が多い
- ・生徒は**実験**に大きな興味を示す

- 豆電球、電池、磁石について、**同じ実験器具**を用いて、簡単にできる実験を紹介と実習
- 簡単に作れるおもちゃの紹介
- 少し進んだ内容に関するおもしろ実験の紹介と実習

実験した内容

- ペットボトルスタンドの作製 → 配線容易、観察しやすい、多機能
- 電池で導線に電流を流し、導線近くの磁針を観察する実験
 - 豆電球が明るく光り、導線の近くの方位磁針が振れる！
 - 電流のはたらきを理解
- コイルに電流を流して、ゼムクリップや磁石を近付ける実験
 - ゼムクリップはくっつき、磁石ではコイルが磁石についたり、反発したりする → 電流と磁石が互いに及ぼしあう力(相互作用)の理解
- モーターを回して電気をつくる(豆電球を点灯させる)実験
 - モーターの構造と電気を作る方法の理解
- 強力なネオジウム磁石を使ったおもしろ実験
 - ガウス加速器とネオジウム磁石の金属パイプ中落下実験
 - 全員びっくり！！



細かい作業に「むつかしいなあ〜」
とつぶやきながら……

実験で使用した器具

ペットボトル、割りばし、エナメル線(コイル)、豆電球、ワニ口付きリード線、方位磁針、電池、電池ホルダー、棒磁石、リング磁石、紙やすり、クリップ、マブチモーター、アクリルパイプ、アルミパイプ、ネオジウム磁石球、鉄球など



実験器具一式

研修に対する受講者の感想と今後の課題

(感想)「磁石や電気の実験は難しいところもありましたが、楽しく実験できました。また、説明を聞こうとしても、聞こえないときの子どもの気持ちが少しわかりました。」「ゆったりと実験できる余裕がほしいですね。」「実験準備が大変そう。準備が教師の大きな負担にならないような工夫や手だてが必要だと感じた。」「理科実験の楽しさが分かってよかった。ペットボトルと割り箸の利用で机上で配線するよりもわかりやすく工夫のよさが楽しさにつながるがよく分かった。」

(課題)

- ・先生方の方でも、研修内容を実際の授業で利用できるように、ぜひ改良を加えてほしい(現場の先生方にしかできないこと)。
- ・期待した結果が出ないと「実験はおもしろくない」と感じる。→ うまいかないことを「なぜ？」と考えることはとても重要 → 実験の準備にかかる時間と、先生方自身の実験内容への興味が大切

大学キャンパスを活用した自然観察授業

— きのみをさがそう —

平山 大輔（理科教育講座・生物学）

活動の概要

自然に親しむ機会の減少にともない、学校園での自然体験学習の重要性は益々大きくなっています。この活動では、自然豊かな三重大学のキャンパスを最大限に活用した自然観察授業への取り組みの一環として、南立誠幼稚園の園児たちを対象に大学構内で樹木の果実の観察と採集を行いました。授業は、2009年10月15日に、南立誠幼稚園の先生方のほか、三重大学教育学部から河崎道夫教授（幼児教育）、後藤太一郎教授（理科教育）、および学生4名（幼児教育1名、理科教育3名）の参加を得て実施しました。

午前10時に集合し、事前に選定しておいた場所（3カ所）で、説明を交えながら観察と採集を行いました。その後、11時30分に教育学部の中庭に移動して全員で昼食をとり、活動を終わりました。なお、採集した果実は、各自ビニール袋などに入れて持ち帰りました。

成果とまとめ

園児による1時間半足らずの採集でしたが、アラカシ、シラカシ、ウバメガシ、マテバシイ（ブナ科）などの堅果（ドングリ）をはじめ、クスノキ（クスノキ科）の液果、センダン（センダン科）の核果、ナンキンハゼ（トウダイグサ科）、ツルウメモドキ（ニシキギ科）のさく果、イロハモミジ（カエデ科）の翼果、スズカケノキ（スズカケノキ科）のそう果など、様々な形態をもつ17種の果実が得られました。また、園児たちは非常に楽しんで取り組んでいる様子でした。

一般に、果実・種子には、普段動くことのできない植物が「動く」ための多様な仕組みが備わっており、果実の形態には植物の生存戦略が如実に反映されています。例えば、カエデ類の翼果（プロペラをもった果実）は、滞空時間を長くし、種子の散布距離を増加させることに寄与しています。また、ニシキギ科の果実の鮮やかな赤色は、散布者である鳥に対するディスプレイ効果をもつと考えられています。ただ眺めるだけでなく、授業の対象学年に応じて植物の生活（生存戦略）と関連付けた観察を行うことにより、形態のもつ意味の理解や興味の惹起につながると期待できます。

現在、教育学部の授業では、理科実験（生物）や生物学実験のなかで、大学キャンパスに生育する身近な植物の形態の観察や生活史の学習などを取り入れています。教師を志望する学生が、そうした授業で学んだことを実践し、**自然誌の面白さを体験によって伝える能力を養う場**として、また、**近隣の学校園の身近な自然観察の場**として、三重大学キャンパスの積極的な活用が進むようにこれからも取り組んでいきたいと思えます。

ご協力頂きました先生方、ありがとうございました。

大学キャンパスを活用した自然観察授業 — きのみをさがそう —

平山 大輔（理科教育講座・生物学）

活動の概要

自然に親しむ機会の減少にともない、学校園での自然体験の重要性は大きくなっています。今回の活動では、自然豊かな大学キャンパスを最大限に活用した観察授業への取り組みの一環として、南立誠幼稚園の園児たちを対象に、三重大学構内で樹木の果実の観察と採集を行いました。

（参加）南立誠幼稚園

三重大学

河崎道夫（幼児教育）、後藤太一郎（理科教育）

学生；幼児教育コース4年生1名

理科教育コース4年生2名、3年生1名

（目的）身近な自然の多様性に触れる

（内容）大学構内での樹木の果実の観察と採集

（日時）2009年10月15日 10:00-12:00



図1. 採集前の樹木の説明の様子。

内容

- ① 事前に観察と採集に適した場所を選定（図2）。
- ② 10:00 に教育学部玄関前に集合。
- ③ ①②③の順に各場所で説明を交えて観察・採集。
- ④ 11:30 に教育学部の中庭（④）に移動。
- ⑤ 昼食をとり、終了。

採集した果実は、各自ビニール袋などに入れて持ち帰りました。



図2. 観察・採集場所

観察・採集した樹種

表1. 園児が採集した果実の一覧。

種名	科名	果実	種子散布様式
1 アラカシ	ブナ科	堅果	動物散布（貯食型）・げっ歯類ほか
2 シラカシ	ブナ科	堅果	動物散布（貯食型）・げっ歯類ほか
3 ウバメガシ	ブナ科	堅果	動物散布（貯食型）・げっ歯類ほか
4 マテバシイ	ブナ科	堅果	動物散布（貯食型）・げっ歯類ほか
5 スダジイ	ブナ科	堅果	動物散布（貯食型）・げっ歯類ほか
6 コナラ	ブナ科	堅果	動物散布（貯食型）・げっ歯類ほか
7 クスノキ	クスノキ科	液果	動物散布（被食型）・鳥類
8 センダン	センダン科	核果	動物散布（被食型）・鳥類
9 クロガネモチ	モチノキ科	核果	動物散布（被食型）・鳥類
10 コムラサキ	クマツヅラ科	核果	動物散布（被食型）・鳥類
11 ナンキンハゼ	トウダイグサ科	さく果	動物散布（被食型）・鳥類
12 アカメガシワ	トウダイグサ科	さく果	動物散布（被食型）・鳥類
13 ツルウメモドキ	ニシキギ科	さく果	動物散布（被食型）・鳥類
14 イヌビワ	クワ科	いちじく果	動物散布（被食型）・鳥類、哺乳類
15 イロハモミジ	カエデ科	翼果	風散布
16 スズカケノキ	スズカケノキ科	そう果	風散布
17 アカマツ	マツ科	球果	風散布

※ 表1には種子散布の果実と異なる。

補足

果実や種子には、普段は動けない植物が「動く」ための多様なしくみが備わっています。



ただ眺めるだけでなく、授業の対象学年に応じて、植物の生活（生存戦略）と関連づけて観察することにより、形態のもつ意味の理解や興味の惹起につながると期待できます。

まとめ

1時間半ほどの間に、17種の果実を採集することができ、園児たちは楽しんで取り組んでいる様子でした。

教師を志望する学生が、大学の授業で学んだことを実践し、自然誌の面白さを体験によって伝える能力を養う場として、また、近隣の学校園の身近な自然観察の場として、大学キャンパスの積極的な活用が進むように取り組んでいきたいと思っています。

連携校による連携活動報告

(本報告書の 147～190 ページ)

総合討論

一身田中学校 校長 笠原 哲

この連携活動の間、三重大大学の多くの先生方および学生の皆様には、日常の授業にとどまらず、学校行事などで本当に幅広くご指導、ご支援をいただきました。この場をお借りいたしまして改めて御礼申し上げたいと思います。このフォーラムは、現代 GP、教育 GP というように器は少し変わってきておりますが、私は 4 回目の参加となります。そのつどポスターセッションを拝見していますが、学生の皆さんの実践研究が本当に深まっているという印象を受けました。本校でも、先ほどの活動報告でご紹介させていただきましたが、学校教育と社会教育を融合できるよう社会体験の機会の増加に向けて取り組んでおり、そうした中で大学の皆様のご支援が大変大きな効果を育んできたと考えています。今後の課題として、これまで取り組んできたことを継続すると同時に、学校の対応、教育内容も進化させていかなければならないと思います。大学との連携についてもさらに発展するよう、一丸となって創意工夫をさせていただきたいと思います。

南立誠小学校 校長 東谷 和久

南立誠小学校は、本格的に連携活動に参加するのは今年度が最初です。学校現場は何か新しいことを始めようとする、多忙感もあり、少し二の足を踏むようなところがありますが、実際にやってみると 10、11 個と多くの活動ができ、様々な学校行事の中に大学の力あるいは教育力を取り入れることとなり、本当に助けとなっています。ただし、学校現場だけが利益を得るのではなく、すでに連携活動が進んでいる一身田中学校区のように、教育実地研究において学生の皆さんを育てるという視点をしっかり持つことが重要だと思います。本校はまだ学生を育てるところまでは意識できていないので、この点がこのような事業を今後も続けていくうえでの課題かと考えております。できる限り学校が得をする、大学の学生さんも得をする、みんなが得をして子どもが一番得をする、そのような連携活動になればと思います。よろしくお願いします。

南立誠幼稚園 園長 丹羽 立子

南立誠幼稚園は今年度が 1 年目の取り組みということで、今回初めてこういう会に参加させていただきましたが、学生の皆さんおよび先生方が本当に一生懸命取り組んでみえ本当に感動しました。先ほどの活動発表では、学生の皆さんが体験のなかで感じたことなどが非常によく分かりました。先生の指導法から学んだことや、子どもに直接関わる中で心に残ることも多かったと思います。それ以上に、私たち幼稚園としましても、学生の皆さんや大学の先生方からお話をうかがい一緒に保育に携わっていただく中で、保育を見直したり教師として自分を見つめなおす良いきっかけをいただいたと思っています。職員が 3 人という少ない職場ですので、どうしても狭い視野で物事をとらえがちになるのですが、こうして多くの方々に情報やアドバイスをいただき、幅広い物の見方や考え方を得ることができて非常に良かったと思います。私たちだけでは実現できないことができ、子どもたちの心の中

にも活動のことが残っています。普段できない経験を通して子どもたちの世界が非常に広がったようで嬉しく思っています。また、教師自身の自主研修という形でおこなった運動的な遊びの研修では、手とり足とり支えていただき、運動の楽しさを学ぶとともに、岡野先生には遊びの意味世界というものを理論立てて教えていただきました。来年それをどのように子どもたちに具体的に伝えていくかが今後の課題です。来年もどうかよろしくお願いいたします。

津市教育委員会 教育研究支援課 課長 田邊 正明

津市教育委員会は、三重大学が教員養成モデルをどのように考え、どのように行っているのかについては詳しく知っております。また、大学との話し合いもしております。教育委員会が進めている特色ある学校づくりに際して、一番参考になり、一番学びの要素を備えているのはどこかと考えると、やはり大学だと思います。大学が専門性の中で最先端にあり、そこから学べるものがあると私は考えています。それを学ぶものは学校、児童、生徒だけでなく、大学生の皆さんも含め全てです。つまり全部が学びです。大学生の皆さんが小中学校あるいは幼稚園に行って学び、その学びは1年生の段階からずっと蓄積されます。そして卒業し、あるいは採用されて教員になった際には、非常に実力を備えているということが一番の理想でございます。津市の教育委員会にそういう教員が増えることは本当に嬉しいことだと思います。また、大学生の目の前にいる児童生徒のなかには将来教員になる子どもたちがいるかもしれません。そのような子どもたちが「先生」になりたいと思うような出会いが教育実践の場の中にあるかもしれません。したがって、私も津市教育委員会は、そういう活動を一生懸命やっていただけのことにつきましては、全面的に応援しております。課題としては、学生の皆さんの本音が聞きたいということです。学生の皆さんにとって、学校あるいは幼稚園はどのように映っているのか、本音を知りたいということでございます。

三重大学 教育学部 教授 岡野 昇

地域連携に関わらせていただいて4年目になります。まず先生方に感謝申し上げたいのは、90項目以上の実践に関わらせていただき、学生は確実に様々な場面で学びを感じており、将来教師を目指す学生にとっては十分な動機づけになっているということです。先生方には本当に感謝申し上げたいと思っております。ここからは私見ですが、ふたつ私が感じていることを申し上げたいと思います。

ひとつは、「何のためにやるのか」という命題をたてる際に、「学生のためにやる」とか「子どものためにやる」という考え方を私は捨てたいと考えています。たとえば、私が「学生のために何かをやる」と言った途端に、私は学生のために今この時間を使っており、「つまらないけれども、学生が将来伸びるだろうからこの時間を割いている」といった考えに陥ってしまうと思うからです。したがって、「学生のため、子どものため」を第一義的に考えるのではなく、「今やろうとしている活動、今やっている授業、今やっている実践を良くしたい」という気持ちでいつも関わらせていただいております。実践を大切にすることとは、その実践をどのようにしていくかということを実際に考えることです。私も大学で授業をやっておりますが、学生のためにやっているというよりは、今自分が担当している授業を良くしたいという思いしかありません。おそらくですが、授業を大切にしたり、実践を大切にしているということは、その中にいる子どもや学生は結果的に大切にされていることになるのではないかと思います。したがって私は一番に実践を大切にしたいと考えています。その実践とは何かといえば、「実際の現実の世界で自分がやりたいことをやること」と定義づけています。つまり、や

りたくないことは実践ではなく、やらせであって、仕事であります。やりたいことを明確にして、学生と先生方と私との三者でそのやりたいことに向かって時間を使うというような考え方で、ずっとこの地域連携に関わらせていただいております。

ふたつ目ですが、「学生が育つ」とか、「子どもが育つ」とか、あるいは「私たちが育つ」という視点にはふたつの視点あると思います。ひとつは、「育てられることを通して育つ」ということです。これは当たり前のことで、指導されると指導されたように伸びたり育ったりします。これは学生だけではなく、子どもたちも私たちも同じではないかと思います。もうひとつの視点は、「育てることを通して育つ」という視点です。つまり、指導する側に立って初めて自分自身が伸びるという視点です。これは日々感じています。学生にもっとこうしたいほうが良いとか、ああしたいほうが良いというようなことを言いますが、それはつまり裏返しで、自分自身に対しての指導になっている。つまり、学生がつまづいたり分からなかったことに対してこちらがどう対応できるのかということは、こちらが試されていて、こちらが教えられていて、こちらが指導されているということだと思います。ですからそこに時間をかけることは、自分が伸びるチャンスをもらっているということです。指導しているようで指導されているという両義的な関係の中で、お互いが育っていくのではないかと思います。それがおそらく、先程の校内研修の取組の説明の中にもありました、「学び合い」という考え方につながっているのではないかと思います。学生のためということではなく、実践のため、もしくは自分のため、自分がおもしろいと思っているから、これをやっているのだということを念頭に置きながら関わらせていただいております。

理科教育コース学生

やはり大学に来了時に一番やりたいなと思ったのは、実際の現場を見て、実体験したいということでした。メディアなどで学校について様々なことが言われていて、実際の教育現場がどのようなになっているのか不安がありました。在学中に、多数の学校に行かせていただき、非常に良かったです。

保健体育コース学生

教育実習に4週間行かせていただき、今年度は2週間、附属でお世話になりますが、やはり実習だけでは現場に関わる時間が少ないので、このように連携という形で現場の先生方や子どもたちと関わることができて、非常に勉強になっています。

家政教育コース学生

私も様々な学校現場に行かせていただきました。子どもたちの反応も、学校や学年によって大きく異なるので、そのような現場を知り、学べたのは非常に良かったと思います。また、各コースの取り組みを今日こうやって知ることができたので、自分が教員になったときに活かしていきたいと思いました。

三重大大学 教育学部 教授 岡野 昇

私はポスターの第二弾を必ず作ります。今回「おうちの人と遊ぼう」というカードとポスターを作らせていただきましたが、第二段を必ず作ります。一緒に作りましょう

津市教育委員会 教育研究支援課 課長 田邊 正明

来年度にこの津市に採用になる学生は、連携活動が始まった年に入学して今春卒業する 4 年生ということで、私は大変期待しております。この連携の成果がどういうものであるかということも実証されるのではないかと教育委員会としてはその辺りを見たいと思います。昔の教育現場には、新任の先生が来たら育てようという雰囲気がありましたが、今は即戦力として期待されます。即戦力にならないという感じであれば、やはり先生たちに厳しい風が吹きます。その辺りが昔と今の違いですので、学生の皆さんにはその辺りのことを感じていただければ良いかなと思います。そういう期待に応えられるかどうか、4 年間の成果がどのように発揮されるのか、ここで育った学生たちがどのように実践できるのかを教育委員会は見つめていきたいと思っています。

南立誠幼稚園 園長 丹羽 立子

今回、発表やポスターを見させていただいて非常に影響を受けましたので、また様々なところをお願いして幼稚園に来ていただいて、連携していけたらありがたいと思いました。また、こうして先生方や学生の皆さんといろいろお話させていただき、身近に触れ合う中で、学生の皆さんのことを未来の教師として現場に来てくださる大事な方なのだと感じましたので、しっかりと幼稚園の方でも育てていくという気持ちで、自分たちも育てていくという気持ちで連携していきたいと思いました。

南立誠小学校 校長 東谷 和久

今年連携事業に入ったばかりで、教育実地研究の視点がありませんでした。三重大学の学生の皆さんに、授業で私をちょっと使ってくださいと来てもらえるような、そのような学校になりたいと思いますが、とにかく事業を継続して、単発ではなく、継続して学生の皆さんに来ていただけるような校風にしていきたいと思っています。また、来てもらったときに、責任ある態度をもって子どもと関わってもらえるような、そのようなこともしていけたらと思っています。私ひとりの独断ではできないので、教職員と今後どのような形で連携していくかということを十分議論して、有効な活動に、効果のある活動にしていきたいと思っています。

一身田中学校 校長 笠原 哲

一身田中学校はいま教員が 34 名頑張ってくれています。4 年余りの学生さんとの取り組みの中で、正直申し上げて、当初は職員に少なからず負担をおかけしたことも少なからずあったと思います。ただその中でよく頑張ってくれて、今日の一身田中学校の特色というものにつなげてくれたと思っています。今後、私としてはぜひ、生徒もさることながら、ひとりひとりの職員にとっても教員にとっても、いまの連携が有意義な活動と思えるものになるように願っておりますし、ぜひそういうことにしていけないといけないと思っています。

閉会の挨拶

三重大学 教育学部長 上垣 渉

本日のフォーラムはお気づきのように三部構成で成っておりました。第一部が学生の実践発表、第二部が隣接学校園からの報告、第三部が総合討論です。その三つを聞かせていただきました感想を述べて、挨拶とさせていただきます。まず、学生の皆さんによる実践発表でございますが、多くの学生が隣接学校園の方でさまざまな活動に取り組まさせていただきます、子どもがどのような存在か、子どもがどのような振る舞いをするのか、あるいは学校の先生がどのように指導をされているのか、そういうことを目の当たりにして自分は今後こういうことをしなくてはいけないのだというような、教員になるために必要な資質について多少とも感じ取ってもらえたのではないかと思います。そういう学生たちをご指導いただきました隣接学校園の先生方に厚く御礼申し上げたいと思います。それから第二部の隣接学校園からの実践報告をお聞きしまして、それぞれに連携活動を1年間やっていただいた内容を紹介いただきまして、さらに成果と課題を整理していただきまして、今後の活動の糧になるようになったのではないかと思います。また、今後の活動への抱負もお聞きすることができまして、大変うれしく思っております。さらに、第三部の総合討論をお聞きしまして、隣接学校園と大学が連携を進めることによって、学校園の子ども、先生方、大学、そして学生たち、それぞれがお互いに高め合うようにしたいものだという思いを強くいたしました。今後もそれぞれの互恵的精神を持ちあって、連携を進めていきたいということをお願いいたしまして、簡単ではございますが閉会の挨拶といたします。どうも本日はありがとうございました。



参加者	171 名
学生	75 名
連携校・教育委員会	62 名
教育学部教員	22 名
他学部教員	12 名

アンケート回答数	53
学生	12
連携校	32
大学関係者	5
その他（未記入）	4

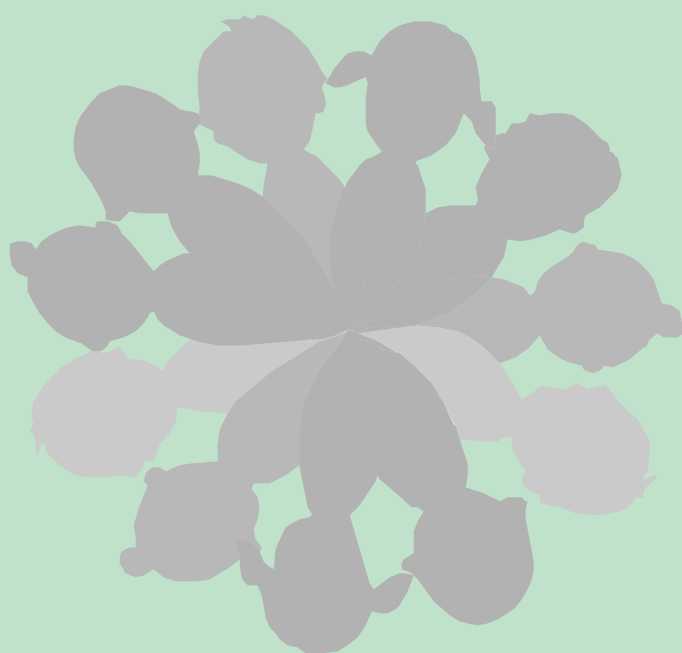
2009年度 フォーラムに関するアンケート					
		1. このシンポジウムで一番印象に残ったことは何ですか。	2. 学生の発表や内容で一番感じたことは何ですか。	3. 連携校の発表を聞いた一番考えたことは何ですか。	4. 今後の連携活動に対するご意見・ご要望をお聞かせください。
1	連携関係者	多くの学生、教員が参加し、このように成果、課題を発表し、深めあっていくという機会があるということが非常に意義のあることだと思いました。		連携活動に前向きに取り組む姿勢が最も大切ではないかと思いました。	
2	連携関係者			さまざまな活動があり今後の参考になった。	1年生の教育実地研究基礎の学生さんに何をどのように関わってもらえるのかわからず、いてもらうだけになり、とても申し訳ないと思っています。講座のねらいをもう少し具体的に周知していただくとありがたいです。
3	連携関係者	くふうを重ねることで、学校教育も学生の力も充実させることができるのだと実感しました。	1年生から教員を志している学生さんが一生懸命取り組んでいることに頼もしさを感じました。若い力を発揮して下さることが、子どもたちのやる気にもつながると思います。	学生さんには、大学での授業があるので、時間の調整が難しいのだと思いました。	授業として、大学生側が位置づけられると確保が可能かもしれません。計画的に取り組んでいくことが大切だと思います。
4	連携関係者	学生さんの発表とブース。	学生さんが勉強されたことや課題、これからのこと、また感じたことを話していただきよかった。一生懸命に話される姿が本当にステキでした。	どの連携も、子どもたちにとって本当にプラスになることばかりで、今日は他の園・学校の連携もきかせていただき本当に良かったです。学生さんだけではなく園・学校側子どもたちにとってそれぞれ学べるのがたくさんあったのではないかと考えました。	これからも連携活動をおして私自身も成長していきたい。
5	連携関係者	各校への広がりを感じた。		活動が広がることで自分が新たな視点を得たり、価値基準を確認したることができる。	もう一歩進めて、継続的な内容(研修)を実施したいと思った。そのためには学校別の計画と意思が必要。
6	連携関係者		時間が短かったのが残念です。		学生と打ち合わせる時間がやはり必要である。
7	連携関係者	平山先生ポスター発表。連携をお願いしたいと思いました。	教員として当たり前に思っていることを、学生が学んだこと、新たな発見とし発表してくれたので、大切なことを再確認することができた。	来年どんなことができるかな・・・と考えながら聞いていました。	メールもいいのですが、電話で連絡できるようにお願いします。
8	連携関係者			課題がはっきりしたこと。	教育実地研究基礎Ⅰ～Ⅴまでの具体的な道すじや連携のあり方を示していただくと嬉しいです。
9	連携関係者		課題を解決する方法を考えてほしい。	大学生との連携をどうするか？課題である。月1回くらいの打ち合わせは必要か？	
10	連携関係者	ポスターセッションでの学生さんの明るく積極的な対応。	発表時間が短い。	内容より、成果と課題中心に報告の方が大切。	内容をしっかり考え、見直し、継続していく努力をしていきたい。
11	連携関係者			三重大GPで、各校の連携が深まり、実践も深化してきた。	今後も児童・生徒が楽しめる活動ができる実践にとりこんでいきたい。
12	連携関係者	連携活動報告。		いろんな学校の実践をきいて、来年度はどのような取り組みをしていくのかということを考えました。	最後に学生さんの生の声が聞けてよかったです。自分も大学生の時にこのような取り組みがもっとあるとよかったと思いました。
13	連携関係者	様々な取り組みがされているので驚いた。	自分の頃はこういう取組がなかったので残念だった。	他校の取り組みが参考となった。	ずっと継続できるようにしてほしい。
14	連携関係者	すごくたくさんの実践があり驚きました。大学の先生方の精力的な動きに感謝しています。	すごくたくさんの実践があり驚きました。そんな中でご指導いただき、感謝しています。	学生に仕事をまかせることで学生が真剣になるという、一身田中学校の意見に「なるほど!!」と思った。	さらに綿密な打ち合わせを行い、両者にとってプラスになるものにしてほしい。
15	連携関係者	発表の時間設定がきちっと出来ていること。	発表が全員きちっとできていたのがよかった。	校種によって種々の連携があることがわかった。	連携校がふえるのは良いが、三重大が大変になるのでは?と思った。

16	連携関係者		せっかくの活動報告が45秒だったのはとても残念です。		
17	連携関係者	様々な取り組みを知ることができた。	それぞれの発表で創意工夫がみられました。	取り組む考え方について。	前向きに継続していきたいと思います。
18	連携関係者			将来的な教育力を全ての立場で高めた取り組みになっています。	自分の力にしていきたい。
19	連携関係者	それぞれの学校が特色ある活動を導入しており、活発に動かれていることがわかった。それを今後どう活かしていくかが課題である。	大学生のための授業ではなく、子どもたちにわかりやすい、また興味がつきない授業をしてほしい。	アシスタントの活用と子どもたちとの関わり合い(距離)についての再考察。	アシスタントとのしっかりとした打ち合わせが必要。
20	連携関係者	開催日程の調整をもう少し早い時期にしていたと多くの者が参加できる。		他校の連携発表を聞かせていただき、自校でも取り組みたい内容を見つけることができた。	単元等が迫ってから、大学の先生と調整するため、日程が合わないことがある。学校として年間計画をたてる必要があると感じた。
21	連携関係者				ラートは本当に教員も生徒も楽しみにしています。ご支援よろしくお願いします。
22	連携関係者	幼小中の成果、学生の成果、そして次年度につながる課題をまとめて発表されたことは、大変勉強になりました。学生も生き生きと発表している姿がきちんと目標、ねらいを持って取り組んでいること	内容がすばらしいのに、ポスターや短い時間の発表はもったいない感じがした。もっとしっかりと発表できる場があるとよいと思う。	幼小中が同じ事業の中で発表することで、この事業のとらえ方や視点を様々な方向から勉強することができた。	今後も引き続き事業を行う中で、子どもたちの活動、生活、学び、育ちの場が広がるきっかけになるようにしたい。
23	連携関係者	ネオジム磁石の実験です。生徒が必ず喜ぶと思います。			一緒に作る、コラボレーションするというイメージが連携ののかなあと感じました。
24	連携関係者		もう少し長い時間聞きたかった。		
25	連携関係者	学生の生の声が聞けてよかった。学生はもっとやりたいという熱意を感じました。	このような実践を学生の頃からくり返して行うことは、学生にとって非常に有意義だと感じました。		
26	連携関係者	教育現場、大学の専門性、子どもたちの教育、学生さんたちとの連携などいろんな力が融合されてできる意味のある教育モデルなんだということを実感しました。	学生の方が現場で実体験し、感じたこと、学んだことを聞き、とても意欲的に実践していこうとされる意欲を感じます。	一身田校区の学校については、今までの積み重ねもあり、学校支援、連携協力体制がきちんと構築されていると思いました。	今後も継続的な取り組みができればうれしく思います。さまざまな連携活動の概要を知ることができました。
27	連携関係者	学生等によるポスターセッション。質問等も教育現場から可能な限りでき、それに対して真剣に答えてくれる学生の姿勢がよかった。	「現場の子どもたちを知ろう」という子ども理解の上に立った実践、発表が多かった。	年間を通した連携活動の実践計画を各連携校において作成し、実施できるように調整していくこと。	教育実地研究のような、継続的な連携の構築(教科、総合的な学習の時間、英語活動)
28	連携関係者			授業や今行っている実践がよりよくなるような連携のあり方をさぐっていききたいと思います。	
29	連携関係者			教育プログラムの開発がこれから大切かと思います。「会社をつくろう」を実践して有用でしたが、大学でプログラムが開発され学校で検証、改訂するという協力関係が深まると良いと思います。	
30	連携関係者	学生のがんばりと、支える先生の情熱。	研究していくののしさを感じている様子が頼もしい。先生たちさすが!!	うちの園は4年目。来年は継続した取り組みを増やしたい。園の現状にびったりあった研究を話し合います。	すごううれしい。
31	連携関係者	いろいろな連携の形をすることができた。	大変意欲的で、ポスターの前でも「もっとこういうことをしたかった」などの熱い思いを聞けて感心した。	1年間継続的に学生と子どもが関わりあえると思った。	行事と、行事へ向けての取り組みと両方に学生に入ってもらいながら、子どもとの関係がつかれるとよいと思った。
32	連携関係者	大学の熱意。			

33	学生		1分30秒で話をまとめることは非常に難しいことが感じました。その分、たくさんのことが伝えたいという気持ちも感じる事ができました。		
34	学生	学生の発表。	信頼→授業なのか、授業→信頼なのか興味深かったです。	まだまだ自分の経験も足りないなと思いました。	
35	学生	多くの活動が熱心に行われていてスゴイと思った。	早い段階で実践をつめるのはいいことだと思う。		どんどんやっていくべきだと思う。
36	学生	私自身の活動はすでに相手の先生が考えてくださっていたものを行うというものでしたが、他の方はまず自分で活動を考えていらっしゃるのだなと思いました。	みなさんさまざまな活動をしていて、子どもたちへのさまざまなアプローチがあるのだなと思いました。		
37	学生	どのポスターもそれぞれの個性があり、おもしろい。	どの活動においても、実践として子どもたちと関わったからこそわかることや感じることもあるのだと思った。	連携活動は学生の成長にとっても重要である。	発表の時間が少しみじかいのではないかと思う。
38	学生	遠足で大学を使ったり、PTAとともに活動を行ったり、活動の幅の広さ。	さまざまな教科・科目の取り組みが行われているのを知って、参考になるものや、興味をもつものもあって、興味深かった。	学校側と十分に話をできなかった場合もあったので、学校側の印象や希望が聞けたのが良かった。	次の活動につなげるためにも、活動ごとに学校側と話を聞く機会をほしい。他教科の取り組みもお互い報告しあい、他に活かす機会にしたい。1～4年生、学年ごとに感じる事や学ぶ事も違うので、単発だけでなく、ある程度の期間をとった活動をして、より1つの活動から学び→活かすことができるようにしてほしい。
39	学生	磁石の実験(実演があると面白い)。	パワーポイントや写真があるとわかりやすい。	保育者側からの意見を聞けたことは嬉しい。	今回の活動の反省や課題を活かしてほしい。
40	学生	発表時間が短かったために、集中して聞くことができたということ。	コース、学年によってさまざまな側面から地域の教育に関わることは大変意味があるということ。	学生にとって、このような現場での経験は大変貴重であり、また、それが連携校にとってプラスになっているのならば連携活動は大変有意義であるということ。	
41	学生	学生の発表が慌ただしくなりました。	もう少しゆっくり聞きたいと思った。	これからも続けていければ良いなと思った。	
42	学生		時間が短すぎる。(本当に1分半あったのか・・・?)けど、しょうがないですネ。		
43	学生	地域連携によってさまざまな人が育っていること。	大学内でたくさん連携が行われているんだなと思いました。	大学と連携することによってたくさんの活動が活気的になるのだと感じた。	もっとたくさん増やして欲しいと思います。
44	学生	トーンチャイムの音色がキレイでした。	時間が短かった。ですが、とてもいい経験になりました。	連携することで、学生も連携校先生方も新たな視点や問題点が発見されるのがいいと思いました。	
45	大学教員	活気ある発表会でした。	一分半プレゼンはもう少しよくまとめてもよいおこなと思いました。事前に知らされているのですよね?		
46	大学教員	学生が早いうちから言べを体験する機会があること。			
47	大学教員	連携が多様化しているなあ。	みんな頑張っている!!やっぱ「学生を認めて信頼する」ということをあきらめてはいけないなあ。反省…。来年度も気持ちを新たに頑張る…。ぞ。		忙しさに紛れてゆっくり連携について振り返る時間もないのですが、このフォーラムでその時間が取れて、ありがたく思っています。幼稚園での取り組みが多様化、深化していて非常に刺激を受けました!!ありがとうございました。
48	大学教員	ポスター発表。	さまざまな活動があり、驚きました。コースをまたがったコラボの活動が増えるといい!		学生が授業の中で参加できている授業が多いですね。うちのコースでは大学の講義との時間が合わないなので、難しいのですが…。学生と現場の事前打ち合わせとふりかえりの時間の確保が必要。

49	大学教員	教育学部教員、学生、地域学校の教員、生徒たちが連携して実践の成果をあげていることに感動しました。	現場で自ら課題を発見してとりくんでいる姿勢はすばらしいと思いました。概念をも用いながら教育の理念を現場で活かそうとすることはよかったと思います。	学校の取り組みが受け身的か積極的かで同じことをしていても負担感が違うのだと思いました。地域の学校の先生方には感謝します。	すばらしい取り組みがはじまっていて、すでに実を結んでいることをとてもうれしく思います。
50	その他	教育学部の学生さんたちがさまざまな活動をしていることを知らなかったのが勉強になった。	頂いた冊子を見ると、活動内容が詳しく書かれていて良かったが、発表時間が少し短くて残念だった。ちゃんと子どもしようがよかった。「はじまるよの歌」はおもしろかった。		
51	その他	貴重な方の意見を聞いたこと。例えば津市教育委員会の方など。	こんなにたくさんの連携があったのかとおどろいたとともに、とても学ぶきっかけとなった。		今後も連携活動をよろしくお願いします。
52				学生のうちに教育現場を知ることができるのはすばらしいと思います。	
53				1年間を通しての具体的な計画を学生と学校側(担当教員)で立てなければいけないように思った。	

V 資料



1. 大学教育推進プログラム申請書

平成21年度「大学教育・学生支援推進事業」

大学教育推進プログラム【テーマA】申請書(様式)

設置形態	<input type="radio"/> 1. 国立	<input type="radio"/> 2. 公立	<input type="radio"/> 3. 私立
学 校 名	三重大学		
本部所在地	〒514-8507 三重県津市栗真町屋町1577		
設置者名	国立大学法人 三重大学		
学 校 長 名	内田 淳正		

取組期間	平成 21 年度 ～ 23 年度			
取組名称 (全角20字以内)	隣接学校園との連携を核とした教育モデル 副題(サブタイトル) 多様な教育課題に対応できる教員養成を目指して			
取組学部等	教育学部			
事 項	<input type="radio"/> 1. 体系的な教育課程	<input type="radio"/> 2. 幅広い学びの保証	<input type="radio"/> 3. 課題探求能力	4. 学習時間
	5. 授業計画の明確化	6. 授業時間の確保	7. キャップ制	8. 双方向型学習
	9. TA	10. SA	11. 少人数指導	12. 情報通信技術の活用
	13. 成績評価基準	14. GPA	15. 多面的な評価	<input type="radio"/> 16. 初年次教育
	17. 高大連携	18. FD	19. SD	20. その他

ふりがな	ごとう たいちろう	所属部署名	教育学部・教授
取組担当者	後藤 太一郎	及び職名	
勤務地	〒514-8507 三重県津市栗真町屋町1577		
電話番号	(勤務先) 059-231-9260	(自宅・携帯電話等) 090-3956-4728	FAX番号 059-231-9260
e-mailアドレス	goto@edu.mie-u.ac.jp		

ふりがな	つげ さとし	所属部署名	学務部教務チーム・チーフ
事務担当者	柘植 智司	及び職名	
勤務地	〒514-8507 三重県津市栗真町屋町1577		
電話番号	(勤務先) 059-231-9056	(自宅・携帯電話等) 090-5452-5486	FAX番号 059-231-9058
e-mailアドレス	kyomu-k@ab.mie-u.ac.jp		

取組の概要

教員養成では、教職への意識を高め、教科や生徒指導に関する指導力だけではなく、学校における様々な問題を解決・改革する課題探究能力の育成が欠かせない。本学部では、このような総合的な実践的指導力を育成するために、教育実地研究基礎（１年次）、主免許４週間教育実習（３年次）、副免許２週間実習（４年次）、教育実地研究（４年次）など、実践に関わる科目（教員養成コア科目群）と、教科専門および教職専門科目との往還を重視してきた。このカリキュラムは、初年次教育として入学段階から学校現場での授業参観や課外活動の補助などを含めた実地研究基礎に参加し、徐々に授業や様々な学年・学校行事の補助、そして授業実践へと実践への参与形態を深化させるという順次性を重視した体系的な教育課程となっている。近年、本学部ではこのカリキュラム改革と共に、附属学校園の他に大学の隣接中学校区と連携を進めてきた。

中央教育審議会の答申を受け、教育実践力としての「教職実践演習」の授業内容および方法の整備、大学と協力の綿密な指導体制に基づいた「教育実習」を実施すること、そして多様な教育問題に直面しても乗り越える力を育成することが課題となっている。この実現には、本学部が学校現場と一層強固な連携を築き、現実的・現代的な教育課題を協働によって解決することが必須である。

本取組は、本学に隣接する２つの中学校区（２中学校、６小学校、３幼稚園）および教育委員会との連携協力を深化させ、学校における様々な教育活動や諸問題に対する支援を行いながら、これらの学校園における学生の現場体験を核とした教員養成の教育モデルを構築するものである。これにより、教員としての資質形成に結びつく体系的で幅広い学びを保証することによって、質の高い教員を養成することを目的としている。実施にあたっては、本学部に設置している地域連携推進委員会が中心となり、各学校園と教育委員会で構成する地域連携連絡協議会を設置して、以下のような教育実地活動を進める。

・**学生が各学校園で教育的支援を行う実地研究**：教育実地研究基礎（１年次）および教材研究や教科教育法の授業（２・３年次）の中で学校園における諸問題をテーマとして取り上げ、学校現場での授業支援に関わる。また、学校行事やPTA活動の補助、または企画や実践に携わる。

・**学校園の教員からの指導が主となる実地研究**：大学と連携学校園が協働して教育実習（３・４年次）を実施し、実践的指導力を高めることを目指すとともに、学生は幼小中すべての校種での他の実習生の授業を参観する。また、４年次の教育実地研究の授業の中で、連携校の教員による実体験に基づいた授業を受ける。

・**大学教員による学校園に対する教育支援活動**：大学教員が現場教員のための「教科力アップ研究会」を実施するとともに、学生も教材研究や教科教育法の授業（２・３年次）の中で同研究会に参加することで、学校現場で必要な教科力を学ぶ。また、公開授業の助言に大学教員が関わる中で教育実地研究（４年次）の受講生がアシスタントとして参加し、授業づくりのプロセスを学ぶ機会とする。

・**大学を活用した地域活動**：児童生徒が大学に来て学ぶ機会となる「フレンドシップ事業」や「青少年のための科学の祭典」などの教育活動を学生が企画・運営し、教育における地域との連携活動を学ぶ機会とする。

以上、学生が隣接学校現場の多様な活動に参加し、大学での省察との往還を通して、学校現場の課題を発見・解決する体験をもち、実践的指導力を身につけることが特色である。

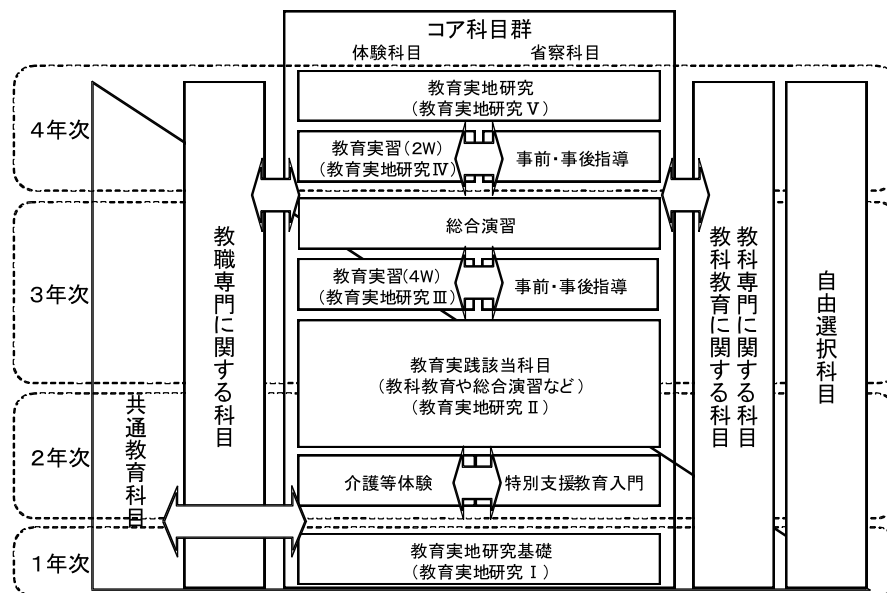
1 教育の質の向上への大学等の対応について

(1) 人材養成目的の明確化 [申請書類等作成・提出についてP.4参照]

本学部の目標は「教育に関する学識と専門的素養を身につけるための幅広いカリキュラムを通じ、深い専門性と豊かな人間性を備えた教員および職業人を養成することによって、地域社会・国際社会の教育・文化の発展に貢献すること」である。教員養成学部における総合的な学士力ともいうべき「全学齢期の発達理解と教科の専門性」を重視し、質の高い教員養成のため、小・中二校種の免許取得を卒業要件としている。

具体的には、『「感じる力」「考える力」「生きる力」とその基盤となる「コミュニケーション力」を、各学部専門領域の学習を通して育成する』という本学の教育目標を受け、初年次より教育に対する興味・関心を深め、自らの教職観を培うことを目的とした「教員養成コア科目群」を中心としたカリキュラムを設けている（図1）。そして、コア科目群、教職専門科目、教科教育・教科専門科目が有機的連携を図る構造となっている。

教育学部カリキュラム構造



【図1 教育学部カリキュラム構造】

平成19年度より「教育実地研究基礎（1年次）」を必修科目とし、2・3年次での教科教育法や教科教材研究の授業においても実践的な内容を取り入れ、さらに4年次においては、「教育実地研究」を選択科目として履修することができるようにし、これらに加えて、既存の教育実習を含め、「教育実地研究Ⅰ-Ⅴ」と位置づけ、体系的で幅広い学びを保証している。

本学部のアドミッションポリシーでは、「地域の教育力を強めることに貢献し、専門分野を通して地域に根ざした知の支援活動を進める」という学部の理念・目的のもとに、「様々な教育問題、教育環境の変化に適切に対応できる創造性と問題解決能力を培い、力強くリーダーシップの取れる人材をPBL（問題／課題解決型学習）教育を通じて養成する」と掲げている。このカリキュラムの独自性は、学生自身が学舎の隣接地区のコミュニティにおける継続的な現場体験を通して、現場や地域の活性化にも寄

与しつつ実践的指導力を培う教育モデルが基盤となっている点にもある。

平成 20 年度からは、各教科における実践的指導力を再検討し、教員養成の総合的な到達目標としての「三重大学教員養成スタンダード」を策定し（資料 1）、教職実践演習の開設準備を進めている。

（２）成績評価基準等の明示等

本学では、学位授与の方針に従い 1 単位 45 時間の学修の保証と単位の実質化への配慮として、シラバスを通じた授業時間外の学習への工夫などに取り組んでいる。独自の e-ラーニングシステムによる授業時間外の指導や PBL 授業の推進は、自学自習の保証だけではなく、学生同士の相互学習の深化に寄与している。

一方、GPA やキャップ制の導入については、評価者を育成するという教育学的視点からの継続的な論議を進めている。また、客観的評価とあわせて、教科や活動の特性を活かしたポートフォリオや評価項目の開発など質的な評価方法の開発も進めている。

（３）ファカルティ・ディベロップメントの実施

本学部における FD 活動の特徴は、教員や学生の自主性、主体性を基盤にしたボトムアップ的な活動となっているところにある。具体的には、平成 16 年度より、①教員同士の授業交流・授業研究の実施、②「学生による授業改善のためのアンケート」の実施と公開、③「教員と学生が語る会」の企画・運営、および④附属学校教員や教育学部職員による研究活動など、「プロジェクト型 FD」を展開してきた。②に関しては、アンケートの集計結果と教員からの授業改善に関するコメントを Web 上で公開し、受講生との双方向の対話を重視した改善を行っている。また③の企画の一つとして、学生を主体とする研究成果報告会を実施している（資料 2）。現場の実践と大学での学びの往還を報告することは、学生にとって意義深いものとなっているだけではなく、学生同士、学部の教員同士が相互に情報交換し、学び合う場にもなっている。本学の目標に標榜している 4 つの力を発揮する場であり、これらの活動は、日本教育大学協会研究集会等においても高く評価されている。

（４）自己点検・評価等の実施体制・展開と評価結果の反映

各コースの教員が構成する自己点検評価特別委員会が、毎年自己点検を実施し、結果を報告書『課題と展望』にまとめ、公開している。平成 12 年度からは三重県教育委員会をはじめ市町委員会、各校長会等の教育関係者および企業関係者で構成される外部評価委員会より毎年評価を受けている。ここでは各種委員会報告書等の閲覧だけでなく、授業公開や討論会を実施するなど、様々な角度から学部活動の評価を実施し、結果を報告書および Web 上で公開している（資料 3）。

また、「教育満足度調査」や「授業改善のためのアンケート」などによれば、学生から学業の成果に対する高い評価を得ており、教員採用試験受験者・合格者数も高い実績を上げている（資料 4）。

最近では、以上の PDCA サイクルを円滑にし、学部全体での学生の学修成果の共有（資料・記録の保存）と地域・社会連携活動の推進を目的とし、校舎の耐震改修に伴って地域連携室の設置や PBL 教室の整備なども行った。

2 取組について

(1) 取組の趣旨・目的・達成目標 [申請書類等作成・提出についてP.4参照]

①取組を実施するに当たっての背景

教員養成では、生徒指導力や教科力は言うまでもなく、学校における様々な教育課題を、解決・改革する「課題探求能力」が求められている。このためには、学生が入学段階から卒業までの間に多様で多彩な学校現場を参観し、実践的な活動を企画・実践する経験を保証することが欠かせない。すでに述べたように、本学では教育実践力育成をコアとしたカリキュラム構造を策定しているが、この実施には学校現場と強固な連携を築くことは教員養成学部にとって必須事項となる。本学部では平成18年より現代GPの支援を受けて、隣接する一身田中学校区（1中学校、3小学校、1幼稚園）との連携を開始した。大学と近隣の学校園でありながら、学生教育を含めた連携が学部全体としての取り組みに至っていなかったが、GPに採択された事業であるという高い社会的評価も後押しし、これを契機に幼小中大の連携が飛躍的に進展した（資料5，6）。これは連携協力校の活性化にもつながり、県内の学校園の中でも注目される中学校区になり、現在では学校現場に学生を受け入れてもらうだけでなく、児童・生徒が大学での活動に参加するなど、双方向の連携が成立している。

年度毎に人事異動がある教育現場にとって大学が安定した知の拠点となりつつあり、大学も中学校区のコミュニティとして機能している。これからの教員養成系においては、近隣に学生が関わることのできる学校現場があることがいかに重要であるかを教員一同が共通に認識し、実践的活動の場として連携協力関係を深めている。それらは、教員の協働数の変化からも読み取ることができる（資料7）。

平成20年7月の中央教育審議会答申に基づく教育職員免許法施行規則改正にともない、「教職実践演習」の導入や教育実習の円滑な実施に努めることが急務となっている。現状では、教育実習は附属学校以外にも公立の協力校で実施されているが、特別練習授業に参観するものの実習校任せの教育実習である場合が多い。今後は、隣接校区の学校園との間で、連携協力体制をさらに拡大・強化し、大学と協力した綿密な指導体制に基づいた教育実習を実施することが課題となっている。本学部ではそれに先立ち、平成20年度に教職の到達目標としての「三重大学教員養成スタンダード」を策定した（資料1）。ここにあげた学習項目は、学校現場における多様な体験的学習なしには達成し得ない。

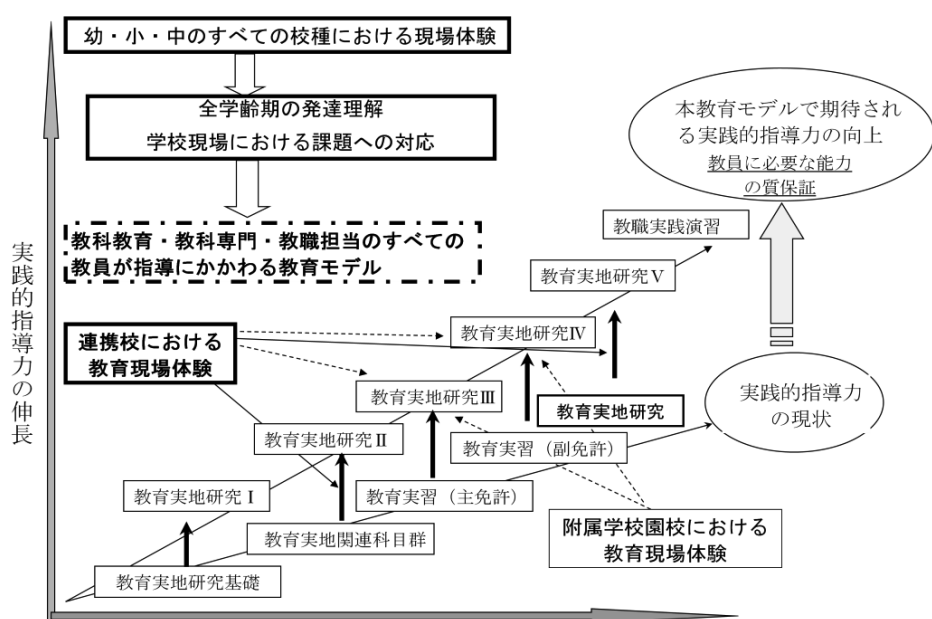
本取組は、「教職実践演習」の内容を網羅するものであり、教職担当教員だけではなく、教科専門・教科教育の教員同士の協働によって大学教員も専門分野を活かしつつ、学校現場と深く関わりながら学生指導にあたることができる点で先駆的な取り組みといえる。今後は、大学に隣接する学校園との連携活動をカリキュラムの中核とし、最大限に活用できるモデルを構築することが課題である。そのためには、協力校との連携を量的にも質的にも拡大することが必要であるが、幸いにも本学にはもう一つ隣接する学校区として橋北中学校区（1中学校、3小学校、2幼稚園）があり、本年度より連携も進んでいる。学生にとって、通常の授業の中や授業の空いている時間に学校現場に行くためには、大学の近くに協力連携校があることが欠かせない。この取組みの連携先となる各学校園までの距離は、大学から5kmほど（自転車で20分）の範囲

にあることから、大学教員にとっても移動が容易であるため、設定している教育実践関連科目の実施を円滑に行うことができる（資料8）。つまり、教科教育・教科専門・教職担当のすべての教員が関わるることができる理想的な教育モデルといえる。

②取組の具体的な目的

本取組は、隣接学校区との連携協力による実践的な教育活動を整備し、これらを教育課程の中で最大限に活用する教育モデルを構築しようとするもので、多様な教育活動と複数の校種の学校現場での活動を経験し、子どもの発達段階を教育現場で知ること、学生に幅広く高い教育意識をもつことのできる教員養成を行うものである。そして、これを支えるために、本学と同一地区に並立する2つの学校区（2中学校、6小学校、3幼稚園）および教育委員会との連携協力を深化させ、教育現場における諸問題に対して学生教育を伴った支援活動や、子どもを中心とした地域連携を進めるプログラムを作成して授業の中に位置づける。また、学生にとって教育実践意識を高める最大の授業科目である教育実習についても連携校との協力体制を構築することで、円滑な運営を図ることを目指す。

当該学校園は、現代の教育課題（小規模校、多文化教育、人権教育、学力問題等）を抱えていることから、協働を通して学生だけではなく現場教員の課題探究能力も高まることが期待される。教職に就く前にこのような質の異なる多様な教育現場での課題や問題解決方法について十分に考える機会をもつことは、幅広い学びの保証につながり、どのような教育現場にも対応できる教職としての学士力保証を達成することができる。また、学校現場で必要な実務などに触れることにより、連携の必要性や校務分掌などの教員としてのトータルな教育実践力を身につけることを大きな目的としている（図2）。さらに、地域の学校や子どもへの支援を行うことで、地域における教育活動の活性化を促進させ、それを学生の幅広い学びにつなげようとするものである。



【図2 隣接学校園との連携を核とした教育実践プラン】

③取組による達成目標

取組の達成目標として、①教育現場での教育実地活動時間の増大、②教員になるための資質に関する学生の意識向上、および③学校現場からの本学部生に対する信頼度の向上を掲げる。隣接校区の学校園での実質的な活動は学生一人当たり年間10時間程度であったが（資料7）、全学部生が年間に幼小中で20時間行うことを目標とする。そして、学校現場理解と教員になるための意識向上についてアンケート調査するとともに、教員になるための力量についての自己評価を指標とし、卒業時には十分に身についたと評価することを目指す（資料3）。また、本学部生の教員になるための意識や態度について連携協力校の教員による評価を実施し、これを指標に全教員からの信頼度が100%になることを目指すとともに、さらに改善点を明確にする。これにより、隣接校区の学校園と一層密接な連携が進み、附属学校と隣接校区の学校園のみで教育実習の実施が可能となることが期待される。このことは、学生にとっても様々な教育実地活動を通して学校と関わる中で、指導案作成だけに追われるだけの教育実習から脱却し、授業構想に取り組むことができる体制作りにつながる。また、卒業生に対する事業所評価（資料3）についても引き続き実施し、本取組の成果の指標とする。

（2）取組の具体的内容・実施体制等 [申請書類等作成・提出についてP.4参照]

【プロジェクトの内容】

実施にあたっては、本学部に平成17年度から設置している一身田校区連携推進委員会を母体とした地域連携推進委員会が中心となり、各学校園と教育委員会からなる地域連携連絡協議会を設置して、以下の取り組みを進めていく。取組みは大きく以下の4つに分けられる。①学校園の教育的支援を主とする学生の実地研究、②学校園の教員からの指導が主となる学生の実地研究、③主に大学教員による学校園に対する教育支援活動、および④大学を活用した地域活動である。具体的内容については以下の通りである。なお、平成20年度に行われた校舎の耐震改修に伴い、地域連携室やPBL教室を設置するなど、地域・社会連携を推進するためのハード面での整備を進めた。

① 学生が各学校園で教育的支援を行う実地研究

- A. 各学校園における授業支援を通じた学校現場体験：学校園において必要となる授業支援を整理し、これらを1年次における教育実地研究基礎、および2・3年次における教材研究や教科教育法の授業の中で取り上げて、学生が学校現場で指導を受けながら授業支援に関わる。
- B. 各学校園の学校活動における支援：学校行事やPTA活動に関して、1年次における教育実地研究基礎、および2・3年次における教材研究や教科教育法の授業の中で取り上げて、学生が補助または企画や実践に関わる。
- C. 臨床的な卒業研究の拡大：自らの教材開発や授業実践分析を課題とする卒業研究を学生が行う場合、連携学校園は協力校となる。また、特別な支援を必要とする児童に対する活動の開発と実践も行い、臨床的な研究としてまとめる。

② 学校園の教員からの指導が主となる学生の実地研究

- A. 教育実習協力校としての連携：大学と協働した教育実習を連携学校園に引き受

けてもらうことで、実践的指導力を高めることを目指すとともに、特練授業の日程を実習生に周知することで授業参観することを可能とする。

B. 連携校の教員による授業：4年次の教育実地研究の授業の中で、生徒指導に関する教員の取組を実体験に基づいて紹介してもらう。

③主に大学教員による学校園に対する教育支援活動

A. 教科力アップ研究会：各教科で、現場教員が不得手とする内容について研修を進める。これは連携校からも強く要望されていることであり、ここに学生が関わることで、学校現場に必要な教科力や課題解決の方法を知る機会とする。

B. 公開授業・公開研究会への支援：大学教員が現職教員の授業づくりに支援を行うとともに、4年次の教育実地研究の受講生も参加することで、授業づくりのプロセスを学ぶ機会とする。

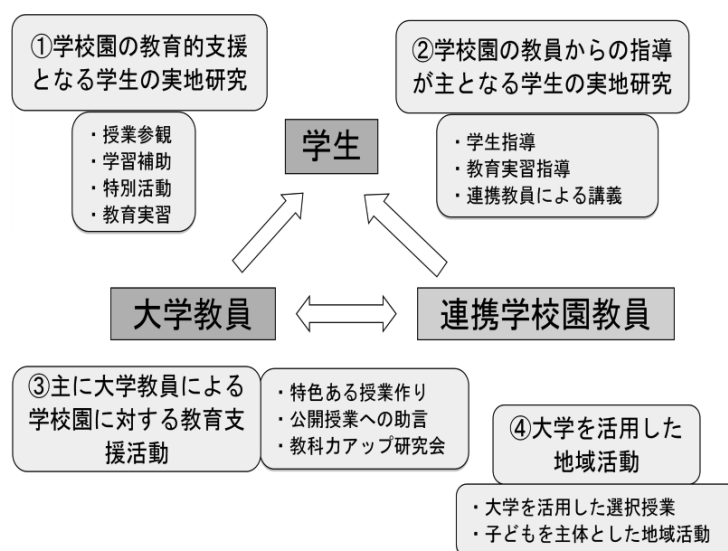
C. 各学校園の特色ある授業づくりの支援：各学校園で特色となる授業づくりの支援を大学として行い、これについて、2・3年次における教材研究や教科教育法の中で学生が関わることで、新たな視点から授業を立案するポイントを学ぶ機会とする。

④大学を活用した地域活動

A. 大学を活用した選択授業：中学校の選択授業などで、夏期休暇に大学を利用した体験的活動を行い、学生が補助に関わることで、生徒が大学に来て学ぶことの教育的意義を学ぶ機会とする。例えば、理科などではSPP（サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト）に相当するものを行い、教育の中で大学を活用する意識を育てる。

B. 子どもを対象とした地域活動：児童が大学に来て体験する「フレンドシップ事業」の実施や、三重大学を会場として開催している「青少年のための科学の祭典」でのブース出展など、学生が大学を活用した教育活動の企画・運営を行う。

以上の活動について学生、連携学校教員、および大学教員との関わりを示すと図3のようになる。連携学校教員の支援を受けながら、より実践的な学生指導体制を組むこととなる。



【図3 隣接学校園との連携活動】

【目的を達成するための教育課程・教育方法等について】

教育実地研究関連科目は学年進行にしたがい、教育実地研究Ⅰ-Ⅴまで設定しているが、連携する学校園での実践的な取組は、1年次における「教育実地研究基礎」から始まる。2・3年次では教科教育法をはじめとする教科専門科目の中に、通常の授業で学んだことを学校で実践する機会を含める。また、4年次では、卒業研究や卒業ゼミナールと関連して、より実践的な教育実地研究の指導にあたる。将来的には平成21年度以降の入学生を対象とした4年次の「教職実践演習」にも対応させる。

【実施体制】

実施にあたっては、三重大学教育学部内に一身田校区連携推進委員会を母体とした常設の「地域連携推進委員会」を設置し、この委員会を中核として事業を推進する。

この委員会は学部内の教務委員会、FD委員会、カリキュラム改革委員会、および教育実習実施委員会とも意見調整をしながら事業内容の検討を行う。また、大学内の高等教育創造開発センターとも連携しながら、他学部も含めた学内の教育実習の支援体制や、地域連携活動について意見交換する。携協力校からの地域連携担当者、津市教育委員会の教育研究支援課内の担当者、および地域連携推進委員会委員を構成員とする「地域連携推進協議会」を立ち上げ、内容や実施方法等は連携連絡協議会における協議に基づいて決定し、活動の実施は大学教員を中心として行う。

平成20年度における本学部の耐震改修工事に伴い、地域連携室を3室設けた。このうちの1室は地域連携のための事務室とし、活動を集積できるよう準備は整っている。

（3）取組の評価体制・評価方法

【評価体制】

地域連携協議会が中心となって自己評価を年に2回行う。本プロジェクト全体の評価については、三重県教育委員会および四日市市教育委員会に外部評価委員を委嘱し、年度ごとの評価を受ける。また、年度末には公開の報告会を開催し、参加者・関係者全員を対象とした本取組に関する調査を行うとともに、識者を招聘して助言を受ける。取組終了時には、外部評価委員に評価を受けるとともに、卒業生による評価を受ける。

【評価方法】

評価の指標としては、学生の変容、個々の取組に対する児童・生徒の満足度調査、連携校教員の意識変容調査、大学教員、地域連携連絡協議会の取組に対する自己評価を行う。特に学生の変容については、三重大学の教員養成における卒業時の学力、能力、資質を評価する方法を適用する。外部評価、自己評価、学生による授業改善のためのアンケート結果、および連携校教員や大学教員からのアンケート結果を取りまとめる。これらをもとに、地域連携連絡協議会において、次年度以降の取組の改善指針をまとめる。これらは次年度以降のカリキュラム改革や学部運営に反映する。学生による授業改善のためのアンケートにおいては、自由記述欄を通して学生の目を通した現場からの意見を収集し改善点を明らかにし、取組に対する計画の見直しを行う。

3 取組の実施計画等について

(1) 取組の全体スケジュール及び各年次の実施計画

●実施体制の確立【1年目】

実施体制として、「一身田校区連絡協議会」を母体とした「地域連携連絡協議会」が月1回の定例会を開催する。大学と各学校園の課題を整理し、重要性および緊急性を考慮しながら、各年度の取組をまとめる。

●活動実施

実施計画にあげた活動の実施については以下のように計画している。一身田中学校区との連携として、すでに取組が定着しているものについては1年目から実施する。

① 学生が各学校園で教育的支援を行う実地研究

- A. 各学校園における授業支援を通じた学校現場体験 【1年目－3年目】
- B. 各学校園の学校活動における支援 【1年目－3年目】
- C. 臨床的な卒業研究の拡大 【2年目－3年目】

② 学校園の教員からの指導が主となる学生の実地研究

- A. 教育実習協力校としての連携 【一身田中学校区については1年目に準備、2・3年目に実施し、橋北中学校区については2年目に準備、3年目に実施】
- B. 連携校の教員による授業【2年目に準備、3年目に実施】

③ 主に大学教員による学校園に対する教育支援活動

- A. 教科力アップ研究会 【1年目に設置し、数学、理科では1年目から実施】
- B. 公開授業・公開研究会への支援 【1年目－3年目】
- C. 各学校園の特色ある授業づくりの支援 【1年目－3年目】

④ 大学を活用した地域活動

- A. 大学を活用した選択授業【1年目－3年目】
- B. 子どもを対象とした地域活動 【1年目－3年目】

●他大学における活動調査【1年目－3年目】

地域連携を主とした他大学の教員養成に関する取組について調査する

●フォーラムおよび日本教育大学協会での成果発表【2年目－3年目】

本取組について紹介するに適切な場で発表を行う

●取組に対する自己評価【1年目－3年目】

連携に関わった学生と教員の自己評価をアンケート調査する

●フォーラムの開催【1年目－3年目】

各年度末（2月）には、取組を総括する「フォーラム in 一身田&橋北」を開催する

●報告書の作成【1年目－3年目】

取組のまとめと課題について報告書を作成する。

5 「データ、資料等」【4 ページ以内】

資料 1. 三重大大学教員養成スタンダード. I-IIIは内容のレベルを示す.

領域	学習項目	I	II	III
①使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項	教育の役割	教育の意義	教育現場の多様性	学校の社会的役割
	倫理感	教員の資質	職業的アイデンティティ	教職の適性
②社会性や対人関係能力に関する事項	他者との関わり	応答的な態度	他者に影響を与える発信力	リーダーシップ、指導力
	実践の省察	記録の必要性	視点に基づいた省察	反省的实践
③幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項	環境 発達	現代的教育問題（学力）	特別支援の必要な子ども	多様な子ども
				地域の課題
	活動の企画・実践	自発的な活動への参加	活動の企画	活動目的の明確化と責任
	学校組織	組織性	学校を軸とした多様な関係性	同僚性と学校づくり
	学級経営	教師と子どもの関係	教師と学級の関係	学級づくり
	家庭・地域社会との連携	地域と学校	地域社会との連携	保護者との連携
④教科・保育内容等の指導力に関する事項	授業づくり	授業の構造	単元の展開と授業づくり	教育目標との関連
	教育内容の理解	専門的知識・技術の習得	教材研究	教材開発
	指導方法と技術	授業参観	授業案作成と実践	多様な教育方法
	評価	評価の重要性	評価方法	実践への活用

資料 2. 「教員と学生が語る会」におけるポスターセッションの様子.

授業科目「幼児教育学演習Ⅰ・Ⅱ」

白塚幼稚園での未就園児保育の運営

びよんちゃんクラブ：みんなで子育て

谷田真希・中山郁絵・平田 梢
三重大大学教育学部幼児教育コース3年
指導教員：滝口圭子

びよんちゃんクラブとは？
お母さんと子どもが参加
子どもの年齢：0～3歳
毎週木曜日

活動の様子（前期）

運営グループメンバー
・白塚幼稚園園長
・白塚幼稚園保育ボランティア10名
・幼児教育コース3年生
前期10名・後期3名

未就園児保育をより理解する3つのポイント

遊びの様子

最終レポートのご一部紹介

子どもたちの様子

保護者の思い

考察

未就園児保育と子育て支援

Thank you for your watching !



資料 3. 平成 19 年度教育学部卒業生の自己評価と教育学部卒業生に対する事業所評価.

項目	卒業生	事業所
1 広い視野で多面的に考える力	2.95	3.04
2 論理や証拠を重視し、それらに基づいて考える力	2.9	3.33
3 問題のポイントを素早くつかんだり、まとめる力	2.58	3.17
4 鵜呑みにせず、いったん本当に正しいのかどうかを疑ってみる力	2.95	3
5 想像が豊かで、新しいアイデアや発想を生み出す力	2.38	3.05
6 事実や他者に対する誠実さ	2.85	3.67
7 人によっていろいろな意見を持っているという多様性を理解する力	3.4	3.21
8 他者に対する柔軟性や他者との調整力	3.08	3.26
9 日常的なコミュニケーションをする力	3.05	3.29
10 外国語でコミュニケーションをする力	1.58	2.67
11 プレゼンテーションをする力	2.7	3
12 ディスカッションをする力	2.78	2.88
13 人と協同して仕事をする力	3.13	3.46
14 文章作成や文章表現の力	2.7	3.33
15 情報を収集して適切に処理する力	2.79	3.18
16 情報機器を活用する力	2.63	3.57
17 社会、または技術の変化に対応する力	2.43	3.1
18 人間や社会についての理解・知識	2.8	3.13
19 自然科学に関する基礎知識	2.48	3.21
20 一般常識	2.68	3.46
21 基礎学力	2.49	3.63
22 専門知識や技術	2.78	3.09
23 失敗してもなお再び挑戦しようとする力	2.88	3.5
24 どんな仕事にもねばり強く取り組む力	3.1	3.5
25 ストレスを感じてもそれに耐える力	3.08	3.5
26 意欲的に物事に取り組む力	2.95	3.29
27 自立的に自らが決断する力	2.9	2.91
28 実際に仕事をやり遂げる実行力	3	3.29

数値は、1：身についていない～4：十分についている、の4段階評価の平均を記したものの。中点は2.5点。(出典：平成19年度三重大学卒業生、修了生、および事業所への大学教育についてのアンケート調査結果報告書 抜粋)

資料 4. 三重県教員採用試験受験者・現役合格者数の推移.

平成 17 年度教員採用試験受験者・合格者数

	受験者	一次合格者	二次合格者
小学校	45	14	10
中学校	25	11	6
高等学校	21	3	0

平成 18 年度教員採用試験受験者・合格者数

	受験者	一次合格者	二次合格者
小学校	30	11	7
中学校	33	22	16
高等学校	12	2	1

平成 19 年度教員採用試験受験者・合格者数

	受験者	一次合格者	二次合格者
小学校	35	21	15
中学校	46	22	13
高等学校	22	11	1

平成 20 年度教員採用試験受験者・合格者数

	受験者	一次合格者	二次合格者
小学校	24	20	16
中学校	23	18	13
高等学校	10	3	0

三重大学教育学部基礎資料より.

資料 5. 現代 GP で受けた活動の概略（平成 20 年度における教育学部の各コースでの取り組み内容）.

コース	学習支援	授業研究	学校行事	課外活動	連携学校園
社会				キャリア教育	
数学	小中学校での補助 数学の学習支援	公開授業のための 指導案検討会		放課後の学習支援 (SAS活動)	小中学校
理科	解剖と調理実習		学年活動	青少年のための科学 の祭典への出展	小中学校
	理科実験指導 出前授業				
音楽	合唱指導	参与観察 ワークショップ型授業	文化祭における 合唱コンクール 発声法ワークショップ		幼小中学校
体育	水泳指導	授業実践 ゲーム活動検討会 ラート研修会	学年活動		小中学校
家政	食に関する授業				小中学校
幼児教育	生活科の活動支援 出前授業		学年活動	親子活動	幼稚園、小学校
	未就園児保育の運営				
人間発達科学	多文化理解				小学校

平成 20 年度現代 GP 報告書より.

資料 6. 過去約 1 年間に新聞報道された取組の一例.



中学校音楽祭の支援

(中日新聞 2006. 10. 14)



中学校理科支援

(中日新聞 2007. 11. 13)



中学校体育支援

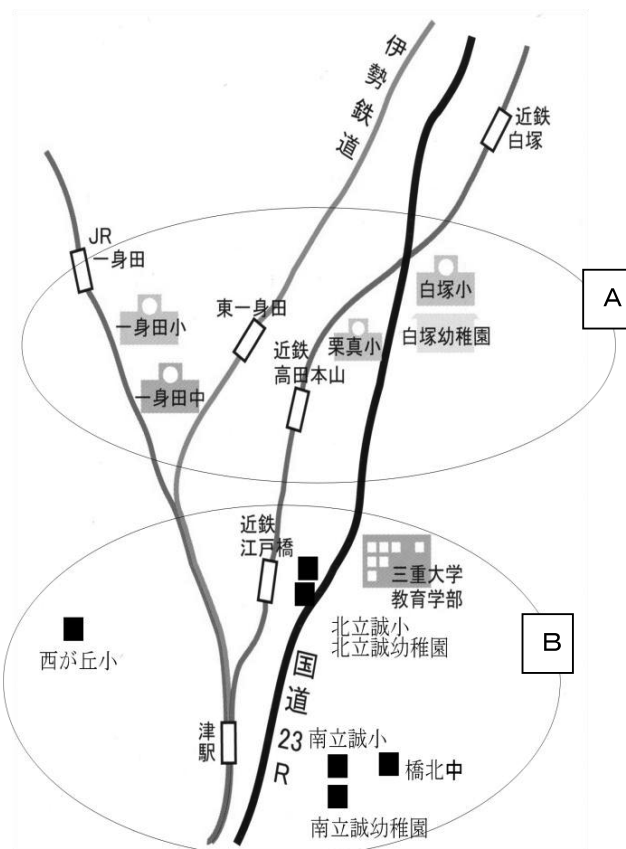
(中日新聞 2008. 9. 21)

資料 7 . 現代GPにより連携した中学校区の学校園との連携活動.

	18年度	19年度	20年度
関わった大学教員数	11名	19名	24名
取組数	10	36	39
一身田中学校	9	10	10
一身田小学校	1	11	14
栗真小学校	0	7	5
白塚小学校	0	3	4
白塚幼稚園	0	5	6
取組の主な内容			
学習支援	2	15	13
授業研究	4	5	7
出前授業	1	6	4
学校行事	1	7	9
教員研修	3	2	5
学生が参加した取組	6	29	28
授業に関連した取組	3	12	19
連携日数(延べ数)	57日	705日	787日
参加学生数(延べ数)	112名	294名	306名
学生の参加時間	8.8時間	8.4時間	9.9時間

平成 2 0 年度現代 G P 報告書より.

資料 8 . 大学と隣接する連携中学校区. A はこれまでの連携中学校区で、B は新たに連携を進めている中学校区.



6 過去の選定状況

[プログラム名： 現代的教育ニーズ取組支援プログラム]

(選定年度)

平成18年度

(申請形態)

単独

(取組名称)

教育実践力の育成と学校・地域の活性化

(選定取組の概要)

選定された取組は、三重大学教育学部に隣接する津市立一身田中学校区(1中学校、3小学校、1幼稚園)と教育学部が連携協力することによって、当該中学校区の5校園を、教員養成段階における学生の「実践的指導力の基礎」を涵養する教育実地研究の場として位置づけると同時に、当該学区における各校園の各教科の教育活動、総合的な学習、課題学習、選択学習、課外活動等の諸教育活動を総合的に支援することによって、学校・地域活性化モデルおよび幼小中大連携モデルを構築しようとするものである。また、当該中学校区における文化的・体育的諸活動はもとより、地域の福祉・健康問題、食問題等に対しても、教育学部が物的・人的支援を行なって、地域の活性化を図り、一身田中学校区全体の地域の教育力・文化力を高めることによって、教育学部としての地域の文教化に貢献することも目的としている。

(選定取組と今回の申請との関連性について)

これまでの取組により、本学に隣接する一身田中学校区との連携を進めてきた。これまでも大学の近隣にある校園に個々の教員が関わることはあったが、学部としての連携協力が行われていなかった。これは教育学部にとって長年の課題であったにも関わらず成し得なかったことである。これまでの取組により、学生にとって教育現場に関わる機会が増加するとともに、幼小中大の連携が飛躍的に進展したことは大きな改革となった。現場に学生を受け入れてもらうだけでなく、児童・生徒が大学での活動に参加するなど、双方向の連携が成立している。連携協力校の活性化は県内の校園の中でも注目されている。今後は、これらの校園との間での連携協力体制をさらに拡大・強化・深化し、教育実践力としての「教職実践演習」の授業内容および方法の整備と、大学と協力の綿密な指導体制に基づいた「教育実習」を実施することが課題となっており、本申請に至った。さらに連携協力校として本学にもう一つ隣接する橋北中学校を加えて合計2中学校、6小学校、3幼稚園とすることで、本学部のカリキュラムに全学生対応できるようにするとともに、学生が多様な学校現場に触れる機会とする。特に協力校における教育実習の充実、本学部のみならず多くの教員養成学部で改善が必要な問題でもあり、連携協力校における教育実習の進め方に関するモデルケースになると考えている。

2. 採択理由

平成21年度 大学教育・学生支援推進事業【テーマA】 大学教育推進プログラム 審査結果表

機 関 名	三重大学		
取 組 名 称	隣接学校園との連携を核とした教育モデル		
取組学部等	教育学部		
整 理 番 号	A12017	取 組 期 間	3年間
事 項	体系的な教育課程, 幅広い学びの保証, 課題探求能力, 初年次教育		

当該取組は、本事業の趣旨に照らして審査を行った結果、教育の質の向上への大学等の対応が非常に優れているとともに、取組の実現性も高く、その成果と今後の展開も期待できると高く評価できる。

【特に優れた点】

- ・「隣接学校園との連携」を強調して教育モデルを構想している点に特徴があり、構想に従って人材養成を模索する先進的なモデルであることが評価できる。
- ・全学年にわたって教育現場と関わりながら学習する環境を提供する点がユニークであり、隣接する学校園との連携体制が確立していること、地域連携推進委員会や地域連携連絡協議会が設置されていることなどが評価できる。
- ・実地を重視した教育方針であり、具体的な達成度が高くなると考えられることから、多様な学校課題に対応した資質形成が期待できる。

【改善を要する点】

- ・GPAやポートフォリオの導入がどの程度活用されているか、外部評価の実態が評価基準を含めてどのようになっているか、などを十分説明することが望まれる。
- ・教員養成の取組として優れているが、実地研究の体系化や連携に対する大学教員の役割、及び、大学教員の学生指導の実態について、それぞれ成果と問題点を検証することが望ましい。

3. 平成21年度大学改革推進等補助金調書

平成21年度大学改革推進等補助金（大学改革推進事業）調書

1. 大学等名／設置者名	三重大学 / 国立法人三重大学
2. プログラム名	大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム
3. 取組名称	隣接学校園との連携を核とした教育モデル
4. 選定年度	平成21年度
5. 事業推進代表者／ 事業推進責任者	事業推進代表者 学 長 内田 淳正 事業推進責任者 教育学部・教授 後藤 太一郎
6. 事務担当者	主担当 三重大学学務部教務チーム・チーム員 磯和 壮太郎 TEL 059-231-9055 FAX 059-231-9058 E-mail kyomu-k@ab.mie-u.ac.jp
※ 内容等の問い合わせに 適切に対応できる事務 担当の方で、主担当、 副担当を必ず2名記載 して下さい。	主担当 三重大学学務部教務チーム係長 柘植 智司 TEL 059-231-9056 FAX 059-231-9058 E-mail kyomu-k@ab.mie-u.ac.jp
7. 選定取組の概要	<p>教育学部では、実践的指導力を涵養する場として三重大学と隣接する一身田中学校区の学校園との連携を進めてきた。本取組は、この実績を基盤として、隣接するもう一つの学校区である橋北中学校区の学校園を含め連携を拡大し、2つの中学校区（2中学校、6小学校、3幼稚園）および教育委員会との連携協力体制を深化させ、実地研究を核とした教員養成の教育モデルを構築しようとするものである。このプログラムでは、多様な教育課題への支援に参加しながら、教員としての資質形成に結びつく体系的で幅広い学びを保証することによって、質の高い教員を養成することを目的としている。具体的には、学生が隣接学校現場の多様な活動に参加し、大学での省察との往還を通して、教育現場の課題を発見・解決する体験をもち、実践的指導力を育成させるものである。</p>
8. 補助事業の目的・必要性	<p>(1) 全体</p> <p>本補助事業の全体の目的は、教員養成における総合的な実践的指導力を育成するための実地研究の改善を図るものである。特に、本学部の教育目的である「教育に関する学識と専門的素養を身につけるための幅広いカリキュラムを通じ、深い専門性と豊かな人間性を備えた教員養成」に資するため、全学齢期の発達理解と教科の専門性を視野に入れた「小・中二校種の免許取得」という卒業要件のさらなる質的充実を展望している。</p> <p>本学部では、初年次教育として入学段階から学校現場での授業参観や課外活動の補助などを含めた実地研究基礎に参加し、徐々に授業や様々な学年・学校行事の補助、そして授業実践へと実践への参与形態を深化させるという順次性を重視した体系的な教育課程となっているが、教育実践力としての「教職実践演習」の授業内容および方法の整備、大学と協力の綿密な指導体制に基づいた「教育実習」の実施、および多様な教育問題に対応できる力量を育成することが急務となっている。本学部が教育現場と一層強固な連携を築き、協働することにより、これらの現実的・現代的な課題を解決することが可能である。</p> <p>継続的な実地研究の実施や学修時間の確保、また安全面の確保を考慮すると、教育現場に行くためには、大学の近くに協力連携校があることが欠かせない。本取組みの連携先となる各学校園までの距離は、大学から5kmほど（自転車で20分）の範囲にあることから、大学教員や現場の教職員にとっても移動が容易であるため、設定している教育実践関連科目の実施を円滑に行うことができる。つまり、本取組の最大の特徴は、教科教育・教科専門・教職担当のすべての教員が関わるができる理想的なフィールドで教育モデルを構築することである。これらの取組について、学生によるポスターセッションや教員と学生が語る会など対話型のFD活動を通して質的向上を図る。</p> <p>平成22年度より、教育学部の学生全員による連携先のフィールドでの実地研究の実現のために、平成21年度は学部における取組の充実・発展を図り、本取組を全学的取組として拡充することにより、本学部の教育目標に標榜している「感じる力」「考える力」「生きる力」とその基盤となる「コミュニケーション力」に対応した教員養成機能の強化を図ることが本事業の目的である。これらの4つの力に関する自己評価をeポートフォリオに蓄積し、学生自身がフィードバックするシステムを開発し、平成22年度より実施する予定である。また、</p>

個別のファイルを閲覧できるようなポートフォリオの活用もしており、これらは、学部内に設けた地域連携室に保管されている。

現在、GPA導入の準備を進めており、ポートフォリオと併せて評価体制を整備する。取組の評価については、教員の自己評価項目および外部評価項目を整備し、成果と問題点を明確にすることで取組の改善を図る。

（２）本年度

本補助事業の本年度の目的は、上記の目的を達成するために隣接校区の学校園との各種連携活動を実施する基盤を整備し、学生が教育現場で活動する時間を増加させる。また、新しい教具・教材を導入した授業づくり（例えば、電子黒板、ラート、理科実験 ICT 等）を大学教員が提案・指導し、学生と連携学校園の教員が協働することで、連携学校園にとって現代的な特色のある授業を発信し、授業開発の意識を高める。さらに、連携学校園の教育活動の中で大学の施設を活用した活動を企画し、これに学生が関わることで、学校園における学外での活動の在り方を学ぶ機会を提供する。したがって大学教員は、学生の指導だけではなく、現場の教員との協働を通して、自らの授業改善を行うことになる。

今年度は、本事業のコーディネート・ファシリテーターの役割を担う非常勤事務員を配置し、学生が常時ポートフォリオを閲覧し、省察できる学習環境を保証するために地域連携室の整備に着手する。また、これまでの外部評価とカリキュラムポリシーとの照合・点検を行う。

９．本年度の補助事業実施計画

本年度の補助事業の目的を達成するため、以下の取組を行う。

- ① 11～2 月 連携学校園における授業支援を通じた学生の教育現場体験の実施
- ② 11～2 月 連携学校園の学校活動における教員と学生の協働の実施
- ③ 11～2 月 教員を対象とした教科力アップ研究会の創設と開催
- ④ 11～2 月 連携学校園の公開授業・公開研究会への支援
- ⑤ 11～2 月 大学を活用した連携学校園の活動の実施
- ⑥ 11～2 月 地域連携室の整備
- ⑦ 11～1 月 評価体制の整備
- ⑧ 1～3 月 地域連携を主とした他大学の教員養成に関する取組について視察・調査および意見交流
- ⑨ 1 月 電子黒板の活用に関する講習会実施
- ⑩ 2 月 理科 ICT 教育機器および体育ラートの講習会の実施
- ⑪ 2 月 取組に対する自己評価および連携に関わった学生と教員の自己評価に関するアンケート調査の実施・検討
- ⑫ 2 月 21 年度の取組を総括する「フォーラム in 一身田&橋北」の開催
- ⑬ 3 月 21 年度の取組報告書の作成

１０．補助事業の内容

本補助事業は、選定された大学教育推進プログラムにおける体系的な教育課題、幅広い学びの保証、および課題探求能力について、教員をめざす学生の実践的指導力を育成するための一層の充実・発展を目指す補助事業であり、内容は以下の通りである。

- ① 連携学校園における授業支援を通じた学生の教育現場体験について、中学校における全ての教科、小学校における総合学習や生活科、および幼稚園における指導に学生が関わる。
- ② 連携学校園の学校活動における教員と学生の協働として、小学校および幼稚園の親子活動の企画と実践に学生が関わる。
- ③ 教員を対象とした教科力アップ研究会を創設し、定期的に研究会を開催し、学生もこれに関わる。
- ④ 大学教員による学校園の公開授業・公開研究会への支援を大学教員が行い、そのプロセスに学生が参観する。
- ⑤ 大学を活用した学校園の活動の実施として、連携中学校の合唱コンクールの指導を学生が行い、大学の講堂で発表会を行う。また、大学を活用して連携学校園の児童生徒を対象に授業や各種活動を行う。
- ⑥ 地域連携室の整備し、本事業のコーディネート・ファシリテーターの役割を担う非常勤事務員を配置する。
- ⑦ 学生の評価体制の整備として GPA を導入する。
- ⑧ 地域連携を主とした他大学の教員養成に関する取組を 4 大学において調査し、学生の教育現場体験活動を把握し、本取組の改善に反映させる。
- ⑨ 電子黒板を導入し、講習会の開催と指導を行い、学生および連携校教員が電子黒板を用いた授業づくりに着手する。
- ⑩ 理科 ICT 教育機器および体育ラートの講習会を実施し、連携中学校で新しい教具を用いた授業づくりを展開する。
- ⑪ 取組に対する自己評価について、連携に関わった学生と教員に対するアンケート調査により行う。
- ⑫ 21 年度の取組を総括する「フォーラム in 一身田&橋北」を開催し、本取組を公表して参加者および学内外からの意見を求める。
- ⑬ 21 年度の取組報告書を作成し、関係者に配布する他、HP 上にも掲載して取組を広く公開する。

これらを通じて、選定取組の更なる充実・発展させ、本学部の教育目的である、地域と密接な連携を取りながら専門的学識とともに様々な問題に対する解決能力をもつ人材養成機能の強化を図ることが、本補助事業の内容である。

11. 補助事業から得られる具体的な成果（学生に対する教育効果を中心に、選定された取組から得られる成果を上記 10 の補助事業の内容と対応させ、箇条書きで記入して下さい。）

上記の本年度の補助事業実施計画を実施することにより、本補助事業から得られる具体的な成果は、以下の通りである。

- ① 連携学校園における授業支援を通じた学生の教育現場体験について、中学校における全ての教科、小学校における総合学習や生活科、および幼稚園における指導に学生が関わることにより、多様な教育活動と複数の校種の学校現場での活動を経験し、子どもの発達段階を教育現場で知ること、学生に幅広く高い教育意識をもつことのできる教員養成を行うことを目指す。
- ② 連携学校園の学校活動における教員と学生の協働として、小学校および幼稚園の親子活動の企画と実践に学生が関わることで、PTA 活動の進め方と保護者理解の力を育成することを目指す。
- ③ 教員を対象とした教科力アップ研究会の設置し、現場教員が不得手とする内容について研修を進める。ここに学生が関わることで、学校現場で必要な教科力や課題解決の方法を知る機会とすることができる。
- ④ 学校園の公開授業・公開研究会への支援を大学教員が行い、そのプロセスに学生が参観する。大学教員が現職教員の授業づくりに支援を行うとともに、4 年次の教育実地研究の受講生も参加することで、授業づくりのプロセスを学ぶ機会とすることができる。
- ⑤ 大学を活用した学校園の活動を実施し、これに学生が関わることで、学校園における課外活動における教員の指導のあり方を学生が学ぶことができる。
- ⑥ 地域連携室の整備し、本事業のコーディネート・ファシリテーターの役割を担う非常勤事務員を配置することで、学生の活動履歴の保管と閲覧を容易にし、学生の本活動に対する学習環境を保証することができる。
- ⑦ GPA を導入するなど学生の評価体制を整備し、学生自身の省察を保証することができる。
- ⑧ 地域連携を主とした他大学の教員養成に関する取組を 4 大学において調査し、学生の教育現場体験活動状況を把握することで、本取組の改善につながる。
- ⑨ 電子黒板を導入し、講習会の開催と指導を行い、学生および連携校教員が電子黒板を授業づくりに着手することで、新しい ICT 機器を活用した授業実践を学生が学ぶとともに、連携学校園へ ICT 教育の発展につなげることができる。
- ⑩ 理科 ICT 教育機器および体育ラートの講習会を実施し、連携中学校で新しい教員を用いた授業づくりを展開する。各学校園で特色となる授業づくりの支援を大学として行い、これについて、2・3 年次における教材研究や教科教育法の中で学生が関わることで、新たな視点から授業を立案するポイントを学ぶ機会とすることができる。
- ⑪ 取組に対する大学教員の自己評価や、連携に関わった学生と教員に対するアンケート調査や聞き取り調査の実施により、本取組の問題点を整理することで、大学教員の学生指導の実態について成果と問題点を検証し、取組の改善につなげることができる。
- ⑫ 21 年度の取組を総括する「フォーラム in 一身田&橋北」を開催し、本取組を公表して参加者からの意見を求めることで、対話形式のプロジェクト型 FD が推進され、本取組の改善および質的向上につなげることができる。
- ⑬ 21 年度の取組報告書を作成することで、本補助事業の公表・普及につなげる。

12. 参考資料

（22年度）

- ① 4～2 月 連携学校園における授業支援を通じた学生の教育現場体験の実施
- ② 4～2 月 連携学校園の学校活動における教員と学生の協働の実施
- ③ 4～2 月 教員を対象とした教科力アップ研究会の開催
- ④ 6～2 月 連携学校園の公開授業・公開研究会への支援
- ⑤ 4～2 月 大学を活用した連携学校園の活動の実施
- ⑥ 4～2 月 評価体制の整備
- ⑦ 9～10 月 連携校における教育実習の実施
- ⑧ 11～1 月 教員養成に関する取組について視察・調査および意見交流
- ⑨ 10 月 日本教育大学協会での成果発表
- ⑩ 2 月 取組に対する自己評価連携に関わった学生と教員の自己評価に関するアンケート調査
- ⑪ 2 月 22 年度の取組を総括する「フォーラム in 一身田&橋北」の開催
- ⑫ 3 月 22 年度の取組報告書の作成

（23年度）

- ① 4～2 月 連携学校園における授業支援を通じた学生の教育現場体験の実施
- ② 4～2 月 連携学校園の学校活動における教員と学生の協働の実施
- ③ 4～2 月 教員を対象とした教科力アップ研究会の開催
- ④ 6～2 月 連携学校園の公開授業・公開研究会への支援
- ⑤ 4～2 月 大学を活用した連携学校園の活動の実施
- ⑥ 9～10 月 連携校における教育実習の実施
- ⑦ 10 月 日本教育大学協会での成果発表
- ⑧ 2 月 本取組に対する自己評価連携に関わった学生と教員の自己評価に関するアンケート調査
- ⑨ 2 月 本取組を総括する「フォーラム in 一身田&橋北」の開催
- ⑩ 3 月 本取組の報告書の作成

平成21年度採択
大学教育・学生支援推進事業
大学教育推進プログラム

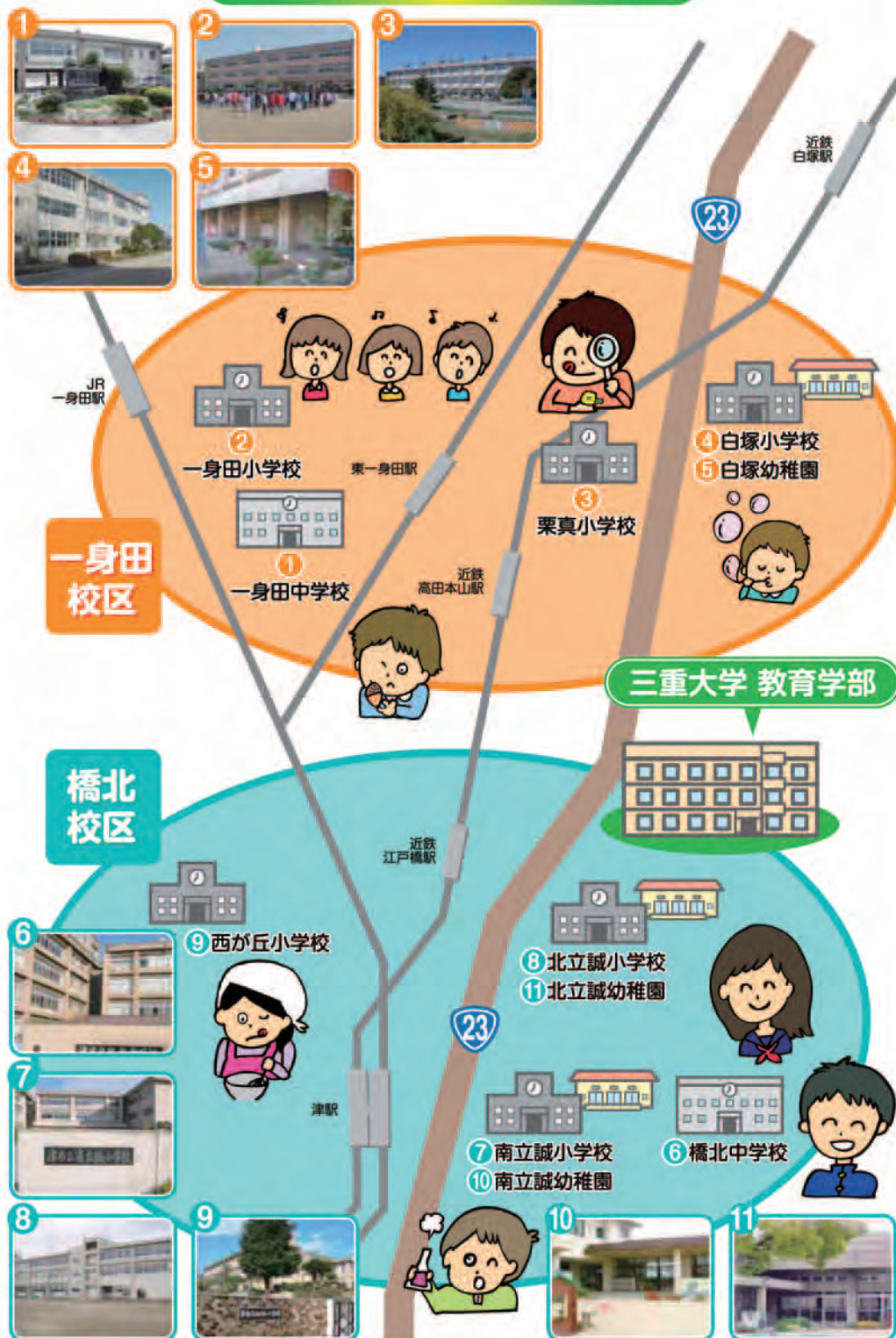
隣接学校園との連携を核とした 教育モデル

“ 多様な教育課題に対応できる教員養成を目指して ”



三重大学 教育学部

大学と隣接する連携中学校区



取組の背景

教職課程の質的水準の向上

大学における組織的指導体制の整備（平成18年中教審答申）
教職課程の改善・充実を図るための5つの方策

- 教職実践演習の新設・必修化
- 教育実習の改善・充実
- 教職指導の充実
- 教員養成カリキュラム委員会の機能の充実・強化
- 教職課程に係わる事後評価機能や認定審査の充実

本学と隣接する一身田中学校区との連携

平成18年より現代GPの支援を受けて、学生教育を含めた幼小
中大の連携の取り組みが学部全体として飛躍的に進展

実践的指導力育成をコアとしたカリキュラム構造を策定

学生の継続的な現場体験を通して、現場や地域の活性化にも寄与しつつ実践的指導力を育成



中学校音楽部の支援
(中日新聞 2006.10.14)



中学校体育支援
(中日新聞 2008.9.21)



中学校理科支援
(中日新聞 2007.11.13)

人材養成目的

人材養成の理念

三重大学教育学部規程第1条

実践的指導力=学士力

学生に習得させるべき能力

■ 地域と密接な連携を取りながら、豊かな見識、感性、国際性、専門的学識を身につける

■ 様々な教育問題や教育環境の変化に適切に対応できる創造性と問題解決能力を培い、力強くリーダーシップの取れる人材をPBL(問題/課題解決型学習)を通じて養成

■ 全学前期の発達理解と教科の専門性

■ 小・中・高校の免許取得を卒業要件

■ 入学段階から卒業までの間に多様で多彩な学校現場と関わり、活動を企画・実践する経験を保証

実践的指導力育成をコアとしたカリキュラム構造を策定

教育学部のカリキュラム構造



取組の目的

目的

- 隣接校区の学校園（2中学校、8小学校、3幼稚園）との間で、連携協力体制をさらに拡大・強化し、これらの学校園における学生の現場体験を基とした教育モデルを構築
- 体系的で幅広い学びを通して課題探究能力を高め、多様な教育課題に対応できる教員を養成（学生力）
 - ①教育現場の諸問題に対する学生教育を伴った支援活動
 - ②授業の中で子どもを中心とした地域連携を進めるプログラムを作成
 - ③連携校との協力体制による教育実習の実施

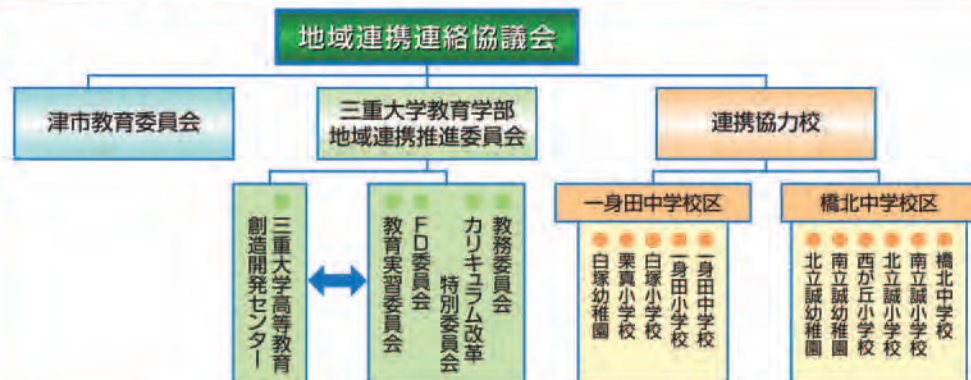
取組の具体的内容



取組の達成目標

- ① 教育現場での教育実地活動時間の増大
 - 初年度から全学年にわたって、年間20日で20時間以上（教育実習を除く）
- ② 教員になるための資質に関する学生の意識向上
 - 「学びの履歴」を軸とした教職支援
- ③ 本学部生に対する学校現場からの信頼度の向上
 - 連携協力校の全教員からの信頼度100%達成
- ④ 附属学校と隣接校区の学校園のみで教育実習体制の構築
 - 大学教員と実習校の教員が連携して指導

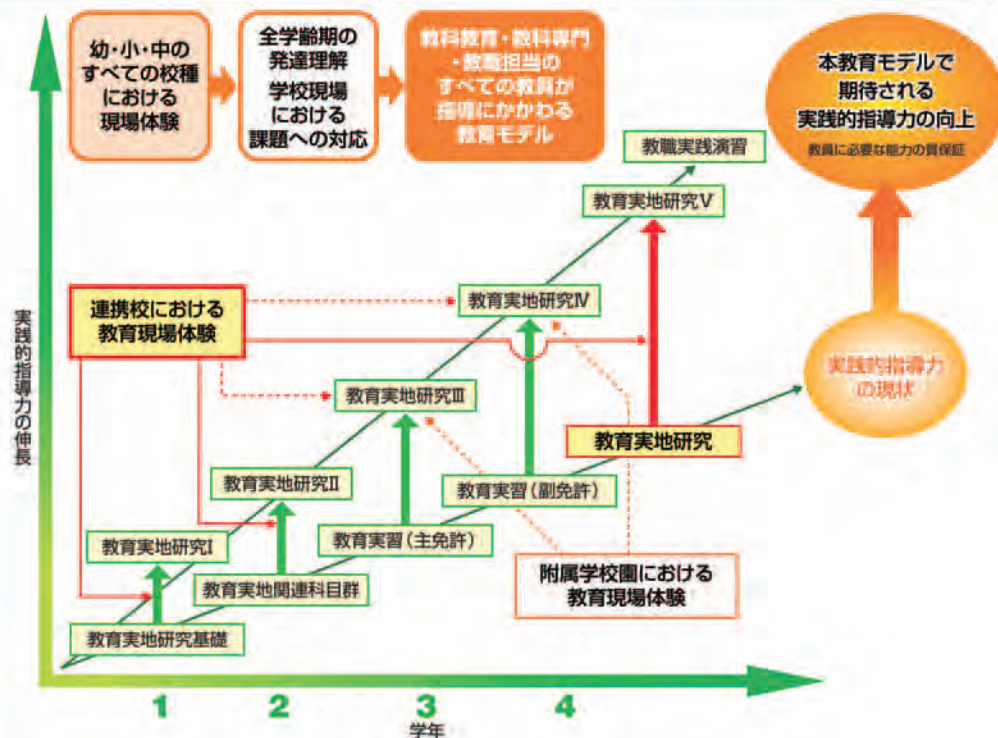
取組の実施体制



取組の概要

- これまでに、実践的指導力を涵養する場として三重大学と隣接する一身田中学校区の学校園との連携が進展
- この実績を基盤として、隣接するもう一つの学校区である橋北中学校区の学校園を含め連携を拡大し、2つの中学校区(2中学校、6小学校、3幼稚園)および教育委員会との連携協力体制を深化させ、**実地研究を核とした教員養成の教育モデルを構築**
- **多様な教育課題への支援**に参与しながら、教員としての資質形成に結びつく体系的で幅広い学びを保证することによって、質の高い教員を養成
- 学生が隣接学校現場の多様な活動に参加し、大学での省察と往還を通して、**教育現場の課題を発見・解決する体験**をもち、実践的指導力を育成

隣接学校園との連携を核とした教育実践プラン





 三重大学

〒514-8507 三重県津市栗真町屋町1577

三重大学教育学部
大学教育推進プログラム担当

TEL&FAX 059-231-9269
<http://chiiki.jp.edu.mie-u.ac.jp/>

あとがき

平成 21 年 9 月中旬に本事業の内定通知を受けましたが、実は、申請書の作成と新しい連携の準備は平成 20 年の暮れからスタートしていました。したがって、取組自体は 4 月より開始していたために、本報告書にはそれも含めて活動報告とさせていただきました。4 月当初より、学生が様々な形で連携校に入らせていただく中で、先生方には多大なご負担をおかけすることになりましたが、先生方が学生と一緒に育ててくださる意識をもっていただけたことや、何人かの先生方に「学生を指導することを通して教師としての自分を見つめ直すきっかけになる」というお言葉をいただき、心より感謝しております。

学生は、様々な教育現場に行かせていただくことで、子どもたちの反応が学校や学年によって異なることを実際に学べたことをたいへん喜んでおり、その様子は何よりも嬉しく思います。その成果として具体的にどのような力がついたのかは、今後「学びの履歴（学修ノート）」を蓄積する中で明らかにされるはずです。また、平成 22 年度より一部の学生が連携校で 4 週間の教育実習を受けさせていただきますが、これまでに連携校と関わらせていただいた体験が、教育実習でどのように生かされるかは最も関心の高い点です。これまでの実習指導の課題を踏まえて、大学としても指導をしていきたいと思っております。大変お世話になるかと思いますが、どうか宜しくお願いいたします。

学生が教育現場に関わることは、大学教員にとっても通常の授業以上に事前事後の指導が多くなり、その負担は決して少なくありません。しかしながら、本年度の 93 もの活動は予想をはるかに超えるもので、実践的指導力を高める教育が着実に進んでいることを改めて感じ、負担というよりもむしろ連携から生まれる様々な新しい出会いに、喜びを感じております。

最後になりましたが、本報告書をまとめるにあたり、カリキュラム改革特別委員会委員長の根津知佳子学部長補佐、そして、本事業で設置した地域連携室で、多様な連携活動の支援や取りまとめをいただいている平山円さんには多大なご助言とご協力をいただきました。ここに感謝申し上げます。

後藤太一郎

平成 21 年度 大学教育・学生支援推進事業
大学教育推進プログラム
隣接校区との連携を核とした教育モデル
—多様な教育課題に対応できる教員養成を目指して—

報告書

平成 22 年 3 月 発行

編集 三重大学教育学部 一身田・橋北校区連携推進委員会
発行 国立大学法人三重大学教育学部 地域連携室
〒514-8507 津市栗真町屋町 1577
Tel/Fax 059-231-9269
e-mail mhirayam@edu.mie-u.ac.jp
<http://chiki.gp.edu.mie-u.ac.jp>

印刷 伊藤印刷株式会社
〒514-0027 津市大門 32-13
TEL 059-226-2545(代) FAX 059-223-2862

表紙イラスト カゲムシャ